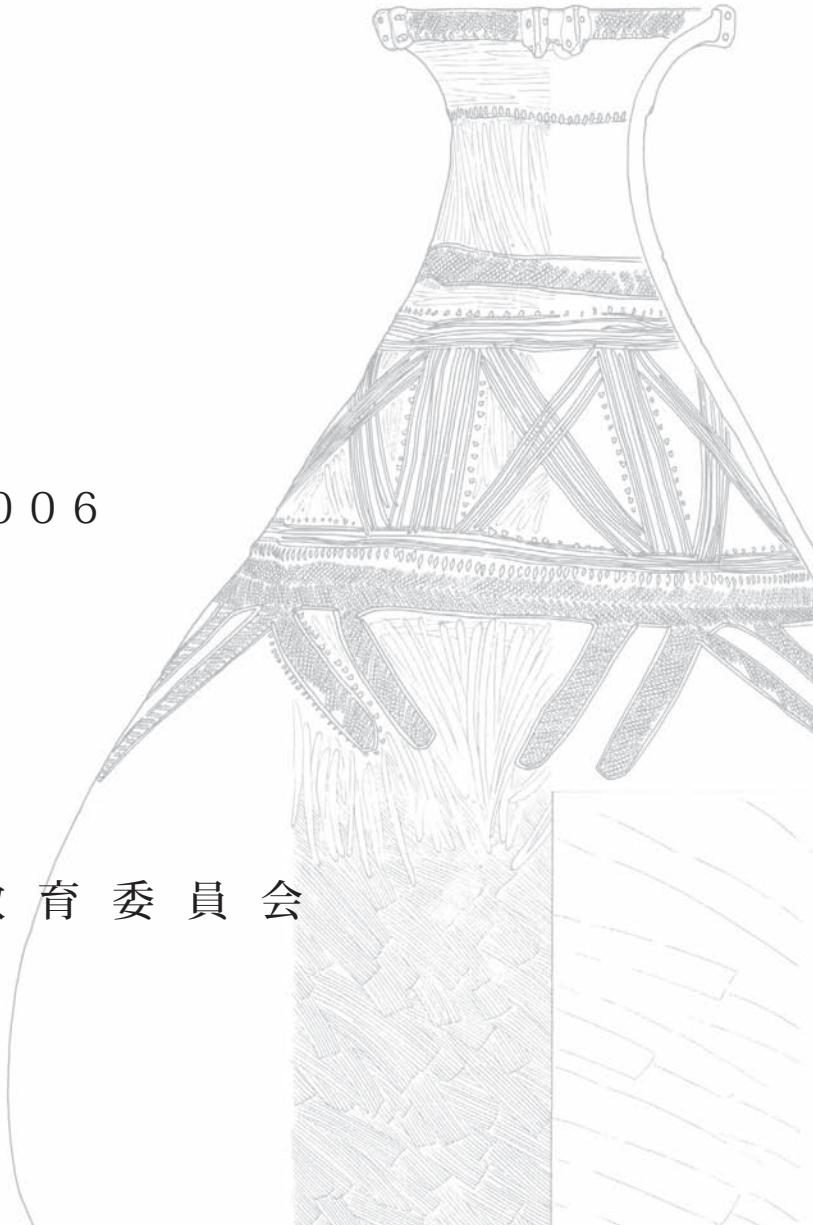
市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第１集

市原市南岩崎遺跡

２００６

市 原 市 教 育 委 員 会

市原市南岩崎（みなみいわさき）遺跡



2006

市 原 市 教 育 委 員 会

序　文

市原市は、市内を南北に貫流する養老川がもたらした肥沃な平野と、山間部の緑豊かな自然環境のなかにあり、先史からの多数の遺跡が残されています。先人達の残した文化遺産である遺跡は、本来豊かな自然とともに、後世に伝え残すことが最善の選択であります。しかし、21 世紀をむかえ、活力ある市原市を創造していくためには、社会資本の整備もまた計画的に進めていかなければなりません。

今回の発掘調査は、市道建設工事にともない実施しました。遺跡部分の建設計画の策定にあたっては、関係諸機関をまじえ慎重に協議を重ねてまいりましたが、記録保存の措置を講ずることとなりました。

今回の発掘調査では、弥生時代の遺跡を代表する「環濠集落」や、市を代表する古墳である姉崎二子塚古墳が造営された時期の、大規模な集落跡も発見されました。発掘調査事例の乏しい養老川中流域にあって、さまざまな新知見を得ることができました。

発掘調査事業は、本書の刊行をもって終了しますが、発掘調査によって得られた貴重な成果は、記録として将来に伝えると同時に、現在においても積極的に活用されなければなりません。市民の生涯学習意欲が年々高まりをみせる中、本書の刊行を新たな足がかりとして、文化財の積極的な活用に、より一層心を砕いてまいりたいと考えております。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多大なご尽力をいただきました、千葉県教育庁教育振興部文化財課、市原市土木部、地元関係者、並びに昨年度末をもって解散となった財団法人市原市文化財センター関係者方々のこれまでのご努力に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 18 年 11 月

市原市教育委員会
教育長　山中　齊

例　言

1　本報告書は、千葉県市原市南岩崎 176−1 他に所在する、南岩崎（みなみいわさき）遺跡塚越（つかごし）地区の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、市道 13 号線建設工事にともない実施した。市道 13 号線建設に関連する南岩崎遺跡の発掘調査は、3 工区に分けて行っており、本報告対象は、その 1 次調査にあたる。

3　発掘調査は、市原市（土木部道路建設課）の委託をうけた財団法人市原市文化財センターが、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと実施した。ただし、財団法人市原市文化財センターは、平成 18 年 3 月 31 日付けで廃止となったため、平成 18 年度については、市原市教育委員会がその業務を引き継いだ。

4　調査対象面積は、7,500 ㎡であり、上層 750 ㎡、下層 48 ㎡について確認調査を行い、上層 4,280 ㎡について本調査を実施した。

5　発掘調査、整理作業は、以下のとおりに行った。

発掘調査　平成 11 年 11 月 8 日〜平成 11 年 12 月 17 日（確認調査）
確認調査 750 ㎡（上層）、48 ㎡（下層）　担当　田中清美
平成 13 年 6 月 11 日〜平成 13 年 10 月 30 日（1−1 次本調査）
本調査 2,300 ㎡（上層）　担当　山田貴久・田中大介・牧野光隆
平成 14 年 1 月 9 日〜平成 14 年 3 月 22 日（1−2 次本調査）
本調査 850 ㎡（上層）　担当　田中大介・櫻井敦史
平成 14 年 9 月 17 日〜平成 15 年 2 月 17 日（1−3 次本調査）
本調査 1,130 ㎡（上層）　担当　近藤 敏

整理作業　平成 16 年 4 月 1 日〜平成 17 年 3 月 25 日　担当　忍澤成視
平成 17 年 4 月 1 日〜平成 18 年 2 月 10 日　担当　大村 直
平成 18 年 4 月14日〜平成 18 年 7 月 31 日　担当　大村 直

6　整理作業は、遺構関係および石器類を忍澤が、縄文土器を西野雅人（現千葉県教育振興財団）、中世遺物を櫻井敦史が、自然遺物を上奈穂美が、その他の遺物および遺構の一部を大村が担当した。

7　本書の執筆編集は主に大村が行ったが、西野（第 2 章第 9 節）、櫻井（第 2 章第 10 節）が、上（第 3 章第 2 節）執筆を分担した。

8　石質肉眼同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に、テフラ分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。

9　本報告書は、フルデジタルでの入稿を行った。その仕様・記録について、付編にまとめた。

10　土器観察表等一部表については、添付の CD−ROM のみの収録とした。CD−ROM のフォーマットは、Windows、Mac に対応する。ファイル形式は、XLS、CSV、TXT（タブ区切り）形式であり、ファイル形式ごとにフォルダに格納している。本文掲載の表についても、情報を追加し、CD−ROM に収録したものがある。表目次（CD−ROM 収録）を参照のこと。また、本編についても、PDF 形式で収録した。PDF 設定は、Adobe Acrobat 7.0 Professional による「標準」を基本としている。閲覧のためには、Adobe Acrobat Reader5.0 以降（無償版）、ないしは Adobe Acrobat（製品版）が必要である。

11　本書に収録した出土遺物および調査記録は、市原市教育委員会埋蔵文化財調査センターで収蔵、保管している。

12　本遺跡の、市原市文化財センター調査コードは、「セ 308」（確認調査）、「セ 347」（1−1 次本調査）、「セ 356」（1−2 次本調査）、「セ 368」（1−3 次本調査）である。

13　遺構番号は、本書作成の段階で変更している。遺物注記等については調査段階の遺構番号を使用しており、その対照は遺構一覧表に明示した。

14　遺構略号は、「千葉県埋蔵文化財発掘調査標準」（千葉県教育委員会、平成 16 年 4 月）に従い、竪穴：SI、掘立柱建物：SB、土坑：SK、井戸：SE、方形周溝墓：SS、古墳：SM、溝：SD、その他：SX、を使用した。

本 文 目 次

序　文
例　言
第 1 章　調査の経緯と概要
　第 1 節　調査にいたる経緯 ……1
　第 2 節　遺跡の立地と概要 ……1
　第 3 節　発掘調査の概要 ……7
　第 4 節　調査成果の概要 ……21
第 2 章　遺構と遺物
　第 1 節　竪穴 ……22
　第 2 節　掘立柱建物 ……157
　第 3 節　方形周溝墓 ……161
　第 4 節　古墳 ……171
　第 5 節　土坑 ……176
　第 6 節　井戸 ……182
　第 7 節　溝 ……185
　第 8 節　集積遺構 ……199
　第 9 節　縄文土器 ……211
　第 10 節　中世 ……214
　第 11 節　その他の遺物 ……219
第 3 章　自然遺物および自然科学的分析
　第 1 節　南岩崎遺跡のテフラ分析 ……222
　第 2 節　南岩崎遺跡の出土のウマ（*Equus caballus*） ……229
第 4 章　南岩崎遺跡の変遷と市原市域の遺跡群
　第 1 節　弥生時代中期から古墳時代中期の遺跡群 ……231
　第 2 節　時期設定 ……238
　第 3 節　南岩崎遺跡塚越地区の変遷 ……249
付編　DTP 入稿について ……262

挿 図 目 次

Fig. 1　南岩崎遺跡位置図 ……2
Fig. 2　南岩崎遺跡塚越地区周辺地形図(1) ……3
Fig. 3　南岩崎遺跡塚越地区調査区 ……5
Fig. 4　南岩崎遺跡塚越地区周辺地形図(2) ……6
Fig. 5　A地点埋没谷部調査区北面断面 ……7
Fig. 6　A地点東側埋没谷部遺物出土状況 ……8
Fig. 7　遺跡東西横断面模式図 ……9
Fig. 8　B地点土層断面図 ……10
Fig. 9　南岩崎遺跡塚越地区全体図(1) ……11・12
Fig. 10　南岩崎遺跡塚越地区全体図(2) ……13・14
Fig. 11　南岩崎遺跡塚越地区全体図(3) ……15・16
Fig. 12　南岩崎遺跡塚越地区全体図(4) ……17・18
Fig. 13　南岩崎遺跡塚越地区全体図(5) ……19・20
Fig. 14　SI01 遺構遺物、SI02(1) 遺構 ……23
Fig. 15　SI02(2) 遺物 ……24
Fig. 16　SI03 遺構遺物……25
Fig. 17　SI04 遺構遺物……27
Fig. 18　SI05 遺構遺物、SI06(1) 遺構 ……28
Fig. 19　SI06(2) 遺物、SI07 遺構遺物 ……29
Fig. 20　SI08(1) 遺構 ……30
Fig. 21　SI08(2) 遺物 ……31
Fig. 22　SI08(3) 遺物 ……32
Fig. 23　SI09 遺構遺物……33
Fig. 24　SI10 遺構遺物……34
Fig. 25　SI11(1) 遺構、SI12(1) 遺構……35
Fig. 26　SI11(2) 遺物 ……36
Fig. 27　SI12(2) 遺物 ……37
Fig. 28　SI13(1) 遺構遺物 ……38
Fig. 29　SI13(2) 遺物 ……39
Fig. 30　SI13(3) 遺物 ……40
Fig. 31　SI13(4) 遺物 ……41
Fig. 32　SI13(5) 遺物 ……42
Fig. 33　SI13(6) 遺物 ……43
Fig. 34　SI14(1) 遺構 ……45
Fig. 35　SI14(2) 遺構 ……46
Fig. 36　SI14(3) 遺物 ……47
Fig. 37　SI14(4) 遺物 ……48
Fig. 38　SI14(5) 遺物 ……49
Fig. 39　SI14(6) 遺物 ……50
Fig. 40　SI14(7) 遺物 ……51
Fig. 41　SI14(8) 遺物 ……52
Fig. 42　SI15(1) 遺構 ……53
Fig. 43　SI15(2) 遺構 ……54
Fig. 44　SI15(3) 遺物 ……55
Fig. 45　SI15(4) 遺物 ……56
Fig. 46　SI15(5) 遺物 ……57
Fig. 47　SI15(6) 遺物 ……58
Fig. 48　SI15(7) 遺物 ……59
Fig. 49　SI16(1) 遺構遺物 ……60
Fig. 50　SI16(2) 遺物 ……61
Fig. 51　SI17(1) 遺構遺物 ……62
Fig. 52　SI17(2) 遺物 ……63
Fig. 53　SI17(3) 遺物 ……64
Fig. 54　SI18(1) 遺構 ……65
Fig. 55　SI18(2) 遺物 ……66
Fig. 56　SI18(3) 遺物 ……67
Fig. 57　SI18(4) 遺物 ……68
Fig. 58　SI18(5) 遺物 ……69
Fig. 59　SI19(1) 遺構 ……70
Fig. 60　SI19(2) 遺物 ……71
Fig. 61　SI19(3) 遺物 ……72
Fig. 62　SI20 遺構遺物 ……73
Fig. 63　SI21(1) 遺構、SI22(1) 遺構……74
Fig. 64　SI21(2) 遺物 ……75
Fig. 65　SI21(3) 遺物、SI22(2) 遺物……76
Fig. 66　SI23(1) 遺構、SI24(1) 遺構、SI25(1) 遺構、SI26(1) 遺構 ……77
Fig. 67　SI23(2) 遺構遺物、SI24(2) 遺構、SI25(2) 遺構、SI26(2) 遺構 ……78
Fig. 68　SI23(3) 遺物 ……79
Fig. 69　SI23(4) 遺物、SI24(3) 遺物、SI25(3) 遺物 ……80
Fig. 70　SI26(3) 遺物 ……81
Fig. 71　SI27(1) 遺構、SI28(1) 遺構、SI29(1) 遺構、SI30(1) 遺構 ……82
Fig. 72　SI27(2) 遺物、SI29(2) 遺物、SI30(2) 遺物 ……83
Fig. 73　SI31(1) 遺構遺物 ……85
Fig. 74　SI31(2) 遺物 ……86
Fig. 75　SI31(3) 遺物 ……87
Fig. 76　SI32(1) 遺構、SI33(1) 遺構……88
Fig. 77　SI32(2) 遺構遺物、SI33(2) 遺構……89
Fig. 78　SI32(3) 遺物 ……90
Fig. 79　SI32(4) 遺物 ……91
Fig. 80　SI32(5) 遺物 ……92
Fig. 81　SI33(3) 遺物 ……94
Fig. 82　SI34(1) 遺構 ……95
Fig. 83　SI34(2) 遺構遺物 ……96

Fig. 84　SI34(3) 遺物 ……97
Fig. 85　SI35 遺構遺物……98
Fig. 86　SI36(1) 遺構遺物、SI37(1) 遺構……99
Fig. 87　SI37(2) 遺物 ……100
Fig. 88　SI38(1) 遺構 ……101
Fig. 89　SI38(2) 遺物 ……102
Fig. 90　SI39 遺構遺物 ……103
Fig. 91　SI40(1) 遺構、SI41(1) 遺構、SI42(1) 遺構 ……104
Fig. 92　SI40(2) 遺構、SI41(2) 遺構、SI42(2) 遺構 ……105
Fig. 93　SI40(3) 遺物 ……106
Fig. 94　SI40(4) 遺物 ……107
Fig. 95　SI40(5) 遺物、SI42(3) 遺物 ……108
Fig. 96　SI41(3) 遺物 ……109
Fig. 97　SI43(1) 遺構、SI44(1) 遺構、SI45(1) 遺構 ……110
Fig. 98　SI43(2) 遺構、SI44(2) 遺構、SI45(2) 遺構 ……111
Fig. 99　SI43(3) 遺物 ……114
Fig.100　SI43(4) 遺物、SI44(3) 遺物、SI45(3) 遺物 ……115
Fig.101　SI46 遺構遺物、SI47 遺構……117
Fig.102　SI48(1) 遺構遺物 ……118
Fig.103　SI48(2) 遺物 ……119
Fig.104　SI49(1) 遺構、SI50(1) 遺構 ……121
Fig.105　SI49(2) 遺物 ……122
Fig.106　SI49(3) 遺物、SI50(2) 遺物 ……123
Fig.107　SI51 遺構遺物 ……124
Fig.108　SI52(1) 遺構 ……125
Fig.109　SI52(2) 遺物 ……126
Fig.110　SI53(1) 遺構、SI54(1) 遺構、SI55(1) 遺構、SI56(1) 遺構 ……127
Fig.111　SI53(2) 遺構、SI54(2) 遺構、SI55(2) 遺構、SI56(2) 遺構 ……128
Fig.112　SI53(3) 遺物、SI54(3) 遺物 ……129
Fig.113　SI55(3) 遺物 ……130
Fig.114　SI56(3) 遺物 ……131
Fig.115　SI57(1) 遺構、SI58(1) 遺構、SI59(1) 遺構、SI60(1) 遺構 ……133
Fig.116　SI57(2) 遺物、SI58(2) 遺物、SI59(2) 遺物、SI60(2) 遺物 ……134
Fig.117　SI61 遺構遺物 ……135
Fig.118　SI62 遺構遺物、SI63 遺構遺物……136
Fig.119　SI64(1) 遺構遺物 ……137
Fig.120　SI64(2) 遺構遺物 ……138
Fig.121　SI64(3) 遺物 ……139
Fig.122　SI65 遺構遺物、SI66 遺構遺物……140
Fig.123　SI67(1) 遺構、SI68 遺構、SI69(1) 遺構 ……142
Fig.124　SI67(2) 遺物、SI69(2) 遺物 ……143
Fig.125　SI70(1) 遺構遺物 ……144
Fig.126　SI70(2) 遺物 ……145
Fig.127　SI71(1) 遺構 ……146
Fig.128　SI71(2) 遺構遺物 ……147
Fig.129　SI71(3) 遺物 ……148
Fig.130　SI71(4) 遺物 ……149
Fig.131　SI72 遺構遺物 ……150
Fig.132　SI73(1) 遺構 ……151
Fig.133　SI73(2) 遺物 ……152
Fig.134　SI73(3) 遺物 ……153
Fig.135　SI73(4) 遺物 ……154
Fig.136　SI73(5) 遺物 ……155
Fig.137　SI74(1) 遺構 ……156
Fig.138　SI74(2) 遺物 ……157
Fig.139　SB01 遺構 ……158
Fig.140　SB02 遺構、SB03 遺構、SD11 遺構　159･160
Fig.141　SB04 遺構 ……161
Fig.142　SS01(1) 遺構、SD05(1) 遺構……163･164
Fig.143　SS01(2) 遺物 ……165
Fig.144　SS01(3) 遺物 ……166
Fig.145　SS01(4) 遺物 ……167
Fig.146　SS01(5) 遺物 ……168
Fig.147　SS02(1) 遺構 ……169
Fig.148　SS02(2) 遺物 ……170
Fig.149　SM01(1) 遺構、SM02(1) 遺構、SD09(1) 遺構、SD10(1) 遺構 ……172
Fig.150　SM01(2) 遺構、SM02(2) 遺構、SD09(2) 遺構、SD10(2) 遺構 ……173･174
Fig.151　SM01(3) 遺物、SM02(3) 遺物 ……175
Fig.152　SK01 遺構、SK02 遺構、SK03 遺構、SK04 遺構、SK06 遺構 ……177
Fig.153　SK05 遺構 ……178
Fig.154　SK07 遺構遺物、SK08 遺構遺物、SK09 遺構遺物……179
Fig.155　SK10 遺構遺物、SK11 遺構遺物 ……180
Fig.156　SK13 遺構、SK14 遺構 ……181
Fig.157　SE01(1) 遺構、SE02(1) 遺構 ……183
Fig.158　SE01(2) 遺物、SE02(2) 遺物、SE03 遺構 ……184
Fig.159　SD01(1) 遺構 ……186
Fig.160　SD01(2) 遺物 ……187

Fig.161　SD01(3) 遺物 ……188
Fig.162　SD02 遺構遺物 ……189
Fig.163　SD03(1) 遺構 ……190
Fig.164　SD03(2) 遺物 ……191
Fig.165　SD04 遺構遺物 ……192
Fig.166　SD06(1) 遺構、SD07(1) 遺構、SD08(1) 遺構……193
Fig.167　SD12・SD13・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・SD19・SD20・SD21・SD23 遺構……194
Fig.168　SD05(2) 遺物、SD06(2) 遺物、SD07(2) 遺物、SD08(2) 遺物、SD24 遺物、SD25 遺物……197
Fig.169　SX01(1) 遺物 ……199
Fig.170　SX01(2) 遺構遺物 ……200
Fig.171　SX02(1) 遺構遺物 ……201
Fig.172　SX02(2) 遺物 ……202
Fig.173　SX02(3) 遺物 ……203
Fig.174　SX02(4) 遺物 ……204
Fig.175　SX02(5) 遺物 ……205
Fig.176　SX03(1) 遺構遺物 ……206
Fig.177　SX03(2) 遺物、SX04 遺構遺物……207
Fig.178　SX05 遺構遺物 ……208
Fig.179　SX06 遺構 ……209
Fig.180　SX05・SX06　礫石質・重量 ……210
Fig.181　南岩崎遺跡塚越地区出土縄文土器……211
Fig.182　縄文土器 (1) ……212
Fig.183　縄文土器 (2) ……213
Fig.184　中世遺物……215
Fig.185　平安時代土器……219
Fig.186　確認調査 D 地点出土遺物 ……219
Fig.187　遺構外出土石器 (1) ……220
Fig.188　遺構外出土石器 (2) ……221
Fig.189　南岩崎遺跡 (サンプル A) 堆積物の特徴 …224
Fig.190　南岩崎遺跡 (サンプル B) 堆積物の特徴 …225
Fig.191　堆積物中における 1mm以上の粒子構成 …226
Fig.192　火山ガラスの屈折率とそのタイプ……226
Fig.193　南関東地方環濠集落分布図……232
Fig.194　市原市域集落遺跡群 (1)　弥生時代中期～後期……234
Fig.195　市原市域集落遺跡群 (2)　弥生時代終末期～古墳時代中期前半……235
Fig.196　市原市域弥生時代終末期～古墳時代前中期の首長墓……237
Fig.197　南岩崎遺跡塚越地区時期区分(1) ……240
Fig.198　南岩崎遺跡塚越地区時期区分(2) ……241
Fig.199　南岩崎遺跡塚越地区時期区分(3) ……242
Fig.200　南岩崎遺跡塚越地区時期区分(4) ……244
Fig.201　南岩崎遺跡塚越地区弥生時代中期環濠集落……250
Fig.202　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(1) ……251
Fig.203　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(2) ……253
Fig.204　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(3) ……254
Fig.205　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(4) ……255
Fig.206　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(5) ……256
Fig.207　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(6) ……257

写真図版目次

PL. 1　遺跡　1−1次本調査区全景
PL. 2　遺跡　1−1次本調査区　1−2次本調査区
PL. 3　遺跡　弥生時代中期環濠SD01　古墳時代中期区画溝SD03
PL. 4　遺跡　1−1次本調査区　1−2次本調査区　1−1次本調査区谷部調査状況　1−1次本調査区谷部断面　1−3次本調査区下層調査状況　1−3次本調査区断面　1−2次本調査区深掘り
PL. 5　主要遺物　南岩崎遺跡塚越地区出土宮ノ台式土器　和泉式土器
PL. 6　主要遺物　布留式土器・須恵器・韓式系土器　石製品・玉類・土製品
PL. 7　遺跡　1−1次本調査区
PL. 8　遺跡　1−1次本調査区竪穴住居群、方形周溝墓SS01
PL. 9　遺跡　1−1次本調査区竪穴住居群　1−2次調査区環濠SD01・古墳SM01など
PL.10　遺跡　1−2次本調査区西側　1−2次本調査区東側
PL.11　遺跡　1−3次本調査区上層調査　1−3次本調査区下層調査
PL.12　遺跡　確認調査(D地点)　A地点谷部調査前状況　A地点谷部調査　A地点谷部断面　B地点調査区断面　B地点サンプルA採取地点　B地点サンプルB採取地点

PL.13　遺構　竪穴住居跡　SI01　SI02　SI03　SI04　SI05　SD02
PL.14　遺構　竪穴住居跡　SI05　SI07　SI08　SI09　SI10　SD24　SD25
PL.15　遺構　竪穴住居跡　SI09　SI10　SI11　SI12　SI13
PL.16　遺構　竪穴住居跡　SI14　SI15　SI16　SS01　SD05
PL.17　遺構　竪穴住居跡　SI16　SI17　SI18　SI19　SS01　SD06
PL.18　遺構　竪穴住居跡　SI19　SI20　SI21　SI22　SI23　SI24　SI25　SI26　SD07　SD08
PL.19　遺構　竪穴住居跡　SI27　SI28　SI29　SI30　SI31　SI32　SI33　SI34
PL.20　遺構　竪穴住居跡　A地点東側竪穴住居跡群　SI32　SI34
PL.21　遺構　竪穴住居跡　SI35　SI36　SI37　SI38
PL.22　遺構　竪穴住居跡　SI40　SI41　SI42　SI43　SI44
PL.23　遺構　竪穴住居跡　SI43　SI44　SI45　SI46　SI47　SI48　SB01
PL.24　遺構　竪穴住居跡　SI48　SI49　SI50　SI51　SD03
PL.25　遺構　竪穴住居跡　SI52　SI53　SI54　SI55　SI56
PL.26　遺構　竪穴住居跡　SI54　SI55　SI56　SI57　SI58　SI59　SI60
PL.27　遺構　竪穴住居跡　SI61　SI62　SI63　SI64　SE02　SD01
PL.28　遺構　竪穴住居跡　SI64　SI66　SI67　SI70
PL.29　遺構　竪穴住居跡　SI70　SI71　SI72
PL.30　遺構　竪穴住居跡　SI73　SI74
PL.31　遺構　掘立柱建物・方形周溝墓　SB02　SB03　SB04　SS01　SM01　SD09　SD10
PL.32　遺構　方形周溝墓　SS01　SS02
PL.33　遺構　方形周溝墓・古墳　SS02　SM01　SM02　SD09　SD10
PL.34　遺構　古墳・土坑　SM01　SM02　SK01　SK02　SK03　SS02　SD01　SD09
PL.35　遺構　土坑　SK04　SK05　SK06　SK07　SK08　SK10　SK11
PL.36　遺構　土坑・井戸　SK11　SK13　SK14　SE01　SE02　SE03
PL.37　遺構　集積・溝　SD01　SX01　SX04　SX05　SX06
PL.38　遺構　溝　SD01　SD02　SD03
PL.39　遺構　溝　SD09　SD10　SD15　SD16　SD17　SD20　SB02　SB03　SM01　SE03
PL.40　遺物　竪穴出土土器　SI02　SI03　SI04　SI05　SI06　SI08　SI09　SI11
PL.41　遺物　竪穴出土土器　SI11　SI13
PL.42　遺物　竪穴出土土器　SI13　SI14
PL.43　遺物　竪穴出土土器　SI14
PL.44　遺物　竪穴出土土器　SI14　SI15
PL.45　遺物　竪穴出土土器　SI15　SI16
PL.46　遺物　竪穴出土土器　SI16　SI17
PL.47　遺物　竪穴出土土器　SI17　SI18
PL.48　遺物　竪穴出土土器　SI18　SI19
PL.49　遺物　竪穴出土土器　SI19　SI21　SI22　SI23
PL.50　遺物　竪穴出土土器　SI23　SI24　SI25
PL.51　遺物　竪穴出土土器　SI26　SI27　SI30　SI31
PL.52　遺物　竪穴出土土器　SI31　SI32
PL.53　遺物　竪穴出土土器　SI32
PL.54　遺物　竪穴出土土器　SI32　SI33　SI34
PL.55　遺物　竪穴出土土器　SI34　SI36　SI37　SI38
PL.56　遺物　竪穴出土土器　SI38　SI40
PL.57　遺物　竪穴出土土器　SI40　SI41　SI43
PL.58　遺物　竪穴出土土器　SI43　SI44　SI45　SI46

PL.59　遺物　竪穴出土土器　SI46　SI48　SI49
PL.60　遺物　竪穴出土土器　SI50　SI51　SI52　SI53
PL.61　遺物　竪穴出土土器　SI53　SI54　SI55　SI58　SI61　SI62　SI64
PL.62　遺物　竪穴出土土器　SI64　SI65
PL.63　遺物　竪穴出土土器　SI66　SI70
PL.64　遺物　竪穴出土土器　SI71　SI73
PL.65　遺物　竪穴出土土器　SI73
PL.66　遺物　竪穴・方形周溝墓出土土器　SI73　SI74　SS01
PL.67　遺物　方形周溝墓出土土器　SS01
PL.68　遺物　方形周溝墓・古墳・土坑出土土器　SS01　SS02　SM01　SK07　SK08　SK09　SK10　SK11
PL.69　遺物　溝出土土器　SD01　SD02　SD03　SD04　SD05
PL.70　遺物　溝・集積出土土器　SD05　SD08　SX01
PL.71　遺物　集積出土土器　SX01　SX02
PL.72　遺物　集積出土土器　SX02
PL.73　遺物　集積・D地点出土土器　SX02　SX03　SX04　SX05　D地点
PL.74　遺物　土器詳細 弥生土器　SI08　SI11　SI12　SI13
PL.75　遺物　土器詳細 弥生土器　SI13　SI14
PL.76　遺物　土器詳細 弥生土器　SI14
PL.77　遺物　土器詳細 弥生土器　SI14　SI15　SI21　SI22　SI25　SI26　SI33　SI35　SI37　SI40　SI41
PL.78　遺物　土器詳細 弥生土器　SI41　SI45　SI48　SI55　SI59　SI60　SS01
PL.79　遺物　土器詳細 弥生土器　SS01　SS02　SD01
PL.80　遺物　土器詳細 弥生土器・土師器　SD01　SD02　SX01　SX02　SI03　SI11　SI15　SI16
PL.81　遺物　土器詳細 土師器　SI16　SI17　SI18　SI19
PL.82　遺物　土器詳細 土師器　SI19　SI21　SI23　SI27　SI30　SI31
PL.83　遺物　土器詳細 土師器　SI31　SI32
PL.84　遺物　土器詳細 土師器　SI32　SI34　SI36
PL.85　遺物　土器詳細 土師器　SI36　SI38　SI40
PL.86　遺物　土器詳細 土師器　SI43　SI44　SI46　SI49　SI50
PL.87　遺物　土器詳細 土師器　SI50　SI51　SI52　SI54　SI64
PL.88　遺物　土器詳細 土師器　SI65　SI70　SI71　SI73
PL.89　遺物　土器詳細 土師器・須恵器　SI73　SD05　SX02　SX03　SI02　SI15
PL.90　遺物　土器詳細　須恵器　SI16　SI19　SI31　SI38　SM01　弥生土器・須恵器　SI02　SI08
PL.91　遺物　弥生土器　SI11　SI12　SI13
PL.92　遺物　弥生土器　SI13　SI14
PL.93　遺物　弥生土器・土師器・須恵器　SI14　SI15　SI21
PL.94　遺物　弥生土器・土師器・須恵器　SI21　SI22　SI23　SI25　SI26　SI29　SI30　SI32　SI33　SI35
PL.95　遺物　弥生土器・須恵器　SI37　SI39　SI41　SI42　SI43　SI45　SI48　SI55
PL.96　遺物　弥生土器　SI55　SI56　SI57　SI58　SI60　SI61　SI67　SS01
PL.97　遺物　弥生土器・土師器・須恵器　SS01　SS02　SM01　SD01
PL.98　遺物　弥生土器・縄文土器　SD01　SD02　SD04　SD05　SX01　遺構外
PL.99　遺物　縄文土器・古代・中世・石器　SI04　SI05　SI12　SI13　SI14　SI15　SI48　SD25　遺構外
PL.100　遺物　石器　SI12　SI13　SI14　SI15　SI17　SI18　SI19　SI21　SI23
PL.101　遺物　石器　SI29　SI30　SI31　SI34　SI40　SI41　SI49　SI50　SI52　SI53　SI55　SI56　SI72　SS01　SS02　SD06　SX01
PL.102　遺物　石器　SI08　SI13　SI14　SI15　SI18　SI19　SI22　SI23　SI30　SI31　SI32　SI33　SI34　SI44　SX02　遺構外

PL.103 遺物 石器 SI14 SI15 SI18 SI32 SI45 SI52 SI54 SI55 SI70 SI71 SD01 SX02 遺構外
PL.104 遺物 金属器・土製品 SI04 SI08 SI14 SI15 SI17 SI19 SI24 SI31 SI40 SI49 SI54 SI71 SI73 SS01 SM01 SE01 SX02 SX05
PL.105 遺物 土製品・石製品・玉類 SI06 SI15 SI16 SI17 SI18 SI34 SI38 SI43 SI48 SI54 SI64 SI66 SI71 SI73 SS02 SM01 SD02 SD05 SD25 SX03 SX05
PL.106 遺物 玉類 SI15 SI16 SI18 SI32 SI73 SD25
PL.107 馬歯・テフラ分析 SD23 SD25
PL.108 テフラ分析

表 目 次

Tab. 1 南岩崎遺跡遺構一覧 ……x（CD−ROM収録）
Tab. 2 南岩崎遺跡の調査 ……4
Tab. 3 掘立柱建物Pit深度 ……157
Tab. 4 南岩崎遺跡中世遺物観察表 ……215
Tab. 5 南岩崎遺跡中世以降遺物集計表(1) ……217
Tab. 6 南岩崎遺跡中世以降遺物集計表(2) ……218
Tab. 7 堆積物の鉱物分析結果一覧 ……227
Tab. 8 堆積物中における1mm以上の粒子構成一覧(粒数) ……227
Tab. 9 火山ガラスの屈折率測定結果 ……228
Tab.10 動物遺体出土内容 ……230
Tab.11 上顎歯計測値 ……230
Tab.12 千葉県環濠(条濠)集落一覧 ……231
Tab.13 土器編年対応表 ……248
Tab.14 南岩崎遺跡竪穴一覧 （CD−ROM収録）
Tab.15 南岩崎遺跡弥生土器・土師器・須恵器観察表 （CD−ROM収録）
Tab.16 南岩崎遺跡縄文土器観察表 （CD−ROM収録）
Tab.17 南岩崎遺跡石器観察表 （CD−ROM収録）
Tab.18 南岩崎遺跡金属器観察表 （CD−ROM収録）
Tab.19 南岩崎遺跡土製品観察表 （CD−ROM収録）
Tab.20 南岩崎遺跡玉類観察表 （CD−ROM収録）
Tab.21 南岩崎遺跡滑石製品等石製品観察表 （CD−ROM収録）

南岩崎遺跡遺構一覧（Tab.1）

報告No.	種　別	調査cord	調査時No.	時代時期	細別	地点	Grid	本文p.
SI01	竪穴(住居)	347	3	弥生中期	1	A	6F−60	24
SI02	竪穴(住居)	347	6A	古墳中期	5b古	A	6F−73	24
SI03	竪穴(住居)	347	12A・C	古墳中期	5a	A	6G−12	25
SI04	竪穴(住居)	347	11	古墳終末	7	A	6G−40	26
SI05	竪穴(住居)	347	10A	古墳終末	7	A	6G−71	26
SI06	竪穴(住居)	347	10B	古墳中期	5	A	6G−60	26
SI07	竪穴(住居)	347	14			A	7G−02	26
SI08	竪穴(住居)	347	13	弥生中期	1c	A	6F−99	29
SI09	竪穴(住居)	347	19A・B・C	古墳中期	5b古	A	6G−94	32
SI10	竪穴(住居)	347	20A・B	古墳中期	5b新	A	6G−65	33
SI11	竪穴(住居)	347	24B・D・E	古墳中期	5b古	A	6H−74	34
SI12	竪穴(住居)	347	24A.・C	弥生中期	1c	A	6H−72	36
SI13	竪穴(住居)	347	15	弥生中期	1c	A	7H−24	37
SI14	竪穴(住居)	347	27	弥生中期	1b	A	6H−99	44
SI15	竪穴(住居)	347	33	古墳中期	5b古	A	7H−49	44
SI16	竪穴(住居)	347	32	古墳中期	6a	A	7I−61	52
SI17	竪穴(住居)	347	29	古墳終末	7	A	7I−45	59
SI18	竪穴(住居)	347	31・37	古墳中期	5b新	A	7I−43	59
SI19	竪穴(住居)	347	35	古墳後期	6b	A	7I−66	64
SI20	竪穴(住居)	347	102	古墳前期	4c	A	7I−95	69
SI21	竪穴(住居)	347	38	古墳前期	4a	A	7I−69	69
SI22	竪穴(住居)	347	39	(弥生)		A	7J−60	72
SI23	竪穴(住居)	347	50	古墳中期	5b古	A	7I−99	73
SI24	竪穴(住居)	347	53	古墳前期	4a	A	8I−09	76
SI25	竪穴(住居)	347	52	弥生中期	1c	A	7J−91	81
SI26	竪穴(住居)	347	51	弥生後期	2b	A	7I−89	81
SI27	竪穴(住居)	347	56	古墳中期	5b古	A	7J−42	81
SI28	竪穴(住居)	347	55	(弥生)		A	7J−53	84
SI29	竪穴(住居)	347	45	弥生中期	1b	A	7J−54	84
SI30	竪穴(住居)	347	46	弥生後期	2b	A	7J−51	84
SI31	竪穴(住居)	347	44	古墳中期	5b新	A	7J−73	87
SI32	竪穴(住居)	347	41	古墳中期	5a	A	8J−03	93
SI33	竪穴(住居)	347	40	弥生後期	2a	A	7J−93	93
SI34	竪穴(住居)	347	47A・B	古墳中期	5b古	A	8J−24	93
SI35	竪穴(住居)	347	49	弥生終末	3	A	7J−46	95
SI36	竪穴(住居)	347	42	古墳中期	5b古	A	7K−81	100
SI37	竪穴(住居)	347	48	弥生後期	2b	A	7J−89	100
SI38	竪穴(住居)	347	43	古墳中期	6a	A	8J−48	103
SI39	竪穴(住居)	356	1	古墳前期	4a	B	8K−36	103
SI40	竪穴(住居)	356	18	古墳前期	4c	B	8K−63	108
SI41	竪穴(住居)	356	19	弥生中期	1c	B	8K−65	112
SI42	竪穴(住居)	356	20	弥生終末	3	B	8K−57	112
SI43	竪穴(住居)	356	21	古墳中期	5b新	B	8K−77	113
SI44	竪穴(住居)	356	4	古墳中期	5b古	B	8K−89	113
SI45	竪穴(住居)	356	7	弥生中期	1c	B	8K−99	113
SI46	竪穴(住居)	356	5	古墳前期	4c	B	8L−71	116
SI47	竪穴(住居)	356	6	(弥生)		B	8L−61	116
SI48	竪穴(住居)	356	2	弥生中期	1b	B	8K−29	116
SI49	竪穴(住居)	356	8	古墳後期	6b	B	8L−42	120
SI50	竪穴(住居)	356	3	古墳中期	5a	B	8L−31	120
SI51	竪穴(住居)	356	10	古墳中期	5b新	B	8L−74	124
SI52	竪穴(住居)	356	11・27	古墳中期	5b古	B	8L−94	124

報告No.	種　別	調査cord	調査時No.	時代時期	細別	地点	Grid	本文p.
SI53	竪穴(住居)	356	12	弥生終末	3	B	8L−56	126
SI54	竪穴(住居)	356	14	古墳前期	4b	B	8L−88	128
SI55	竪穴(住居)	356	13	弥生中期	1c	B	8L−67	131
SI56	竪穴(住居)	356	15	弥生中期	1	B	8L−69	131
SI57	竪穴(住居)	356	25	弥生中期	1	B	8M−91	132
SI58	竪穴(住居)	356	24	古墳前期	4a	B	8M−83	132
SI59	竪穴(住居)	356	68	弥生後期	2a	B	9M−04	132
SI60	竪穴(住居)	356	17	弥生中期	1b	B	8M−72	132
SI61	竪穴(住居)	356	26	弥生後期	2a	B	9M−13	135
SI62	竪穴(住居)	356	35	古墳中期	5	B	9L−38	136
SI63	竪穴(住居)	356	40	古墳中期	5	B	10M−41	139
SI64	竪穴(住居)	356	29	古墳中期	5a	B	9M−39	139
SI65	竪穴(住居)	356	28	古墳中期	5b新	B	9M−67	141
SI66	竪穴(住居)	356	32	古墳前期	4a	B	9M−89	141
SI67	竪穴(住居)	356	61	古墳前期	4a	B	9M−56	141
SI68	竪穴(住居)	356	71			B	10N−20	143
SI69	竪穴(住居)	356	69			B	9N−13	143
SI70	竪穴(住居)	368	102	古墳中期	5b古	B	10P−10	143
SI71	竪穴(住居)	368	82	古墳中期	5b古	B	10P−63	149
SI72	竪穴(住居)	368	84	古墳中期	5	B	10P−86	149
SI73	竪穴(住居)	368	80	古墳中期	5b古	B	11S−43	150
SI74	竪穴(住居)	368	81	古墳中期	5b古	C	11R−98	155
SB01	掘立柱建物	356	73	(中世)		B	8L−72	157
SB02	掘立柱建物	368	103	(中世)		B	9O−70	158
SB03	掘立柱建物	368	88	(中世)		B	9O−85	161
SB04	掘立柱建物	368	110	(中世)		B	11R−02	161
SS01	方形周溝墓	347	26・28・30	弥生中期	1b	A	7I−42	161
SS02	方形周溝墓	356	63・70	弥生中期	1c	B	9N−35	162
SM01	古墳	356/368	22/33	古墳後期	～6b	B	9N−60	171
SM02	古墳	356	34・64・65	古墳中期	5b新～	B	9N−41	176
SK01	土坑(陥穴)	368	131	縄文		B	10Q−55	176
SK02	土坑(陥穴)	368	135	縄文		B	11Q−17	176
SK03	土坑(陥穴)	368	90	縄文		C	12S−18	178
SK04	土坑(陥穴)	368	116	縄文		C	12T−44	179
SK05	土坑(陥穴)	368	129	縄文		C	12T−33	179
SK06	土坑(陥穴)	368	128	縄文		C	11R−61	180
SK07	土坑(土器埋設)	356	55	弥生中期	1	B	9L−06	180
SK08	土坑(土器埋設)	356	57	弥生中期	1	B	9L−08	180
SK09	土坑(土器埋設)	356	P104	弥生中期	1	B	9L−27	182
SK10	土坑	347	2	古墳中期	5b古	A	5F−95	182
SK11	土坑	356	36	古墳中期	5b	B	8L−65	182
SK12	土坑	347	37	古墳中期	5b新	A	7I−52	182
SK13	土坑(地下式)	347	25A	古墳終末		A	7H−23	182
SK14	土坑(地下式)	347	65			A	8I−08	182
SE01	井戸	356	23	中世		B	8L−41	184
SE02	井戸	356	58	中世		B	9M−13	185
SE03	井戸	368	87			B	10Q−43	185
SD01	溝(環濠)	356	30	弥生中期	1	B	9M−58	185
SD02	溝(環濠)	347	6B	弥生中期	1	A	6F−62	188
SD03	溝	356	9	古墳中期	5b新	B	8L−74	188
SD04	溝	347	23			A	7G−35	191
SD05	溝	347	34			A	7H−47	191
SD06	溝	347	60			A	7I−54	192
SD07	溝	347	57			A	7J−51	192
SD08	溝	347	54			A	7I−79	192

報告No.	種　別	調査cord	調査時No.	時代時期	細別	地点	Grid	本文p.
SD09	溝	368	100			B	9N−98	195
SD10	溝	368	105			B	9O−61	195
SD11	溝	368	92			B	10O−23	195
SD12	溝	368	96			B	10P−31	195
SD13	溝	368	96			B	10P−32	196
SD14	溝	368	86			B	10P−34	196
SD15	溝	368	86			B	10Q−41	196
SD16	溝	368	85			B	10P−59	196
SD17	溝	368	85	(中世)		B	10P−67	196
SD18	溝	368	85			B	10P−50	196
SD19	溝	368	85			B	10P−60	198
SD20	溝	368	83			B	10Q−63	198
SD21	溝	368	85			B	10Q−54	198
SD22	溝	368	93			B/C	10R−33	198
SD23	溝	368	94			B	11R−47	198
SD24	溝	347	21			A	6G−55	198
SD25	溝	347	22			A	6G−76	198
SX01	土器集積	347	18	弥生終末	3	A	6I−91	199
SX02	土器集積	347	101	弥生終末	3	A	8J−08	205
SX03	土器集積	368	99	古墳中期	5a	B	11R−21	205
SX04	土器集積	368	111	古墳中期	5	C	12S−13	209
SX05	礫集積	347	17B	古墳中期	5b新	A	7H−25	209
SX06	礫集積	368	118	縄文		C	11S−80	210

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査にいたる経緯

市原市南岩崎、西国吉における市道13号線建設工事にともない、平成７年２月９日付けで、市原市長小出善三郎より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課が現地踏査を行い、平成７年３月29日付け教文第６−1138号で、千葉県教育委員会教育長より、照会地20,000㎡のうち17,000㎡に遺跡が所在する旨の回答がなされた。

この結果にもとづき、市原市土木部、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課で埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行い、地区内に所在する埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存とする措置がとられることとなった。発掘調査は、財団法人市原市文化財センターへの委託事業として実施した。なお、発掘調査が困難であった現道部分の取り扱いについては、市教育委員会ふるさと文化課による工事立会とした。

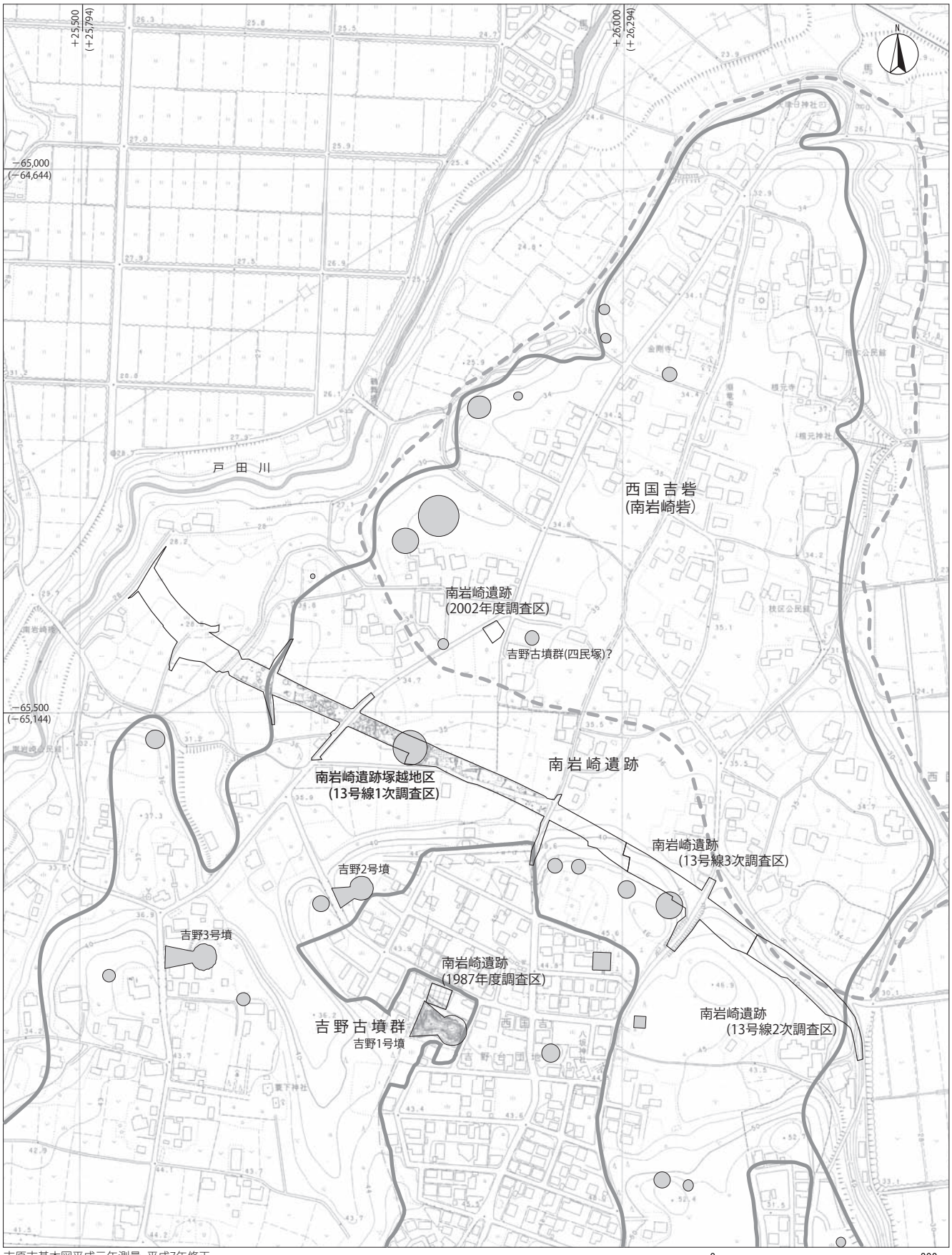
第２節　遺跡の立地と概要

南岩崎遺跡の所在する千葉県市原市は、房総半島のほぼ中央部から東京湾岸にいたる南北約35kmの細長い市域をもち、その中央を養老川が貫流する。東京湾岸低地に接する台地は、養老川流域を境界とし、養老川右岸（東岸）から千葉市域境の村田川までが「市原台地」、養老川左岸（西岸）から袖ヶ浦市小櫃川までが「袖ヶ浦台地」と呼称される。市原台地は、下総台地の一角を占め、台地上に広範囲にわたる平坦面を残すのに対して、養老川左岸以南の特徴は、丘陵地形への移行をみせる。養老川は、大多喜町の麻綿原高原を源流とする流路延長75kmの河川であり、東京湾から、とくに中流域の牛久地区にいたる間は、幅広い沖積地を形成している。

南岩崎遺跡は、養老川中流域左岸に位置し、養老川沖積平野に向かって、南北に長い台地状地形を突出させる。東側は、養老川本流および支流の西国吉川が、西側は養老川支流戸田川が北方向に流下するが、戸田川流域は、本調査区付近から急激に谷幅を狭めており、本調査区周辺が、沖積平野の最奥部にあたるようにみえる。遺跡が立地する台地状地形は、地形区分による河岸段丘であり、本調査区周辺から北側は、標高33〜37m前後の低位段丘南総Ⅲ面、吉野１号墳が所在する南側は、標高44〜57m前後の南総Ⅱ面に区分される（徳橋・遠藤1984）。本調査区周辺の段丘面と沖積地の比高は約７.5mを測る。

南岩崎遺跡は広範囲におよび、過去にも断続的に発掘調査が行われているため、本調査区については、代表地番の小字名から、塚越（つかごし）地区と呼称する。遺跡は、上記台地状地形全体を範囲とし、南北2,000m、東西880mを測る。現状登録では吉野台団地、西国吉団地部分を遺跡範囲から除外してあるが（千葉県教育委員会1999）、これを含む面積は1,302,000㎡を測る。遺跡名は、中心大字名から「南岩崎」を使用しているが、実際の大字は、南岩崎・西国吉・馬立・寺谷におよぶ。また、前方後円墳４基を含む60基以上からなる吉野古墳群が台地上全体に展開する。古墳群は、台地東縁部南側の西国吉支群、台地西縁部南側の寺谷支群、本調査区周辺の南岩崎支群に大きく区分されるが、南岩崎支群は、前方後円墳の吉野１・２・３号墳を含むものの、全体に散在する。今回の調査で検出さ

Fig.1　南岩崎遺跡位置図



市原市基本図平成元年測量、平成7年修正
( )値、世界測地系

Fig.2　南岩崎遺跡塚越地区周辺地形図(1)

Tab.2　南岩崎遺跡の調査

調査時遺跡名	地　番	調査年次	調査対象（㎡）	調査面積（㎡）	検出遺構	備考	文献
西国吉遺跡	西国吉	1974/2～4	−	−	弥生終末～古墳前期竪穴23軒、円墳5軒	詳細不明	樋口他 1974
吉野1号墳／南岩崎吉野遺跡	西国吉字吉野1697−102・103	1982/7～8	−	446	吉野1号墳周濠、弥生終末竪穴1軒、古墳前期方形周溝墓1基	住宅建設	清藤 1988
西国吉新林遺跡	西国吉字新林1667−7	1994/8	1,213	120	古墳中期円墳1基、確認調査	住宅建設	田所 1995
南岩崎遺跡	寺谷字的場15他	2001/4	520	52	古墳前期竪穴1軒、古墳後期円墳3基（寺谷支群）、確認調査	墓地造成	小川 2002
南岩崎遺跡	南岩崎字塚越167−5	2002/9	382.66	26	古墳時代竪穴3軒、確認調査	住宅建設	市教委調査

れたSM01・02は未登録の古墳であったが、地元での伝聞によれば、江戸時代文化年間に大刀が出土した「四民塚」古墳は、本古墳に相当する可能性がある。ただし、登録上の四民塚古墳は、本調査区北120mに所在する円墳をあてている。また、台地北先端部は、西国吉砦跡として登録されているが、砦跡としての内容は判然としない。

Fig.2は、本調査区付近の遺跡範囲を、GIS市原市遺跡管理システムから出力合成したものである。現状登録での遺跡範囲に対して、今回の調査対象地域は、台地先端部から台地下まで含んでいるが、これは、今回の調査に先立って行われた現地踏査にもとづくものである。ただし、確認調査の結果、台地下部分については、若干の遺物（Fig.186）および時期不明の溝を検出したものの、本調査対象範囲からは除外された。

南岩崎遺跡の調査は、1974年に国学院大学が西国吉団地造成に先立ち実施している。詳細は報告されていないが、弥生時代終末期から古墳時代前期の竪穴住居跡23軒、円墳5基が検出されているという（樋口・金子・青木1974）。その後も、おもに、個人住宅の建設にともなう小規模な発掘調査が行われているが（Tab.1）、遺跡範囲に対していまだ断片的な内容であり、南岩崎遺跡の全貌を明らかにするにはいたっていない。なお、遺跡名については、混乱した使用がみられるが、少なくとも現行の西国吉遺跡は、南岩崎遺跡からみて、西国吉川をはさむ東側の台地上をあてており、統一した使用が必要となっている。

周辺の調査遺跡としては、西国吉遺跡において、弥生時代中期中葉池上式期が検出されている（蜂屋1999）。住居跡は検出されていないが、出土土器の器種構成からみると集落跡の可能性が高い。養老川中流域の弥生時代以降の遺跡としては、弥生時代中期後半環濠集落である南総中学遺跡が著名であるが（倉田・相京1978）、さらに上流域の番後台遺跡でも、本調査区と時期的盛期を一致させる大規模な集落跡が検出されている（藤崎1982）。

本遺跡は、弥生時代において環濠集落を形成するが、現状での市原市域の弥生時代以降の遺跡は、国分寺台地区に代表されるように、村田川から養老川下流域周辺に濃密な分布を形成している。しかし、養老川中流域においても、圧倒的に調査事例の少ないなかで、点的に環濠集落が確認されている。沖積地の調査も進んではおらず、将来、現状の分布図は、大きく書き換えられる可能性を秘めている。

なお、市原市域の弥生時代中期後半から古墳時代中期前半の遺跡分布については、第4章第1節でふれている。

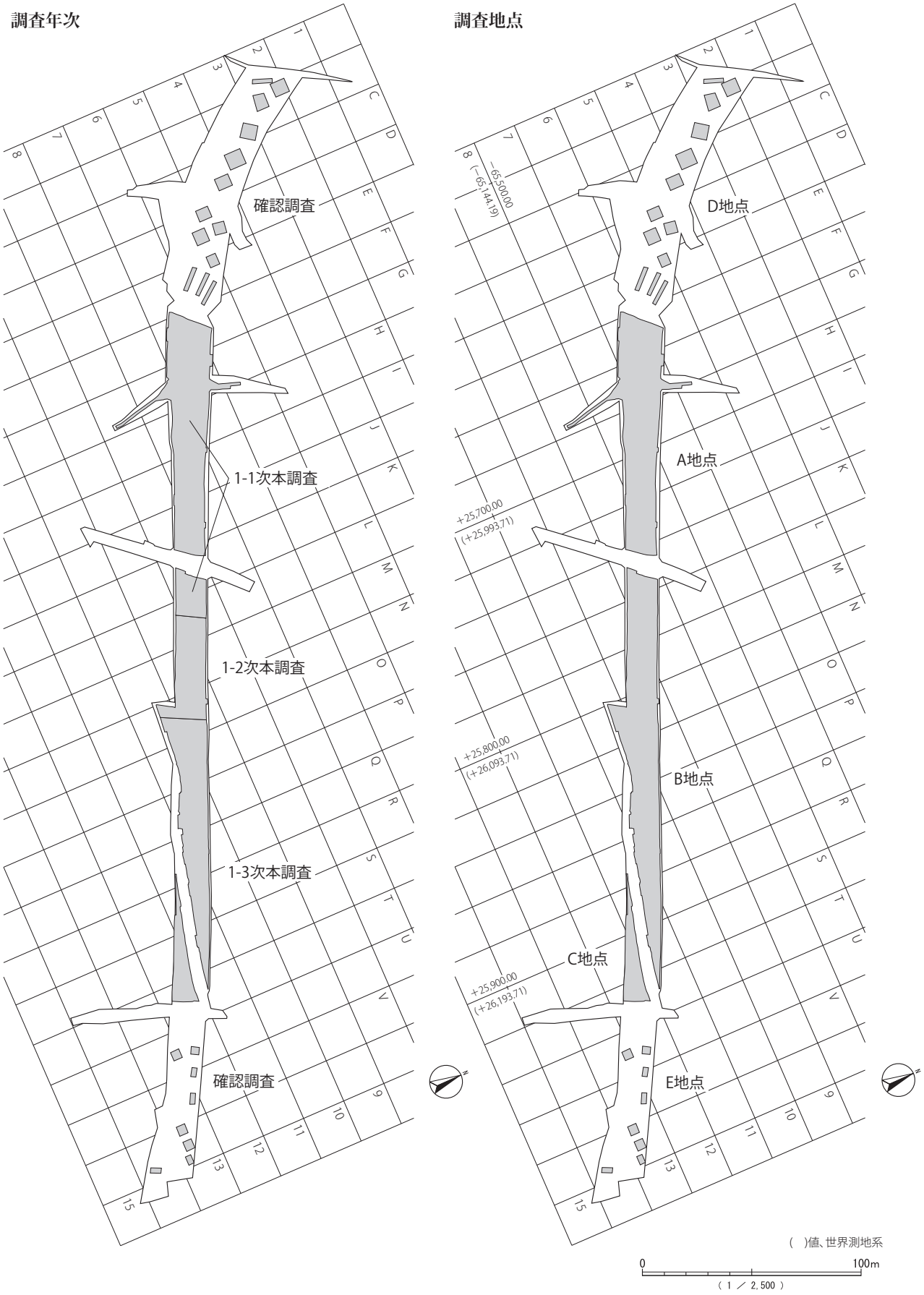


Fig.3　南岩崎遺跡塚越地区調査区

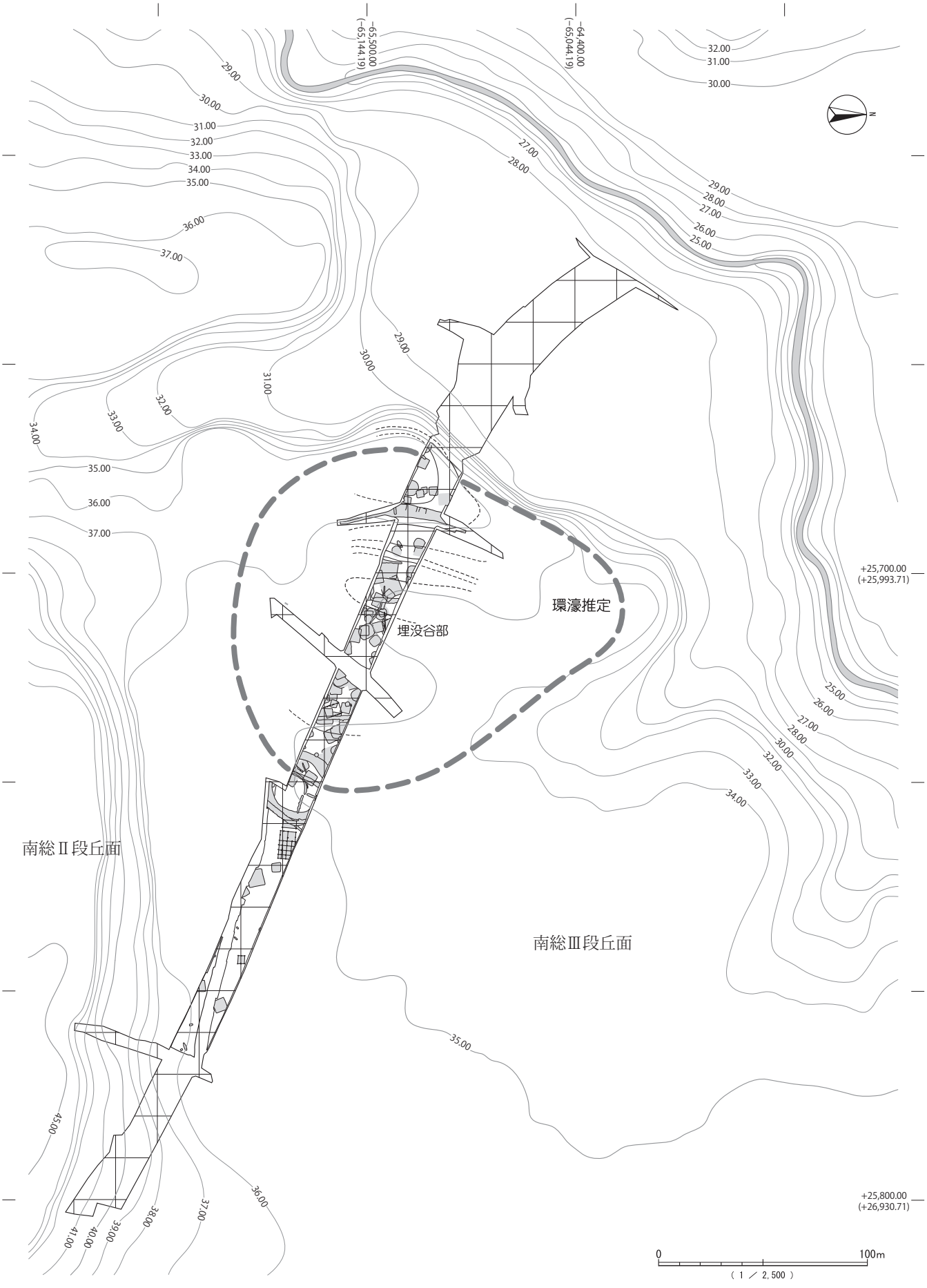


Fig.4　南岩崎遺跡塚越地区周辺地形図(2)

第3節　発掘調査の概要

市道13号線建設工事にともなう今回の発掘調査は、3工区に分けて行っており、本報告対象は、その1次調査にあたる。1次調査区は、さらに3次に分け本調査を実施しているため、工程にもとづく調査区は、1−1〜1−3次本調査区と呼称する。また、本調査区は、3地点に分かれ、さらに本調査区東西端に、本調査対象から除外された地区がある。これらについて、A〜E地点を呼称する(Fig.3)。本報告では、主に地点名を使用して記述するが、これは調査段階で使用されていた呼称ではない。なお、市道13号線関連の2次調査は、2003年9月に行われたが、対象地が段丘傾斜地にあたったため、遺構は検出されていない。3次調査は、本年度実施される。

調査区は、公共座標を使用し、20m×20mの方眼網を設定、これを基本グリッドとした。基本グリッド内はさらに2m×2mに分割している(Fig.10)。各遺構図のグリッド表示は、グリッドの北西隅を基点としている。なお、調査段階の公共座標は、日本測地系にもとづいている。世界測地系への変換は、本調査区のほぼ中心点X=−65,520m、Y=+25,740mを基準とし、国土地理院が公開している変換ソフト「TKY2JGD ver.1.3.79」パラメータファイル「関東.par ver.2.1.1」を使用して、X軸−355.8059m、Y軸+293.7104mを較正値とした(Fig.2〜4)。

今回の発掘調査は、道路建設工事に起因するものであるため、調査区の幅は最大でも20mであったのに対して、東西方向は、調査対象範囲全体で523m、本調査対象範囲で315mを測る細長い調査区となった。今回の調査区は、段丘を東西方向西側1/2程度横断しているが、調査の結果、段丘面の旧地形は起伏をもち、遺構・遺物の検出状況も予想以上に多様であった。

今回の調査範囲では、西端部崖際が最も高く標高36.3mを測る。その東側は浅い谷地形となり、表土直下の暗褐色土から多量の遺物が出土した。Fig.5は、調査終了後の掘削工事時に撮影した谷部露頭写真である(PL.4・12)。調査地点は、前述のとおり低位段丘南総Ⅲ面にあたり、ローム層は基本的にソフトローム層のみをのせ、その下部は粘土・砂礫層となるが、ここでは、粘土・砂礫層の水平堆積に対し、地形変化にそったローム層の堆積が確認できる。なお、西端部側は、表土下のローム層はなく、粘土層は酸化が進み黄褐色を呈していた。また、谷斜面部は、他地点に対してローム層が厚く、下部にハードロームをみることができる。

谷部の調査は、当初谷部を被覆する暗褐色土層の形成時期が判然とせず、暗褐色土層内での遺構確

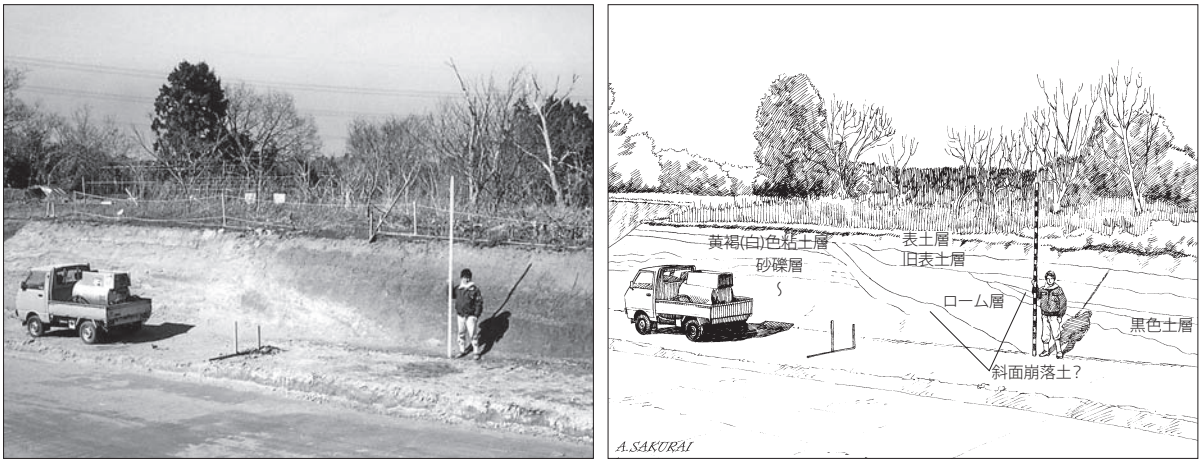


Fig.5　A地点埋没谷部調査区北面断面

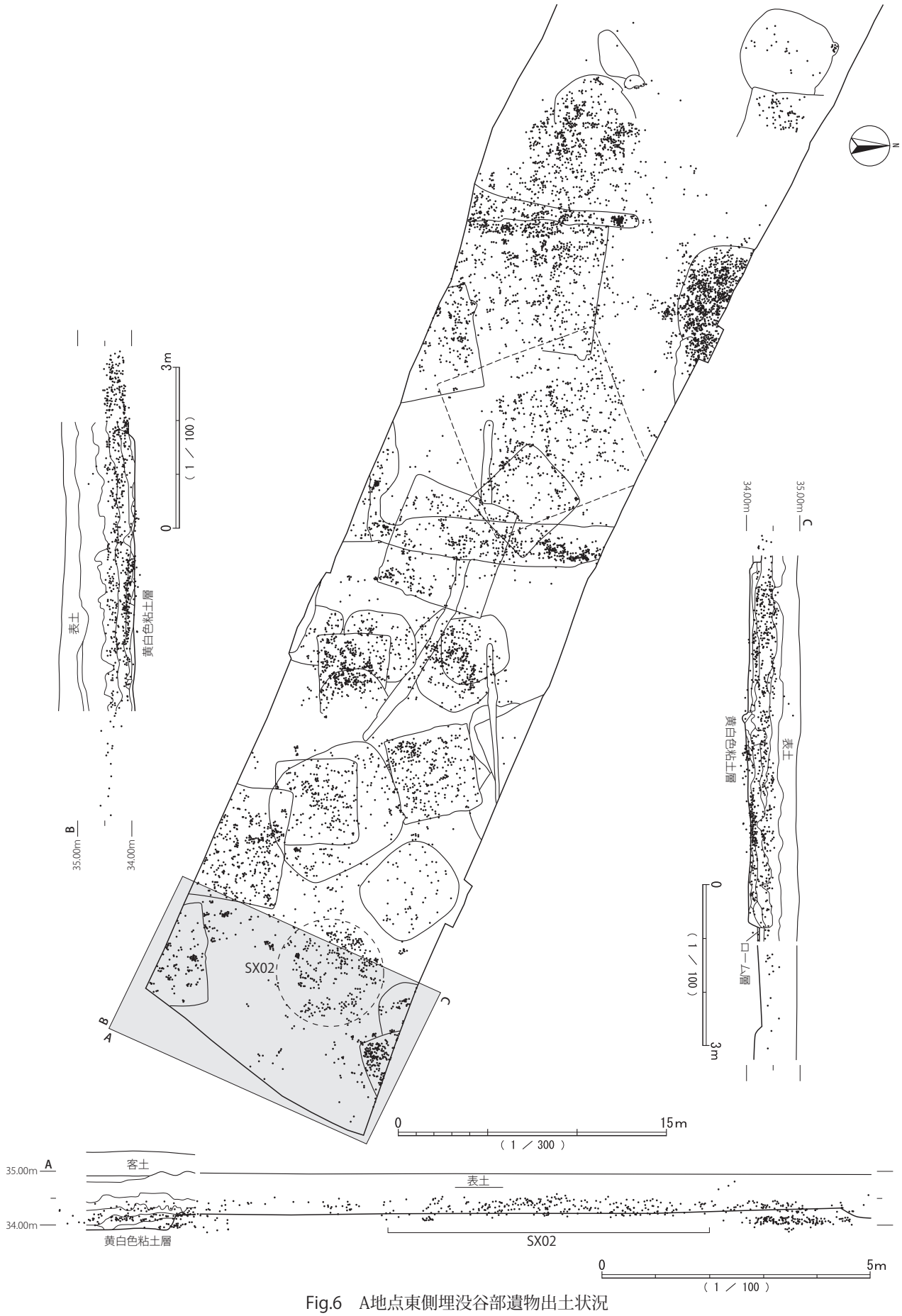


Fig.6　A地点東側埋没谷部遺物出土状況

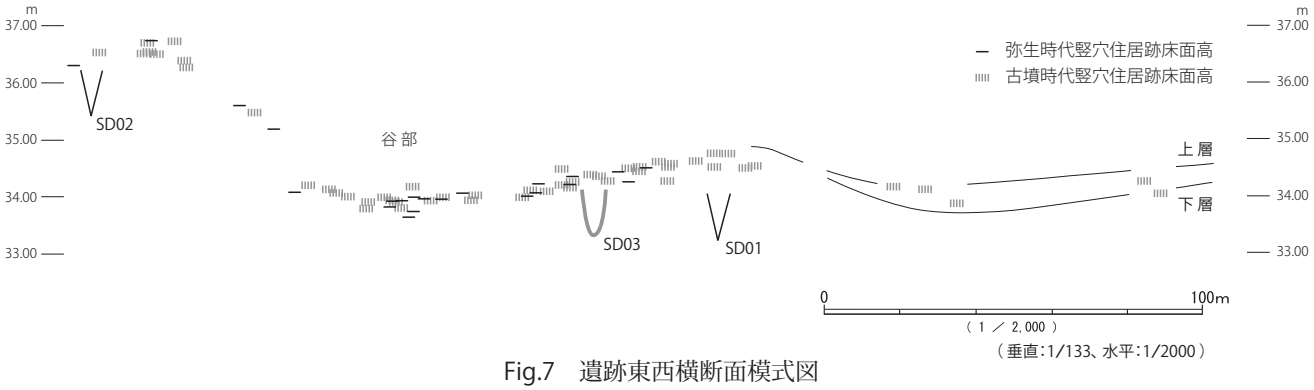


Fig.7　遺跡東西横断面模式図

認も困難であったため、2次堆積によるものかどうかの判断ができなかった。調査段階では、遺物包含層として、グリッド単位で、基本的に個々の遺物ごとに出土地点を記録した。しかし、整理作業での遺物分布図の合成および下部遺構との照合の結果、出土分布は、おおむね竪穴範囲に対応することが判明した(Fig.6)。谷部傾斜地については、床面がローム層に達していない竪穴住居跡もあったが、遺物出土分布をみる限り、竪穴については調査段階でほぼとらえられていると考える。ただし、遺物集中地点SX02については、暗褐色土層中に床面をおく竪穴の可能性がある。一方で、SX01・05などの祭祀的遺構は、通常の遺跡では、遺存することがなかったと思われる。谷部の比高差は、現地表面で約2m、確認面で3.2mを測る。西端最高部は、表土層も薄く、ローム層も認められなかったことから、集落形成にともなう裸地化によって、谷部への堆積と平坦化が徐々に進行したと思われる。ただし、竪穴住居跡床面高の比較では、弥生時代と古墳時代各期の竪穴住居跡に、明確な高低差は認められなかった(Fig.7)。

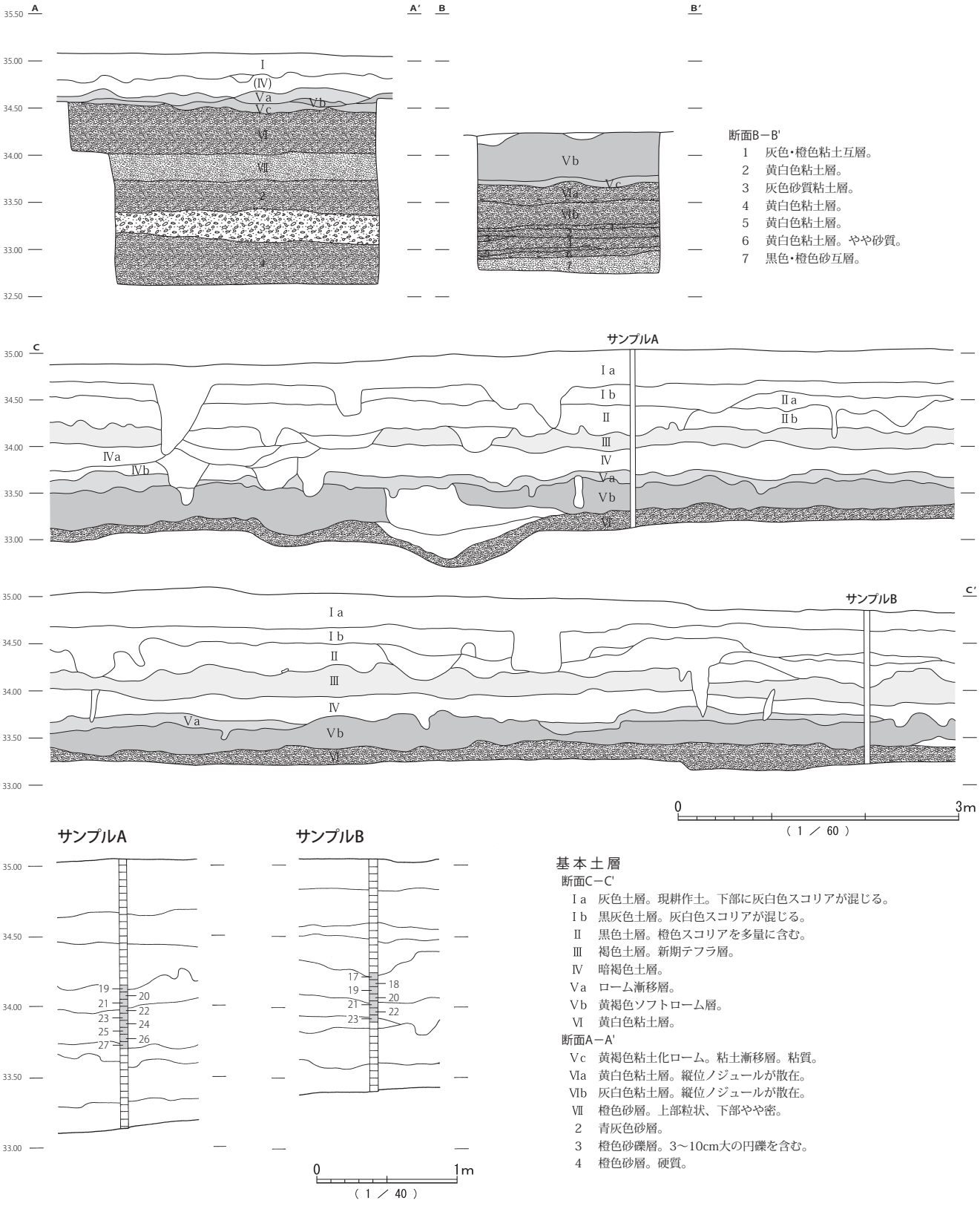
本遺跡は、弥生時代中期後半に環濠集落を形成したと考えるが、西側を区画するA地点SD02は段丘西端部に、東側を区画するB地点SD01は、谷部の東側肩部に掘削している。環濠の囲繞は、谷地形の凹部を意識した可能性が高い。谷部東側の立ち上がりは、かならずしも明確なものではないが、古墳SM01も、東側肩部に造墓されている。

ローム層より上部は、東側へ向かって層厚を増し、B地点古墳SM01以東では、新期テフラ層を明瞭にとらえることができた(PL.4)。1−3次本調査では、新期テフラ層を上面、ローム漸移層を下面とする上下層での遺構確認作業を行った。

調査区の基本層序はFig.8にまとめたが、1−3次本調査での試料をもとに、テフラ分析を委託した(第3章第1節)。別に、調査段階で上杉陽氏にも調査を依頼している(近藤2004)。

各遺構の土層注記については、調査担当者が多数であったため、原則現場図面のとおりとした。ただし、基本層序に準ずるものの表記は、可能な限り統一した。

遺構番号については、3次の本調査で一連の番号が使用されていなかったこと、遺構種別ごとの番号ではなかったことから、本報告において振り直している。ただし、遺物注記は、調査段階の遺構番号による。遺構略号については、「千葉県埋蔵文化財発掘調査標準」(千葉県教育委員会、平成16年4月)に従った。



基本土層

断面C－C'

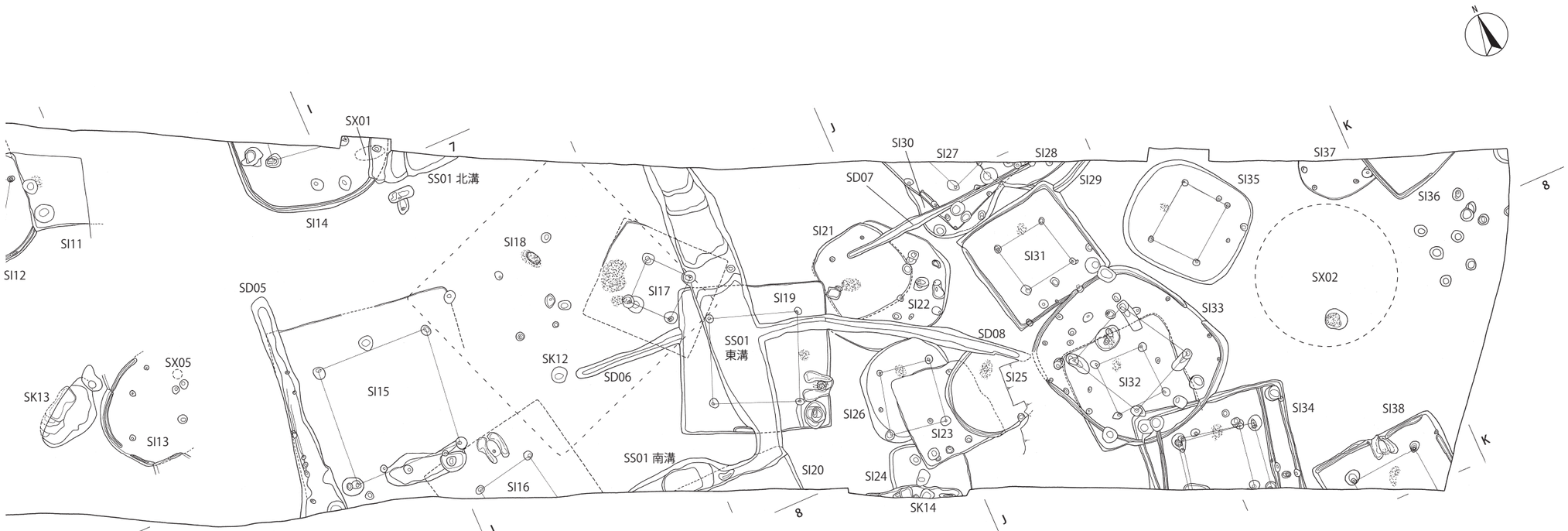
Ⅰa 灰色土層。現耕作土。下部に灰白色スコリアが混じる。
Ⅰb 黒灰色土層。灰白色スコリアが混じる。
Ⅱ 黒色土層。橙色スコリアを多量に含む。
Ⅲ 褐色土層。新期テフラ層。
Ⅳ 暗褐色土層。
Va ローム漸移層。
Vb 黄褐色ソフトローム層。
Ⅵ 黄白色粘土層。

断面A－A'

Vc 黄褐色粘土化ローム。粘土漸移層。粘質。
Via 黄白色粘土層。縦位ノジュールが散在。
Vib 灰白色粘土層。縦位ノジュールが散在。
Ⅶ 橙色砂層。上部粒状、下部やや密。
2 青灰色砂層。
3 橙色砂礫層。3～10cm大の円礫を含む。
4 橙色砂層。硬質。

Fig.8 B地点土層断面図

Fig.9　南岩崎遺跡塚越地区全体図(1)



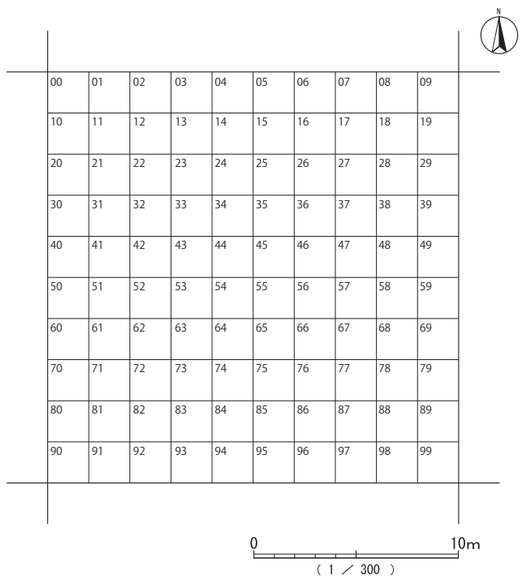


Fig.10　南岩崎遺跡塚越地区全体図(2)

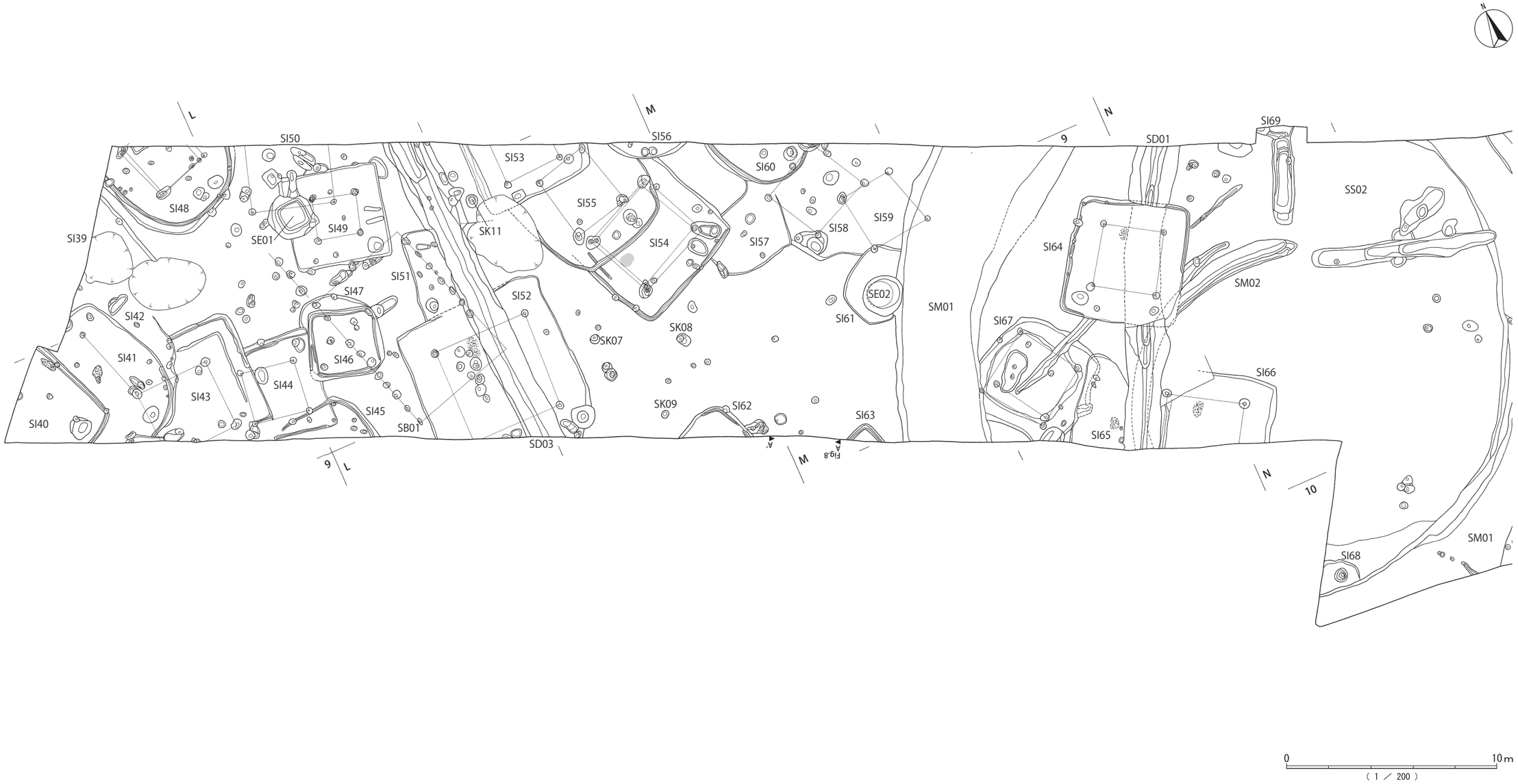


Fig.11　南岩崎遺跡塚越地区全体図(3)

Fig.12　南岩崎遺跡塚越地区全体図(4)

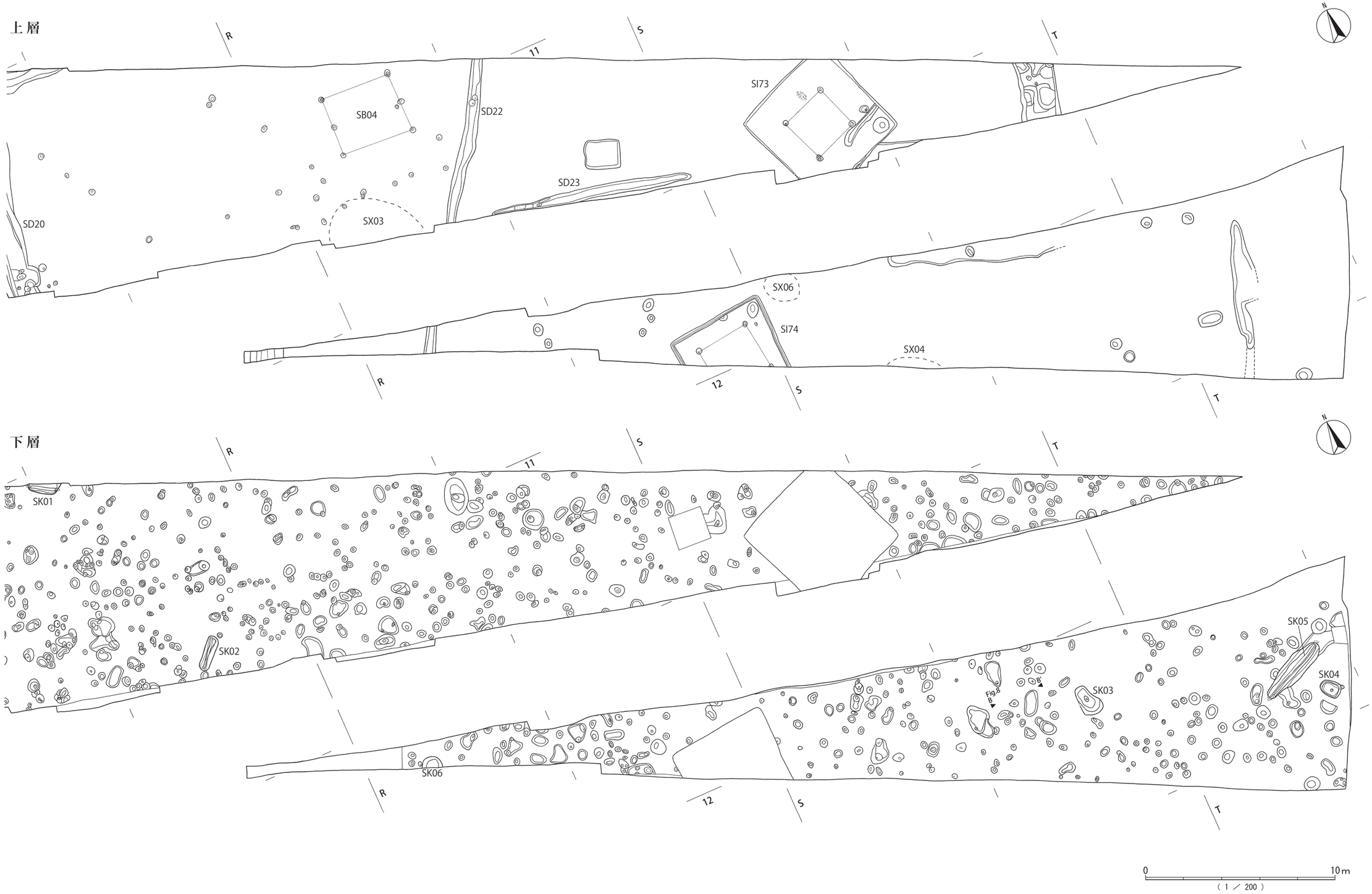


Fig.13　南岩崎遺跡塚越地区全体図(5)

第４節　調査成果の概要

南岩崎遺跡塚越地区では、竪穴（住居跡）(SI)74軒、掘立柱建物 (SB)４棟、方形周溝墓 (SS)２基、円墳 (SM)２基、土坑 (SK)14基、井戸 (SE)３基、溝 (SD)25条、その他の遺構 (SX)６基を検出した。土坑には、陥穴6基、土器埋設土坑（土器棺）3基、地下式土坑1基を含んでいる。その他の遺構 (SX) は、土器および礫集積（集中地点）であるが、なんらかの遺構にともなうものとの判断から、遺構として分類した。

時代別の内訳は、縄文時代が陥穴６基、礫集積１基である。縄文時代の遺構は、いずれも遺物をともなわないため、詳細時期は明確ではないが、新期テフラ層との関係で、ある程度時期的に限定できるものもある。縄文土器の出土は、後期堀之内式・安行式が中心となるが、量的に乏しい。弥生時代は、竪穴26軒、方形周溝墓２基、土器埋設土坑（土器棺）3基、溝２条、土器集積遺構２基であり、土器集積うち１基は竪穴の可能性がある。溝２条はＶ字溝であり、前述のとおり環濠の可能性ある。細別時期は、弥生時代中期後半が、竪穴14軒、方形周溝墓２基、土器埋設土坑３基、溝２条、後期が竪穴５軒、終末期が竪穴３軒、土器集積遺構２基である。他に、細別時期が限定できない竪穴が３軒ある。

古墳時代の遺構は、竪穴45軒、古墳（円墳）２基、区画溝１条、土坑４基、土器集積２基、礫集積１基である。細別時期は、古墳時代前期が竪穴10軒、古墳時代中期が竪穴30軒、溝１条、土坑３基、土器集積２基、礫集積１基である。古墳時代後期は、竪穴２軒であり、明確ではないが古墳２基もこの段階の造営によると推定する。古墳時代終末期は竪穴３軒、地下式土坑１基である。他に、時代時期を特定できない竪穴が３軒ある。奈良・平安時代の遺構は検出されていないが、古代末の高台付杯類が、Ａ地点で若干量検出されている。掘立柱建物４棟については、出土遺物がないため時期の特定が難しいが、井戸３基のうちSE01・02から中世に遡る遺物が検出されており、これらと一連の遺構群を構成している可能性がある。掘立柱建物群東側の溝群も、掘立柱建物と走行方向を一致させている。

本調査区では、弥生時代中期後半以降、古墳時代後期初頭まで、ほぼ継続的な居住域としての利用が想定できる。各時期の変遷過程については、第４章第３節でふれている。

文　献

小川浩一　2002「南岩崎遺跡」『平成 13 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
倉田芳郎・相京建史　1978『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会
近藤敏　2004「南岩崎遺跡（3 次調査）」『市原市文化財センター年報　平成 13・14 年度』
清藤一順他　1988「吉野 1 号墳・南岩崎吉野遺跡」『昭和 62 年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』市原市教育委員会
田所真　1995「西国吉新林遺跡」『平成 6 年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
千葉県教育委員会　1999『千葉県埋蔵文化財分布地図 (3)　千葉市・市原市・長生地区（改訂版）』
徳橋秀一・遠藤秀典　1984「姉崎地域の地質（付図）」『地域地質報告−姉崎地域の地質−』地質研究所
蜂屋孝之　1999『市原市西国吉遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第 65 集
樋口清之・金子皓彦・青木豊　1974「千葉県西国吉遺跡の発掘調査」『月刊考古学ジャーナル』No.96　ニュー・サイエンス社
藤崎芳樹　1982『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』財団法人千葉県文化財センター

第２章　遺構と遺物

南岩崎遺跡塚越地区では、竪穴（住居跡）(SI)74軒、掘立柱建物 (SB)４棟、方形周溝墓 (SS)２基、円墳 (SM)２基、土坑 (SK)14基、井戸 (SE)３基、溝 (SD)25条、その他の遺構 (SX)６基を検出した。土坑には、陥穴６基、土器埋設土坑（土器棺）３基、地下式土坑１基を含んでいる。その他の遺構 (SX) は、土器および礫集積（集中地点）であるが、なんらかの遺構にともなうものとの判断から、遺構として分類した。

本報告では、弥生・古墳時代について下記のとおり時期設定を行った。詳細は第４章第２節を参照願いたい。ただし、各時期の遺構数・遺物量には差があり、細別時期には精粗がある。

遺構の時期は、細別案に従い最大限比定したが、構築時期、廃棄時期、埋没時期の詳細を問題とはしていない。

南岩崎１期a・b・c期	弥生時代中期後半宮ノ台式期
南岩崎２期a・b期	弥生時代後期久ヶ原・山田橋式期
南岩崎３期	弥生時代終末期
南岩崎４期a・b・c期	古墳時代前期五領式期
南岩崎５期a・b期	古墳時代中期前半和泉式期
南岩崎６期a・b期	古墳時代中期後半・後期前半鬼高式期
南岩崎７期	古墳時代終末期

報告は、時代ごとの記載が適当であると思われるが、地点によって、遺構間の重複が著しく、挿図作成上これを時代別に分解することが容易ではないと判断したため、遺構種別ごとに記載する。遺構No.は、報告作成時に調査区西側から振り直しており、記載順もこれに従っている。

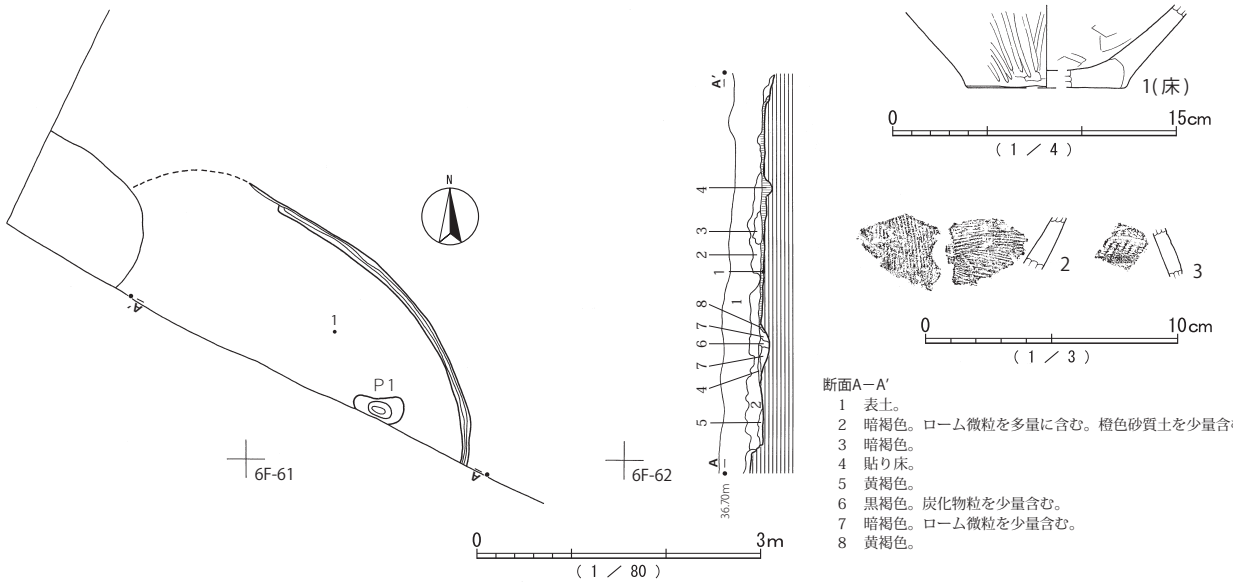
第１節　竪穴

今回の南岩崎遺跡塚越地区の調査では、74軒の竪穴を検出した。このうち、SI02・34・48・54で１回以上の建て替えが認められたため、建て替えを含めた総数では78軒以上となる。74軒の時期的な内訳は、弥生時代26軒、古墳時代45軒、不明３軒ある。細別時期では、弥生時代中期後半（南岩崎１期）が14軒、後期（２期）が５軒、終末期（３期）が３軒、細別時期を限定できない弥生時代の竪穴が３軒ある。古墳時代は、前期（４期）が10軒、中期前半（５期）が28軒、中期後半後期（６期）が２軒、終末期（７期）が３軒であり、時代時期を特定できない竪穴が３軒ある。

本遺跡の、とくにＡ地点谷部を中心とする竪穴住居は、覆土が厚く、まとまって土器が出土している。本報告では、可能な限り遺物の出土レベルを考慮して挿図を作成した。ただし、掲載上の分類は、「床面付近」が基準床面高＋−2cm、覆土の分層についても層厚20cmを基準とした機械的な水平区分であり、本来の堆積状況を直接反映しているわけではない。また、遺物によっては上下の層序で接合する例があり、掲載上の区分は絶対的なものではない。個々の出土高については、観察表 (Tab.15) に記載した。なお、覆土層厚が30cm前後以下は、分層掲載を行っていない。

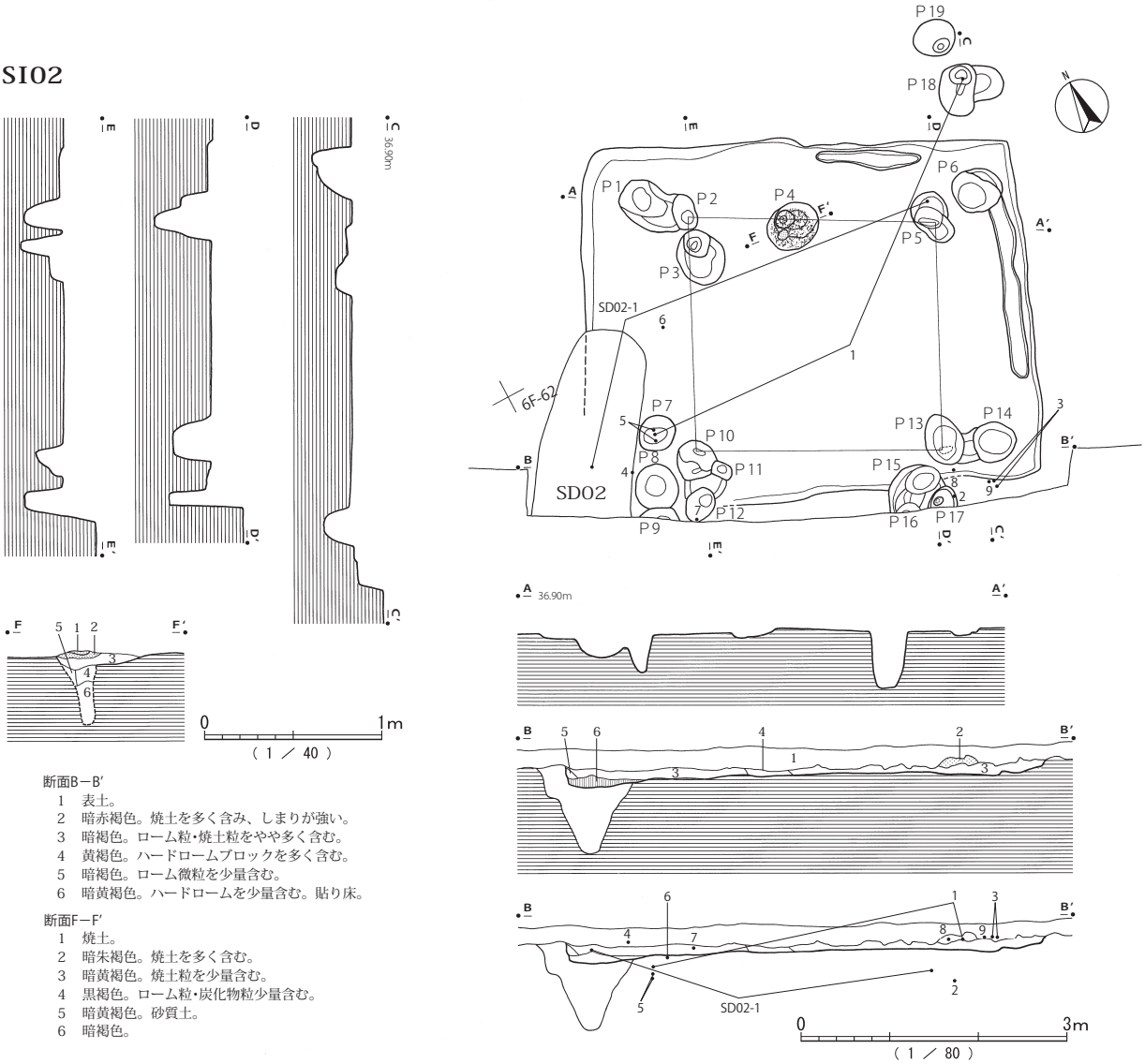
以下の記述で省略したPit深度、竪穴床面積、床面標高および出土遺物の詳細情報については、竪穴一覧表 (Tab.14) に収録した。

SI01



断面A－A′
1　表土。
2　暗褐色。ローム微粒を多量に含む。橙色砂質土を少量含む。
3　暗褐色。
4　貼り床。
5　黄褐色。
6　黒褐色。炭化物粒を少量含む。
7　暗褐色。ローム微粒を少量含む。
8　黄褐色。

SI02



断面B－B′
1　表土。
2　暗赤褐色。焼土を多く含み、しまりが強い。
3　暗褐色。ローム粒・焼土粒をやや多く含む。
4　黄褐色。ハードロームブロックを多く含む。
5　暗褐色。ローム微粒を少量含む。
6　暗黄褐色。ハードロームを少量含む。貼り床。

断面F－F′
1　焼土。
2　暗朱褐色。焼土を多く含む。
3　暗黄褐色。焼土粒を少量含む。
4　黒褐色。ローム粒・炭化物粒少量含む。
5　暗黄褐色。砂質土。
6　暗褐色。

Fig.14　SI01 遺構遺物、SI02(1) 遺構

SI02

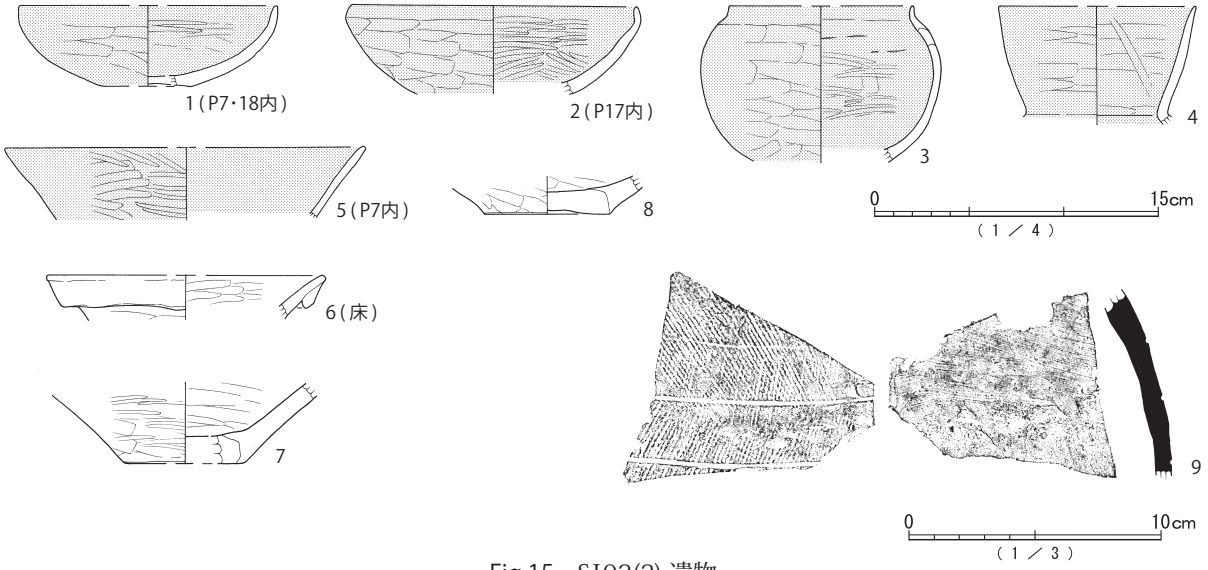


Fig.15　SI02(2) 遺物

SI01 (Fig.14、PL.13)

竪穴住居跡SI01は、A地点6F−60区他に所在する。南側は調査区外、西側はカクラン坑である。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは最大で0.15m程度である。竪穴平面形態は楕円形を呈し、平面規模は検出部最大で4.15mを測る。主軸方位は明らかではない。P1は深さ0.12m程度と浅く、調査範囲内から主柱穴は検出できなかった。炉、所謂貯蔵穴等も確認できなかった。床硬化面がほぼ全体に認められたが、表土、覆土とも浅く、根等による影響からか凹凸が激しい。壁溝はほぼ全周する。

出土遺物は、宮ノ台式の小破片のみであった。1は壺形土器であり、床面から出土している。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1期と推定する。ただし細別時期は明確ではない。

SI02 (Fig.14・15、PL.6・13・40・89・90)

SI02は、A地点6F−63区他に所在する。SD02と重複し、本遺構に対してSD02が古い。また、南側で別遺構と重複している可能性がある。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、Pitの一部は橙色砂層に達している。確認面からの深さは、最大で0.15m程度と浅い。竪穴平面形態は横長方形を呈し、全体規模は4.06m(主軸)×5.0m、確認面掘形面積は22.19㎡を測る。ただし、南側範囲はやや明確ではない。主軸方位は、N−25.0°−Eである。主柱穴はP2(・3)・5・10(・11)・13である。少なくとも1回以上の建て替えが想定できるが、平面的な拡張痕は明確ではない。主柱穴列外周側のP1・6・7・14はいずれも浅く、貯蔵穴を含む可能性がある。P4は、炉火床面下より検出した。炉は長軸長0.49mを測る。炉内には､スサ状の繊維を含む平板なレンガ状焼粘土が置かれていた。床は貼り床であり、掘形は四周がやや深くなる構造をとる。ただし、床面自体はあまり硬化していない。壁溝は、北辺部、東辺部がやや凹むものの明確ではない。

南辺部P8・12・17は柱穴状で深く、またP8・13・14南側で、焼土・炭化物が比較的広範囲に認められた。このことから、別の竪穴住居跡が南側に展開していた可能性がある。ただし、調査区際断面の観察でも床面は明確ではなく、確証を得るにはいたらなかった。

SI03

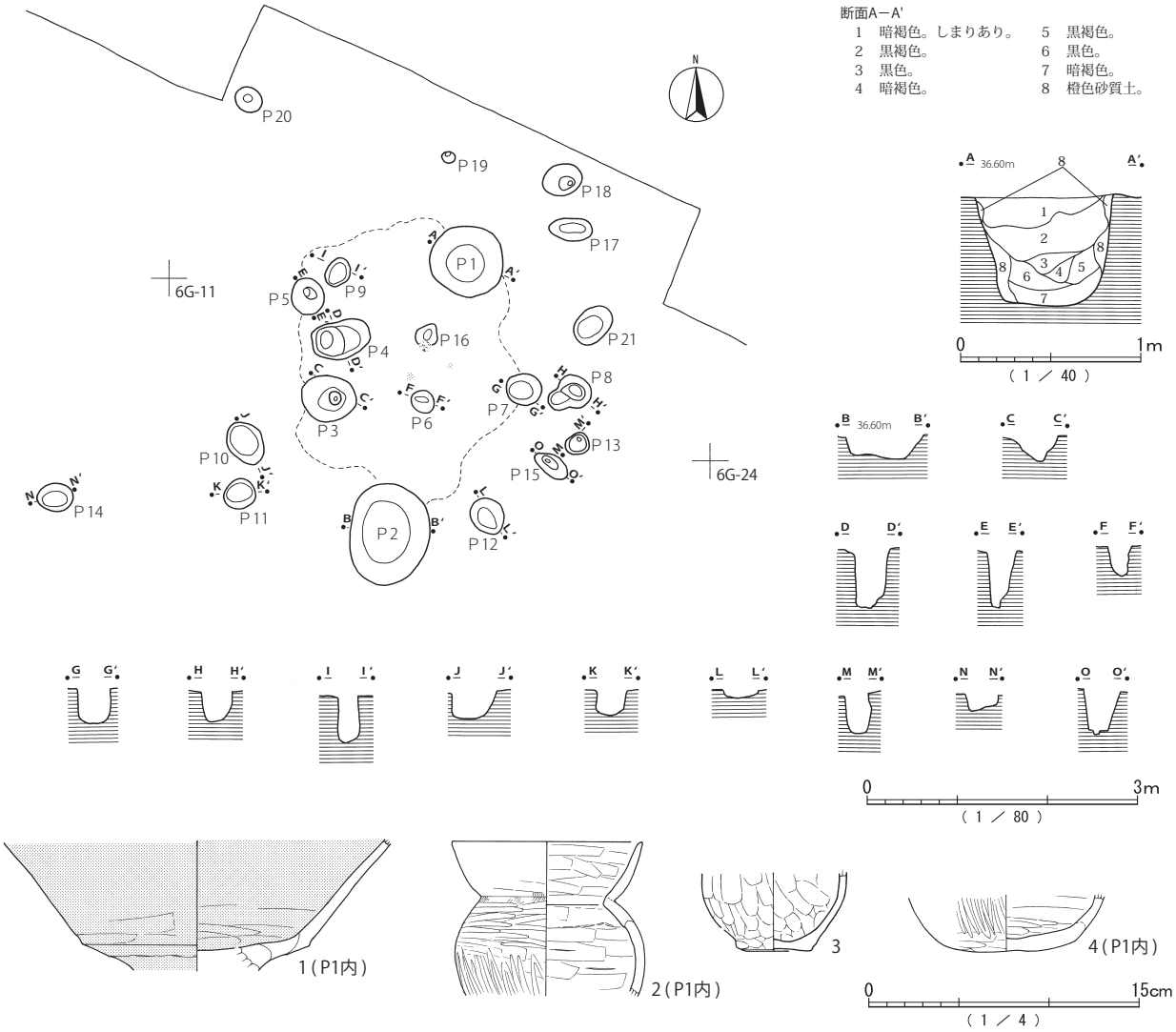


Fig.16　SI03 遺構遺物

出土土器は和泉式を主体とする。ただし、これらはP7をのぞくと北東隅竪穴外のP18や南側範囲外に分布する。本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定するが、和泉式は南側に想定した別遺構に関連する可能性もある。その場合、小破片ではあるが床面から出土した6を根拠とし、弥生時代終末期から古墳時代前期と考えることもできる。

なお、注目すべき遺物として、縄蓆文タタキにおそらく螺旋状となる沈線を重ねた壺形土器が出土している（9）。胎土・焼成等から、韓式系土器とすべきかもしれない。。他に、出土位置を掲載したSD02－1は、時期的な関連性からSD02（Fig.162）で掲載した。

SI03（Fig.16、PL.13・40・80）

SI03は、A地点6G－12区他に所在する。黄褐色粘土層を確認面とし、Pitは橙色砂層まで掘り込んでいる。北東－南西5.2m、北西－南東3.5mの範囲にPitが分布し、そのほぼ中央付近で床面と推定する硬化面を検出した。掘り込みは検出できなかったが、一応竪穴住居跡と推定しておく。P6・16付近で焼土が検出されており、炉の可能性がある。ただし、火床面は不明確であった。P1は、径0.8

～0.75m、深さ0.6mを測り、1・2・4が出土している。P4～9・13は柱穴状であるが、配列に規則性が認められない。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5a期と推定する。

SI04（Fig.17、PL.13・40・99・104）

SI04は、A地点6G−40区他に所在する。南東隅部は、確認調査坑によって一部破壊されている。黄褐色粘土層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは最大でも0.2m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は4.22m（主軸）×4.12m、確認面掘形面積は17.34㎡を測る。主軸方位は、N−1.0°−Wである。Pitはいずれも浅く、主柱穴は認められない。貯蔵穴等も明確ではない。カマドは北壁中央部で検出されたが、左袖は明確にとらえられていない。床硬化面はあまり明確ではなかった。壁溝は検出できなかった。

土器は、すべて覆土ないし一括出土である。1は内面黒色処理の杯形土器であり、竪穴形態等を考慮すると、本竪穴に帰属する可能性が最も高いと思われる。4・5はともに銅製品であり、4が鏃、5が屈曲する棒状品である。5の端部一方は針状となる。6は円盤状の土製品であるが、脱落した底部の可能性もある。7は敲石である。

本竪穴の時期は、古墳時代終末期南岩崎7期と推定する。

SI05（Fig.18、PL.13・14・40・99）

SI05は、A地点6G−71区他に所在する。SI06・08と重複し、本遺構が最も新しい。中央部は、確認調査坑が床面まで達している。遺構は、黄褐色粘土層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは最大で0.23m程度を測る。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は3.60m（主軸）×3.56m、確認面掘形面積は12.10㎡を測る。主軸方位は、N−12.0°−Wである。Pitはいずれも不整形で、柱穴・貯蔵穴等は認められない。カマドは北壁中央部にあり、その前面で炉を検出した。炉火床面は、明確な掘り込みをもたない。床面は、根等による凹凸が全体で認められ、遺存状況は悪い。壁溝は検出できなかった。

土器は、1がカマド内から出土した。本竪穴の遺存遺物である。2・7についてもカマド内一括出土である。9は棒状の鉄製品であり、10は磨敲石である。

本竪穴の時期は、古墳時代終末期南岩崎7期と推定する。

SI06（Fig.18・19、PL.40・105）

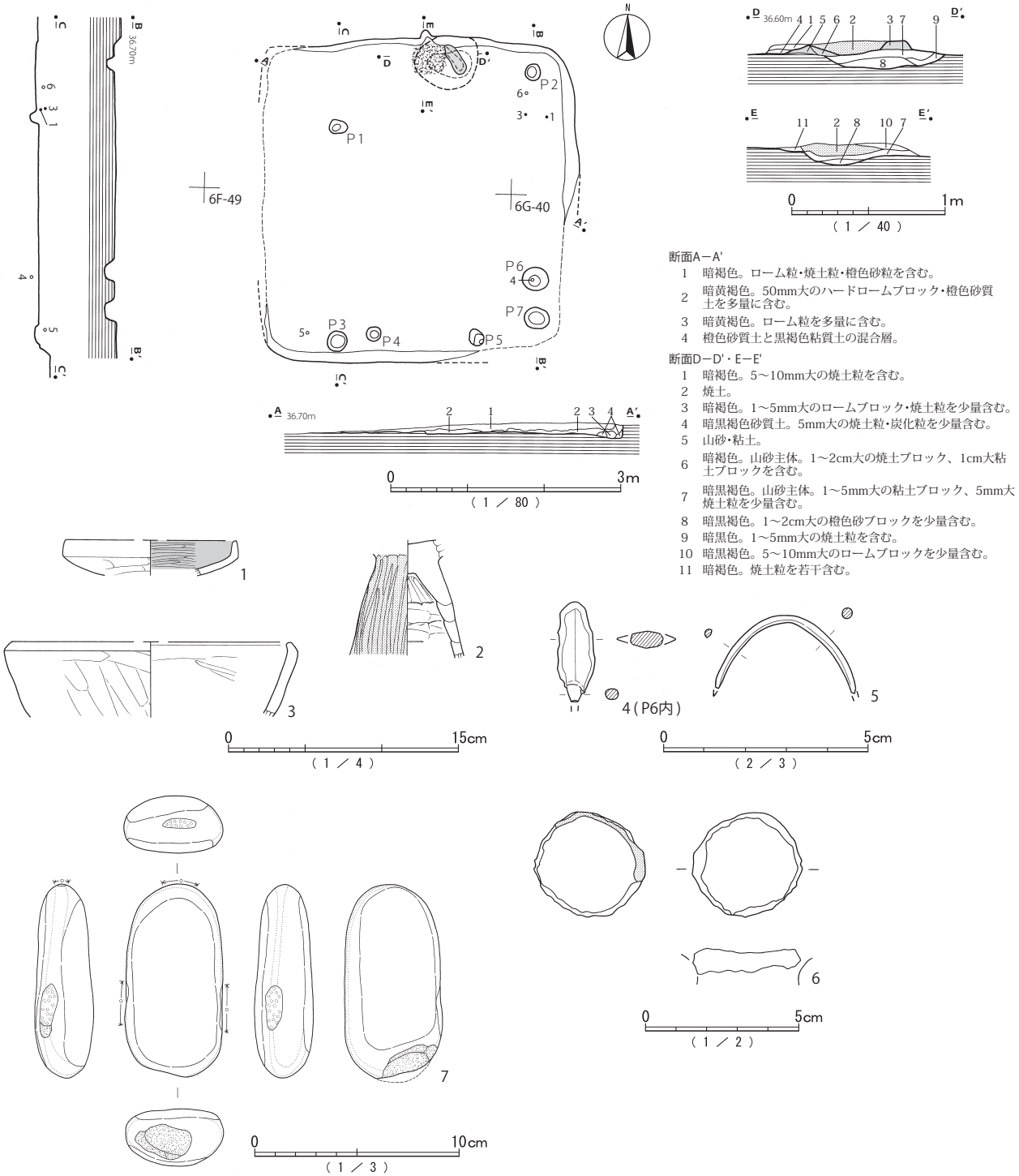
SI06は、A地点6G−60区他に所在する。SI05と重複し、本遺構に対してSI05が新しい。床面高は本遺構が0.15m高い。竪穴範囲は、部分的に検出した床硬化面から推定した。焼土粒を覆土に含む東側の皿状土坑をカマド跡と推定したが、確実ではない。規模は、東西方向3.10m、推定カマド部分を含め3.47m、確認面掘形面積は8.82㎡を測る。東西軸の方位はN−78.0°−Wである。主柱穴等、本遺構に確実にともなうと考えられるPitは検出できなかった。

土器はすべて覆土ないし一括出土である。ほぼ和泉式に限られることから、本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5期と推定する。4は、土師器転用の砥石である。

SI07（Fig.19、PL.14）

SI07は、A地点7G−02区他に所在する。黄褐色粘土層を確認面・掘り込み層とする。床硬化面およびその中央部の炉状火床面から、竪穴住居の可能性を推定した。範囲は、掘形から判断したが確

SI04



断面A－A'
1　暗褐色。ローム粒・焼土粒・橙色砂粒を含む。
2　暗黄褐色。50mm大のハードロームブロック・橙色砂質土を多量に含む。
3　暗黄褐色。ローム粒を多量に含む。
4　橙色砂質土と黒褐色粘質土の混合層。

断面D－D'・E－E'
1　暗褐色。5～10mm大の焼土粒を含む。
2　焼土。
3　暗褐色。1～5mm大のロームブロック・焼土粒を少量含む。
4　暗黒褐色砂質土。5mm大の焼土粒・炭化粒を少量含む。
5　山砂・粘土。
6　暗褐色。山砂主体。1～2cm大の焼土ブロック、1cm大粘土ブロックを含む。
7　暗黒褐色。山砂主体。1～5mm大の粘土ブロック、5mm大焼土粒を少量含む。
8　暗黒褐色。1～2cm大の橙色砂ブロックを少量含む。
9　暗黒色。1～5mm大の焼土粒を含む。
10　暗黒褐色。5～10mm大のロームブロックを少量含む。
11　暗褐色。焼土粒を若干含む。

Fig.17　SI04 遺構遺物

実ではない。竪穴平面形態はやや長方形を呈し、全体規模は3.45m（主軸）×3.15m、確認面掘形面積は10.98㎡を測る。主軸方位は、N－12.0°－Wである。炉火床面は、床レベルよりやや下がるが、掘り込み範囲は検出できなかった。本遺構にともなうPit等も検出できなかった。なお、南西隅部では別の硬化面を検出した。これは、本遺構の硬化面より約8㎝上にあり、同一ものとは判断しなかった。性格は明らかではない。

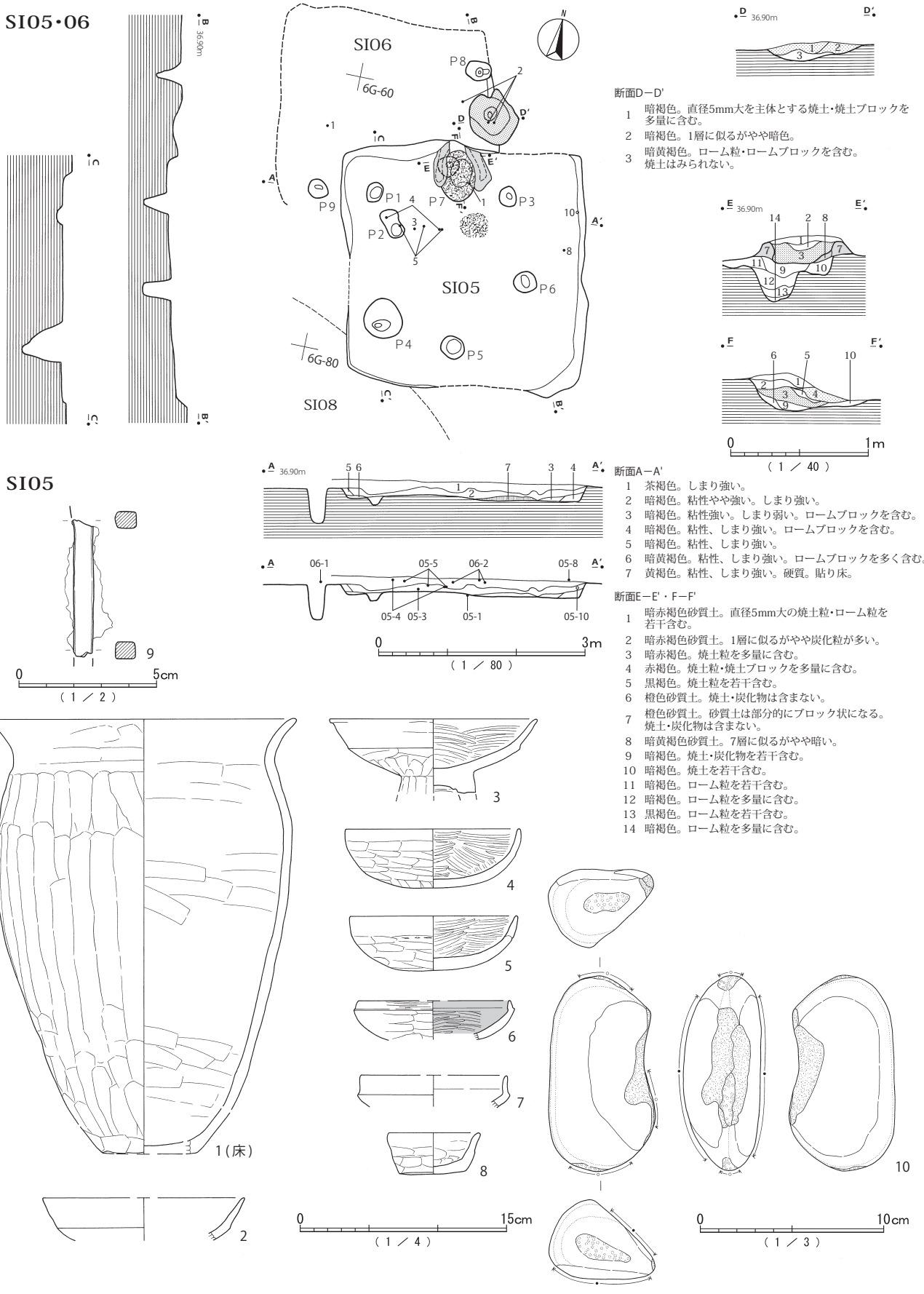
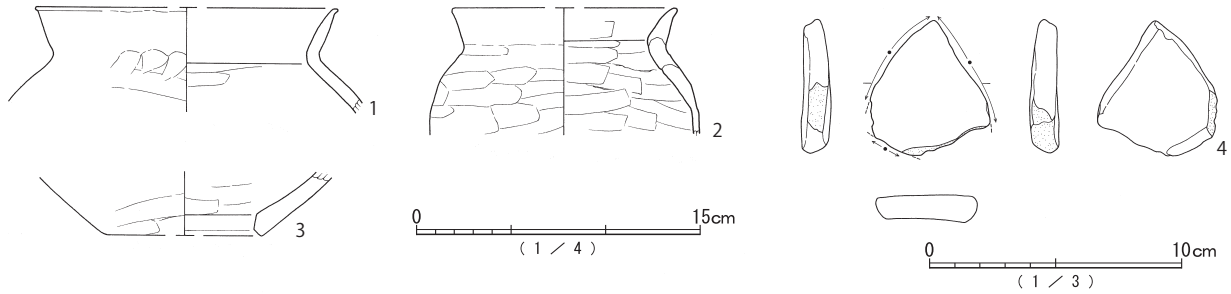


Fig.18　SI05 遺構遺物、SI06(1) 遺構

SI06



SI07

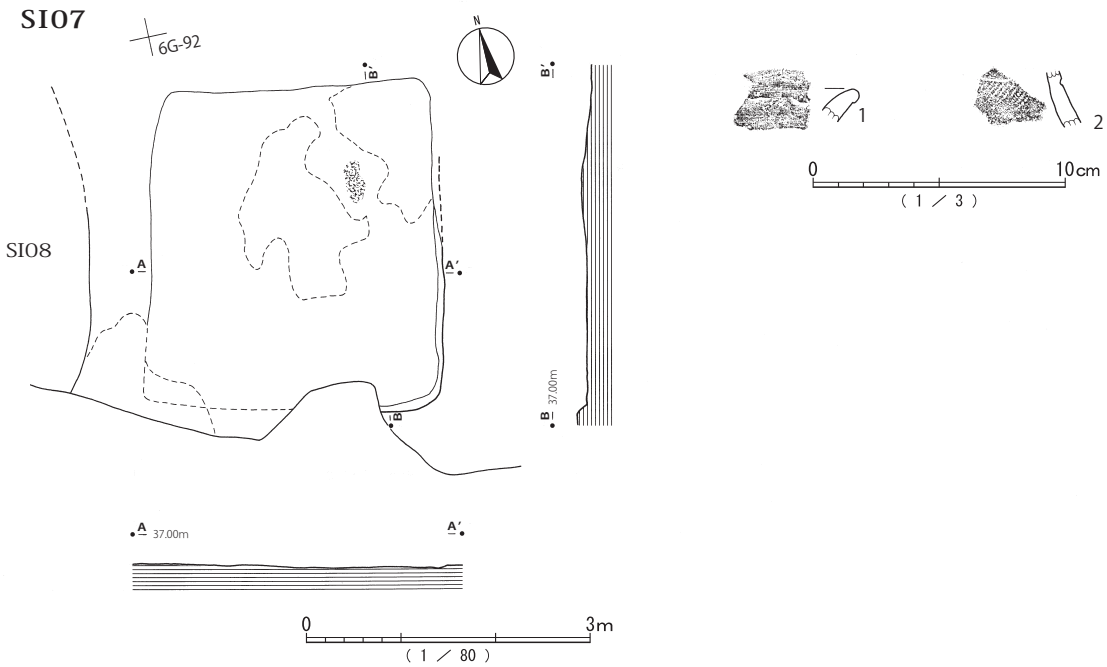


Fig.19　SI06(2) 遺物、SI07 遺構遺物

土器は、土師器甕形土器口縁部、沈線区画の帯縄文をもつ壺形土器胴部小破片が出土しているのみである。

本竪穴の時期は明らかでない。

SI08（Fig.20～22、PL.5・14・40・74・90・102・104）

SI08は、A地点6F−99区他に所在する。南側約1/3は調査区外となる。北辺部は確認調査坑によって破壊されている。SI05と重複し、本遺構に対してSI05が新しい。黄褐色ソフトローム層から黄白色粘土層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは0.12m程度である。竪穴平面形態は楕円形を呈し、現存部最大長は7.86m、推定掘形面積は47.0㎡程度を測る。炉Aと貯蔵穴P6との位置関係から、主軸方位はN−54.0°−W程度と推定しておく。ただしこの場合、東隅P4に対応する北隅柱穴が未検出で、主柱穴がそろわない。炉Aは長軸長0.71mを測る。炉Bは東側床硬化面がとくに赤化していた。床硬化層は竪穴ほぼ全体におよぶが、貼り床構造ではない。床面直上を中心に、焼土・炭化物の堆積が認められた。火災に遭った可能性が高い。

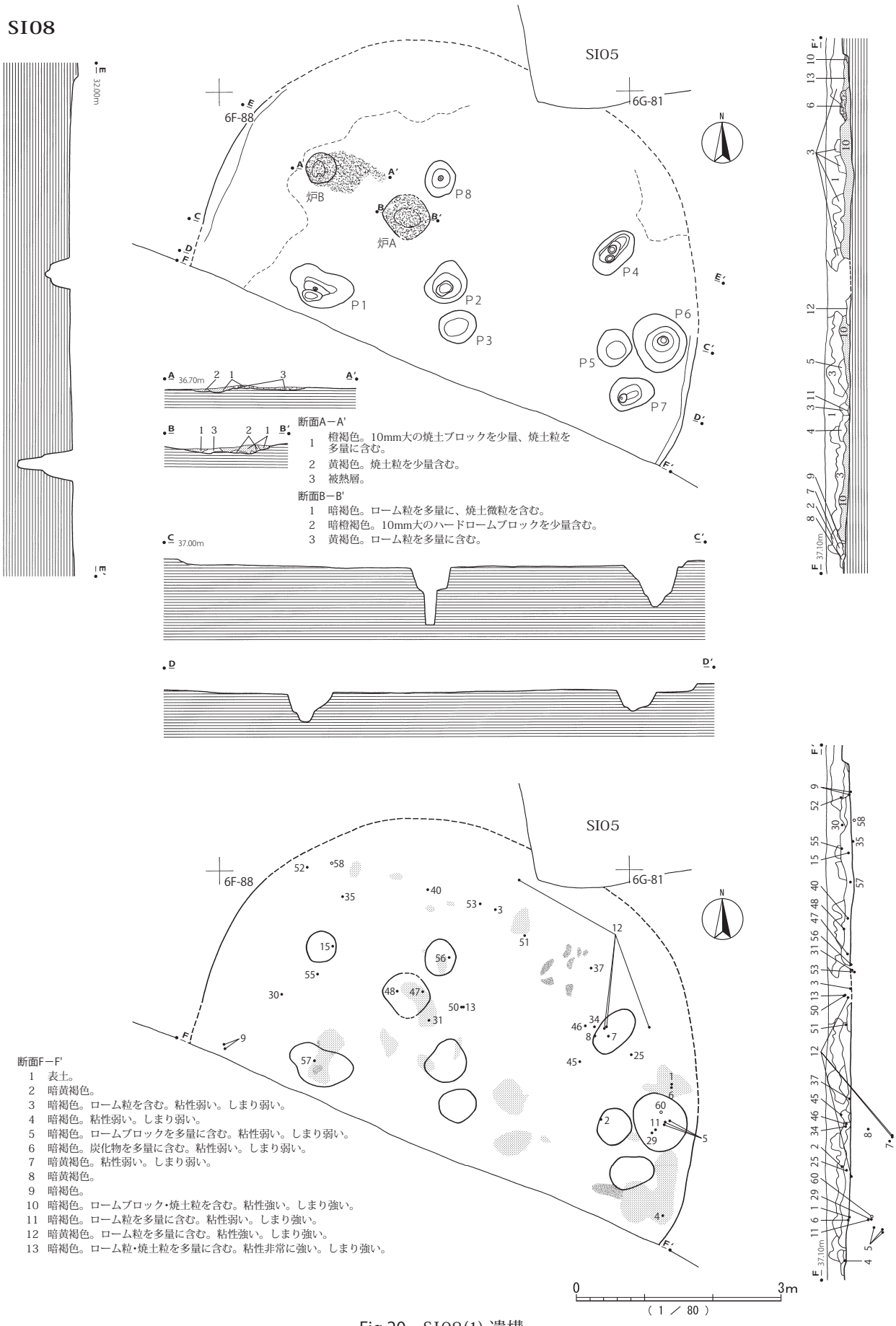


Fig.20　SI08(1) 遺構

SI08

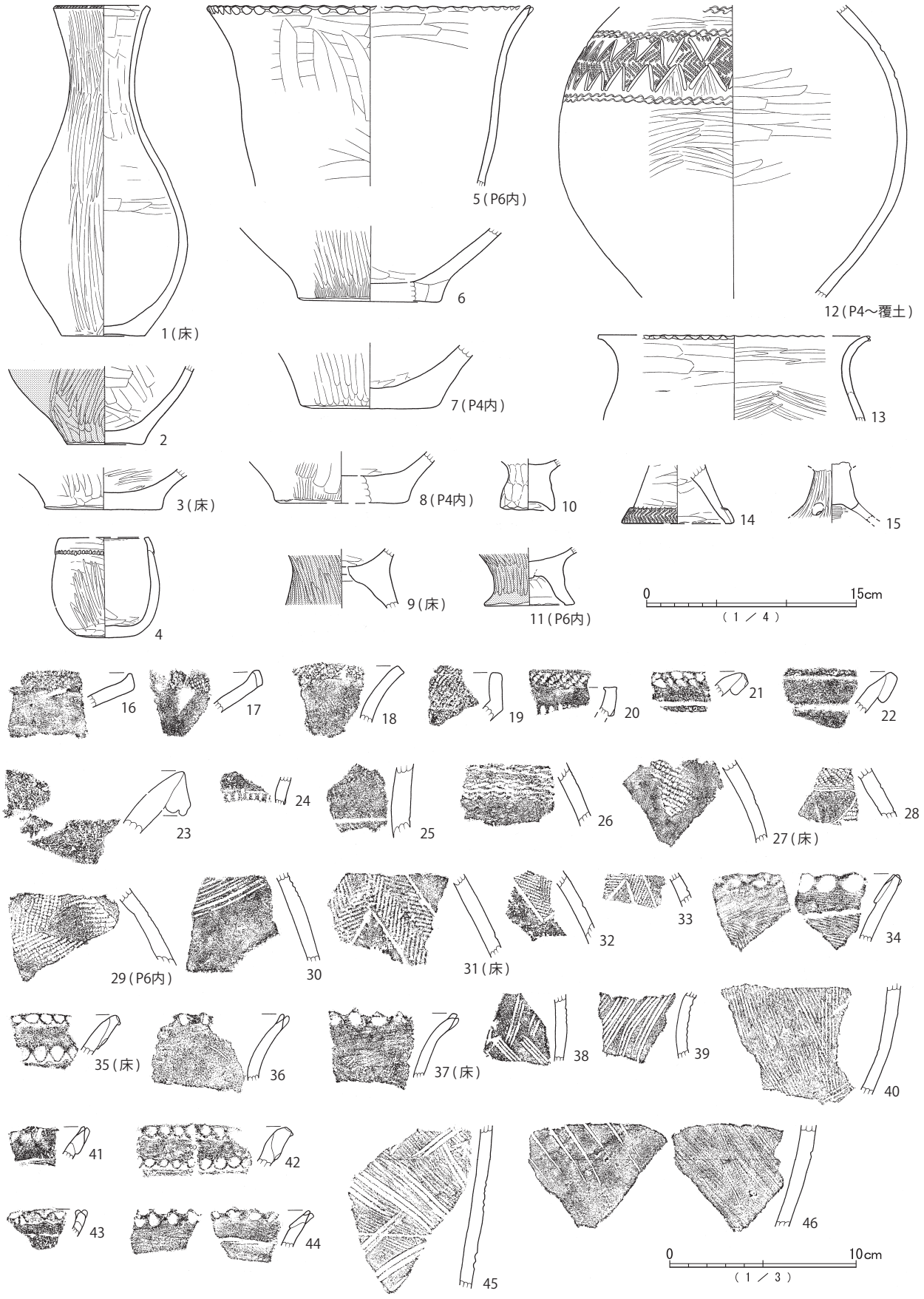


Fig.21　SI08(2) 遺物

SI08

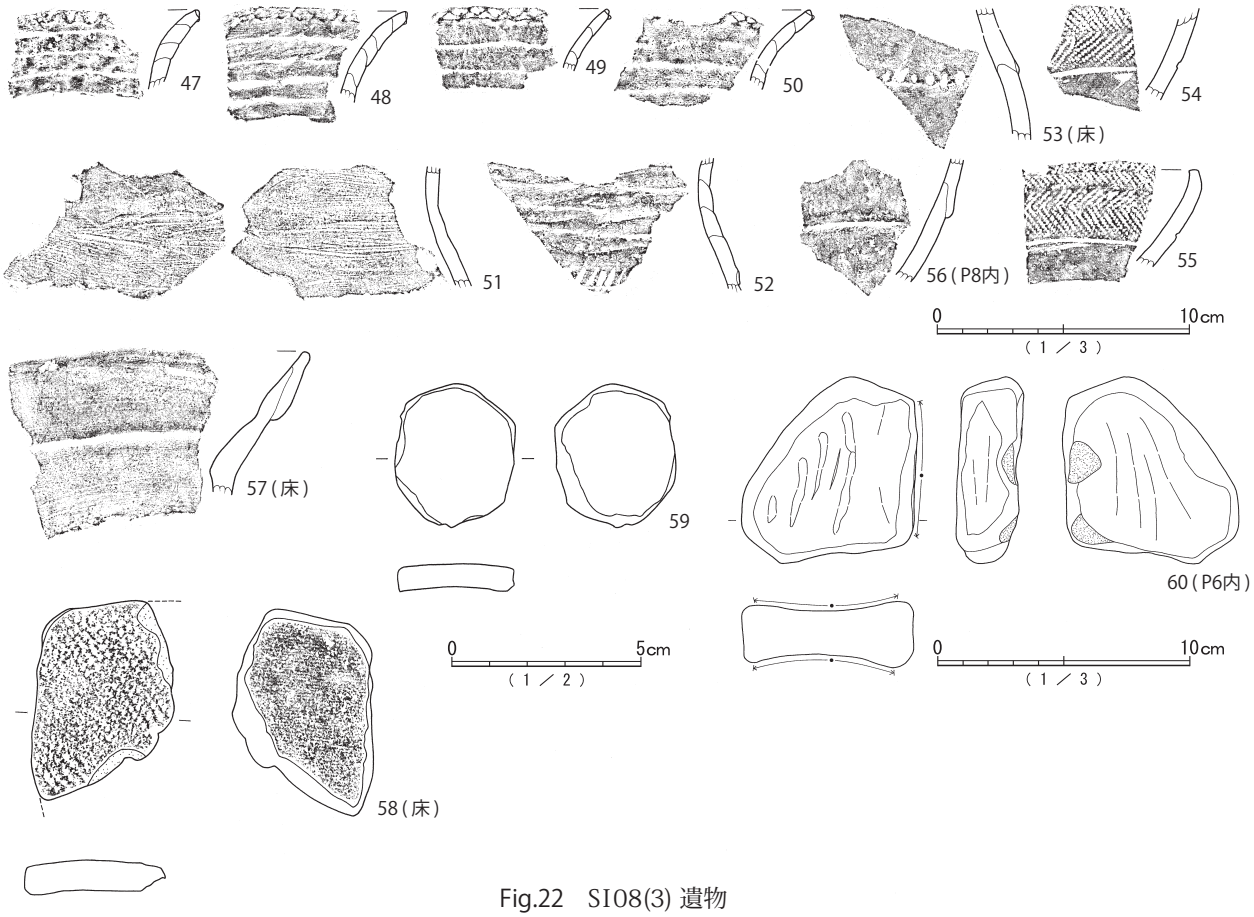


Fig.22　SI08(3) 遺物

出土土器は、全体として時期幅があり、宮ノ台式終末段階・久ヶ原式・弥生時代終末期が認められる。床面出土の1、P6内から出土した5などを本竪穴の遺存遺物と考えるが、P4・8から出土した12・56は弥生時代終末期に比定できる。覆土内に別遺構を想定する必要もあるが確証はない。58・59は土器片利用の円盤であり、宮ノ台式と推定する。60は、砂岩製の砥石である。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1c期に比定しておく。

SI09（Fig.23、PL.14・15・40）

SI09は、A地点6G−94区他に所在する。SD24・25と重複し、SD24肩部西半部のみ遺存する。黄白色粘土層を確認面・掘り込み層として、Pitは橙色砂層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.21m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴規模は、南北軸で5.10m、主柱穴の配置から想定する確認面掘形面積は26.48㎡である。南北軸方位はN−11.0°−Eをしめす。主柱穴はP1〜4であるが、配置・深さとも不揃いである。P5は貯蔵穴である。カマド・炉は検出できなかった。床硬化面は西辺部のみ遺存する。壁溝はほぼ全周し、間仕切り溝が接続する。P6覆土上層に焼土の堆積がみられるが、竪穴覆土の記録がないため、火災については不明。

出土土器は、貯蔵穴P5周辺にまとまっていた。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI09

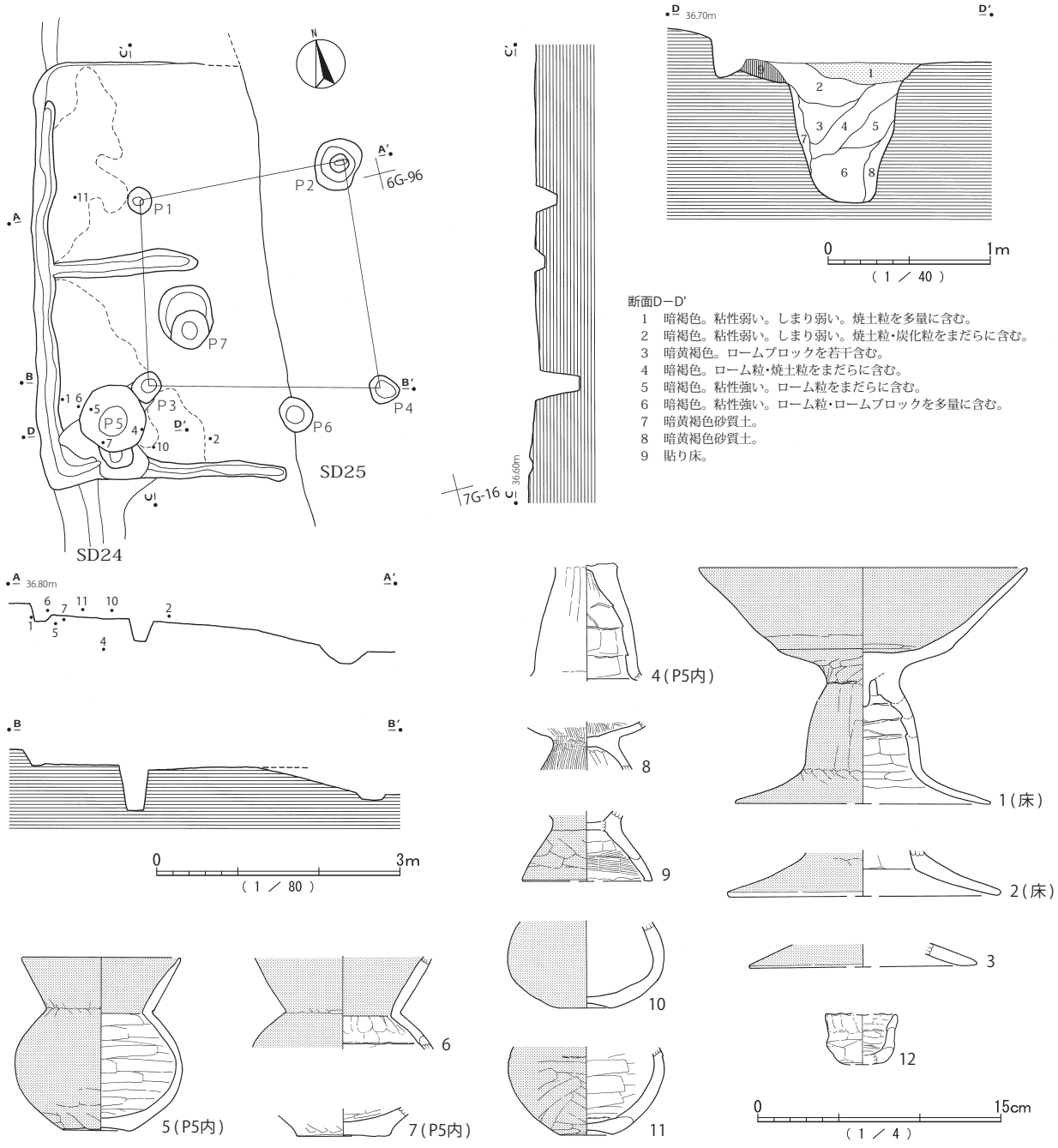


Fig.23　SI09 遺構遺物

SI10（Fig.24、PL.14・15）

SI10は、A地点6G−65区他に所在する。SD24・25と重複し、SD24肩部西半部のみ遺存する。黄白色粘土層を確認面とし、掘り込み面は橙色砂層まで達している。確認面からの深さは、最大で0.24m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴規模は、南北軸で3.40m、竪穴平面形態を方形とした場合の確認面掘形面積は11.34㎡を測る。南北軸方位はN−17.0°−Eである。P7は、貯蔵穴ないし別遺構の可能性もある。カマド・炉は検出できなかった。床硬化面は不明瞭であり、調査面の橙色砂層は掘形面の可能性が高い。壁溝は断続的に検出した。P7覆土で焼土の堆積がみられるが、

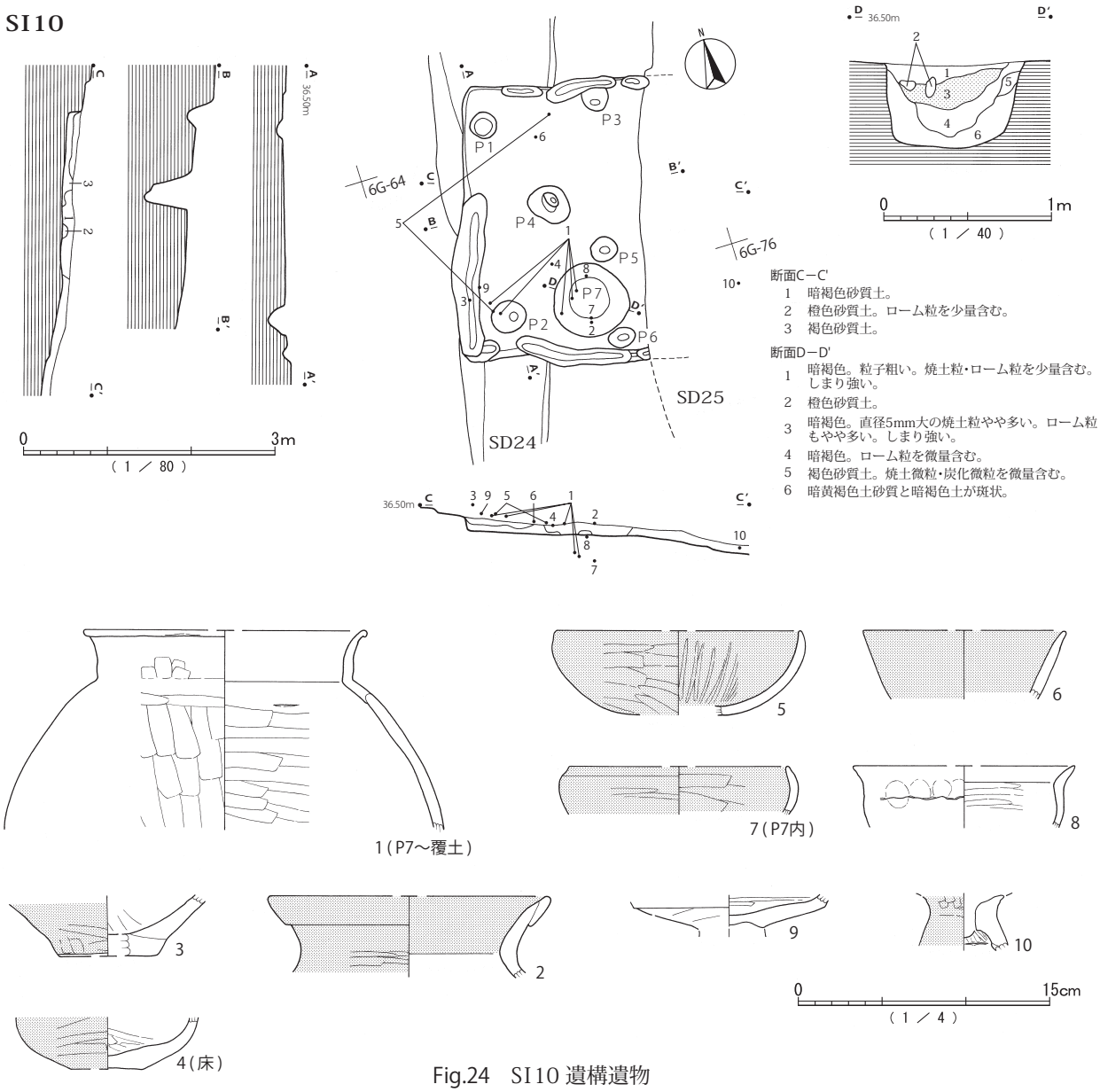


Fig.24　SI10 遺構遺物

火災については明らかではない。

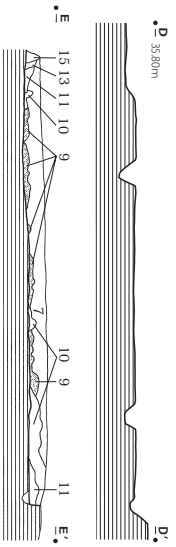
本竪穴は、遺存状態が不良で、出土土器も破片資料が主体となり散在していた。土器観察表での遺物高は、西壁際竪穴底面を「床」として一応計測したが、前述のとおり床面自体が明確ではない。

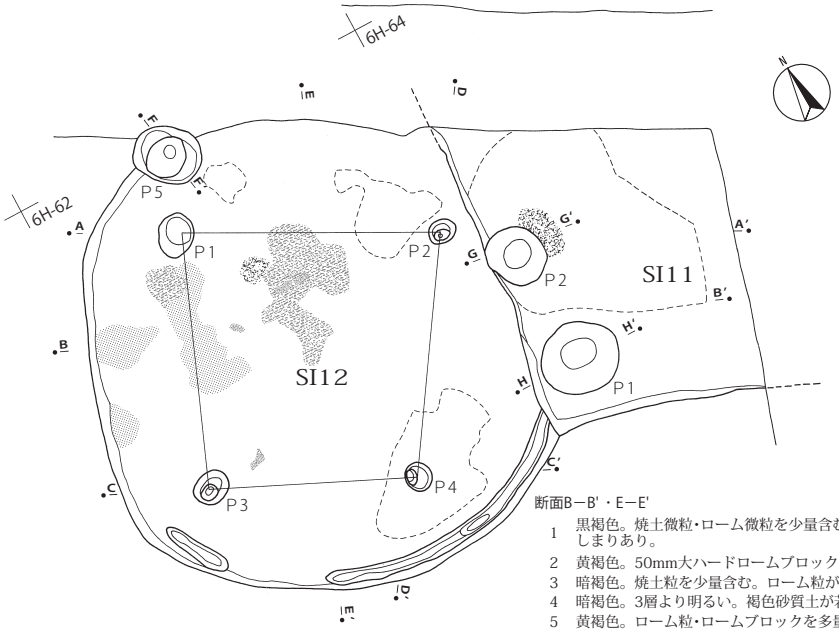
本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b新期と推定する。

SI11（Fig.25・26、PL.15・40・41・74・80・91）

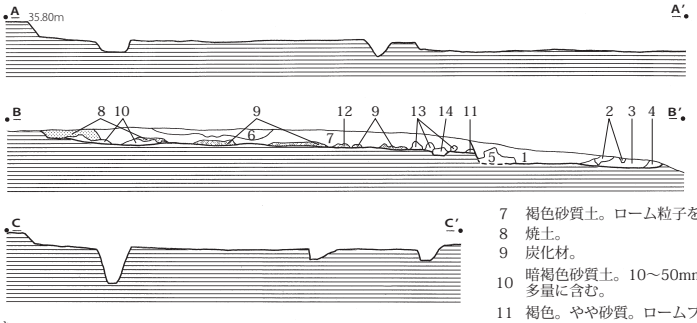
SI11は、A地点6H−74区他に所在する。SI12と重複し、本遺構が新しい。西側は黄褐色ソフトローム層を確認面とするが、東側は床面もローム面に達していない。北側・東側は、確認調査坑によって壊され、南西隅部のみ検出した。確認面からの深さは、最大で0.1m程度。竪穴平面形態は方形ないし長方形を呈し、西辺部現存長3.54m、南辺部2.24mを測る。西壁を基準とした場合の主軸方位は、N−6.0°−Wである。主柱穴は検出できなかった。P1は0.83m×0.78m、深さ0.74m、P2は0.66m×0.56m、深さ0.34mを測る。P1は貯蔵穴である。P2脇床面が焼けていたが、火災に遭った痕跡と

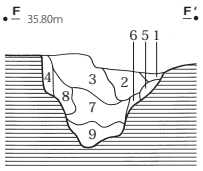
SI11・12





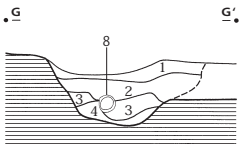
断面B－B'・E－E'
1　黒褐色。焼土微粒・ローム微粒を少量含む。しまりあり。
2　黄褐色。50mm大ハードロームブロック主体。
3　暗褐色。焼土粒を少量含む。ローム粒がやや多い。
4　暗褐色。3層より明るい。褐色砂質土が若干多い。
5　黄褐色。ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
6　暗褐色。焼土粒・炭化粒・ローム粒を少量含む。



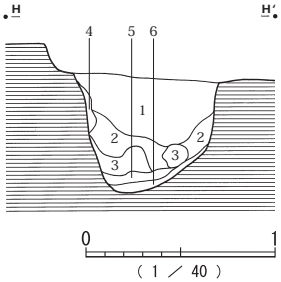


断面F－F'
1　暗褐色。ローム粒を多量に含む。
2　暗褐色。ローム粒をまばらに含む。橙色砂質土を含む。
3　暗褐色。ローム粒を多量に含む。しまり強い。
4　暗黄褐色砂質土。
5　暗黄褐色砂質土。
6　暗黄褐色砂質土。
7　黒褐色。ロームブロックをまばらに含む。
8　暗黄褐色砂質土。他層に対しやや暗色。
9　暗黄褐色砂質土。

7　褐色砂質土。ローム粒子を少量含む。粒子粗い。
8　焼土。
9　炭化材。
10　暗褐色砂質土。10～50mm大ロームブロックを多量に含む。
11　褐色。やや砂質。ロームブロックを少量含む。
12　焼土・炭化材。
13　橙色砂質土。
14　暗褐色。30mm大ハードロームブロックを含む。
15　褐色砂質土。



断面G－G'
1　暗褐色土と焼土が混じる。褐色ブロックを少量含む。
2　暗褐色。ローム粒・炭化粒を少量含む。しまり強い。
3　褐色。ローム粒を多量に含む。
4　橙色砂質土。



断面H－H'
1　暗褐色。ローム粒を少量含む。しまり強い。
2　暗褐色・黄褐色土斑状。ローム粒を少量含む。
3　暗黄褐色砂質土。ローム粒霜降状。
4　黄褐色。ハードローム主体。
5　黒色。やや粘質。
6　橙色砂質土。ローム粒を多量に含む。

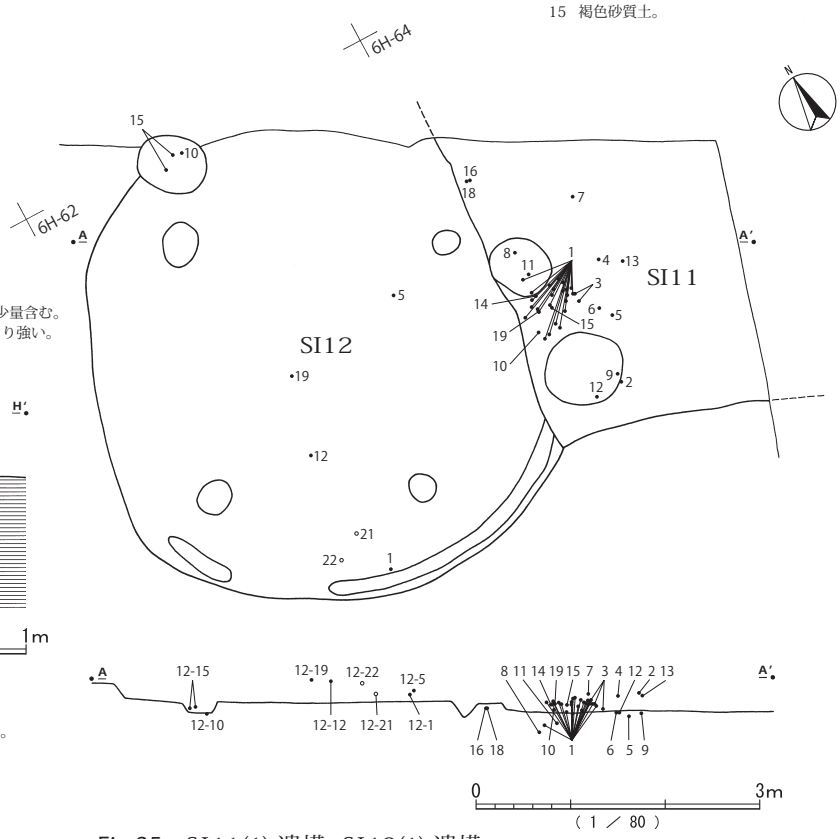


Fig.25　SI11(1) 遺構、SI12(1) 遺構

SI11

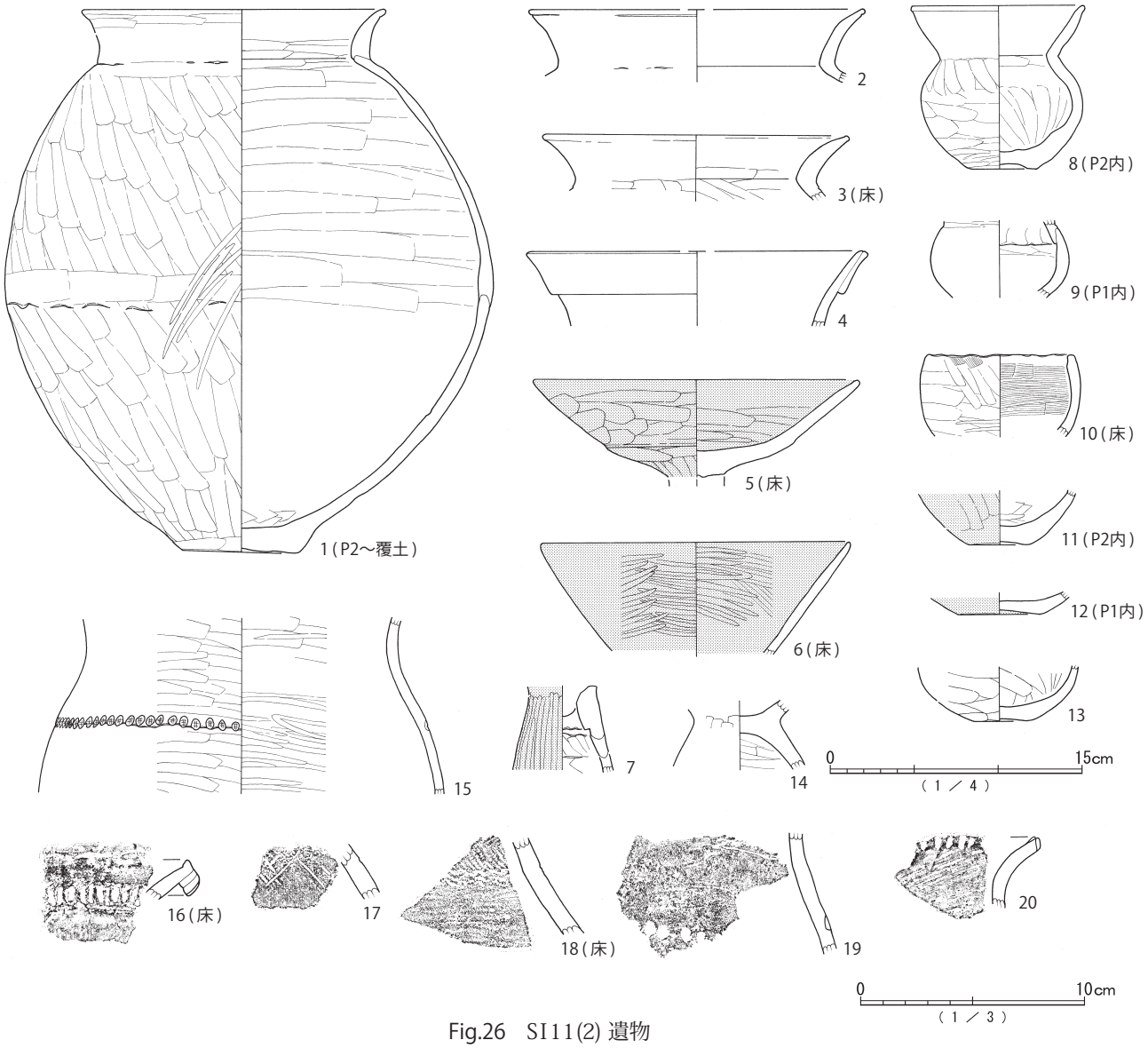


Fig.26　SI11(2) 遺物

しては不確実である。壁溝は検出できなかった。

出土土器は、和泉式を主体とする。P1・2周辺からまとまって出土し、1・8はほぼ完存する。本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI12（Fig.25・27、PL.15・74・91・99・100）

SI12は、A地点6H−72区他に所在する。SI11と重複し、SI11が新しい。SI11および確認調査坑によって、竪穴北辺部、東辺部が若干壊されている。黄白色粘土層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.18m程度である。竪穴平面形態はほぼ円形を呈し、全体規模は復元値で5.10m(主軸)×4.80m、掘形面積は21.49㎡を測る。主軸方位はN−27.0°−Eである。P1〜4は主柱穴位置にあるが、深さは0.12〜0.37mと浅い。他に、貯蔵穴等は検出できなかった。北西隅部のP5の帰属は明らかではない。主軸線上やや西側床面がよく焼けている。掘り込み範囲は明確ではないが、炉と推定できる。床硬化面・壁溝とも部分的、断続的であった。床面直上、竪穴中央部付近

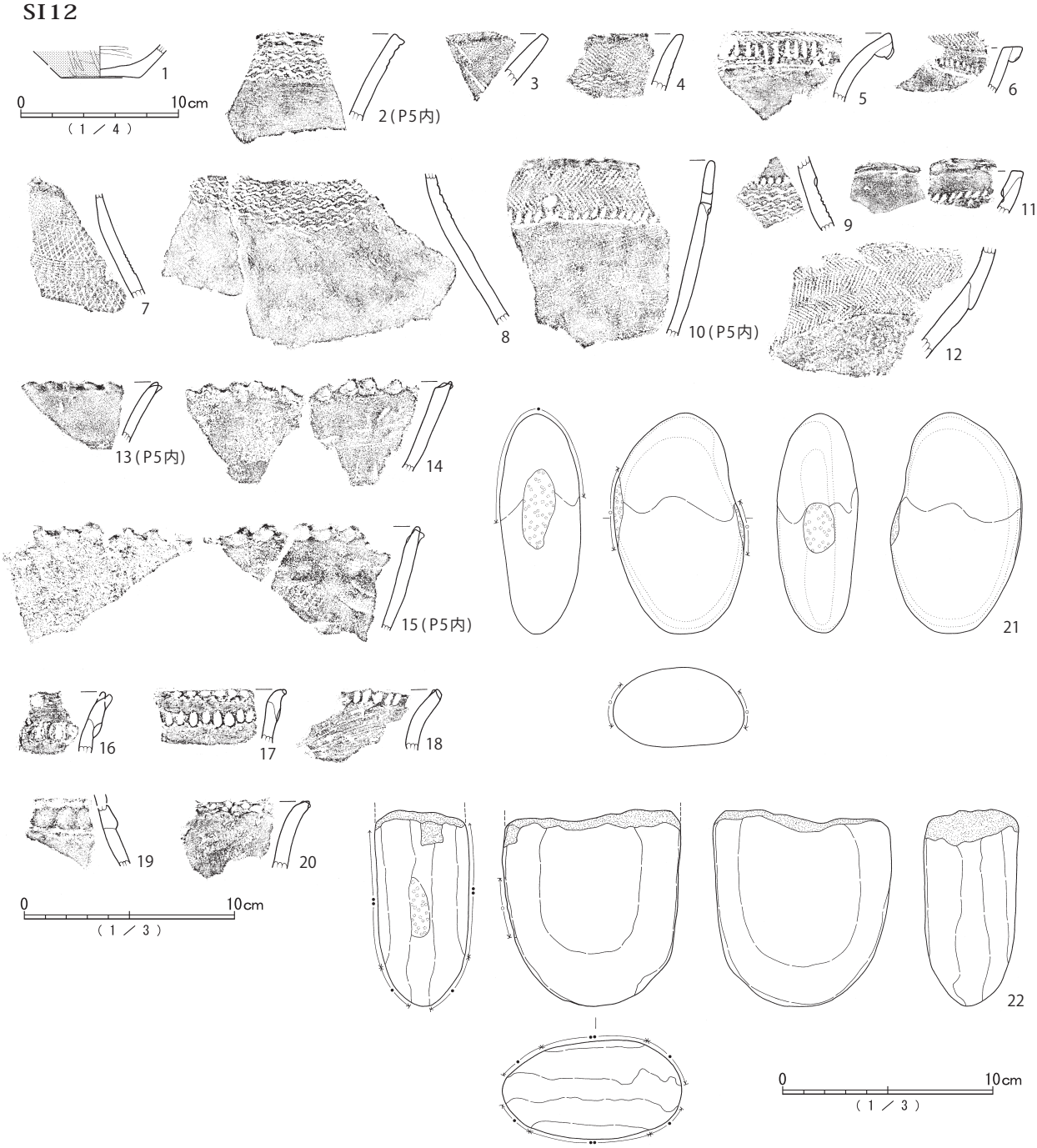


Fig.27　SI12(2) 遺物

に炭化物、西壁際に焼土の堆積が認められた。火災に遭った可能性が高い。

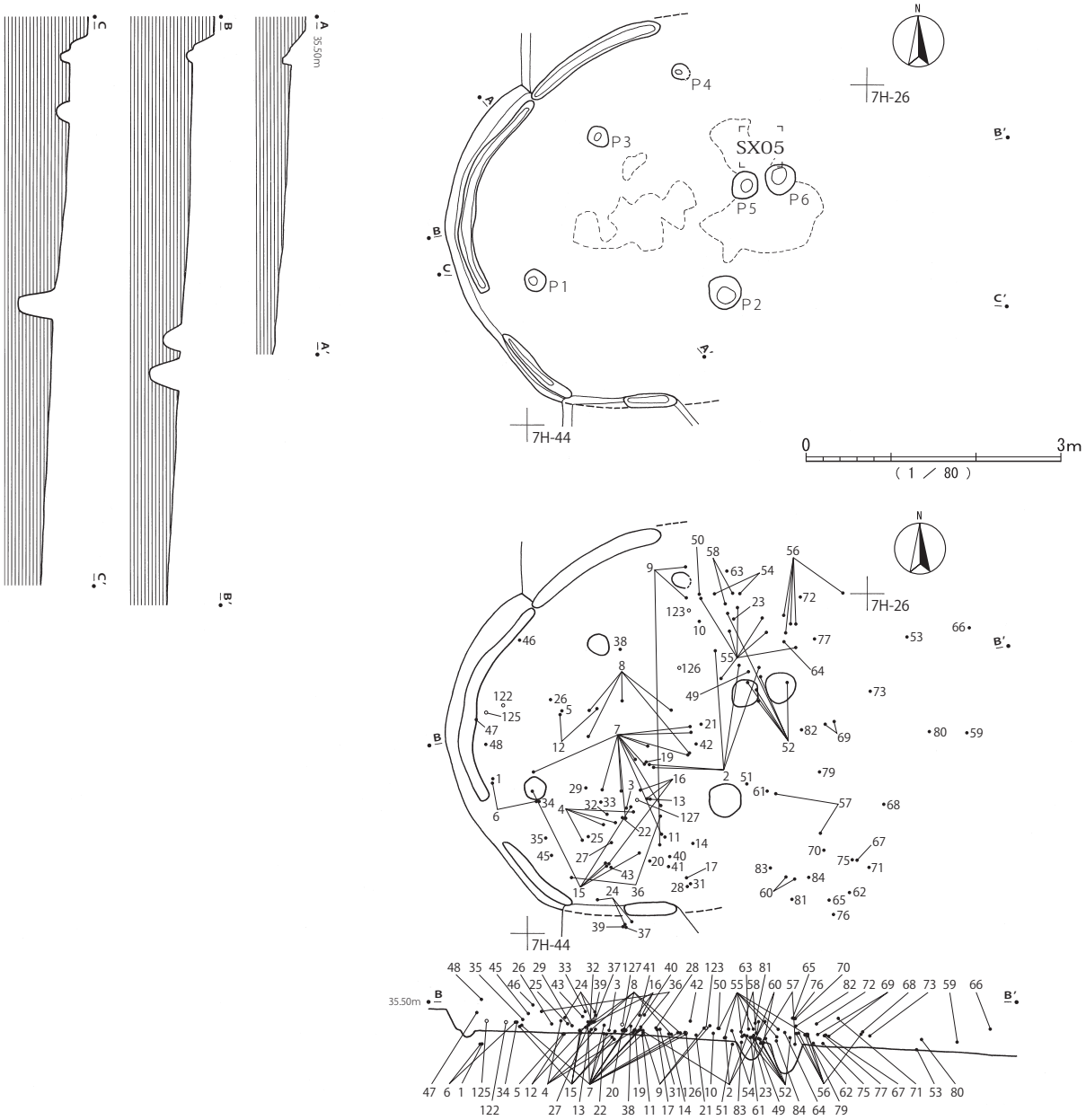
出土土器は、いずれも小破片ではあるが、時期的には限定される。P5内出土を含め、宮ノ台式終末段階に比定できる。21は磨敲石、22は磨石である。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1c期と推定する。

SI13（Fig.28～33、PL.5・15・41・42・74・75・91・92・99・100・102）

SI13は、A地点7H−24区他に所在する。西端部で黄白色粘土層からローム層を確認面とするが、床面の大半は暗褐色土層中にあり、東側範囲は明確にとらえることができなかった。竪穴住居跡との

SI13



床面付近

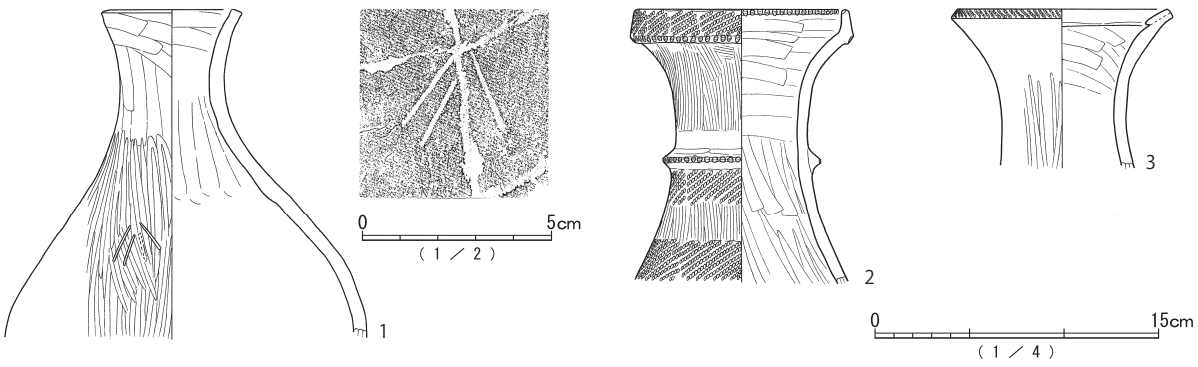


Fig.28　SI13(1) 遺構遺物

SI13
床面付近

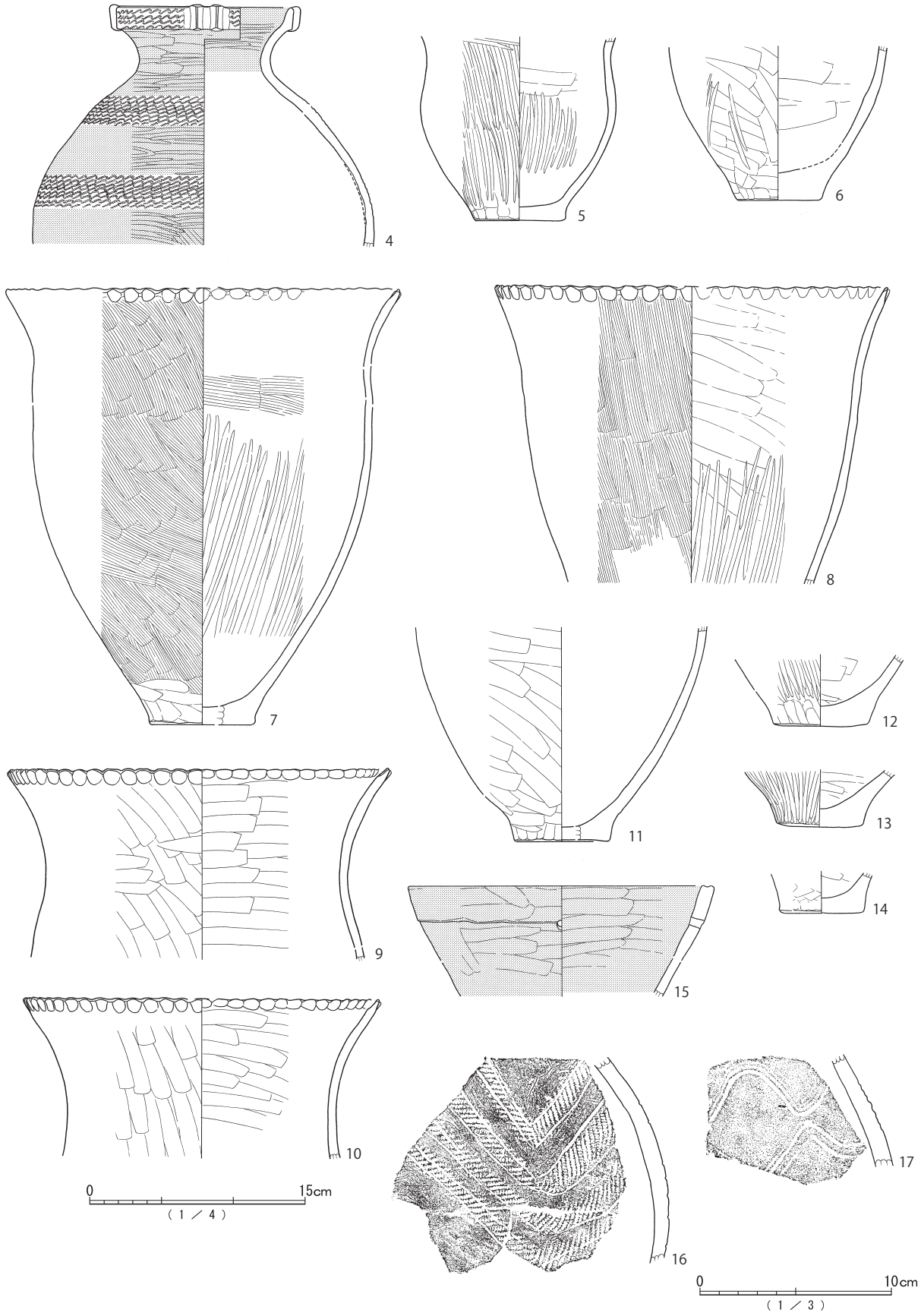
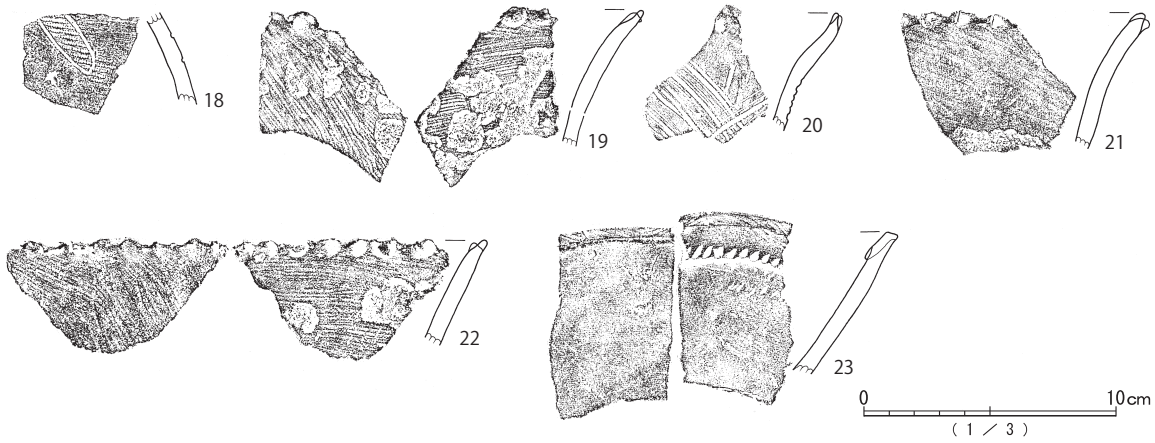


Fig.29　SI13(2) 遺物

SI13

床面付近



覆土下層

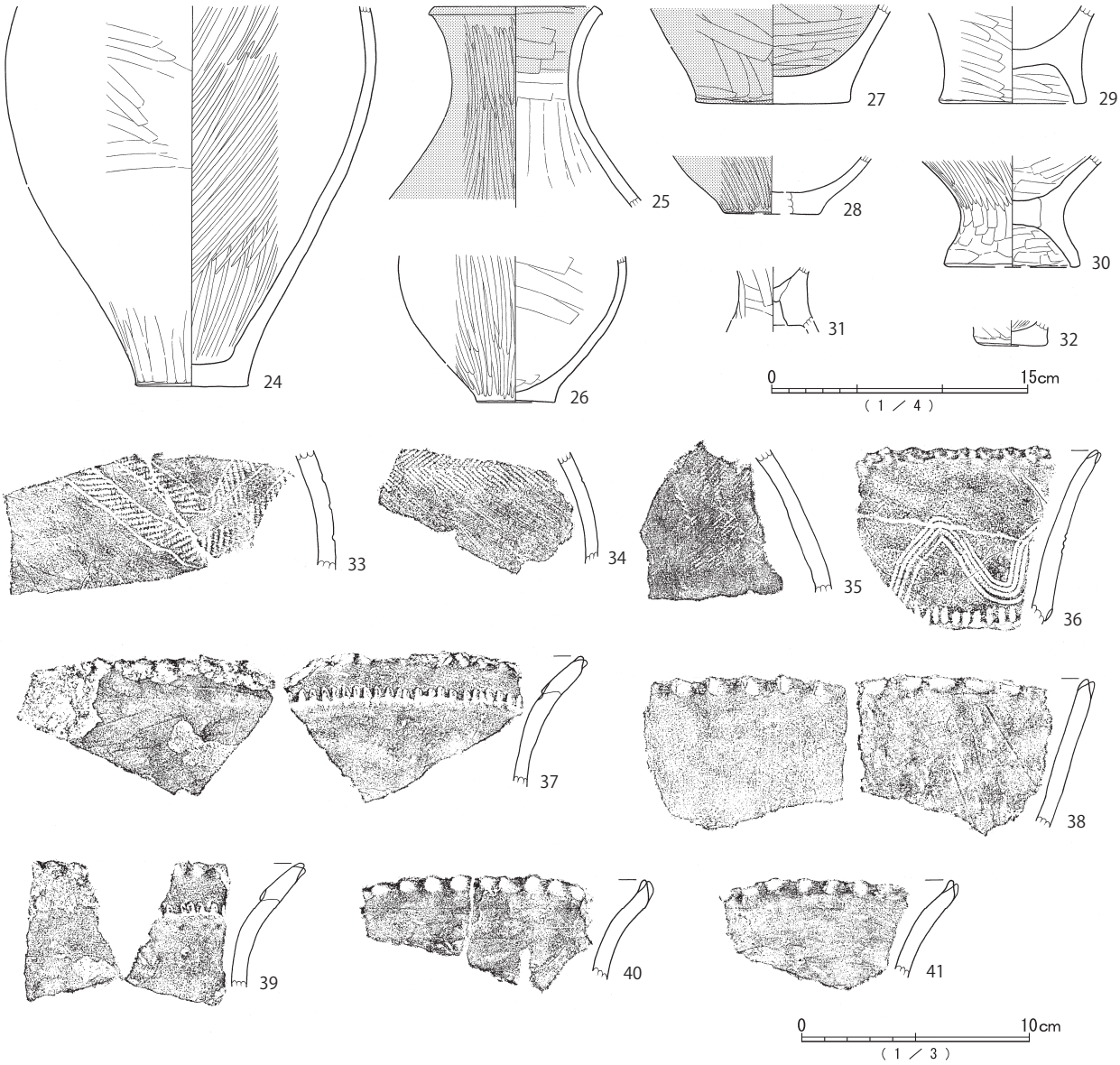
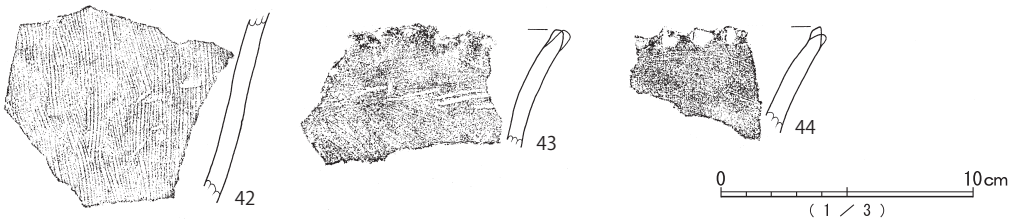


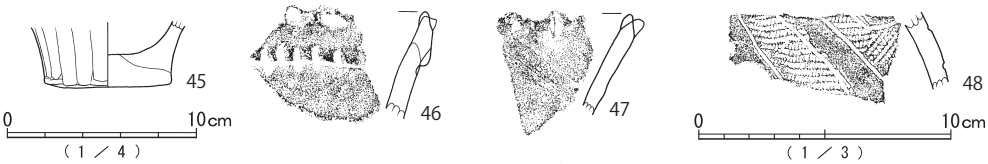
Fig.30　SI13(3) 遺物

SI13

覆土下層



覆土上層



東側

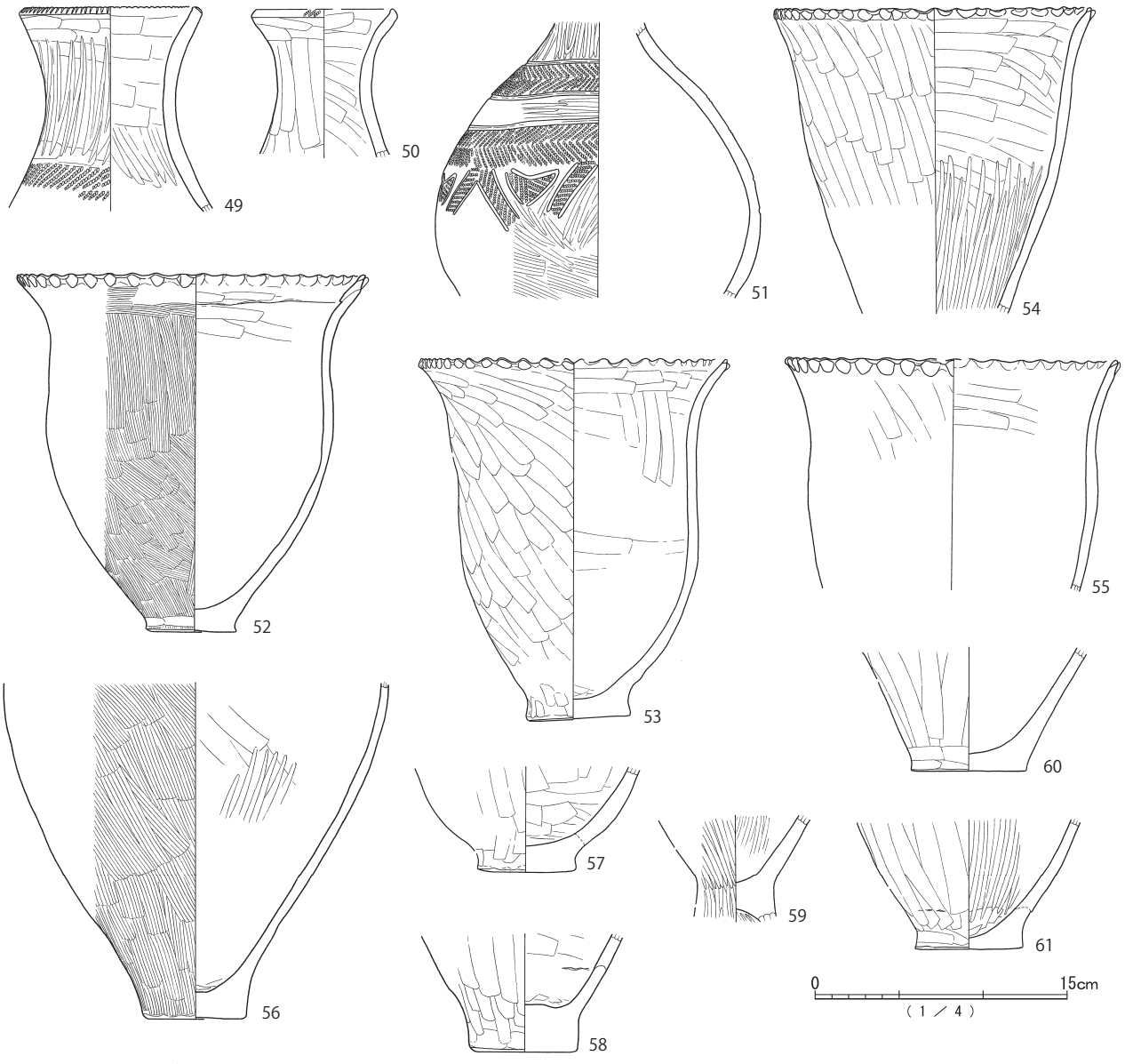


Fig.31　SI13(4) 遺物

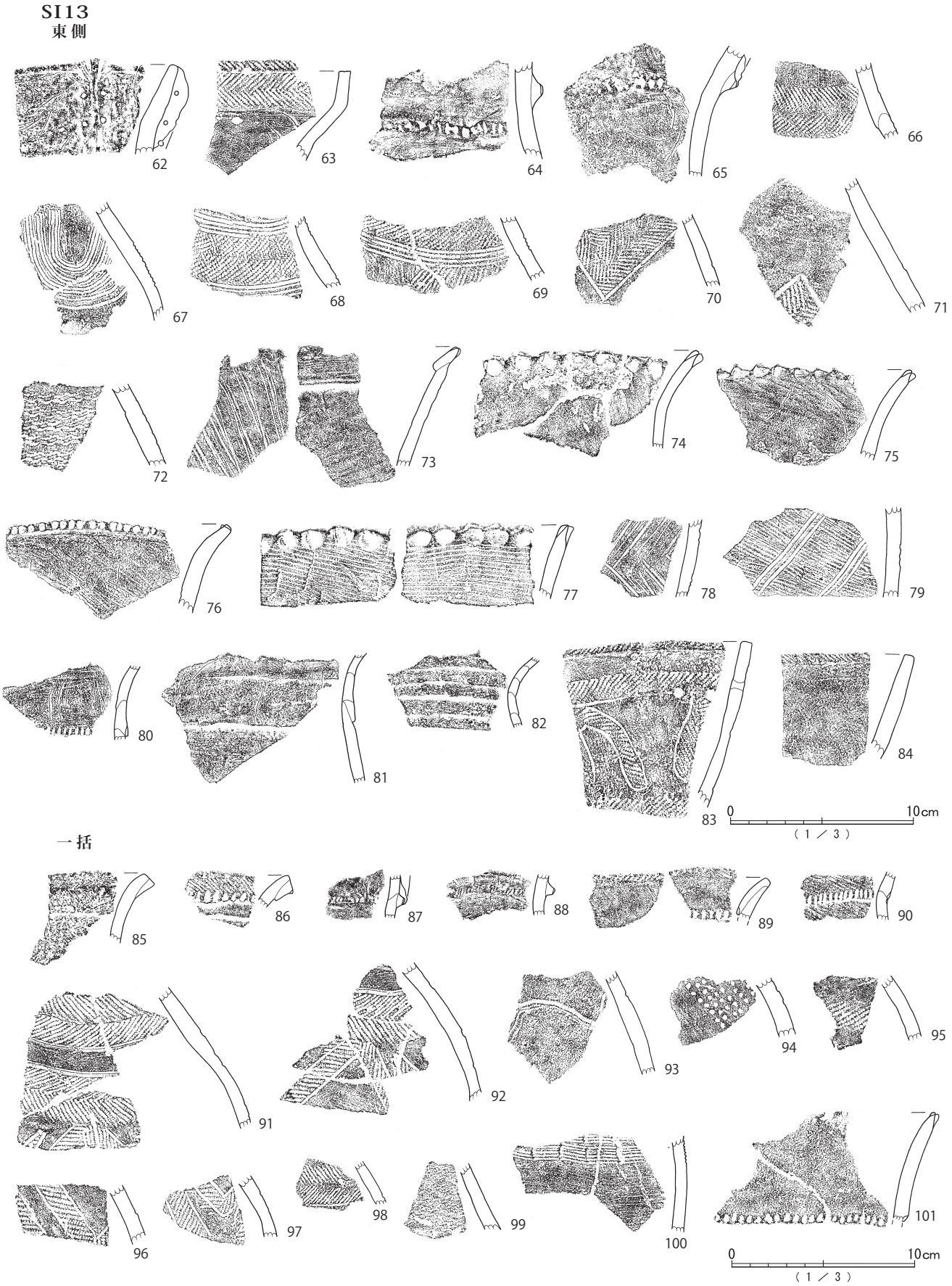
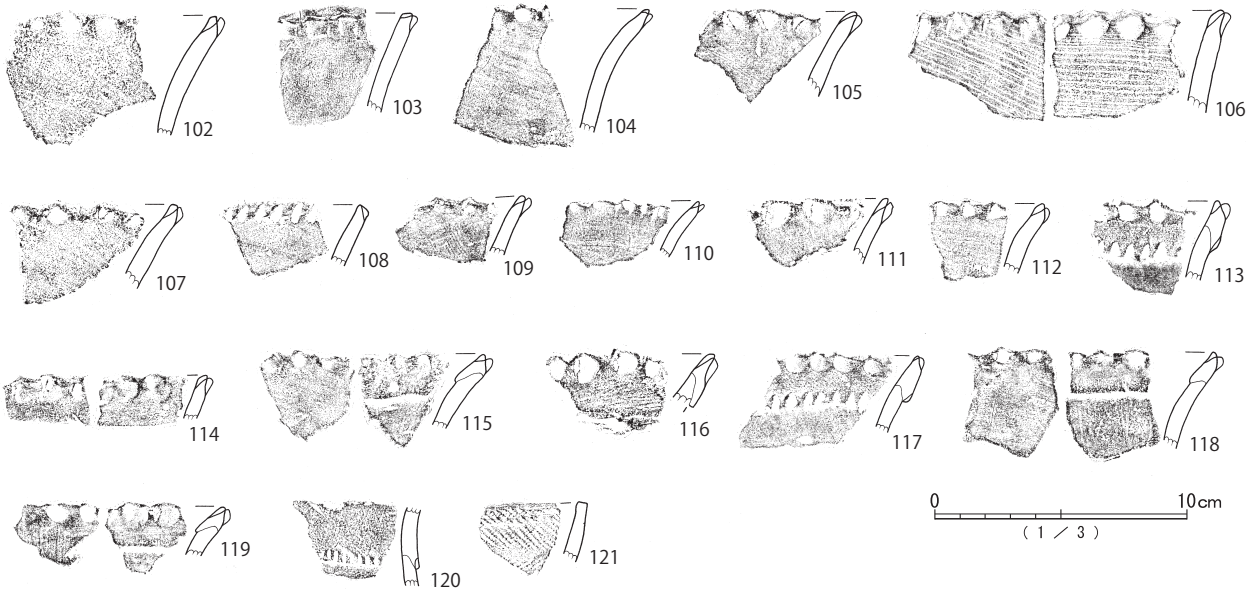


Fig.32　SI13(5) 遺物

SI13
一括



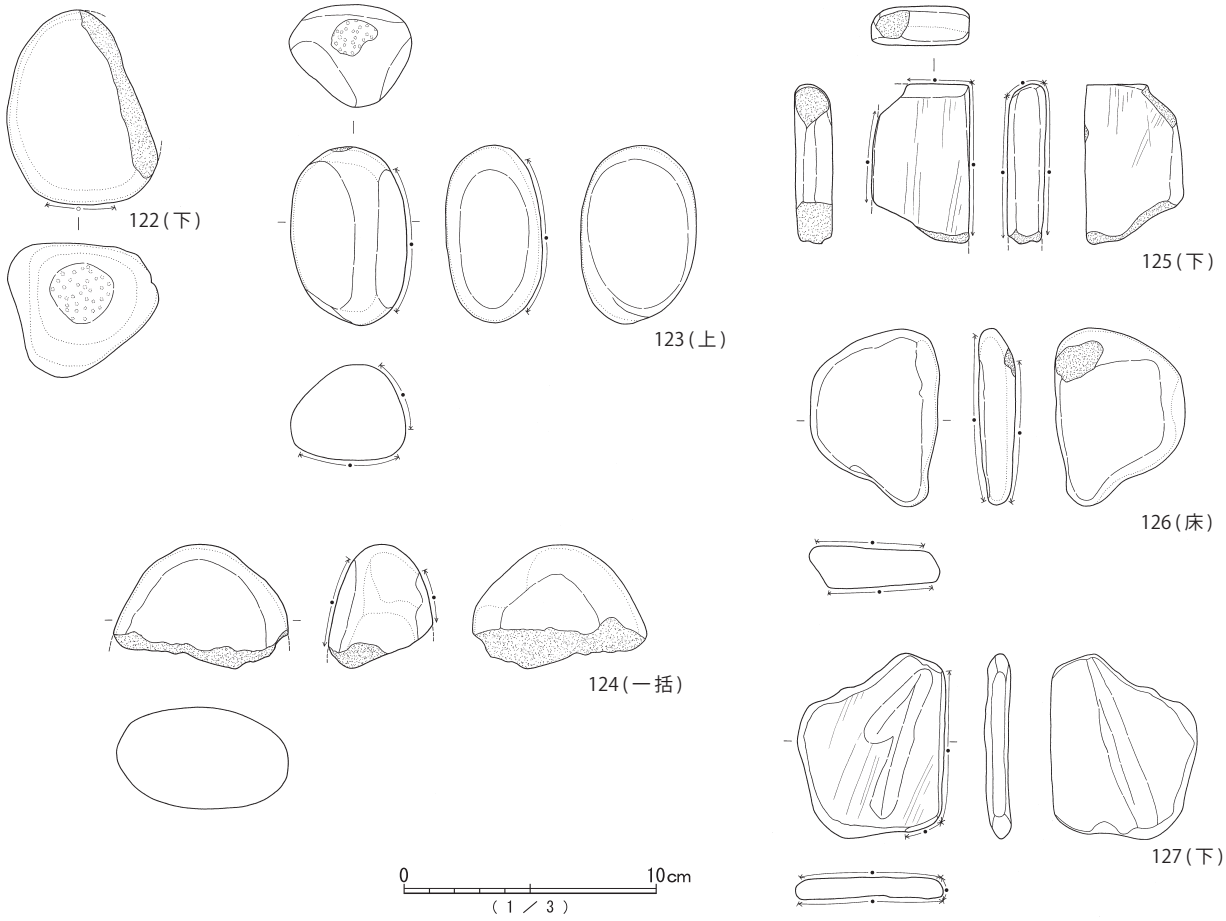


Fig.33　SI13(6) 遺物

重複は認められなかったが、覆土内に、和泉式期の集石遺構SX05がある。また、後述するように、遺物の出土高、分布範囲から、本遺構南東側に接して、別の竪穴が存在していた可能性がある。確認面からの深さは、最大で0.29m、竪穴規模は、南北遺存部で4.52mを測る。主軸方位は不明。Pitは、P2・4・6が深さ0.5m以上を測るが､配置から主柱穴は特定できない。炉も検出できなかった。壁溝は、壁遺存部分でほぼ確認できる。

遺物は、覆土および暗褐色土層中から多量に出土している。本来の遺物集中は、範囲を南東側に広げているが(Fig.6)、掲載遺物は、竪穴平面形態をほぼ円形に復元して抽出した。東半部では、西半部床面高より下からも多量の土器が出土しており、別の竪穴が存在した可能性も否定できない。したがって、すべてを本遺構にともなうものと考えることは難しい。ただし、土器型式による判断では、宮ノ台式終末段階を中心とし、地点による時期段階差は明確ではない。

出土土器では、1の壺形土器胴部に焼成前の線刻が認められた。122は敲石、123は磨敲石、124は磨石、125～127は砥石である。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1c期と推定する。

SI14（Fig.34～41、PL.5・16・42・43・44・75・76・77・92・93・99・100・102・103・104）

SI14は、A地点6H−99区他に所在する。竪穴範囲の2/3以上は調査区外に展開する。東側で方形周溝墓SS01北溝と推定する土坑状の掘り込みと重複し、その重複部上部で、弥生時代終末期の小形壺形土器を多数出土したSX01がさらに重なる。新旧関係は、SX01が最も新しい。SS01との関係については、調査区土層断面の所見にもとづくならばSS01が新しいが、SI14覆土の焼土がSS01内におよんでいることなど不確実な点もある。

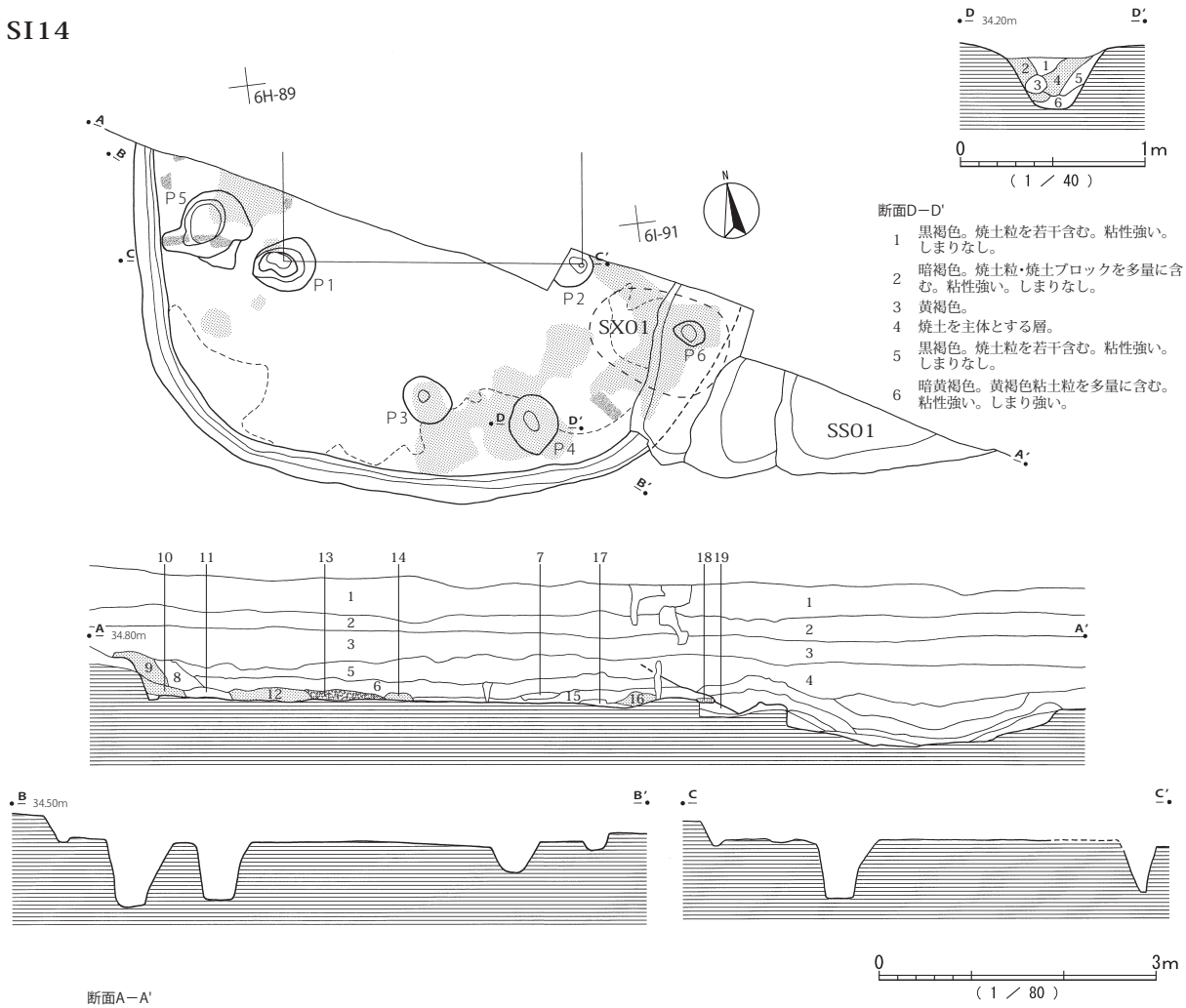
黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で約0.3mを測る。竪穴平面形態は、南北を主軸とする胴張り隅丸長方形と考えられ、東西方向で復元長約6.50m、推定面積は約50.0㎡を測る。主軸方位は、N−7.0°−Eである。P1・2は、主柱穴南列である。P1が深さ0.59m、P2が深さ0.55mを測る。P3は出入口施設、P4は貯蔵穴と推定する。壁溝は全周する。壁際床面直上を中心に、焼土・炭化物の堆積が認められた。火災に遭った可能性が高い。焼土はP4内にも認められ、火災時P4が開口していたことを裏付ける。

土器は、宮ノ台式を中心にまとまって出土した。挿図上の上下層の区分は、層厚20cmを基準とした区分であるが、実際に5層を間層として上下に分かれる分布傾向をみることができる。上層には久ヶ原式が混在する。床面付近からの出土は限られるが、南東隅部P4周辺の1・3～6は、遺存遺物の可能性がある。P1から出土した10は、他に破片多数が存在するものの、磨滅のため復元できなかった。土器以外の出土遺物は、133が土製の丸玉、134は細身の磨製石斧である。135・137・141は敲石、136・138は磨石、139・140は軽石製品、142は砥石である。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1b期と推定する。

SI15（Fig.42～48、PL.6・16・44・45・77・80・89・93・99・100・102・103・104・105・106）

SI15は、A地点7H−49区他に所在する。SI16・18、SD05と重複し、本遺構に対してSI16・SD05が新しく、SI18との新旧関係は明らかではない。西側は黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とするが、東側はローム面まで達していない。確認面からの深さは、北壁側で最大約0.08mであるが、遺構確認面より上部で多量の遺物が出土したため、遺物分布図は表土下より作成している。竪



断面D－D'
1 黒褐色。焼土粒を若干含む。粘性強い。しまりなし。
2 暗褐色。焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。粘性強い。しまりなし。
3 黄褐色。
4 焼土を主体とする層。
5 黒褐色。焼土粒を若干含む。粘性強い。しまりなし。
6 暗黄褐色。黄褐色粘土粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。

断面A－A'
1 表土。
2 暗褐色。5mm大の茶褐色スコリアを少量含む。粘性強い。しまり強い。
3 暗褐色。3mm大の赤色スコリアを少量含む。粘性強い。しまり強い。
4 黒褐色。ローム粒・炭化物を少量含む。粘性強い。しまり強い。
5 暗褐色。ローム粒を少量含む。粘性弱い。しまり強い。
6 暗褐色。ローム粒を少量含む。粘性弱い。しまり弱い。
7 黒褐色。ローム粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
8 暗褐色。ローム粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
9 暗褐色。ロームブロック・焼土粒を多量に含む。粘性弱い。しまり強い。
10 暗褐色。ロームブロック・焼土粒・炭化物を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
11 暗褐色。ロームブロック主体。粘性弱い。しまり強い。
12 暗褐色。焼土粒・炭化物を多量に含む。粘性非常に強い。しまり強い。
13 暗褐色。ロームブロック・粘土ブロック・炭化物を多量に含む。粘性非常に強い。しまり強い。
14 暗褐色。焼土粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
15 黒褐色。ロームブロックをわずかに含む。粘性強い。しまり強い。
16 暗褐色。焼土粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
17 暗黄褐色。粘性強い。しまり強い。
18 暗黄褐色。硬質。貼り床。
19 暗褐色。粘性強い。しまり弱い。

Fig.34　SI14(1) 遺構

穴平面形態は方形を呈し、全体規模は8.80m（主軸推定）×7.90m、確認面掘形面積は68.90㎡を測る。主軸方位は、N－7.0°－Eである。主柱穴はP1・2～4・5であり、床面からの深さは1.0m前後を測る。P8・12は貯蔵穴の可能性がある。P12は柱穴状で、深さは1.08mを測る。本竪穴は、焼土・炭化物の堆積から、火災に遭ったことが推定できるが、P8・12内にも焼土の堆積が認められた。カマドは検出できなかった。炉は、主軸線上北側で検出されたがあまり焼け込んではいない。下部は柱穴状になり、5の杯形土器が出土している。床は、黄白色粘土ブロックを多量に含む貼り床である。とくに南西部側床面は、粘土ブロックが目立つ。

土器は、和泉式を主体として多量に出土しているが、破片資料が大半であり、床面付近の出土も限られる。平行タタキの須恵器甕もまとまって検出されたが、接合にはいたらなかった。土器以外の出土遺物は、102～104が滑石製模造品、107・108が滑石製臼玉である。107・108は竪穴西範囲

SI14

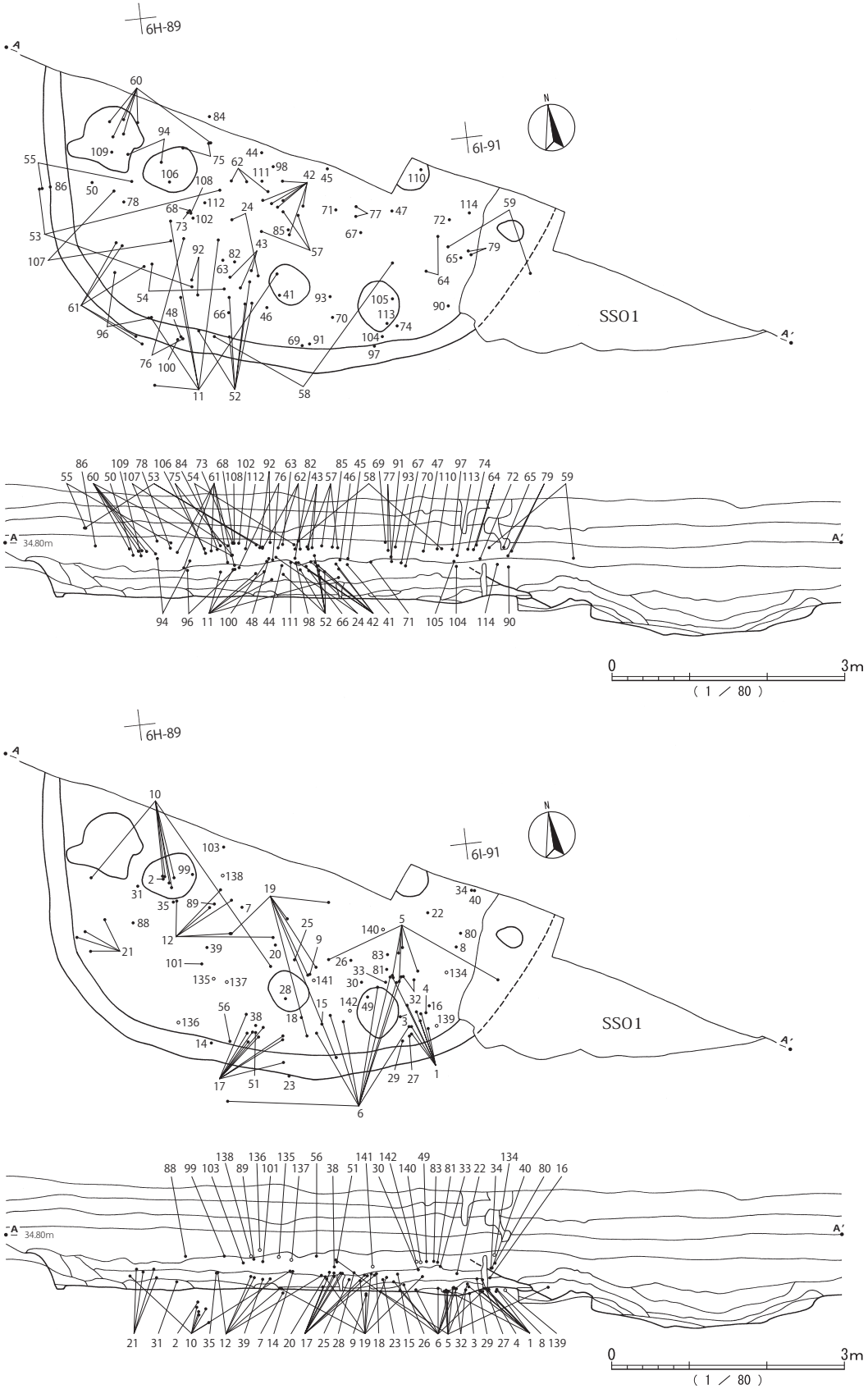


Fig.35　SI14(2) 遺構

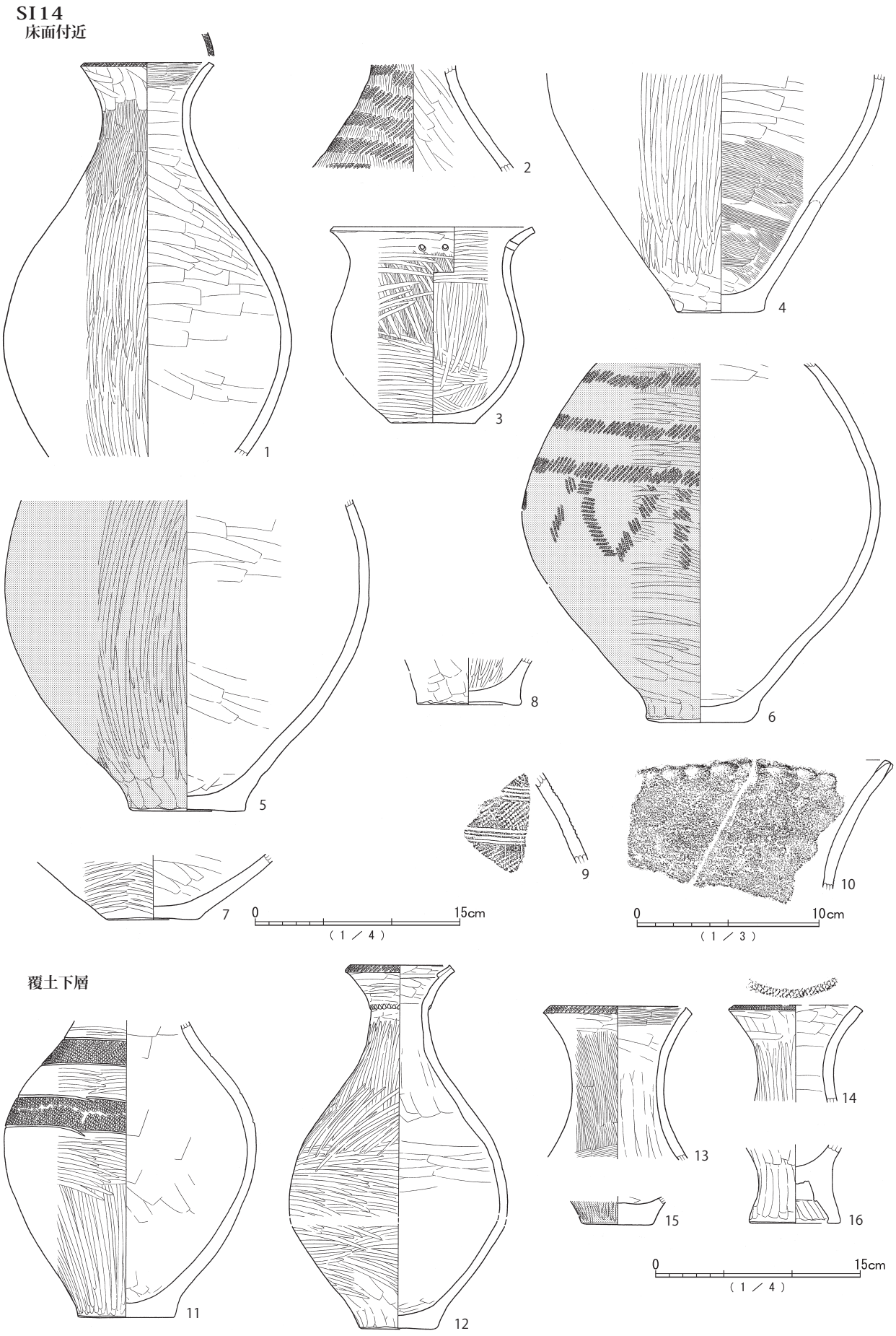
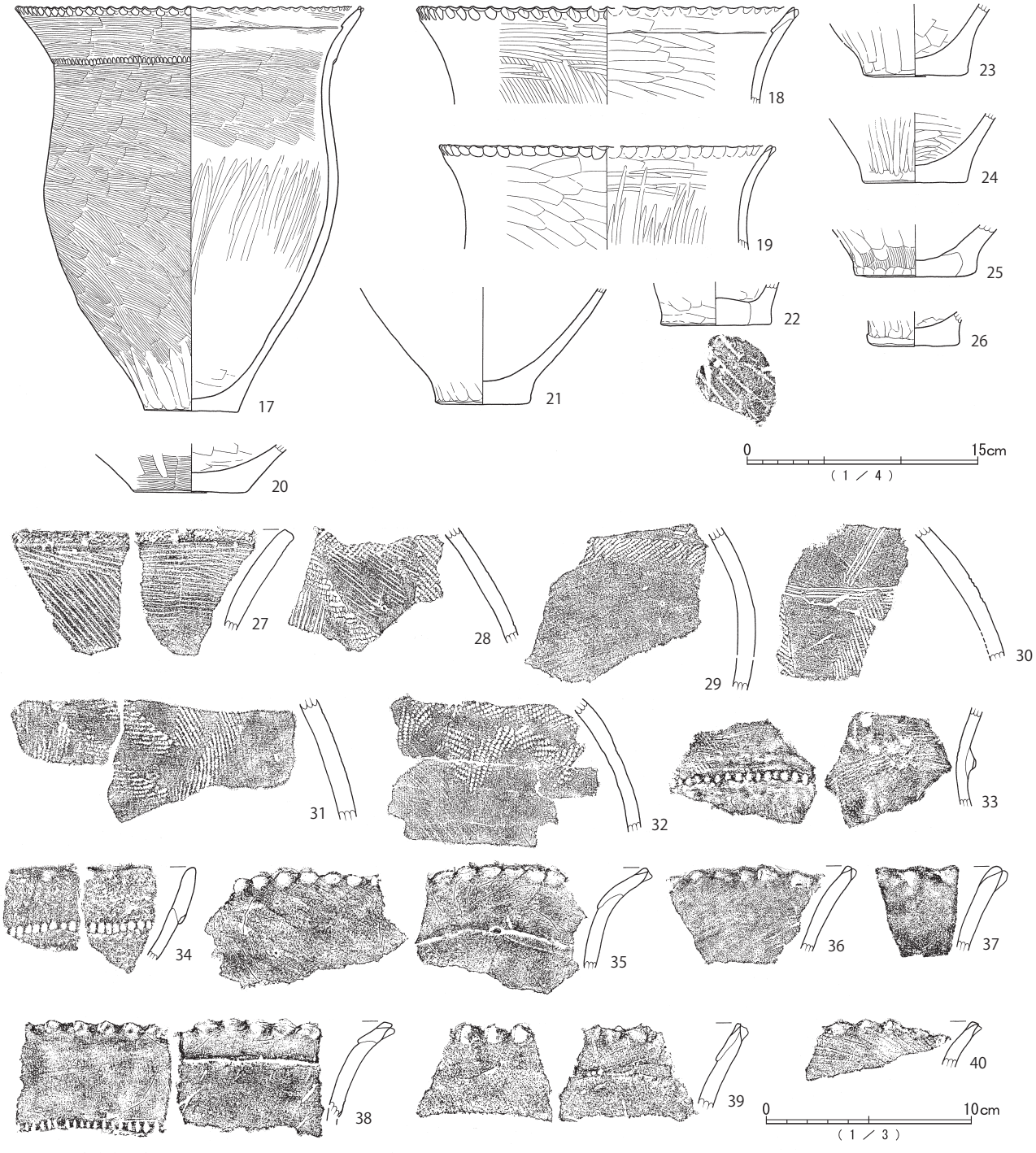


Fig.36　SI14(3) 遺物

SI14

覆土下層



覆土上層

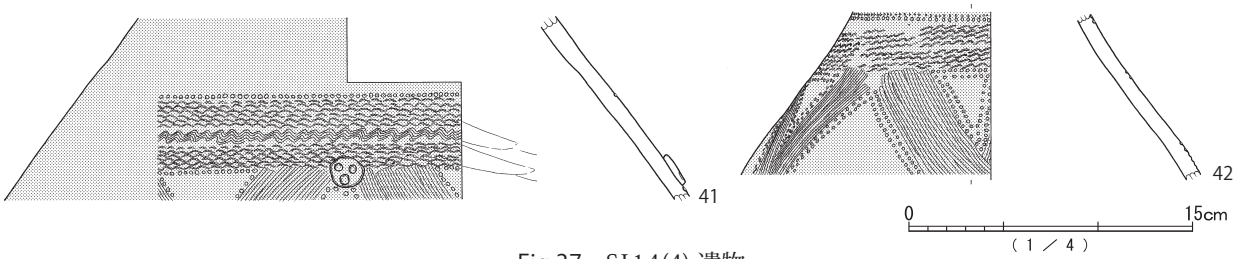


Fig.37　SI14(4) 遺物

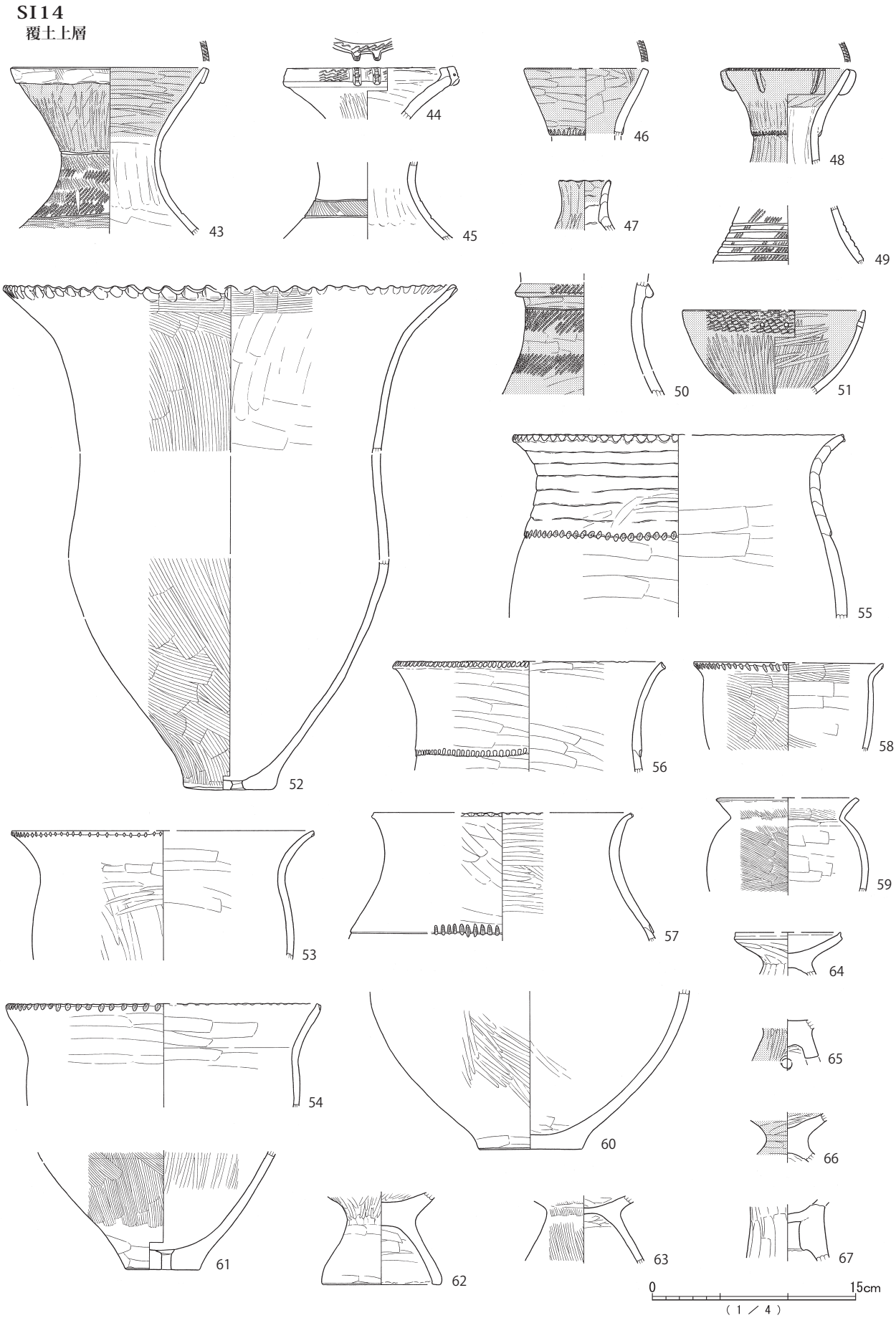


Fig.38　SI14(5) 遺物

SI14
覆土上層

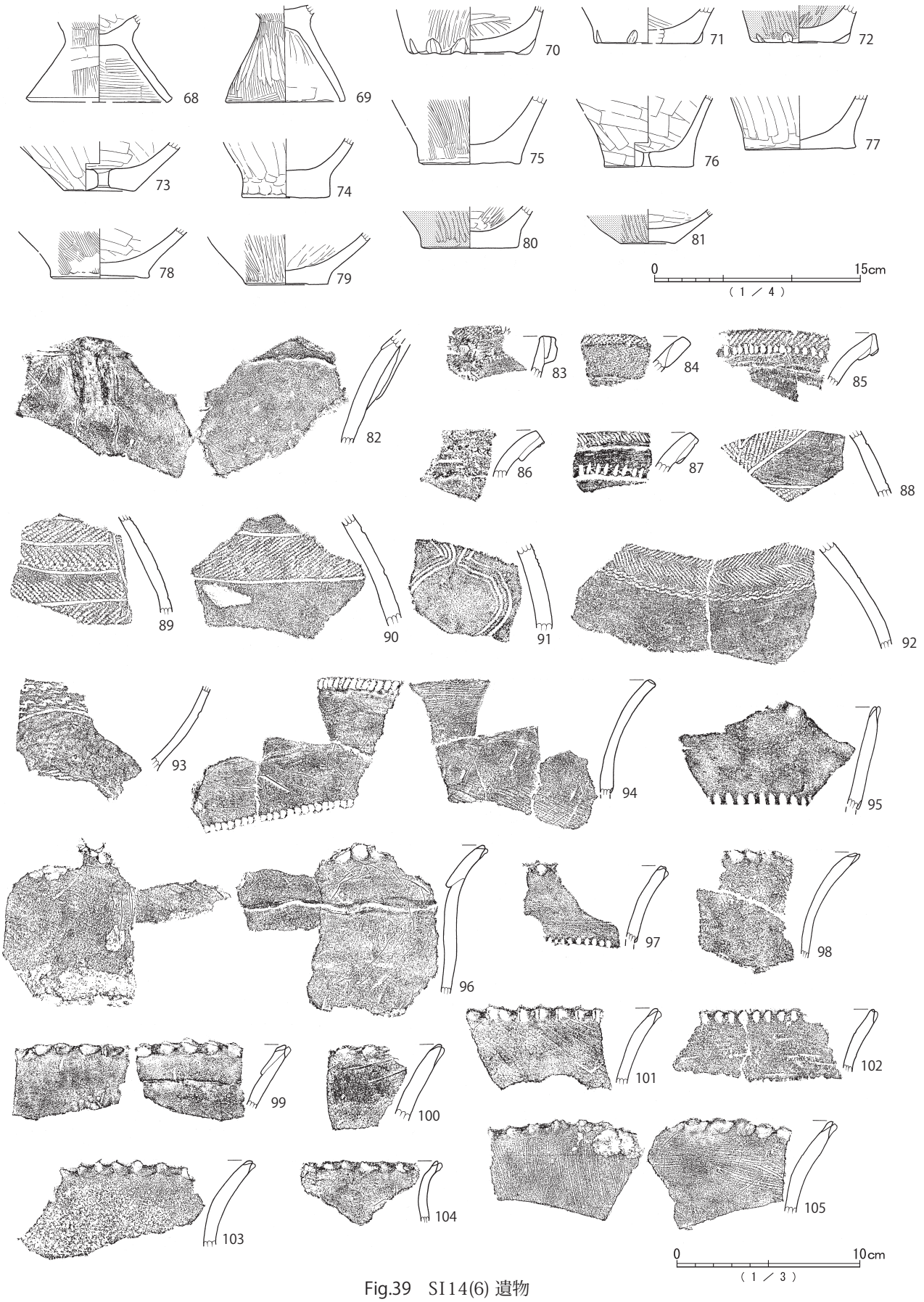
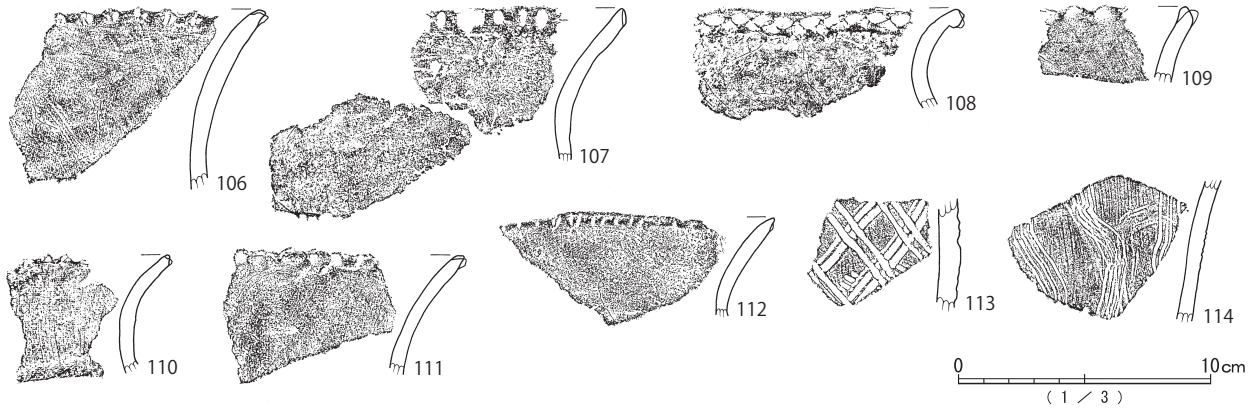


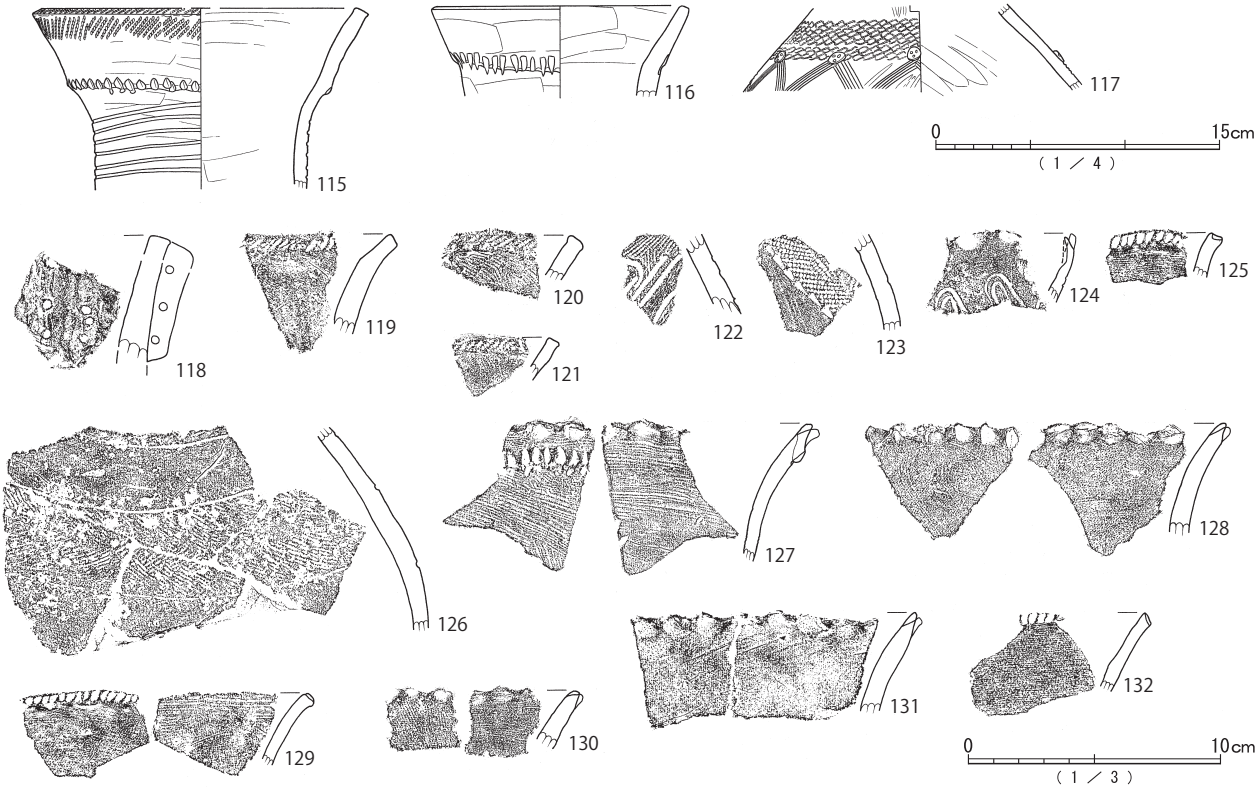
Fig.39　SI14(6) 遺物

SI14

覆土上層



一括



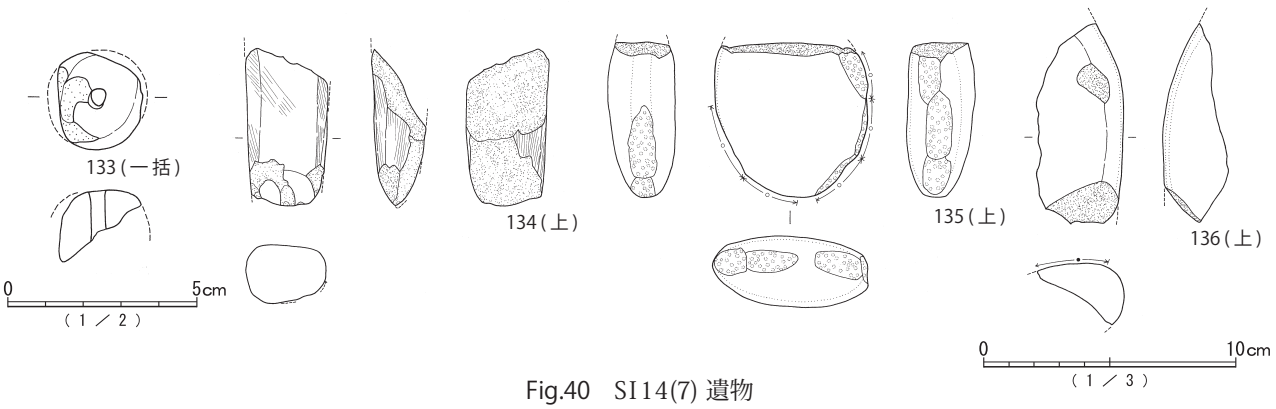


Fig.40　SI14(7) 遺物

SI14

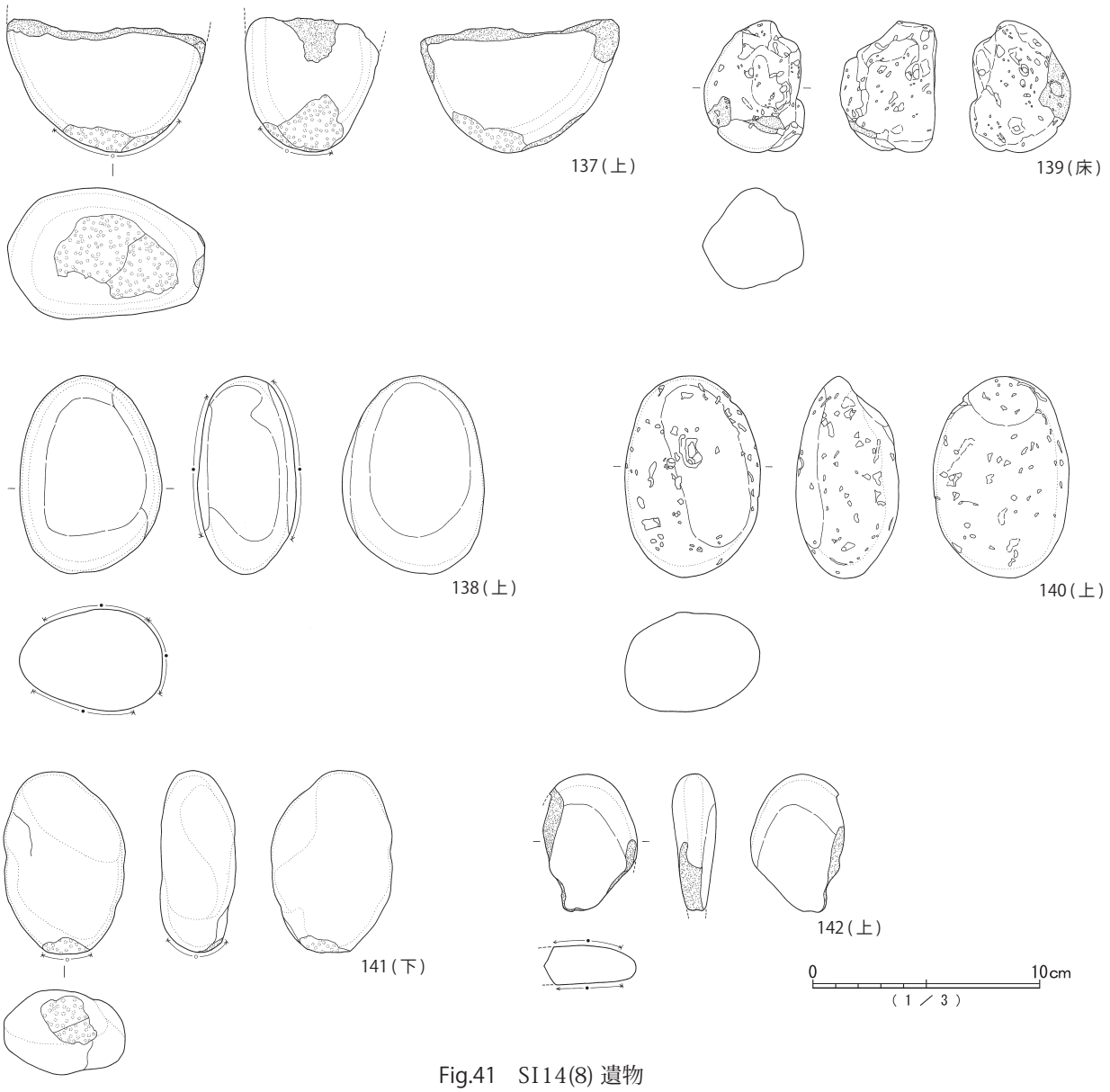


Fig.41　SI14(8) 遺物

外より出土したが、ここであつかっておく。105は、表裏面に木葉状の繊維質圧痕をもつ不明土製品、106は土製紡錘車である。109は片刃の磨製石斧であり、110も磨製石斧の基部と考える。111～114は砥石、115は軽石製品、116・117は敲石、118は磨石、119は磨敲石である。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI16（Fig.49・50、PL.6・16・17・45・46・80・81・90・105・106）

SI16は、A地点7I−61区他に所在する。SI15と重複し、本遺構が新しい。SI15床面との比高は、本竪穴が約0.06m低い。北東側でSI18とも重複するが、SI18は、竪穴範囲が不明確である。暗褐色土層を掘り込み面とし、ローム面まで達していない。竪穴範囲は、遺物・焼土・炭化物の出土状況、カマド・主柱穴の配置、土層断面の観察結果から復元した。ただし、焼土・炭化物の分布は、一部復元案範囲外におよんでいる。また、床硬化面もSI15との境界が明確ではない部分がある。竪穴平面形態は方形、東西軸長5.80m、確認面掘形面積は34.78㎡程度と推定する。主軸方位は、N−12.0°

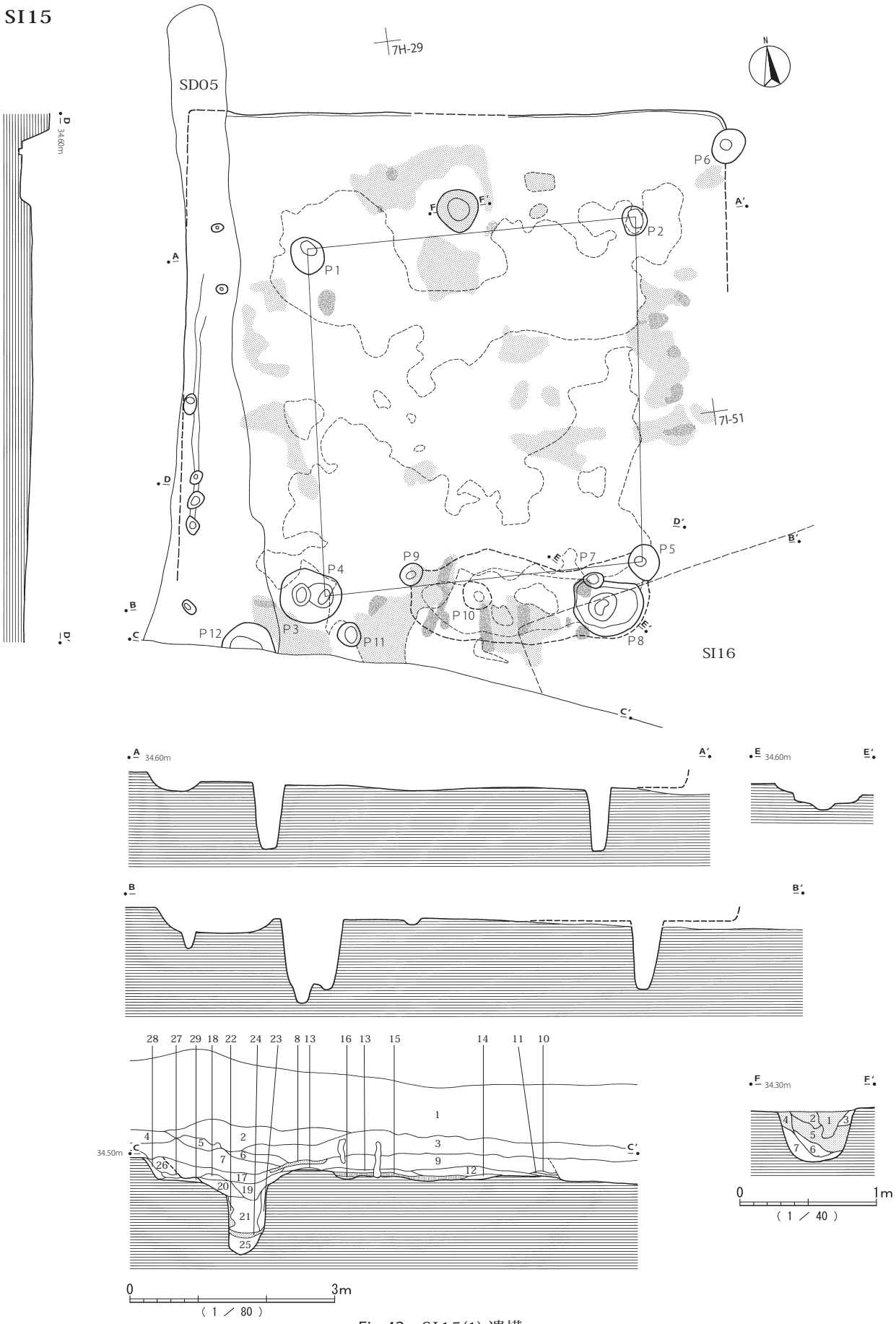
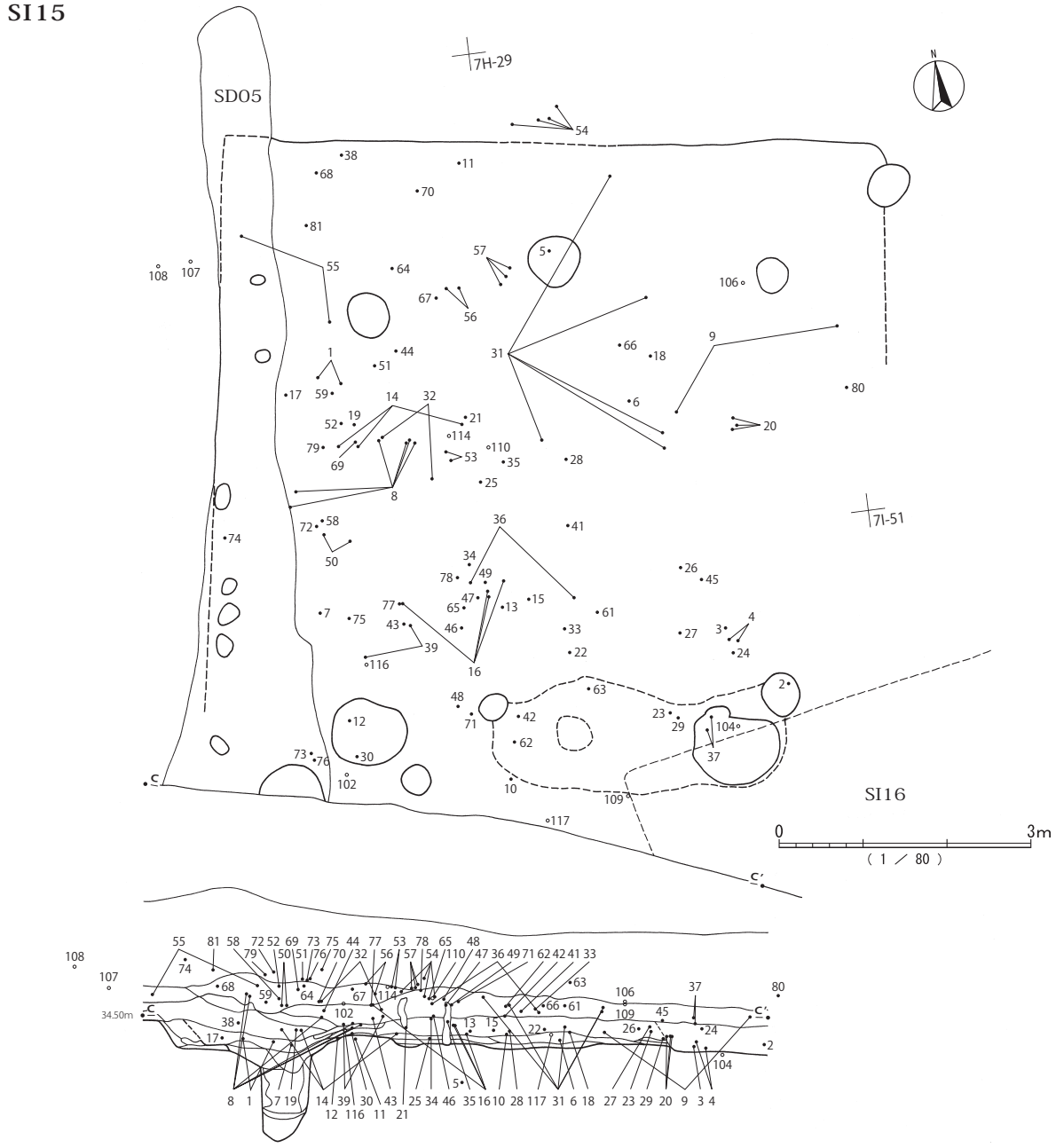


Fig.42　SI15(1) 遺構

SI15



断面C－C'

1　表土。灰褐色。
2　暗褐色。
3　暗褐色。しまり強い。
4　黒褐色。ローム粒を少量含む。
5　暗褐色。
6　暗褐色。炭化物を少量含む。
7　黒褐色。ローム粒・炭化物を少量含む。
8　黒褐色。焼土粒を多量に含む。
9　黒褐色。しまり強い。
10　黒褐色。ロームブロック・暗黄褐色粘土ブロックを少量含む。
11　黒褐色。暗黄褐色粘土ブロックを多量に含む。
12　暗褐色。ロームブロック・暗黄褐色粘土ブロックを多量に含む。
13　黒褐色。白色粘土粒を多量に含む。
14　暗褐色。ロームブロックを多量に含む。
15　黒褐色。暗黄褐色粘土ブロックを多量に含む。貼り床か。
16　黒褐色。ロームブロックを多量に含む。
17　暗褐色。炭化物を少量含む。
18　黒褐色。ローム粒・ロームブロックを少量含む。
19　暗褐色。炭化物を若干含む。
20　暗褐色。炭化物を若干含む。
21　黒褐色。
22　黒褐色。焼土を多量に含む。
23　暗褐色。ローム粒を多量に含む。
24　黒褐色。焼土を多量に含む。
25　黒褐色。
26　暗褐色。
27　黒褐色。ロームブロックを主体とする。
28　暗褐色。
29　暗黄褐色。

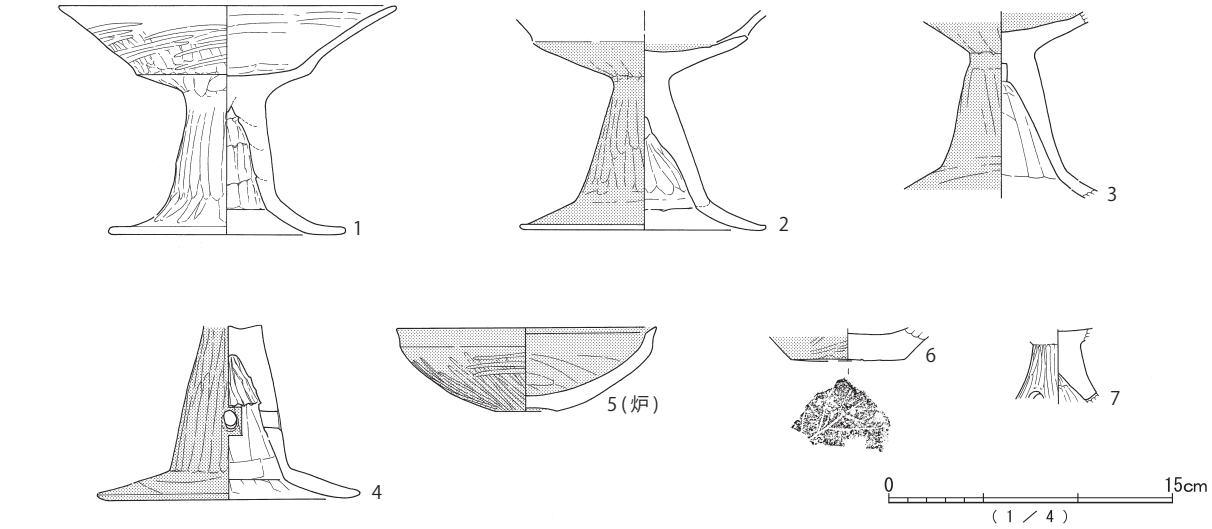
断面F－F'

1　黒褐色。ローム粒・焼土粒・炭化物を多く含む。
2　暗褐色。ローム粒・焼土粒・炭化物を多く含む。
3　暗黄褐色。焼土粒を若干含む。
4　暗褐色。焼土粒を多量に含む。しまり弱い。
5　黒色。著しく黒い。焼土粒を多量に含む。
6　暗褐色。
7　黒褐色。ロームブロックを若干含む。

Fig.43　SI15(2) 遺構

SI15

床面付近



覆土下層

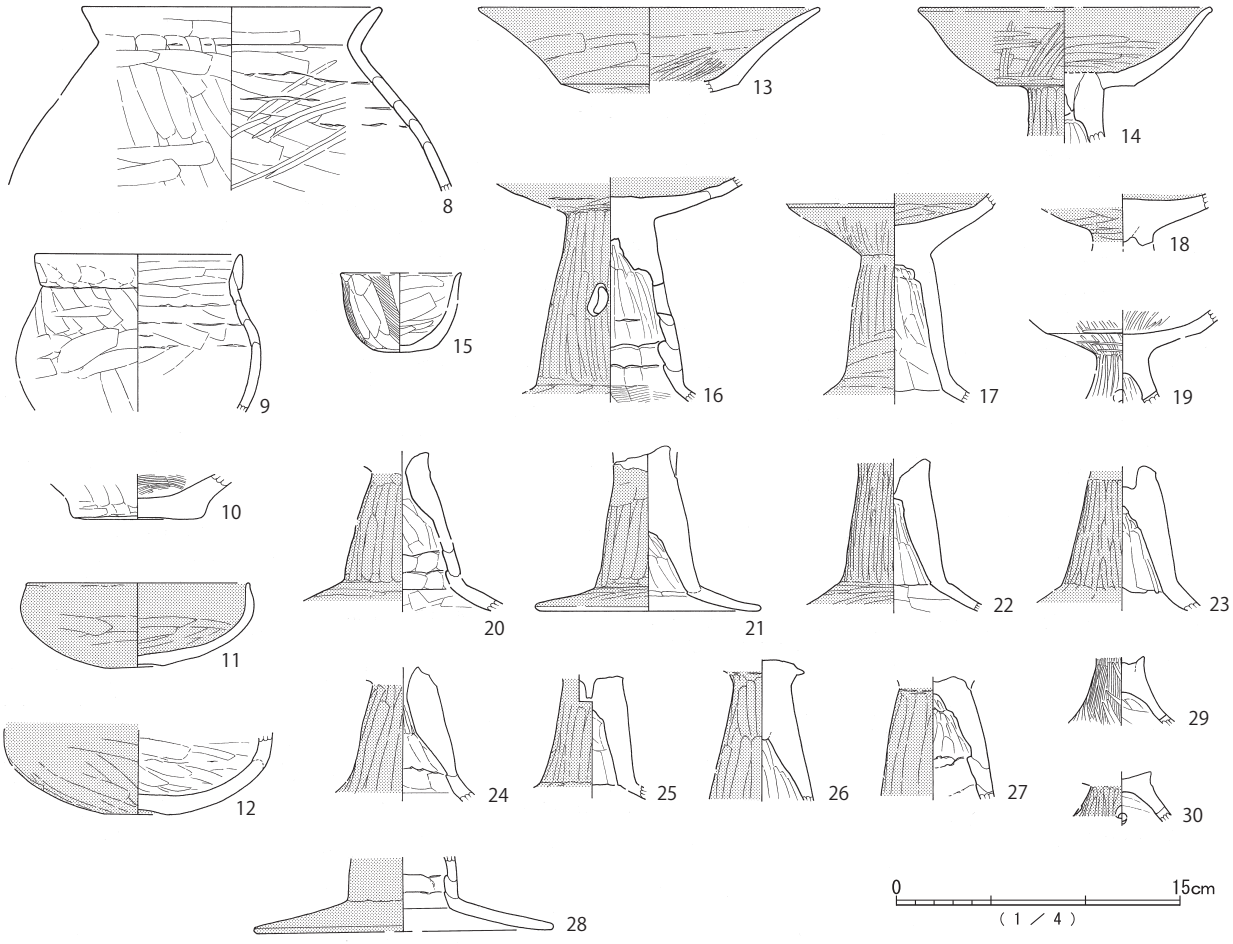
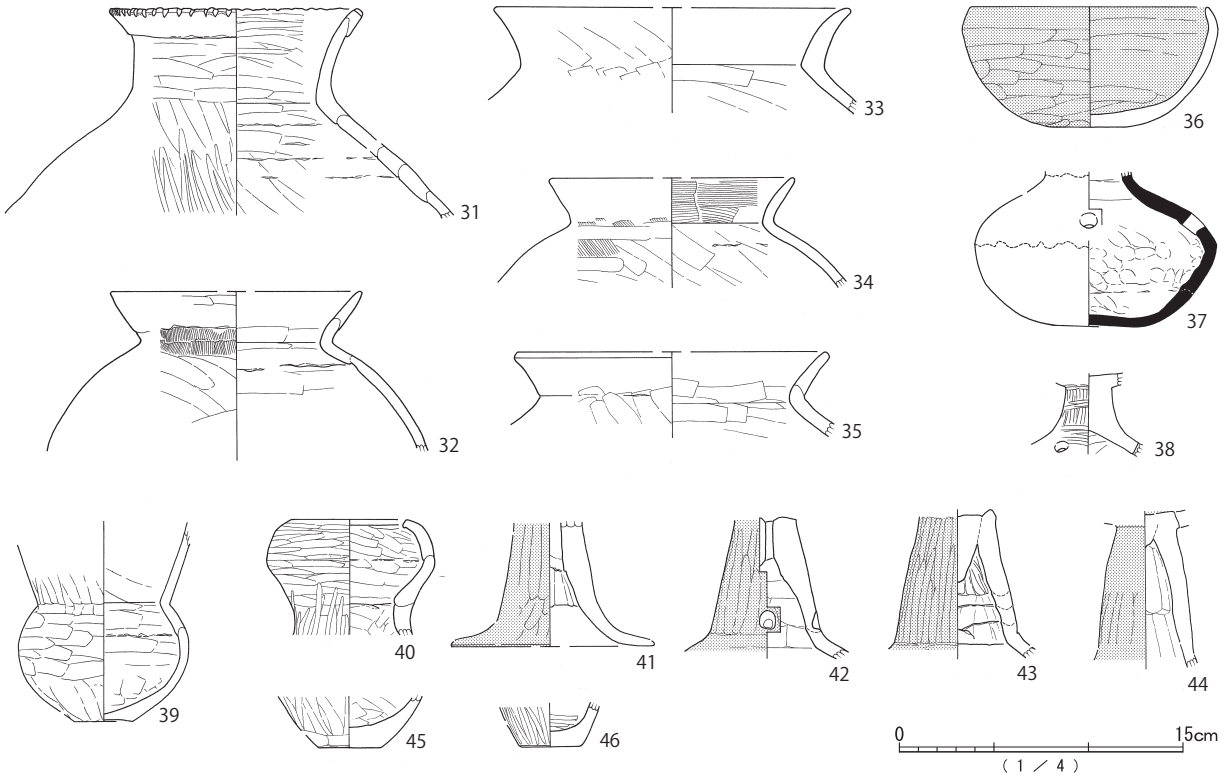


Fig.44　SI15(3) 遺物

SI15

覆土中層



覆土上層

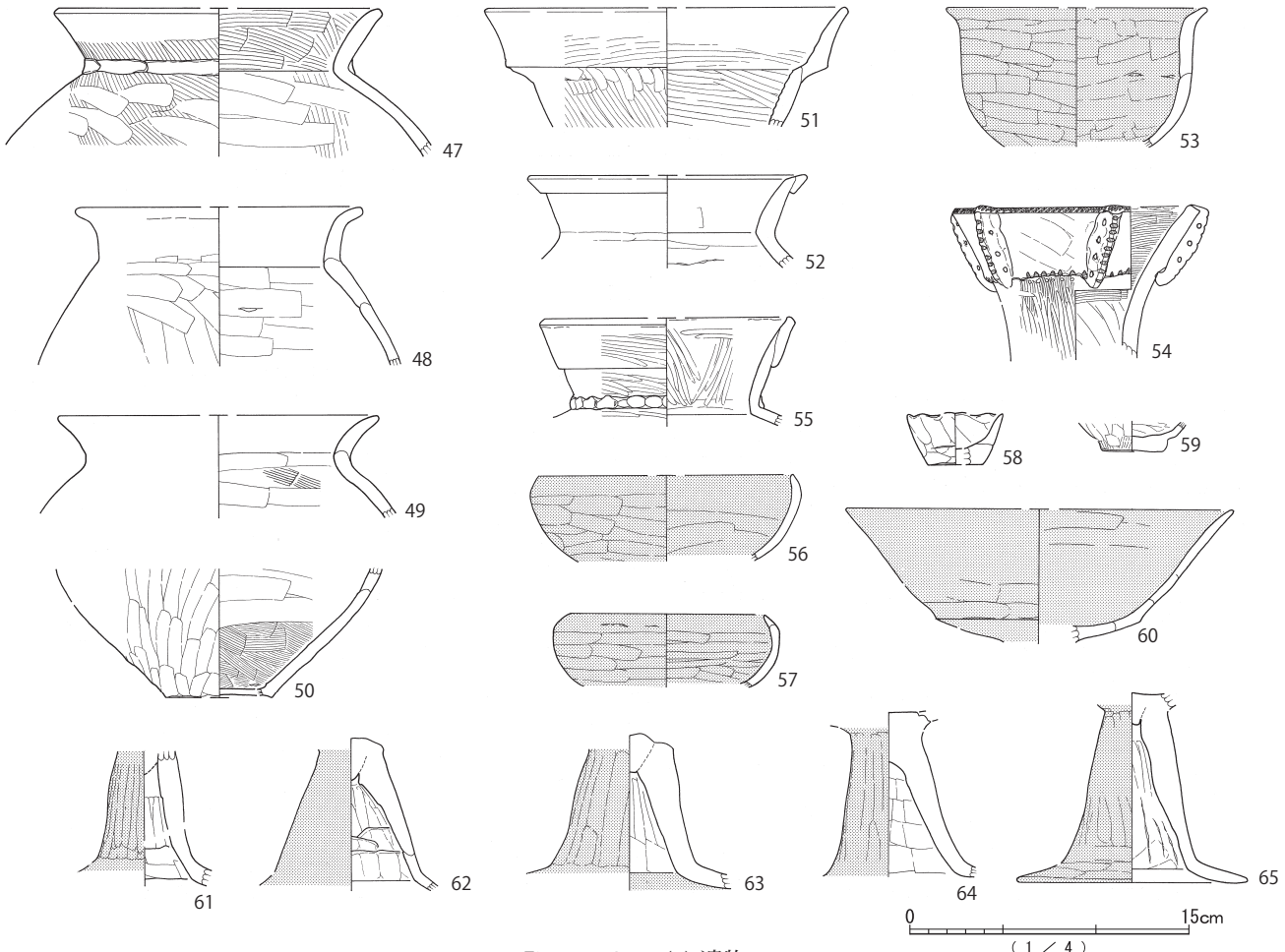


Fig.45　SI15(4) 遺物

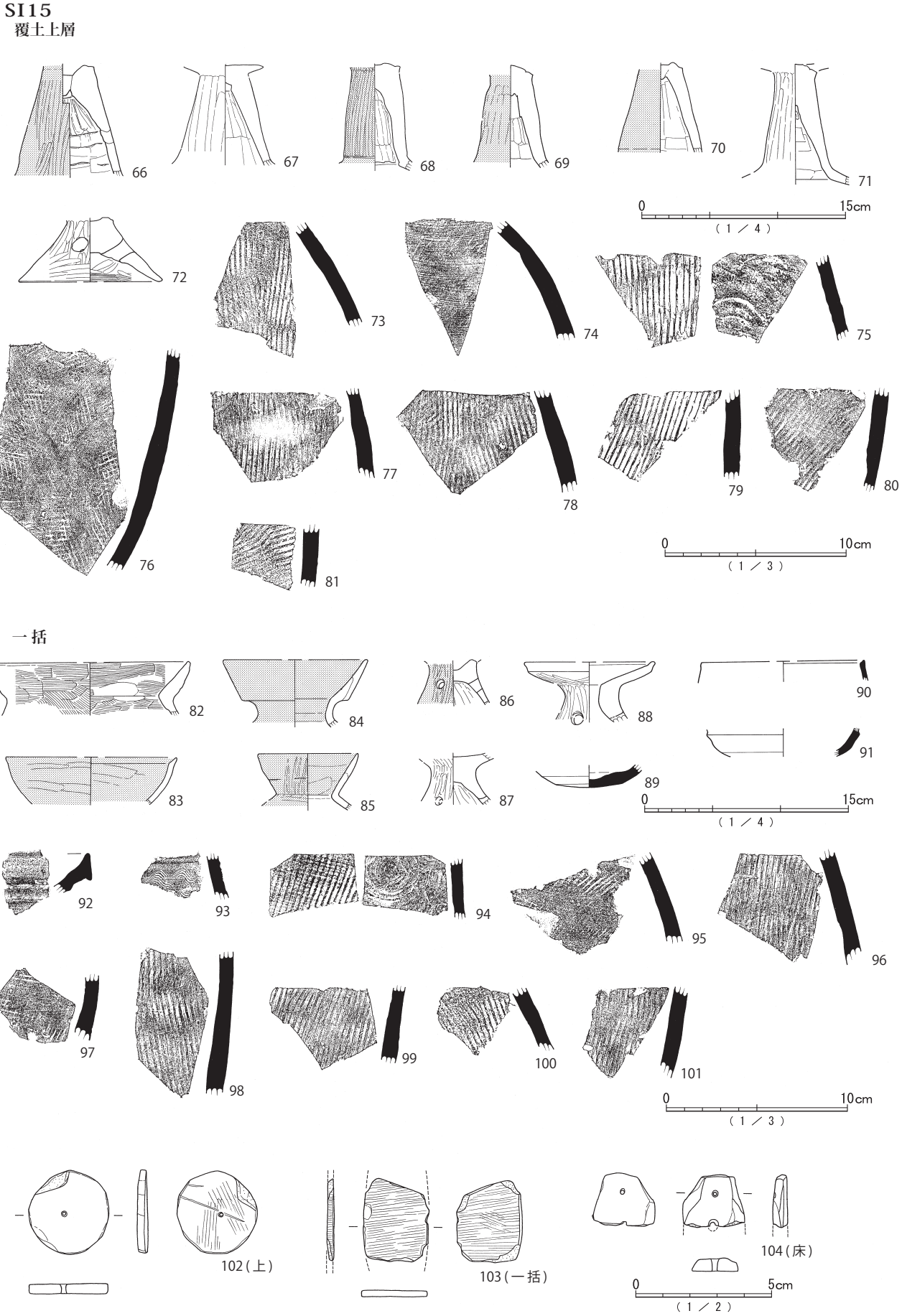


Fig.46　SI15(5) 遺物

SI15

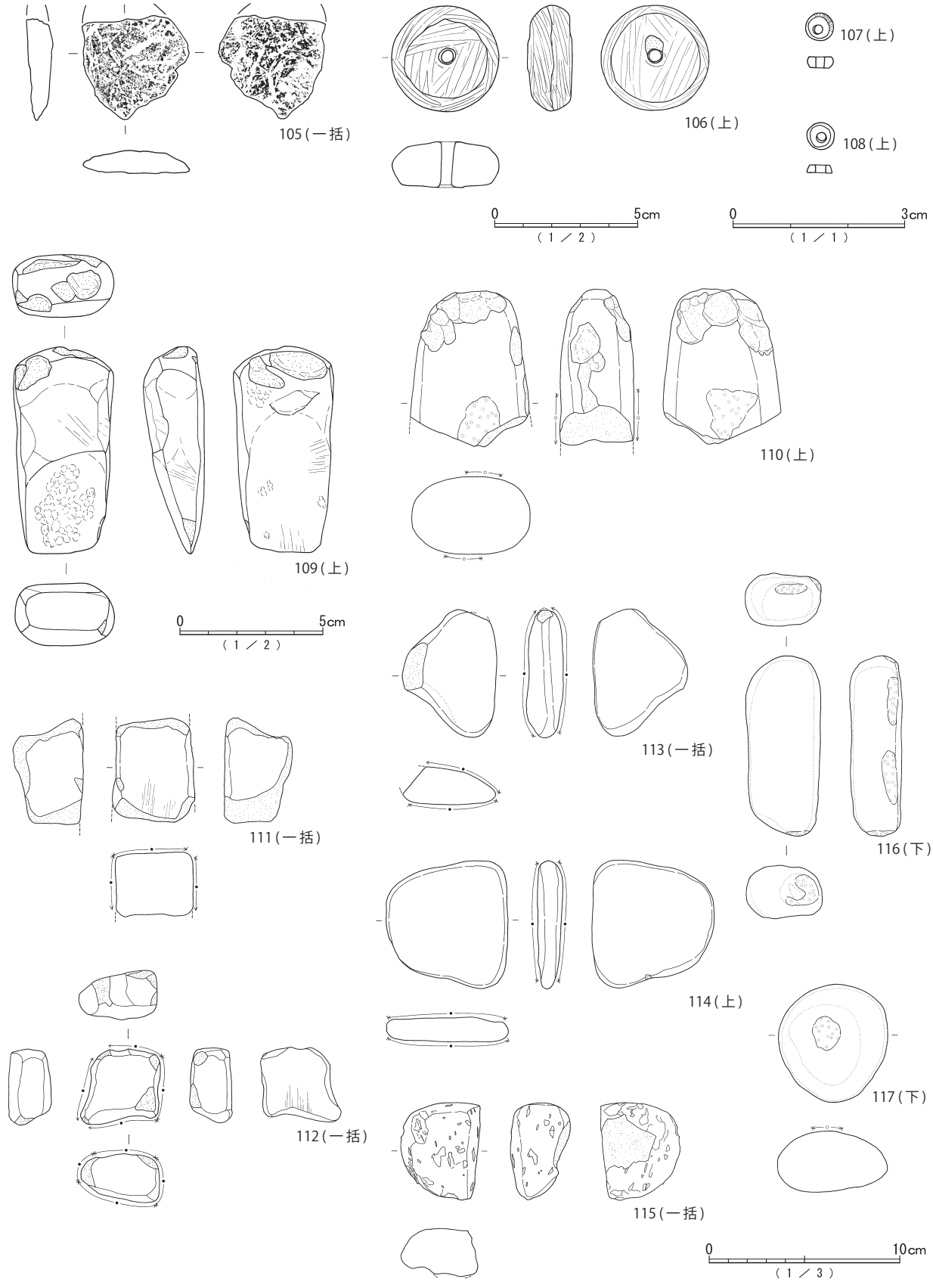


Fig.47　SI15(6) 遺物

SI15

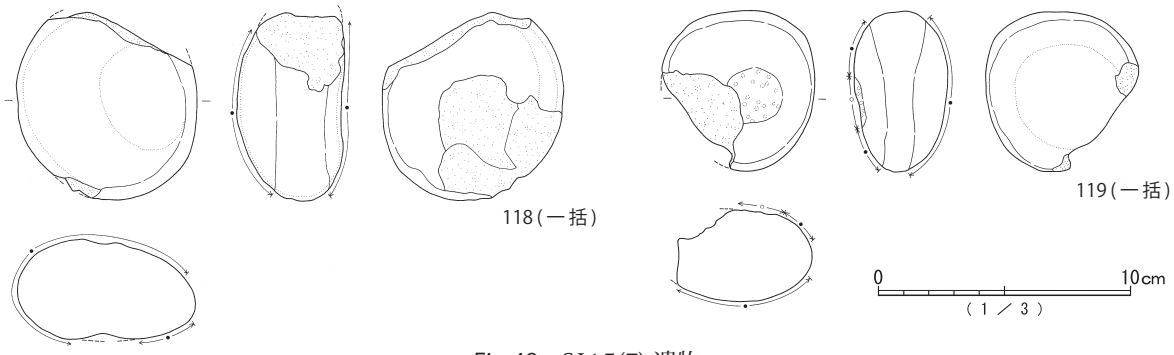


Fig.48　SI15(7) 遺物

−Wである。主柱穴はP1・2である。カマド位置は北壁中央部に推定した。壁溝等は検出できなかった。床面直上を中心に、焼土、炭化物の堆積が認められ、火災に遭った可能性が高い。

出土土器のうち、カマドから出土した2・3・9・10・15は、本竪穴の遺存遺物である。燃焼部中央に、15の高杯形土器脚部が支脚として置かれ、その上に甕形土器2が、また、2の口縁内には10の無頸壺形土器が挿入されていた。その周囲には、3の甕形土器が散在し、9の甕形土器も、カマド右袖部から出土した。1の須恵器𤭯は、本調査開始当初に設置した調査区際のトレンチから出土している。平面的な出土位置が現場図面から脱落していたが、出土グリッド、出土状況写真から、SI15との境界付近で出土したものと推定できる。ただし、遺物高から判断して、本竪穴の遺存遺物ではない。土器以外の出土遺物としては、22が滑石製臼玉、23・24が表裏面に木葉状の繊維質圧痕をもつ不明土製品である。

本竪穴の時期は、古墳時代後期南岩崎6a期と推定する。

SI17（Fig.51〜53、PL.6・17・46・47・81・100・104・105）

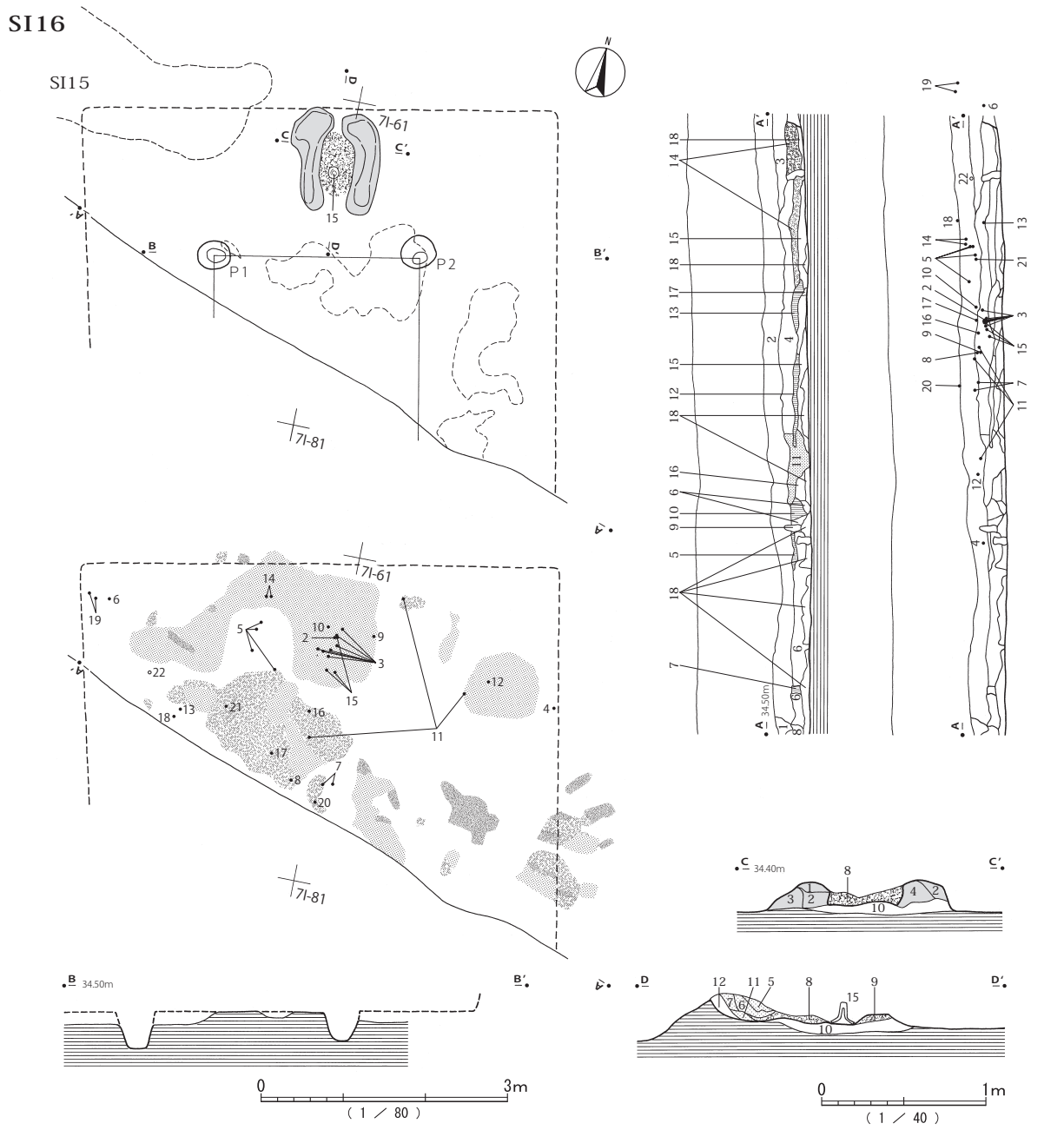
SI17は、A地点7I−45区他に所在する。SI18・19、SS01、SD06と重複し、本遺構に対してSD06が新しく、SI18・19、SS01が古い。SI19、SS01の覆土上で本竪穴の床硬化面が検出されている。SI18との関係は、出土土器から判断した。暗褐色土層を掘り込み面とし、ローム面まで達していない。竪穴範囲は、検出された北隅部、硬化面範囲およびカマド位置、主柱穴配置から判断した。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は4.80m（主軸）×4.50m、確認面掘形面積は21.55㎡程度と推定する。主軸方位はN−43.0°−Wである。主柱穴はP1〜4である。カマドは、西壁中央部に位置するが、遺存状態が悪く、本来の形状は明らかではない。貯蔵穴・壁溝等は検出できなかった。火災の有無は判断できない。

出土土器は、竪穴全体に散在する。6・7・11・12・13はほぼ完存するが、そのうち北隅部分にまとまりをみせる6・12・13等は、本竪穴の遺存遺物の可能性がある。23は突起部をもつ土製丸玉である。24〜26は鉄製品であるが、いずれも製品を特定することはできない。27・28は磨石、29は敲石である。30は土製支脚頭部であり、カマド内より出土した。31は剣形の滑石製品である。

本竪穴の時期は、古墳時代終末期南岩崎7期と推定する。

SI18（Fig.54〜58、PL.5・6・17・47・48・81・100・102・103・105・106）

SI18は、A地点7I−43区他に所在する。SI15〜17・19、SD06と重複関係をもち、本遺構に対してSI16・17・19、SD06が新しく、SI15との新旧関係は明らかではない。ただし、これは出土遺物



断面A－A'
1　暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
2　暗褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
3　黒褐色。
4　黒褐色。炭化物・焼土粒を少量含む。
5　暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。硬質、貼り床か。
6　黒褐色。粘性強い。しまり弱い。
7　黒褐色。硬質、貼り床か。
8　黒褐色。黄白色粘土粒を多量に、ロームブロックを少量含む。
9　暗褐色。
10　黒褐色。6層に比べ硬質でしまり強い。貼り床か。
11　黒褐色。焼土粒・焼土ブロック主体。
12　黒褐色。黄白色粘土ブロック主体。貼り床か。
13　黒褐色。硬質・ロームブロックを少量含む。貼り床か。
14　黒褐色。炭化物を多量に含む。
15　暗褐色。ロームブロックを少量含む。
16　黒褐色。10層に類似。
17　暗褐色。
18　暗褐色。

断面C－C'・D－D'
1　黒褐色。焼土ブロックを若干含む。
2　黒褐色。大小焼土ブロックを1層比して若干多く含む。
3　暗黄褐色。ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
4　褐色。焼土ブロックを若干含む。しまりややあり。
5　焼土ブロック主体。
6　黒褐色。焼土粒を多量に含む。
7　焼土ブロック主体。
8　暗赤褐色。焼土ブロック主体。層全体が赤化、被熱層。
9　赤褐色。焼土ブロック主体。層全体が赤化、被熱層。
10　黒褐色。ローム粒・ロームブロックを若干含む。
11　暗褐色。焼土粒を多量に含む。
12　暗褐色。黄褐色粘質土を多量に含む。

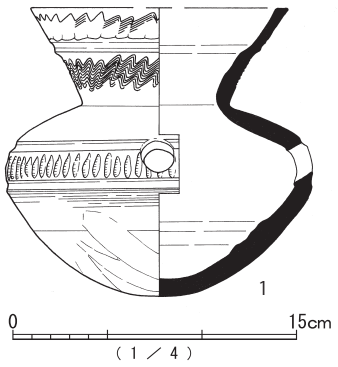


Fig.49　SI16(1) 遺構遺物

SI16

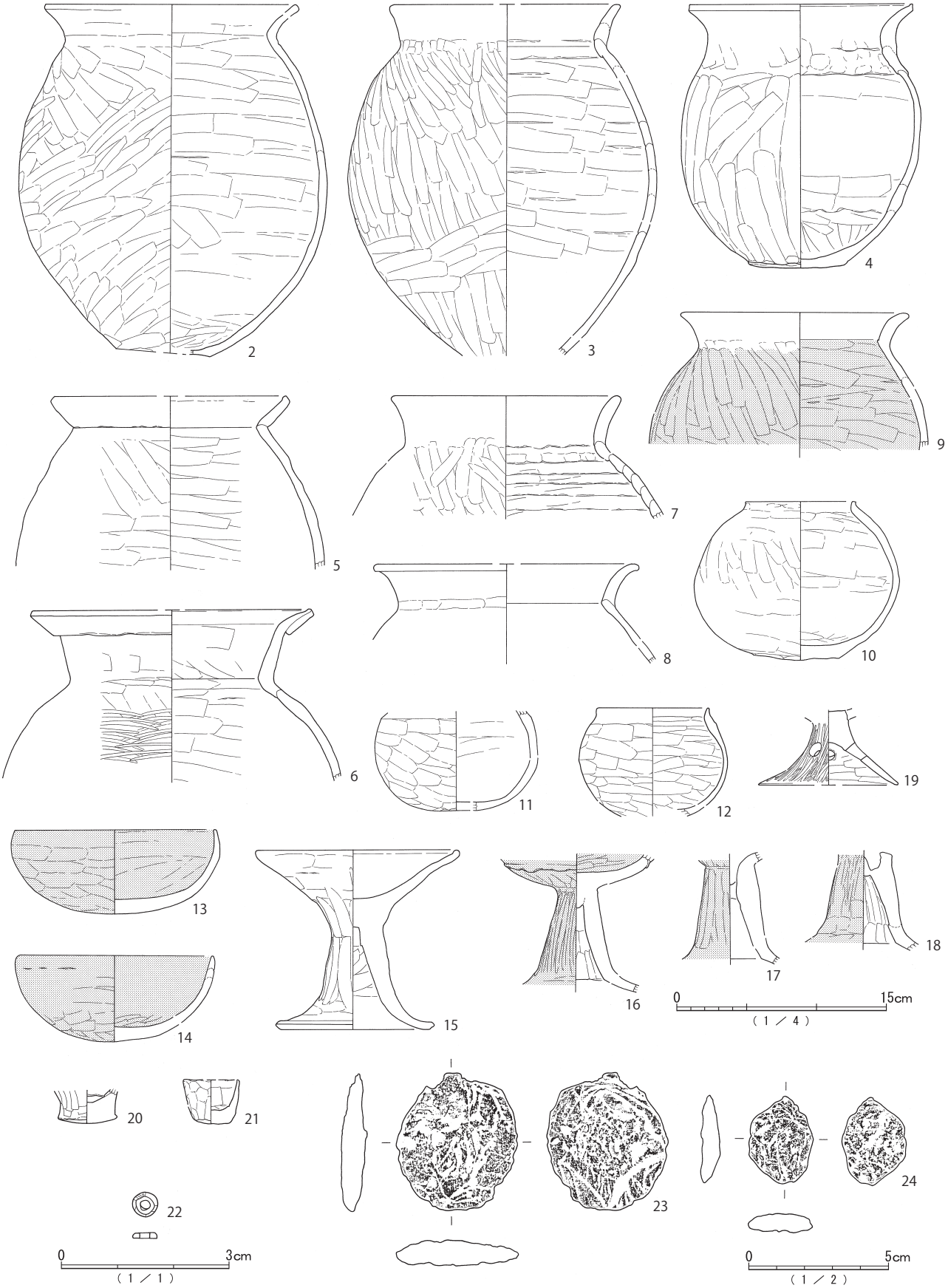
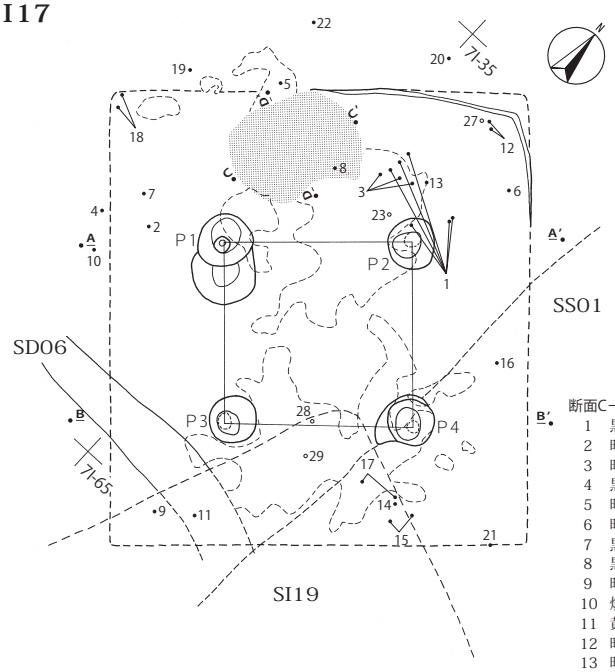
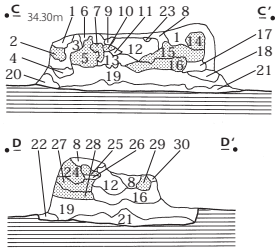


Fig.50　SI16(2) 遺物

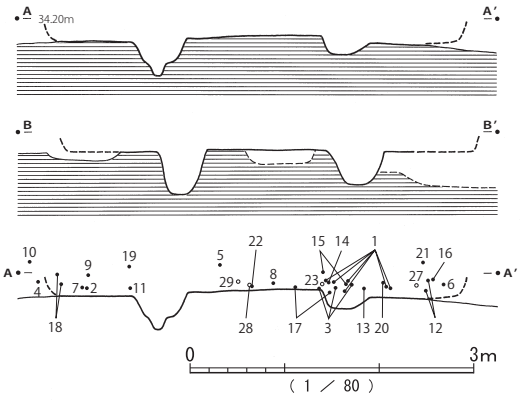
SI17

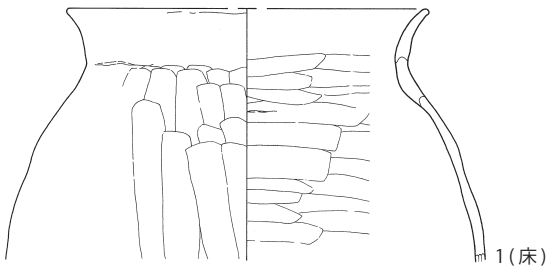




断面C−C'・D−D'

1 黒褐色。
2 暗黄褐色。焼土ブロックを含む。
3 暗褐色。
4 黒褐色。
5 暗黄褐色。焼土ブロックを含む。
6 暗褐色。
7 黒褐色。焼土ブロックを含む。
8 黒褐色。
9 暗褐色。
10 焼土ブロック。
11 黄褐色。
12 暗褐色。
13 暗黄褐色。
14 暗褐色。焼土主体。
15 暗褐色。粘土ブロック・焼土ブロックを含む。
16 黒褐色。焼土ブロックを多量に含む。
17 暗黄褐色。
18 暗褐色。
19 黒褐色。
20 暗黄褐色。
21 暗茶褐色。
22 暗黄褐色。
23 暗褐色。
24 黒褐色。焼土ブロック・ロームブロックを含む。
25 暗褐色。焼土粒を含む。
26 黒褐色。
27 暗褐色。焼土粒を含む。
28 黒褐色。焼土粒を含む。
29 暗黄褐色。焼土ブロックを少量含む。
30 暗褐色。





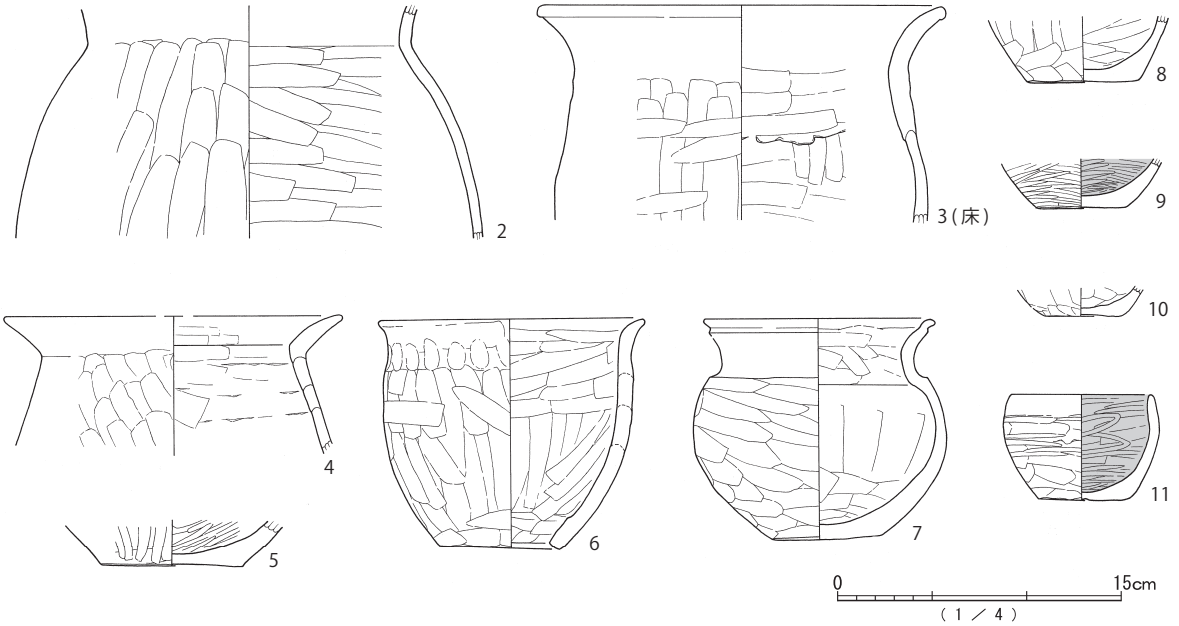


Fig.51　SI17(1) 遺構遺物

SI17

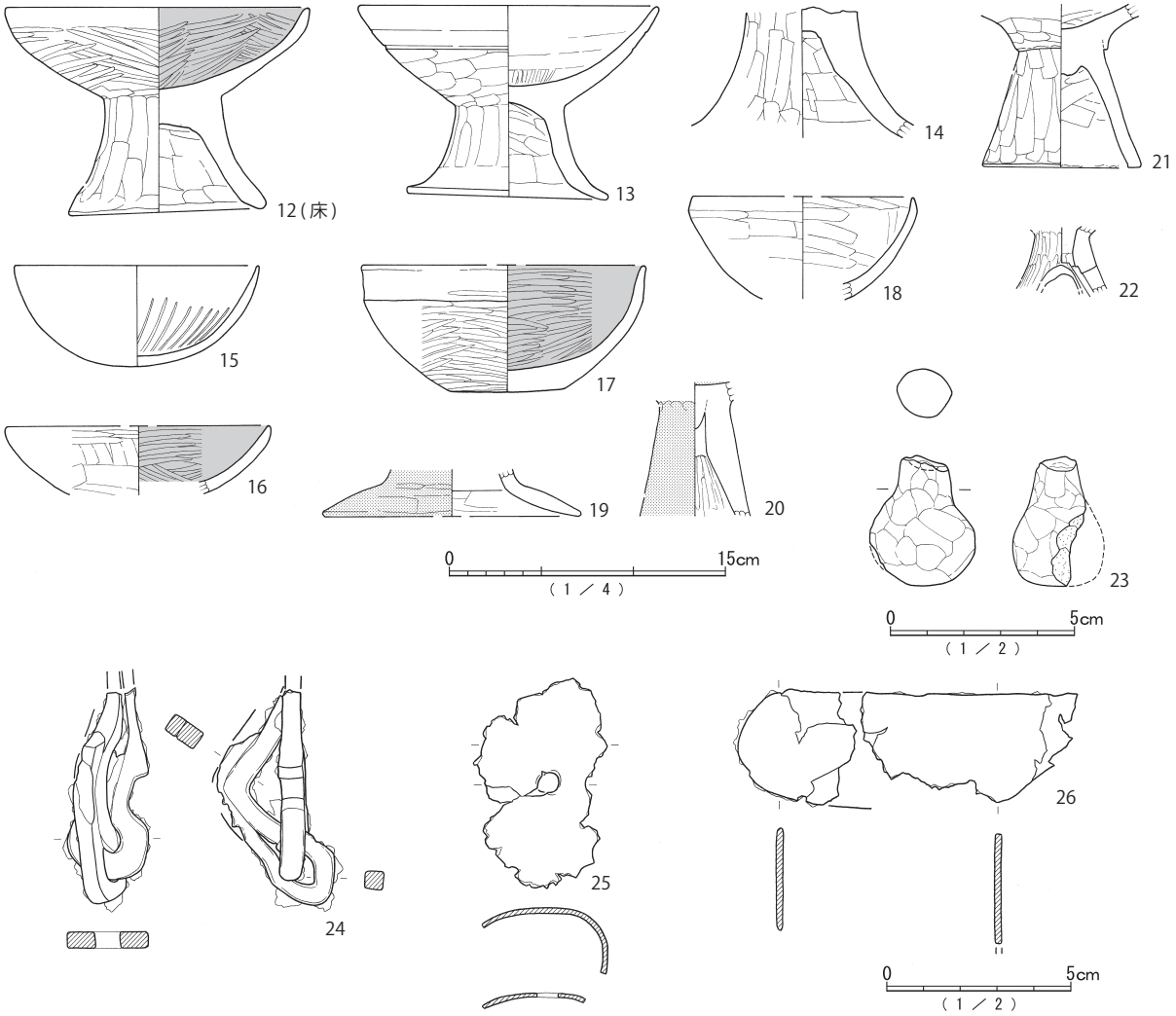


Fig.52　SI17(2) 遺物

による判断であり、遺構の検出状況から検証されているわけではない。また、本竪穴の範囲自体が不確実である。本竪穴は、暗褐色土層を掘り込み面とし、ローム面まで達していない。竪穴範囲は、炉位置と硬化面範囲、遺物の分布状況から推定したが、主柱穴も不明確であり、複数軒の竪穴住居が重複していた可能性もある。推定による竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は9.30m四方、確認面掘形面積は87.66㎡程度となる。主軸方位は、N－20.0°－Wである。床は、粘土ブロックを多量に含む貼り床である。炉は、床硬化面範囲の北側で検出された。火床面はあまり焼けてはいなかった。P8は、径0.7m、深さ0.82mを測る柱穴状のPitである。畿内系譜の大形壺形土器76が、横から潰されたような状況で出土した。底部がP8内にあることから、P8に埋置されていた可能性も考えられる。P8は、本竪穴住居とは別遺構の可能性もあることから、「SK12」の呼称も付けておく。

土器は、竪穴推定範囲中央部、床硬化面範囲周辺から多量に出土した。和泉式を主体とし、明確な時期差も認められないことから、竪穴推定範囲の妥当性はともかく、床硬化面を中心とした遺構・遺物にまとまりを認めることは可能であろう。床面直上出土の遺物は限られているが、完形の小形壺形土器30等は、遺存遺物の可能性がある。

SI17

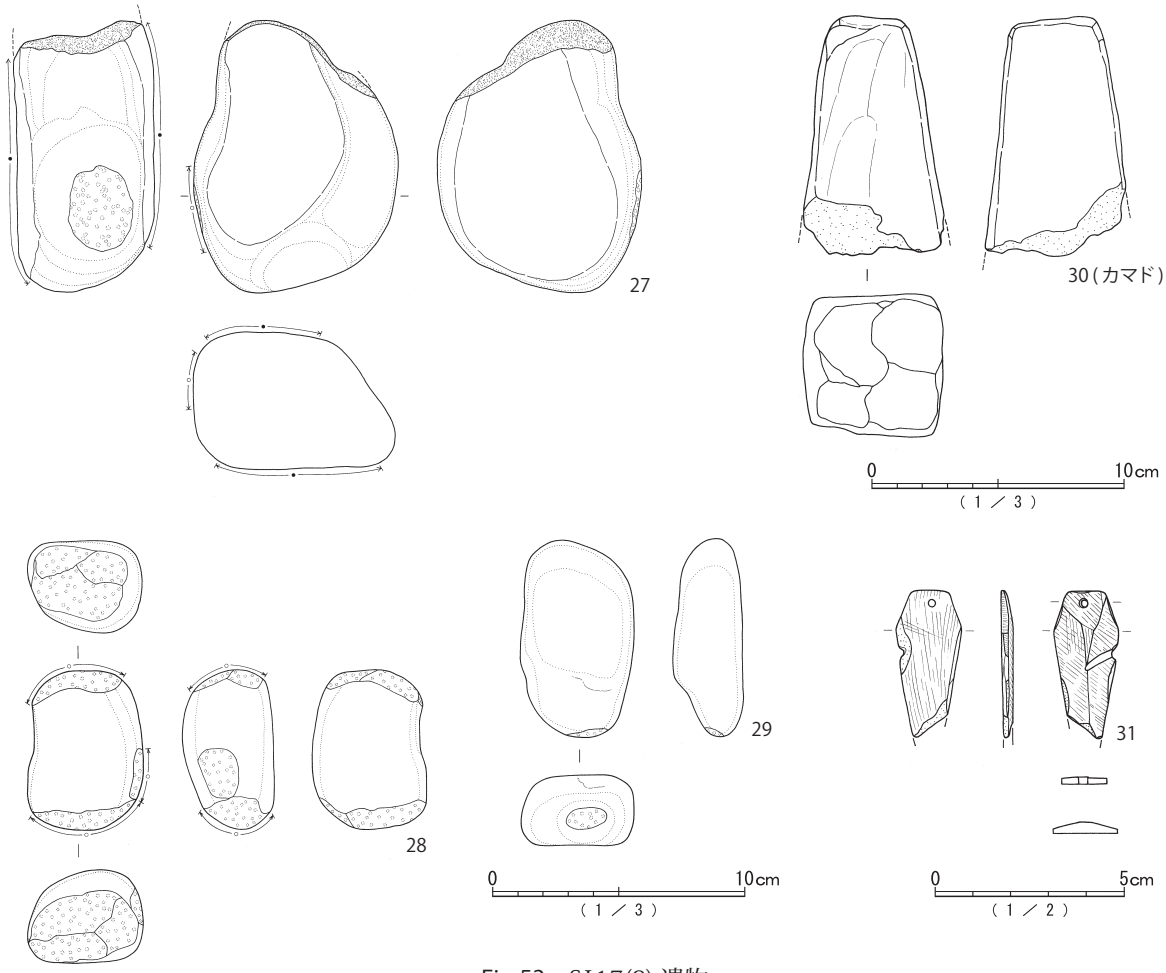


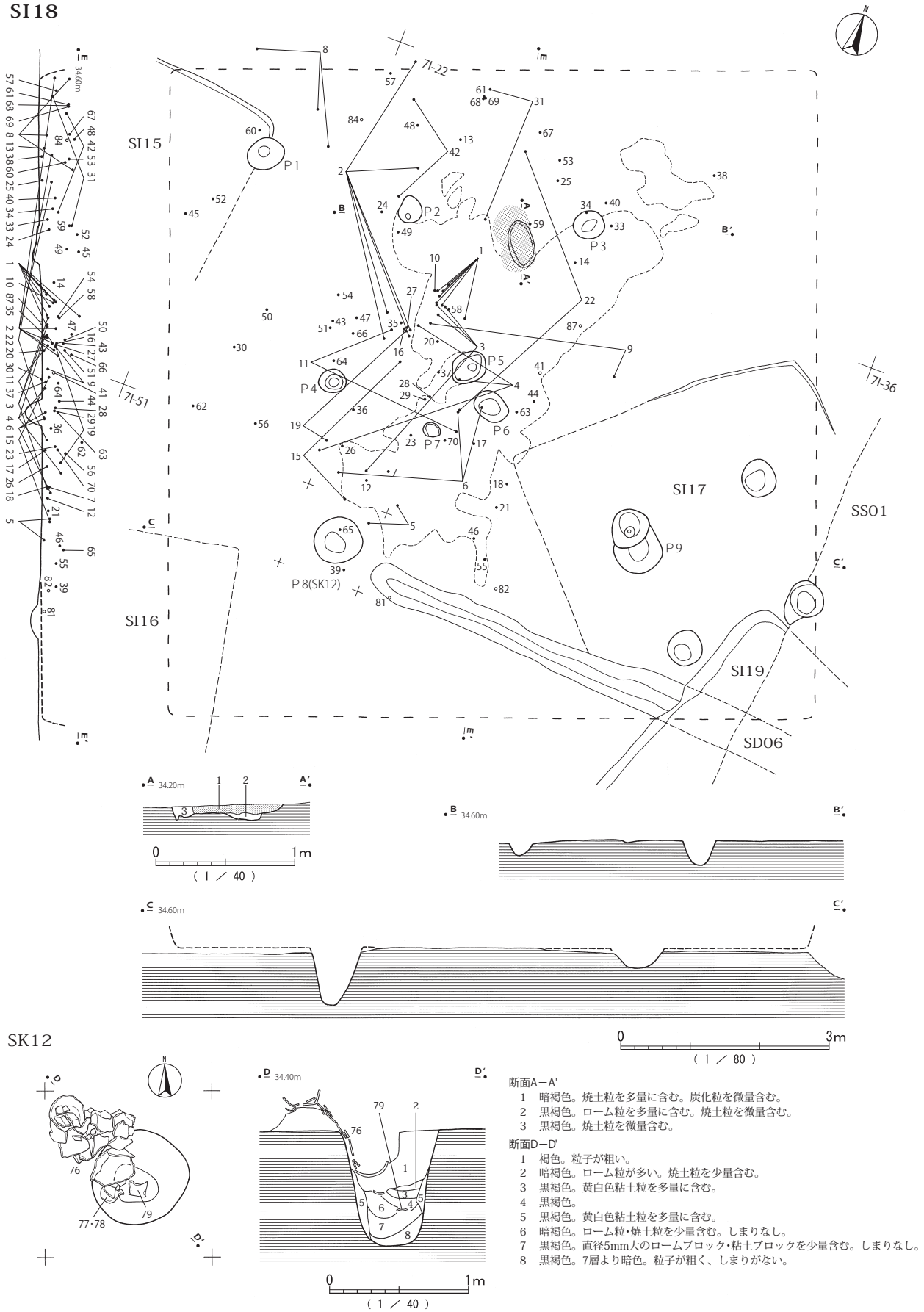
Fig.53　SI17(3) 遺物

土器以外の遺物としては、41が滑石製臼玉、80が剣形の滑石製品、81が須恵器転用砥石、82が砥石、83・84が軽石製品、85～88が磨石である。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b新期と推定する。SK12についても、明確な時期差は認められない。

SI19（Fig.59～61、PL.17・18・48・49・81・82・90・100・102・104）

SI19は、A地点7I−66区他に所在する。SI17・18・21・22、SS01、SD06・08と重複する。本遺構に対してSI18・21・22、SS01が古く、SI17、SD06・08が新しい。このうち、SI17・SS01・SD08は、床面の上下関係等、遺構検出状況から新旧関係を確認したが、他は出土遺物の判断による。本竪穴は、黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.18m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、南北方向の主軸とした場合の全体規模は6.22m（主軸）×6.33m、確認面掘形面積は39.40㎡を測る。主軸方位はN−22.0°−Eである。主柱穴はP1～4である。カマド・貯蔵穴は、南東隅部で検出した。P5が貯蔵穴であり、周囲は白色粘土が貼られ、若干高くなっていた。床面からの深さは0.37mを測る。東西軸東側床面上で焼土が検出されている。火床面は明確ではないが、炉の可能性がある。床は貼り床構造であるが、あまり硬化していなかった。壁溝は、南辺部一部で検出された。火災の痕跡は確認されていない。



断面A－A'
1　暗褐色。焼土粒を多量に含む。炭化粒を微量含む。
2　黒褐色。ローム粒を多量に含む。焼土粒を微量含む。
3　黒褐色。焼土粒を微量含む。

断面D－D'
1　褐色。粒子が粗い。
2　暗褐色。ローム粒が多い。焼土粒を少量含む。
3　黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
4　黒褐色。
5　黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
6　暗褐色。ローム粒・焼土粒を少量含む。しまりなし。
7　黒褐色。直径5mm大のロームブロック・粘土ブロックを少量含む。しまりなし。
8　黒褐色。7層より暗色。粒子が粗く、しまりがない。

Fig.54　SI18(1) 遺構

SI18
覆土下層

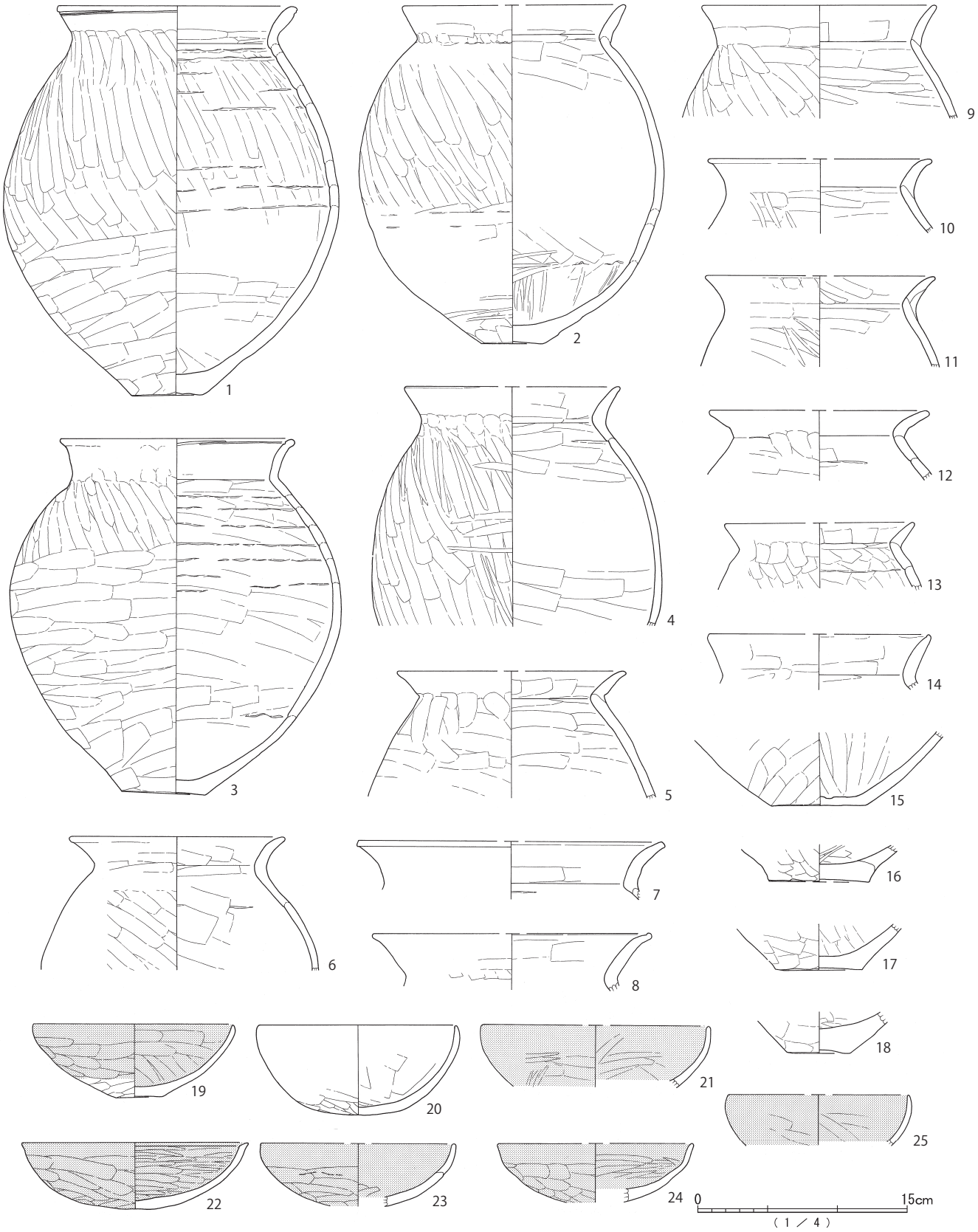
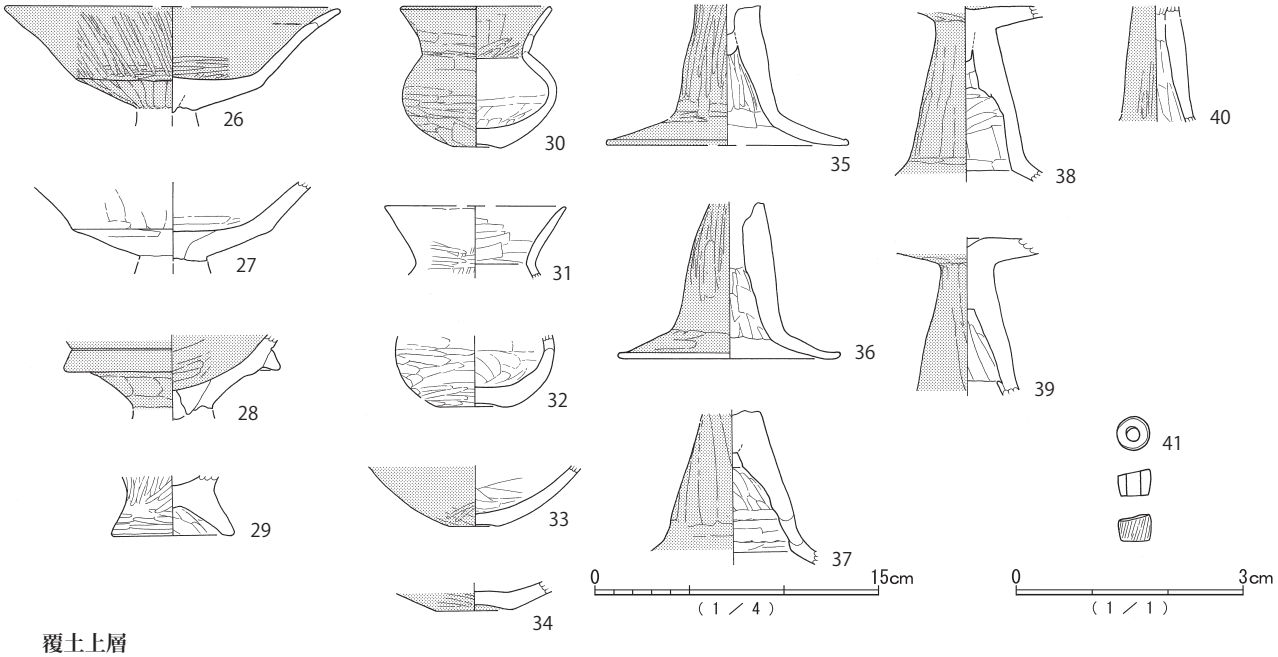


Fig.55　SI18(2) 遺物

SI18

覆土下層



覆土上層

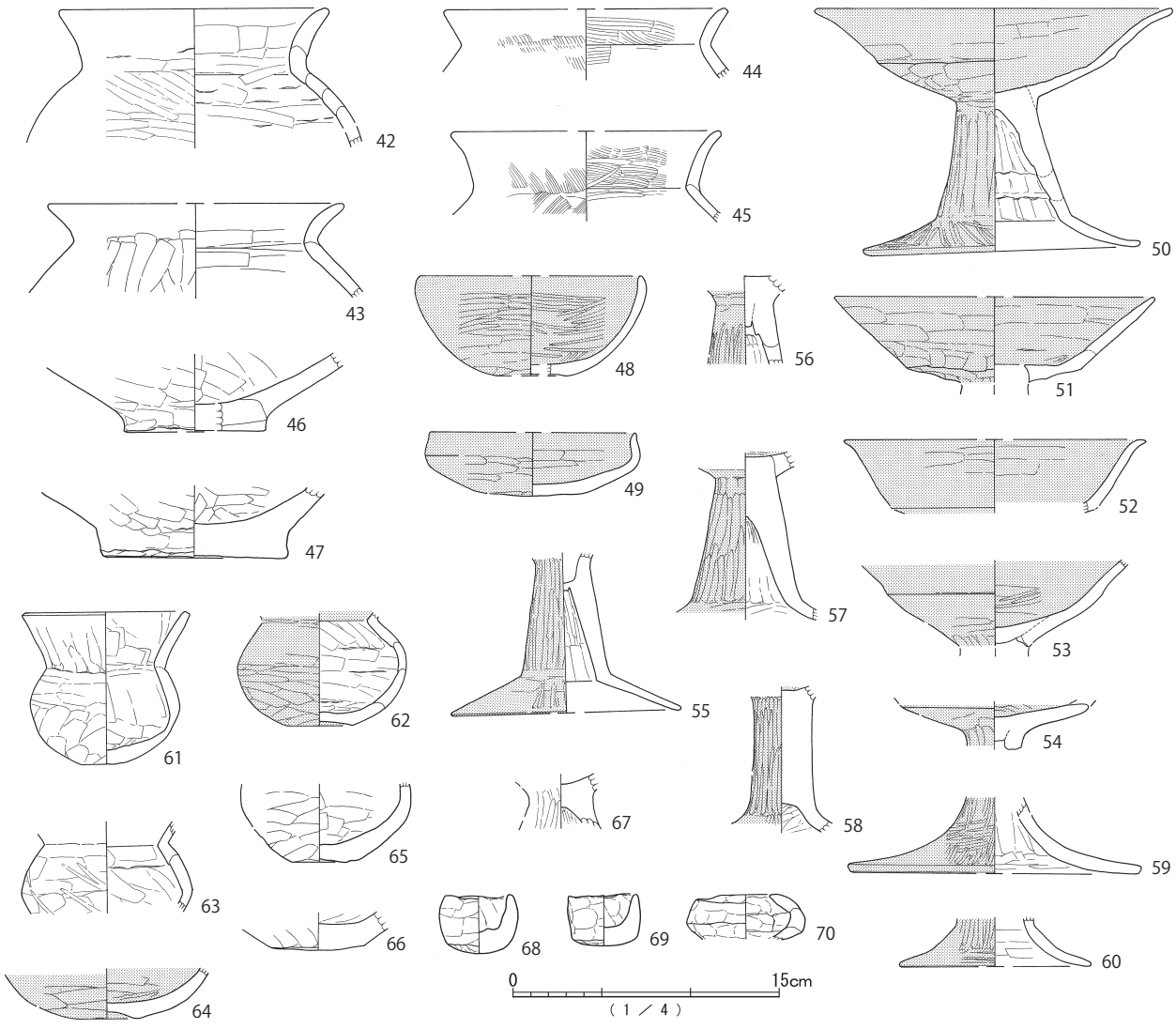
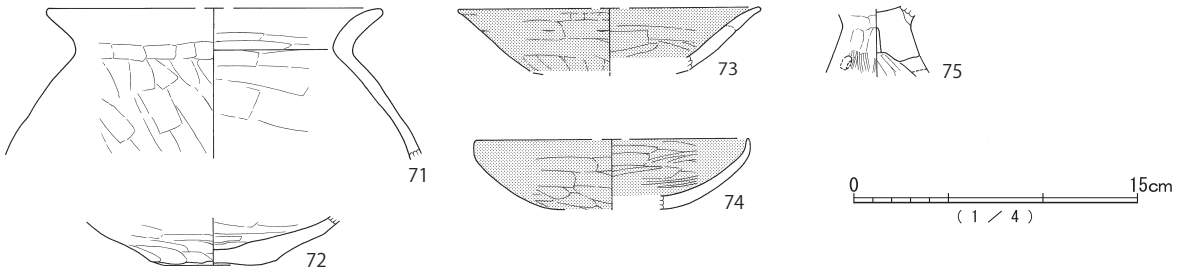


Fig.56　SI18(3) 遺物

SI18
一括



SK12(P8)

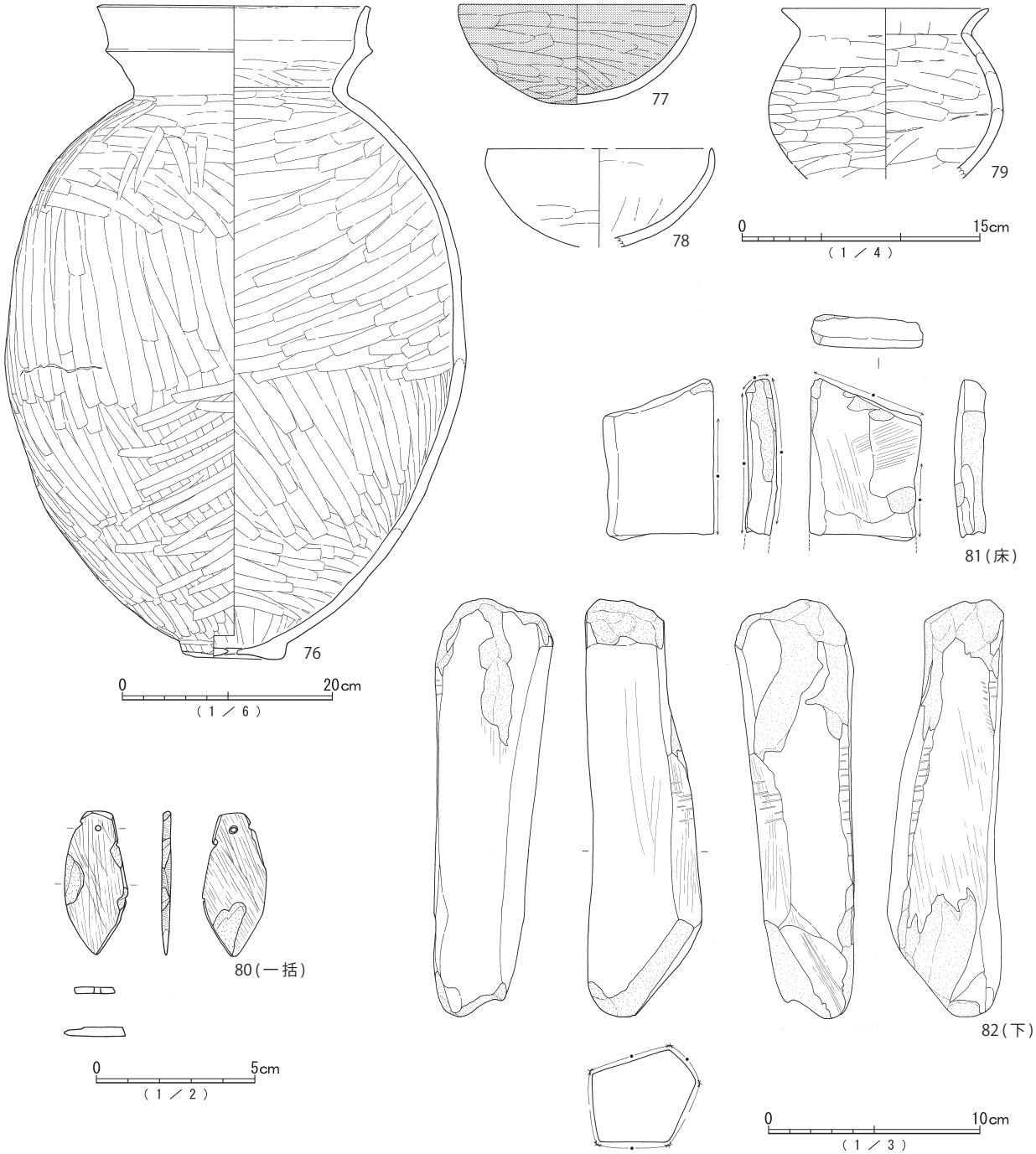


Fig.57　SI18(4) 遺物

SI18

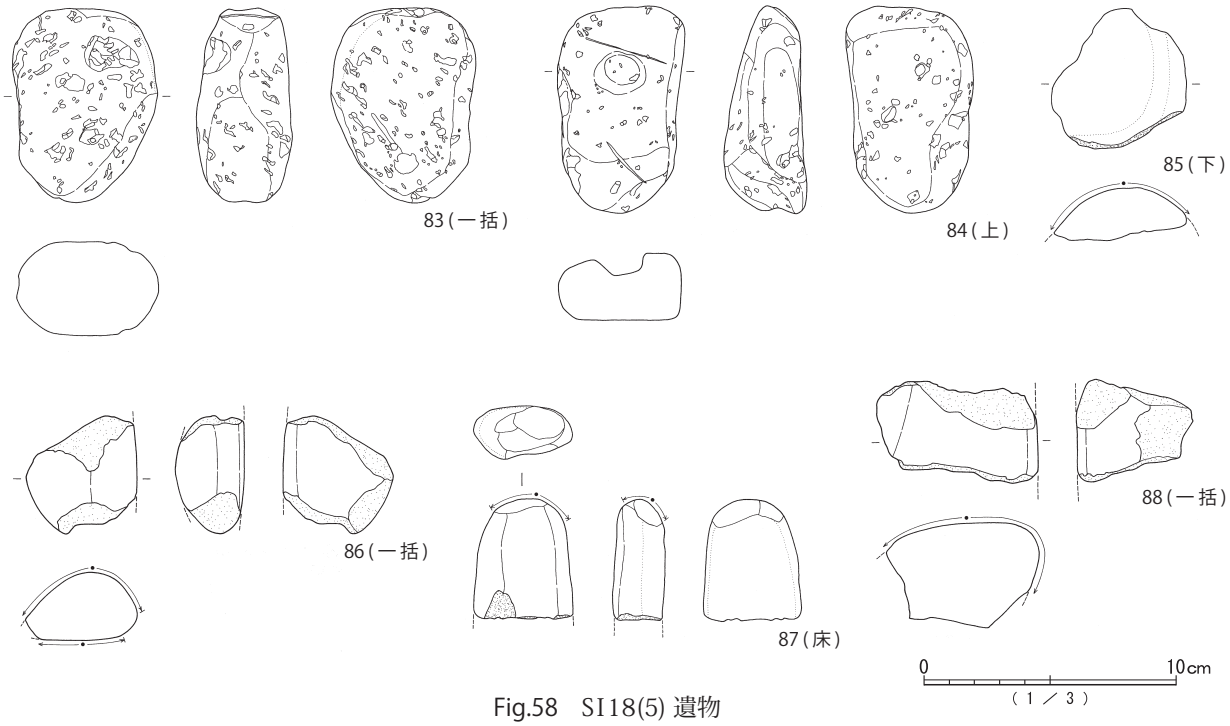


Fig.58　SI18(5) 遺物

出土土器のうち、カマド前面床面に散在していた1の甕形土器、P2・カマド内から出土した2・3・6・8・12・13などが遺存遺物と考えられる。土器以外では、20が支脚、21が磨敲石、22が砥石、23が磨石である。

本竪穴の時期は、古墳時代後期南岩崎6b期と推定する。

SI20（Fig.62、PL.18）

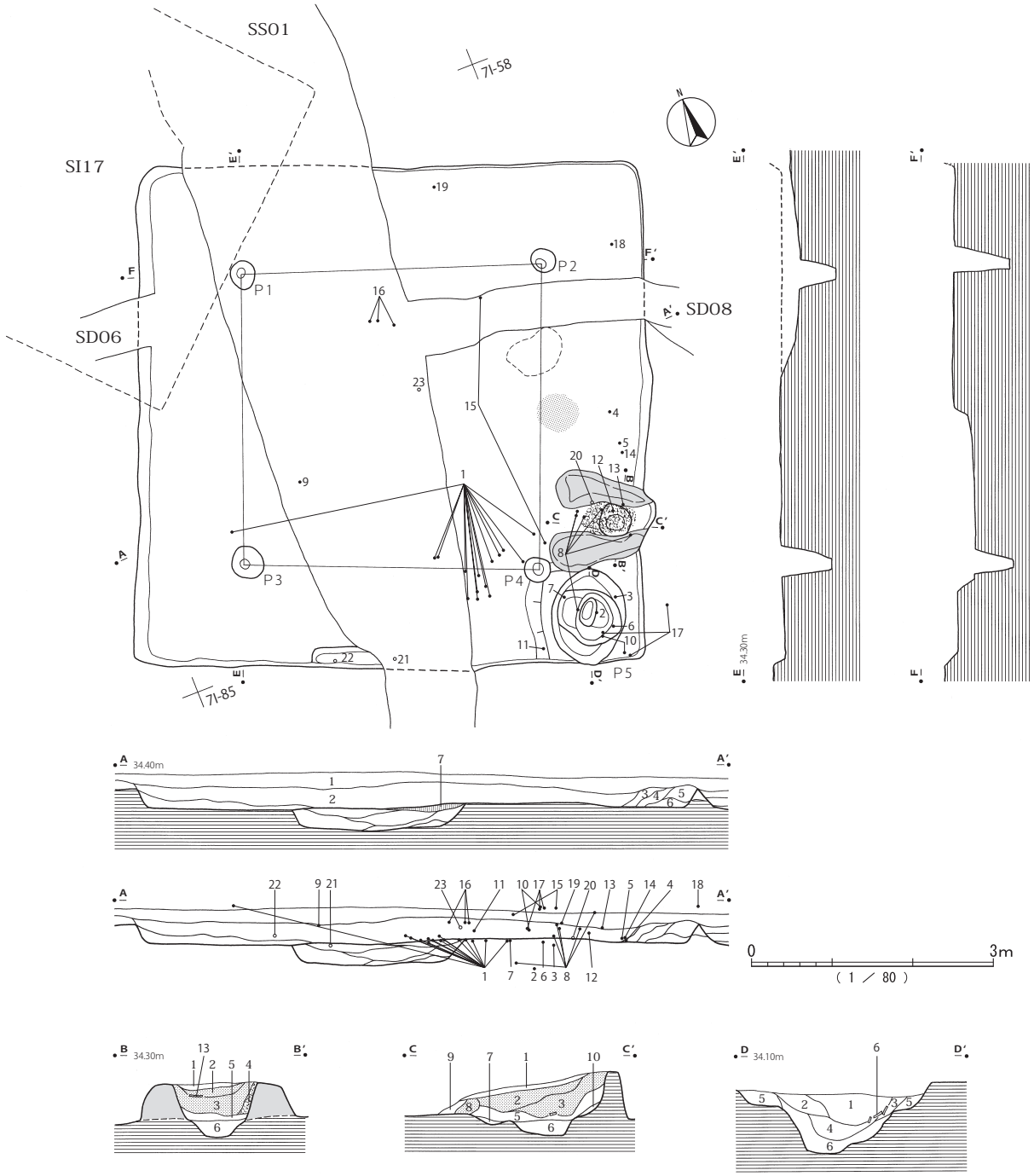
SI20は、A地点7I−95区他に所在する。本遺構は方形周溝墓SS01と重複し、現場調査段階では、単独の遺構としてとらえられてはいない。ただし、調査区壁際の掘り込み底面が平坦で、若干量ではあるが、SS01出土土器とは異なる五領式がまとまって出土していることから、竪穴住居跡として取り上げておく。また、SS01の南東隅部周溝が連続している点も、本遺構の掘形の影響による可能性があると思われる。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層としている。確認面からの深さは、最大で0.2m程度である。竪穴平面形態は方形と推定され、遺存部で2.45mを測る。主軸方位はN−1.0°−E程度である。主柱穴、炉などの施設は検出できなかった。

本竪穴の時期は、出土した高杯形土器脚部から、古墳時代前期南岩崎4c期と推定する。

SI21（Fig.63〜65、PL.18・49・77・82・93・94・100）

SI21は、A地点7I−69区他に所在する。SI19・22、SD08と重複し、本遺構に対してSI19・SD08が新しく、SI22が古い。本竪穴はSI19内につくられ、調査途中では重複関係をとらえることができなかった。確認面からの深さは、北辺部で0.06m程度を測る。床面高は、SI22とほぼ同レベルないし本竪穴が若干高いため、南半部の掘り込みをとらえることはできなかった。ただし、遺物の出土状況、床硬化面範囲、床面の土質から、ある程度明瞭に範囲を区分することできた。竪穴平面形態は隅丸の方形ないし台形で、全体規模は3.67m×3.63m、確認面掘形面積は11.94㎡を測る。南北方向を主軸とした場合の方位は、N−11.0°−Wである。主柱穴は検出できなかった。P15は貯蔵穴の可能

SI19



断面A－A'
1　暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。粘性弱い。しまり強い。
2　黒褐色。黄白色粘土をまだらに含む。粘性強い。しまり強い。
3　暗褐色。ロームブロックを多量に含む。粘性が非常に強い。しまりが強い。
4　黒褐色。粘性強い。しまり強い。
5　暗褐色。黄白色粘土ブロックを若干含む。粘性弱い。しまり強い。
6　黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
7　暗褐色。ローム・粘土ブロックを多量に含む。粘性強い。しまり強い。貼り床。

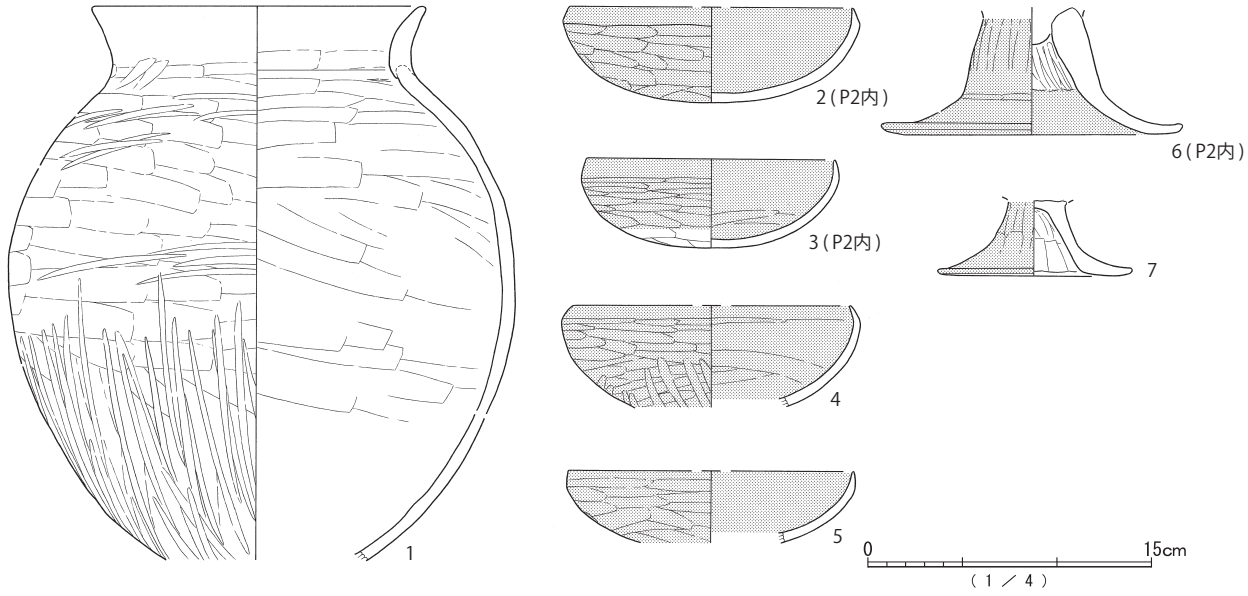
断面D－D'
1　黒褐色。焼土粒を若干含む。
2　暗褐色。ローム粒をまばらに含む。しまり強い。
3　暗褐色。暗黄褐色粘土ブロックを若干含む。
4　暗褐色。焼土粒・炭化粒を含む。しまり弱い。
5　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。
6　暗褐色。黄白色・暗黄褐色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。

断面B－B'・C－C'
1　黒褐色。
2　暗褐色。しまり強い。焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。
3　暗褐色。焼土ブロックを多量に含む。
4　暗褐色。焼土ブロックを主体とする。
5　黒褐色。若干の焼土粒を含む。しまり強い。
6　黒褐色。しまり強い。
7　黒褐色。しまり強い。粘性強い。
8　暗褐色。焼土粒を多量に含む。しまり強い。
9　暗褐色。焼土粒をまばらに含む。しまり強い。
10　暗黄褐色。

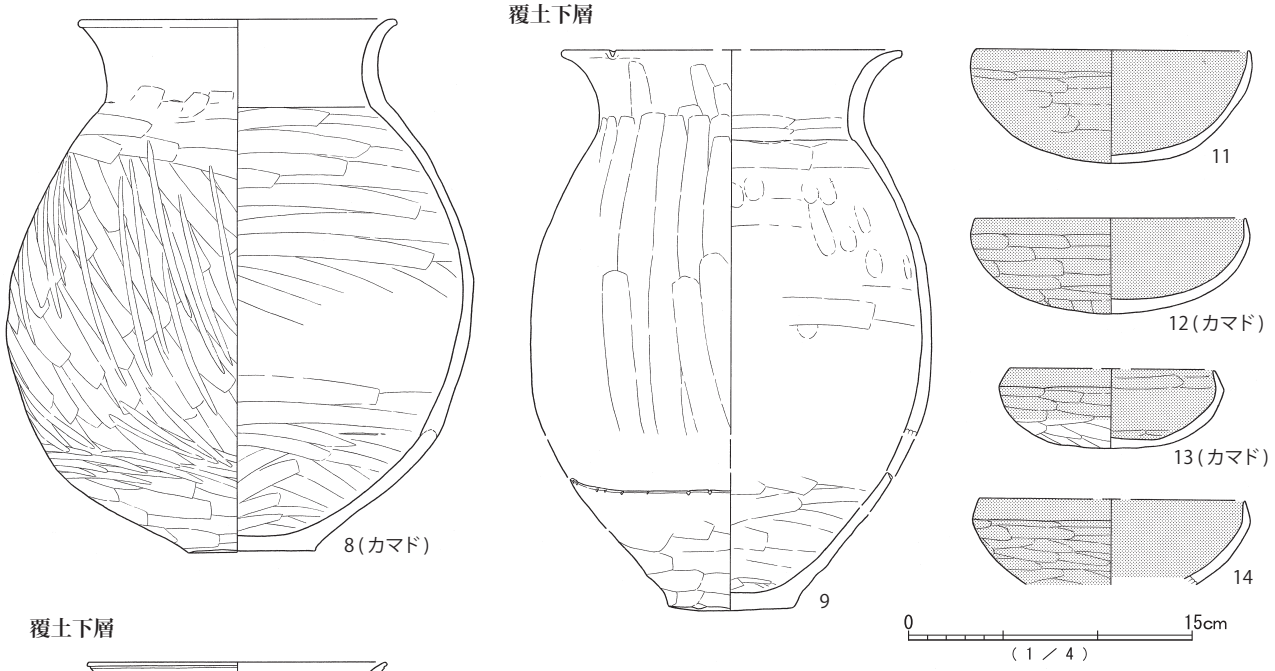
Fig.59　SI19(1) 遺構

SI19

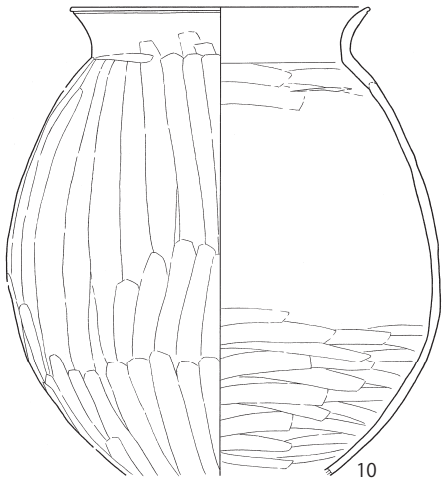
床面付近



覆土下層



覆土下層



覆土上層

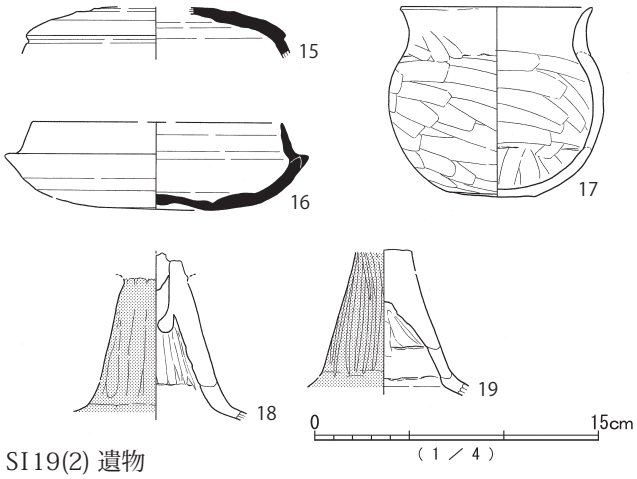


Fig.60　SI19(2) 遺物

SI19

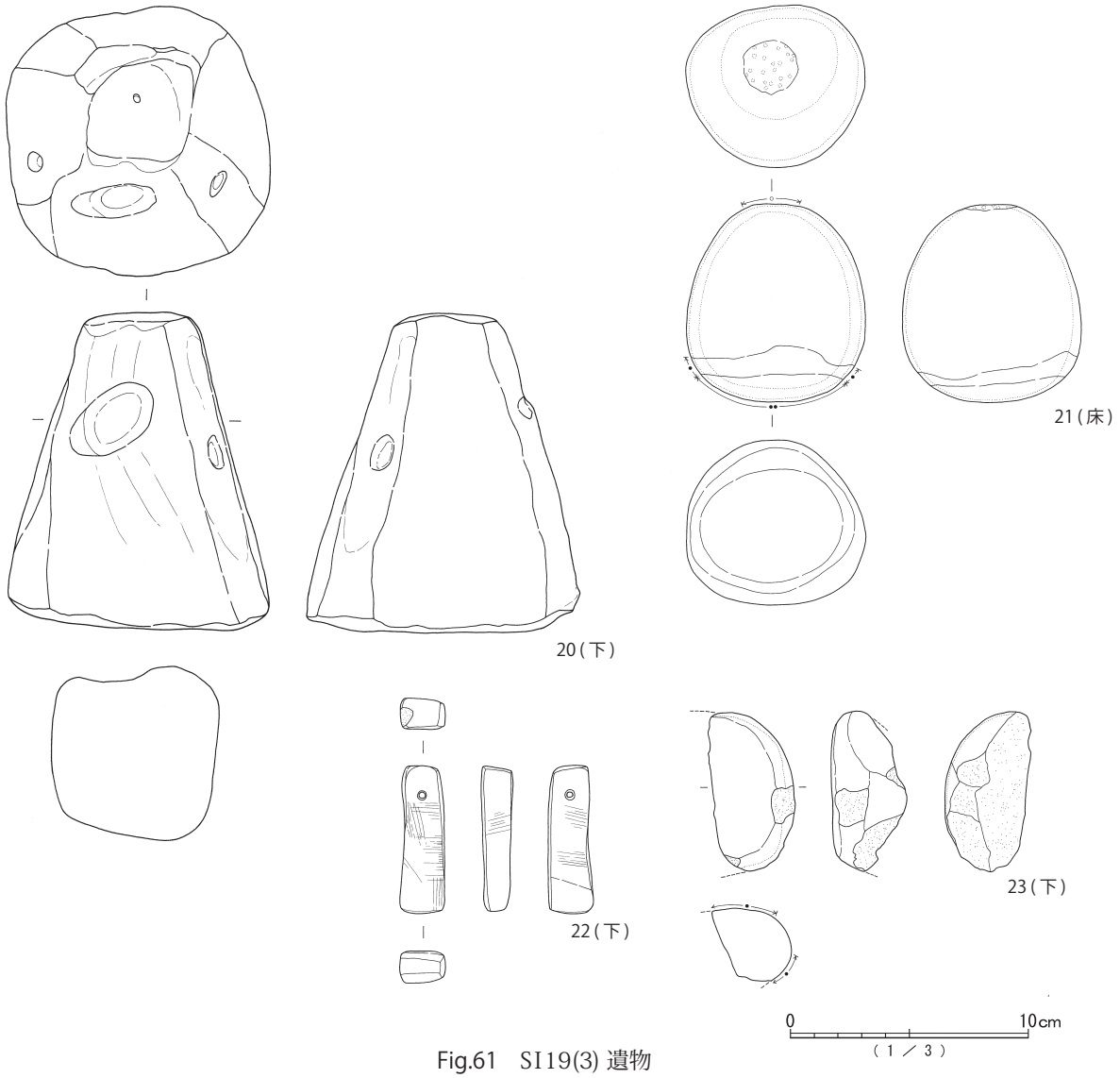


Fig.61　SI19(3) 遺物

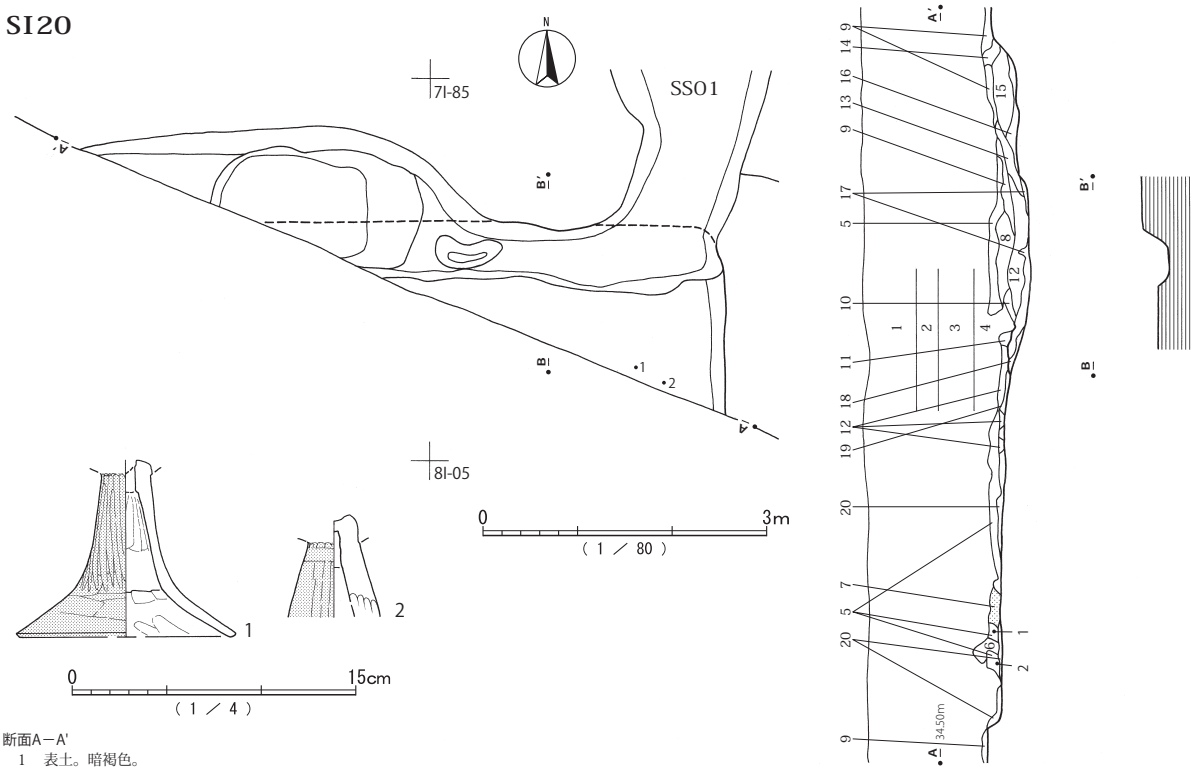
性がある。炉は、長軸長0.81mを測る。ただし、位置関係からSI22の炉の可能性が高い。火災の痕跡は検出されていない。

出土土器は、覆土を中心に散在しており、確実に遺存遺物と考えられるものはない。10・24～26はタタキ整形甕、21は櫛刺突による羽状文を胴肩部に描く。時期的には、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭を中心とし、若干の幅をもつ。土器の以外では38が磨石である。

本竪穴の時期は、古墳時代前期南岩崎4a期と推定する。

SI22（Fig.63・65、PL.18・49・77・94・102）

SI22は、A地点7J−60区他に所在する。SI19・21・26、SD08と重複関係をもち、本遺構に対してSI19・21、SD08が新しい。SI26との関係は明確ではない。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.15m程度である。竪穴平面形態は楕円形を呈する。全体規模は、北壁がSI21と一致するとして、5.85m（主軸）×5.27m、確認面掘形面積は23.71㎡を測る。主軸方位はN−57.0°−Wである。主柱穴は検出できなかった。P10が深さ0.35m、P11が0.25mを



断面A－A'

1　表土。暗褐色。
2　黒褐色。赤色スコリアを少量含む。粒子やや粗い。
3　暗褐色。赤色スコリアを微粒含む。粒子やや粗い。
4　暗褐色。淡褐色微粒を霜降状に多量に含む。
5　暗褐色。ローム粒・黄白色粘土粒。
6　褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。木根等による撹乱の可能性。
7　黒褐色。焼土を含む。
8　黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
9　黒色。黄白色粘土粒を微量含む。
10　暗褐色土と黒褐色土の混合。
11　褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。6層に似る撹乱の可能性。
12　黒色。暗褐色土・黄白色粘土ブロック(直径50mm大)を少量含む。
13　暗褐色。褐色、黄白色粘土粒を少量含む。
14　暗褐色。黒褐色、白色粘土粒を少量含む。
15　黒褐色。黄白色粘土微粒を少量、褐色土斑状をやや多く含む。12に似る。
16　淡黒色。黄白色粘土ブロックを含む。
17　暗褐色。黄白色粘土ブロック、16に似るが16より粘土が多い。
18　黄白色粘土。暗褐色土斑状を少量含む。地山か？
19　暗褐色。ロームブロックを多く含む。
20　黒色。暗褐色、ロームブロックを含む。

Fig.62　SI20 遺構遺物

測る以外は、いずれも0.2m以下と浅い。SI21内の炉は、本竪穴の推定主軸上にあることから、本竪穴に帰属する可能性が高い。火災の痕跡は検出されていない。

出土土器は、時期的に混在する。出土状況は覆土を中心とし、1の壺形土器も、本竪穴に帰属するかどうかの判断は難しい。本竪穴は、平面形態、他遺構との重複関係から判断して弥生時代の所産と推定するが、出土弥生土器は、5～7が宮ノ台式、8～11が後期以降であり、決め手がない。土器以外では、12が砥石である。

SI23（Fig.66～69、PL.5・18・49・50・82・94・100・102）

SI23は、A地点7I−99区他に所在する。SI24・25・26、SD08と重複し、本遺構に対してSD08が新しく、SI24・25・26が古い。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.21m程度である。竪穴平面形態は方形ないし長方形を呈し、竪穴規模は南北主軸長で4.08mを測る。東壁は、SI25覆土上のため明確ではなかったが、焼土・炭化物の範囲、土層断面の観察から、東西軸長は約3.60mと推定する。確認面掘形面積は14.05㎡を測る。主軸方位はN−2.0°−Wである。主柱穴は検出できなかった。P8は貯蔵穴である。炉は明確ではなかった。本竪穴は、火災に遭ったことが想定され、竪穴中央部床面直上を中心に焼土、炭化物の堆積が認められた。ただし、炉火床面は特定できなかった。床は、粘土ブロックを多量に含

SI21・22

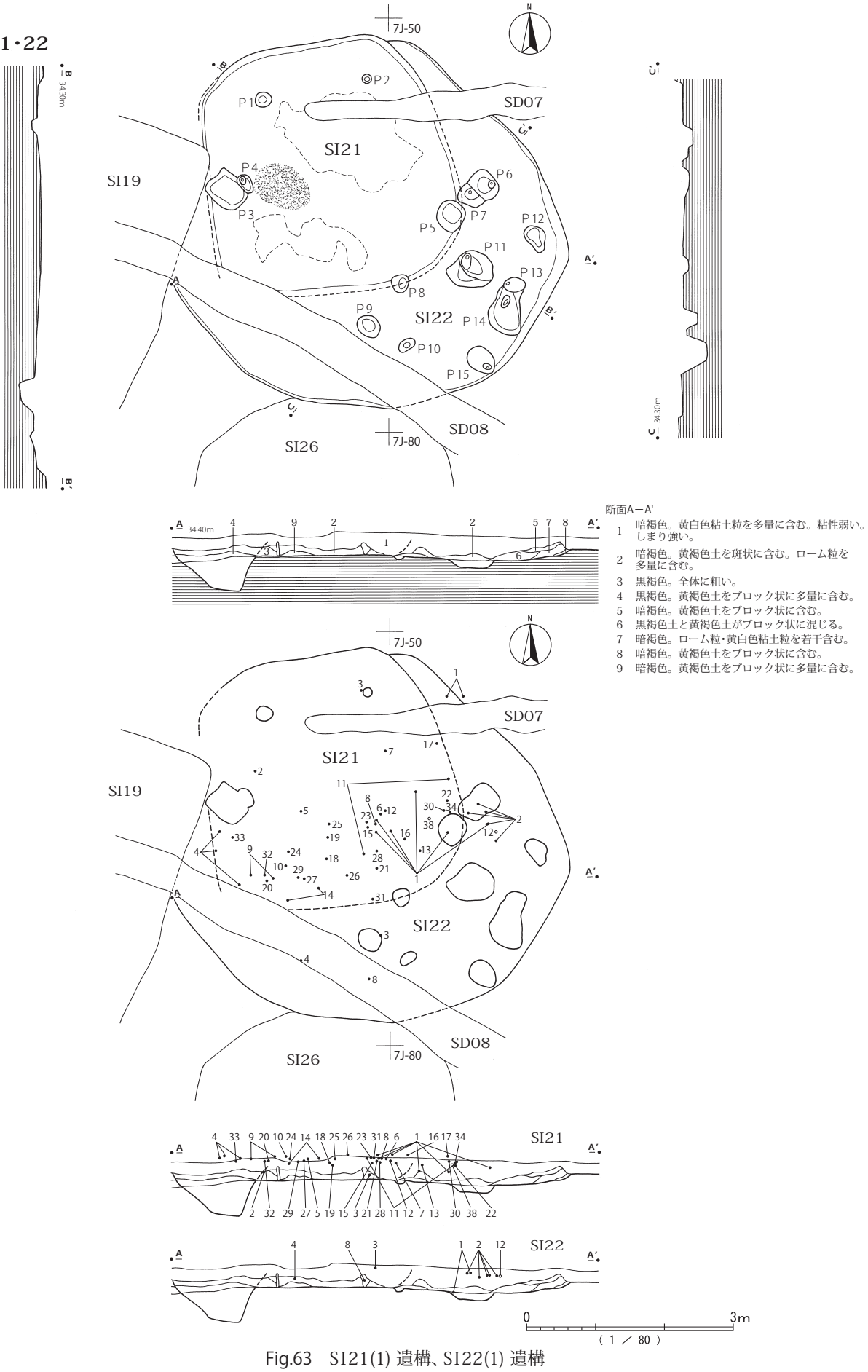
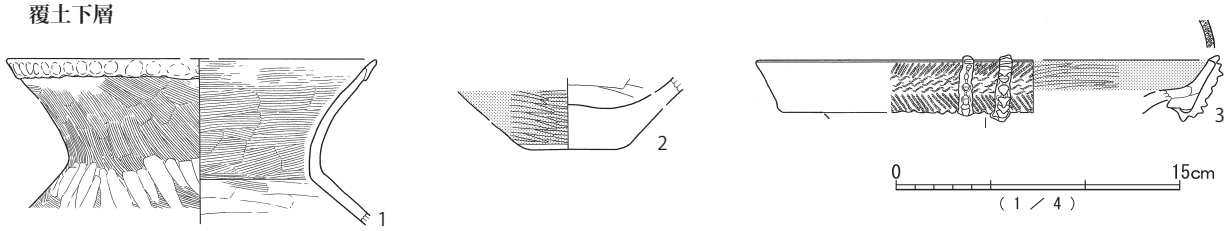


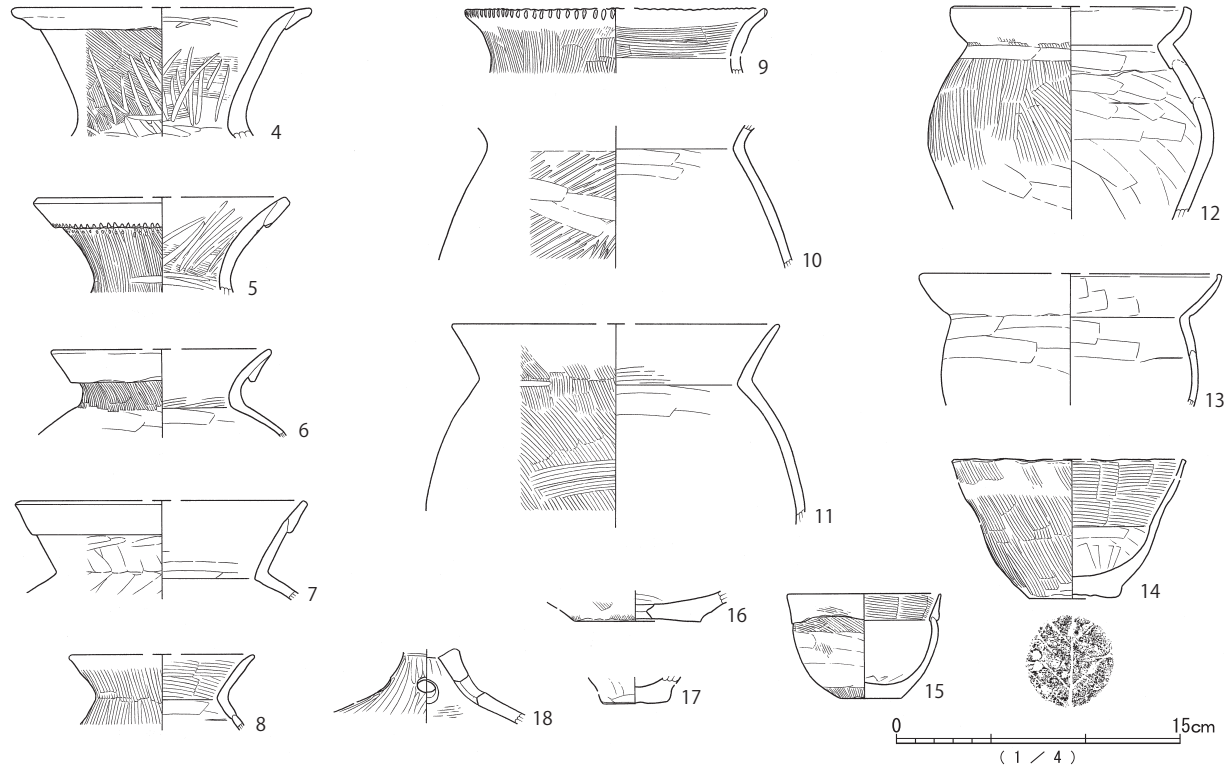
Fig.63　SI21(1) 遺構、SI22(1) 遺構

SI21

覆土下層



覆土上層



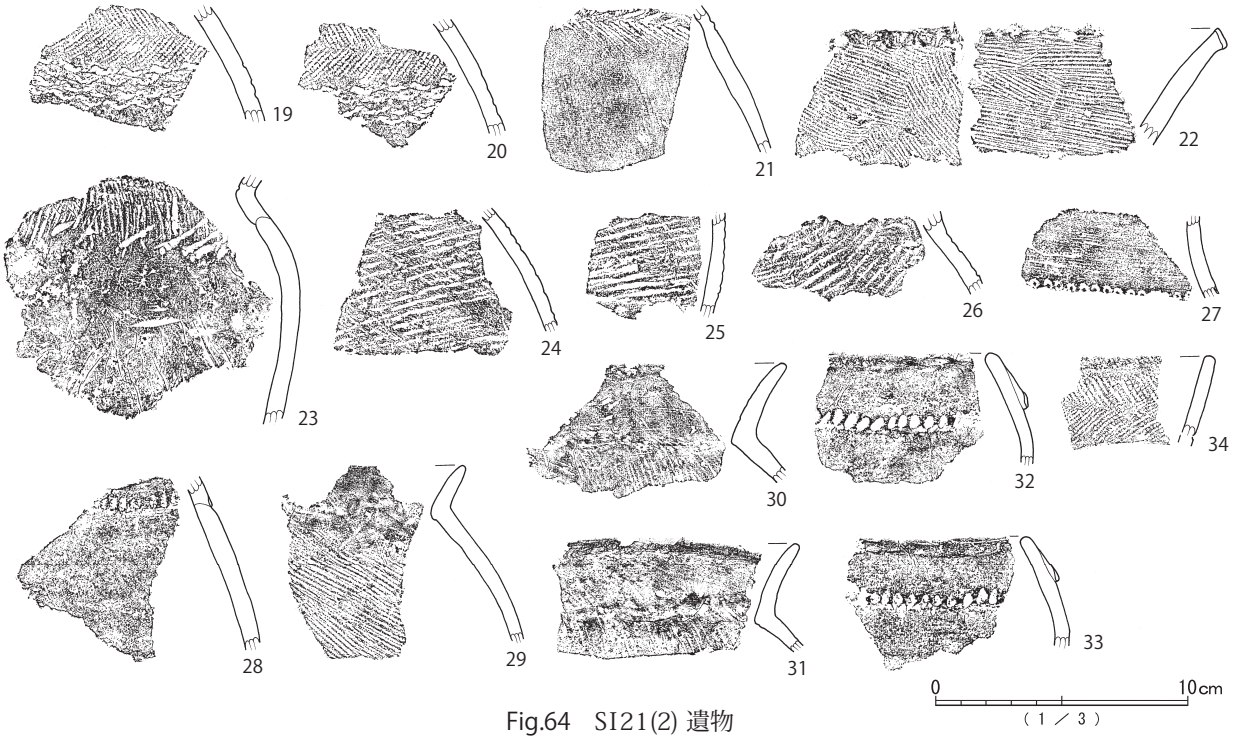
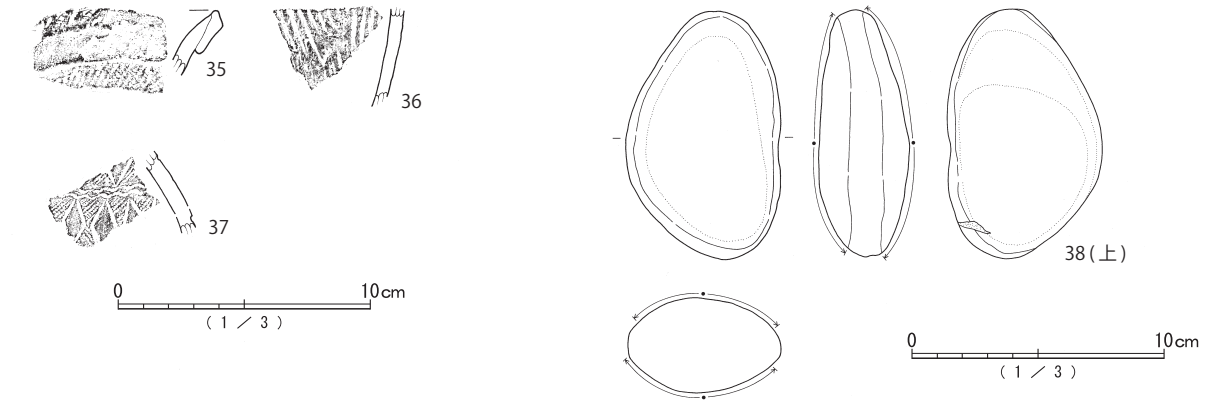


Fig.64　SI21(2) 遺物

SI21
一括



SI22

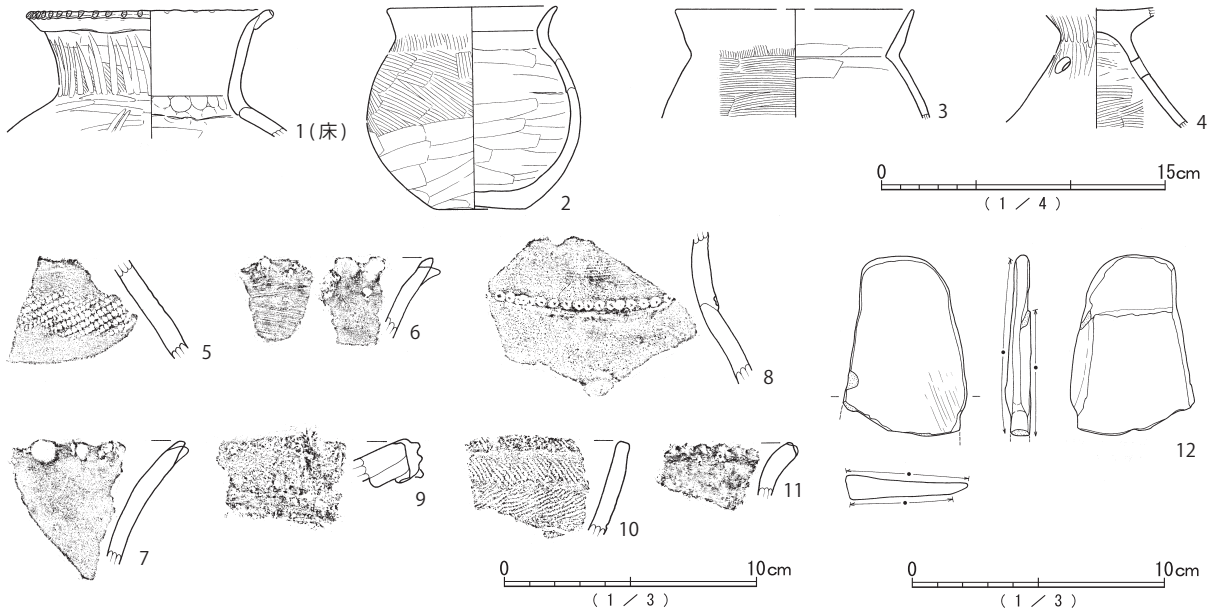


Fig.65　SI21(3) 遺物、SI22(2) 遺物

む貼り床である。

土器は、和泉式を主体とし、覆土から多量に出土した。床面出土の土器は限られているが、南西隅P8を中心に1～4が出土している。土器以外では、39が磨石、40が磨敲石、41が磨石、42が砥石である。

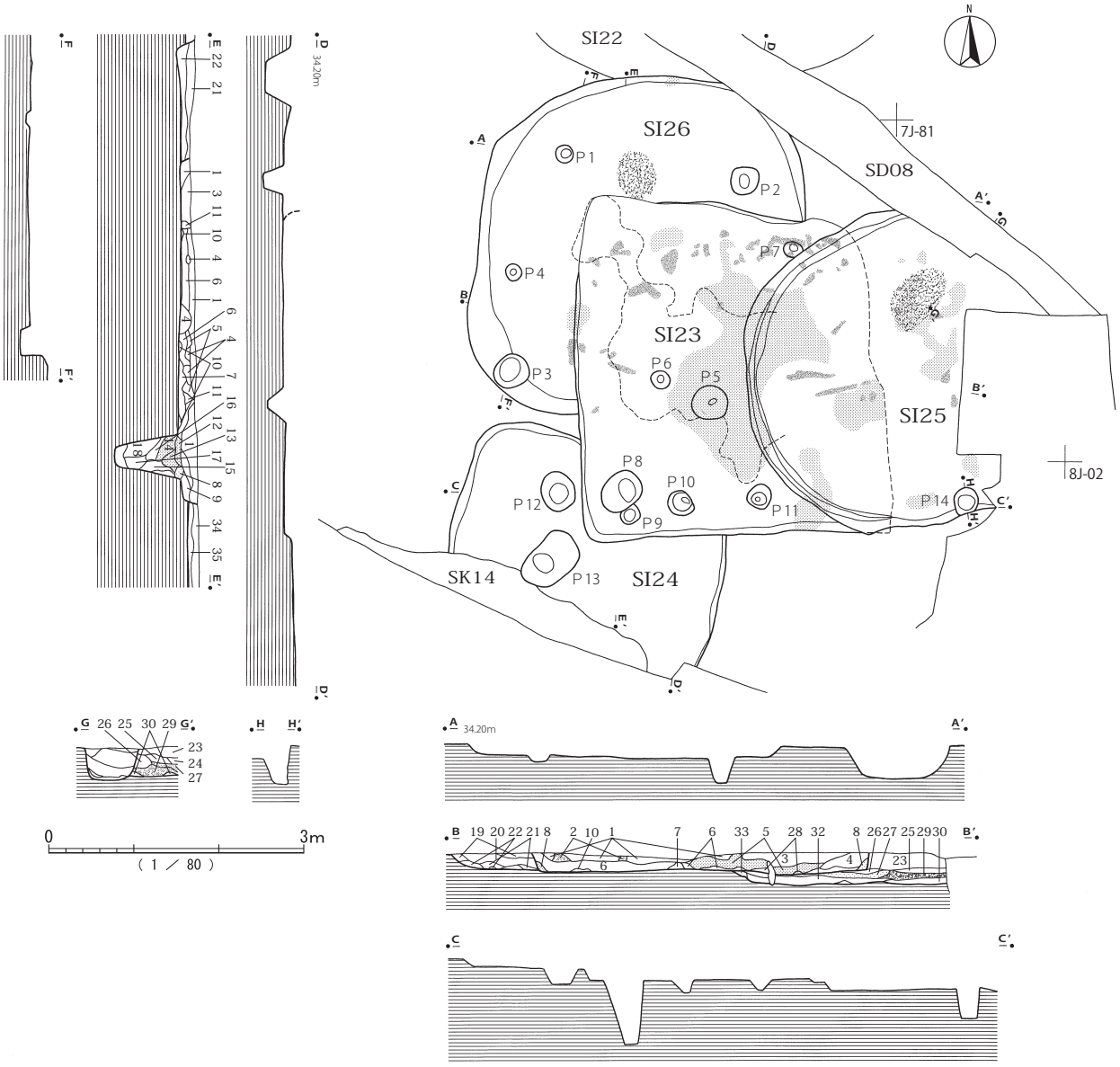
本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI24（Fig.66・67・69、PL.18・50・104）

SI24は、A地点8I−09区他に所在する。SI23・SK14と重複し、本遺構が最も古い。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.14m程度である。竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、竪穴規模は東西で3.36mを測る。主軸方位はN−20.0°−Wである。主柱穴は検出できなかった。P13は深さ0.62mを測るが、本竪穴にともなうかどうかは不明。炉は、SI23との重複で失われた可能性がある。床は、黄白色粘土ブロックを主体とする貼り床である。火災の痕跡は認められなかった。

土器は、いずれも床面から0.4m程度上から出土しているが、時期的にはほぼ限定される。土器以

SI23・24・25・26

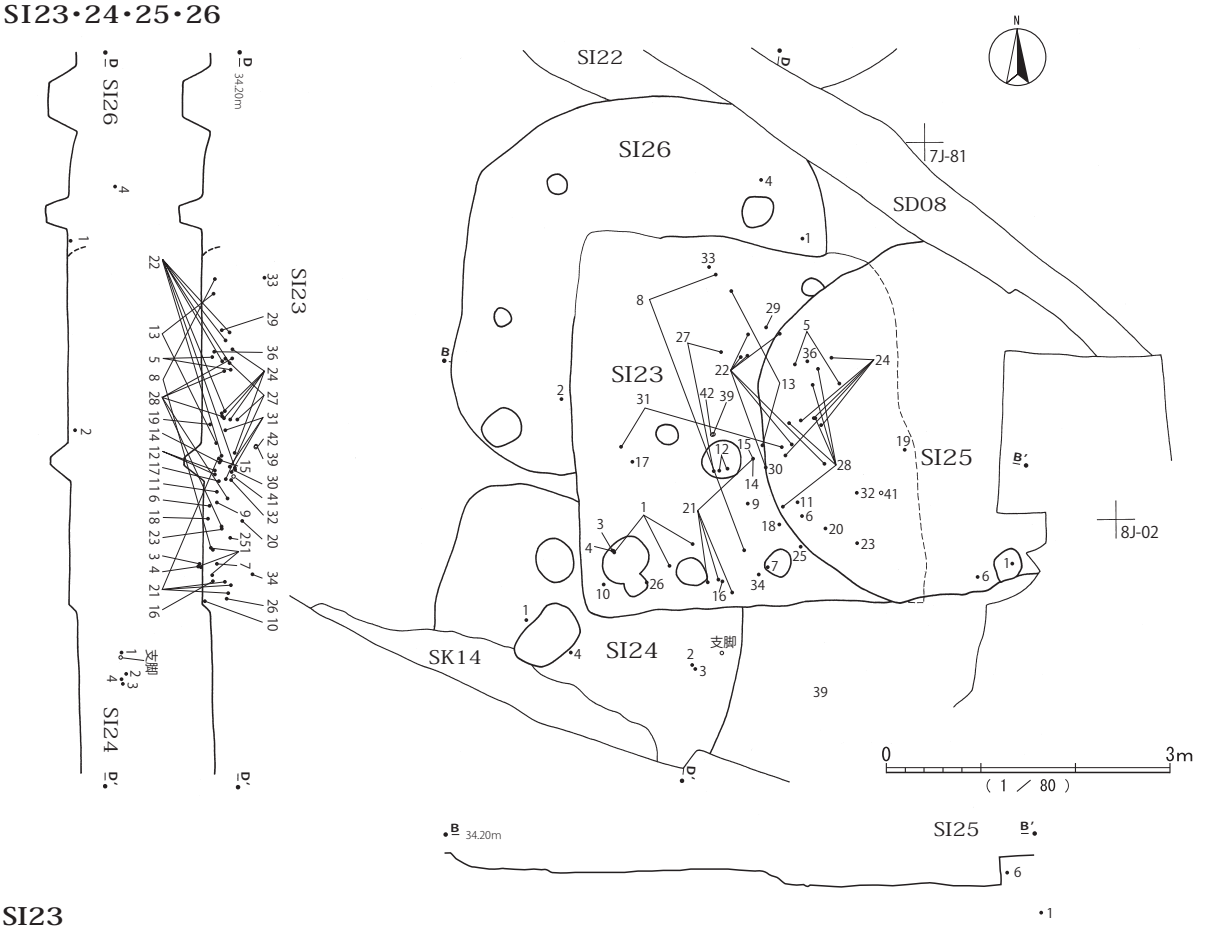


断面B－B'・E－E'・G－G'

1　暗褐色。ローム粒を少量含む。
2　焼土・炭化物を含む。
3　暗褐色。ローム粒を少量含む。
4　黒褐色。炭化材を含む。
5　黒褐色。焼土粒をやや多量に含む。
6　黒褐色。ローム粒を少量含む。
7　黒褐色。ローム粒をまばらに含む。
8　暗赤褐色。焼土粒を多量に含む。
9　暗褐色。ローム粒をまばらに含む。
10　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックをやや多量に含む。
11　黄白色粘土ブロック。暗褐色土を斑状に含む。
12　黒褐色。炭化粒・焼土粒・ローム粒をやや多量に含む。
13　暗赤褐色。焼土粒・ローム粒を多量に、炭化粒をやや多く含む。
14　淡黄褐色。粘土ブロック主体。粘土粒を多く含み、しまりがない。
15　暗褐色。焼土粒を含む。ローム粒をやや多量に含む。
16　淡黄褐色。ローム粒を少量含む。
17　淡黄褐色。ローム粒をやや多量に含む。
18　淡黄褐色。10mm大のロームブロックを多量に含む。
19　褐色。焼土粒をわずかに含む。
20　暗褐色。ローム粒を少量含む。
21　暗褐色。5mm大以下のローム粒を少量含む。
22　暗褐色。ローム微粒を多く含み、炭化粒を少量含む。
23　暗褐色。黄白色粘土粒をやや多量に含む。
24　暗褐色。23層より粘土粒が少ない。
25　暗黄褐色。ローム粒・黄白色粘土粒を多量に含む。
26　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
27　暗赤褐色。焼土粒をやや多量に含む。
28　暗赤褐色。焼土粒・黄白色粘土ブロックをやや多量に含む。
29　黒褐色。炭化材を多量に含む。
30　暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。
31　黒褐色。30mm大の黄白色粘土ブロック・ローム粒・焼土粒を少量含む。
32　黄白色粘土ブロック。
33　暗黄褐色。ローム粒を多く含み、焼土粒を若干含む。
34　暗褐色土・ローム粒をやや多量に含む。
35　暗褐色土・黒褐色土・ローム粒を多量に含む。

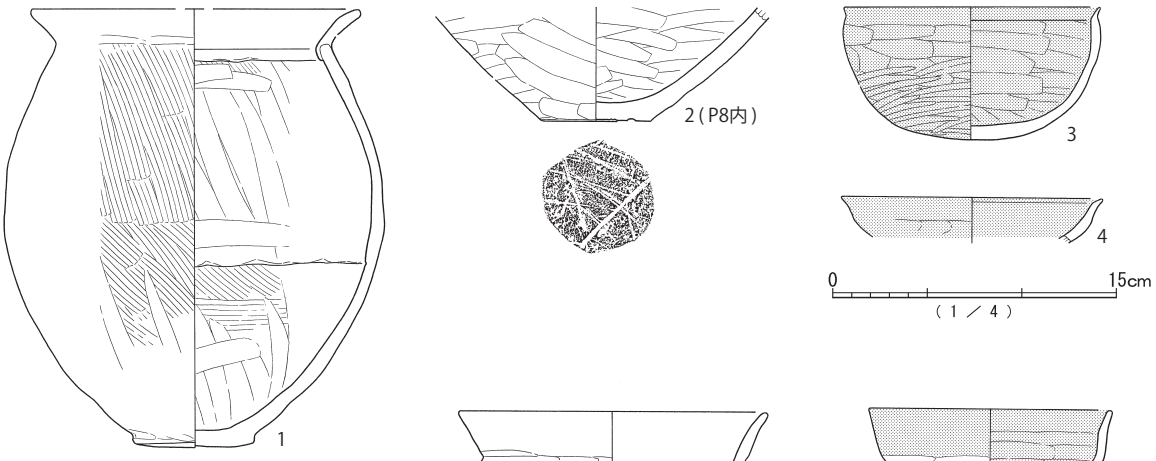
Fig.66　SI23(1) 遺構、SI24(1) 遺構、SI25(1) 遺構、SI26(1) 遺構

SI23・24・25・26



SI23

床面付近



覆土下層

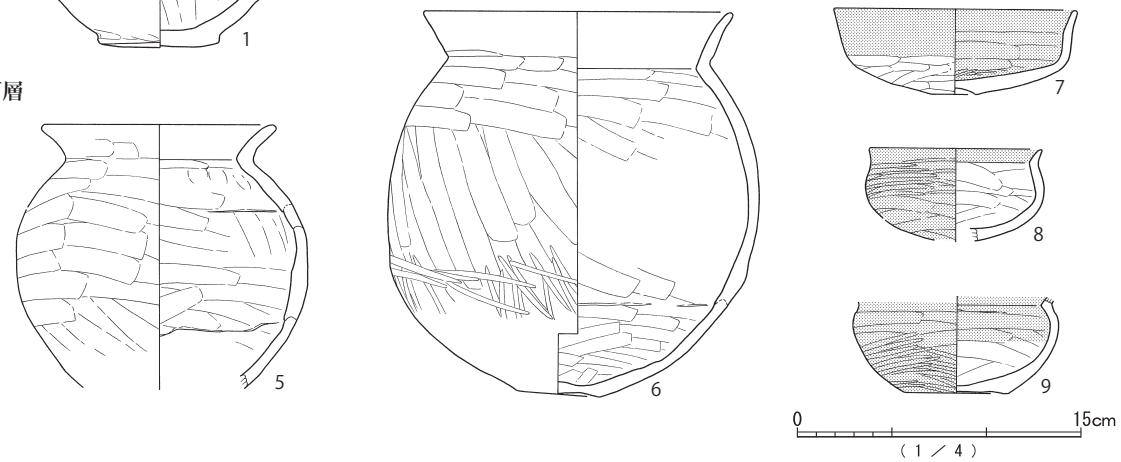
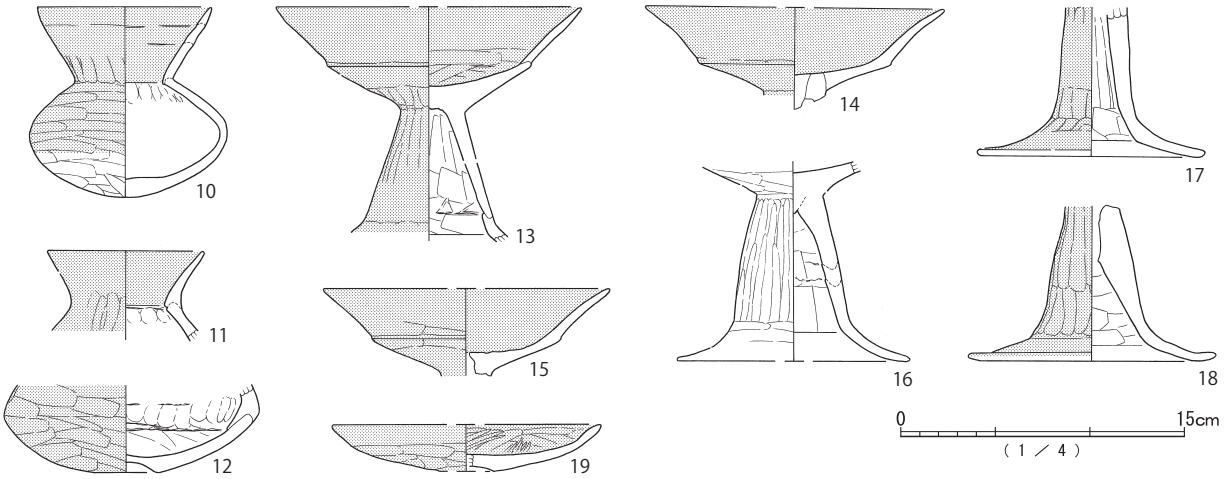


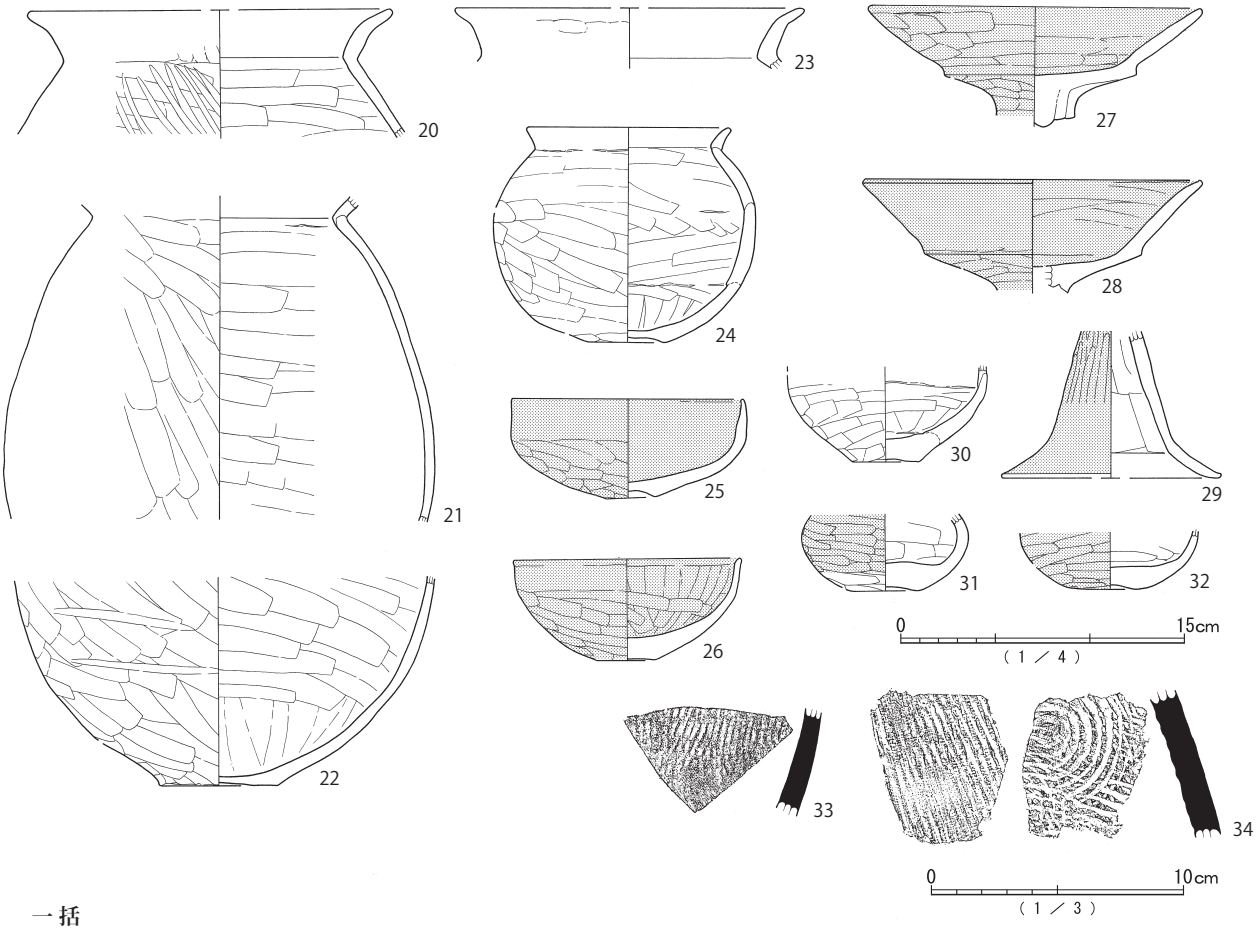
Fig.67　SI23(2) 遺構遺物、SI24(2) 遺構、SI25(2) 遺構、SI26(2) 遺構

SI23

覆土下層



覆土上層



一括

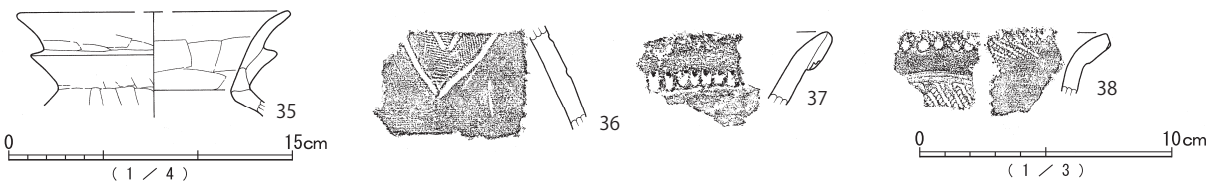
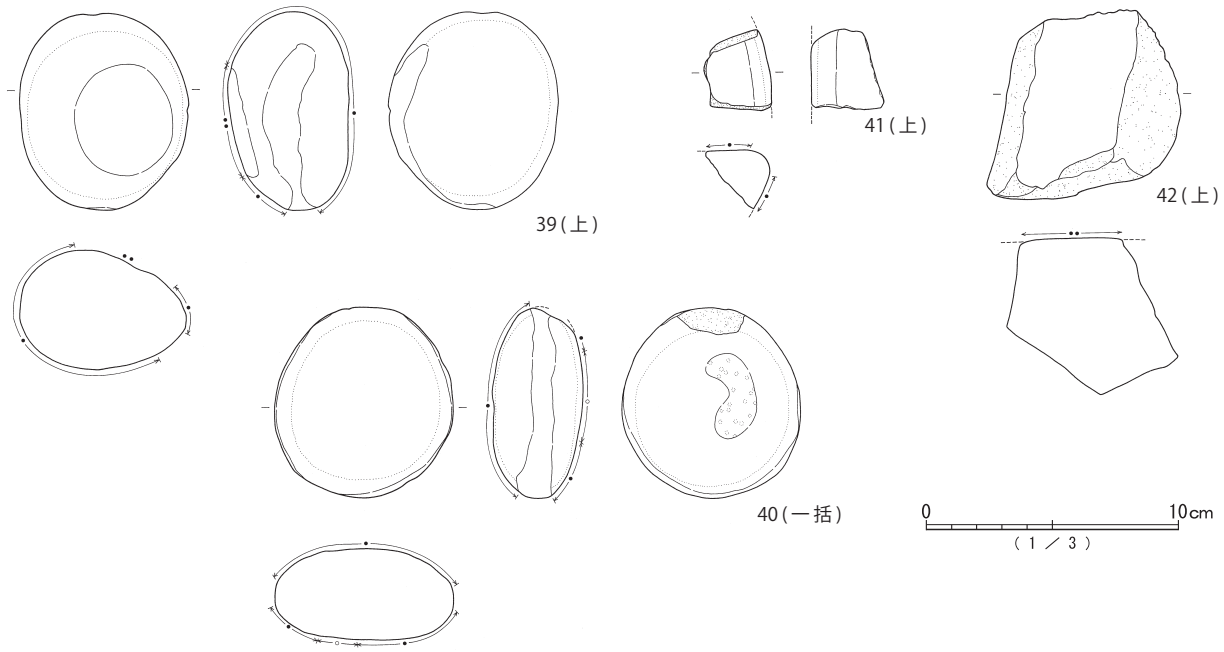
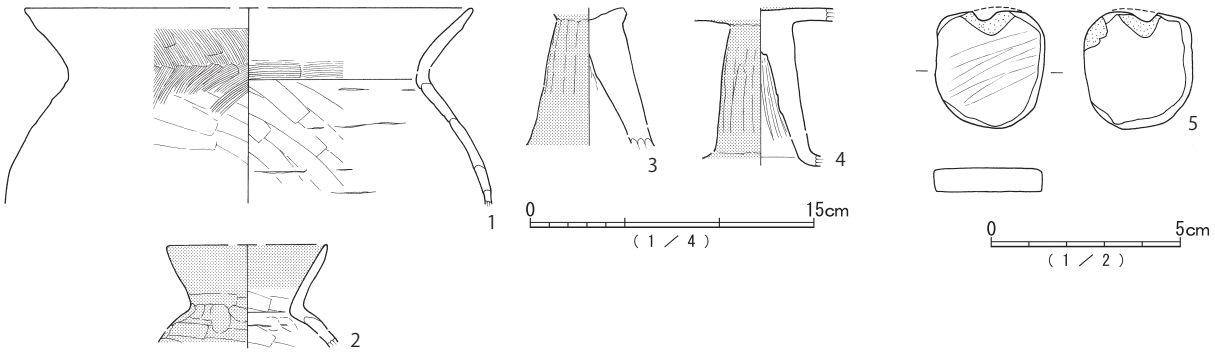


Fig.68　SI23(3) 遺物

SI23



SI24



SI25

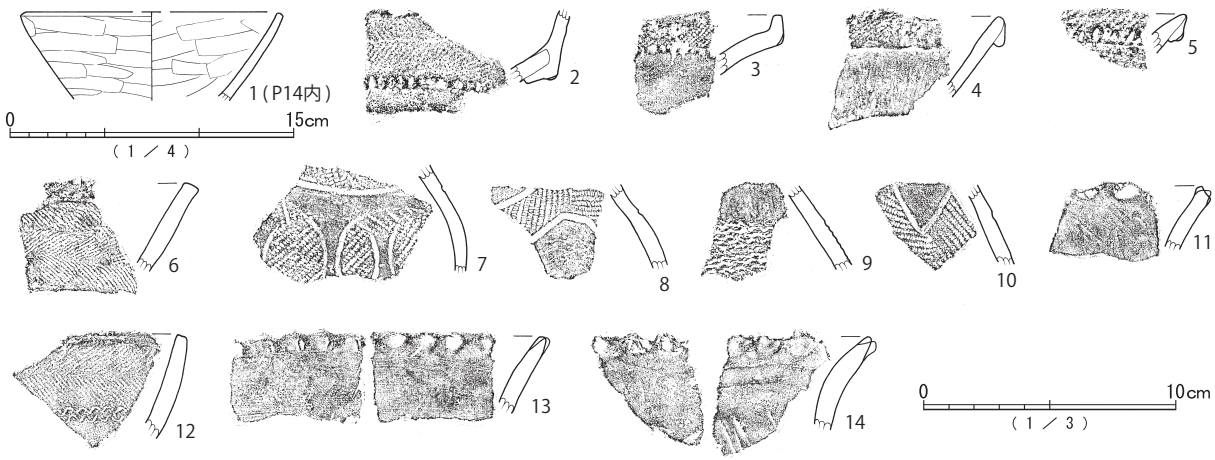


Fig.69　SI23(4) 遺物、SI24(3) 遺物、SI25(3) 遺物

SI26

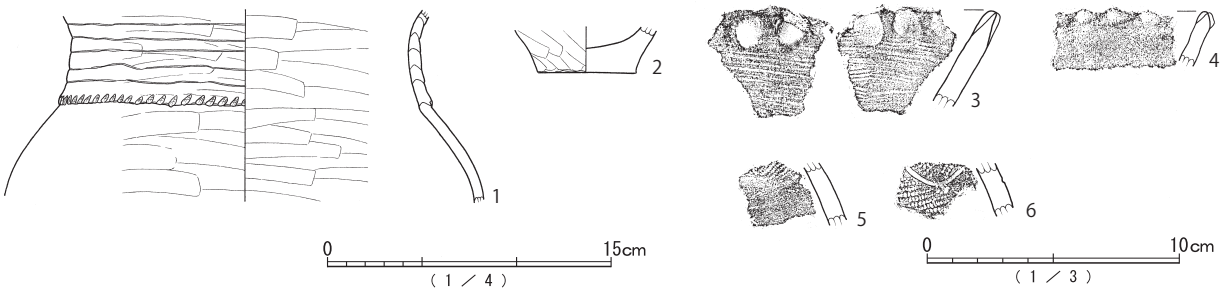


Fig.70　SI26(3) 遺物

外では、5が土器片利用の円盤である。他に、土製支脚片が出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代前期南岩崎4a期と推定しておく。

SI25（Fig.66・67・69、PL.18・50・77・94）

SI25は、A地点7J−91区他に所在する。SI23・26、SD08と重複し、本遺構に対してSI23・SD08が新しく、SI26との新旧関係は明らかではない。東側は確認調査坑によって破壊されている。黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.4m程度であり、壁は2段に掘り込まれている。重複する竪穴住居群の中で最も深く、SI23に対して約0.16m深い。竪穴平面形態は円形を呈し、竪穴規模は南北遺存部で3.75mを測る。主軸方位はN−2.0°−Eである。主柱穴は検出できなかった。P14は貯蔵穴である。炉は長軸長0.83mを測るが、掘り込みは明確ではない。黄白色粘土層を床面とし、貼り床構造ではなかった。本竪穴覆土には、粘土を主体とする層があり、その上下とくに下部から焼土・炭化物を広範に検出した。焼土・炭化物層も、床面よりやや浮いた状態であったため、被災等による火災は想定しにくい。粘土層を含め、その成因は明らかではない。

P14内より小形の壺形土器口縁部1が出土している。いずれも小破片ではあるが、宮ノ台式を主体とする。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1c期と推定する。

SI26（Fig.66・67・70、PL.18・51・77・94）

SI26は、A地点7I−89区他に所在する。SI22・23・25、SD08と重複し、本遺構に対してSI23、SD08が新しく、SI22・SI25との新旧関係は明らかではない。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.22m程度である。竪穴平面形態は楕円形を呈し、全体規模は4.20m（主軸）×3.90m、確認面掘形面積は13.73㎡を測る。主軸方位は、N−11.0°−Eである。P3・4は貯蔵穴である。P1・2は主柱穴の可能性もあるが、深さはP1が0.05m、P2が0.26m程度と浅い。炉は、長軸長0.59mを測るが、掘り込みは浅い。火災の痕跡は認められなかった。

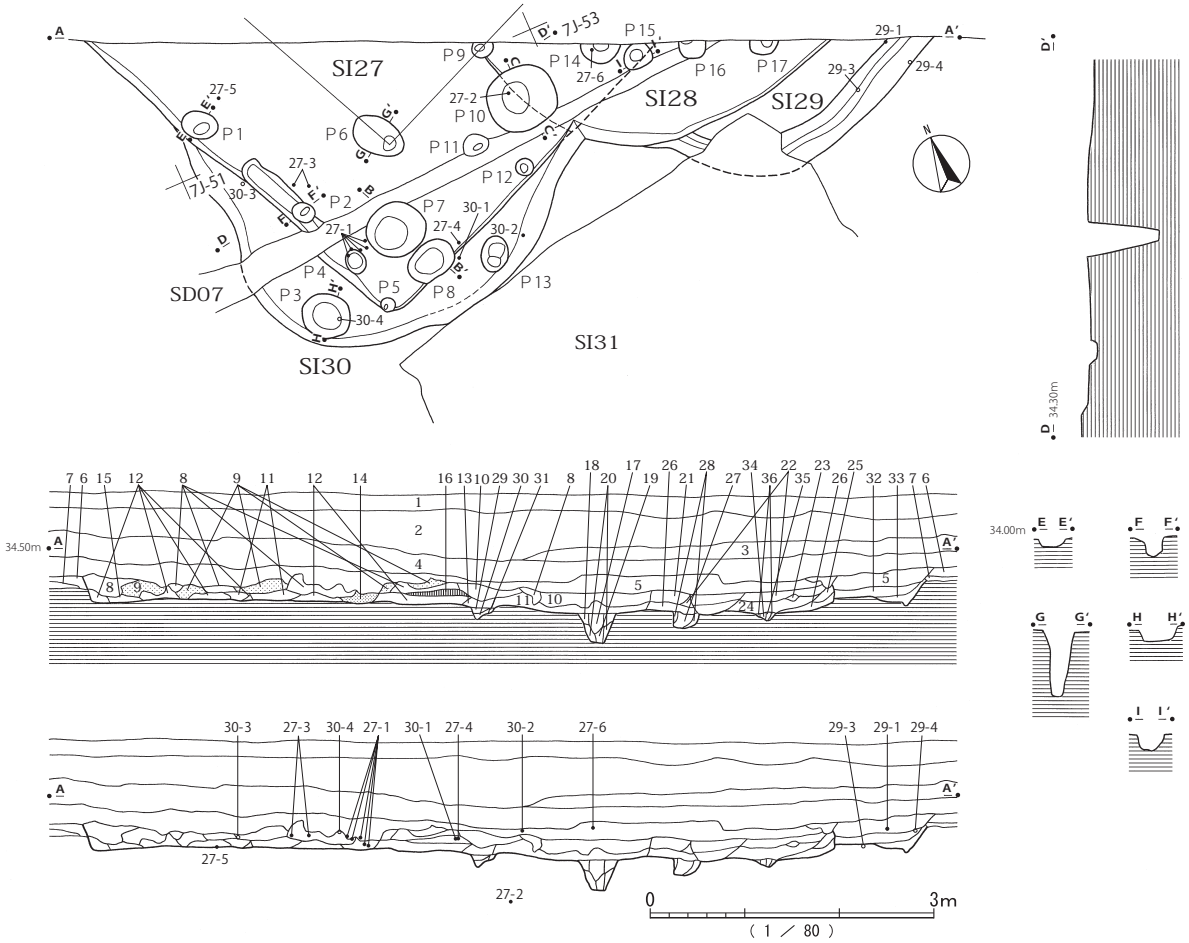
1の口頸部輪積痕の甕形土器が、床面直上から出土している。

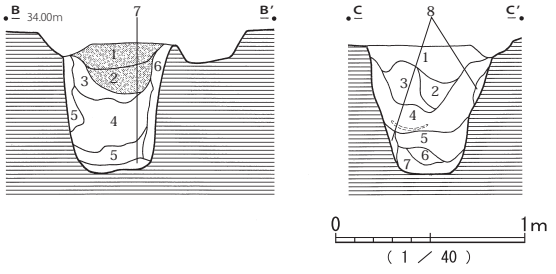
本竪穴の時期は、弥生時代後期南岩崎2b期と推定する。

SI27（Fig.71・72、PL.19・51・82）

SI27は、A地点7J−42区他に所在する。SI28・29・30、SD07と重複し、本遺構に対してSD07が

SI27・28・29・30





断面B－B'
1　暗褐色。ローム微粒を少量含む。下部に炭化材が集中する。
2　暗褐色。ローム微粒を多く含み、焼土粒を少量含む。炭化材を全体に含む。
3　暗黄褐色。20mm大のロームブロックをやや多く、ローム粒を少量含む。
4　暗褐色。黄白色粘土粒を微量含む。粒子粗い。
5　暗褐色。5mm大のローム粒・黄白色粘土粒を少量含む。
6　黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
7　黒褐色。30mm大のロームブロック・ローム粒を少量含む。

断面C－C'
1　暗褐色。ローム粒をやや多量に含む。黄白色粘土粒・焼土粒を少量含む。
2　黒褐色。ローム粒をやや多量に含む。
3　暗褐色。焼土を含み、ローム粒をやや多量に含む。
4　暗褐色。褐色土、5mm大ローム粒、黄白色粘土粒を含む。
5　黒褐色土と暗褐色土。黄白色粘土粒を少量含む。粘性あり。
6　橙色砂質土。黒褐色土を含む。
7　黒褐色。粘性ややあり。しまり欠く。
8　橙色砂質土。しまり欠く。

断面A－A'
1　表土。
2　暗褐色。粒子粗い。
3　暗褐色。10mm大の焼土ブロックを少量含む。粒子密。しまり強い。
4　暗褐色。粒子粗い。
5　暗褐色。粒子粗い。
6　褐色。
7　黄褐色(ソフトローム)。
8　暗褐色。20mm大の炭化物ブロックを少量含む。
9　暗褐色。20mm大の焼土ブロック少量・焼土粒をやや多量に含む。
10　暗褐色。5mm大の黄白色粘土粒を少量含む。
11　暗褐色。10層よりやや明るい。
12　黒褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックをやや多量に含む。
13　暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
14　暗褐色。30mm大の焼土ブロック・ロームブロックを多量に含む。炉か。
15　暗褐色。黄褐色土を含む。
16　黄白色粘土ブロックと黒褐色土の互層。貼り床状。
17　暗褐色。ローム微粒・炭化物微粒をやや多量に含む。
18　暗褐色。黄白色粘土粒をやや多量に含む。
19　暗褐色。黄褐色粘質土・ローム微粒を少量含む。
20　暗褐色。5mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。粘性あり。
21　黒褐色。20mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
22　暗褐色。ローム微粒をやや多量に含む。
23　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを少量含む。
24　暗褐色。5mm大の黄白色粘土粒をやや多量に含む。炭化粒を少量含む。
25　暗褐色。ローム粒を微量含む。
26　暗褐色。ローム粒を多量に含む。
27　暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを少量含む。
28　黄白色粘土ブロックと黒褐色土。
29　暗褐色。10mm大の白色粘土ブロックを含む。
30　黒褐色。粘土粒を少量含む。
31　白色粘土と黒褐色土。
32　暗褐色。ローム粒・焼土粒を少量含む。
33　暗褐色。29層より明るい。ローム粒をやや多量に含む。
34　黒褐色。黄白色粘土粒を含む。
35　暗褐色。10mm大のロームブロックを多量に含む。
36　黄白色粘土と黒褐色土。

Fig.71　SI27(1) 遺構、SI28(1) 遺構、SI29(1) 遺構、SI30(1) 遺構

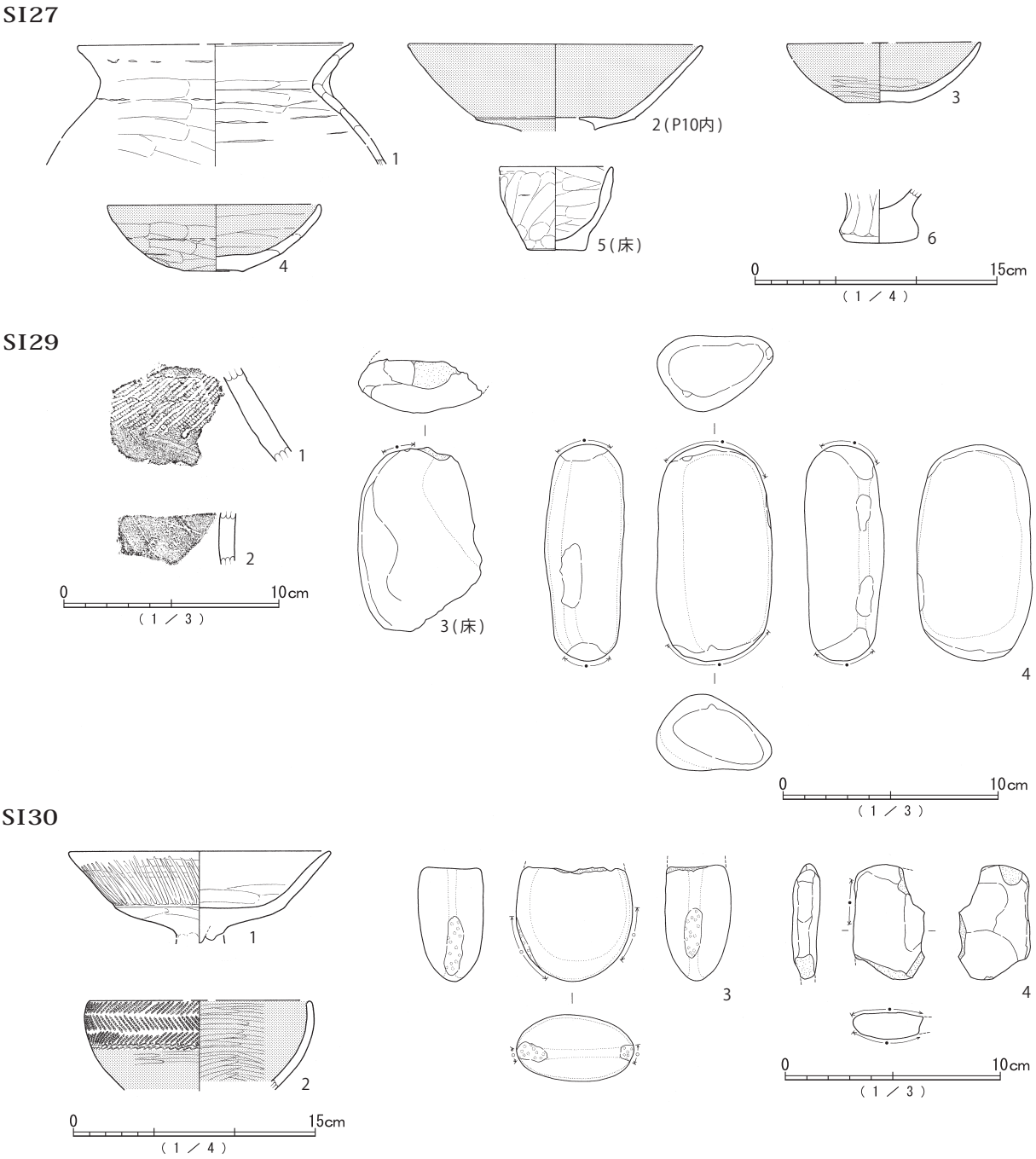


Fig.72　SI27(2) 遺物、SI29(2) 遺物、SI30(2) 遺物

新しく、SI28・29・30が古い。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.13m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、西辺検出部で南北4.38mを測る。主軸方位は、N－23.0°－Wである。主柱穴はP6である。P7・10は所謂貯蔵穴である。P10については、その位置関係に疑問を残すが、出土土器から判断して本竪穴の帰属とした。炉・カマドは検出できなかった。ただし、土層断面14層が炉に対応する可能性がある。本竪穴は、火災に遭った可能性があり、P7上層にも炭化材が落ち込んでいた。調査区際土層断面では、竪穴内の焼土の堆積が、床面やや上で認められたが、最下面は掘形の可能性がある。貼り床構造と考えるが、全体に床硬化面は明確ではなかった。壁溝・壁柱穴は不連続に認められた。

出土土器1・3・4は、床面やや上から出土している。ただし、調査面が掘形であるならば、ほぼ床面直上に相当する。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI28（Fig.71、PL.19）

SI28は、A地点7J−53区他に所在する。SI27・29・30、SD07と重複関係をもち、本遺構に対してSI27・SD07が新しく、SI29が古い。SI30との新旧関係は明らかではない。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは最大で0.2m程度である。部分的な検出であるが、竪穴平面形態は楕円形と推定できる。竪穴規模、主軸方位は明らかではない。Pitは、P14が本竪穴主柱穴の可能性もあるが明確ではない。貼り床は認められなかった。火災の痕跡は確認できなかった。

実測可能な出土土器は存在しない。本竪穴の時期は、竪穴平面形態から弥生時代と推定するが、細別時期を明らかにすることはできない。

SI29（Fig.71・72、PL.19・94・101）

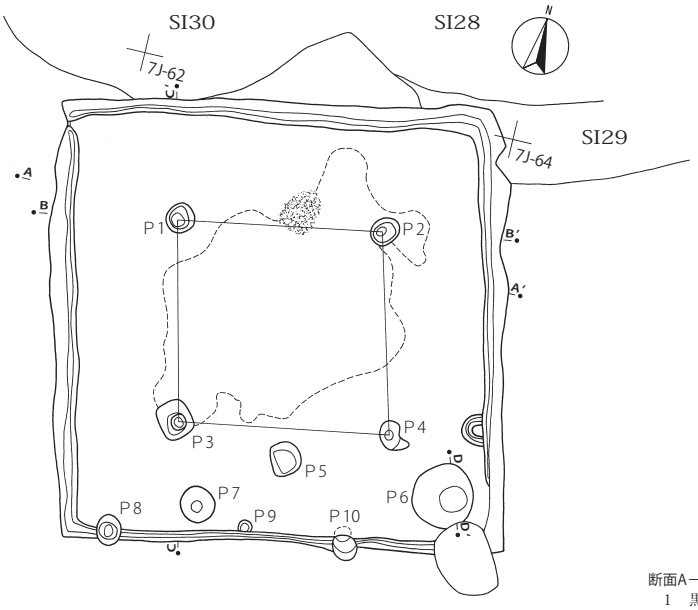
SI29は、A地点の7J−54区他に所在する。SI27・28・30・31、SD07と重複し、本遺構に対してSI27・28・31、SD07が新しく、SI30との新旧関係は明らかではない。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.16m程度である。床面レベルは、重複するSI28に対して約0.14m高い。部分的な検出であるが、竪穴平面形態は楕円形と推定する。竪穴規模・主軸方位は明らかではない。P14が主柱穴の可能性もあるが、帰属は不明。検出範囲では壁溝が連続する。貼り床は認められなかった。火災の痕跡は確認できなかった。

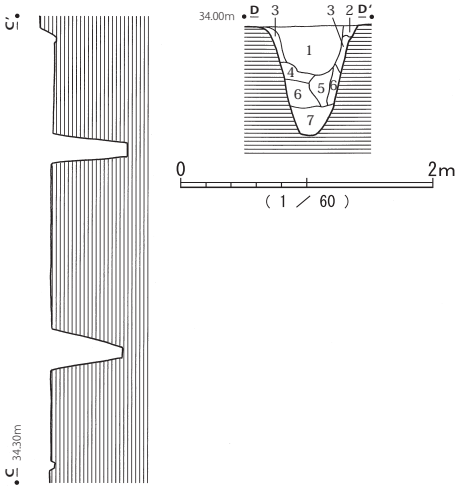
土器は、宮ノ台式の小破片が出土している。土器以外では、3が磨石、4が磨敲石である。本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1b期に推定しておく。

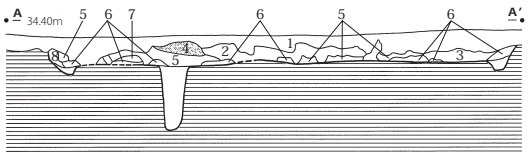
SI30（Fig.71・72、PL.19・51・82・94・101・102）

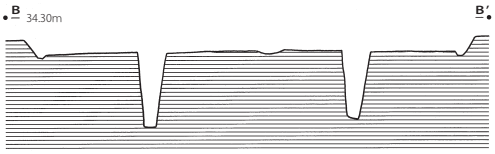
SI30は、A地点の7J−51区他に所在する。SI27・28・29・31、SD07と重複し、本遺構に対してSI27・SD07が新しい。SI31とは接している程度であるが、SI31の時期から判断するならば、SI31が新しい。SI28・29との新旧関係は明らかではない。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.16m程度で、重複するSI27とはほぼ同レベルであった。竪穴平面形態は、やや判然としないものの、楕円形ないし胴張り隅丸方

SI31



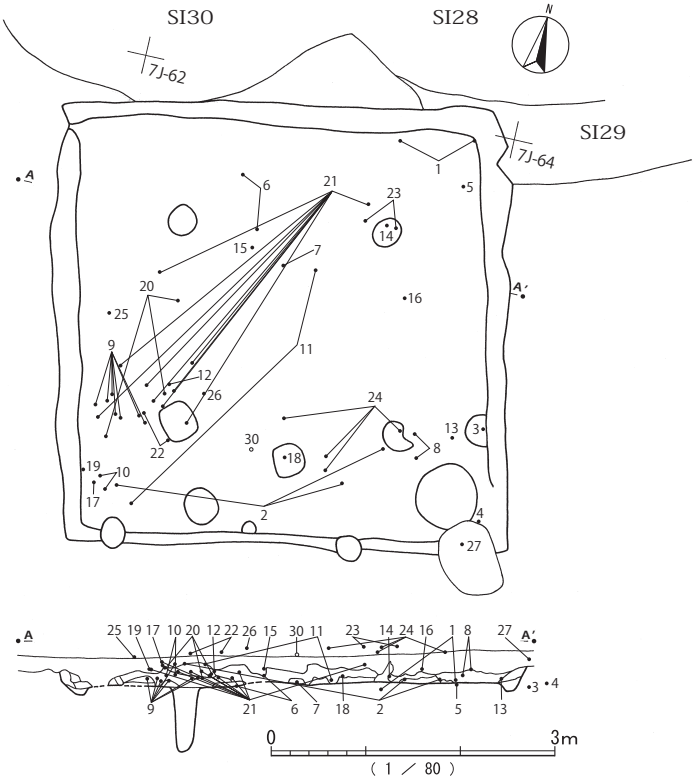






断面A－A'
1　黒褐色。ローム微粒を少量含む。粒子粗い。谷部埋没土。
2　暗褐色。30mm大のハードロームブロックを少量含む。ローム粒を多量に含む。
3　暗褐色。粒子細かく緻密。ローム微粒を微量含む。
4　暗褐色。炭化材を多量に、焼土ブロック少量含む。
5　黒褐色。ローム微粒・焼土微粒を少量含む。
6　暗黄褐色。暗褐色土に黄褐色土が斑状に混じる。
7　黄褐色。黄白色粘土が混じるハードローム。
8　黄褐色。ローム粒を多量に含む。

断面D－D'
1　暗褐色。ローム粒を少量、炭化粒・焼土粒を微量含む。
2　暗褐色。ローム粒を多量に含む。
3　暗褐色。黄白色粘土ブロック粒を多量に含む。
4　黄白色粘土・黒色土を少量含む。
5　黒褐色。ローム粒・黄白色粘土粒を多量に含む。
6　暗褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。
7　黄白色粘土粒と褐色土の混合。



床面付近

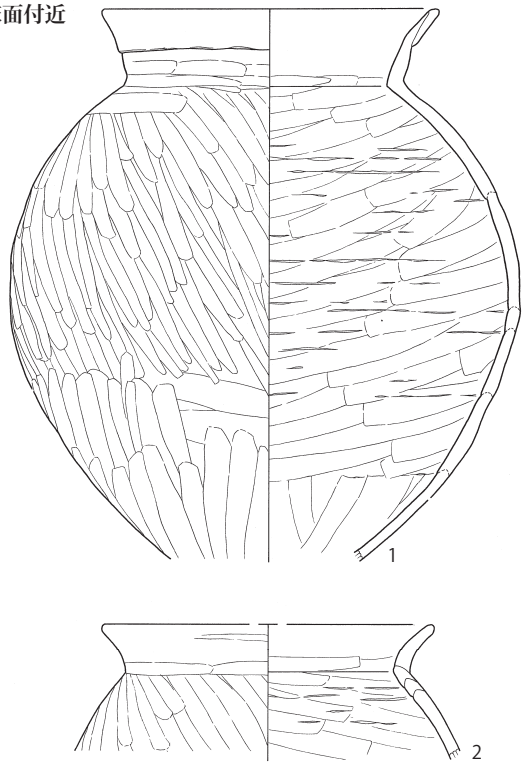
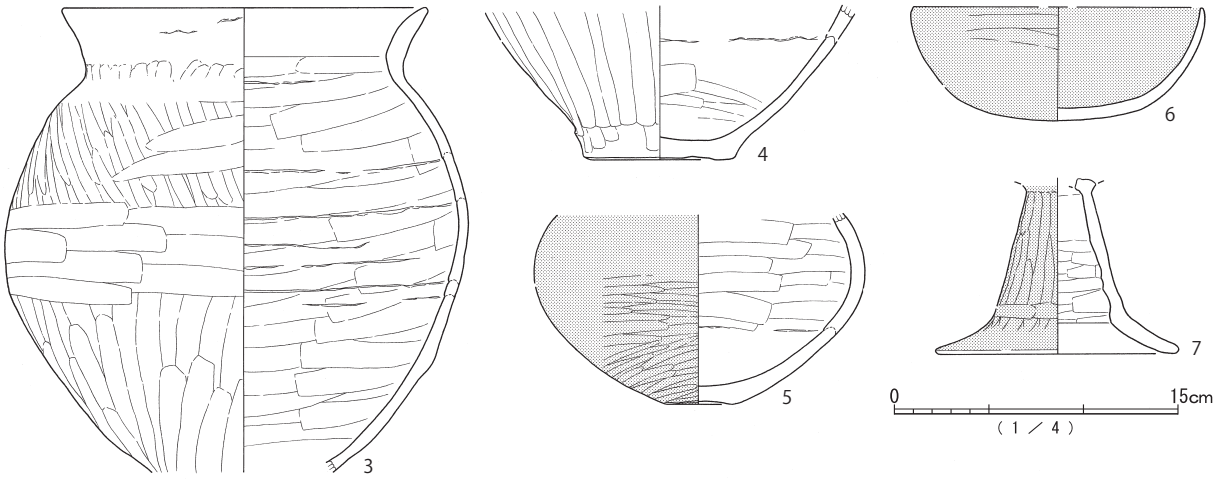


Fig.73　SI31(1) 遺構遺物

SI31

床面付近



覆土下層

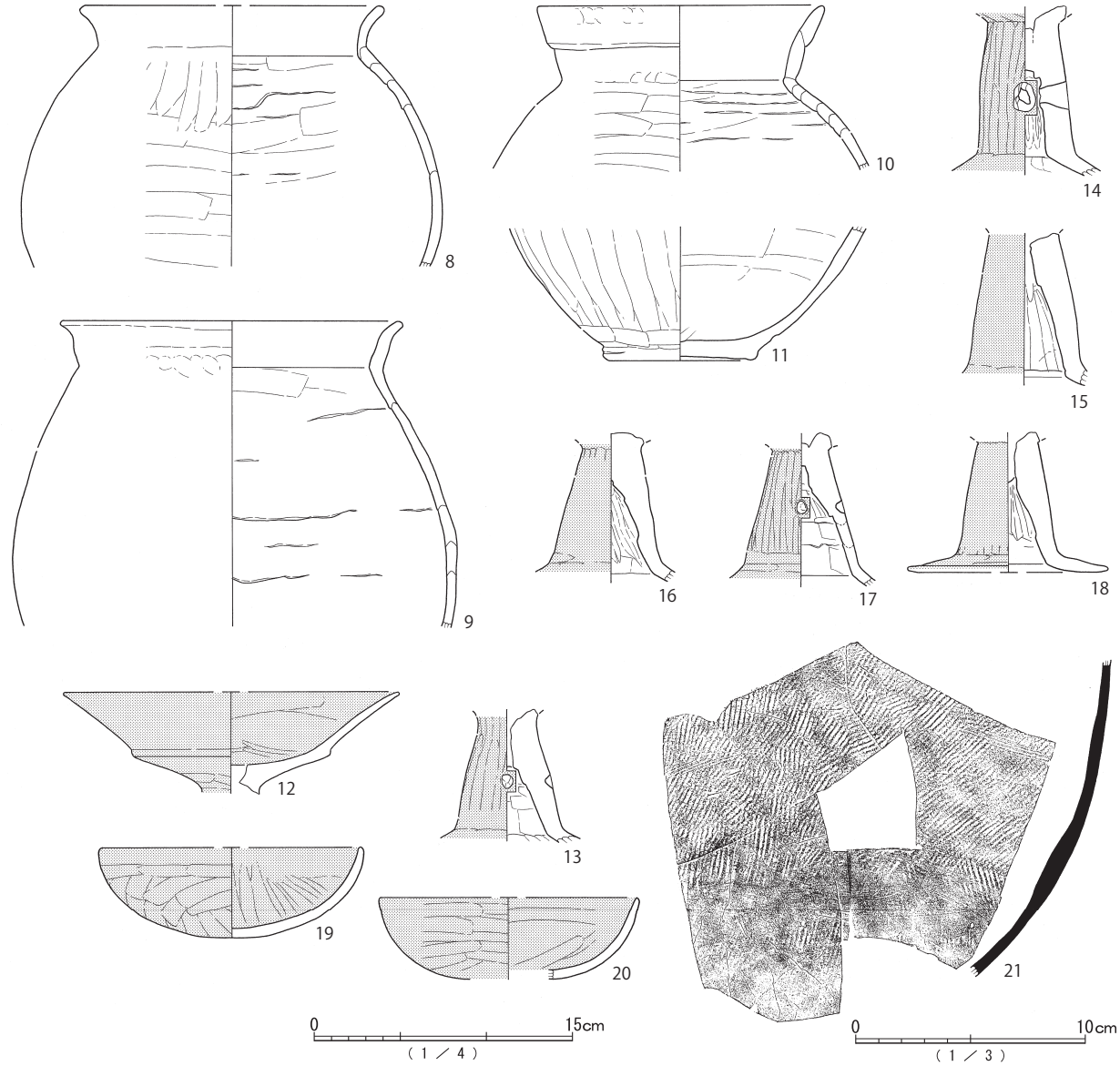


Fig.74　SI31(2) 遺物

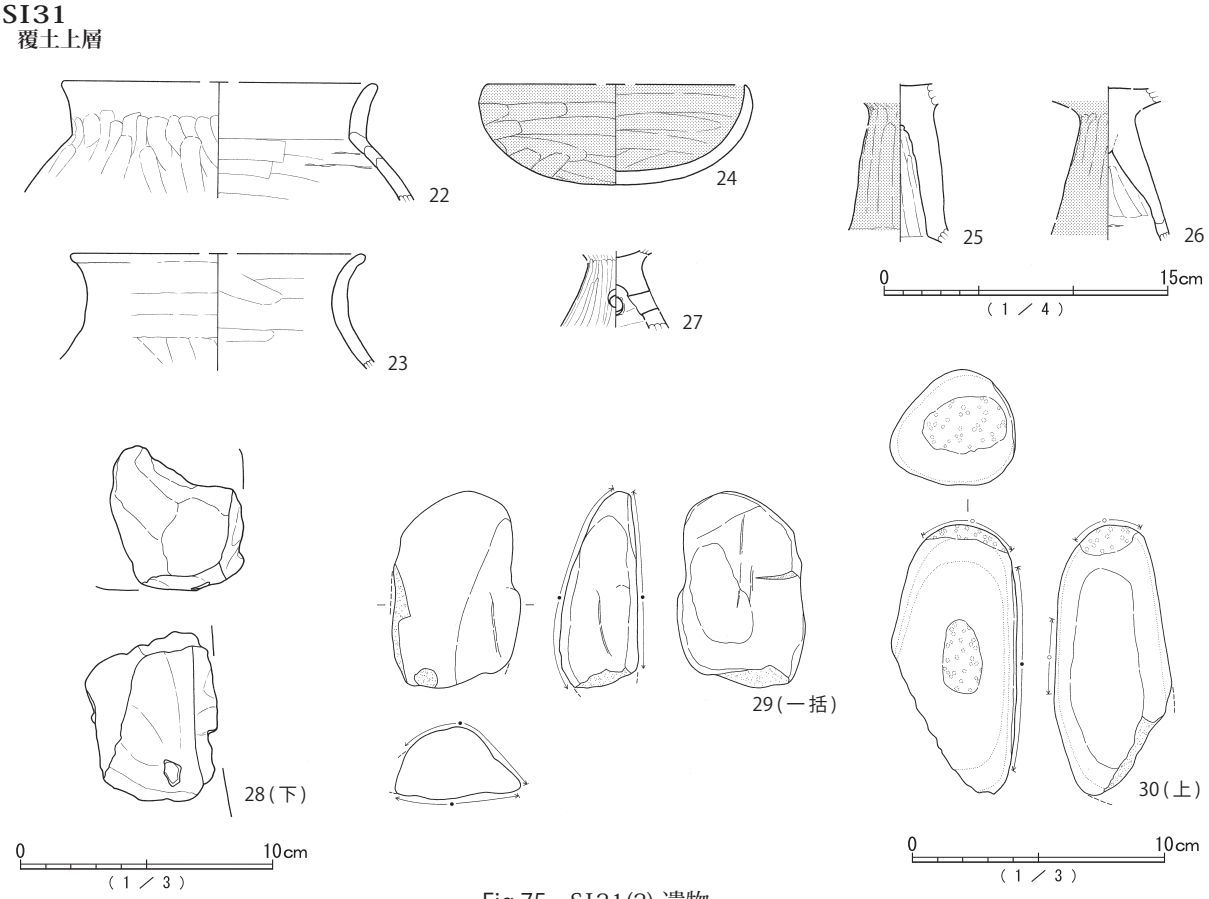


Fig.75　SI31(3) 遺物

形と考えられる。竪穴規模、主軸方位は明らかではないが、南東−北西方向で約3.5m程度の小形竪穴住居と推定する。主柱穴は認められない。炉も検出できなかった。P3は貯蔵穴の可能性もあるが、深さは0.11mと浅い。貼り床は認められなかった。

土器は、いずれも覆土からの出土である。土器以外では、3が敲石、4が砥石である。

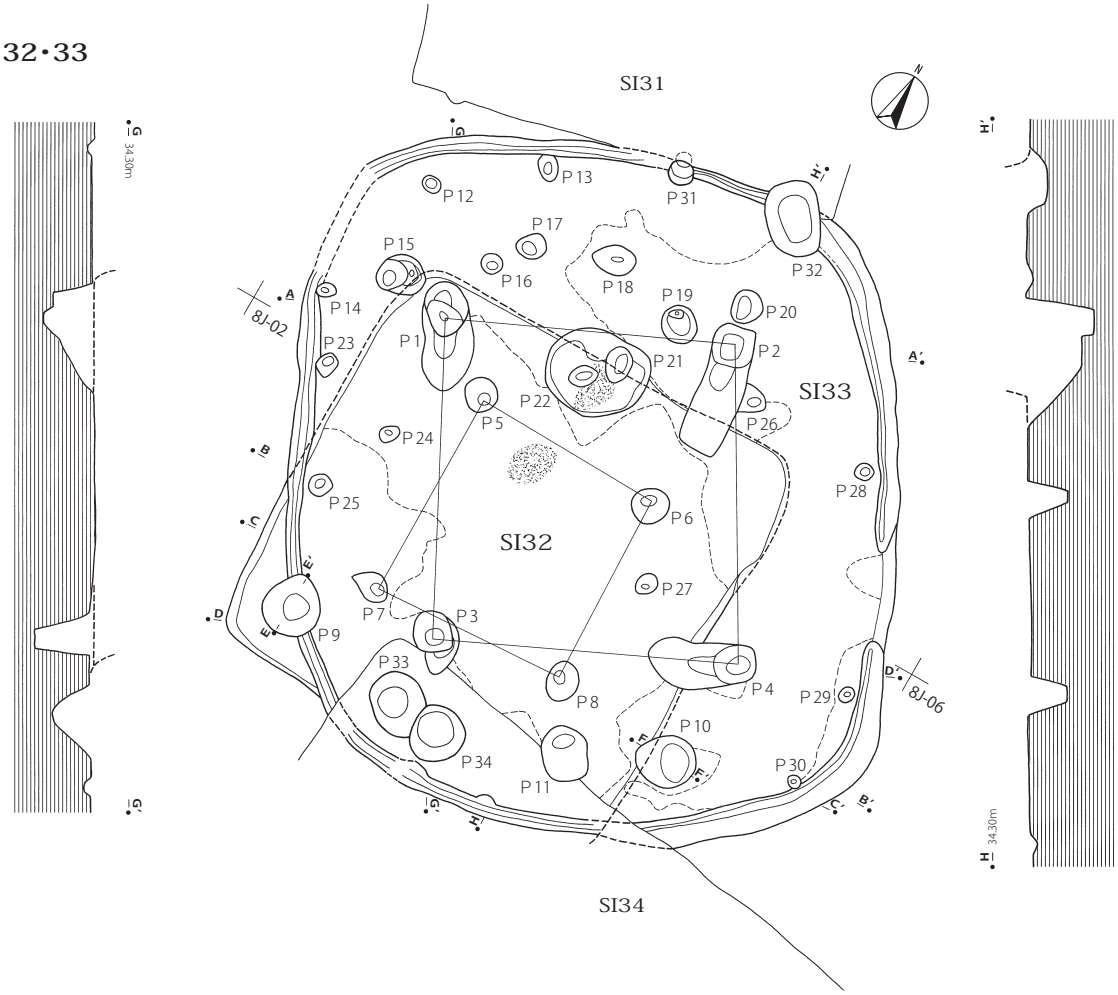
本竪穴の時期は、竪穴平面形態と2の椀（高杯）形土器から、弥生時代後期南岩崎2b期に比定しておく。

SI31（Fig.73〜75、PL.5・6・19・51・52・82・83・90・101・102・104）

SI31は、A地点7J−73区他に所在する。SI29・30・33と重複する。いずれも接している程度であるが、他がいずれも弥生時代と推定できることから、本遺構が最も新しい。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.17m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は4.65m（主軸）×4.86m、確認面掘形面積は22.48㎡を測る。主軸方位はN−12.0°−Wである。主柱穴はP1〜4である。P6は貯蔵穴である。炉は長軸長約0.5mを測る。掘り込みは明確ではなかった。床は貼り床であり、とくに南東部側は粘土ブロックを主体とする。硬化面は、竪穴中央部を中心に認められた。壁溝はほぼ全周する。覆土上層で、部分的に炭化物・焼土層が認められたが、火災に遭ったかどうかは明確ではない。

土器は、和泉式を主体として多量に出土している。1〜7は遺存遺物の可能性があり、とくに3は、東壁際に埋置されていた。底部を欠き、埋設部分の掘り上がりは、壁溝から溝が弧状に巡るような状

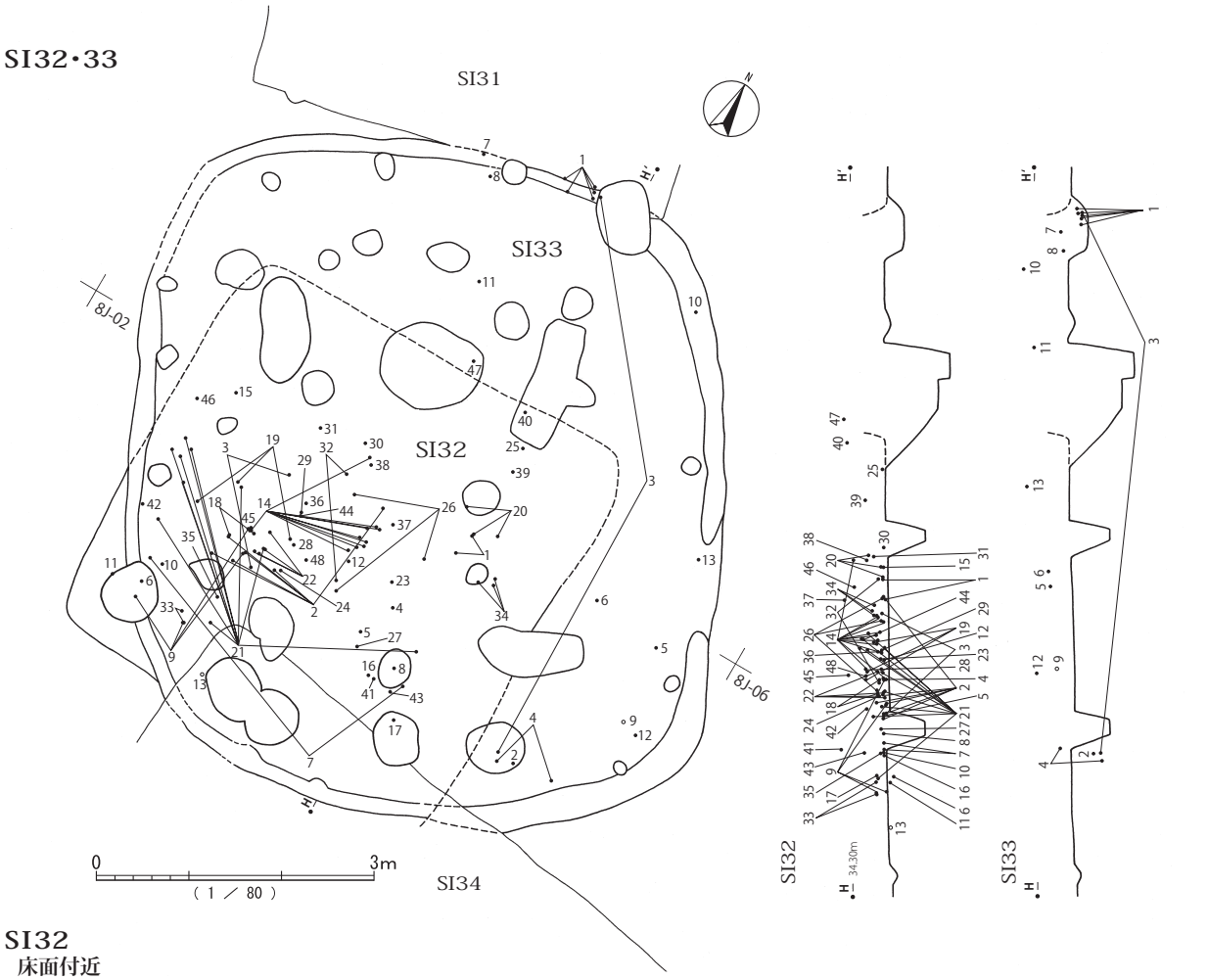
SI32・33



断面B－B'

1 暗褐色。淡褐色ブロックをわずかに含む。粒子粗い。しまりあまりない。谷部埋没土。
2 暗褐色。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。
3 黒褐色。ローム微粒を多量・炭化粒を多量に含む。しまりあまりなし。
4 褐色。5mm大のローム粒をやや多量に含む。暗褐色土を斑状に含む。しまり良い。
5 黒色。黄褐色土・黄白色粘土を含む。しまりに欠けるが粘性に富む。
6 黄褐色。ハードロームブロックが多い。
7 黒褐色。ローム微粒を多量・炭化粒を少量含む。しまりあまりなし。
8 暗褐色。ローム粒を少量含む。しまりあり。
9 褐色。5mm大のローム粒をやや多量に含む。暗褐色土を斑状に含む。しまり良い。
10 黒色。黄褐色土・黄白色粘土を含む。しまりに欠けるが粘性に富む。
11 黄褐色。ハードロームブロックが多い。

Fig.76　SI32(1) 遺構、SI33(1) 遺構



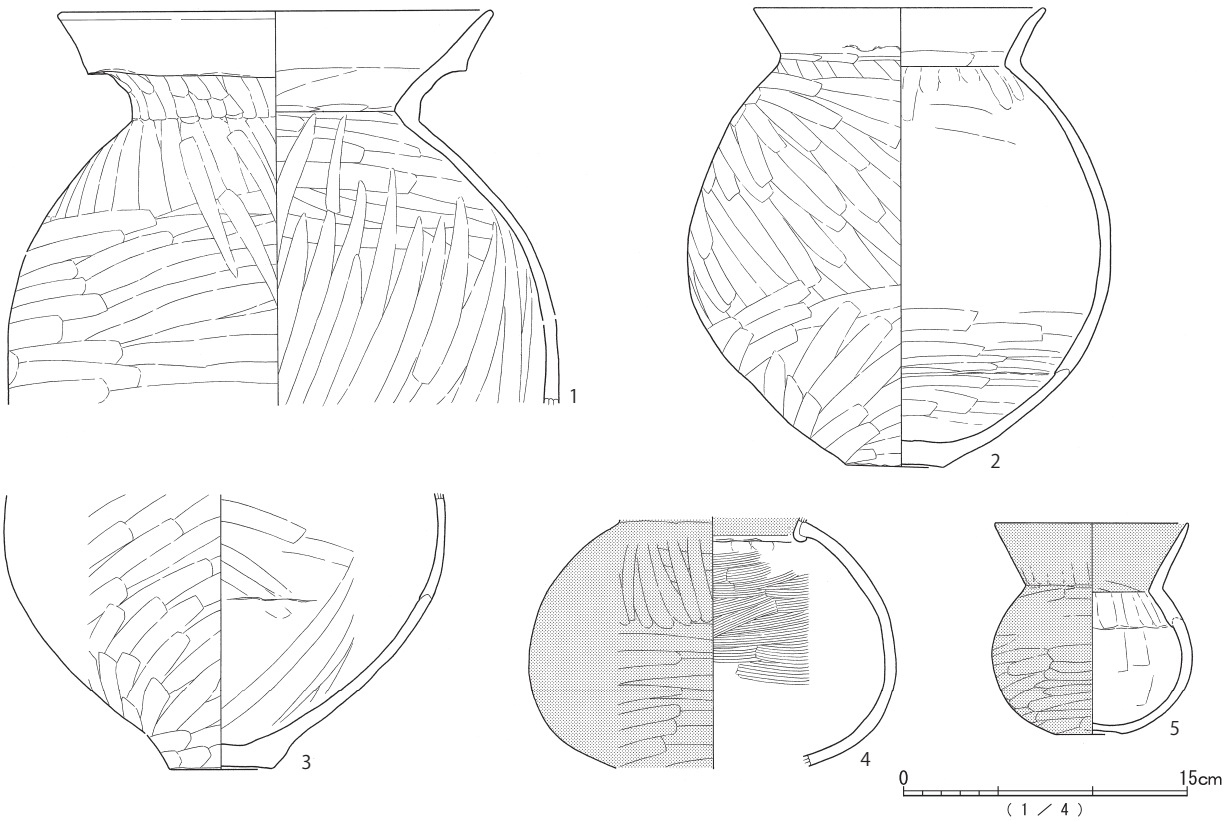
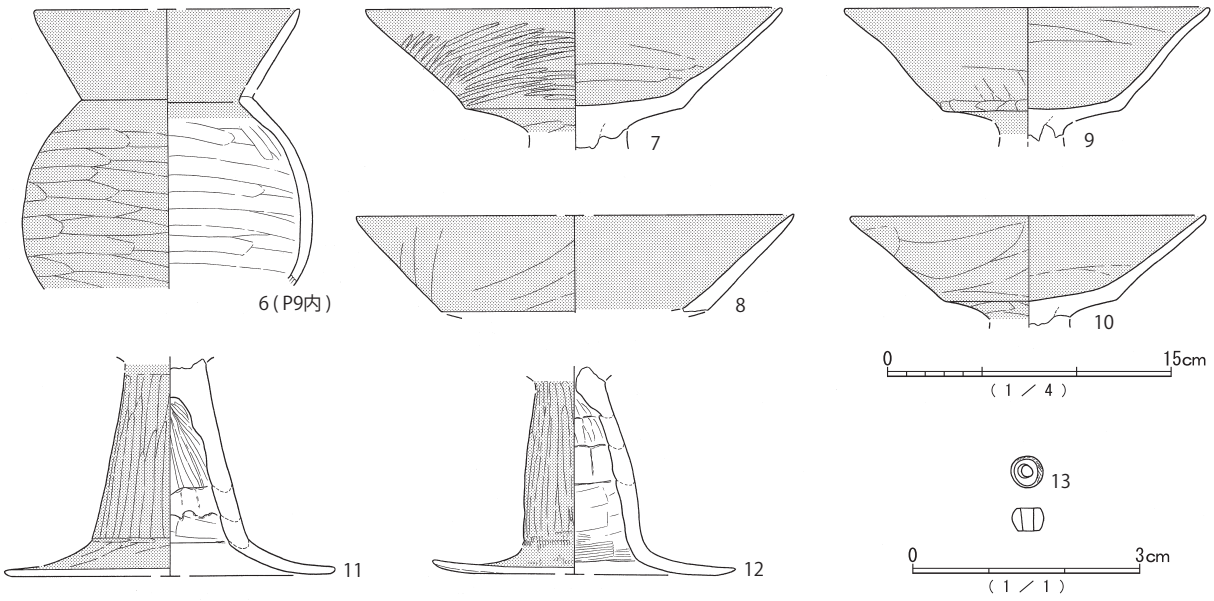


Fig.77　SI32(2) 遺構遺物、SI33(2) 遺構

SI32
床面付近



覆土下層

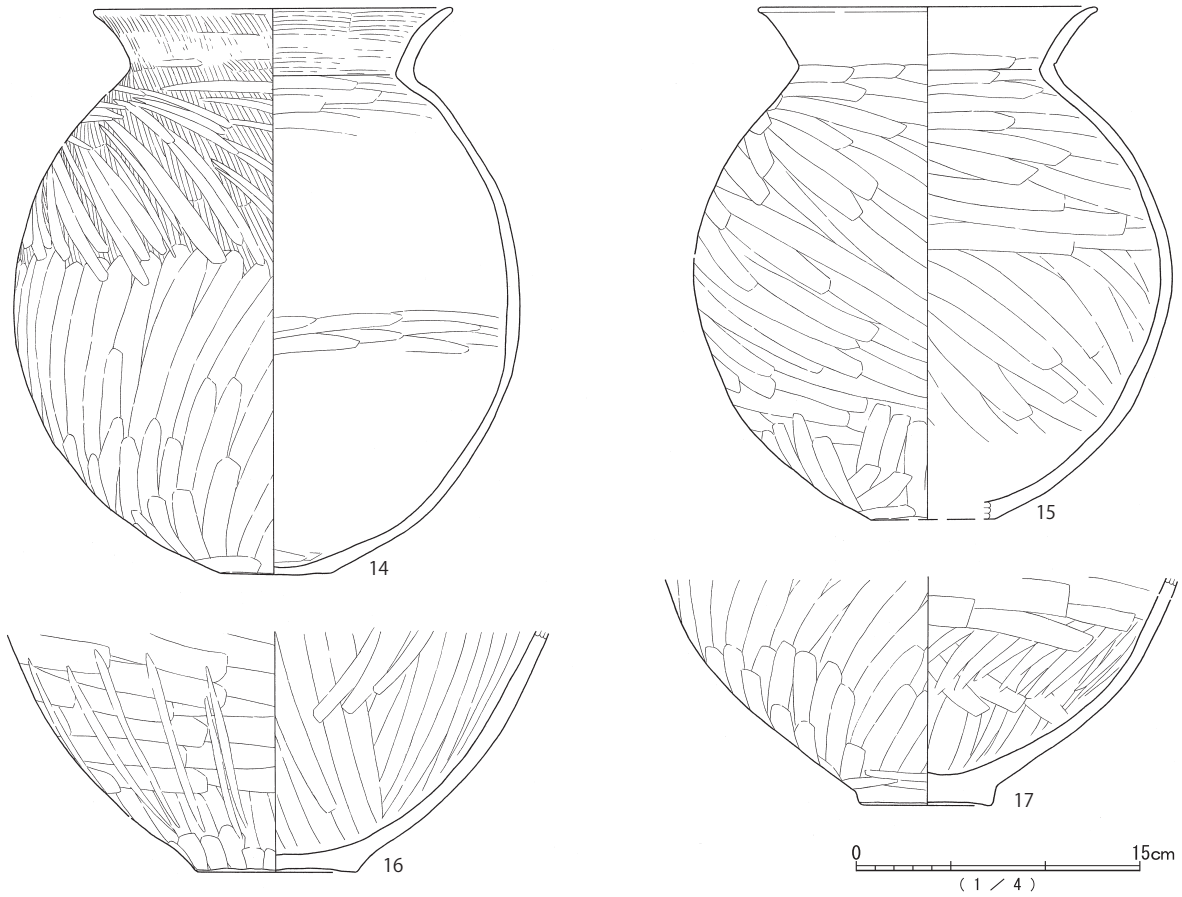


Fig.78　SI32(3) 遺物

SI32
覆土下層

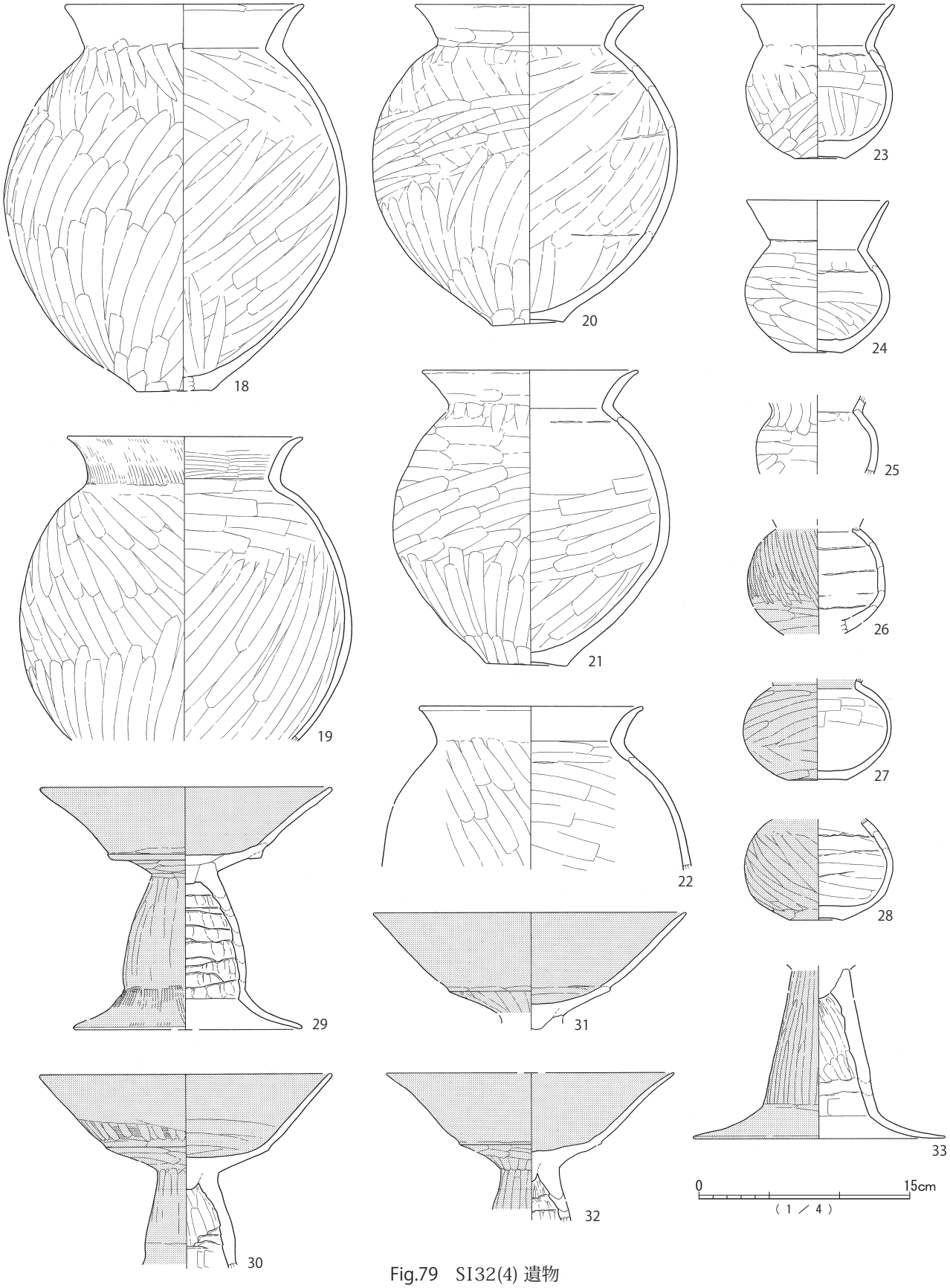
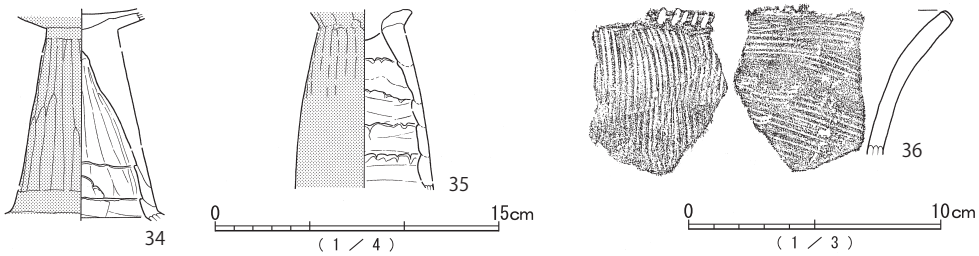


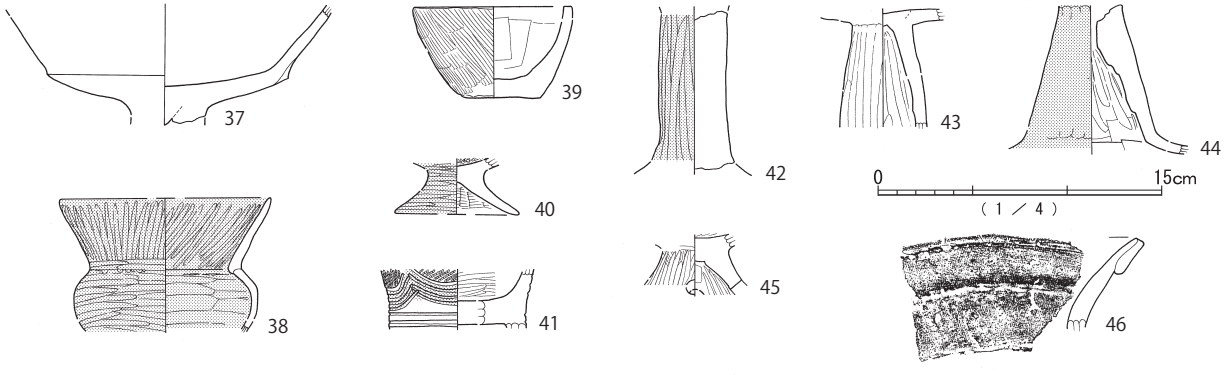
Fig.79　SI32(4) 遺物

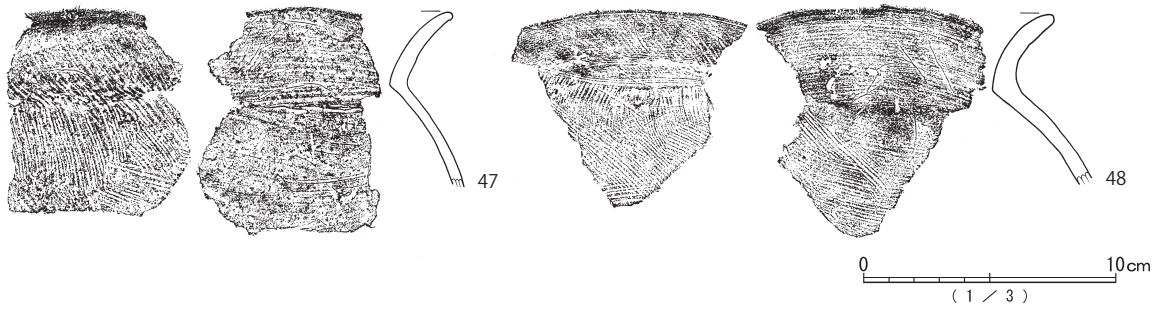
SI32

覆土下層

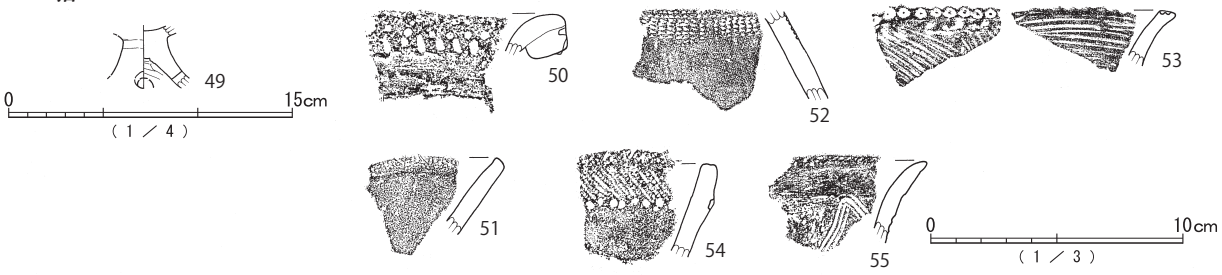


覆土上層





一括



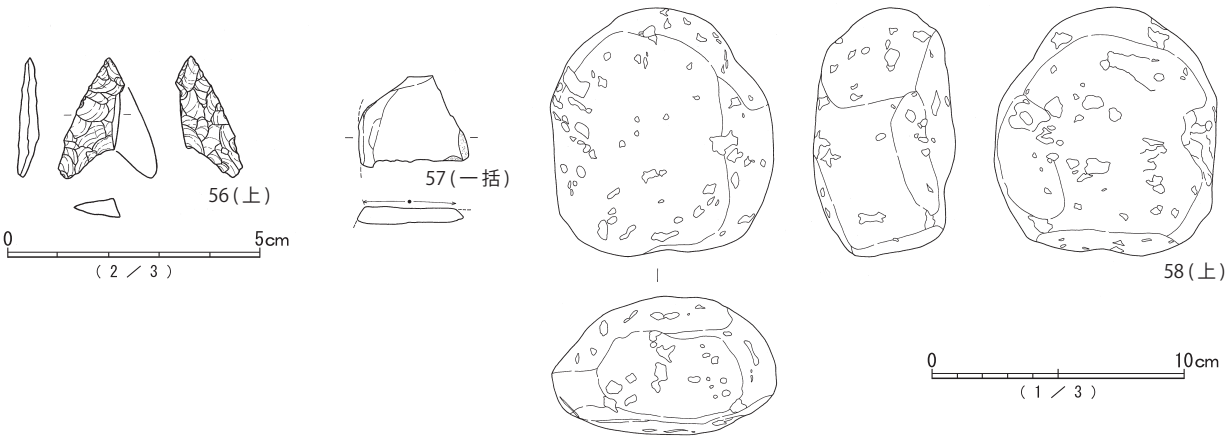


Fig.80　SI32(5) 遺物

態となった。使用用途は明らかではない。土器以外では、28が土製支脚、29が砥石、30が磨敲石である。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b新期と推定する。

SI32（Fig.76～80、PL.5・19・20・52・53・54・83・84・94・102・103・106）

SI32は、A地点の8J−03区他に所在する。SI33・34と重複し、本遺構に対してSI34が新しく、SI33が古い。竪穴範囲はほぼSI33内にあり、SI33の床を若干掘りぬいている。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.12m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は4.54m（主軸）×4.72m、確認面掘形面積は21.55㎡を測る。主軸方位はN−1.0°−Wである。主柱穴はP5～8である。P9は貯蔵穴である。深さは0.64mを測る。P33・34は、SI34に帰属する可能性が高い。カマドは検出されていない。炉は長軸長0.56mを測る。掘り込みは明確ではなかった。床は貼り床であり、硬化面範囲は竪穴のほぼ全体におよぶ。本竪穴は、火災に遭った可能性があり、西側壁際を中心に炭化粒を主とした堆積が認められた。

土器は、竪穴中央部付近を中心として多量に出土している。2の甕形土器は、床面上でつぶれていたが、全体的な出土状況からは、竪穴廃棄直後に投棄されたものが主体となると思われる。土器以外では、13が滑石製臼玉、56が石鏃、57が砥石、58が軽石製品である。本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5a期と推定する。

SI33（Fig.76・77・81、PL.19・54・77・94・102）

SI33は、A地点7J−93区他に所在する。SI31・32・34と重複し、本遺構が最も古い。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.16m程度である。竪穴平面形態は隅丸胴張長方形を呈し、全体規模は7.29m（主軸）×6.44m、確認面掘形面積は42.19㎡を測る。主軸方位はN−27.0°−Wである。主柱穴はP1～2であり、いずれも抜き取り穴をともなう。P10は貯蔵穴である。P33・34は、SI34に帰属する可能性が高い。炉は主軸線上にあり、長軸長1.13mを測る。床は、硬化面が比較的広範囲に認められた。貼り床構造は認められなかった。壁溝はほぼ全周する。北西隅部他部分的に焼土、炭化物が認められたが、火災の痕跡としては不確実であった。

出土土器は、P10内を中心とする。土器以外では、9が砥石である。

本竪穴の時期は、弥生時代後期南岩崎2a期と推定する。

SI34（Fig.82～84、PL.6・19・20・54・55・84・101・102・105）

SI34は、A地点8J−24区他に所在する。南側は調査区外になる。SI32・33と重複し、本遺構が最も新しい。北西隅部では、本竪穴の焼土層をSI32上で検出している。床面高はSI32・33に対してやや高く、貼り床下からSI33の壁溝を検出した。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.15m程度である。

本竪穴は、拡張をともなう建て替えが、確実には1回認められた。拡張後の竪穴をSI34A、建て替え前をSI34Bと呼称する。竪穴平面形態は方形を呈し、北壁を基軸として、東・西・南方向に拡張したことが考えられる。東西軸長は、SI34Aが6.42m、SI34Bが4.77mを測る。主軸方位は、SI34AがN−8.0°−W、SI34Bはおおむね N−15.0°−Wとなる。主柱穴はSI34AがP2・3・9、SI34Bが

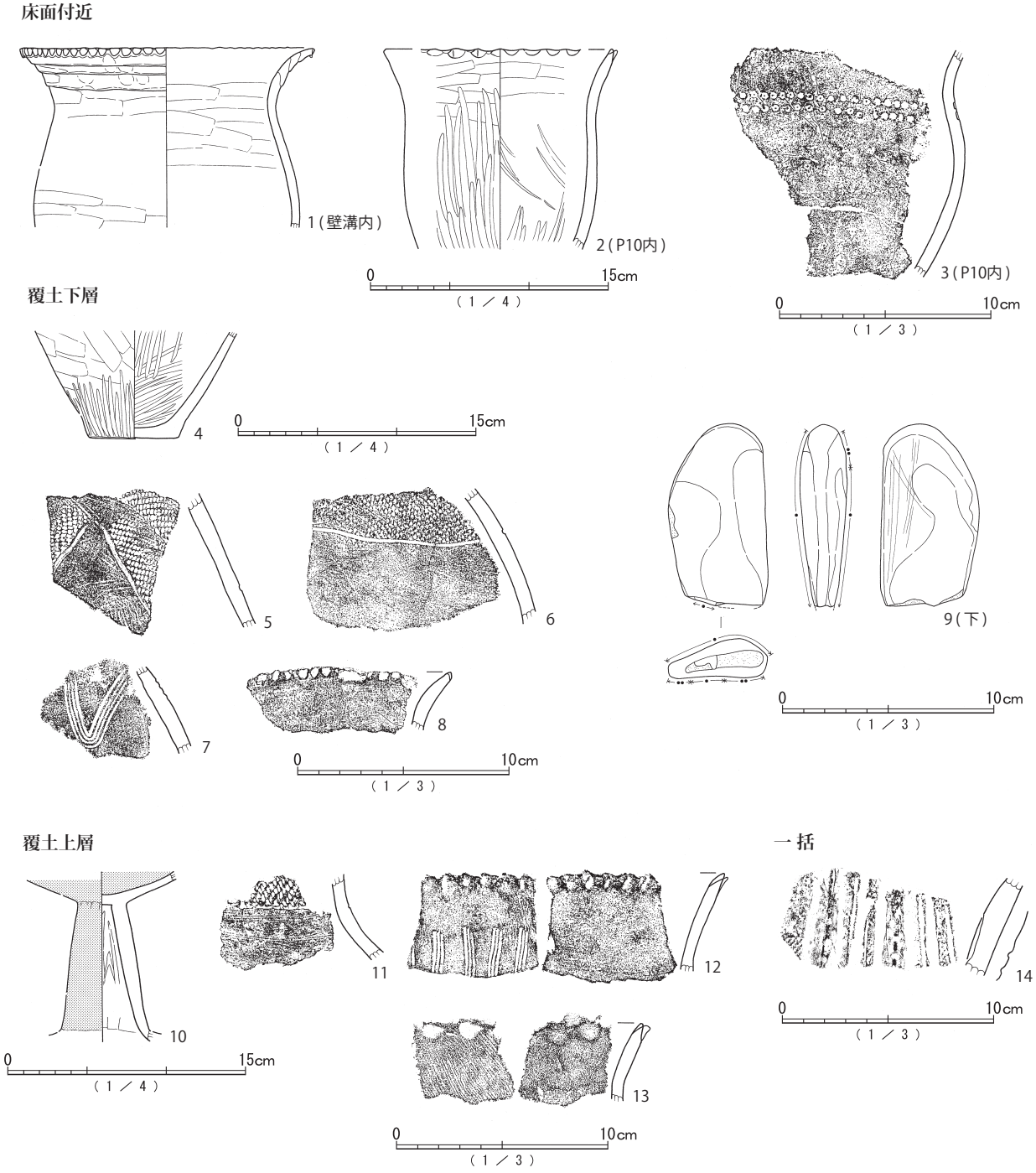
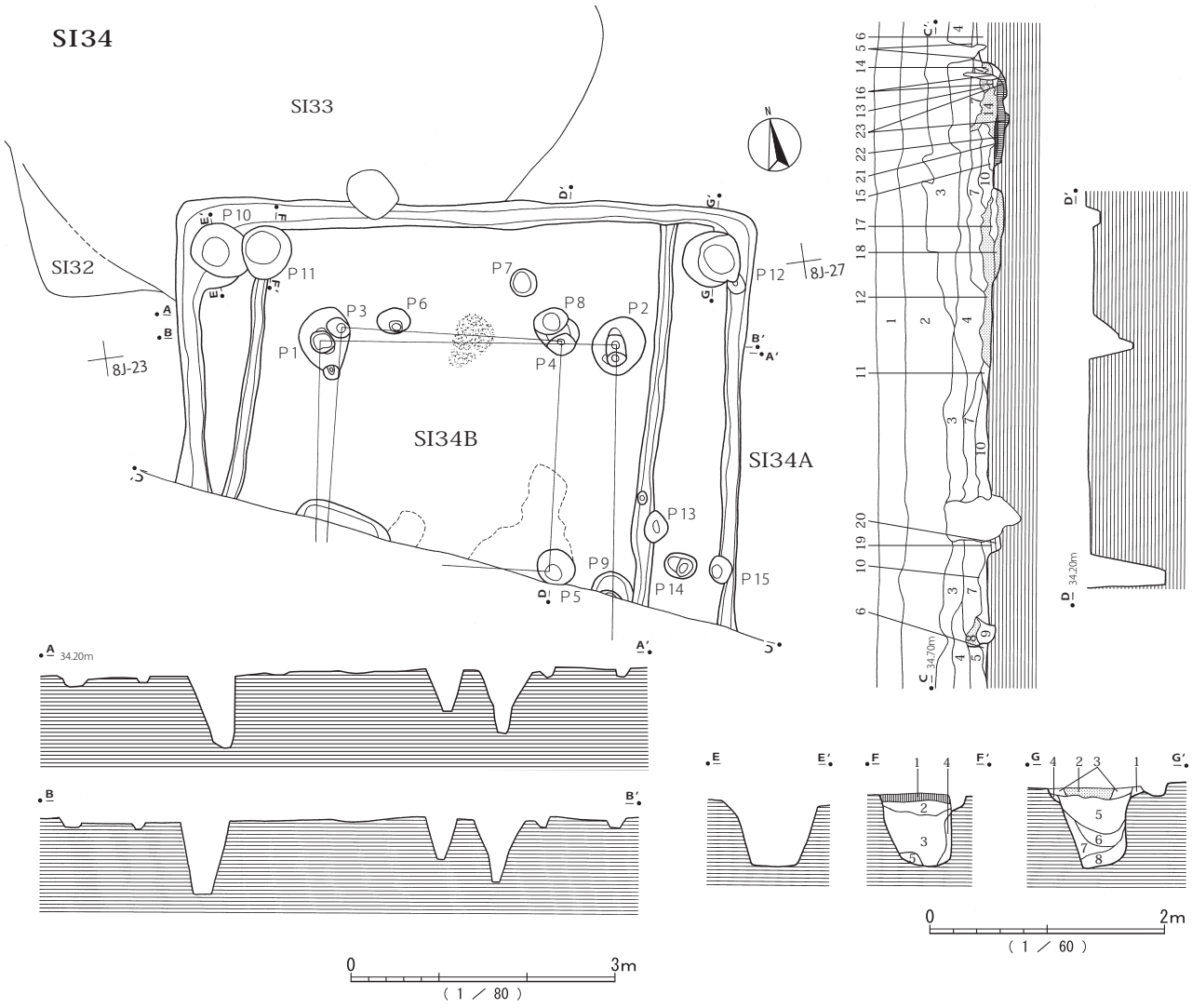


Fig.81　SI33(3) 遺物

P1・4・5である。主柱穴の重複からは、さらに建て替えを重ねていた可能性もある。P10・11・12は貯蔵穴である。P11は上に貼り床が、P12には焼土の堆積が認められ、新旧関係が確認できる。炉は長軸長0.63mを測る。掘り込みは明確ではなかった。床は貼り床であり、掘形構造をもつ。硬化面範囲は局所的で不明確な部分もあったため、検出時の床面は、場所によって高低差を生じた。壁溝は全周する。本竪穴は、火災に遭った可能性があり、壁際を中心に焼土、炭化物の堆積が認められた。

出土土器は、和泉式を主体とするが、ほとんどが床面から0.2m程度上から出土している。土器以外では、27が砥石、28が磨敲石、29が滑石製管玉である。



断面C－C'
1　客土。
2　表土。暗褐色。
3　黒褐色。
4　黒褐色。焼土粒状の赤色スコリアを含む。
5　暗褐色土・褐色土を含む。
6　暗褐色土・黄褐色土を含む。
7　黒褐色。炭化材やや多い。焼土粒を少量含む。しまりあり。
8　暗褐色。焼土粒を多量に含む。
9　暗褐色。ローム粒を微量含む。ややしまりあり。
10　黒褐色。暗褐色土粒・ローム粒をまばらに含む。
11　暗褐色。ローム粒を微量含む。しまり強く、粘性あり。
12　暗褐色。焼土やや多い。褐色土を斑状に多量に含む。
13　黒褐色。炭化材集中。
14　暗褐色。焼土を多量に含む。
15　黒褐色。焼土粒を微量含む。
16　暗褐色。ローム粒をやや多量に含む。
17　褐色。
18　赤褐色。30mm大のレンガ状焼土ブロックを含む。
19　黄褐色。ハードローム主体。
20　暗褐色・黄褐色土を含む。
21　黒褐色。10mm大のハードロームブロックを多量に含む。貼り床。
22　暗黄褐色。10mm大のハードロームブロックを少量含む。貼り床。
23　黒褐色。20mm大のハードロームブロックを多量に含む。貼り床。

断面F－F'
1　黒褐色。黄白色粘土粒をやや多量に含む。貼り床。
2　黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
3　黒褐色。黄白色粘土粒を微量含む。
4　黒褐色。黄白色粘土粒をやや多量に含む。
5　黒褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。

断面G－G'
1　暗黄褐色。黒褐色土・ローム粒を含む。
2　黒褐色。焼土粒やや多い。ローム微粒を少量含む。
3　暗褐色。焼土粒を少量含む。
4　褐色。
5　黒褐色。30～50mm大の黄白色粘土ブロックを少量含む。
6　黒褐色。黄白色粘土粒を微量含む。
7　暗褐色。ローム粒をやや多量に含む
8　黒褐色。20mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。

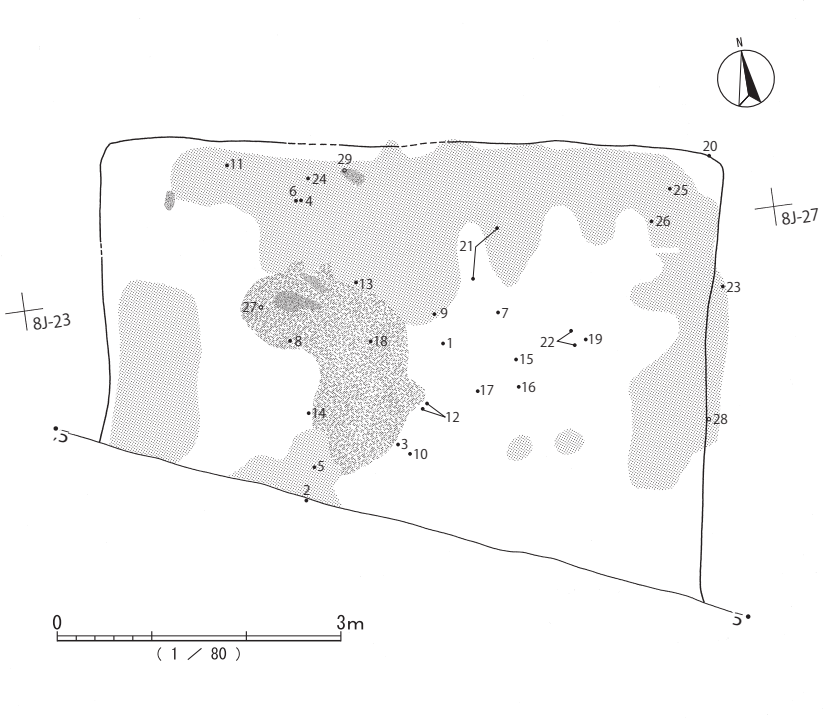
Fig.82　SI34(1) 遺構

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI35（Fig.85、PL.21・77・94）

SI35は、A地点7J−46区他に所在する。重複関係は認められなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.2m程度である。竪穴平面形態はやや胴張りの隅丸長方形を呈し、全体規模は5.13m（主軸）×4.65m、確認

SI34



覆土下層

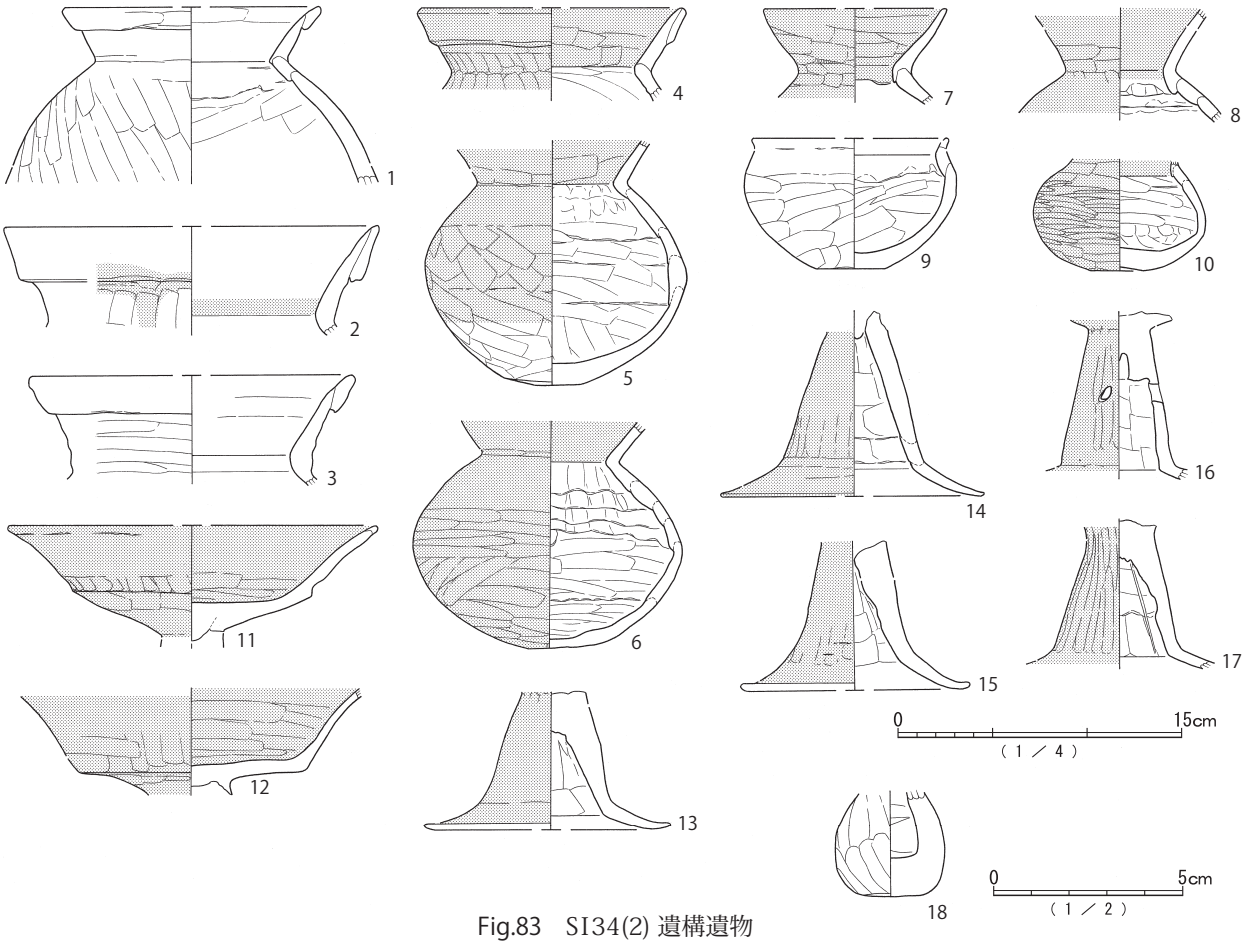


Fig.83　SI34(2) 遺構遺物

SI34
覆土上層

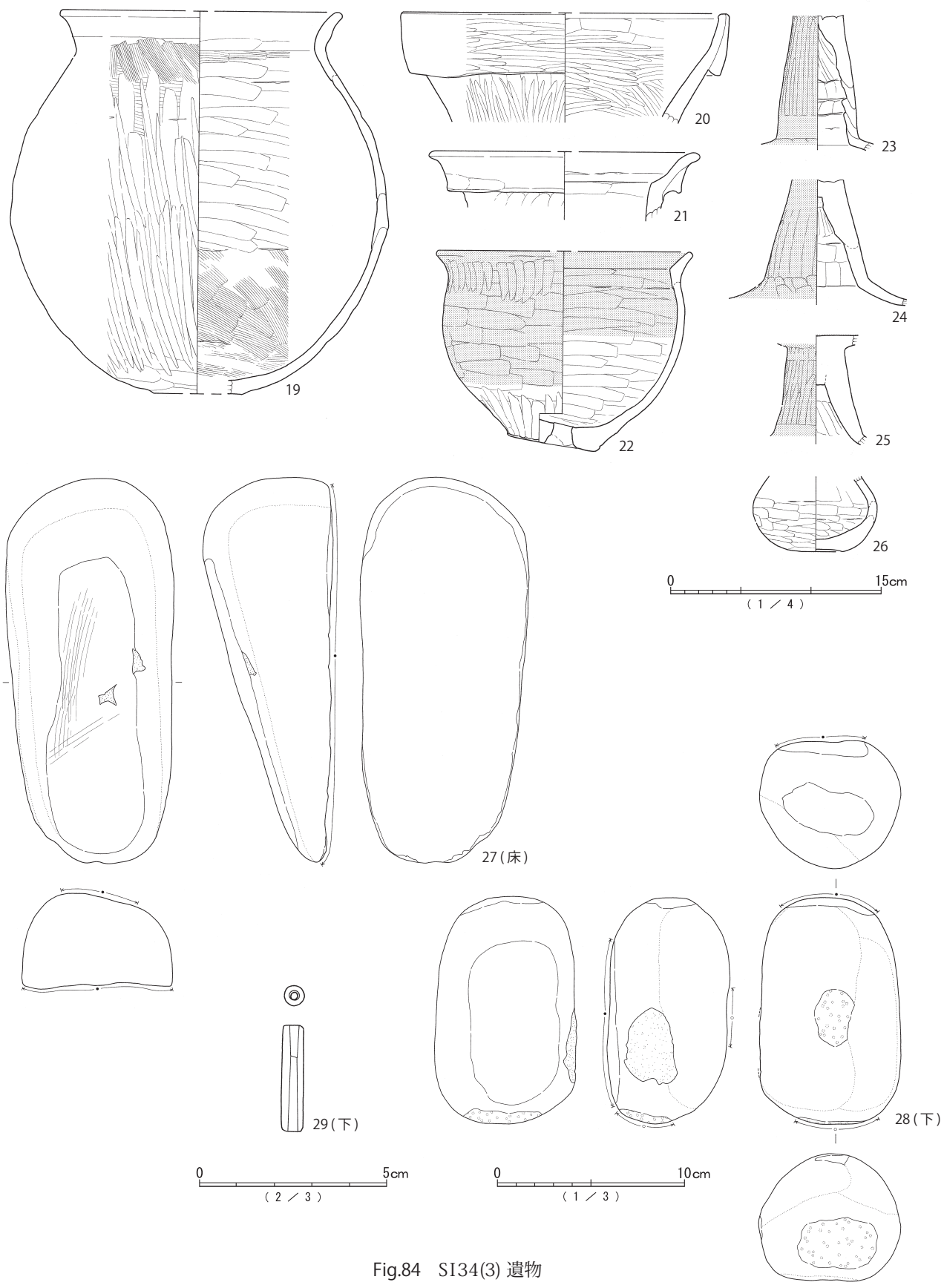
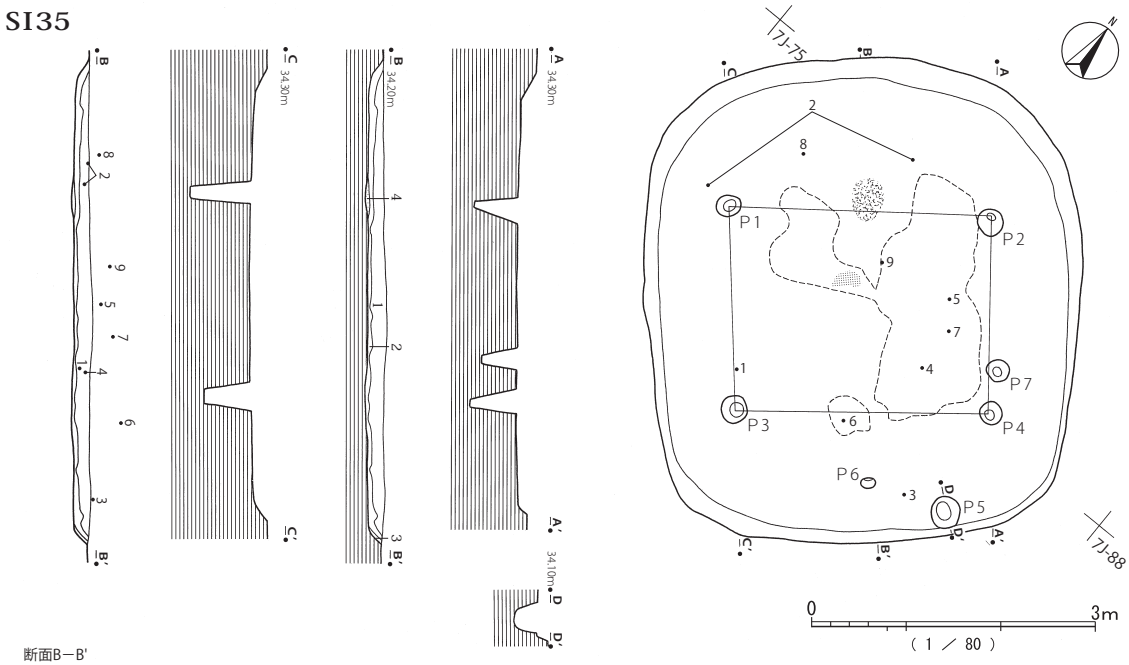


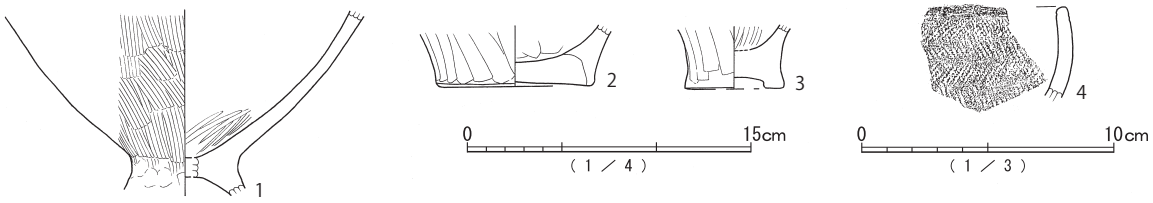
Fig.84　SI34(3) 遺物

SI35

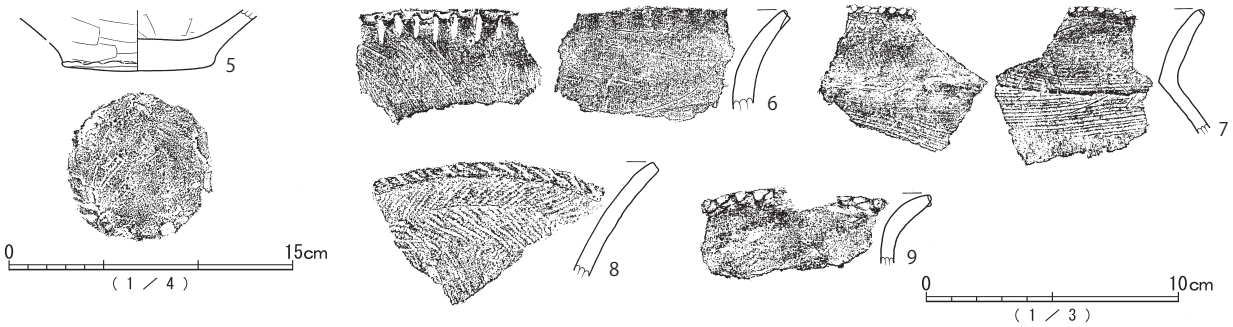


断面B－B'
1　暗褐色。ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。5～20mm大のハードロームブロックをまばらに含む。
2　黒褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックをやや多量に含む。
3　褐色。暗褐色土を少量含む。
4　炉。

覆土下層



覆土上層



一括

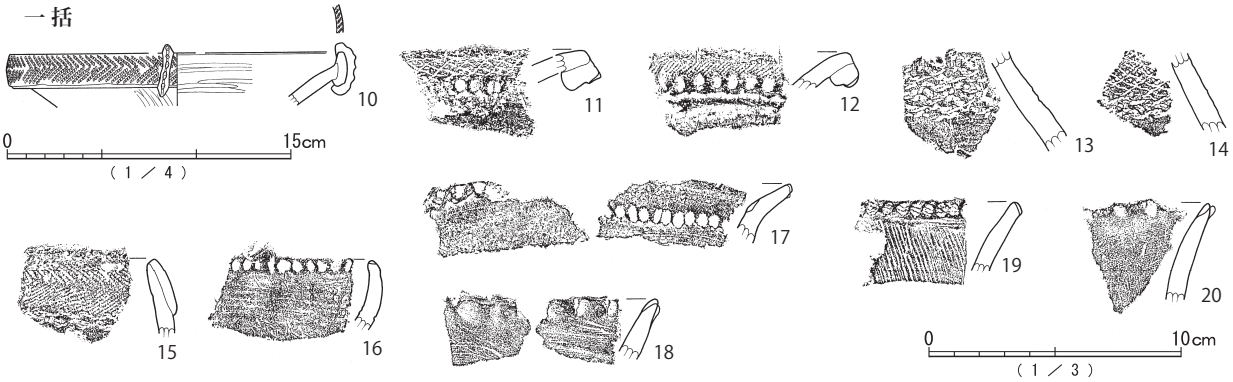
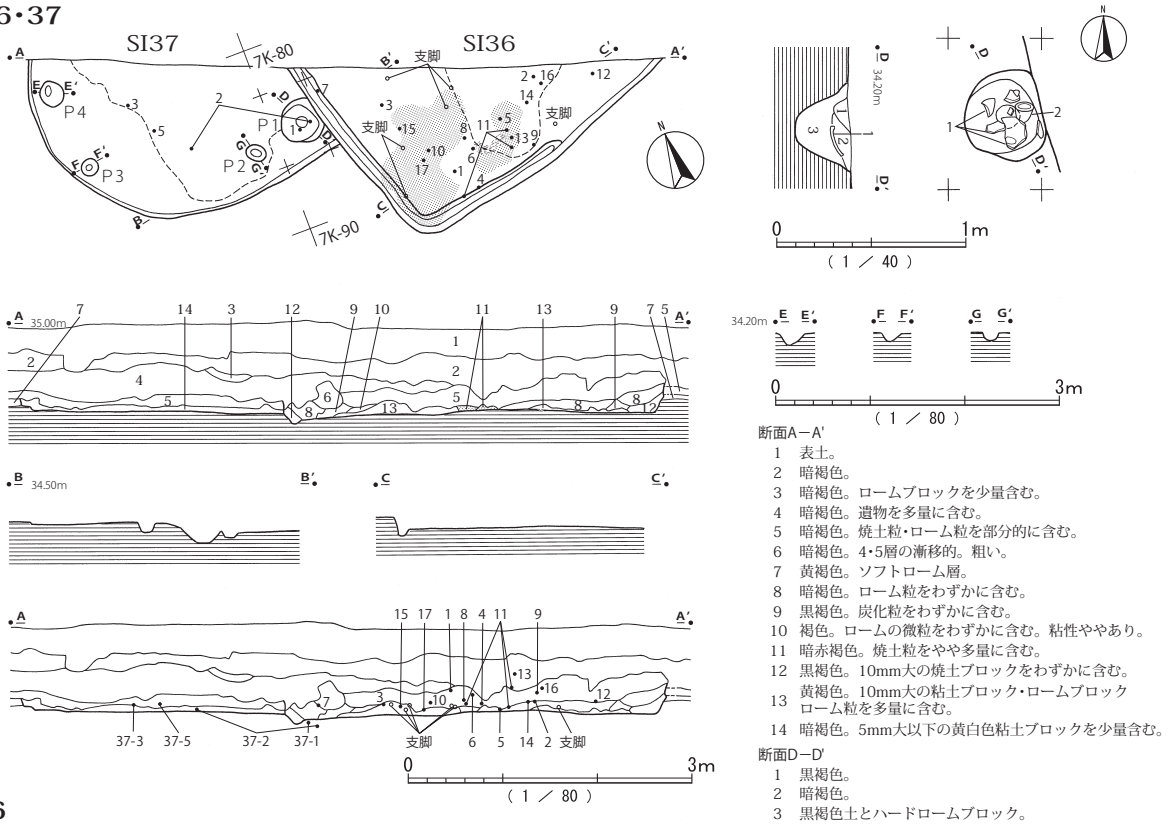


Fig.85　SI35 遺構遺物

SI36・37



断面A－A'
1　表土。
2　暗褐色。
3　暗褐色。ロームブロックを少量含む。
4　暗褐色。遺物を多量に含む。
5　暗褐色。焼土粒・ローム粒を部分的に含む。
6　暗褐色。4・5層の漸移的。粗い。
7　黄褐色。ソフトローム層。
8　暗褐色。ローム粒をわずかに含む。
9　黒褐色。炭化粒をわずかに含む。
10　褐色。ロームの微粒をわずかに含む。粘性ややあり。
11　暗赤褐色。焼土粒をやや多量に含む。
12　黒褐色。10mm大の焼土ブロックをわずかに含む。
13　黄褐色。10mm大の粘土ブロック・ロームブロック
ローム粒を多量に含む。
14　暗褐色。5mm大以下の黄白色粘土ブロックを少量含む。

断面D－D'
1　黒褐色。
2　暗褐色。
3　黒褐色土とハードロームブロック。

SI36

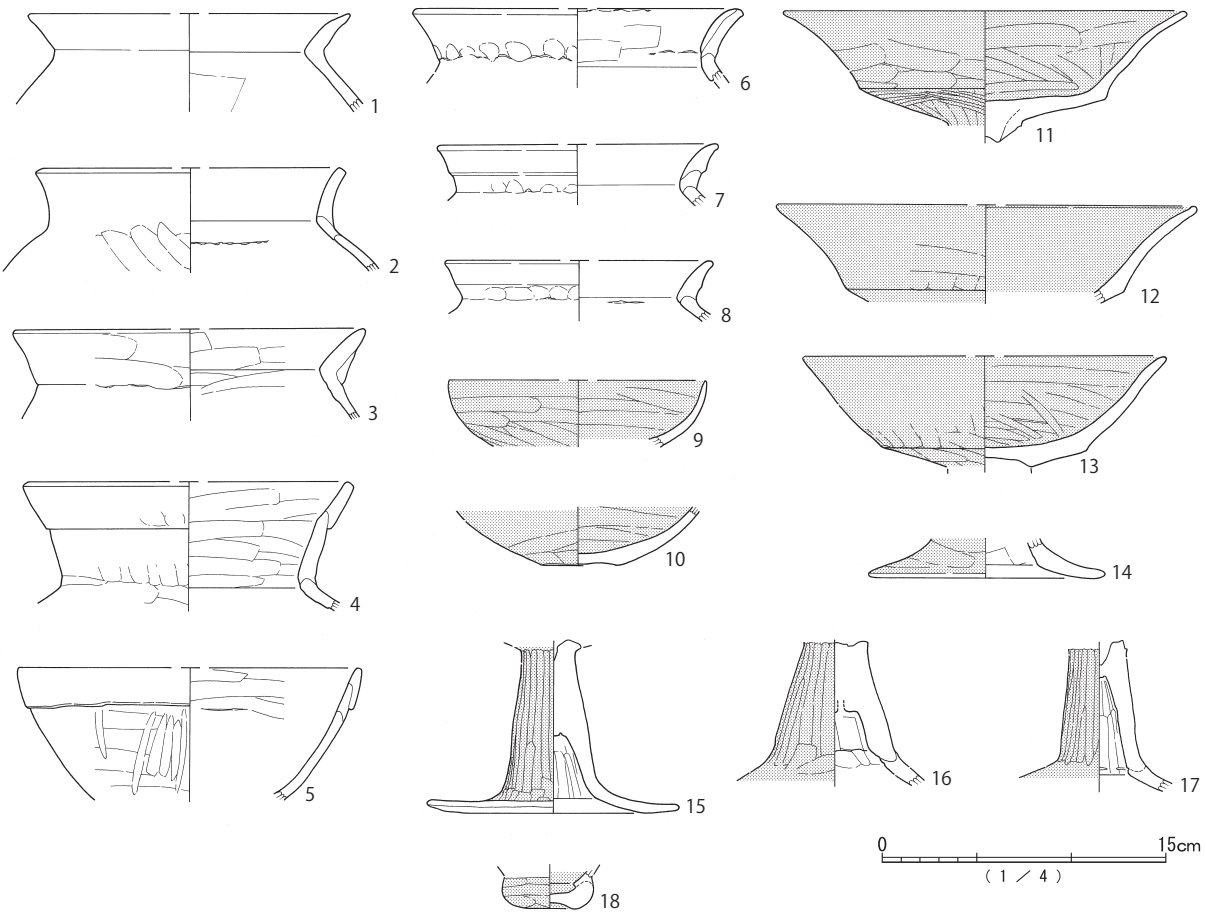


Fig86　SI36(1) 遺構遺物、SI37(1) 遺構

SI37

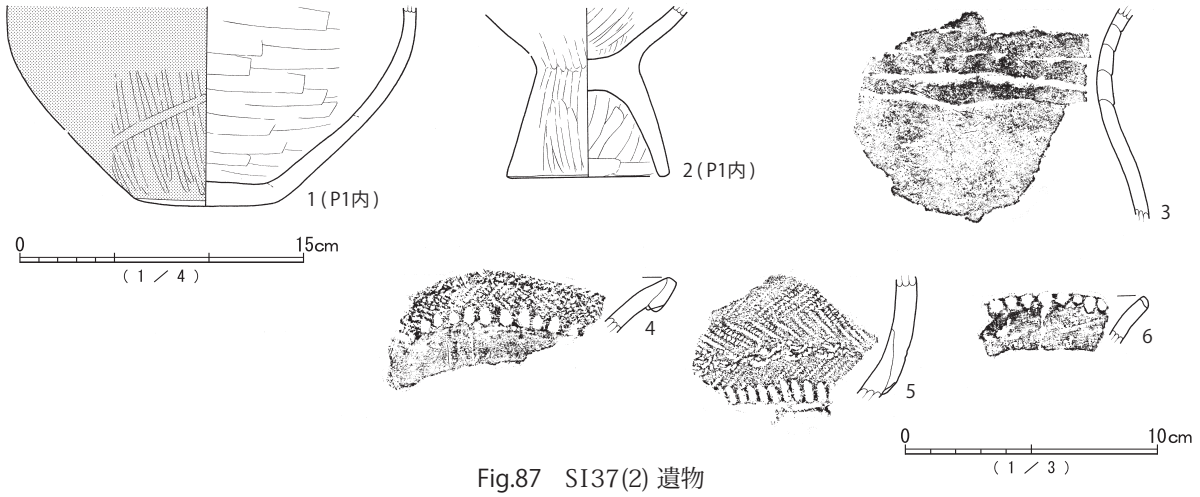


Fig.87　SI37(2) 遺物

面掘形面積は20.98㎡を測る。主軸方位はN−40.0°−Wである。主柱穴はP1〜4である。P5は貯蔵穴である。炉は長軸長0.92mを測る。掘り込みは明確ではなかった。貼り床構造、壁溝は認められなかった。火災の痕跡は明確ではなかった。

出土土器は、小破片が多く、時期的にも宮ノ台式から弥生時代終末期までが混在する。

本竪穴の時期は、竪穴平面形態と1・6・7のハケ台付甕形土器を根拠とし、弥生時代終末期南岩崎3期に比定しておく。

SI36（Fig.86、PL.21・55・84・85）

SI36は、A地点7K−81区他に所在する。北側は調査区外になり、南西隅部のみの調査となった。SI37と重複し、本遺構に対してSI37が古い。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は、部分的に黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.15m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、西辺検出部で南北2.37mを測る。全体規模は明らかではない。主軸方位はN−18.0°−Wである。炉・主柱穴・貯蔵穴等は検出できなかった。貼り床構造は明確ではなかった。壁溝はほぼ全周する。本竪穴では、南西隅部を中心に焼土、炭化物の堆積が認められたことから、火災に遭った可能性が高い。

出土土器は、覆土からの出土が主体で、遺存遺物は認められなかった。未実測遺物として、土製支脚片が出土している。

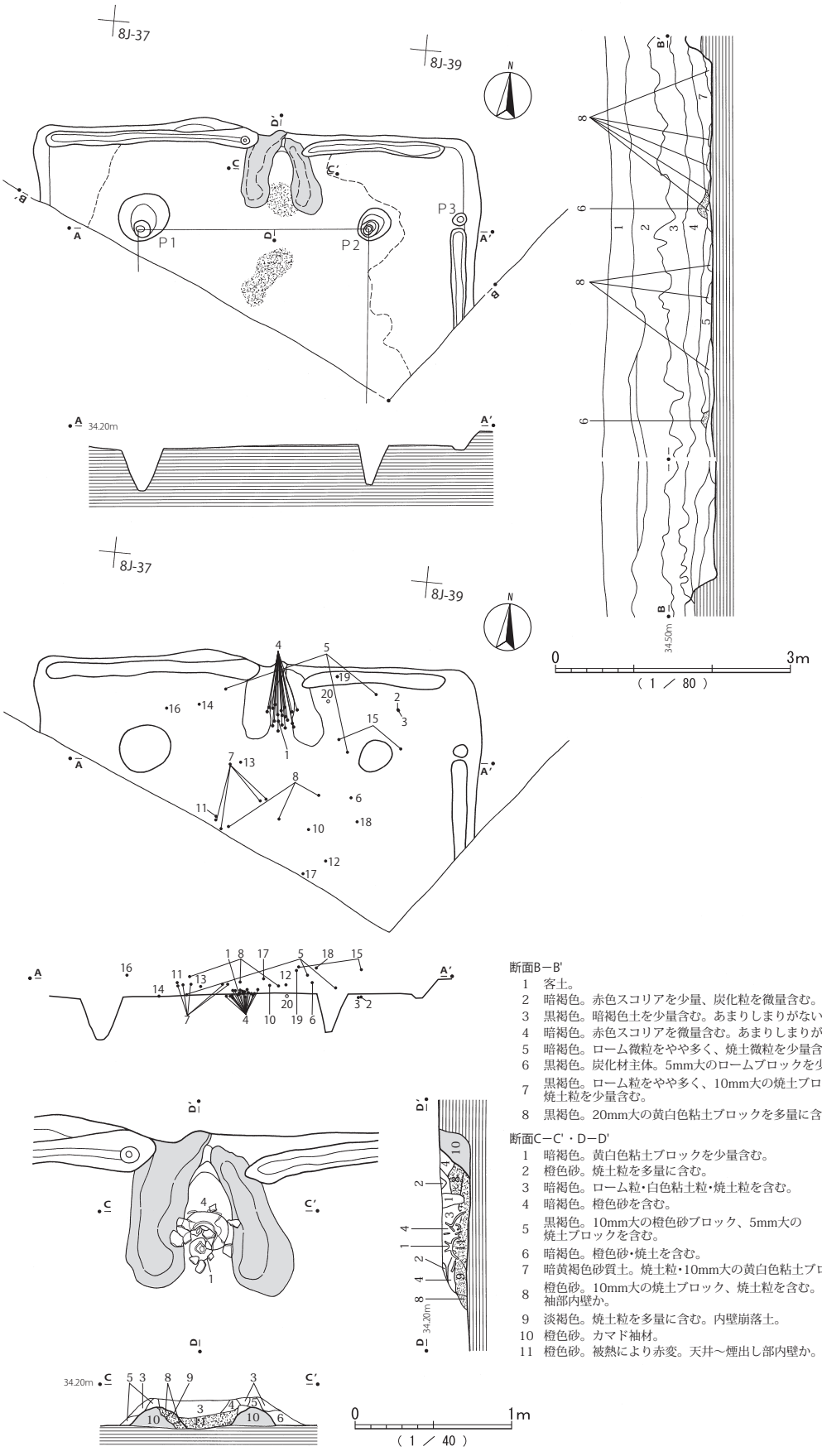
本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期に比定しておく。

SI37（Fig.86・87、PL.21・55・77・95）

SI37は、A地点7J−89区他に所在する。北側は調査区外になる。SI36と重複し、本遺構に対してSI36が新しい。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、黄白色粘土層には達していない。確認面からの深さは、最大で0.09m程度である。竪穴平面形態はややいびつな円形を呈し、現存部で径3.40mを測る。主軸方位は、N−16.0°−W前後をしめすが明確ではない。炉・主柱穴は検出できなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入り口施設と考えられる。貼り床構造は認められなかった。火災の痕跡は認められなかった。

P1内から、壺形土器1、台付甕形土器2が出土している。

SI38



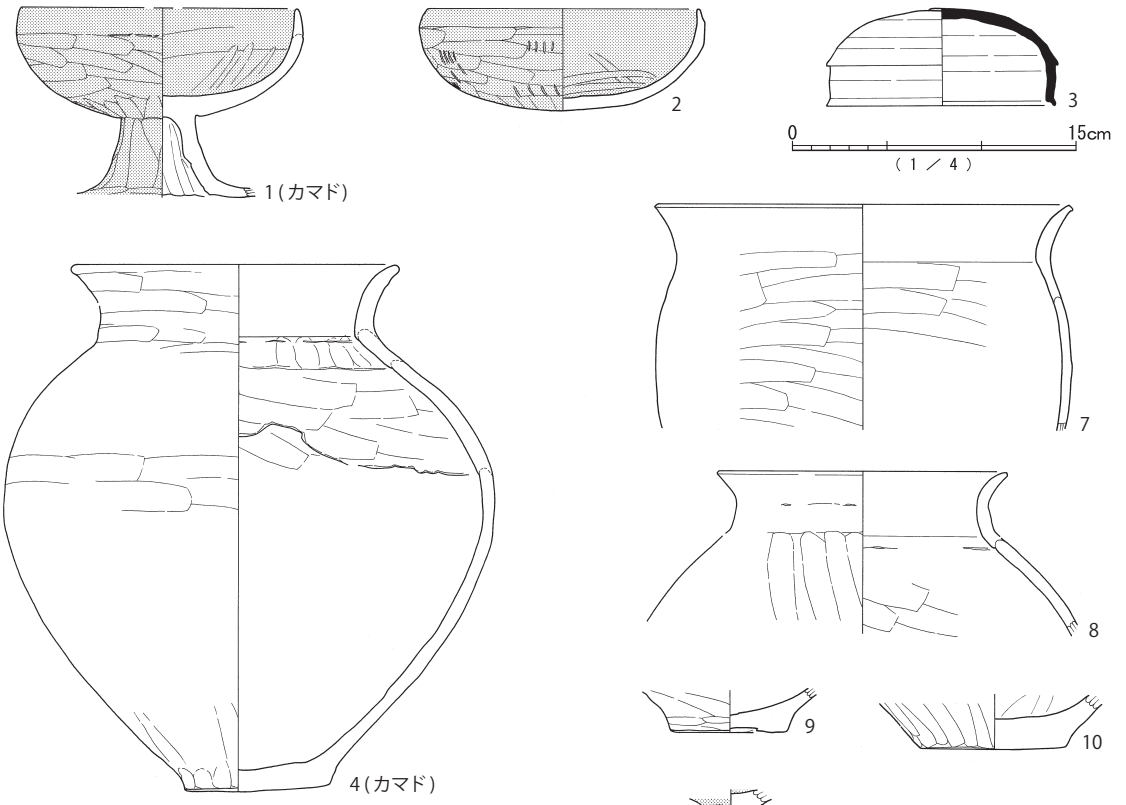
断面B－B'
1　客土。
2　暗褐色。赤色スコリアを少量、炭化粒を微量含む。しまりあり。
3　黒褐色。暗褐色土を少量含む。あまりしまりがない。
4　暗褐色。赤色スコリアを微量含む。あまりしまりがない。
5　暗褐色。ローム微粒をやや多く、焼土微粒を少量含む。
6　黒褐色。炭化材主体。5mm大のロームブロックを少量含む。
7　黒褐色。ローム粒をやや多く、10mm大の焼土ブロックを微量、焼土粒を少量含む。
8　黒褐色。20mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。

断面C－C'・D－D'
1　暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。
2　橙色砂。焼土粒を多量に含む。
3　暗褐色。ローム粒・白色粘土粒・焼土粒を含む。
4　暗褐色。橙色砂を含む。
5　黒褐色。10mm大の橙色砂ブロック、5mm大の焼土ブロックを含む。
6　暗褐色。橙色砂・焼土を含む。
7　暗黄褐色砂質土。焼土粒・10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
8　橙色砂。10mm大の焼土ブロック、焼土粒を含む。袖部内壁か。
9　淡褐色。焼土粒を多量に含む。内壁崩落土。
10　橙色砂。カマド袖材。
11　橙色砂。被熱により赤変。天井～煙出し部内壁か。

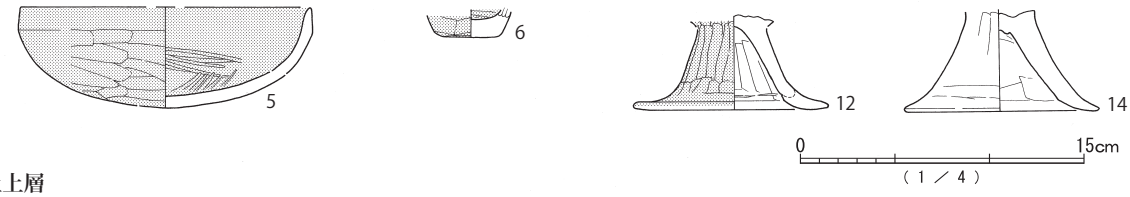
Fig.88　SI38(1) 遺構

SI38

床面付近



覆土下層



覆土上層

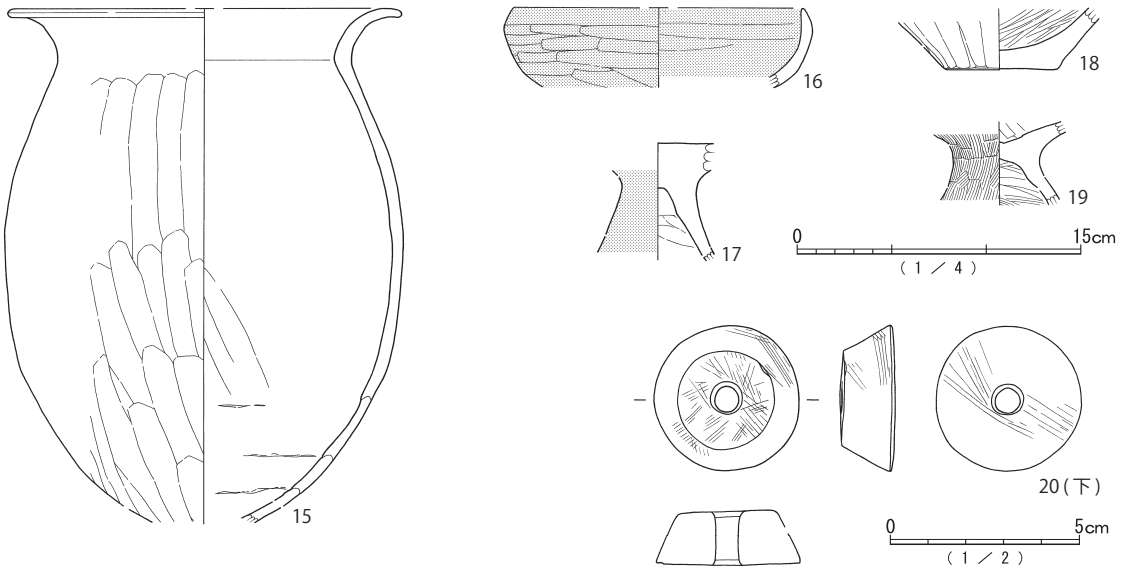


Fig.89　SI38(2) 遺物

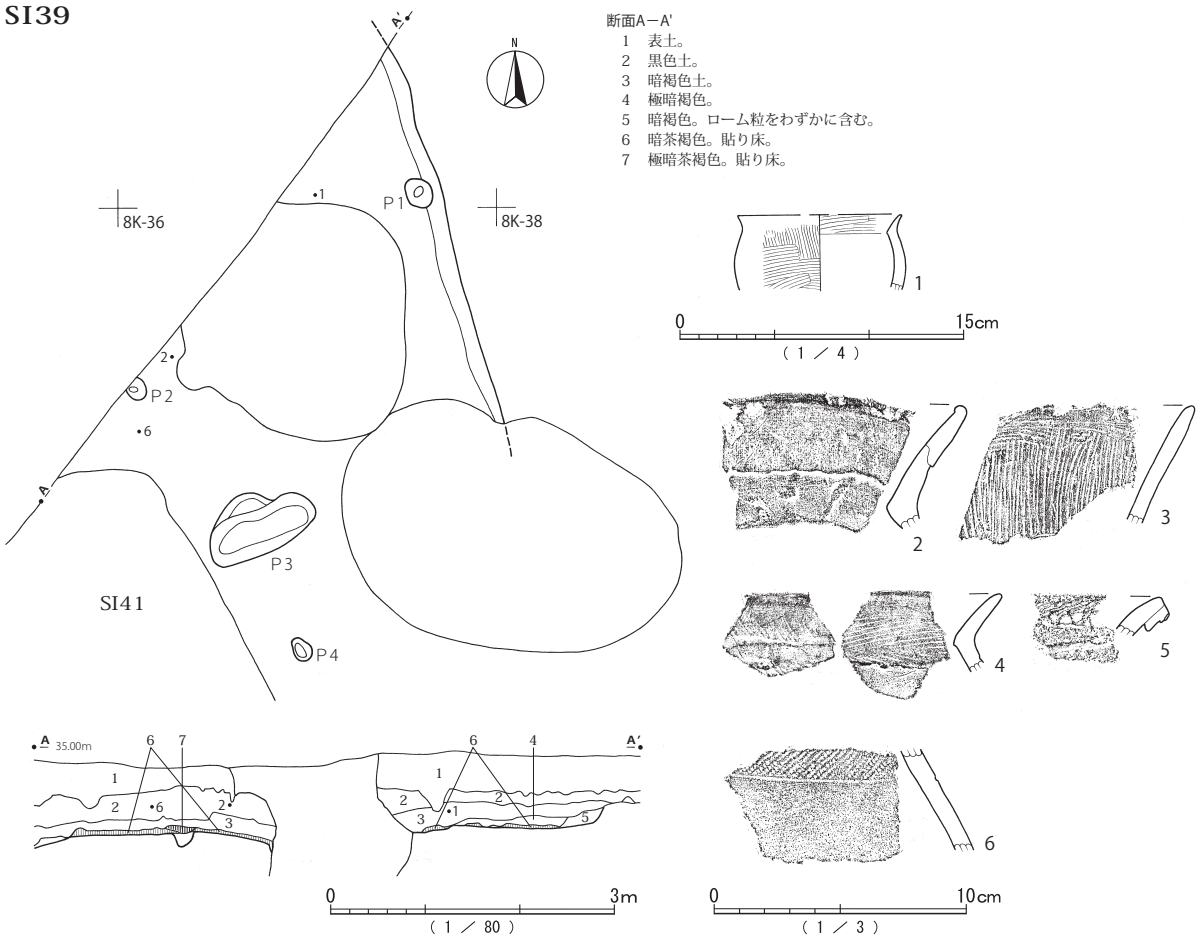


Fig.90　SI39 遺構遺物

本竪穴の時期は、弥生時代後期南岩崎2b期と推定する。

SI38（Fig.88・89、PL.6・21・55・56・85・90・105）

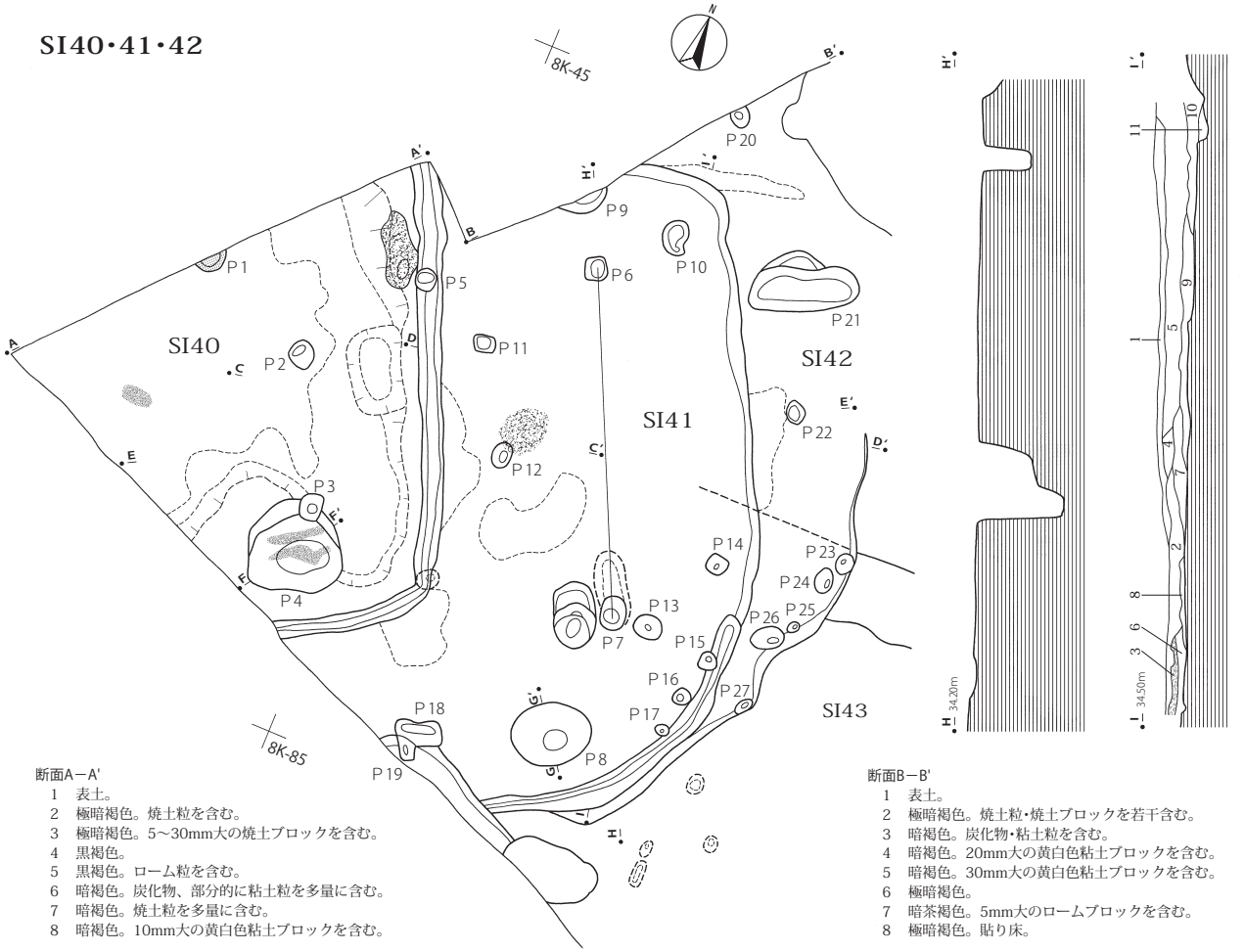
SI38は、A地点8J−48区他に所在する。南側は調査区外になる。調査区内では他遺構との重複は認められなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は、黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは、最大で0.26m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴規模東西軸長は5.63m、推定の掘形面積は約31.0㎡を測る。主軸方位はN−4.0°−Wである。主柱穴はP1・2である。貯蔵穴は検出できなかった。カマドは、北壁中央部にあり、その前面床も焼けていた。床は、粘土ブロックを多量に含む貼り床である。壁溝は断続的に検出した。覆土各所で若干量の焼土、炭化物が認められたが、火災の痕跡としては不確実であった。

出土土器は、カマド内および床面と覆土に、明確に区分される。1〜4は、遺存遺物と考えられ、カマド内およびカマド右側竪穴北東隅部から出土している。1は、カマド燃焼部に逆位で置かれて、支脚に転用されていた。土器以外では、滑石製紡錘車が出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代後期南岩崎6a期と推定する。

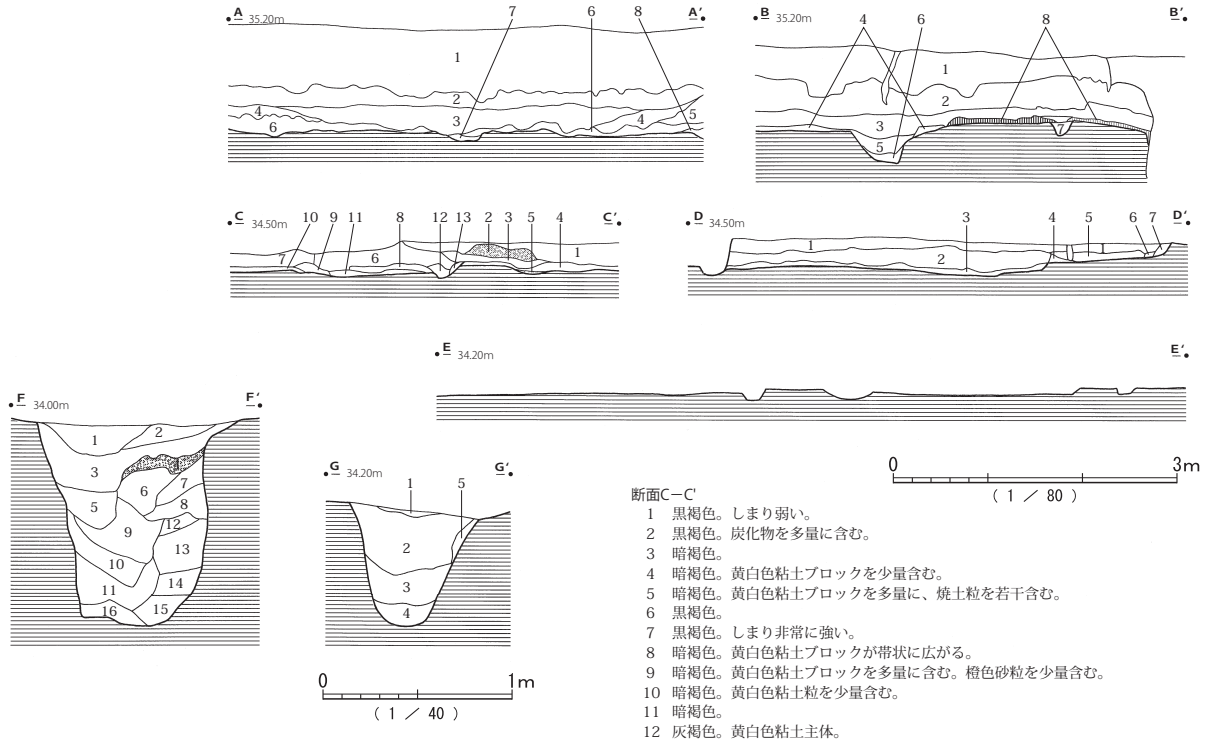
SI39（Fig.90、PL.95）

SI39は、B地点8K−36区他に所在する。B地点西端部にあたる。南側竪穴範囲は明確ではないが、SI41・42と重複する。出土土器から判断するならば、本遺構が最も新しい。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.2m以上を測るが、中央部はカクラン



断面A－A'
1　表土。
2　極暗褐色。焼土粒を含む。
3　極暗褐色。5～30mm大の焼土ブロックを含む。
4　黒褐色。
5　黒褐色。ローム粒を含む。
6　暗褐色。炭化物、部分的に粘土粒を多量に含む。
7　暗褐色。焼土粒を多量に含む。
8　暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。

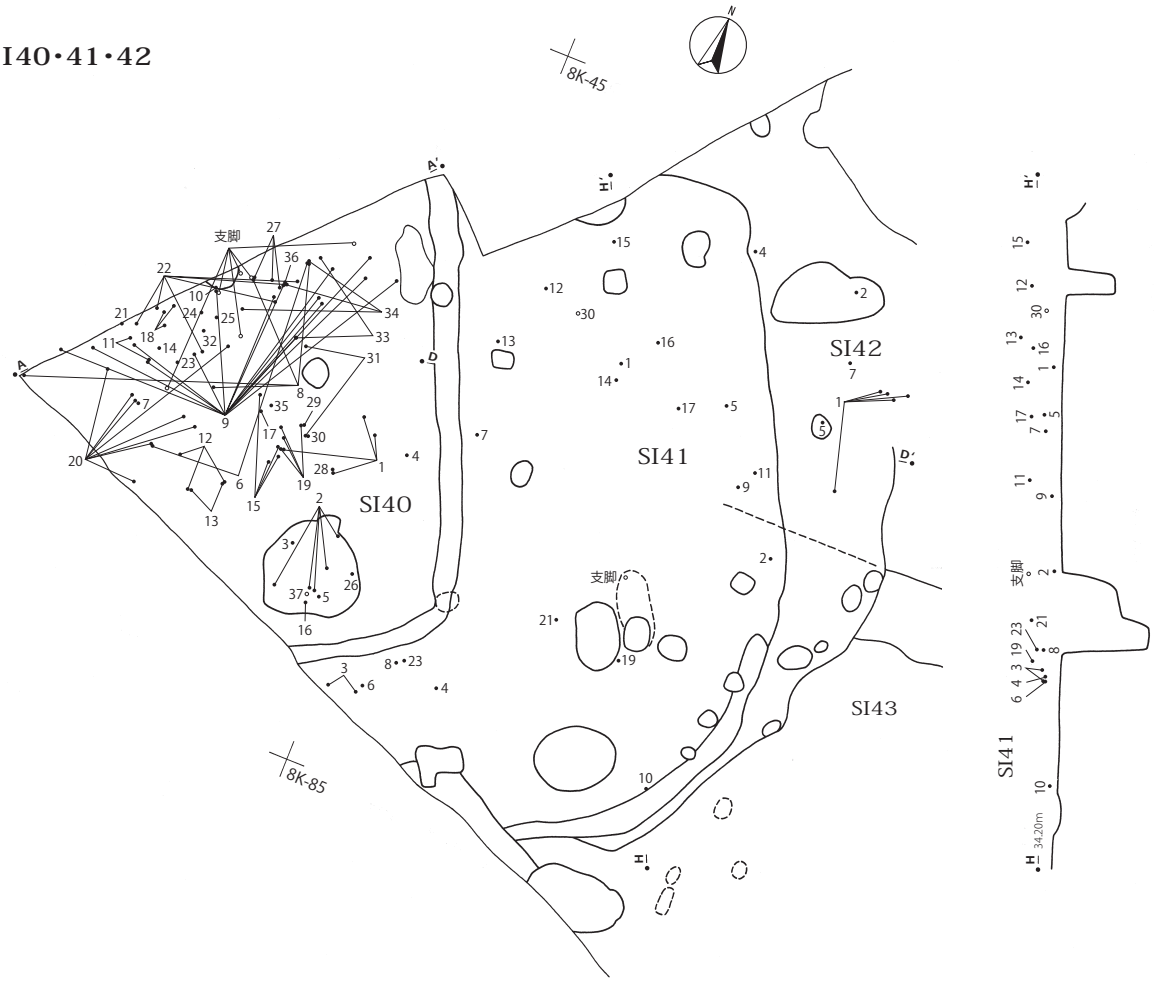
断面B－B'
1　表土。
2　極暗褐色。焼土粒・焼土ブロックを若干含む。
3　暗褐色。炭化物・粘土粒を含む。
4　暗褐色。20mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
5　暗褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
6　極暗褐色。
7　暗茶褐色。5mm大のロームブロックを含む。
8　極暗褐色。貼り床。

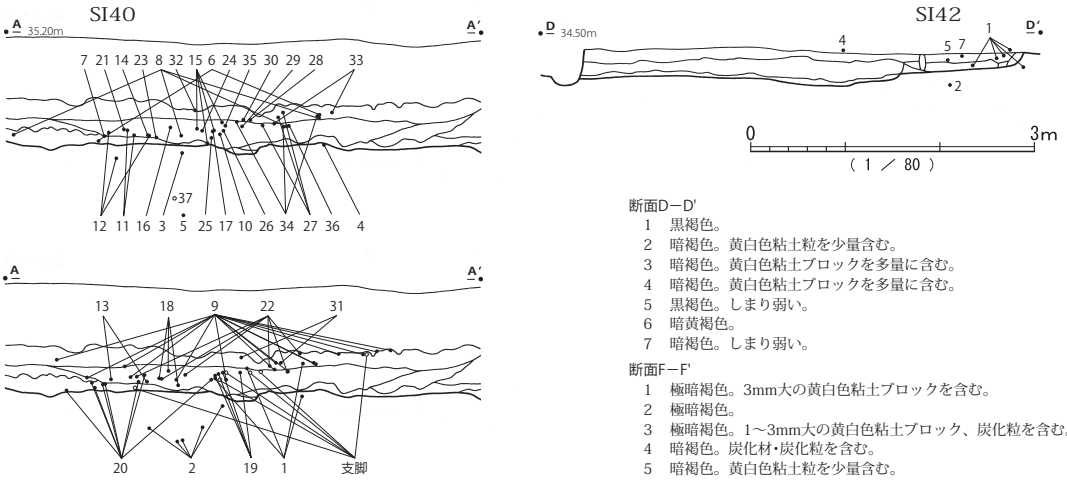


断面C－C'
1　黒褐色。しまり弱い。
2　黒褐色。炭化物を多量に含む。
3　暗褐色。
4　暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。
5　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に、焼土粒を若干含む。
6　黒褐色。
7　黒褐色。しまり非常に強い。
8　暗褐色。黄白色粘土ブロックが帯状に広がる。
9　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。橙色砂粒を少量含む。
10　暗褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
11　暗褐色。
12　灰褐色。黄白色粘土主体。
13　黄白色粘土。

Fig.91　SI40(1) 遺構、SI41(1) 遺構、SI42(1) 遺構

SI40・41・42





断面I－I'
1　表土。
2　黒褐色。
3　黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。炭化物を多量に含む。しまり強い。
4　暗褐色。焼土ブロックを含む。
5　暗茶褐色。黄白色粘土粒ブロック・橙色砂粒を少量含む。しまり強い。
6　暗褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを多量に、焼土粒を少量含む。しまり強い。
7　黒褐色。炭化物を含む。
8　暗褐色。20mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
9　暗褐色。黄白色粘土粒を少量含む。しまり強い。
10　暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。しまり強い。
11　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。

断面D－D'
1　黒褐色。
2　暗褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
3　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。
4　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。
5　黒褐色。しまり弱い。
6　暗黄褐色。
7　暗褐色。しまり弱い。

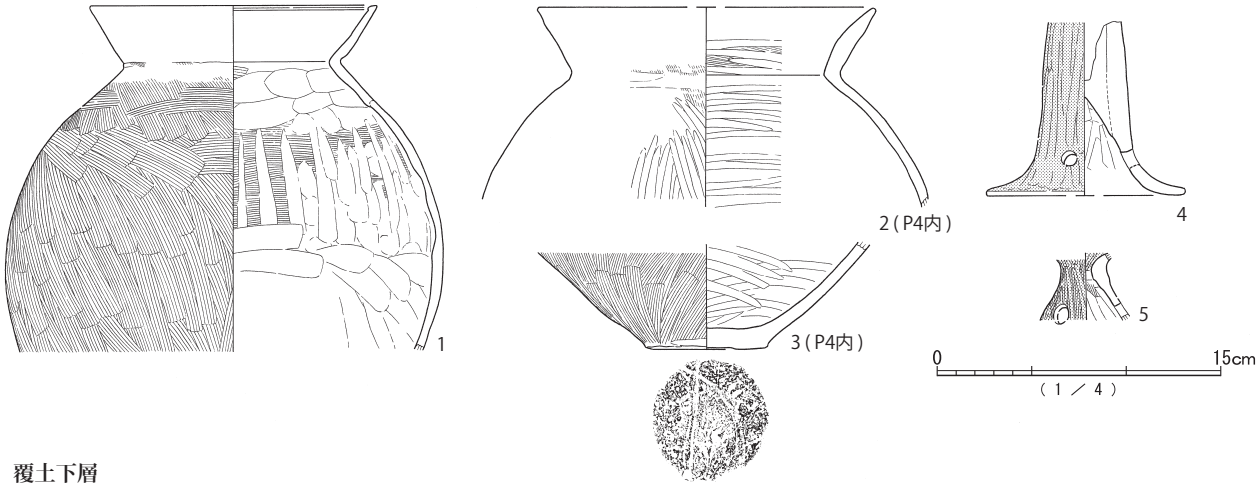
断面F－F'
1　極暗褐色。3mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
2　極暗褐色。
3　極暗褐色。1～3mm大の黄白色粘土ブロック、炭化粒を含む。
4　暗褐色。炭化材・炭化粒を含む。
5　暗褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
6　暗褐色。5mm大の黄白色粘土ブロックを少量含む。
7　暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
8　黒色。大型の黄白色粘土ブロックを含む。
9　10～30mm大の黄白色粘土ブロック主体。
10　黒色。大型の黄白色粘土ブロックを含む。
11　暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。橙色砂粒が多量に流入する。
12　黄白色粘土主体。
13　橙色砂粒主体。やや有機質。
14　橙色砂粒主体。
15　橙色砂粒主体。やや粗い。
16　橙色砂粒を含む有機質土。

断面G－G'
1　黄白色粘土主体。しまり強い。
2　黒褐色。しまり強い。
3　灰褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。
4　黒褐色。粘性強い。しまり強い。
5　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。

Fig.92　SI40(2) 遺構、SI41(2) 遺構、SI42(2) 遺構

SI40

床面付近



覆土下層

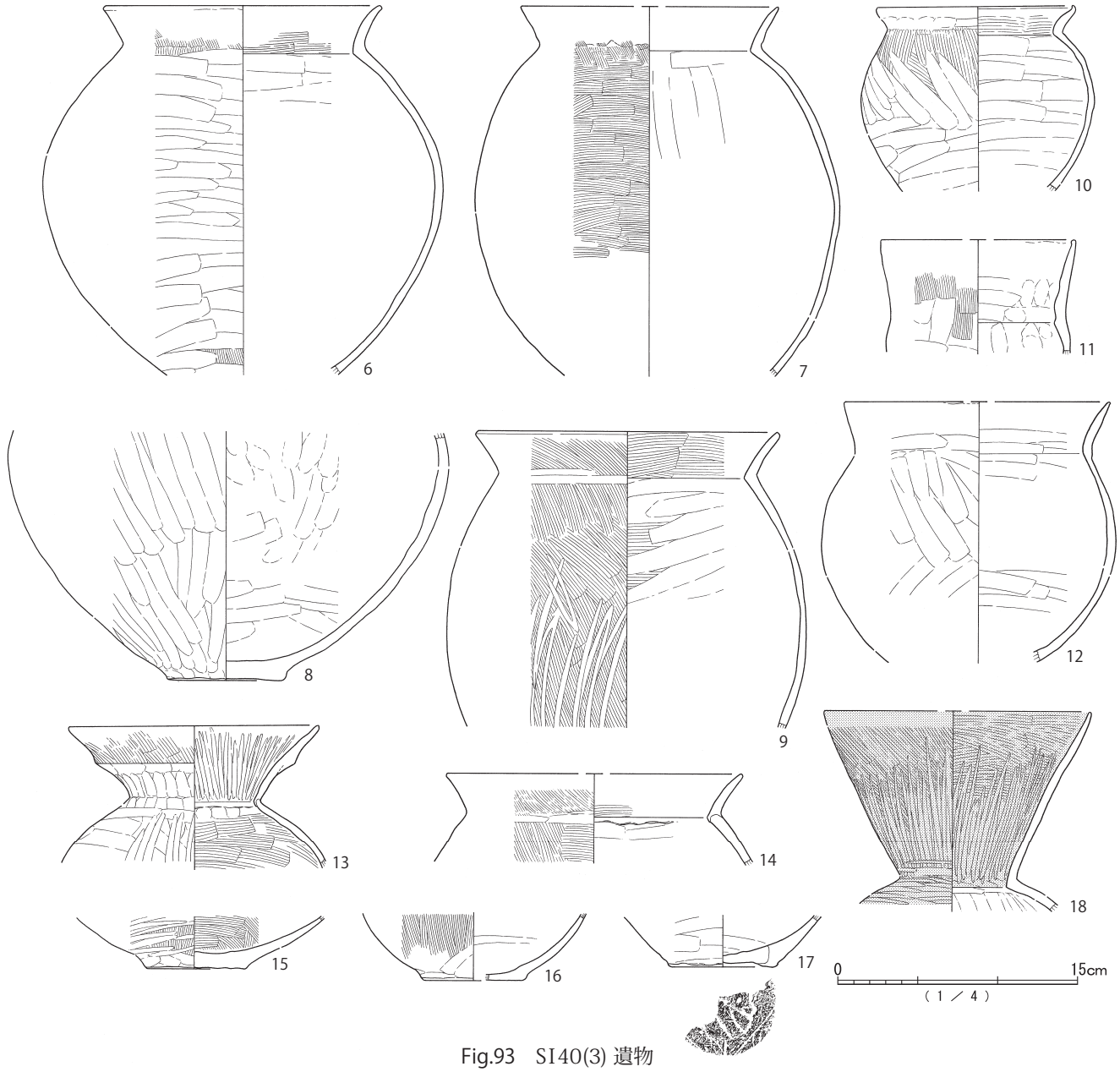
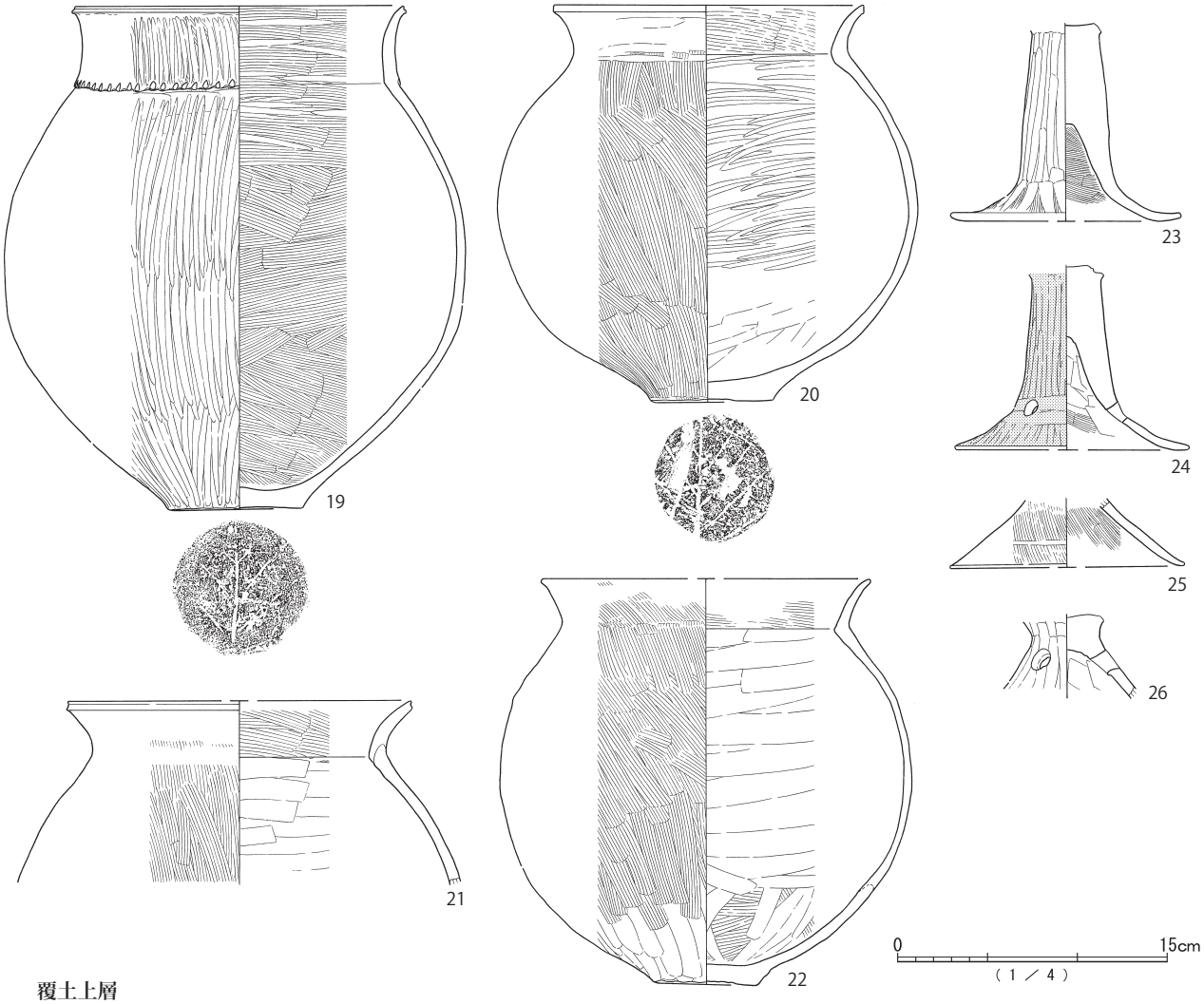


Fig.93　SI40(3) 遺物

SI40

覆土下層



覆土上層

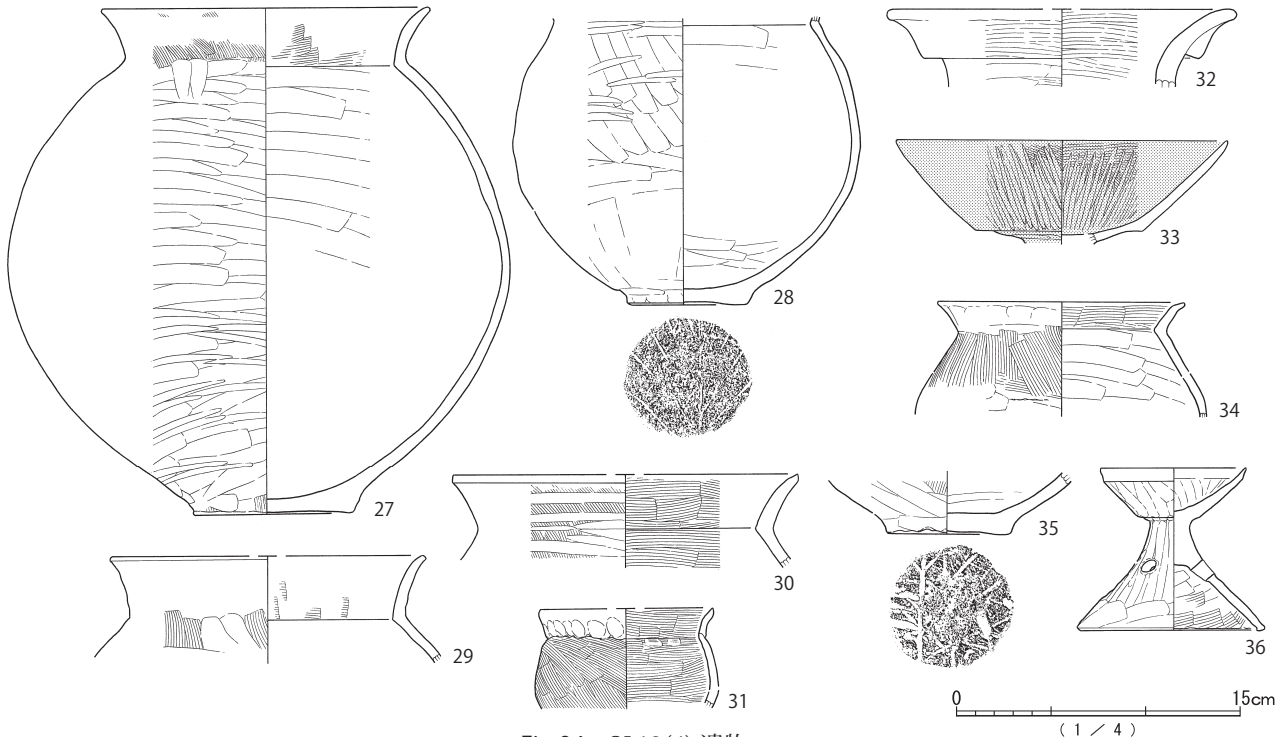
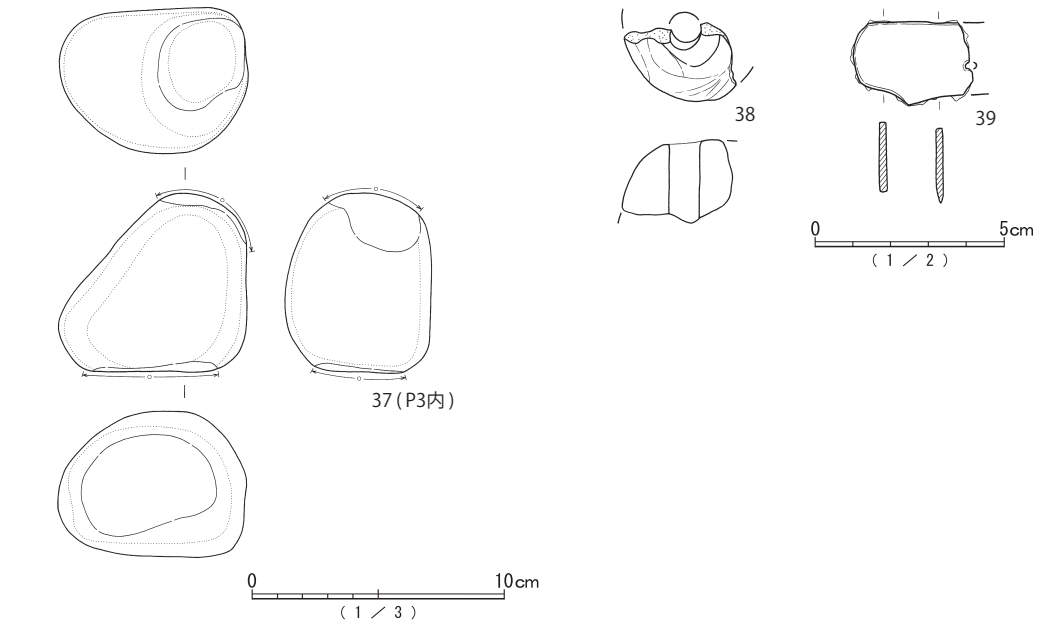


Fig.94　SI40(4) 遺物

SI40



SI42

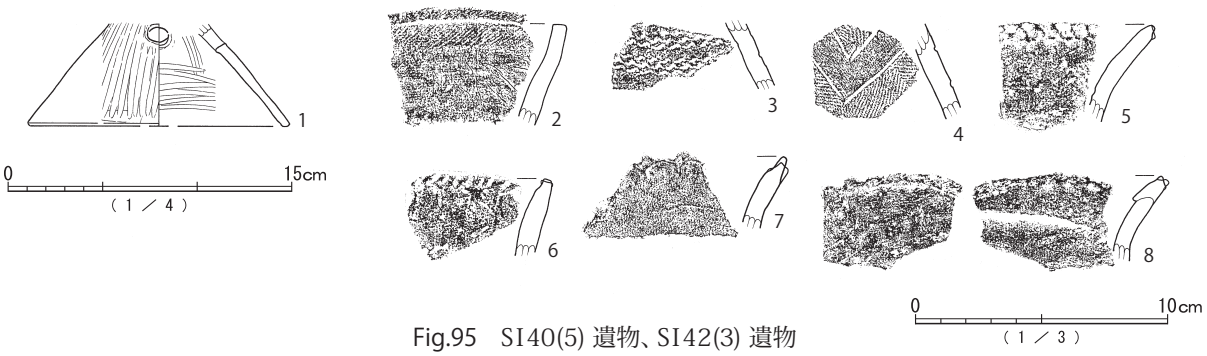


Fig.95　SI40(5) 遺物、SI42(3) 遺物

坑により破壊され、原型をとどめていない。東辺遺存部で南北4.15mを測る。主軸方位はN－16.0°－Wである。主柱穴他内部施設は検出できなかった。

土器は、小破片が若干量出土している。本竪穴の時期は、1～4を根拠として古墳時代前期南岩崎4a期に比定しておく。同期の土器は、SI40の覆土などから出土している。

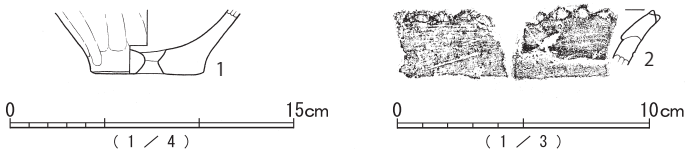
SI40（Fig.91～95、PL.6・22・56・57・77・85・101・104）

SI40は、B地点8K－63区他に所在する。B地点西端部にあり、西側部分は調査区外となる。SI41と重複し、本遺構に対してSI41が古い。SI42と重複している可能性もあるが、SI42の規模範囲が明確ではない。SI41の覆土を掘り込み、掘形面は黄白色粘土層に達している。床面高はSI42とほぼ同じかやや深い。竪穴平面形態は方形を呈し、東辺検出部で2.58mを測る。主軸方位はN－23.0°－Wである。主柱穴は検出できなかった。P3は貯蔵穴であり、覆土上層に炭化材が認められた。炉は、北調査区際P1の可能性がある。東壁溝脇の炉は、SI41に帰属すると考える。床は、粘土ブロックを主体とする貼り床であった。壁溝は全周する。覆土内局部的に焼土・炭化物が認められたが、火災の痕跡としては不確実であった。

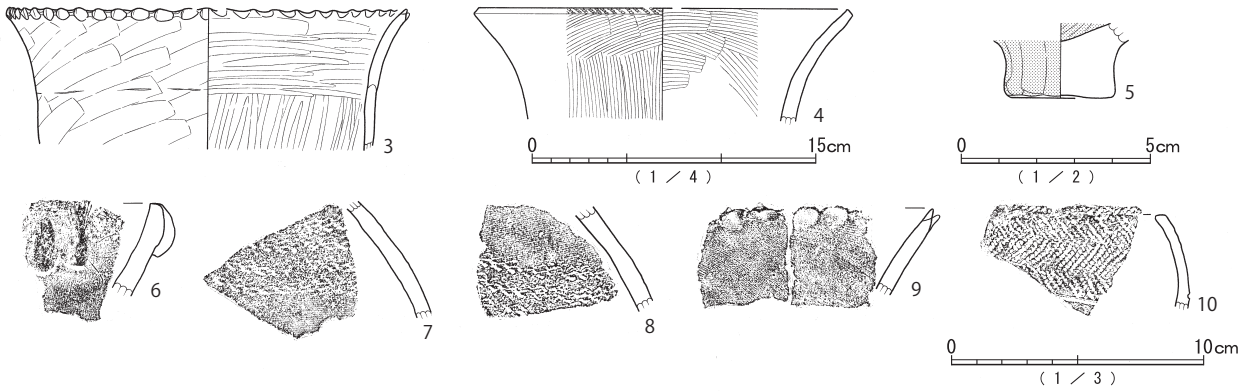
土器は、竪穴中央部を中心に多量に出土している。床面出土は限られるが、五領式後半期を主体とし、覆土出土土器と明確な時期差は認められない。ただし、19～21・26など弥生時代終末期から五

SI41

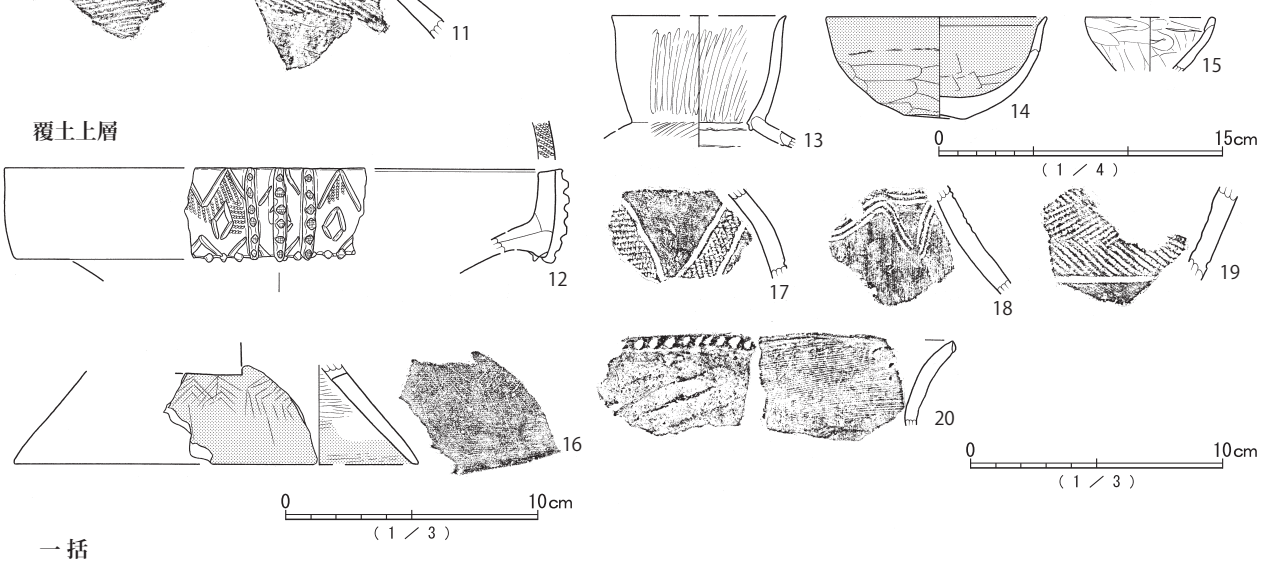
床面付近



覆土下層



覆土上層



一括

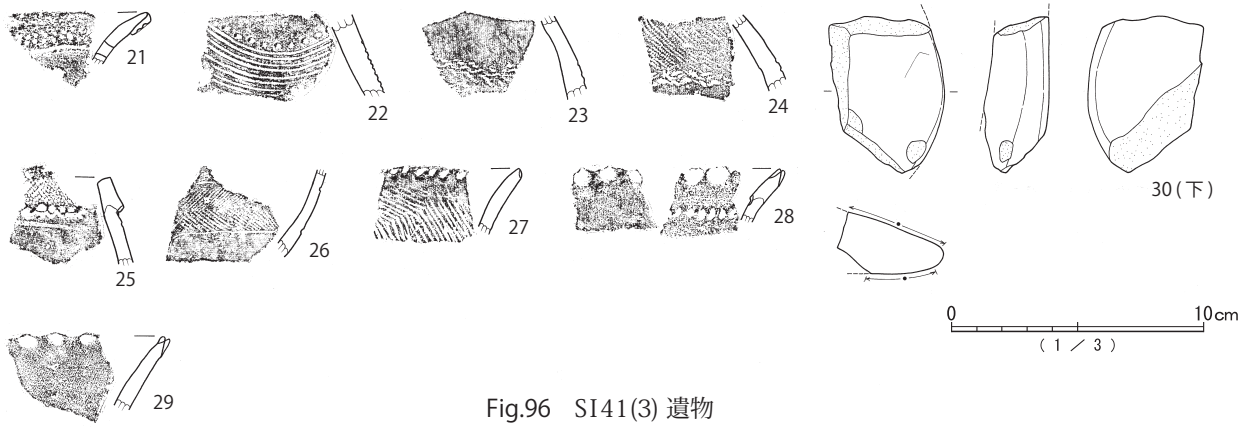


Fig.96　SI41(3) 遺物

SI43・44・45

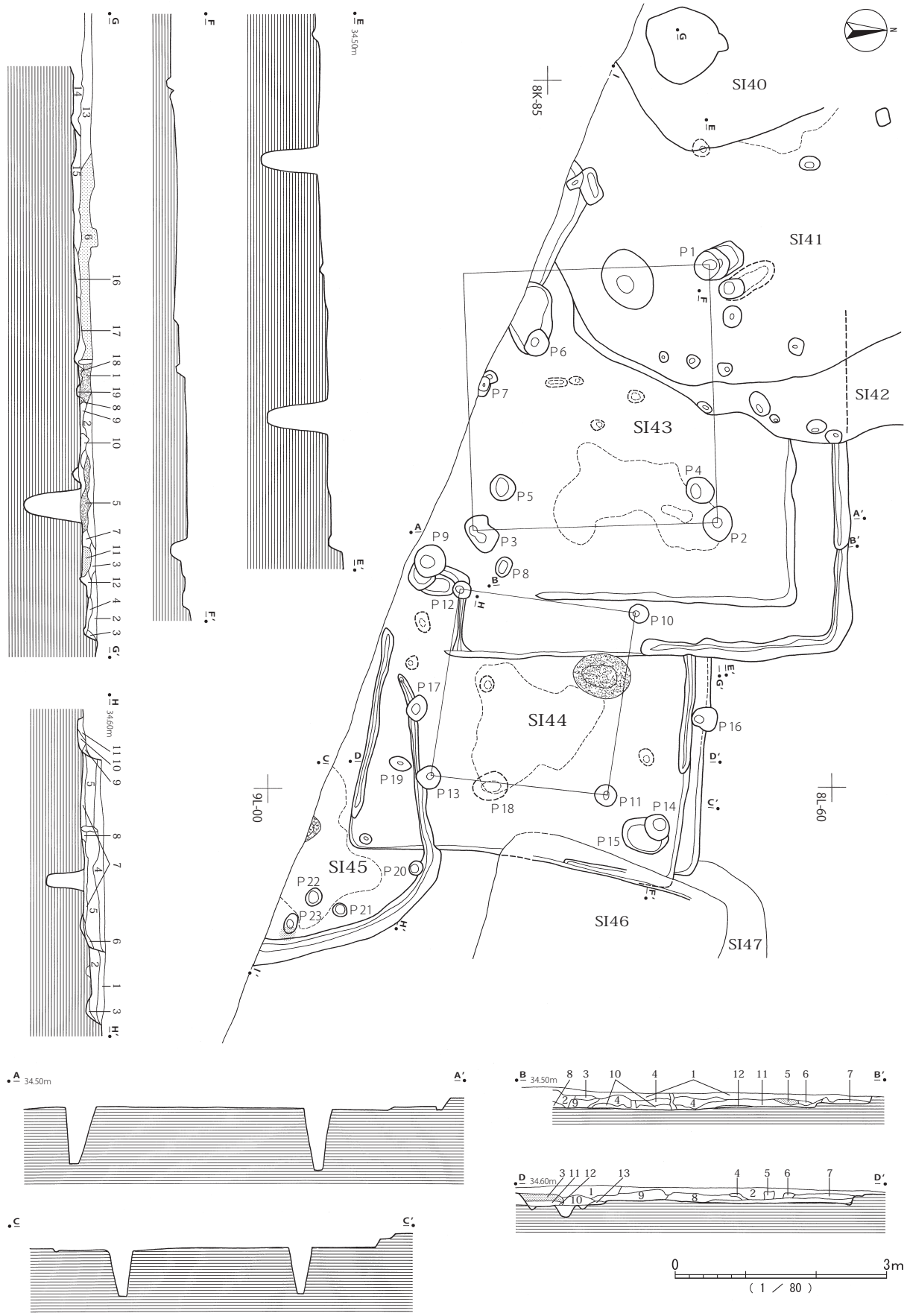


Fig.97　SI43(1) 遺構、SI44(1) 遺構、SI45(1) 遺構

断面I－I'

1　表土。暗灰色。
2　暗褐色土層。
3　焼土。
4　暗褐色土層。
5　ローム漸移層。
6　黒褐色。
7　極暗褐色。ローム粒を含む。
8　黒褐色。
9　暗褐色。ローム粒・焼土粒を少量含む。
10　黒褐色。ローム粒、10mm大のロームブロックを少量含む。
11　暗褐色。ローム粒・黄白色粘土粒を少量含む。
12　極暗褐色。ローム粒を含む。
13　黄褐色。硬化面。
14　極暗褐色。ローム粒を含む。
15　黒褐色。
16　黒褐色。黄白色粘土ブロック主体。
17　黒褐色。焼土粒を少量含む。
18　赤褐色。炉被熱層。
19　極暗褐色。黄白色粘土・ロームブロックを含む。
20　黒褐色。3mm大の黄白色粘土ブロック・粘土粒を少量含む。しまり強い。
21　黒褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。
22　極暗褐色。ローム粒・黄白色粘土粒を多量に含む。
23　黒褐色。
24　黒褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
25　黒褐色。5mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
26　極暗褐色。ローム粒・黄白色粘土粒を多量に含む。
27　黄褐色。黄白色粘土主体。
28　極暗褐色。20mm大の黄白色粘土ブロック・ロームブロックを多量に含む。
29　暗褐色。40mm大の黄白色粘土ブロック・ロームブロック主体。
30　暗褐色。30mm大の黄白色粘土ブロック・ロームブロック主体。
31　暗褐色。黄白色粘土粒・ローム粒を少量含む。
32　暗褐色。10～20mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
33　黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。

Fig.98　SI43(2) 遺構、SI44(2) 遺構、SI45(2) 遺構

断面B－B'
1 表土。
2 黒褐色。黄白色粘土粒・橙色砂粒を少量含む。しまり強い。
3 黒褐色。橙色砂粒を少量含む。
4 黒褐色。炭化粒を少量含む。
5 黒褐色。焼土粒を多量に含む。
6 暗褐色。
7 暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。しまり弱い。
8 暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。
9 黒褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。
10 暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。
11 暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。しまり強い。
12 灰褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。

断面D－D'
1 黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
2 黒褐色。しまり強い。
3 黒褐色。焼土粒を多量に含む。
4 暗褐色。焼土粒を含む。
5 暗褐色。黄白色粘土ブロックを含む。
6 暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。
7 暗褐色。ローム粒を多量に含む。
8 黒褐色。しまり弱い。
9 黒褐色。ローム粒を少量含む。しまり強い。
10 黒褐色。粘性強い。
11 黒褐色。
12 黄白色粘土ブロック。
13 黒褐色。焼土粒を少量含む。

断面H－H'
1 黒褐色。しまり強い。
2 黒褐色。ローム粒・黄白色粘土粒を少量含む。
3 黄白色粘土。
4 黒褐色。
5 黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。しまり非常に強い。
6 暗褐色。ロームブロックを多量に含む。しまり弱い。
7 暗褐色。黄白色粘土粒を少量含む。しまり強い。
8 黒褐色。
9 黒褐色。
10 暗褐色。ロームブロックを多量に含む。
11 暗褐色。黄白色粘土ブロックを少量含む。

断面G－G'
1 黒褐色。炭化粒を多量に含む。
2 黒褐色。
3 暗黄褐色。
4 黒褐色。
5 黒褐色。20mm大の炭化物を多量に含む。
6 暗褐色。焼土を多量に、黄白色粘土粒を少量含む。
7 暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
8 暗褐色。黄白色粘土ブロック・焼土粒を多量に含む。
9 暗褐色。黄白色粘土粒を含む。
10 暗褐色。黄白色粘土主体。
11 焼土ブロック。
12 暗褐色。
13 黒褐色。
14 暗褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
15 暗褐色。黄白色粘土粒を少量含む・
16 暗褐色。20mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
17 暗褐色。黄白色粘土・ローム粒を多量に含む。
18 暗褐色。黄白色粘土ブロック・焼土粒を多量に含む。
19 黒褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。しまり弱い。

領式前半期が若干量混在する。甕形土器1は、布留式の甕形土器であり、搬入品の可能性がある。土器以外では、37が磨石、38が土玉である。39は穂摘み具状の鉄製品であるが、製品を特定することはできない。

本竪穴の時期は、古墳時代前期南岩崎4c期である。

SI41（Fig.91・92・96、PL.22・57・77・78・95・101）

SI41は、B地点8K−65区他に所在する。SI39・40・42・43と重複し、本遺構が最も古い。ただし、SI39・42については、遺構検出状況から新旧関係を確認することはできなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、黄白色粘土層上面まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.08m程度である。竪穴平面形態は胴張り隅丸長方形を呈し、竪穴主軸長は推定で7.10m、確認面掘形面積は48.60㎡を測る。主軸方位はN−24.0°−Wである。ただし、主柱穴をP6・7とし、SI40東壁溝際の炉を本遺構に帰属するものとすると、北隅部分の平面形態がやや不自然にみえる。主柱穴P6・7を基準にした場合の竪穴主軸長は8.20m、掘形面積は54.30㎡になる。この場合は、P6・7に対応する主柱穴が確認されていない点が問題を残す。P8は貯蔵穴である。炉は、SI40内を含め2基検出されている。貼り床構造は認められなかった。壁溝は、南東部側で認められた。覆土内局部的に焼土・炭化物が認められたが、火災の痕跡としては不確実である。

出土土器は、小破片が散在する。高杯形土器脚部16は、方形の透かし孔をもち、その下部に綾杉状の線刻を刻んでいる。時期的には弥生時代終末期と考える。土器以外では、30の磨石が出土している。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1c期と推定する。

SI42（Fig.91・92・95、PL.22・95）

SI42は、B地点8K−57区他に所在する。SI39・40・41・43と重複するが、遺構検出状況から新旧関係を確認することはできなかった。隣接するSI41覆土上で床面は検出できなかったが、遺存状態も不良で、積極的な根拠とはならない。出土土器から判断するならば、本遺構に対してSI39・40・43が新しく、SI41が古い。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、黄白色粘土層上面まで掘り込んでいる。SI41東側で、立ち上がりの一部、床硬化面の一部が検出されたのみであり、竪穴の平面形態や付属施設等の詳細は明らかではない。確認面からの深さは、最大で0.1m程度である。

貼り床構造は認められなかった。

本竪穴の時期は、1を根拠とするならば、弥生時代終末期南岩崎3期に比定される。ただし、その帰属は確実ではない。なお、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の土器は、SI40・43覆土からも出土している。

SI43（Fig.97～100、PL.6・22・23・57・58・86・95・105）

SI43は、B地点8K−77区他に所在する。SI41・42・44・45と重複し、本遺構が最も新しい。重複する竪穴群は、覆土から多量の土器が出土したため、SI41覆土中の竪穴範囲を確実にとらえることはできなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.2m程度である。重複する竪穴との床面比高は、SI41に対して0.1m程度高く、SI44・45に対して約0.1m程度低い。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は7.25m（主軸）×7.30m、確認面掘形面積は53.50㎡程度を測る。主軸方位はN−1.0°−Wである。主柱穴はP1～3であり、深さは0.8m以上を測る。P4も0.71mであるが、P6は0.2mと浅い。主柱穴から建て替えを判断することはできない。P9は、本竪穴に帰属する可能性が高い。炉・カマドは検出できなかった。これは、竪穴の検出範囲、他遺構との新旧関係からするとやや不自然であり、SI41・42接点の焼土が、本遺構の炉となる可能性も想定できる。床は、貼り床構造が認められた。竪穴周縁部で、所謂ベッド状遺構が検出した。幅約0.7m、床面比高は0.03～0.05m程度を測る。壁溝は北東隅部で検出した。覆土内で焼土の堆積が認められた。火災に遭った可能性は高いが、堆積状況から竪穴廃棄後の焼却によるものと推定する。

床面から覆土下部にかけて、まとまって土器が出土している。ただし、完存品は認められず、遺存土器を特定することはできない。土器以外では、27が土玉、28が滑石製剣形石製品である。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b新期と推定する。

SI44（Fig.97・98・100、PL.22・23・58・86・102）

SI44は、B地点8K−89区他に所在する。SI43・45～47と重複し、本遺構に対してSI43が新しく、SI45～47が古い。ただし、SI47とは接している程度であり、遺構検出状況から新旧関係を確認することはできなかった。北壁は掘りすぎであり、別遺構の重複ではない。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.19m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、主軸長は4.53～4.64m、東西軸は推定で4.65m、確認面掘形面積は21.55㎡を測る。主軸方位はN−8.0°−Eである。主柱穴はP10～13である。P9は、SI43に帰属する可能性が高い。炉は長軸長0.81mを測る。床は貼り床構造が認められた。壁溝は、断続的に検出された。本竪穴では、床面上に焼土・炭化物の堆積が認められた。火災に遭った可能性が高い。隣接するSI43も火災に遭ったと推定するが、本竪穴では炭化材の遺存が特徴的に認められた。

出土土器は、破片個体が主体で、確実に遺存遺物と考えられるものはない。ただし、出土位置は床面から覆土下部を中心とする。土器以外では、13の砥石が出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI45（Fig.97・98・100、PL.23・58・78・95・103）

SI45は、B地点8K−99区他に所在する。SI43・44と重複し、本遺構が最も古い。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.17m程度である。床面高は

SI43

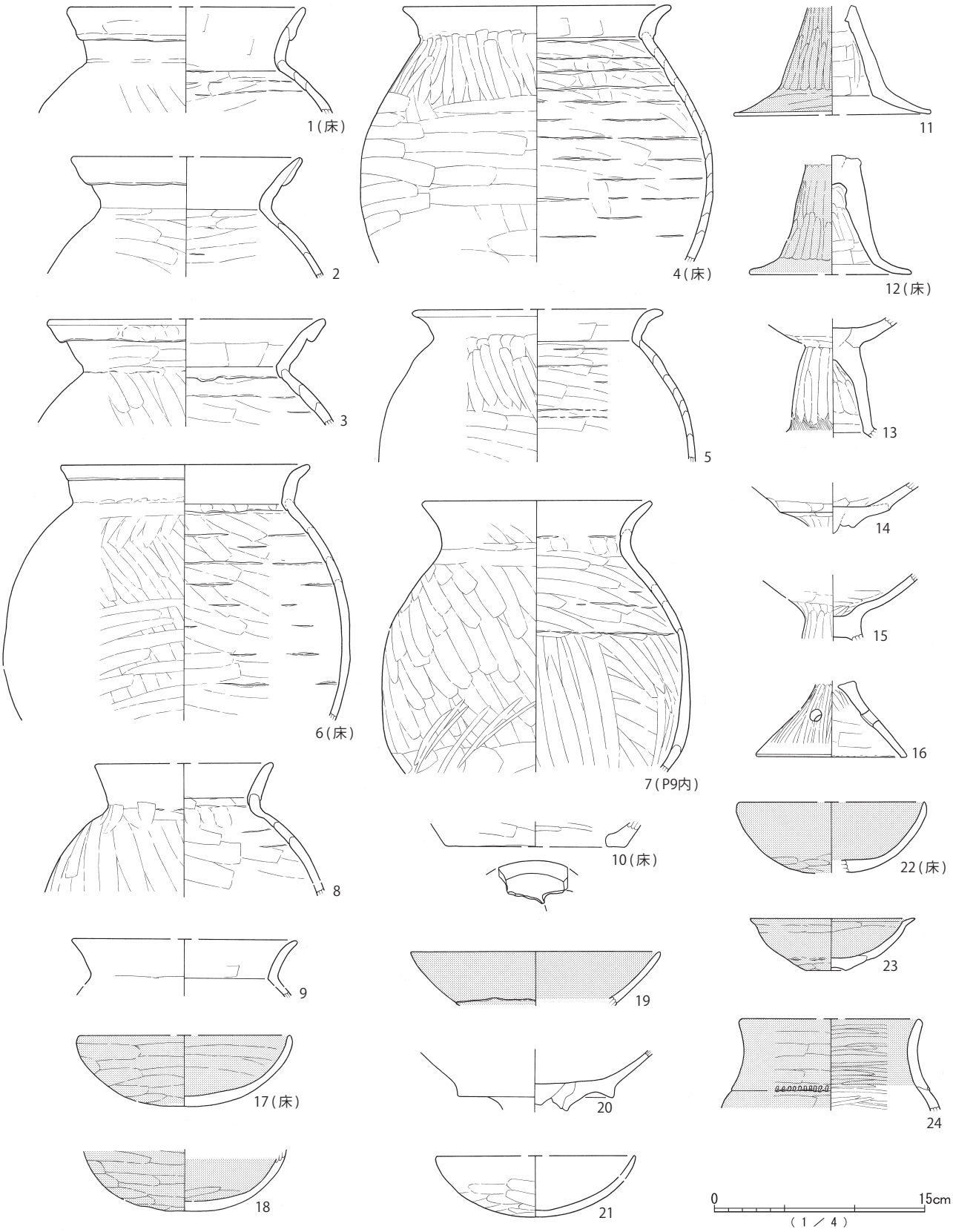
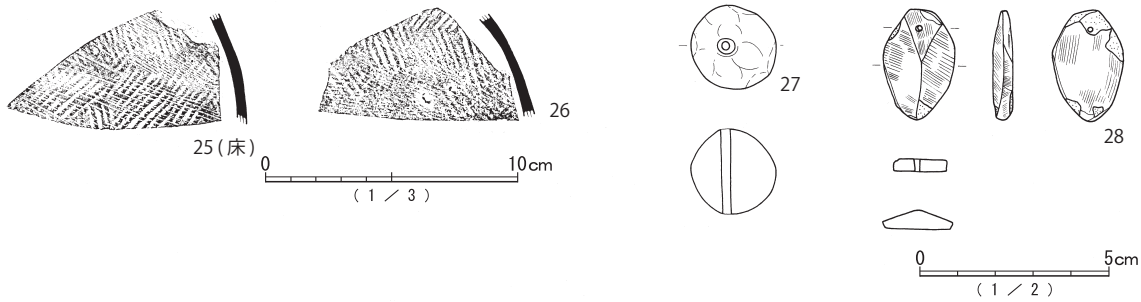
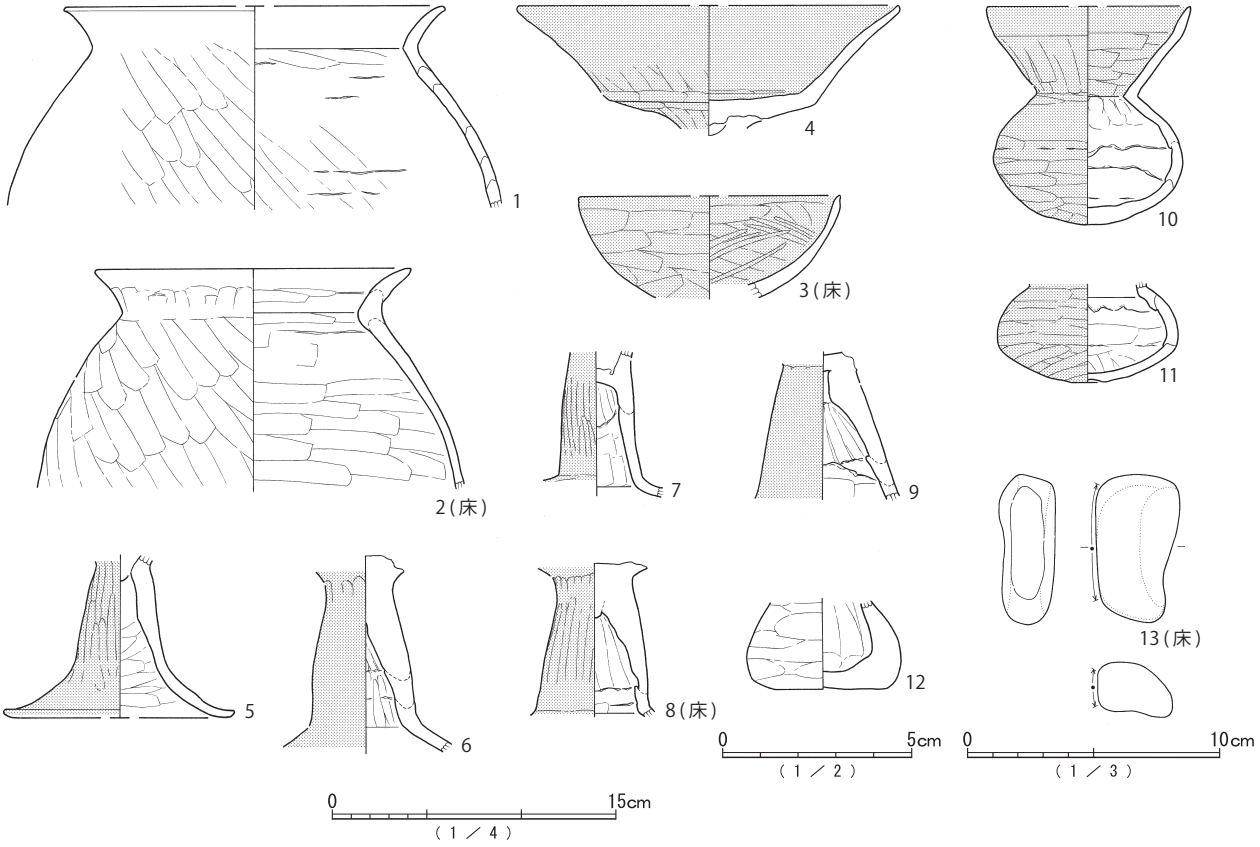


Fig.99　SI43(3) 遺物

SI43



SI44



SI45

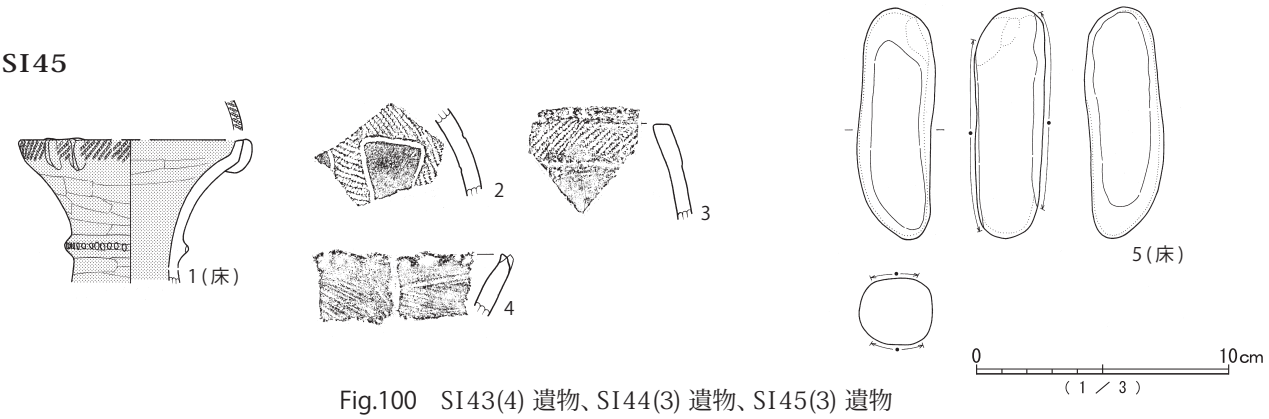


Fig.100　SI43(4) 遺物、SI44(3) 遺物、SI45(3) 遺物

SI44とほぼ同じであった。竪穴平面形態は胴張り隅丸方形を呈し、規模は、東西遺存部で約4.0mを測る。主軸方位はN－9.0°－Wである。調査範囲内で、確実に主柱穴ととらえられるものは確認できなかった。炉は、調査区際で検出したが、想定する主軸からは東に寄っている。貼り床構造は明確ではなかったが、隣接の竪穴に対して、硬化面範囲が明瞭に認められた。

出土土器は、破片個体のみであるが、時期的にはまとまっている。土器以外では、5の砥石が出土している。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1c期と推定する。

SI46（Fig.101、PL.23・58・59・86）

SI46は、B地点8L－71区他に所在する。SI44・47、SB01と重複し、本遺構に対してSI44・SB01が新しく、SI47が古い。他に北東隅部で溝状遺構と重複関係にあるが、詳細は明らかではない。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘形は黄白色粘土層に達している。確認面からの深さは、最大で0.19m程度である。竪穴平面形態はやや隅丸の方形を呈し、全体規模は、3.35m（南北軸）×3.57m、確認面掘形面積は11.01㎡を測る。方位は、南北軸を主軸とした場合、N－16.0°－Eである。主柱穴・炉は検出できなかった。炉は、SI01の柱掘形によって破壊された可能性もあるが確証はない。P3は、調査所見として、本遺構に帰属するものであり、貯蔵穴と推察する。床面は、掘形構造をもち、竪穴中央北側に硬化面範囲が認められた。壁溝は全周する。

土器は、竪穴北西隅部覆土からまとまって出土している。遺存率も高く時期的にもまとまっていることから、一括投棄された可能性が高い。

本竪穴の時期について、出土土器は、本遺構に直接ともなうものとは考えにくいが、一応古墳時代前期南岩崎4c期をあてておく。

SI47（Fig.101、PL.23）

SI47は、B地点8L－61区他に所在する。SI44・46、SB01と重複し、本遺構が最も古い。ただし、SI44との関係は、遺構検出状況からは確認できなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.09m程度、重複するSI46との比高は約0.08mを測る。竪穴平面形態は楕円形と推定され、遺存部で3.42mを測る。主柱穴、炉等の施設は検出できなかった。主軸方位も明らかではない。貼り床構造は明確ではなかった。

実測可能な遺物は検出されていない。

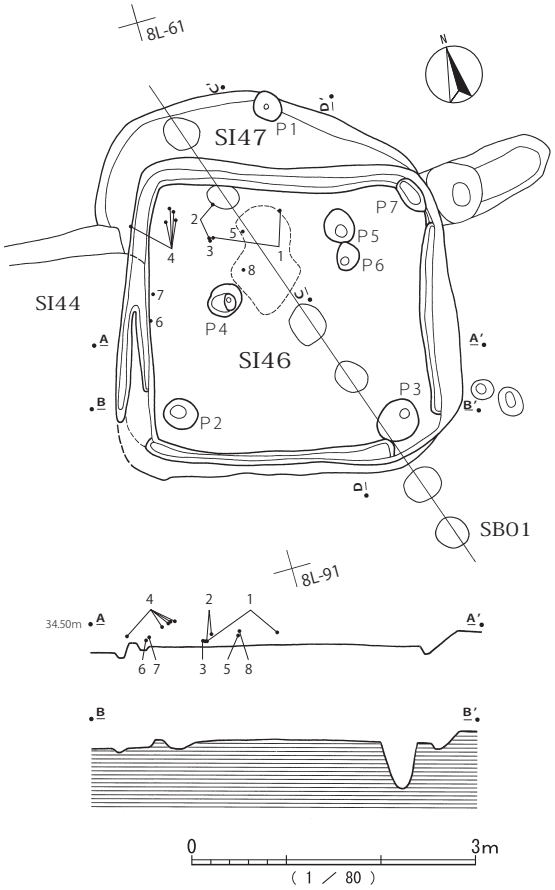
本竪穴の時期は、竪穴平面形態から弥生時代の所産と考えられるが、詳細時期は明らかではない。

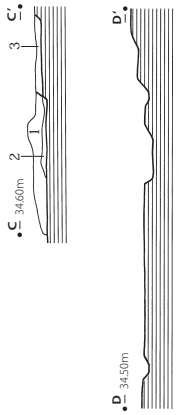
SI48（Fig.102・103、PL.23・24・59・78・95・99・105）

SI48は、B地点8K－29区他に所在する。SI50と重複し、本遺構に対してSI50が新しい。ただし、これは出土土器からの判断であり、遺構検出状況、土層断面から新旧関係を検証することはできない。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、掘り込み面は黄白色粘土層上面に達している。確認面からの深さは最大で0.19mを測る。竪穴平面形態は楕円形を呈し、平面規模は、主軸方向現存部で5.70m、推定7.30m、東西軸推定で6.0m、確認面掘形面積は41.90㎡程度になる。主軸方位は、N－23.0°－Wである。

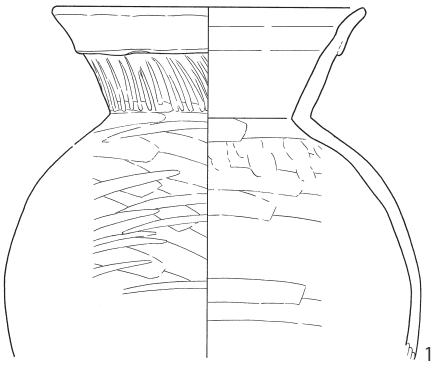
本竪穴は、主柱穴の配置から、建て替えの可能性が認められる。新旧関係は明確ではないが、主柱穴P1・3・4をSI48A、主柱穴P2・3・5をSI34Bと呼称する。ただし、竪穴南辺部側の壁溝外の立ち

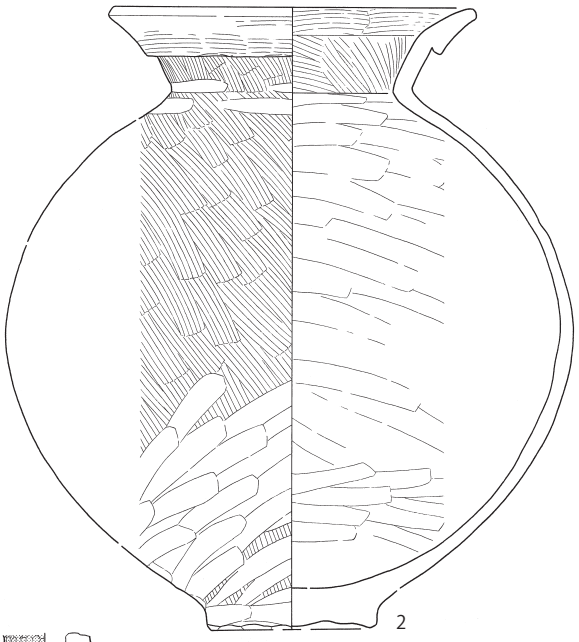
SI46・47



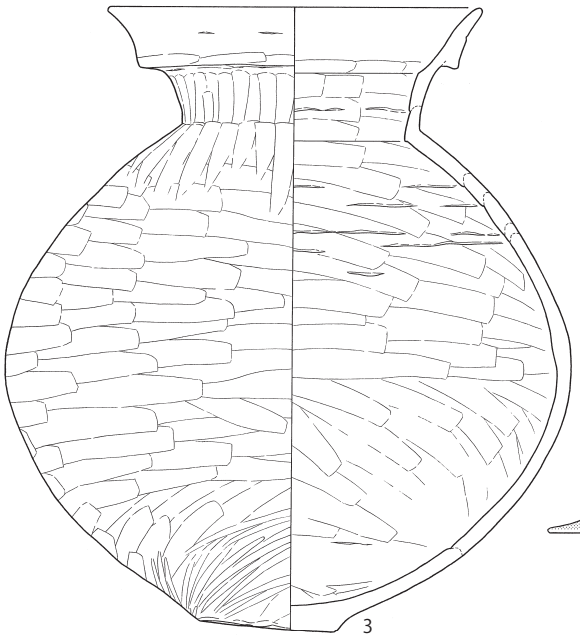


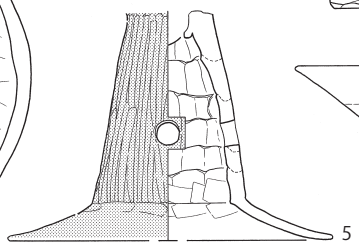
断面C−C′
1　黒褐色。粘性強い。しまり強い。
2　黒褐色。ロームブロックを含む。1層より粘性、しまりがさらに強い。
3　暗黄褐色。

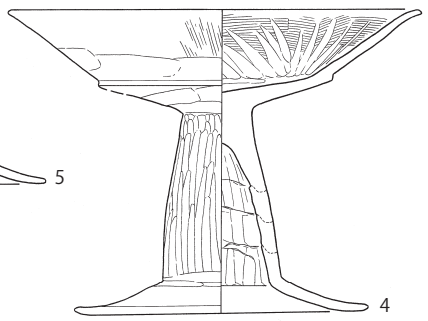


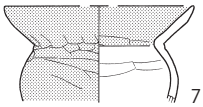


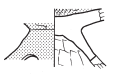
SI46

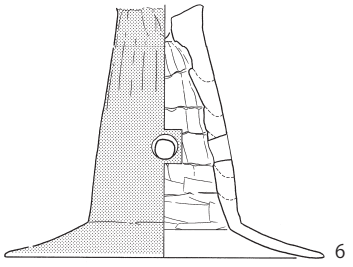








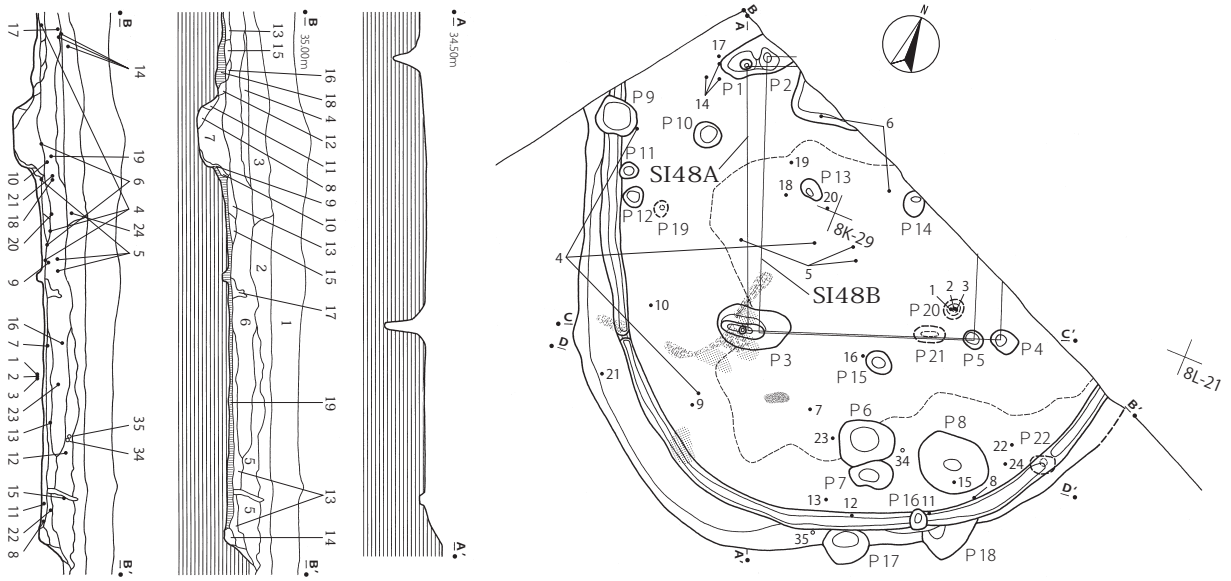




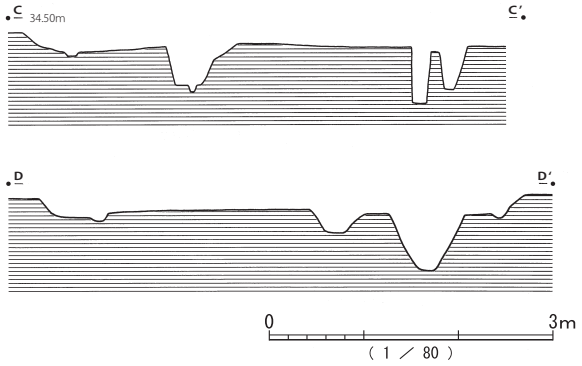
0　15cm
（1／4）

Fig.101　SI46 遺構遺物、SI47 遺構

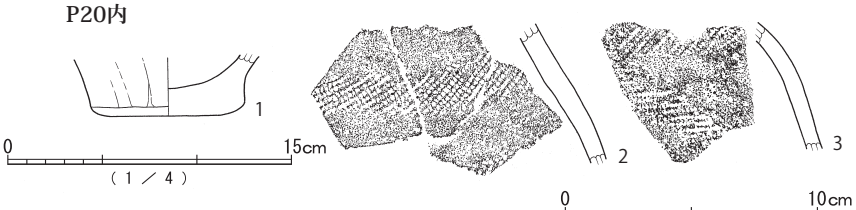
SI48



断面B－B'
1　表土。暗灰色。
2　暗褐色。
3　暗褐色。
4　黒褐色。
5　黒褐色。ローム粒を多量に含む。
6　黒褐色。焼土粒を微量含む。
7　黒褐色。
8　黒褐色。
9　黄白色粘土ブロック主体。
10　暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
11　暗褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
12　暗褐色。黄白色粘土粒主体。
13　黒褐色。黄白色粘土粒を含む。
14　暗褐色。
15　黄白色粘土ブロック主体。
16　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。
17　ローム粒主体。
18　黄白色粘土主体。貼り床。
19　ローム主体。貼り床。



P20内



床面付近

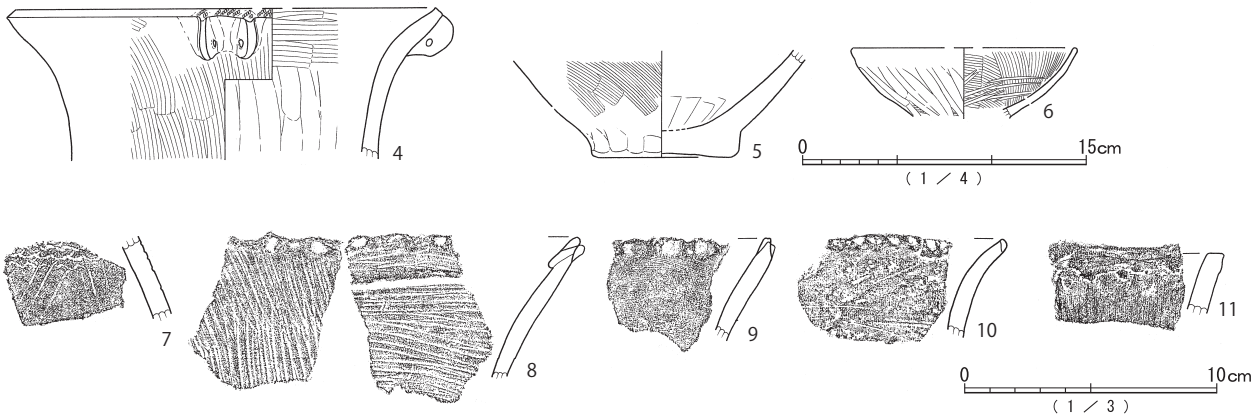
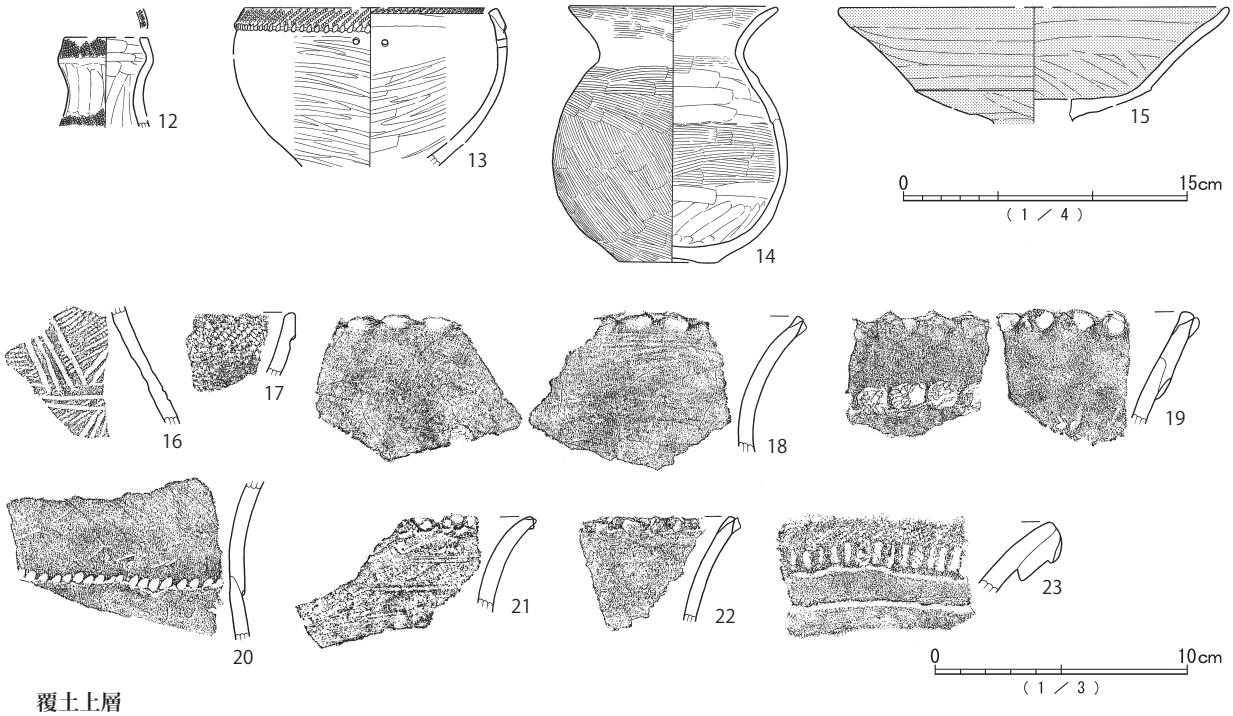


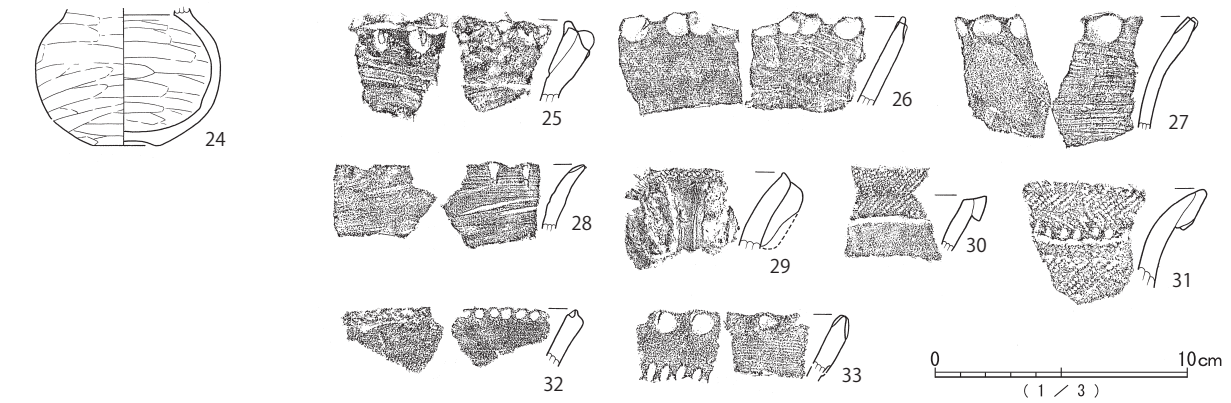
Fig.102　SI48(1) 遺構遺物

SI48

覆土下層



覆土上層



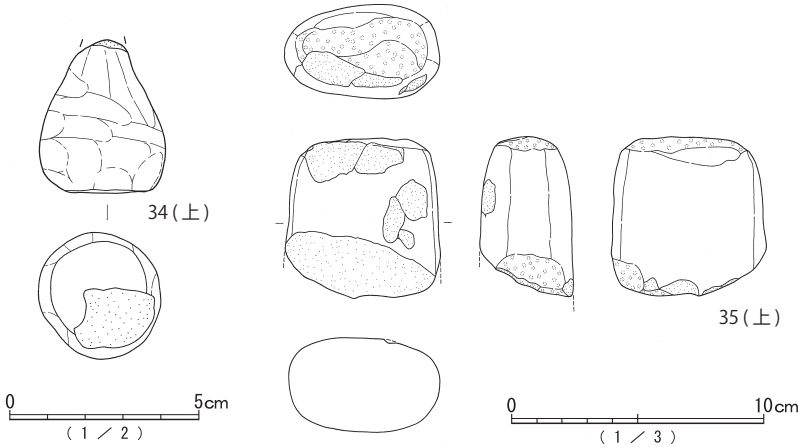


Fig.103　SI48(2) 遺物

上がりについては、竪穴の建て替えによるものか、あるいは調査時の掘りすぎによるものか明らかではない。P8は貯蔵穴である。炉は、調査範囲内では検出されなかった。床面は、明確な硬化面が竪穴中央部で認められた。一部Pitは硬化面下で検出したが、主柱穴の新旧関係はとらえられなかった。貼り床構造は認められなかった。壁溝は全周する。本竪穴では、南隅部周辺を中心に焼土・炭化物が認められたが、いずれも床面から8～12cm程度上であった。本竪穴が火災に遭ったかどうかは明確ではない。

出土土器は、破片個体が中心となる。出土層序から、宮ノ台式が本竪穴に関連すると考えられるが、とくに床硬化面下から検出されたP20出土土器は、時期的な根拠になる。土器以外では、34が土玉、35が磨製石斧基部である。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1b期と推定する。

SI49（Fig.104～106、PL.24・59・86・101・104）

SI49は、B地点8L−42区他に所在する。SI50・SB01・SE01と重複し、本遺構に対してSB01・SE01が新しく、SI50が古い。SI50との新旧関係は出土土器による。遺構検出状況、土層断面からは検証できなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.19m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、東壁にカマドをもつ。南北を主軸とした場合の主軸方位はN−12.0°−Eである。全体規模は4.61m（主軸）×4.69m、確認面掘形面積は18.78㎡を測る。主柱穴はP16～19である。P20は貯蔵穴である。炉・壁溝は検出できなかった。明確な貼り床構造は認められなかったが、床はほぼ全体に硬化していた。本竪穴は、火災に遭ったことが想定され、竪穴中央部から東辺部側を中心として、床面上に焼土・炭化物の堆積が認められた。

土器は、覆土から比較的多数出土したが、接合可能な個体は少なかった。カマド燃焼部およびカマド前面床面上から出土した1・2の甕形土器は、遺存遺物と考えられる。土器以外では、9が敲石、10が土製支脚、11が磨石である。10の支脚は、カマド燃焼部中央に正立した状況で出土した。頭部基部はもろく、復元できなかった。

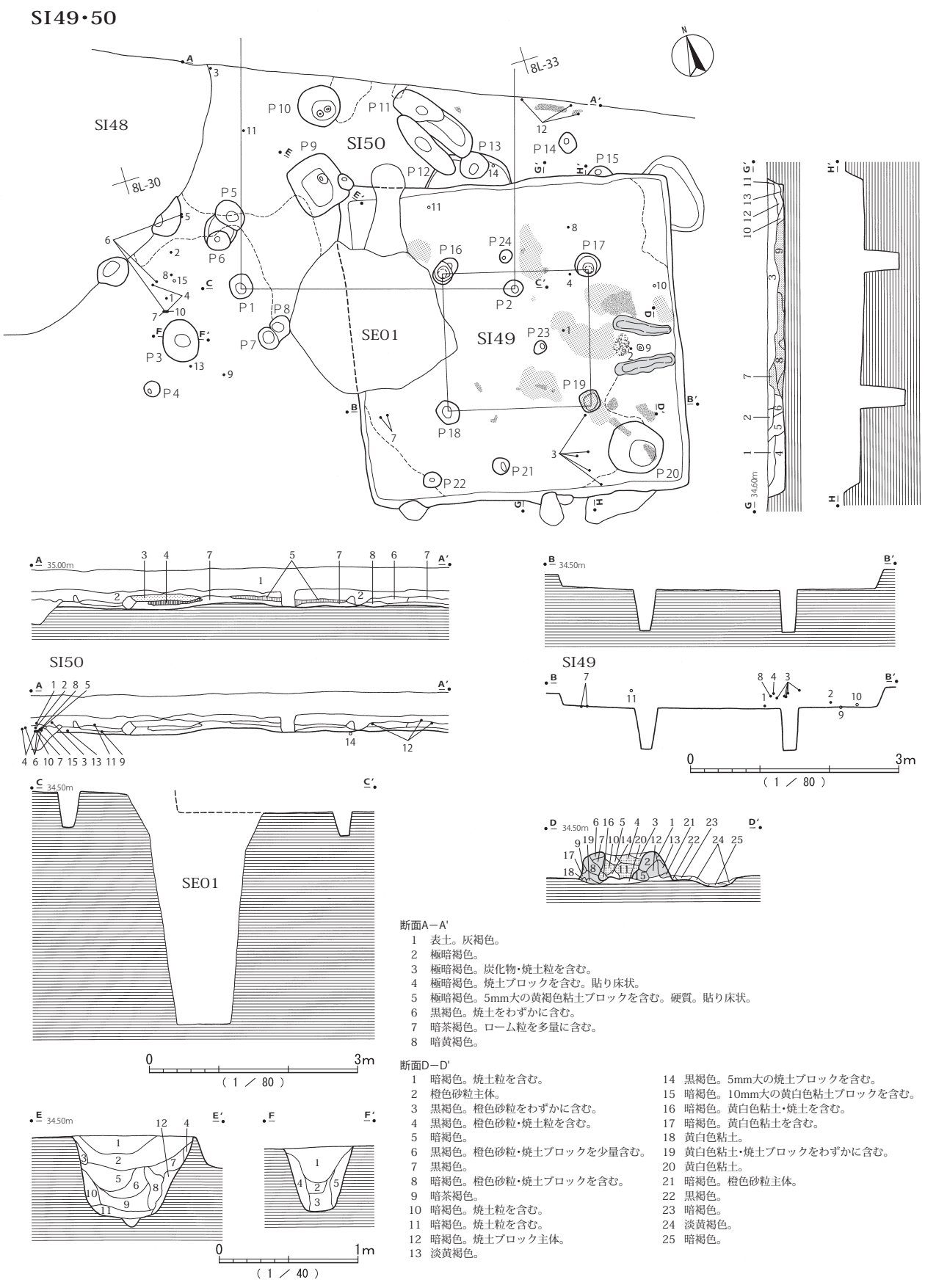
本竪穴の時期は、古墳時代後期南岩崎6b期と推定する。

SI50（Fig.104・106、PL.24・60・86・87・101）

SI50は、B地点8L−31区他に所在する。SI48・49、SE01と重複し、本遺構に対してSI49、SE01が新しく、SI48が古い。ただし、新旧関係の判断はおおむね出土土器による。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とするが、調査区断面（A−A'）の観察によるならば、床面の一部は暗褐色土層中で認められた。竪穴の掘り込み範囲は検出できなかった。竪穴平面形態は不明。床硬化面・出土遺物の分布状況から、P1・2を南側の主柱穴とし、東西長約7.0mの竪穴規模が推定できる。主軸方位は、N−16.0°−Eである。P3周辺から多量の土器が出土しており、P3は貯蔵穴の可能性がある。P9については、本竪穴にともなうものかどうか明らかではない。カマド・炉は検出できなかった。本竪穴では、床面上で焼土・炭化物の堆積が認められた。火災に遭った可能性が高い。

出土土器は、P3周辺、推定竪穴南西隅にまとまっていた。遺存遺物を含むものと推定する。土器以外では、14・15が磨石である。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5a期と推定する。



断面A－A'
1　表土。灰褐色。
2　極暗褐色。
3　極暗褐色。炭化物・焼土粒を含む。
4　極暗褐色。焼土ブロックを含む。貼り床状。
5　極暗褐色。5mm大の黄褐色粘土ブロックを含む。硬質。貼り床状。
6　黒褐色。焼土をわずかに含む。
7　暗茶褐色。ローム粒を多量に含む。
8　暗黄褐色。

断面D－D'
1　暗褐色。焼土粒を含む。
2　橙色砂粒主体。
3　黒褐色。橙色砂粒をわずかに含む。
4　黒褐色。橙色砂粒・焼土粒を含む。
5　暗褐色。
6　黒褐色。橙色砂粒・焼土ブロックを少量含む。
7　黒褐色。
8　暗褐色。橙色砂粒・焼土ブロックを含む。
9　暗茶褐色。
10　暗褐色。焼土粒を含む。
11　暗褐色。焼土粒を含む。
12　暗褐色。焼土ブロック主体。
13　淡黄褐色。
14　黒褐色。5mm大の焼土ブロックを含む。
15　暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
16　暗褐色。黄白色粘土・焼土を含む。
17　暗褐色。黄白色粘土を含む。
18　黄白色粘土。
19　黄白色粘土・焼土ブロックをわずかに含む。
20　黄白色粘土。
21　暗褐色。橙色砂粒主体。
22　黒褐色。
23　暗褐色。
24　淡黄褐色。
25　暗褐色。

Fig.104　SI49(1) 遺構、SI50(1) 遺構

断面E－E'
1　黒褐色。
2　黒褐色。黄白色粘土ブロックをまばらに含む。
3　黄白色粘土主体。しまり弱い。
4　黒褐色。
5　黒褐色。2層に比して黄白色粘土ブロックを多量に含む。
6　黒褐色。しまり弱い。
7　黒褐色。2層に比して黄白色粘土ブロックを多量に含む。
8　灰褐色。黄白色粘土主体。
9　暗褐色。しまり弱い。粘性強い。
10　黒褐色。しまりなし。
11　灰褐色。黄白色粘土ブロック・粘土粒を多量に含む。
12　暗褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。

断面F－F'
1　黒褐色。
2　黒褐色。ローム粒・橙色砂粒を多量に含む。
3　暗褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。しまり弱い。
4　黒褐色。ローム粒をわずかに含む。
5　暗褐色。ローム粒をわずかに含む。

断面G－G'
1　暗褐色。
2　黒褐色。黄白色粘土ブロック・粘土粒をまばらに含む。
3　暗褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。
4　暗褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。
5　暗褐色。黄白色粘土ブロック・粘土粒を多量に含む。
6　黒褐色。
7　暗褐色。焼土粒を多量に含む。
8　暗褐色。焼土粒を含む。
9　暗褐色。黄白色粘土ブロック・焼土粒を多量に含む。
10　暗褐色。
11　暗茶褐色。
12　暗褐色。黄白色粘土ブロックをまばらに含む。
13　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。

SI49

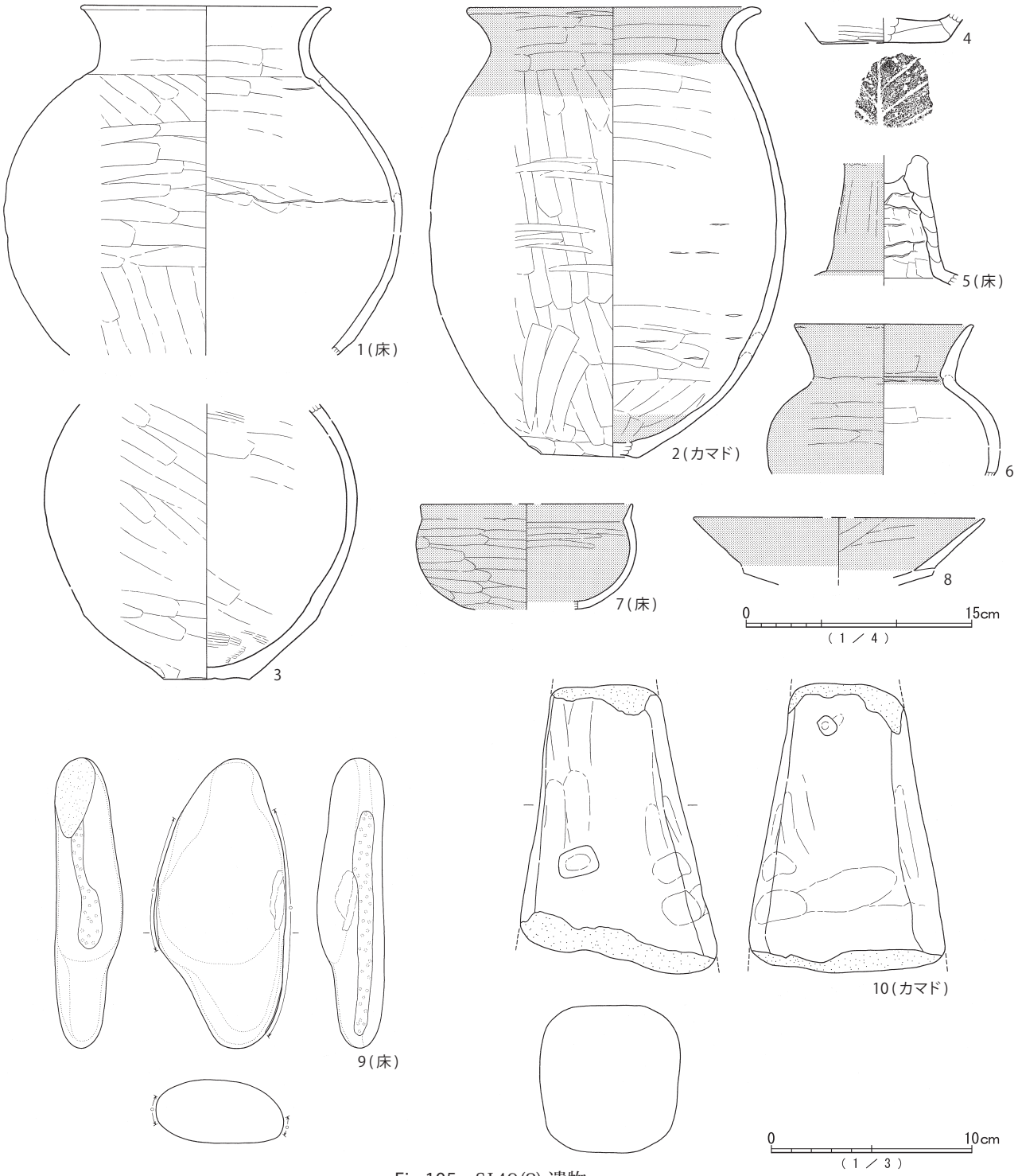
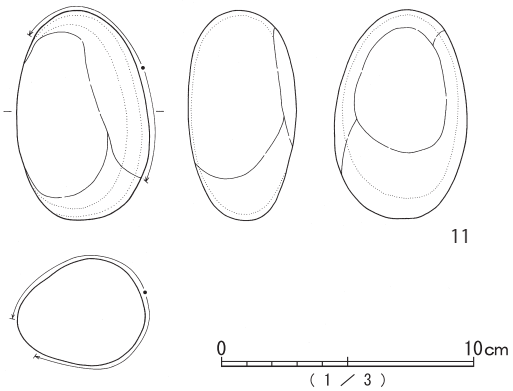


Fig.105　SI49(2) 遺物

SI49



SI50

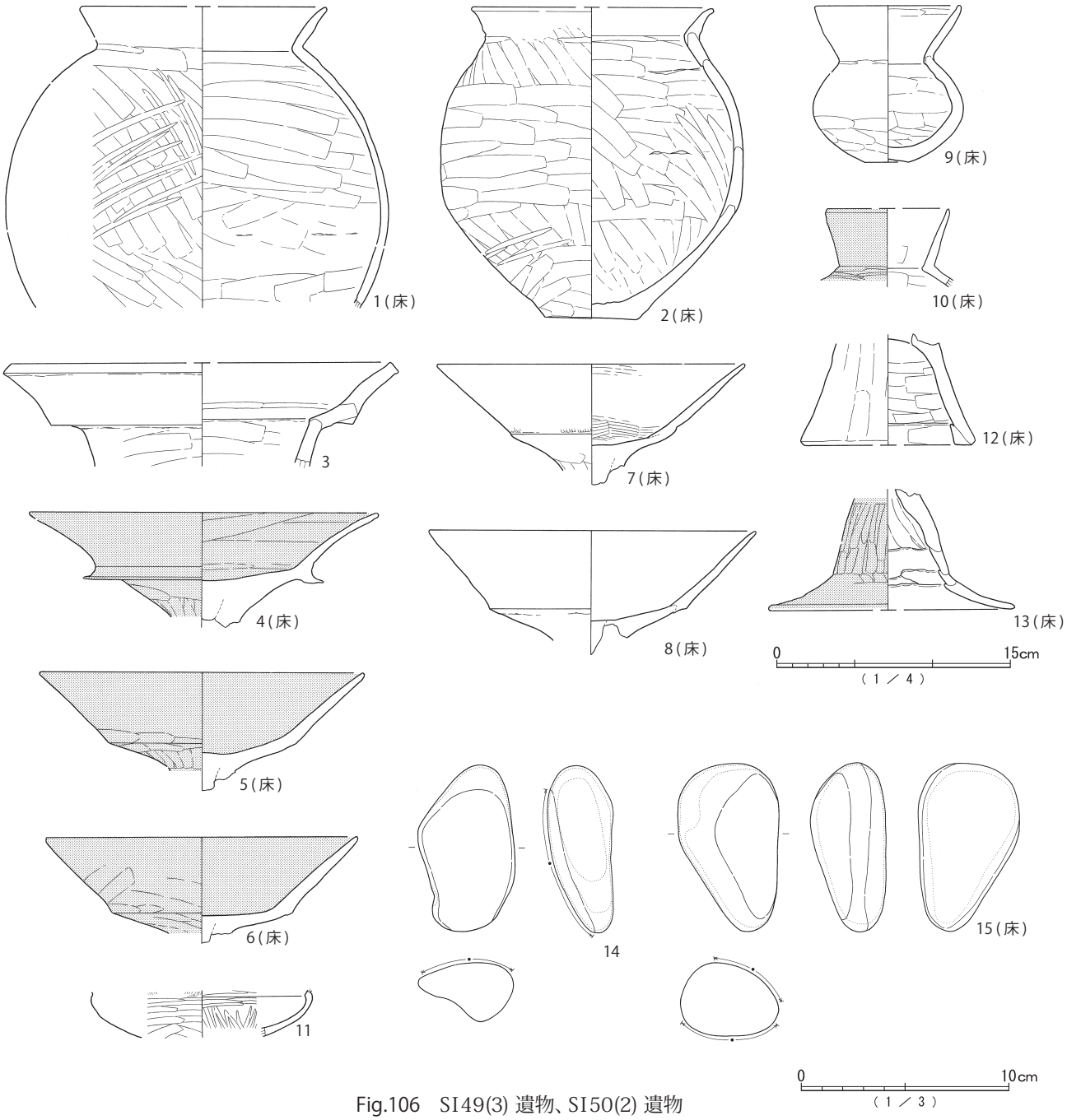


Fig.106　SI49(3) 遺物、SI50(2) 遺物

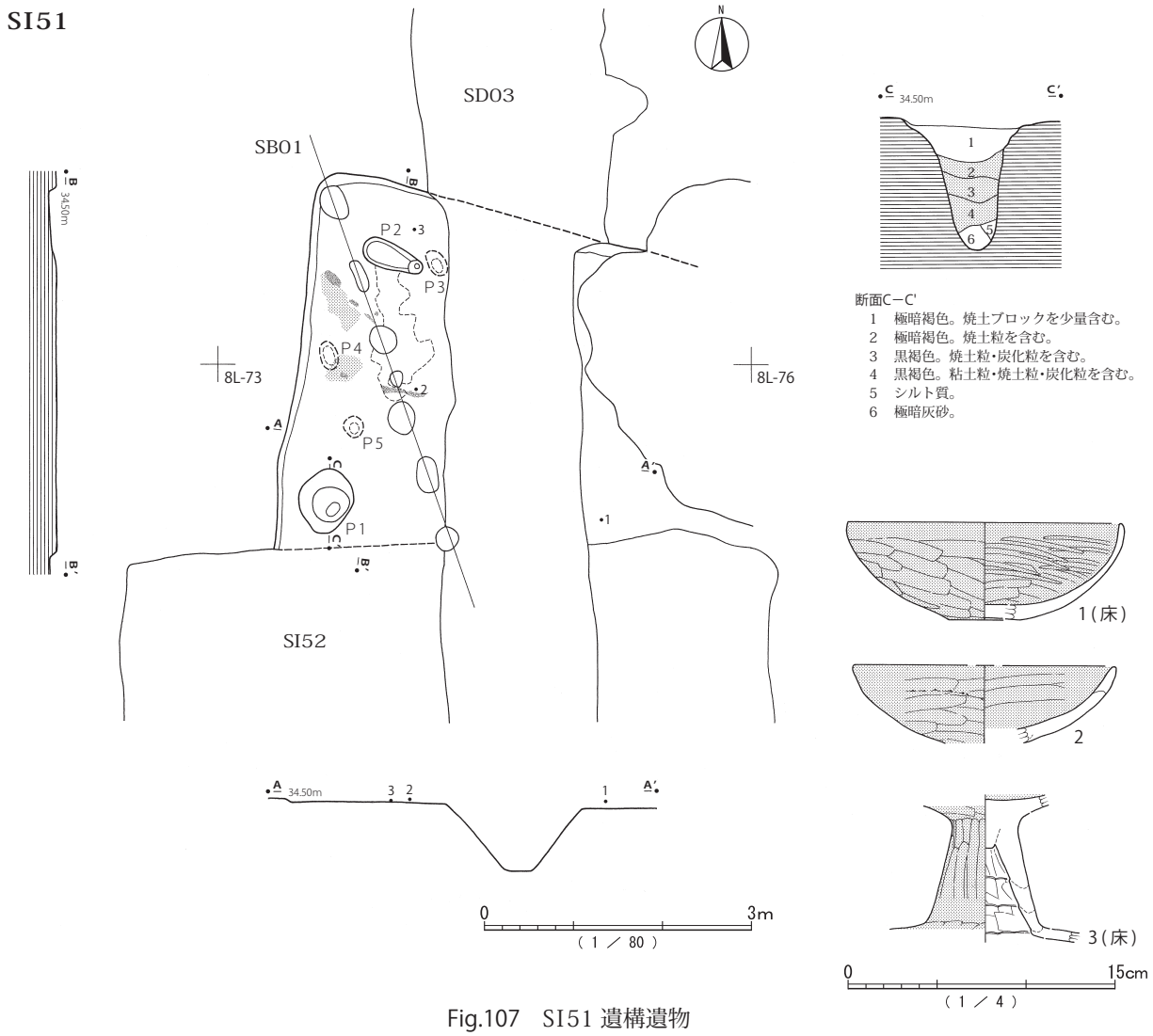


Fig.107　SI51 遺構遺物

SI51（Fig.107、PL.24・60・87）

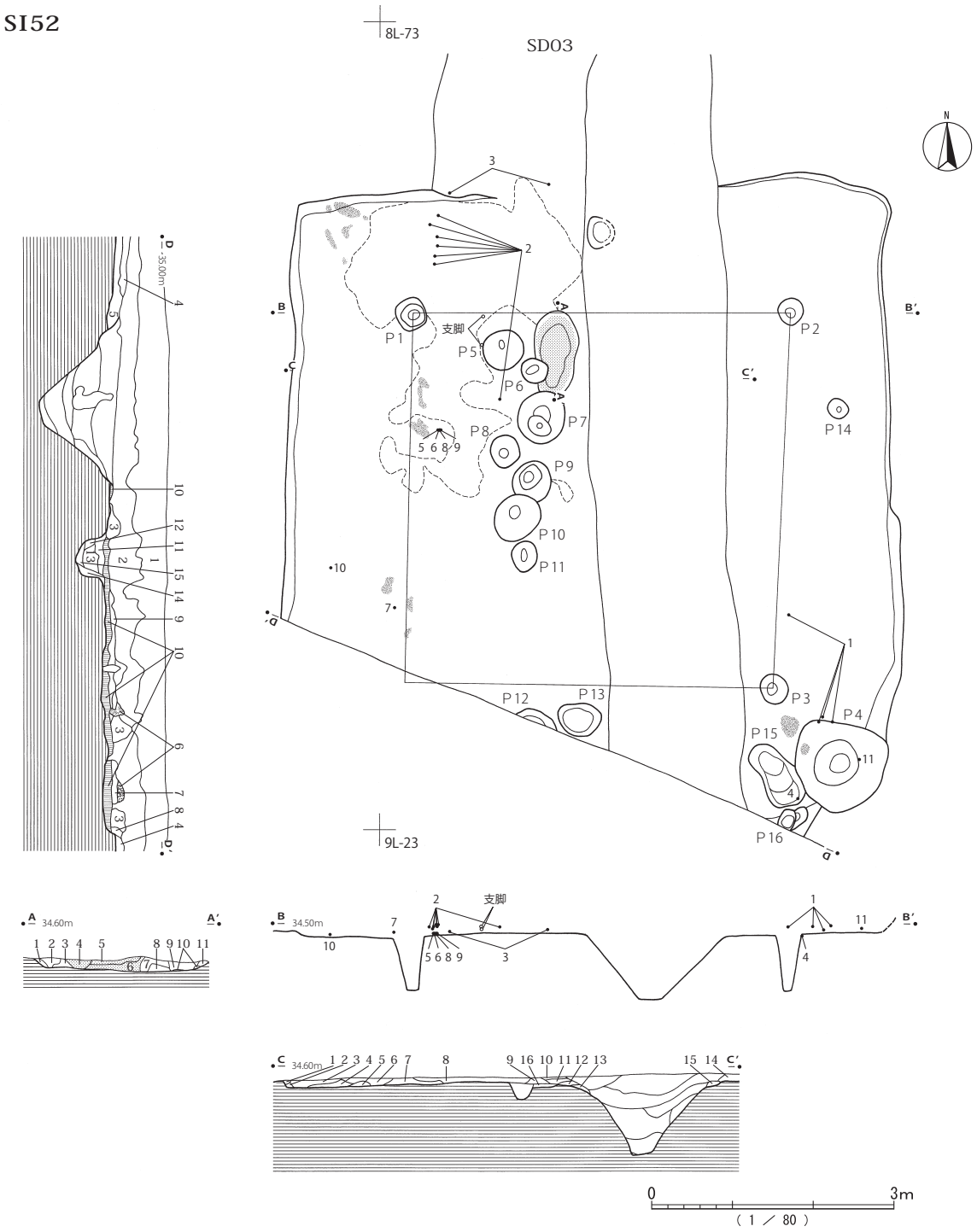
SI51は、B地点8L−74区他に所在する。SI52、SB01、SD03と重複し、本遺構に対してSB01、SD03が新しい。SI52との新旧関係は、現場所見によるならばSI52が新しい。ただし、本竪穴とSI52は接している程度で、床面高もほぼ同じであることから判断は難しい。竪穴東側の土坑は風倒木痕である。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.06m程度である。竪穴の検出範囲は、北西隅部・西辺部であり、西辺部遺存部長は4.30mを測る。P1が貯蔵穴であるならば、現存部でほぼ南西隅部まで達している可能性が高い。主柱穴は検出できなかった。主軸方位は、西辺部を基準にするとN−8.0°−Eである。炉・カマドは検出できなかった。床は貼り床であるが、硬化範囲は部分的であった。本竪穴では、床面上で焼土・炭化物の堆積が認められた。火災に遭った可能性が高い。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b新期と推定する。

SI52（Fig.108・109、PL.5・25・60・87・101・103）

SI52は、B地点8L−94区他に所在する。SI51、SB01、SD03と重複し、本遺構に対してSB01、SD03が新しい。SI51との新旧関係は、前述のとおり現場所見によるならば本竪穴が新しい。黄褐色

SI52



断面A－A'
1　暗褐色。ローム粒を含む。
2　暗褐色。ロームブロック・焼土粒をわずかに含む。
3　暗茶褐色。焼土粒を若干含む。
4　黒褐色。焼土ブロック主体。
5　黒褐色。焼土粒主体。
6　暗茶褐色。焼土を多量に含む。
7　黒褐色。焼土粒を若干含む。
8　暗茶褐色。
9　暗褐色。焼土粒を若干含む。
10　暗黄褐色。
11　黒褐色。

断面C－C'
1　暗褐色。ローム粒を少量含む。
2　暗黄褐色。
3　暗褐色。ローム粒を少量含む。しまり強い。
4　暗褐色。ロームブロックを多量に含む。しまり強い。
5　暗褐色。しまり強い。
6　黒褐色。
7　暗褐色。
8　黒褐色。
9　暗褐色。黄白色粘土ブロックを含む。
10　黒褐色。
11　黒褐色。焼土ブロックを少量含む。
12　暗褐色。
13　暗黄褐色。
14　暗褐色。
15　暗黄褐色。
16　黒褐色。焼土粒を若干含む。

断面D－D'
1　表土。暗灰色。
2　灰褐色。
3　暗褐色。
4　ローム漸移層。
5　黄褐色ローム層。
6　炭化物。
7　黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
8　黒褐色。ローム粒を含む。
9　極暗褐色。黄白色粘土主体。
10　黒褐色。黄白色粘土粒・ローム粒を多量に含む。貼り床。
11　黒褐色。ローム粒、20mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
12　黒褐色。ローム粒を少量含む。
13　黒褐色。しまり弱い。
14　黒褐色。ローム粒を少量含む。
15　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。

Fig.108　SI52(1) 遺構

SI52

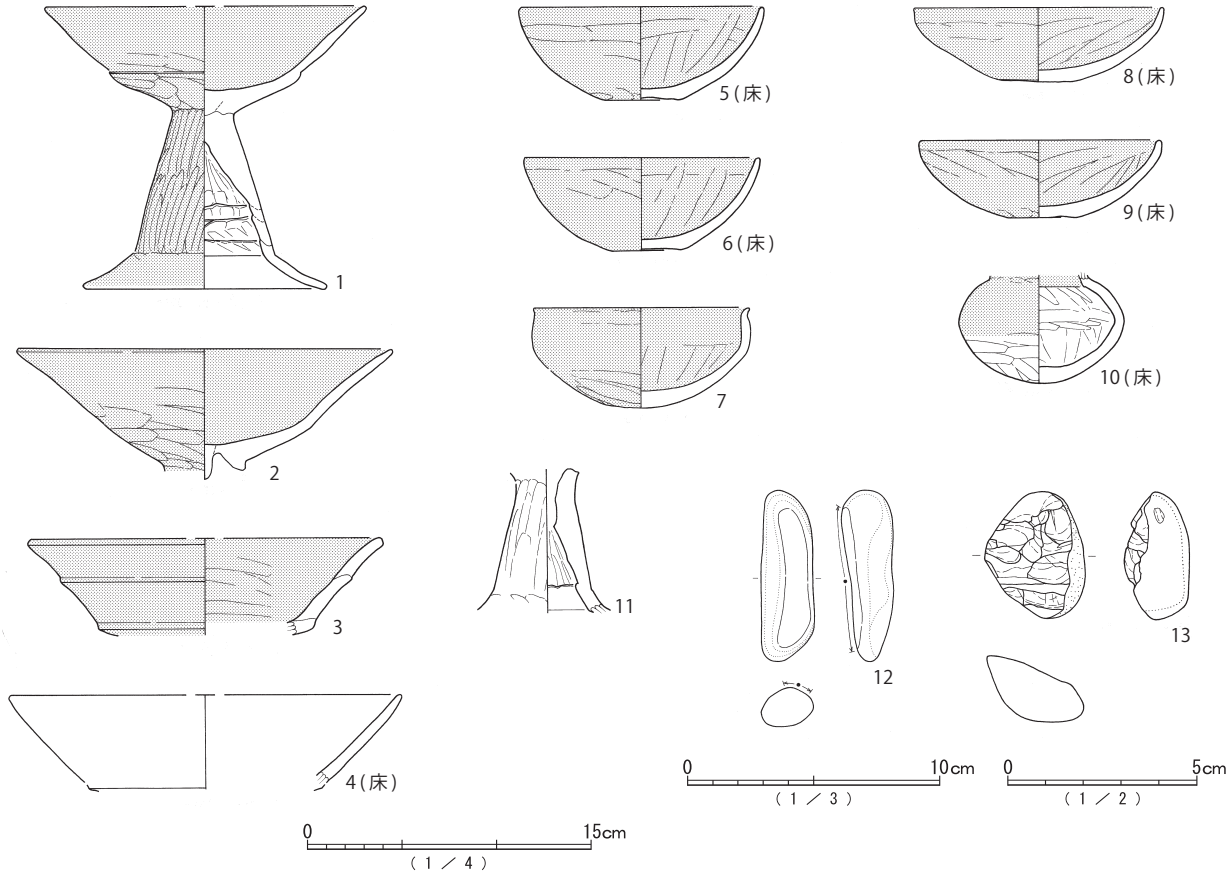


Fig.109　SI52(2) 遺物

ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.1m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は7.90m(主軸)×7.48m、確認面掘形面積は56.75㎡を測る。主軸方位は、N−1.0°−Wである。主柱穴はP1〜3である。P4は貯蔵穴である。炉周辺のPit群は、本竪穴にともなうものとは考えにくい。炉は、主軸線上やや西側より検出され、長軸長1.1mを測る。北西隅部周辺で床硬化面が検出されている。床は貼り床であり、掘形は壁側がわずかに深くなる。壁溝は検出できなかった。本竪穴では、床面上に焼土・炭化物の堆積があり、火災に遭った可能性が高い。

床面付近から杯・高杯形土器が出土している。5・6・8・9の杯形土器は、床面に伏せた状態で重ねられていた(PL.25)。遺存遺物と考えられる。土器以外では、12が磨石、13がチャートの石核である。他に、支脚の可能性がある土製品が出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI53 (Fig.110〜112、PL.25・60・61・101)

SI53は、B地点8L−56区他に所在する。SI55と重複し、本遺構が新しい。南西隅部は風倒木痕によって破壊されている。黄褐色ソフトローム層を確認面とし、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.2m程度である。北半部は調査区外となるが、竪穴平面形態はおおむね方形を呈し、規模は東西軸長で5.63mを測る。西壁の立ち上がりは2段になるが、本来の形状かどうかは不明。内側での東西軸長は5.30mを測る。主軸方位は、N−2.0°−Wである。主柱穴はP1・2である。

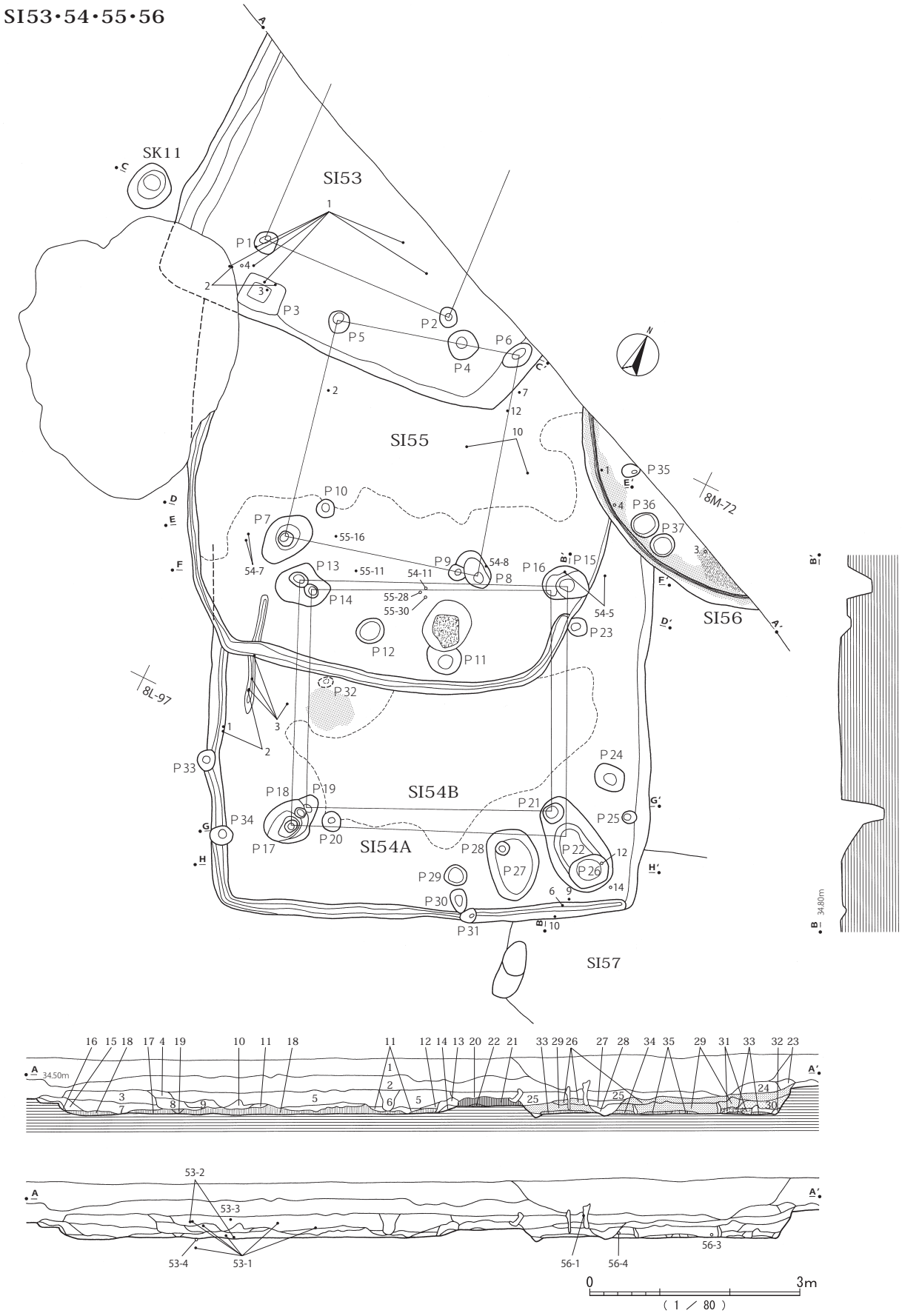
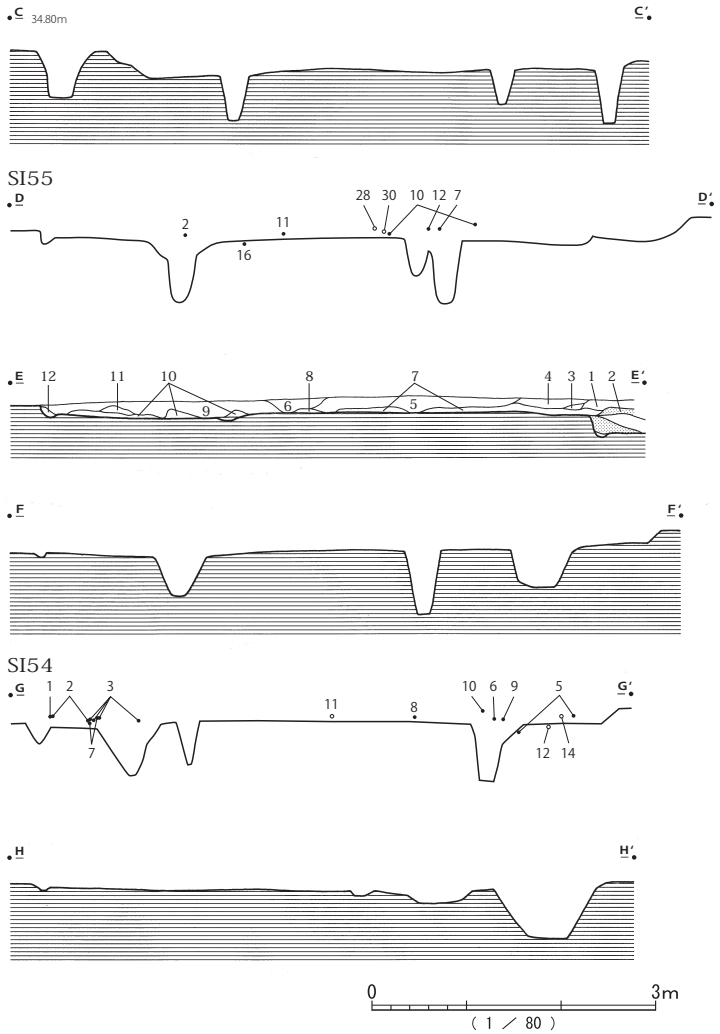


Fig.110　SI53(1) 遺構、SI54(1) 遺構、SI55(1) 遺構、SI56(1) 遺構

SI53・54・55・56



断面A－A'
1 表土。暗灰色。
2 黒色。
3 極暗褐色。10mm大のロームブロックを含む。
4 極暗褐色。
5 極暗褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
6 黒褐色。焼土粒をわずかに含む。
7 黒褐色。
8 極暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
9 黒褐色。焼土粒を少量含む。
10 黒褐色。
11 黒褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
12 暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
13 極暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
14 暗褐色。黄白色粘土主体。
15 極暗褐色。
16 暗黄褐色。黄白色粘土主体。
17 暗褐色。ローム粒・ロームブロックを多量に含む。貼り床。
18 淡黄褐色。黄白色粘土粒、ローム粒を多量に含む。貼り床。
19 黒褐色。黄白色粘土粒、ローム粒を多量に含む。貼り床。
20 極暗褐色。
21 淡黄褐色。貼り床。
22 暗黄褐色。貼り床。
23 極暗褐色。
24 極暗褐色。2mm大の橙色粒子・焼土粒を少量含む。
25 黒褐色。焼土粒を少量含む。
26 黒褐色。焼土粒を多量に含む。
27 黒褐色。焼土粒を少量含む。
28 黒褐色。焼土粒を少量含む。
29 焼土主体。
30 極暗褐色。焼土粒を多量に含む。
31 炭化物。
32 極暗褐色。
33 淡黄褐色。貼り床。
34 淡黄褐色。被熱。貼り床。
35 極暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。貼り床。

断面E－E'
1 黒褐色。黄白色粘土粒・焼土粒を含む。
2 黒褐色。焼土粒を多量に含む。
3 黒褐色。しまり弱い。
4 黒褐色。黄白色粘土を多量に含む。
5 黒褐色。
6 黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
7 黒褐色。ロームブロックを少量含む。しまり強い。
8 黄白色粘土。
9 黒褐色。しまり弱い。
10 黒褐色。ロームブロックを少量含む。しまり強い。
11 黒褐色。ロームブロックを多量に含む。
12 黒褐色。しまり強い。

Fig.111　SI53(2) 遺構、SI54(2) 遺構、SI55(2) 遺構、SI56(2) 遺構

P3は貯蔵穴であり、南西隅部からやや主軸中央へ寄る。カマド・炉は検出できなかった。床は貼り床であり、全体が硬化する。火災の痕跡は認められなかった。

出土土器は、弥生時代終末期に限定される。土器以外では、4が敲石である。

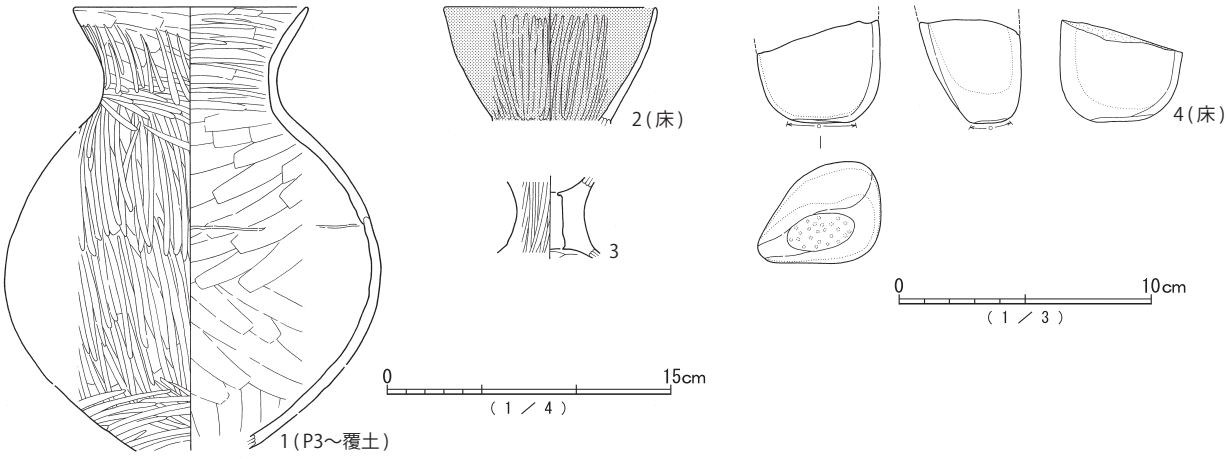
本竪穴の時期は、弥生時代終末期南岩崎3期と推定する。

SI54（Fig.110～112、PL.25・26・61・87・103・104・105）

SI54は、B地点8L－88区他に所在する。SI55～57と重複し、本遺構が最も新しい。遺構図は掘り上がり状況のみであるが、SI55覆土上で本竪穴の床硬化面が検出されている。ただし、SI55・57との新旧関係は、遺構検出状況、土層断面からは検証できなかった。根拠は出土土器による。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、確認面からの深さは、最大で0.14m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は、主軸長が推定で6.10m、副軸が6.29m、確認面掘形面積は推定で39.10㎡を測る。主軸方位は、N－24.0°－Wである。

本竪穴は、主柱穴の配置から、建て替えの可能性がある。その新旧関係は明確ではないが、主柱穴P13・15・17・22をSI48A、P14・16・(18)19・21をSI34Bと呼称する。炉は、SI55床面を掘り込

SI53



SI54

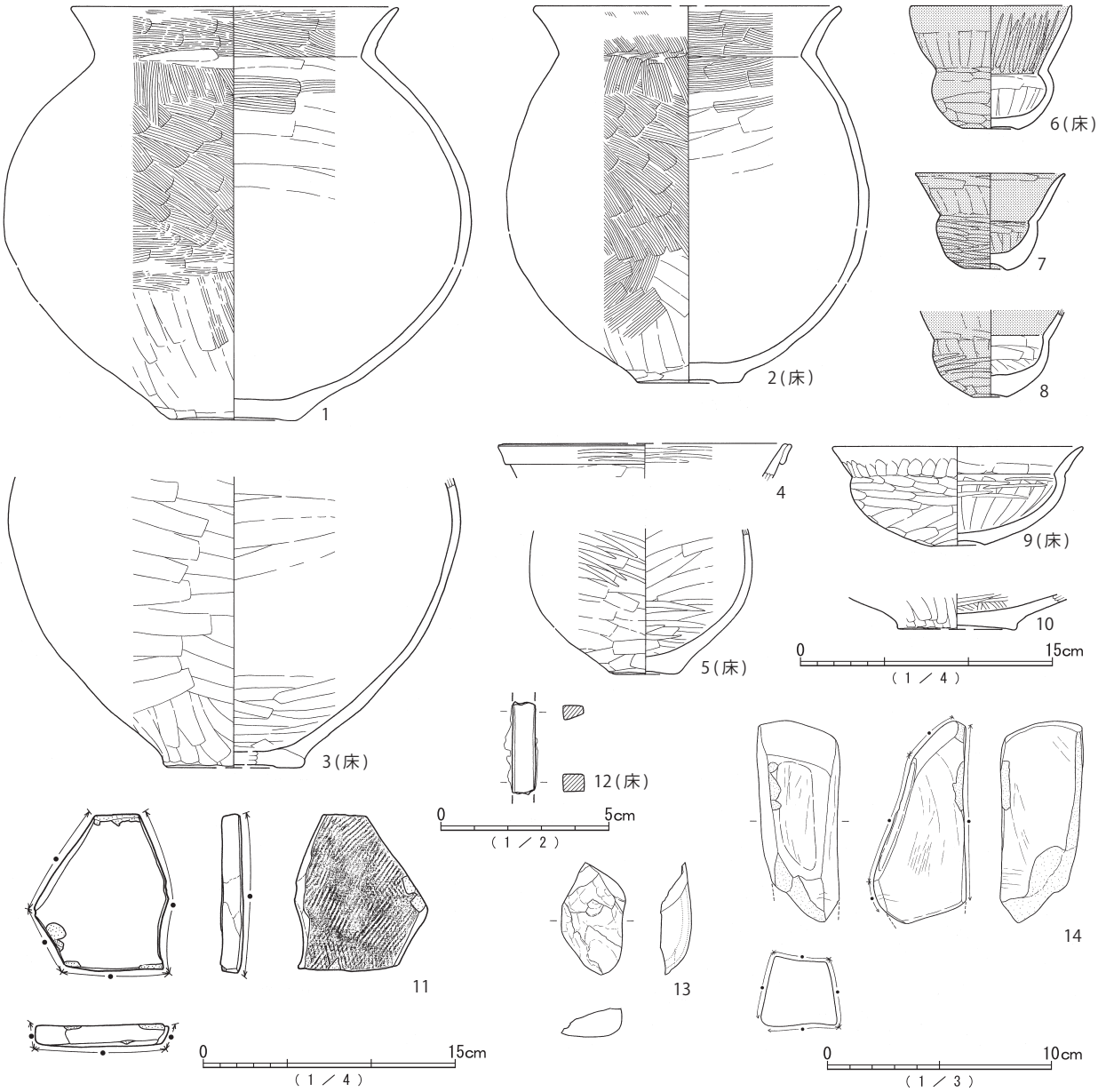


Fig.112　SI53(3) 遺物、SI54(3) 遺物

SI55

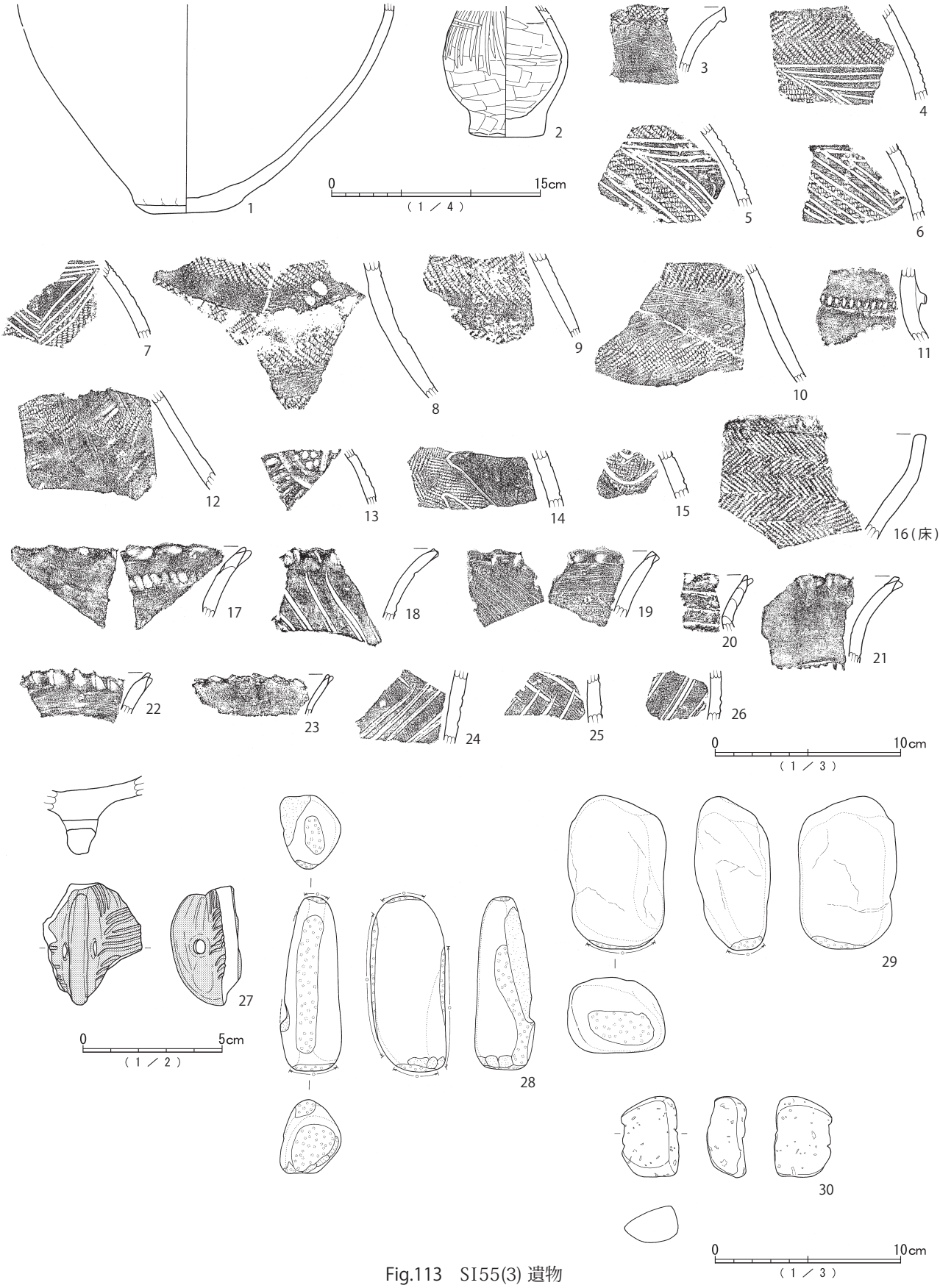


Fig.113　SI55(3) 遺物

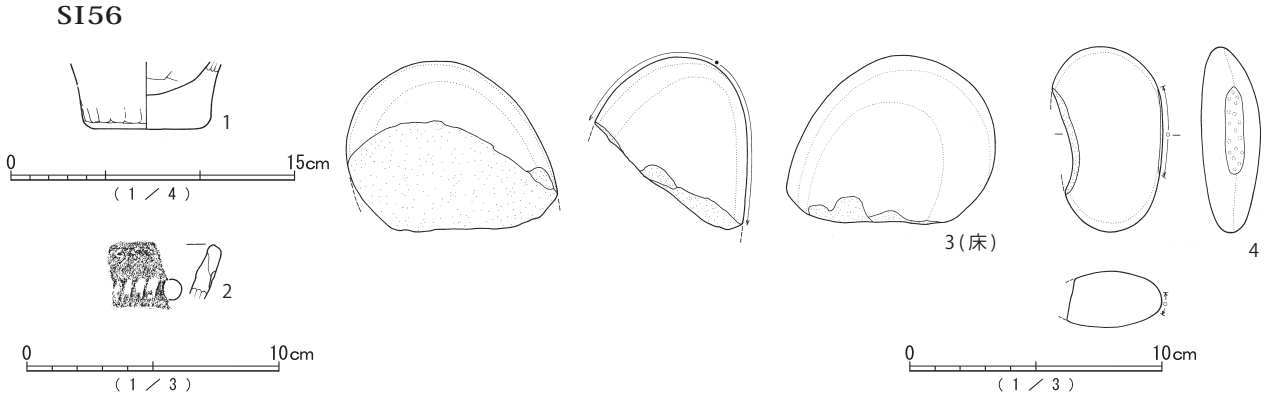


Fig.114　SI56(3) 遺物

んだ状態で検出された。西辺主柱穴間床面にも焼土の分布が認められ、炉の可能性がある。ただし、これが建て替えに対応するかどうかは明らかではない。P26は貯蔵穴である。P27は深さ0.27mを測るが、帰属、性格とも明確ではない。壁溝は南・西辺で検出した。西辺内側の溝については、建て替えに対応する可能性がある。床は貼り床であるが、掘形は深くない。火災の痕跡は認められなかった。

土器は、甕形土器1・2が西壁際から、小形壺形土器6、鉢形土器9が竪穴南東隅部から出土している。遺存遺物を含む可能性がある。P26内からも小形壺形土器が出土しているが（PL.25）、所在が明らかではない。土器以外では、11が須恵器転用砥石、12が不明棒状鉄製品、13がチャートの石核、14が砥石である。

本竪穴の時期は、古墳時代前期南岩崎4b期と推定する。

SI55（Fig.110・111・113、PL.6・25・26・61・78・95・96・101・103）

SI55は、B地点8L−67区他に所在する。SI53・54・56と重複し、本遺構に対してSI53・54が新しく、SI56との新旧関係は明確ではない。西辺部中央は風倒木痕によって破壊されている。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、確認面からの深さは、最大で0.08m程度である。竪穴平面形態は隅丸胴張り長方形を呈し、全体規模は、主軸長が推定で6.90m、副軸が6.10m、確認面掘形面積は推定で38.70㎡を測る。主軸方位はN−14.0°−Wである。主柱穴はP5〜8である。P11は貯蔵穴である。炉は、SI53によって破壊された可能性が高い。貼り床構造は認められなかった。床硬化面は、南側が明確ではなかったが、これはSI54の影響によると考えられる。壁溝はほぼ全周する。火災の痕跡は認められなかった。

出土土器は、宮ノ台式にほぼ限定されるが、小破片を中心とする。土器以外では、28・29が敲石、30が軽石製品である。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1c期と推定する。

SI56（Fig.110・111・114、PL.25・26・96・101）

SI56は、B地点8L−69区他に所在する。SI54・55と重複し、本遺構に対してSI54が新しく、SI55との新旧関係は明らかではない。黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.35m程度である。竪穴範囲の大半が調査区外であるため詳細は明らかではない。調査区際最大で3.87m、竪穴平面形態は楕円形と考えられる。主軸方位は不明。Pitは、P35が深さ0.45m、P36が0.18m、P37が0.12mを測る。貯蔵穴を含む可能性もあるが明確ではない。貼り床構造は明らかではないが、床は全体が硬化していた。壁溝は全周する。本

竪穴では、床面上で焼土・炭化物の堆積が認められた。火災に遭った可能性が高い。床面・壁の一部は被熱により赤化していた。

出土土器は、小破片のみである。土器以外では、3が磨石、4が敲石である。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1期に比定しておく。

SI57（Fig.115・116、PL.26・96）

SI57は、B地点8M−91区他に所在する。SI54・58と重複し、本遺構が最も古い。ただし、遺構検出状況から検証することはできなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.16m程度である。竪穴平面形態は現状不整形であり、炉他の内部施設は検出できなかった。ただし、床硬化面はほぼ全体で認められた。竪穴規模は4.10m×3.20m程度、主軸方位は不明。火災の痕跡は認められなかった。

本竪穴の時期は、出土土器から弥生時代中期南岩崎1期と推定する。ただし、いずれも小破片であり、本遺構に確実にともなうものではない。

SI58（Fig.115・116、PL.26・61・96）

SI58は、B地点8M−83区他に所在する。SI57・59・60と重複し、本遺構に対してSI57・60が古い。SI59との新旧関係は明確ではない。また、SI57との新旧関係も、遺構検出状況からは判断できなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、確認面からの深さは、最大で0.08m程度である。竪穴平面形態は、他遺構との重複によってやや明確ではないが、主柱穴P8〜11に対し、P12を出入口施設、P13を貯蔵穴とすると、P13脇を竪穴南隅とする方形ないしは隅丸方形の竪穴が復元できる。全体規模は、おおむね5.50m四方と推定できる。主軸方位はN−64.0°−Eである。炉は、長軸長0.85mを測る。貼り床構造は明らかではないが、竪穴範囲西側を中心に硬化面が認められた。火災の痕跡は認められなかった。

出土土器は、時期的に混在するが、1の器台形土器が竪穴の時期的根拠になると思われる。本竪穴の時期は、古墳時代前期南岩崎4a期と推定する。

SI59（Fig.115・116、PL.26・78）

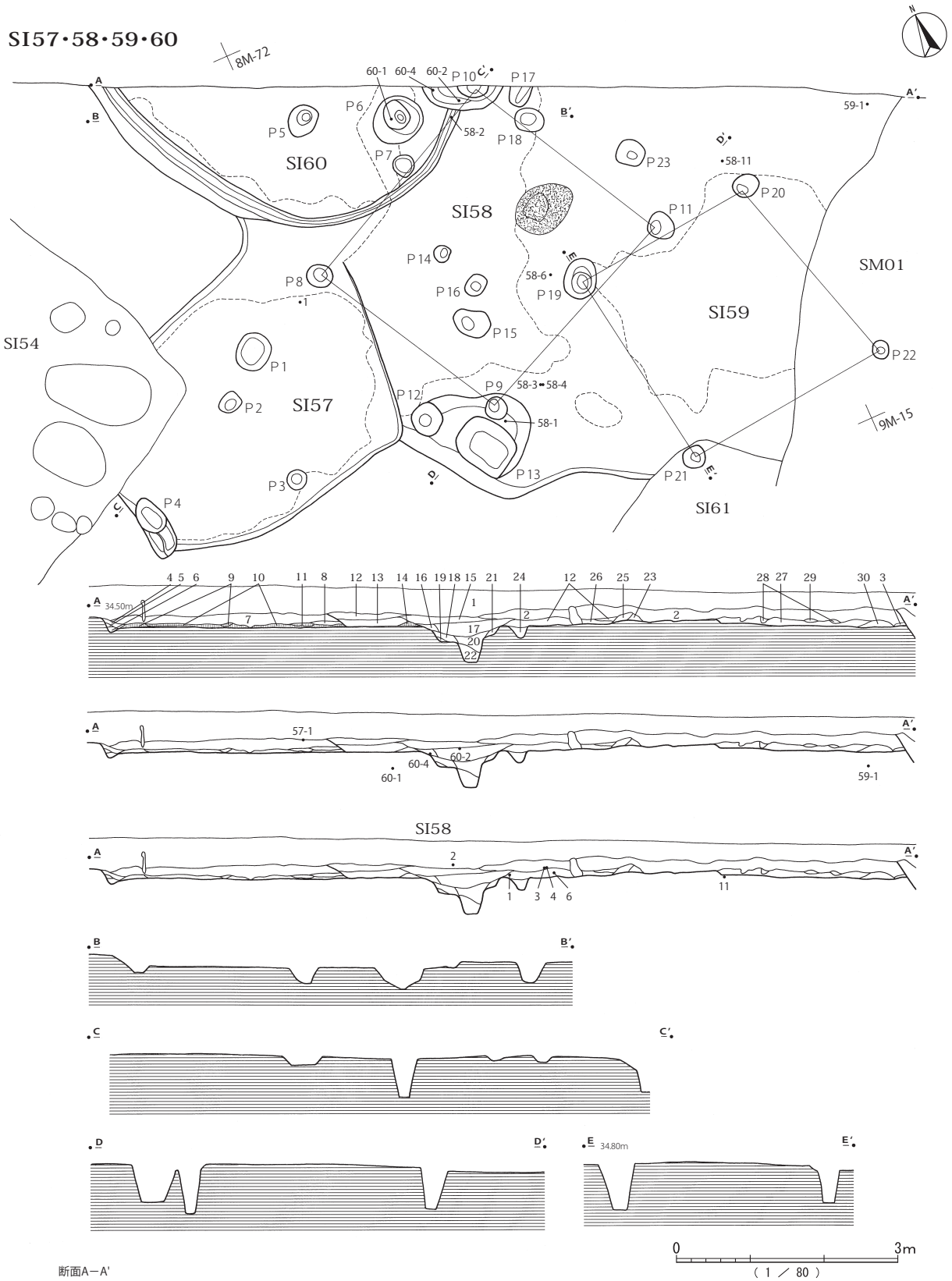
SI59は、B地点9M−04区他に所在する。SI58・61、SM01と重複するが、遺構の検出状況から新旧関係を明らかにすることできなかった。黄褐色ソフトローム層を確認面とするが、竪穴の掘り込み範囲は不明。主柱穴と考えるP19〜22は、配置がやや不揃いではあるが、深さは0.55m以上を測る。また、その周辺で床硬化面を検出したことから、竪穴と判断した。主柱穴南北軸の方位は、N−9.0°−Wである。炉等の内部施設は検出できなかったが、炉は、床面高が連続するSI58によって破壊された可能性がある。火災の痕跡は認められない。

出土土器は、1が調査区際から出土している。ただし、想定の竪穴範囲よりやや外にあり、帰属は確実ではない。

本竪穴の時期は、1を根拠とし弥生時代後期南岩崎2a期に比定しておく。

SI60（Fig.115・116、PL.26・78・96）

SI60は、B地点8M−72区他に所在する。SI58と重複し、本遺構に対してSI58が新しい。SI57とも重複している可能性はあるが、新旧関係は不明。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、確認面からの深さは最大で0.16m程度である。竪穴平面形態は楕円形と推定するが、北側は調査区



断面A－A'

1　表土。暗灰色。
2　暗褐色。
3　黄白色粘土層。
4　極暗褐色。
5　暗黄褐色。
6　暗褐色。
7　極暗褐色。
8　極暗褐色。黄白色粘土粒を含む。
9　極暗褐色。貼り床。
10　淡黄褐色。貼り床。
11　暗褐色。貼り床。
12　暗褐色。30mm大の黄白色粘土ブロック・粘土粒を含む。砂質。
13　暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
14　暗黄褐色。貼り床。
15　黒褐色。
16　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。
17　黒褐色。
18　暗褐色。
19　暗褐色。黄白色粘土ブロック主体。
20　黒褐色。
21　暗黄褐色。
22　黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。粘性強い。しまり弱い。
23　暗黄褐色。
24　暗褐色。
25　暗褐色。黄白色粘土ブロックを含む。
26　暗茶褐色。
27　暗黄褐色。
28　暗褐色。
29　暗褐色。
30　淡黄褐色。

Fig.115　SI57(1) 遺構、SI58(1) 遺構、SI59(1) 遺構、SI60(1) 遺構

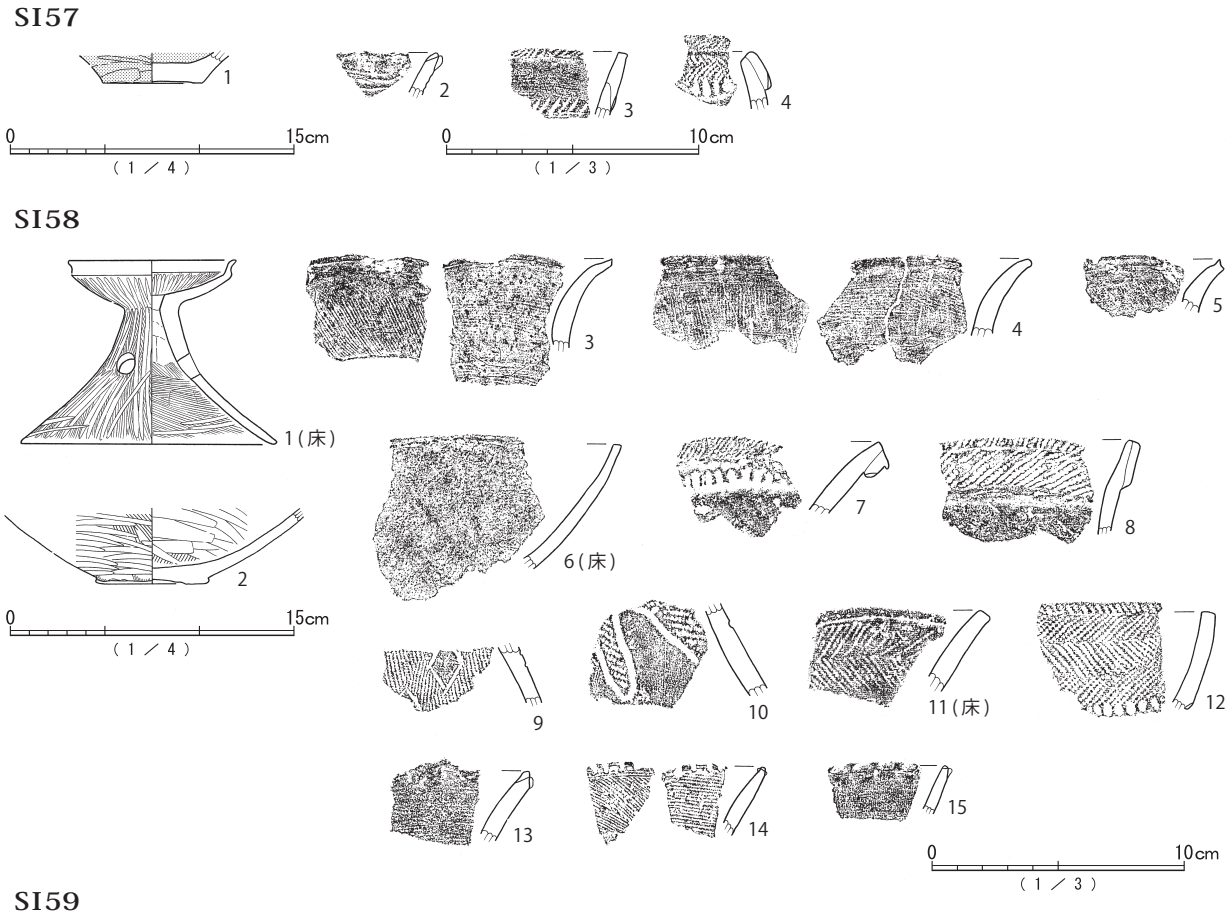


Fig.116　SI57(2) 遺物、SI58(2) 遺物、SI59(2) 遺物、SI60(2) 遺物

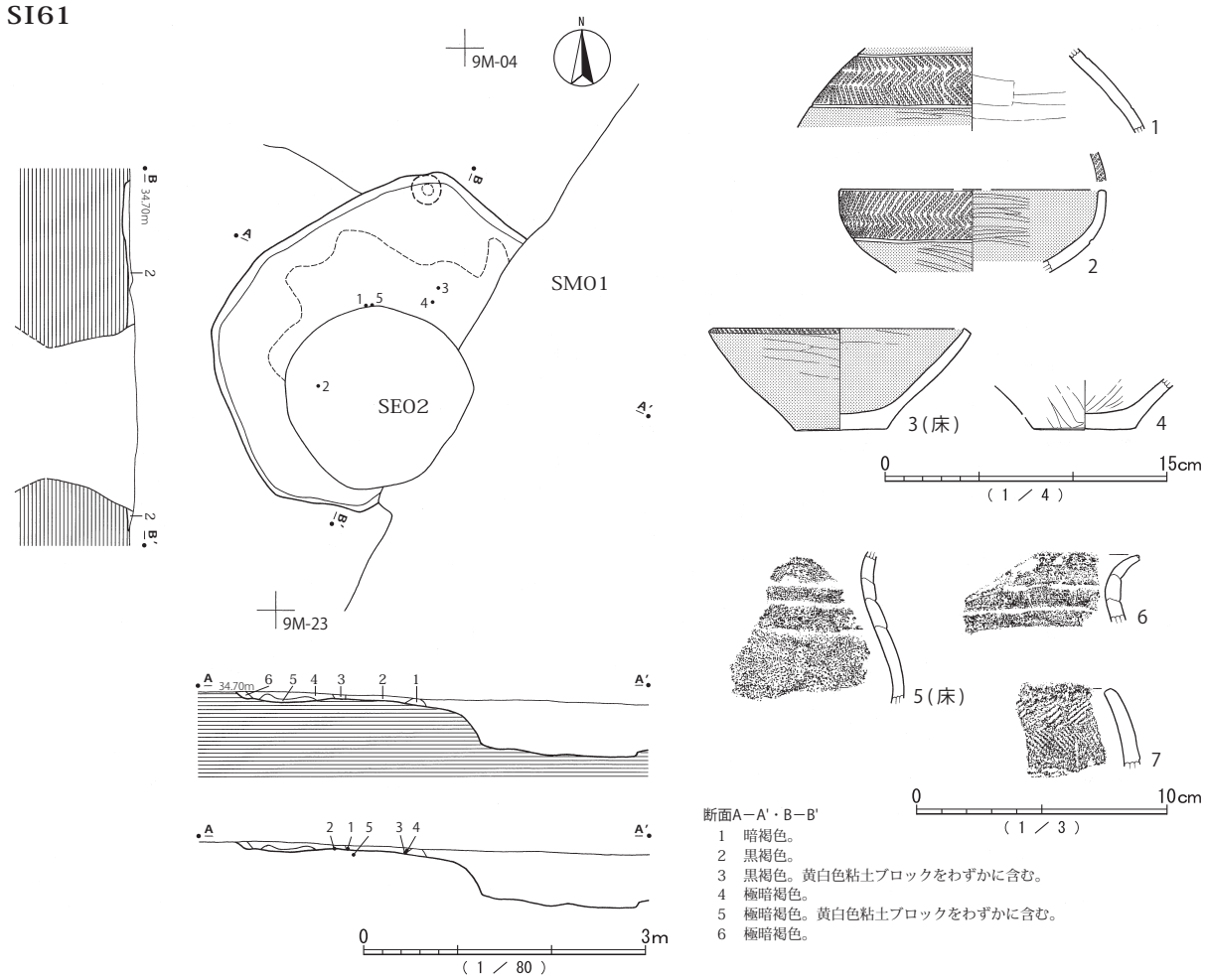


Fig.117　SI61 遺構遺物

外となる。規模は、調査区際最大で約5.10mを測り、主柱穴P5との関係から、主軸長7.0m程度の竪穴規模が推定できる。主軸方位は不明。P6は貯蔵穴であろうか。壁溝は全周する。掘形構造は明らかではないが、竪穴範囲全体で厚い硬化層が認められた。火災の痕跡は確認できなかった。

出土土器は、1の壺形土器がP6内から出土している。2・4は、SI58の主柱穴掘形P10上からの出土であり、帰属は不確実である。

本竪穴の時期は、弥生時代中期南岩崎1b期と推定する。

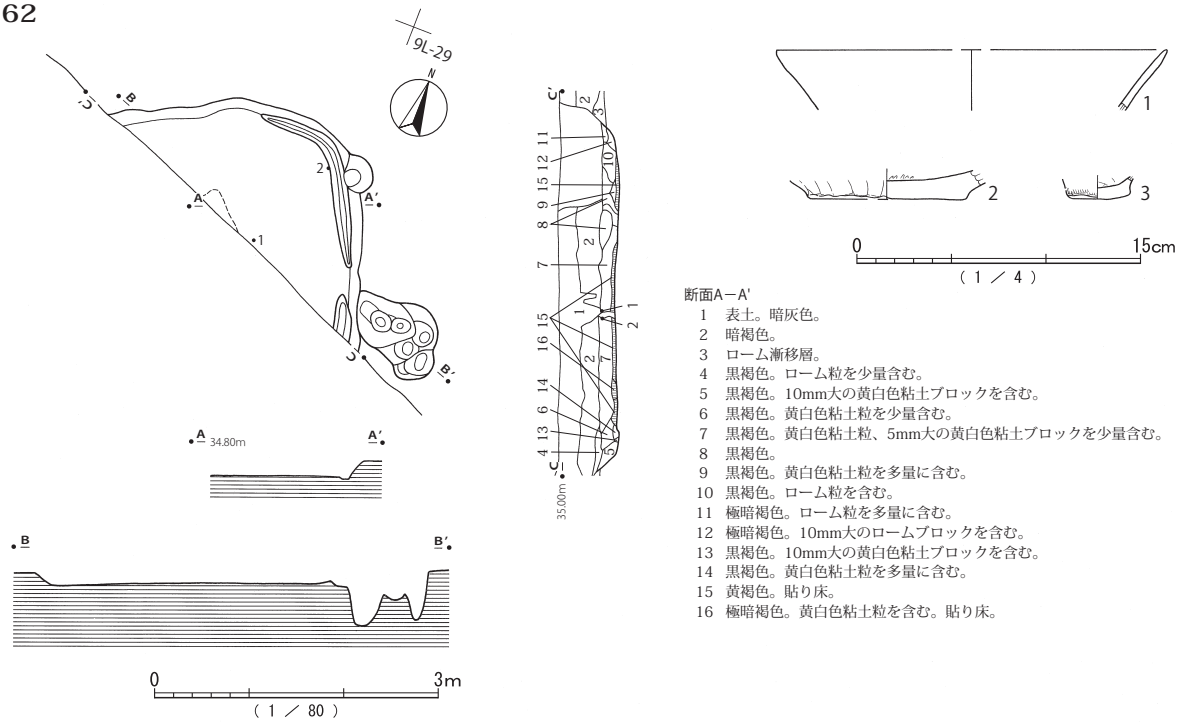
SI61（Fig.117、PL.27・61・96）

SI61は、B地点9M−13区他に所在する。SI59、SM01、SE02と重複し、SM01、SE02によって竪穴の東側から中央部が破壊されている。SI59との新旧関係は明らかではない。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。確認面からの深さは、最大で0.12m程度を測るが、主要部が破壊されているため、竪穴平面形態等明確ではない。規模は、長軸長で3.85mを測る。炉等の内部施設も検出できなかったため、主軸方位も明らかではない。床面は、貼り床ではないが、硬化面は竪穴範囲ほぼ全体で認められた。火災の痕跡は確認できなかった。

土器は、床面付近から久ヶ原式がまとまって出土している。

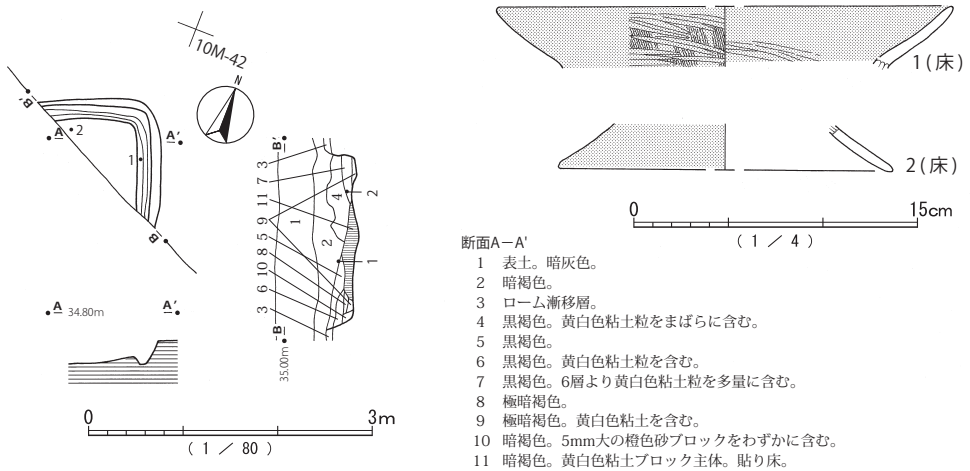
本竪穴の時期は、弥生時代後期南岩崎2a期と推定する。

SI62



断面A－A'
1　表土。暗灰色。
2　暗褐色。
3　ローム漸移層。
4　黒褐色。ローム粒を少量含む。
5　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
6　黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
7　黒褐色。黄白色粘土粒、5mm大の黄白色粘土ブロックを少量含む。
8　黒褐色。
9　黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
10　黒褐色。ローム粒を含む。
11　極暗褐色。ローム粒を多量に含む。
12　極暗褐色。10mm大のロームブロックを含む。
13　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
14　黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
15　黄褐色。貼り床。
16　極暗褐色。黄白色粘土粒を含む。貼り床。

SI63



断面A－A'
1　表土。暗灰色。
2　暗褐色。
3　ローム漸移層。
4　黒褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。
5　黒褐色。
6　黒褐色。黄白色粘土粒を含む。
7　黒褐色。6層より黄白色粘土粒を多量に含む。
8　極暗褐色。
9　極暗褐色。黄白色粘土を含む。
10　暗褐色。5mm大の橙色砂ブロックをわずかに含む。
11　暗褐色。黄白色粘土ブロック主体。貼り床。

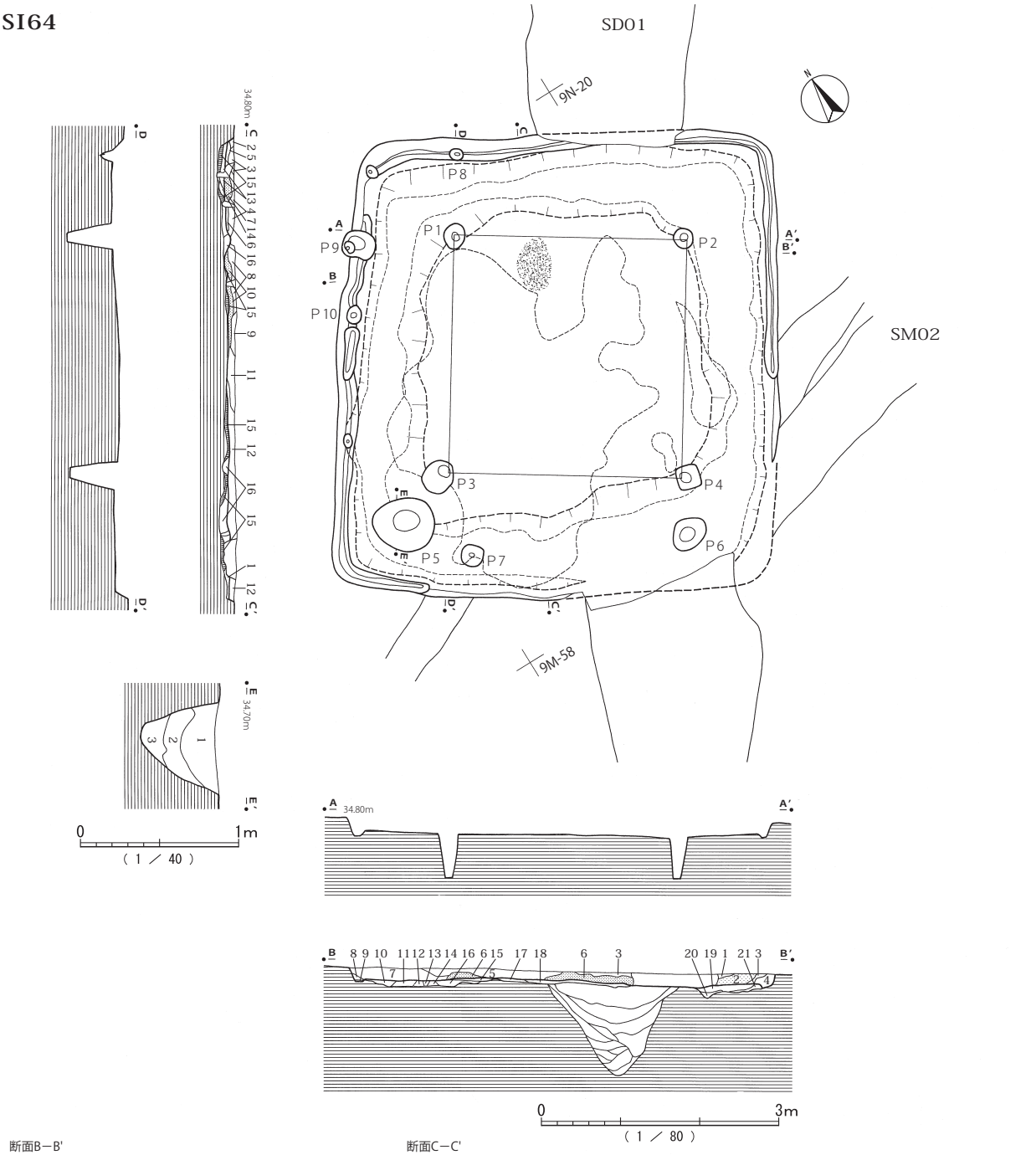
Fig.118　SI62 遺構遺物、SI63 遺構遺物

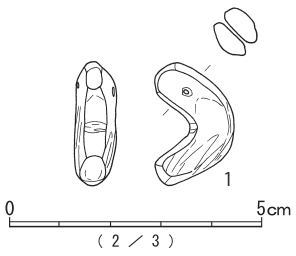
SI62（Fig.118、PL.27・61）

SI62は、B地点9L−38区他に所在する。竪穴範囲の大半は調査区外にあり、竪穴北東隅部のみ検出した。黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.26m程度である。竪穴平面形態は、現状検出部から判断するならば隅丸方形を呈す。主軸方位は、N−23.0°−WないしN−67.0°−Eである。断続的な壁溝以外、炉等の内部施設は検出されていない。床は貼り床であり、調査区際で硬化面が認められた。火災の痕跡は明確ではなかった。

出土土器は、小破片のみである。

本竪穴の時期は、出土土器によれば古墳時代中期南岩崎5期である。ただし、いずれも本遺構に確実にともなうものではない。





断面B－B'
1　極暗褐色。2mm大の黄白色粘土粒を多量に含む。
2　暗褐色。焼土を多量に、炭化粒をまばらに含む。
3　黒褐色。
4　灰褐色。黄白色粘土ブロック主体。
5　極暗褐色。
6　極暗褐色。2mm大の黄白色粘土粒、焼土粒を多量に含む。
7　極暗褐色。2mm大の黄白色粘土粒を多量に含む。
8　暗褐色。
9　灰褐色。黄白色粘土粒主体。
10　極暗褐色。5mm大の黄白色粘土ブロック、および粘質ロームブロックを少量含む。
11　極暗褐色。5mm大の黄白色粘土、ロームブロックを含む。
12　淡黄褐色。
13　暗褐色。
14　淡黄褐色。
15　極暗褐色。3mm大の黄白色粘土ブロック主体。
16　極暗褐色。5mm大の粘質ロームブロックを含む。
17　極暗褐色。粘質ロームブロックを含む。
18　極暗褐色。1mm大の黄白色粘土粒を少量含む。
19　極暗褐色。3mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
20　淡黄褐色土。
21　淡黄褐色土。暗褐色土を若干含む。

断面C－C'
1　黄白色粘土層。
2　暗褐色。
3　極暗褐色。
4　極暗褐色。黄白色粘土粒・焼土粒をまばらに含む。
5　極暗褐色。1mm大の黄白色粘土ブロックをまばらに含む。
6　暗褐色。
7　暗褐色。焼土粒主体。
8　極暗褐色。
9　極暗褐色。2mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
10　暗褐色。黄白色粘土粒主体。焼土粒・炭化物を含む。
11　極暗褐色。
12　黒褐色。
13　暗褐色。2mm大の粘質ロームブロック、黄白色粘土ブロックを多量に含む。
14　極暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロック主体。
15　淡黄褐色。黄白色粘土主体。貼り床。
16　灰褐色。粘質ロームブロック・黄白色粘土ブロック主体。

断面E－E'
1　黒褐色。5mm大の黄白色粘土粒を多量に含む。
2　黒褐色。3mm大の黄白色粘土を含む。
3　黒褐色。ローム粒をわずかに含む。

Fig.119　SI64(1) 遺構遺物

SI64

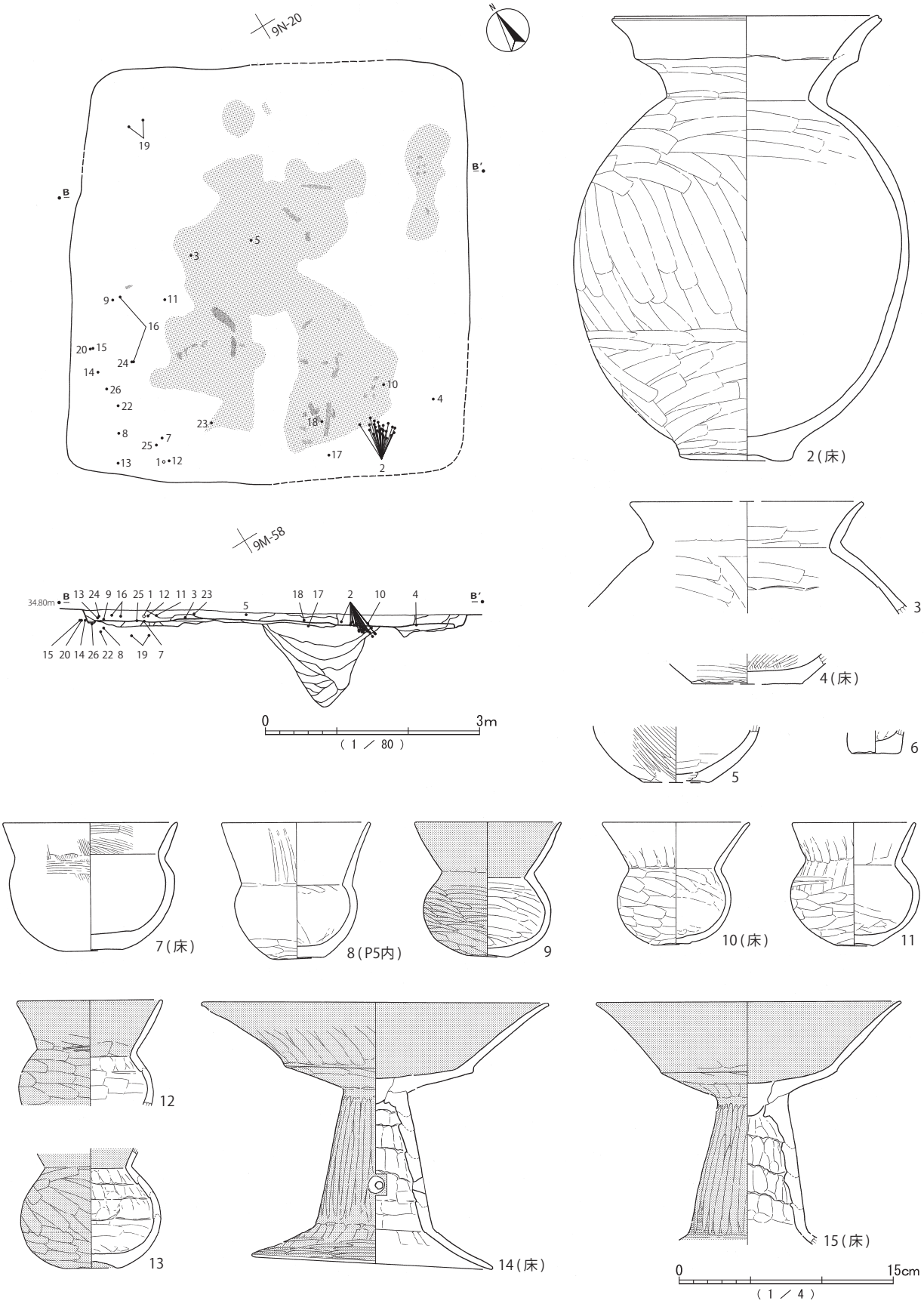


Fig.120　SI64(2) 遺構遺物

SI64

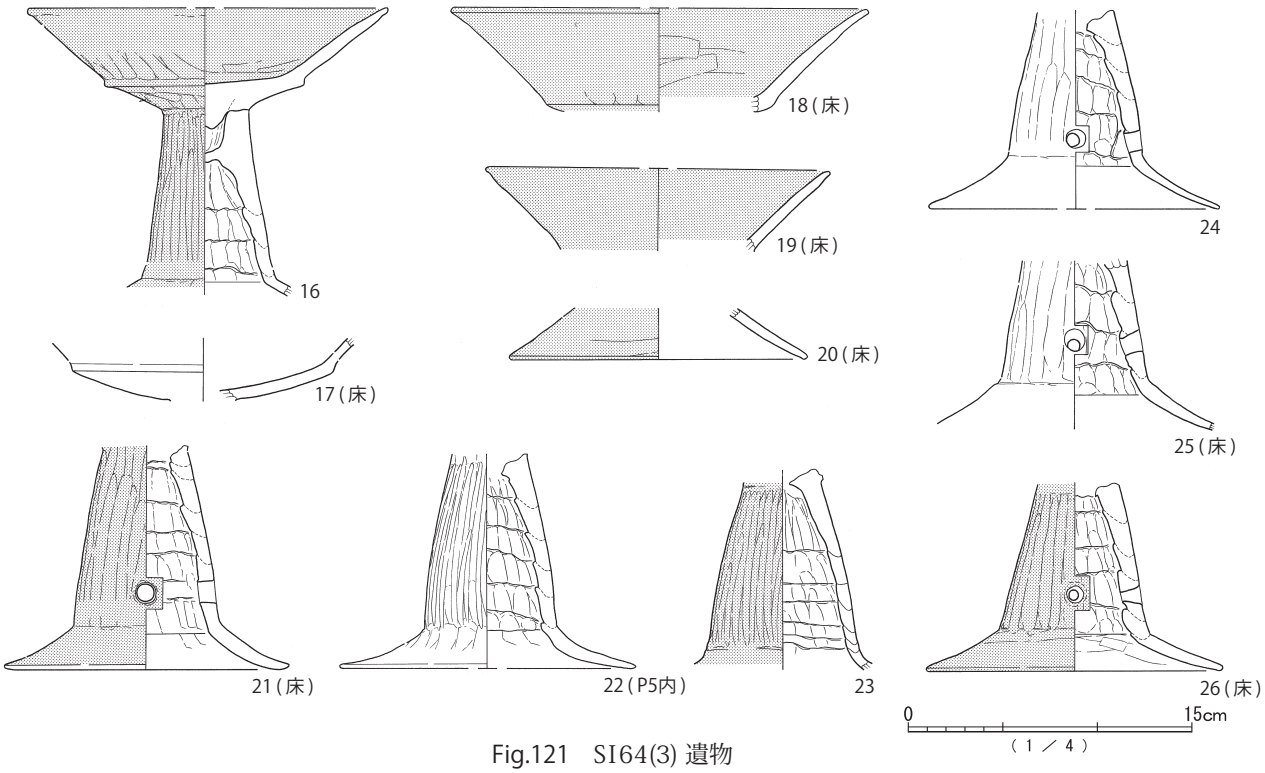


Fig.121　SI64(3) 遺物

SI63（Fig.118、PL.27）

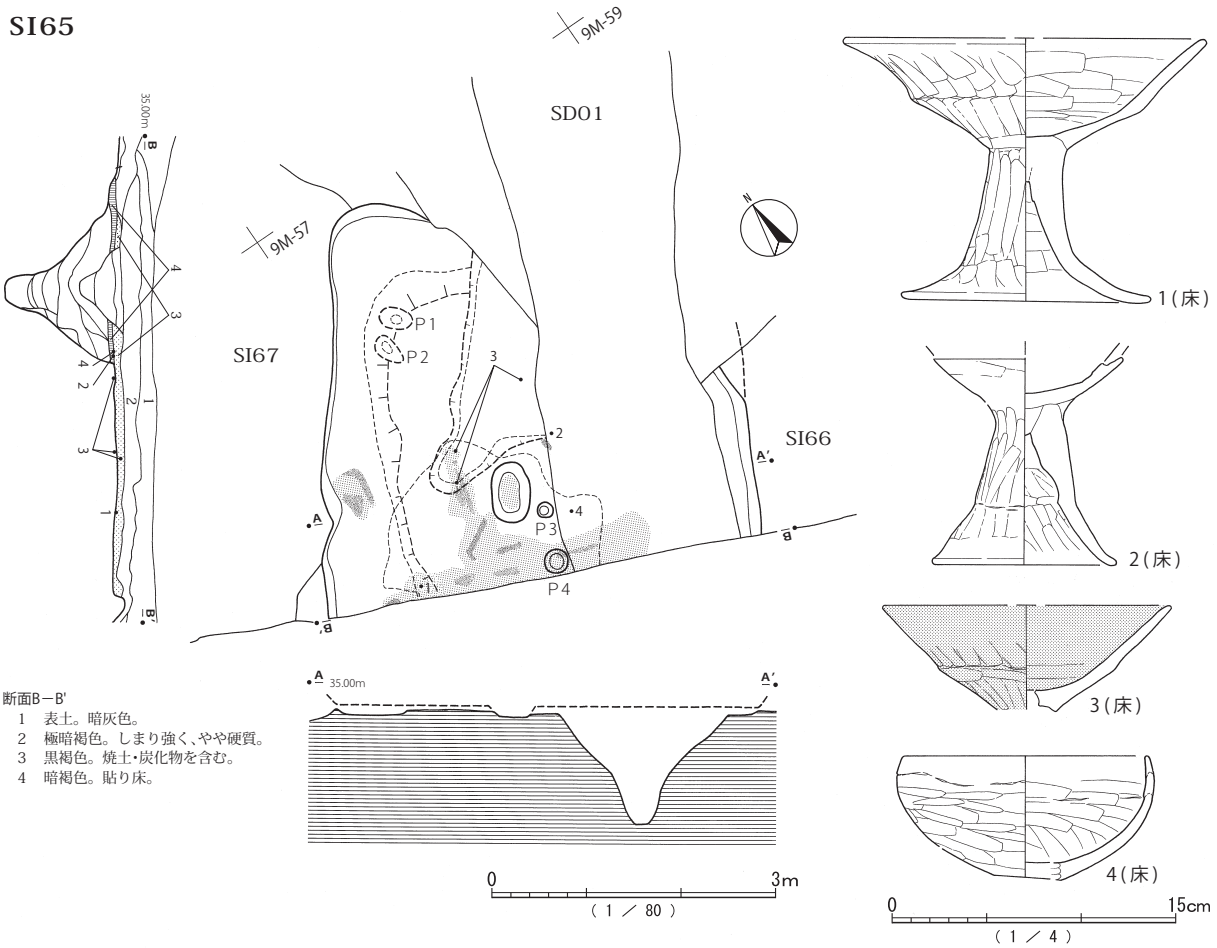
SI63は、B地点10M−41区他に所在する。竪穴範囲の大半は調査区外にあり、竪穴北東隅部のみ検出した。黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、31〜35cmを測る。竪穴平面形態は、現状検出部から判断するならば方形を呈す。主軸方位は、N−21.0°−WないしN−69.0°−Eである。壁溝は全周する。炉等の内部施設は検出されていない。床は貼り床であり、厚い硬化層が認められた。火災の痕跡は明確ではなかった。

出土土器は、小破片のみである。

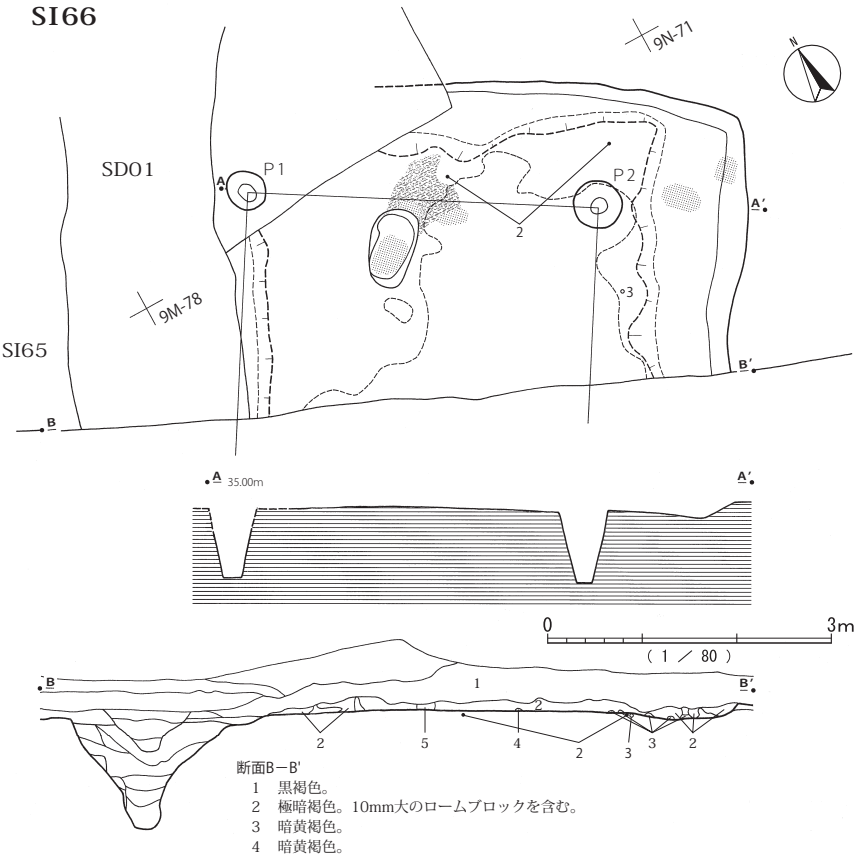
本竪穴の時期は、出土土器によれば古墳時代中期南岩崎5期である。ただし、いずれも本遺構に確実にともなうものではない。

SI64（Fig.119〜121、PL.5・27・28・61・62・87・105）

SI64は、B地点9M−39区他に所在する。SD01、SM01・02と重複し、本遺構に対してSD01が古く、SM01・02が新しい。時期的に近接する可能性があるSM01との新旧関係は、遺構の検出状況から検証することはできなかったが、SM01造営後、墳丘中央に本竪穴がつくられたとは考えにくい。また、SM02との新旧関係についても、SM02と重複するSI65との重複関係、SI65と本竪穴の出土土器から判断して、SM02が新しいと推定する。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層としている。確認面からの深さは、最大で0.17m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は5.83m（主軸）×5.58m、確認面掘形面積は31.89㎡を測る。主軸方位はN−32.0°−Eである。主柱穴はP1〜4である。P5は貯蔵穴である。炉は、主軸線上やや西側にあり、長軸長0.67mを測る。床は貼り床であり、掘形は壁側四周が深くなる。壁溝はほぼ全周する。本竪穴では、床面上に焼土・炭化物の堆積があり、



断面B－B′
1　表土。暗灰色。
2　極暗褐色。しまり強く、やや硬質。
3　黒褐色。焼土・炭化物を含む。
4　暗褐色。貼り床。



断面B－B′
1　黒褐色。
2　極暗褐色。10mm大のロームブロックを含む。
3　暗黄褐色。
4　暗黄褐色。
5　極暗褐色。ロームブロック主体。

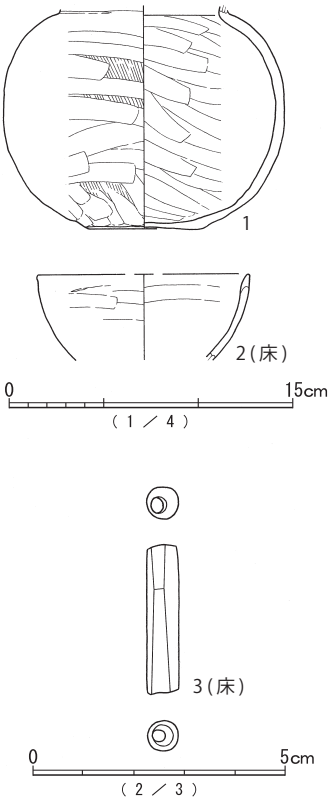


Fig.122　SI65 遺構遺物、SI66 遺構遺物

火災に遭った可能性が高い。

出土土器は、和泉式に限定される。竪穴南西隅部付近床面からまとまって出土しており、遺存遺物を含む可能性が高い。土器以外では、土製勾玉1が出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5a期と推定する。

SI65（Fig.122、PL.62・88）

SI65は、B地点9M−67区他に所在する。SI66・67、SM01・02、SD01と重複し、本遺構に対してSM01・02が新しく、SI66・67、SD01が古い。ただし、SI66との関係は、東壁がSI66掘形内側の立ち上がりと重複するため、やや判然としない。北東隅部は、確認調査坑によって破壊されている。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、確認面からの深さは、最大で0.07m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴規模は東西軸で4.60mを測る。主軸方位は、N−30.0°−Eである。主柱穴は検出できなかった。炉は、竪穴のほぼ中央部で検出された。床は貼り床構造をもち、掘形は壁際四周が深くなる。本竪穴は、火災に遭ったと考えられ、床面上竪穴中央部を中心に焼土・炭化物の堆積が認められた。

出土土器は限られるが、いずれも床面から出土しており、遺存遺物の可能性がある。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b新期と推定する。

SI66（Fig.122、PL.6・28・63・105）

SI66は、B地点9M−89区他に所在する。SI65、SM01・02、SD01と重複し、本遺構に対してSI65、SM01・02が新しく、SD01が古い。南半部は調査区外となり、西辺部はSI65と確認調査坑によって破壊されている。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、確認面からの深さは、最大で0.06m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴規模は東西軸で推定6.90mを測る。確認面掘形面積は44.0㎡程度と推定する。主軸方位はN−32.0°−Eである。主柱穴はP1・2である。炉は主軸線上にあり、北側床面上に炭化物層の広がりが認められた。床は貼り床であり、掘形は竪穴四周が深くなる。本竪穴は、火災に遭ったと考えられ、床面上竪穴中央部を中心に焼土・炭化物の堆積が認められた。

出土土器は少ない。土器以外では、3が碧玉製管玉である。

本竪穴の時期は、古墳時代前期南岩崎4a期と推定する。

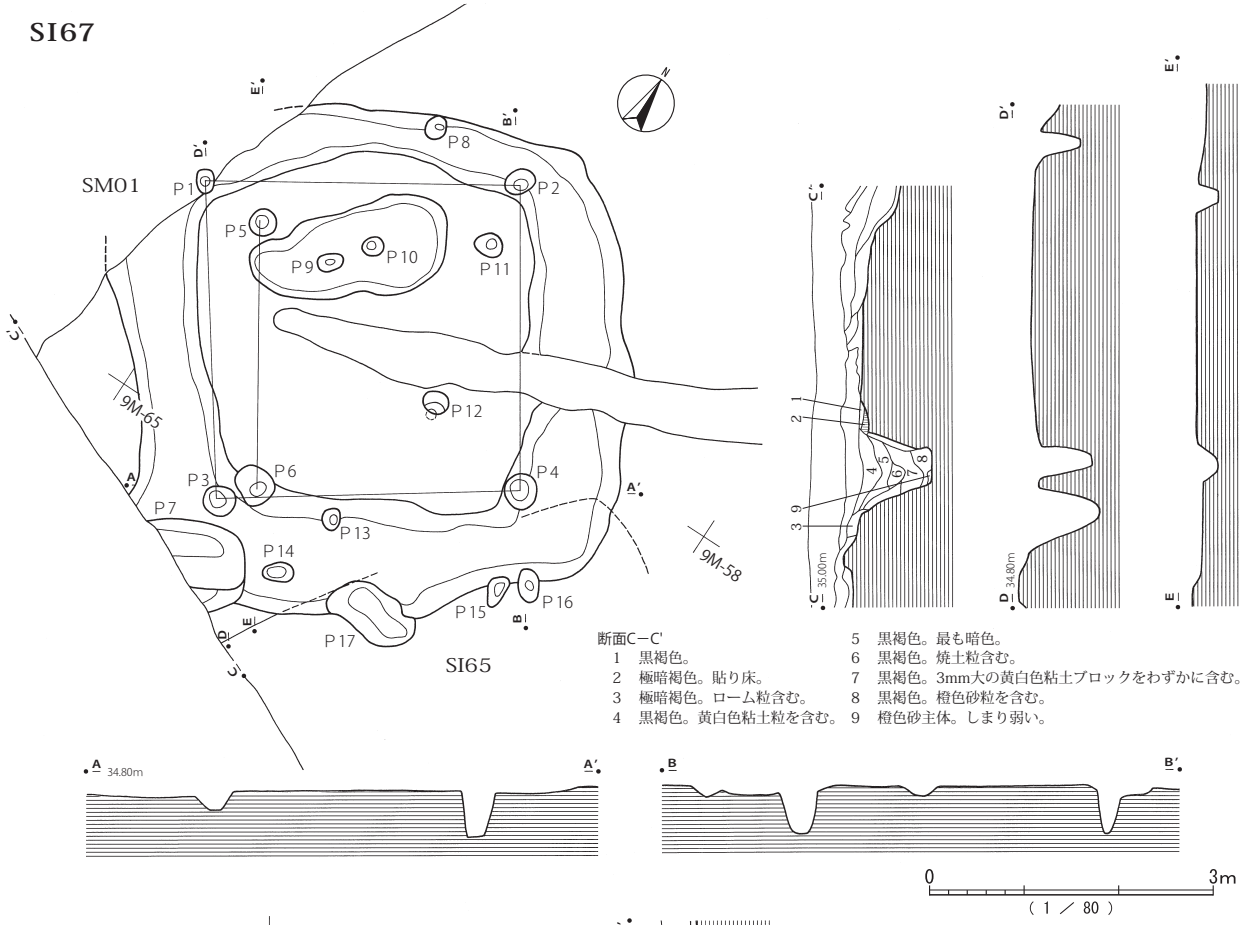
SI67（Fig.123・124、PL.28・96）

SI67は、B地点9M−56区他に所在する。SI65、SM01と重複し、本遺構が最も古い。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とする。遺構確認段階ですでに床面が明確ではなかったことから、竪穴範囲は掘形面で検出した。竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、掘形は四周が深くなる形態をとる。主軸方位は、N−33.0°−WないしN−57.0°−Eである。全体規模は5.28m（主軸）×5.31m、確認面掘形面積は26.32㎡を測る。主柱穴はP1〜4である。P5・6・11は建て替えによる可能性もあるが、いずれも深さ0.2m前後と浅い。P3は貯蔵穴である。炉は検出できなかった。火災の痕跡は確認できなかった。

出土土器は小破片のみであった。

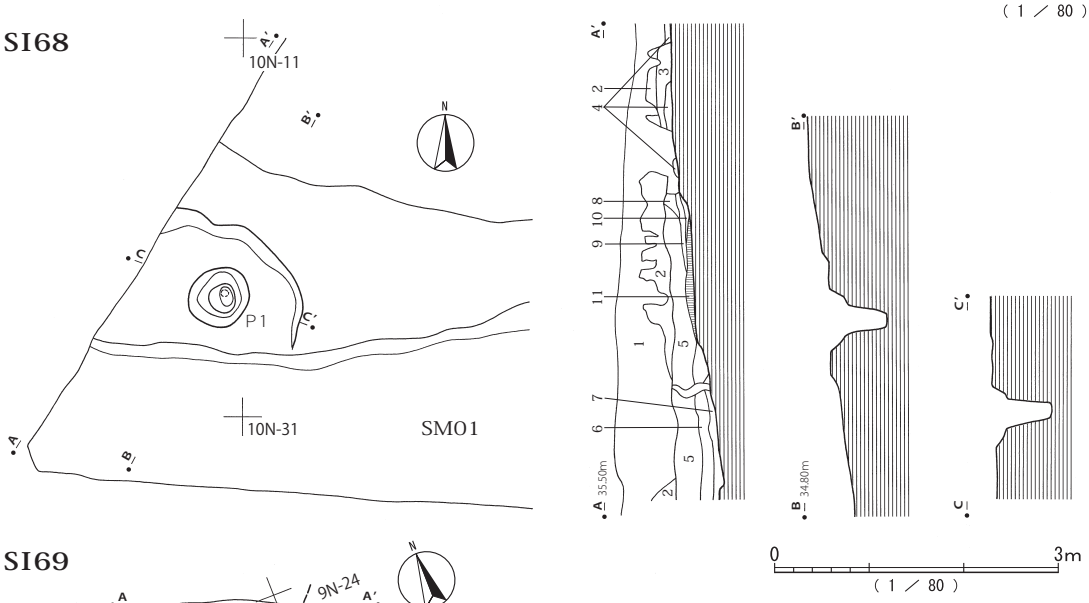
本竪穴の時期は、竪穴平面形態も考慮し、古墳時代前期南岩崎4a期に比定しておく。

SI67

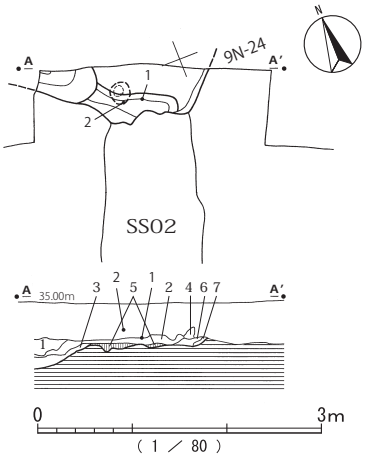


断面C－C'
1　黒褐色。
2　極暗褐色。貼り床。
3　極暗褐色。ローム粒含む。
4　黒褐色。黄白色粘土粒を含む。
5　黒褐色。最も暗色。
6　黒褐色。焼土粒含む。
7　黒褐色。3mm大の黄白色粘土ブロックをわずかに含む。
8　黒褐色。橙色砂粒を含む。
9　橙色砂主体。しまり弱い。

SI68



SI69

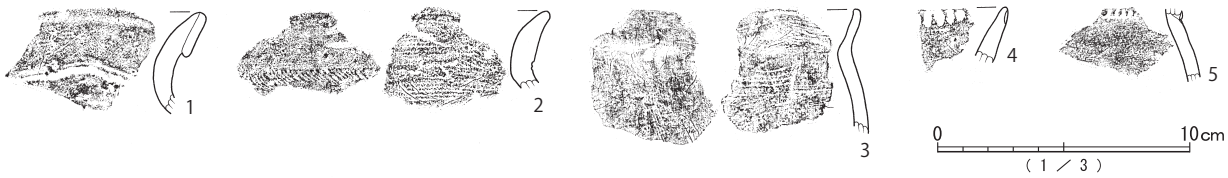


SI68
断面A－A'
1　表土。暗灰色。
2　灰褐色。しまり強く硬い。
3　黒褐色。10～30mm大のロームを多量に含む。
4　黄褐色ローム層。
5　黒褐色。しまり弱い。
6　黒褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。
7　暗褐色。黄白色粘土ブロック主体。
8　極暗褐色。
9　極暗褐色。
10　暗黄褐色。
11　極暗褐色。20mm大のロームブロックを含む。貼り床。

SI69
断面A－A'
1　黒褐色。橙色砂粒を含む。
2　黒褐色。橙色砂粒、2mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
3　極暗褐色。5mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
4　暗褐色。
5　黄褐色。粘質ロームブロック・黄白色粘土主体。貼り床。
6　暗褐色。黄白色粘土ブロック主体。
7　暗黄褐色。ローム主体。

Fig.123　SI67(1) 遺構、SI68 遺構、SI69(1) 遺構

SI67



SI69

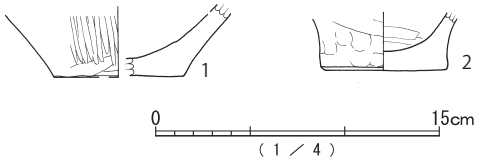


Fig.124　SI67(2) 遺物、SI69(2) 遺物

SI68（Fig.123）

SI68は、B地点10N−20区他に所在する。SM01墳丘側周溝肩部で検出した。肩部緩斜面は、SM02周溝にあたる可能性もある。床硬化面および主柱穴と考えられるP1を根拠として竪穴と判断したが、SM01ないしSM02によって大半が破壊されている。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層として、確認面からの深さは0.15m程度である。竪穴平面形態は、現存部での判断では、隅丸方形ないし楕円形と推定する。全体規模は不明、主軸方位も明らかではない。床は貼り床であり、硬化層は比較的厚い。火災の痕跡は認められなかった。

実測可能な遺物は出土していない。

本竪穴の時期は不明であるが、SM01・02に先行することから、古墳時代前期ないしそれ以前と考えられる。

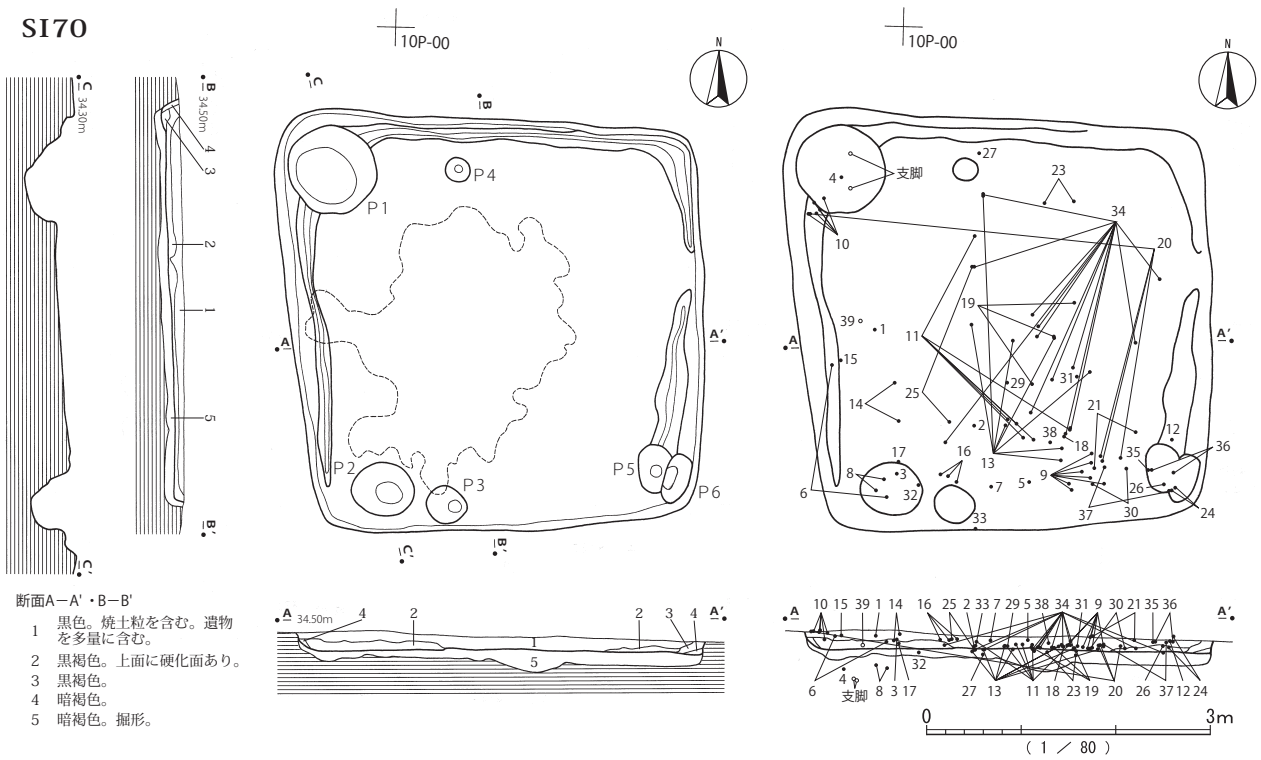
SI69（Fig.123・124）

SI69は、B地点9N−13区他に所在する。古墳SM01墳丘部内にあり、方形周溝墓SS02北西溝端部と接するが、遺構検出状況から新旧関係は判断できない。黄褐色ソフトローム層を確認面・掘り込み層とし、確認面からの深さは最大で0.08m程度を測る。検出部分は、竪穴南東隅にあたる可能性が高いが、小範囲のため確実ではない。全体規模、主軸方位は不明。南辺部が壁溝状となるが、他の内部施設は検出されていない。火災の痕跡は認められなかった。

出土土器1・2は宮ノ台式であるが、帰属は明確ではない。本竪穴の時期は不明である。

SI70（Fig.125・126、PL.5・28・29・63・88・103）

SI70は、B地点10P−10区他に所在する。他遺構との重複は認められない。褐色土層（新期テフラ層）を確認面として、黄褐色ソフトローム層上面まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.21m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は4.35m（南北軸）×4.35m、確認面掘形面積は18.62㎡を測る。壁溝に対して北西隅部がややふくらむが、これはP1に影響された調査時の掘りすぎの可能性がある。南北を基準とした方位は、N−3.0°−Wである。主柱穴・炉は検出できなかった。P2は貯蔵穴と考えられる。P1は径0.97m、床面からの深さ0.41mを測る。壁溝との位置関係から、別遺構の可能性もあるが判断できない。床は貼り床であり、竪穴中央部から西半部を中心に硬化面が認められた。火災の痕跡は検出されていない。



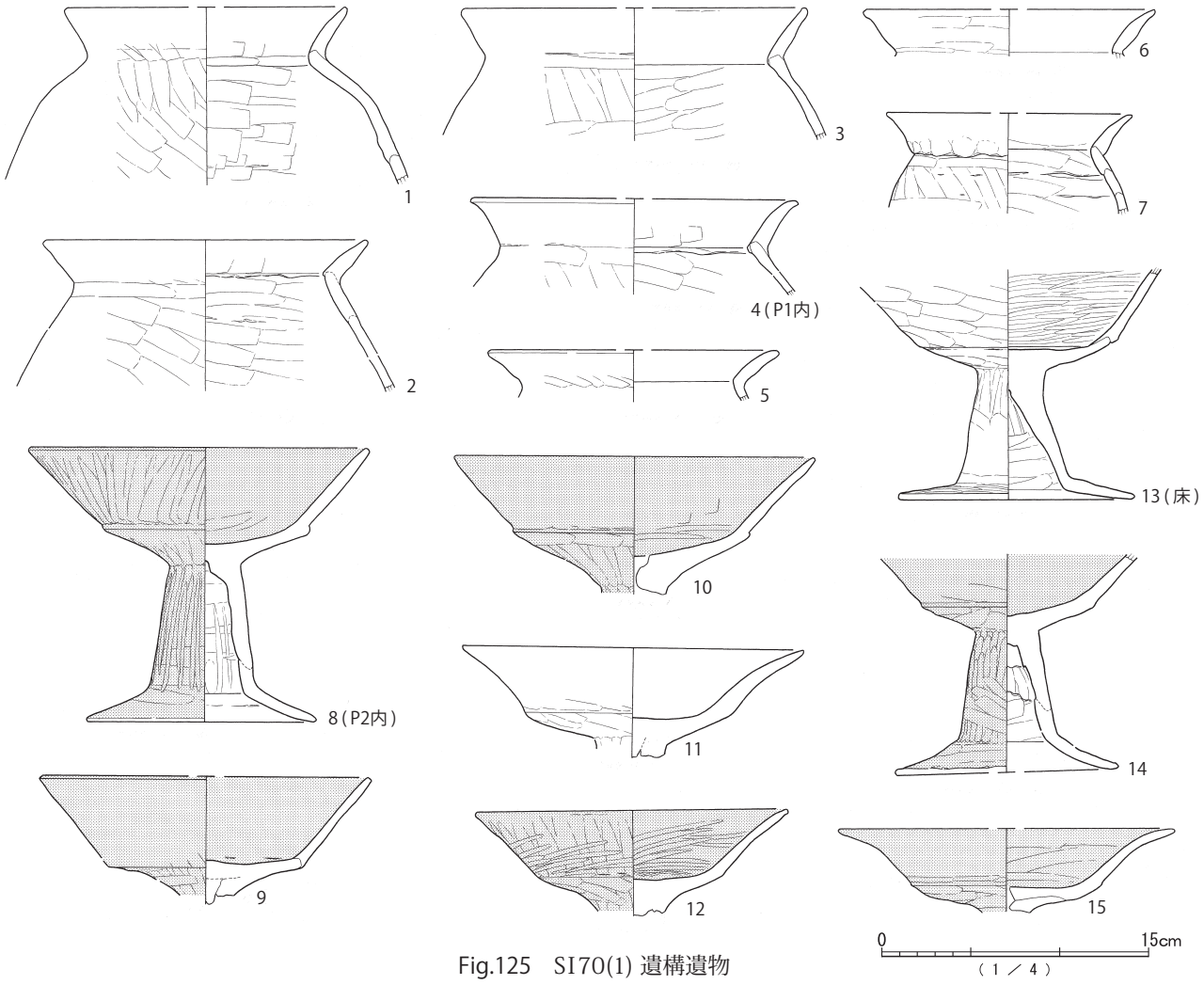


Fig.125　SI70(1) 遺構遺物

SI70

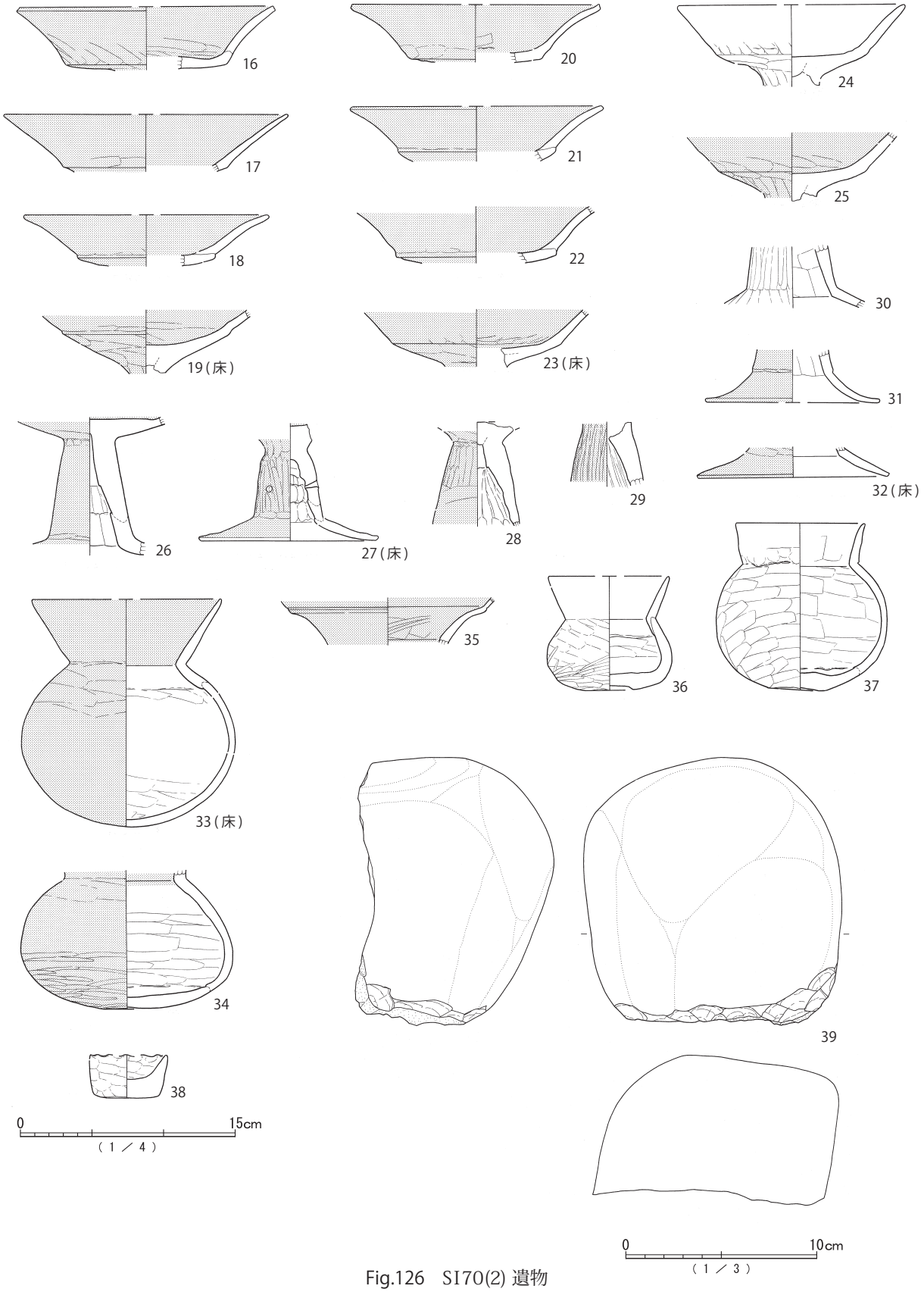
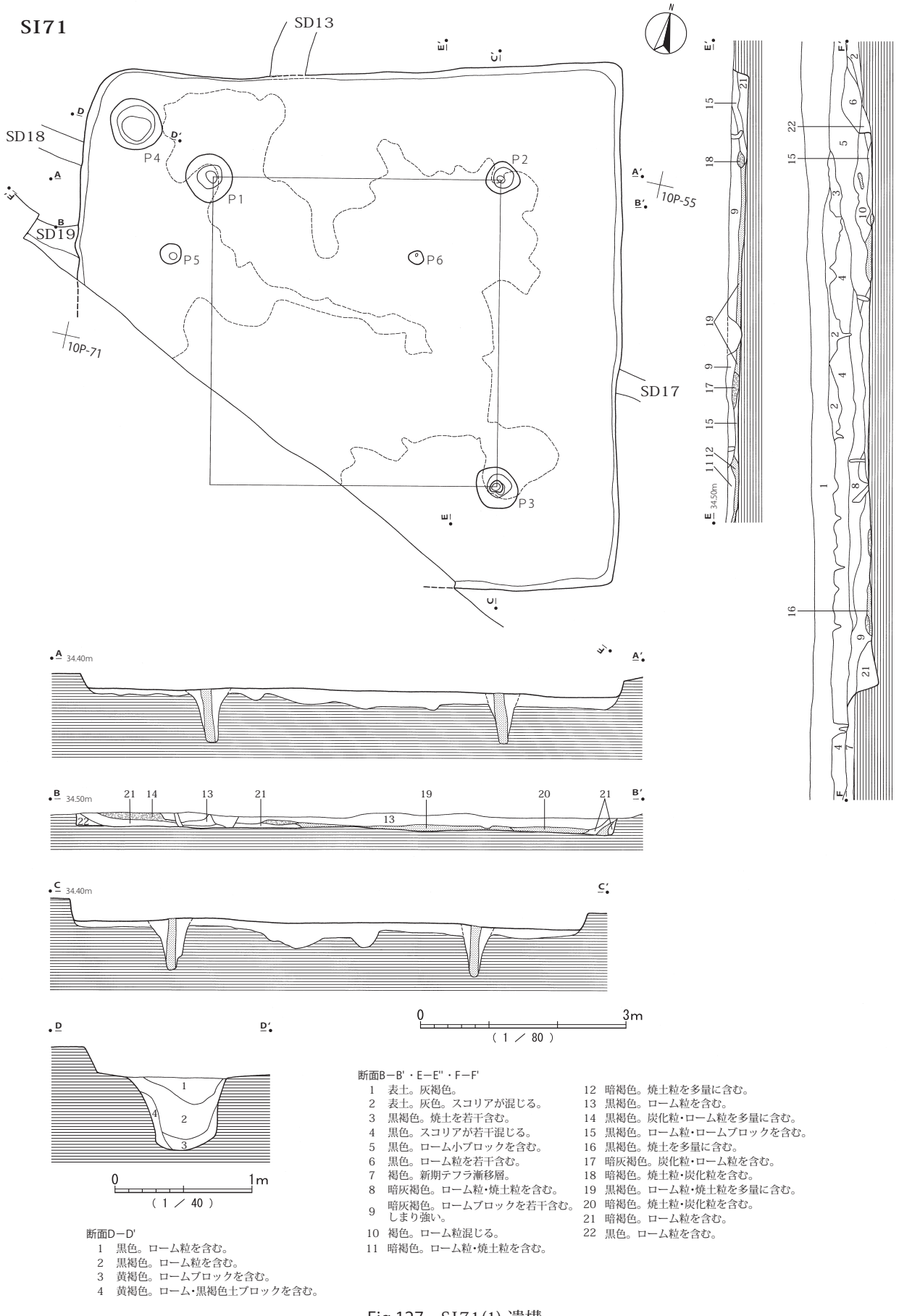


Fig.126　SI70(2) 遺物



断面D－D'
1　黒色。ローム粒を含む。
2　黒褐色。ローム粒を含む。
3　黄褐色。ロームブロックを含む。
4　黄褐色。ローム・黒褐色土ブロックを含む。

断面B－B'・E－E''・F－F'
1　表土。灰褐色。
2　表土。灰色。スコリアが混じる。
3　黒褐色。焼土を若干含む。
4　黒色。スコリアが若干混じる。
5　黒色。ローム小ブロックを含む。
6　黒色。ローム粒を若干含む。
7　褐色。新期テフラ漸移層。
8　暗灰褐色。ローム粒・焼土粒を含む。
9　暗灰褐色。ロームブロックを若干含む。しまり強い。
10　褐色。ローム粒混じる。
11　暗褐色。ローム粒・焼土粒を含む。
12　暗褐色。焼土粒を多量に含む。
13　黒褐色。ローム粒を含む。
14　黒褐色。炭化粒・ローム粒を多量に含む。
15　黒褐色。ローム粒・ロームブロックを含む。
16　黒褐色。焼土を多量に含む。
17　暗灰褐色。炭化粒・ローム粒を含む。
18　暗褐色。焼土粒・炭化粒を含む。
19　黒褐色。ローム粒・焼土粒を多量に含む。
20　暗褐色。焼土粒・炭化粒を含む。
21　暗褐色。ローム粒を含む。
22　黒色。ローム粒を含む。

Fig.127　SI71(1) 遺構

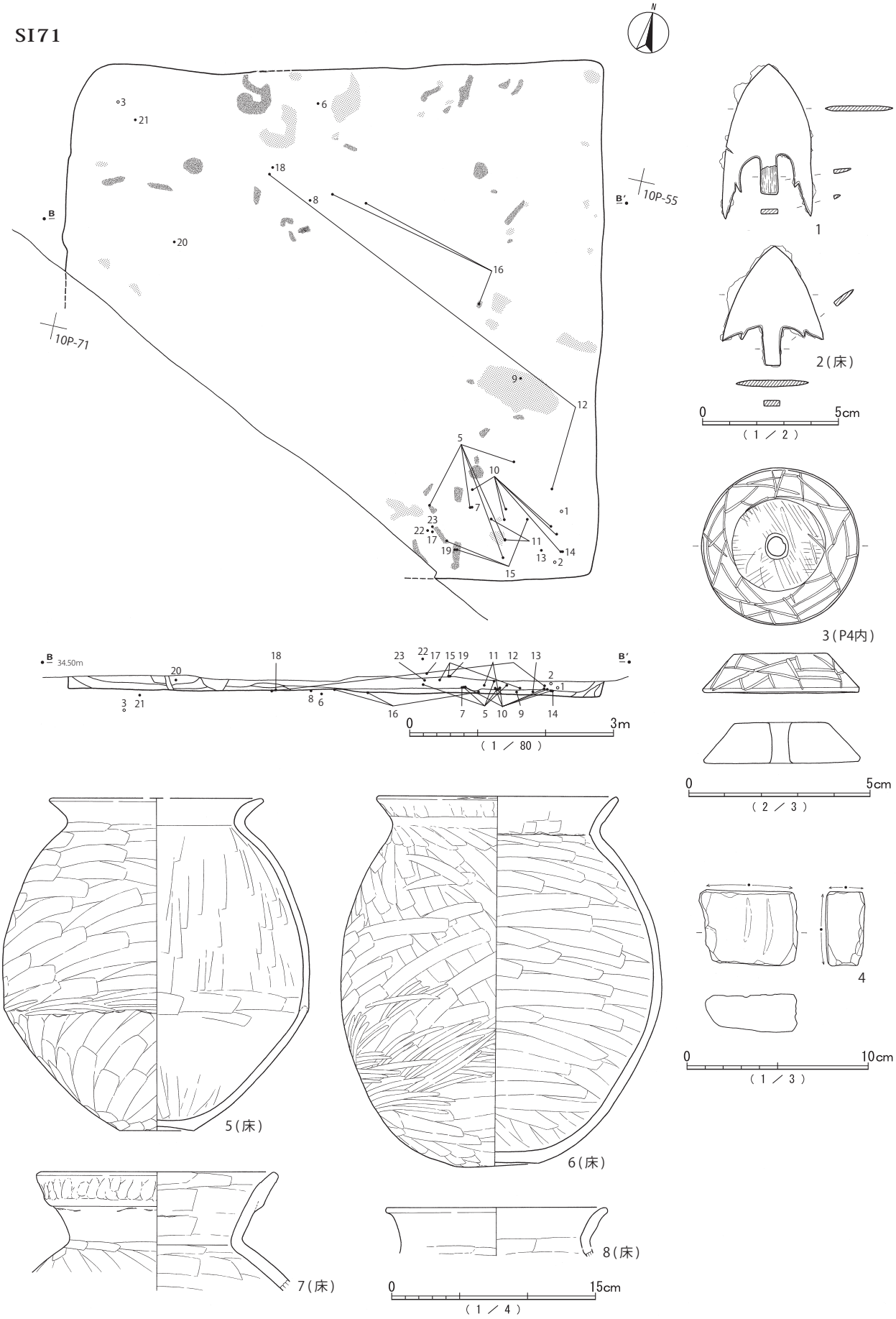


Fig.128　SI71(2) 遺構遺物

SI71

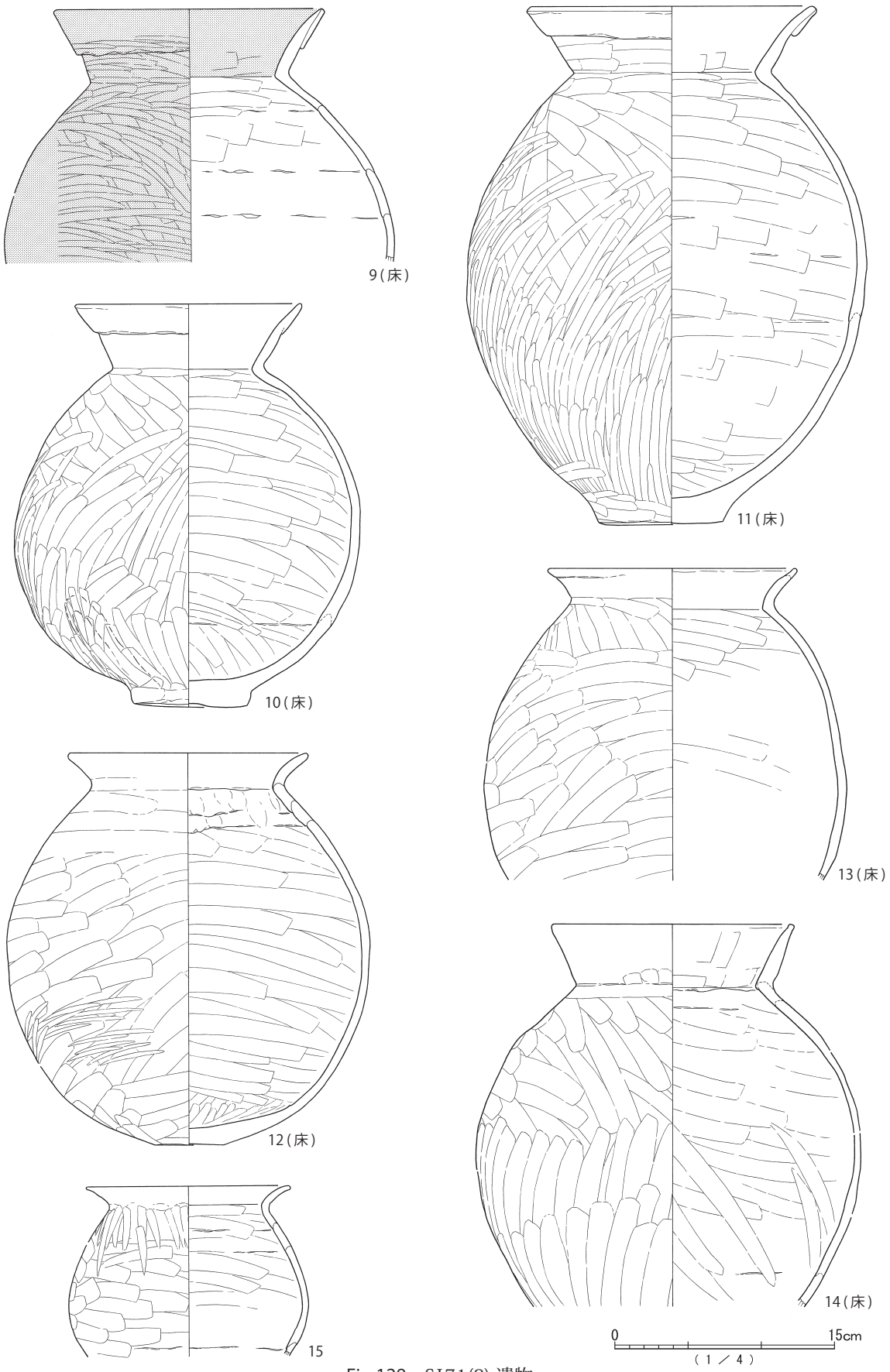


Fig.129　SI71(3) 遺物

SI71

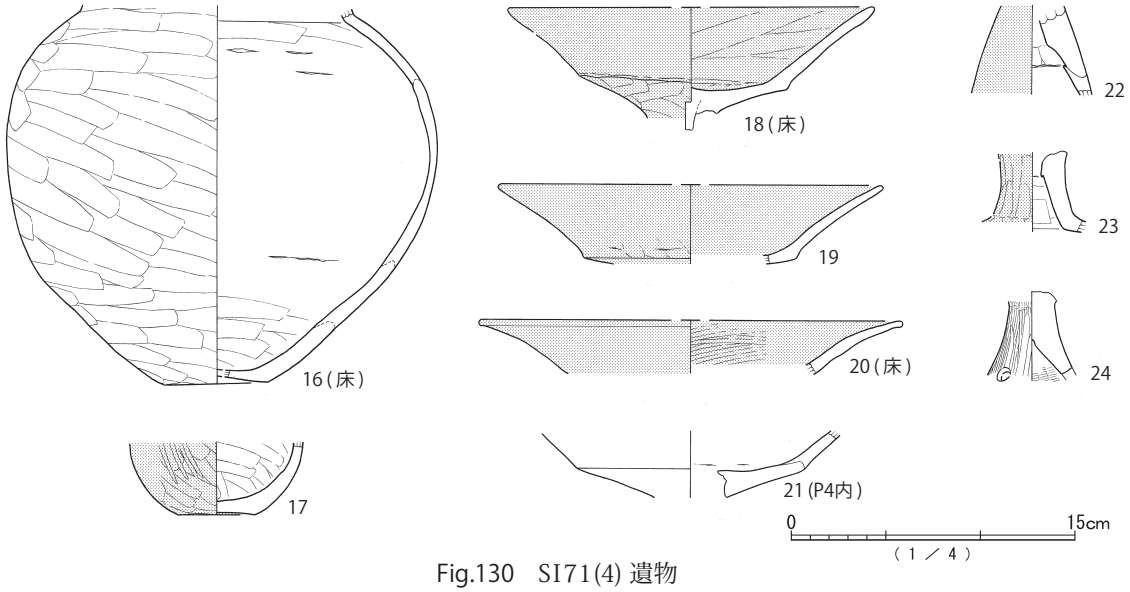


Fig.130　SI71(4) 遺物

出土土器は、和泉式に限定される。出土位置は、床面ないし覆土下部が主体となるが、破片個体が多く、遺存遺物を特定することは難しい。その中では、P2内から出土した高杯形土器8がほぼ完存個体である。土器以外では、39が台石である。ただし、使用痕はあまり明瞭ではなかった。他に、支脚と推定する土製品が、P1から出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI71（Fig.127～130、PL.5・6・29・64・88・103・104・105）

SI71は、B地点10P−63区他に所在する。SD12・13・17・18・19と重複する。これら溝との新旧関係は、土層断面等で確実にとらえているわけではないが、いずれも本遺構より新しいと推定する。褐色土層（新期テフラ層）を確認面として、黄褐色ソフトローム層上面まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.34m程度である。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は7.61m（南北軸）×7.81m、確認面掘形面積は復元値で59.42㎡を測る。南北方向を基準とした方位は、N−12.0°−Wである。主柱穴はP1～3である。P4は貯蔵穴である。炉・カマドは検出できなかった。壁溝も明確ではなかった。床は貼り床であり、掘形は比較的深い。検出した床面は傾斜が認められ、北西隅部へ向かってやや深くなる。本竪穴は、火災に遭ったことが想定され、床面上竪穴中央部を中心に焼土・炭化物の堆積が認められた。ただし、壁際の焼土等の堆積は、床面と間層をおいており、被災というよりは、上屋の焼却の可能性が高い。

出土土器は、南東隅部周辺にまとまっていた。遺存遺物を主体とする可能性が高い。土器以外では、1・2が短茎重抉三角形式の鉄鏃、3が滑石製紡錘車、4が砥石である。3の紡錘車は、側面に線刻画が描かれている。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI72（Fig.131、PL.29・101）

SI72は、B地点10P−86区他に所在する。他遺構との重複は認められない。竪穴範囲の大半は調査区外にあり、竪穴北東隅部のみ検出した。褐色土層（新期テフラ層）を確認面として、黄褐色ソフ

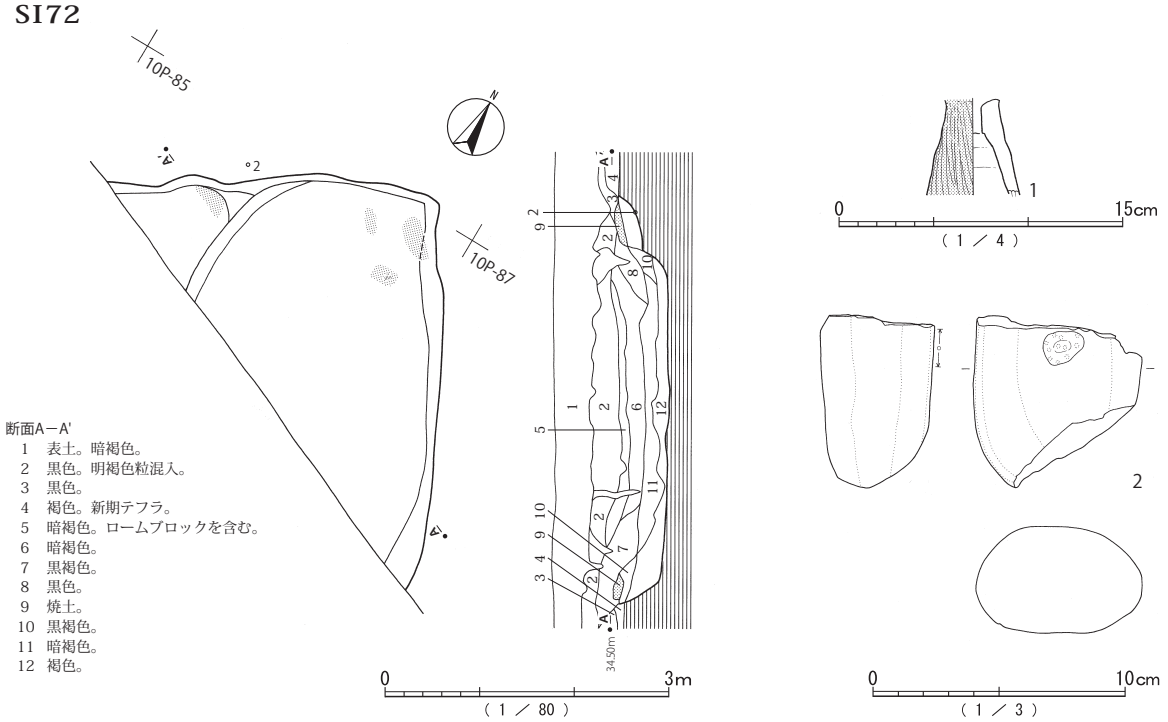


Fig.131　SI72 遺構遺物

トローム層上面まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.52mを測る。竪穴平面形態は、検出部によれば方形を呈す。全体規模は明確ではないが、調査区際で5.25mを測る。南北を基準として方位はN－29.0°－Wである。竪穴住居としての生活痕は乏しく、主柱穴・炉等の内部施設は検出できなかった。床面も凹凸があり、硬化面は明確ではなかった。壁際覆土に焼土の堆積が認められたが、竪穴の火災によるものとは認めにくい。

出土土器は、1の高杯形土器のみである。土器以外では、2の敲石が出土している。

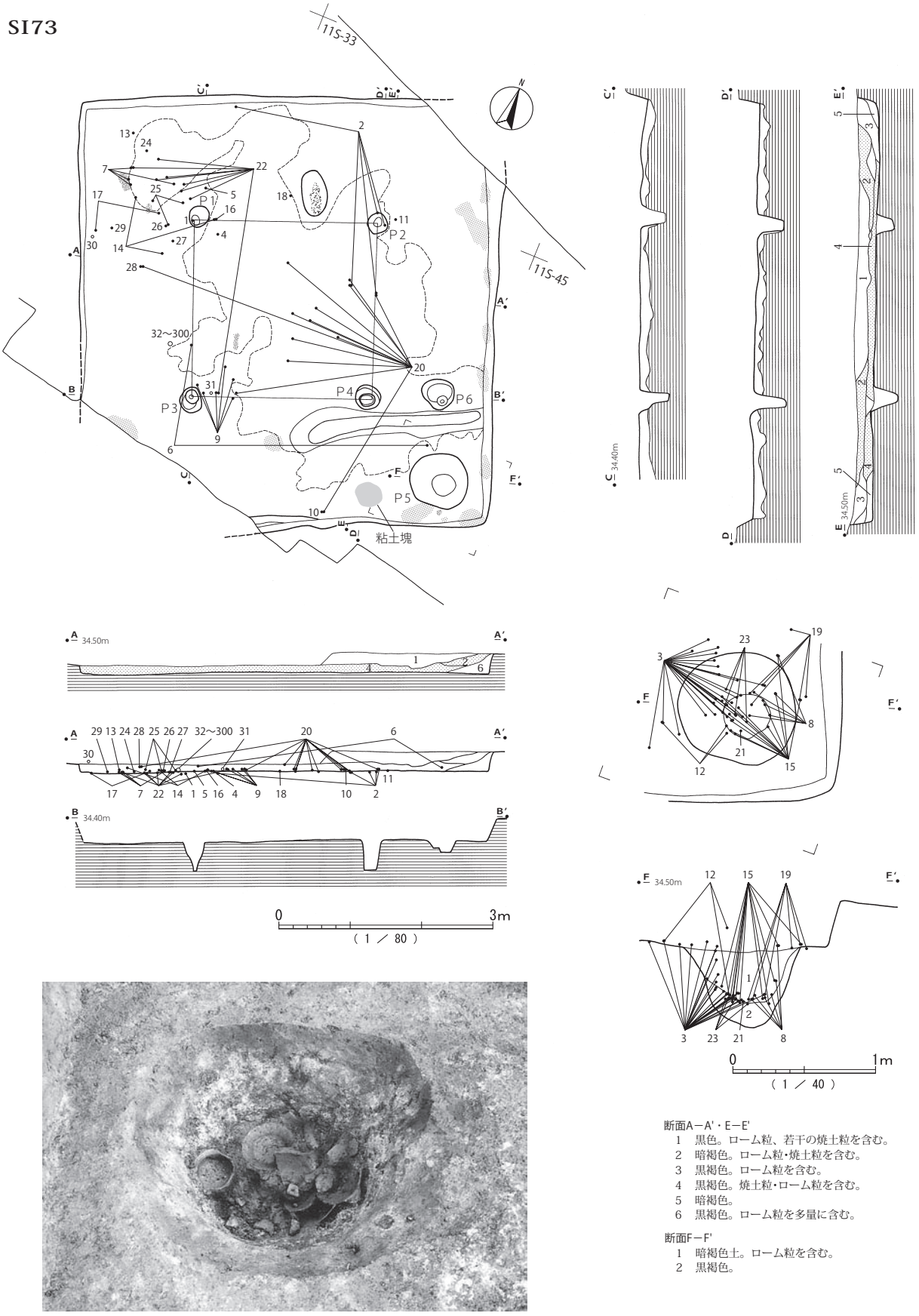
本竪穴の時期は、出土土器から古墳時代中期南岩崎5期に比定しておく。

SI73（Fig.132～136、PL.5・6・30・64・65・66・88・89・104・105・106）

SI73は、B地点11S－43区他に所在する。北東・南西隅部が調査区外となる。他遺構との重複は認められない。褐色土層（新期テフラ層）を確認面として、黄褐色ソフトローム層まで掘り込んでいる。P5他Pitの掘り込みは黄白色粘土層に達している。確認面からの深さは、最大で0.4mを測る。竪穴平面形態は方形を呈し、全体規模は6.07m（主軸）×5.89m、確認面掘形面積は35.71㎡を測る。主軸方位はN－21.0°－Wである。主柱穴はP1～4である。P5は貯蔵穴である。貯蔵穴前面に堤状の高まりが認められた。また、貯蔵穴西側床面上で粘土塊を検出した。炉はおおむね主軸線上にあり、長軸長0.63mを測る。床は貼り床であり、竪穴中央部を中心に硬化面が認められた。掘形は、壁際四周が若干深くなる。掘形埋土は、粘土ブロックを多量に含む。壁溝は、南辺一部で検出した。本竪穴は、火災に遭ったことが想定され、床面上竪穴中央部を中心に焼土・炭化物の堆積が認められた。ただし、壁際の焼土等の堆積は、床面と間層をおいており、被災というよりは、上屋の焼却の可能性が高い。

出土土器は、P5内およびその周辺と竪穴北西隅部周辺にまとまっていた。遺存遺物を主体とする可能性が高い。土器以外では、30が鉄製鑿、31が滑石製剣形石製品、32～300が滑石製臼玉である。

SI73



断面A－A'・E－E'
1　黒色。ローム粒、若干の焼土粒を含む。
2　暗褐色。ローム粒・焼土粒を含む。
3　黒褐色。ローム粒を含む。
4　黒褐色。焼土粒・ローム粒を含む。
5　暗褐色。
6　黒褐色。ローム粒を多量に含む。

断面F－F'
1　暗褐色土。ローム粒を含む。
2　黒褐色。

Fig.132　SI73(1) 遺構

SI73

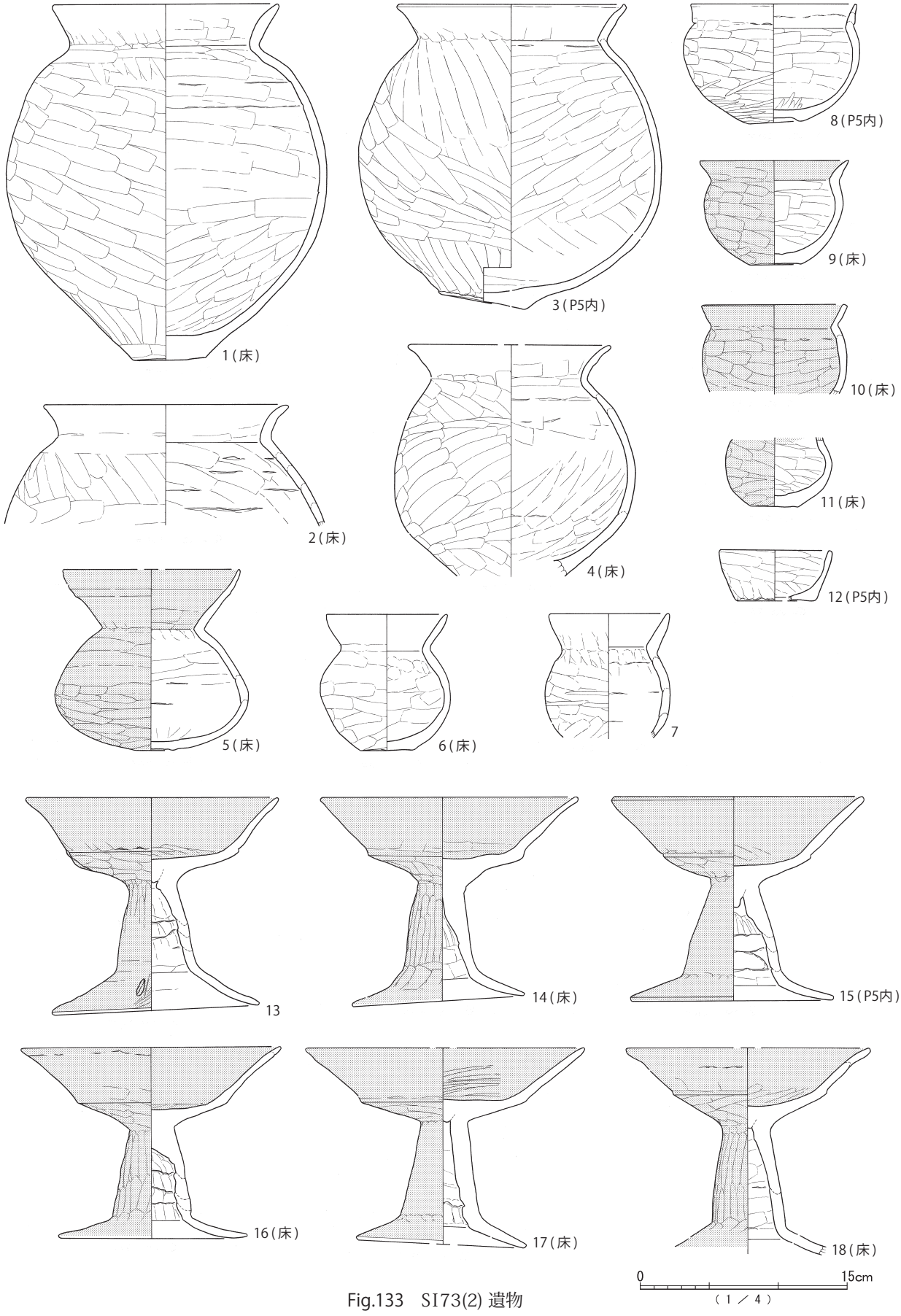


Fig.133　SI73(2) 遺物

SI73

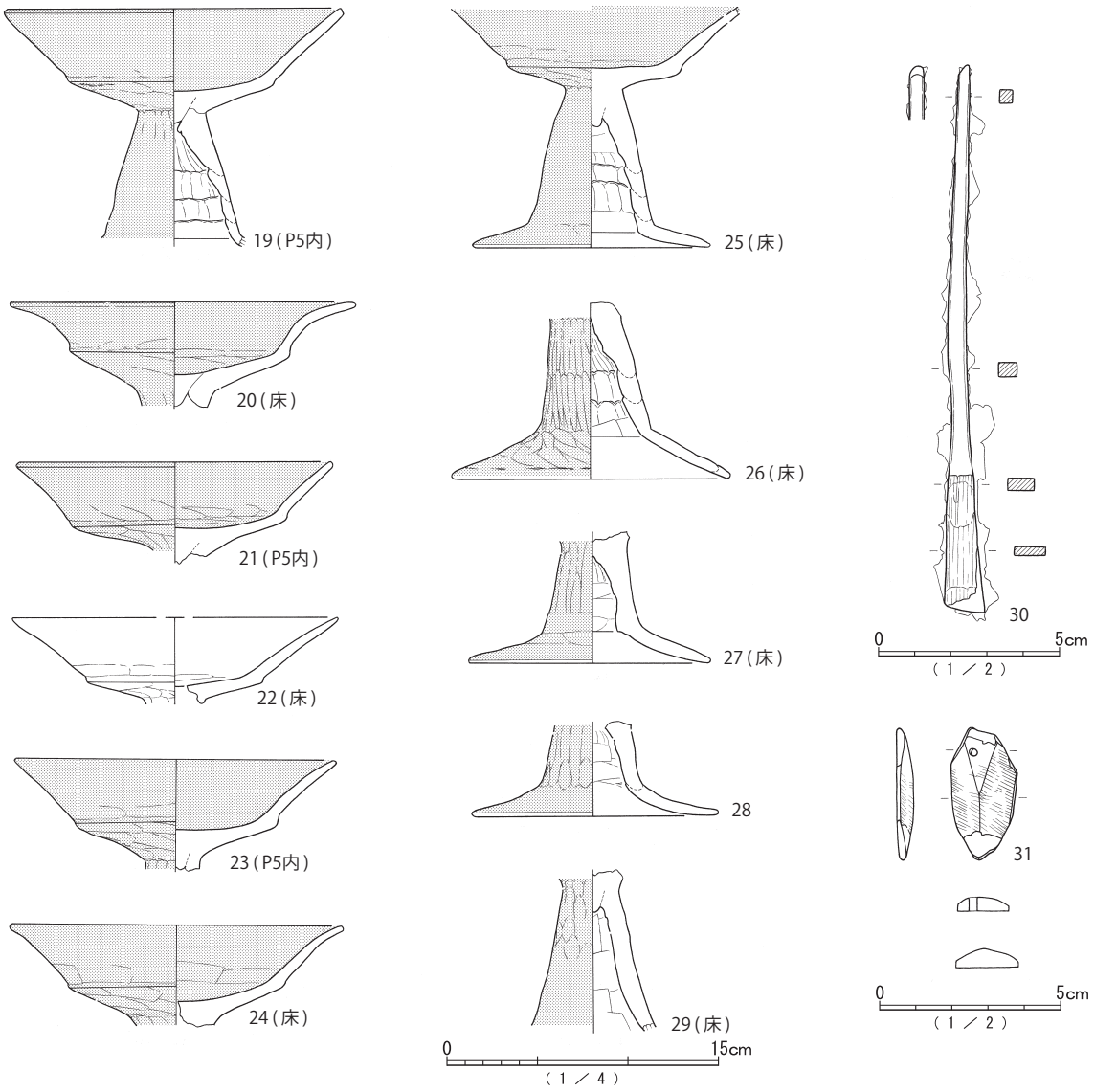


Fig.134　SI73(3) 遺物

SI73

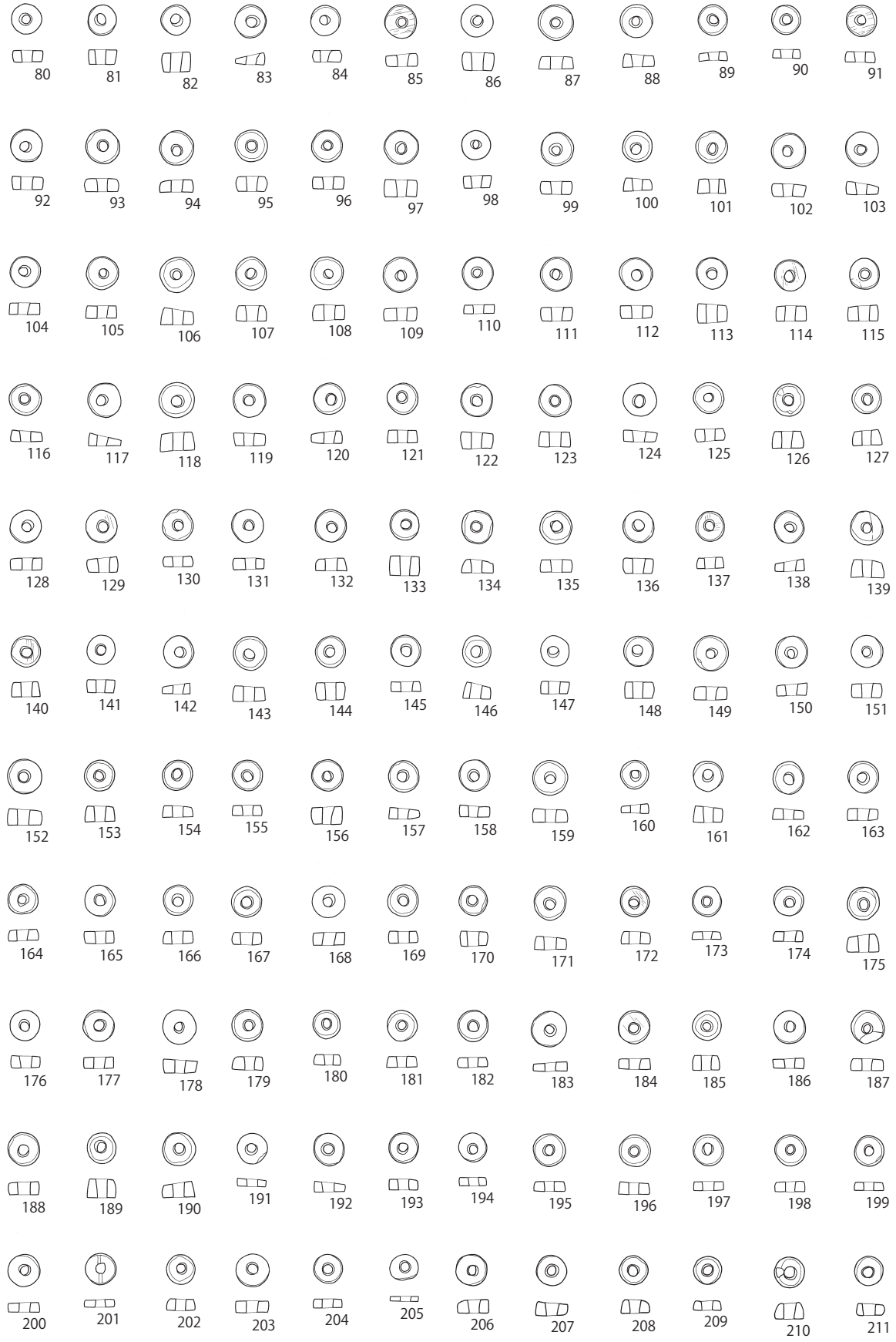


Fig.135　SI73(4) 遺物

SI73

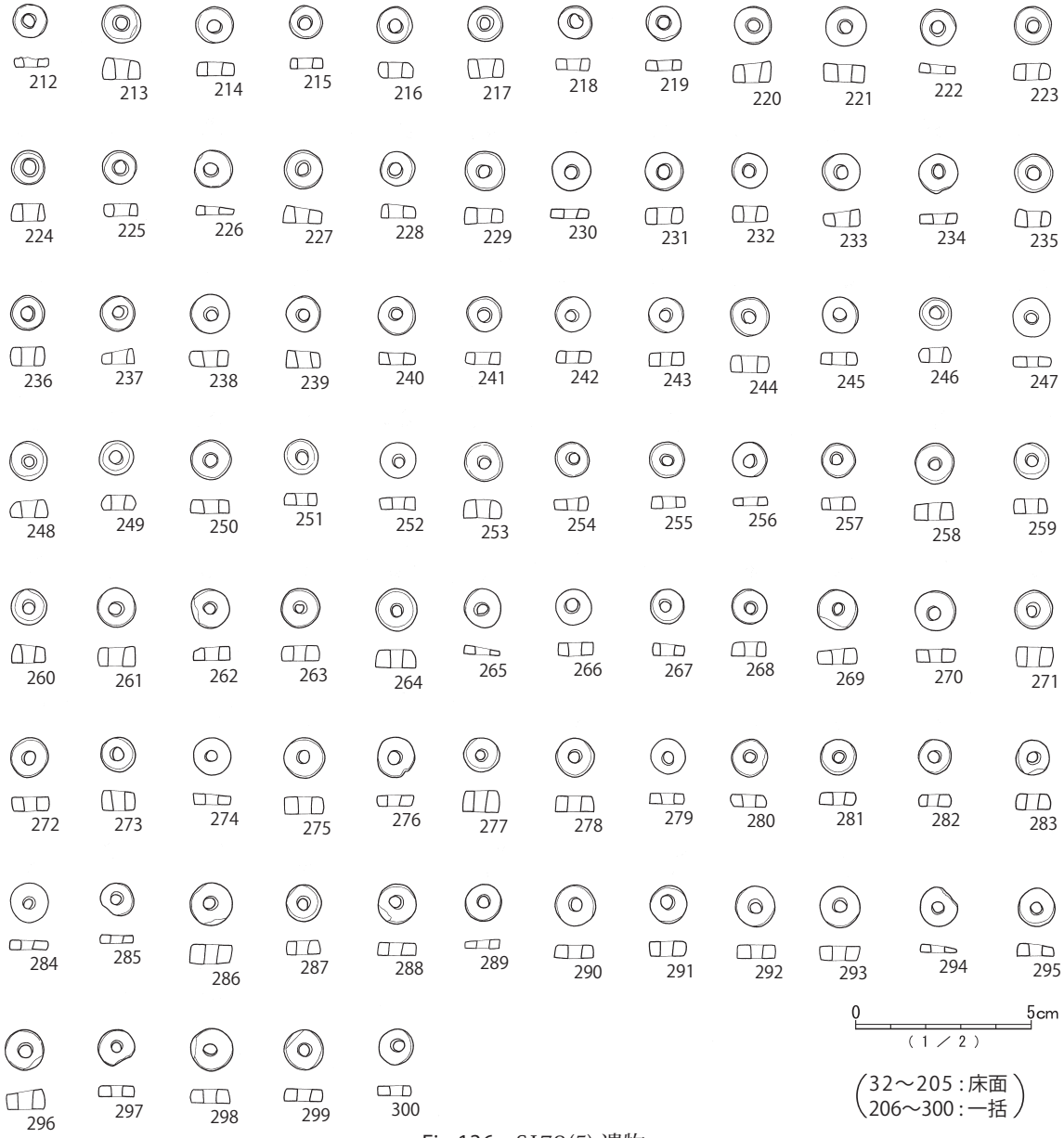


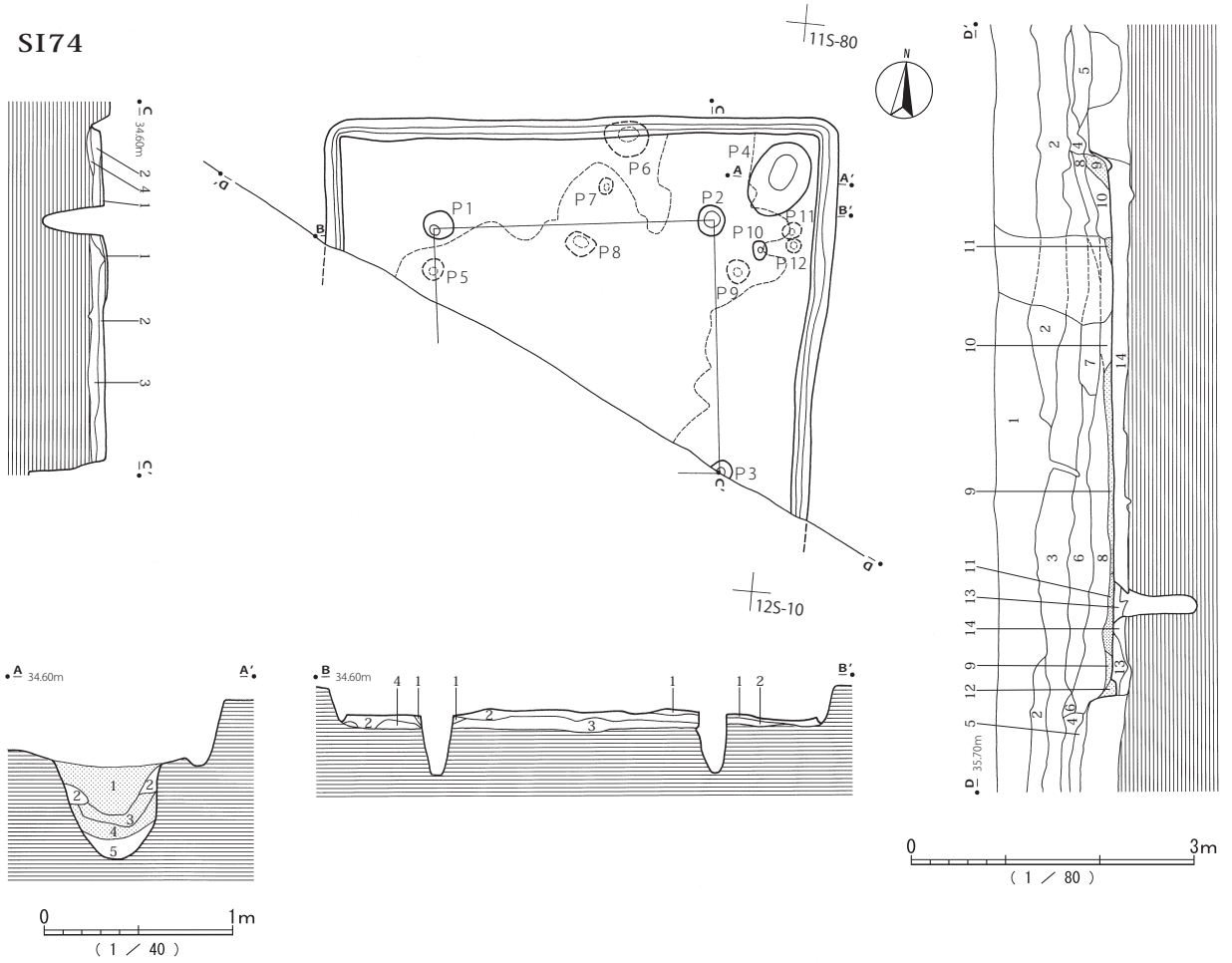
Fig.136　SI73(5) 遺物

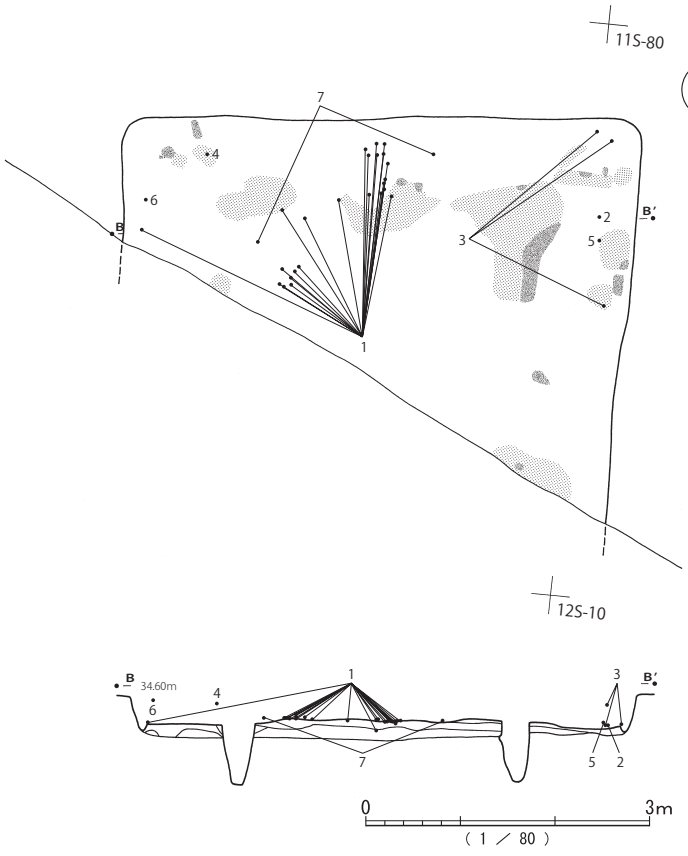
滑石製臼玉は、床面上小範囲にまとまって出土した。総数269点であるが、このうち95点（206～300）は周辺土壌のフルイによって取り上げたものである。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

SI74（Fig.137・138、PL.30・66）

SI74は、C地点11R−98区他に所在する。南半部は調査区外となる。他遺構との重複関係はない。褐色土層（新期テフラ層）を確認面として黄褐色ソフトローム層上面まで掘り込んでいる。確認面からの深さは、最大で0.25mを測る。竪穴平面形態は方形を呈し、竪穴規模は、東西軸で5.29m、確認面掘形面積は推定で25.89㎡を測る。南北軸の方位はN−3.0°−Wである。主柱穴はP1～3である。P4は貯蔵穴である。貯蔵穴前面貼り床は、粘土ブロックを含みとくに硬化し、南北方向に若干高くなる。炉・カマドは検出できなかった。壁溝は全周する。床は貼り床であり、竪穴中央部を中心に硬





断面A－A'
1　黒褐色。焼土粒を含む。
2　黒色。
3　焼土主体。
4　黒褐色。焼土粒を含む。
5　暗褐色。

断面B－B'・C－C'
1　ロームブロック主体。
2　黒色。
3　褐色。
4　暗褐色。

断面D－D'
1　表土。
2　黒色。
3　褐色。
4　暗褐色。
5　黄褐色。
6　暗褐色。
7　暗茶褐色。
8　茶褐色。
9　黒褐色。焼土・炭化物を含む。
10　茶褐色。焼土粒・ローム粒を若干含む。
11　焼土主体。
12　黄褐色。焼土を含む。
13　黒色。貼り床。
14　暗褐色。貼り床。

Fig.137　SI74(1) 遺構

SI74

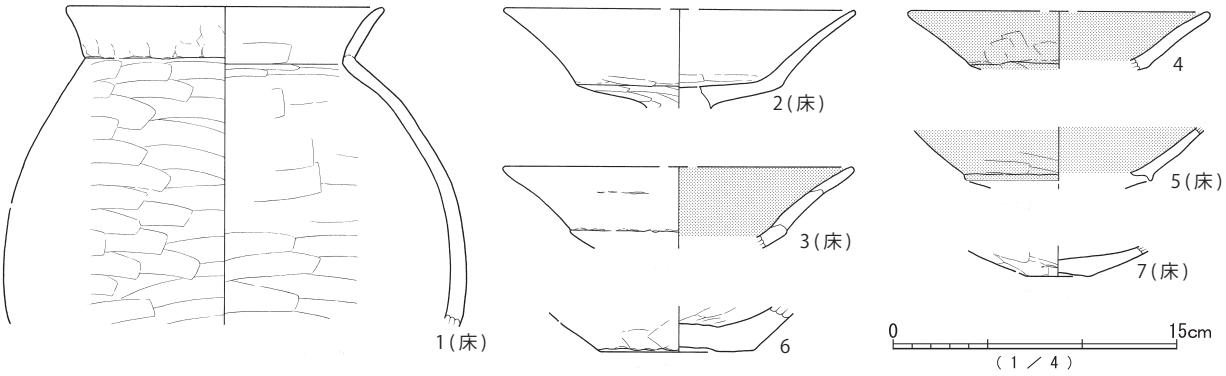


Fig.138　SI74(2) 遺物

化面が認められた。本竪穴は、火災に遭ったことが想定され、床面上壁際を中心に焼土・炭化物の堆積が認められた。焼土はP4内にも認められ、火災時にP4が開口していたことを裏付ける。

出土土器は限られているが、床面付近から出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期と推定する。

第2節　掘立柱建物

掘立柱建物は、B地点で4棟を検出した。中近世と推定するが、いずれも時期を特定する遺物が出土していない。

SB01（Fig.139、PL.23）

掘立柱建物SB01は、B地点8L−72区他に所在する。SI46・47・49・51・52、SD03と重複する。本遺構が最も新しいと推定するが、確実に新旧関係をとらえることができたのはSI46のみである。梁行5.18m、桁行7.52mの南北棟の側柱建物であり、棟方位はN−19.0°−Wをしめす。桁行は9ないし10間であり、西側柱列は北方向へ連続する。北東隅部がSI49との重複でやや不確実であることから、建物自体がさらに北側へのびる可能性もある。梁行方向の柱列は明確ではないが、北側は小Pitが連続し、布堀状を呈している。

本遺構にともなう遺物は出土していない。隣接する井戸SE01から常滑産の片口鉢（Fig.157−1）が出土しており、これらを一連の遺構群とみるならば、本遺構も中世に遡る可能性がある。

Tab.3　掘立柱建物 Pit 深度

遺構	Pit	深さ	遺構	Pit	深さ	遺構	Pit	深さ	遺構	Pit	深さ	遺構	Pit	深さ	遺構	Pit	深さ
SB01	1	0.24	SB01	13	0.36	SB01	25	0.32	SB02	10	0.77	SB03	22	0.97	SB03	34	0.49
SB01	2	0.26	SB01	14	0.20	SB01	26	0.30	SB02	11	0.48	SB03	23	0.52	SB03	35	0.84
SB01	3	0.31	SB01	15	0.27	SB01	27	0.27	SB02	12	0.21	SB03	24	0.56	SB03	36	0.76
SB01	4	0.29	SB01	16	0.29	SB02	1	0.22	SB02	13	0.21	SB03	25	0.58	SB03	37	0.78
SB01	5	0.65	SB01	17	0.30	SB02	2	0.10	SB02	14	0.70	SB03	26	0.80	SB03	38	0.34
SB01	6	0.31	SB01	18	0.25	SB02	3	0.16	SB02	15	0.78	SB03	27	1.03	SB03	39	0.08
SB01	7	0.41	SB01	19	0.39	SB02	4	0.23	SB02	16	0.64	SB03	28	0.40	SB03	40	0.19
SB01	8	0.33	SB01	20	0.17	SB02	5	0.01	SB03	17	0.67	SB03	29	0.73	SB03	41	0.32
SB01	9	0.40	SB01	21	0.28	SB02	6	0.62	SB03	18	0.67	SB03	30	0.97	SB03	42	0.28
SB01	10	0.27	SB01	22	0.28	SB02	7	0.68	SB03	19	0.78	SB03	31	0.74	SB03	43	0.53
SB01	11	0.30	SB01	23	0.21	SB02	8	0.24	SB03	20	0.67	SB03	32	0.49	SB03	44	0.61
SB01	12	0.34	SB01	24	0.30	SB02	9	0.30	SB03	21	0.85	SB03	33	0.45	SB03	45	0.52

SB01

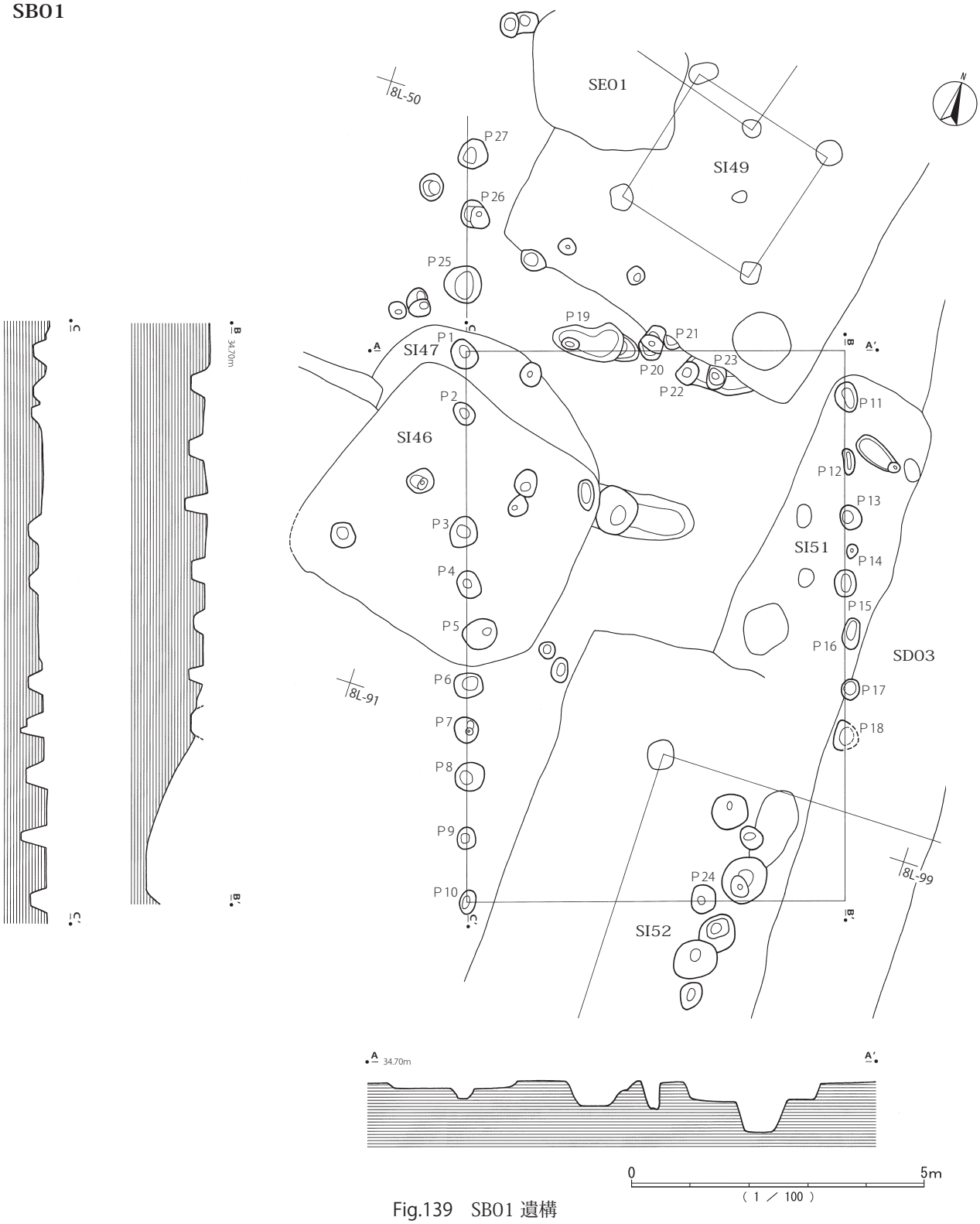


Fig.139　SB01 遺構

SB02（Fig.140、PL.31・39）

掘立柱建物SB02は、B地点9O−70区他に所在する。SD09・10と重複するが、新旧関係は明らかではない。梁行3.70m、桁行6.58mの南北棟建物である。東側に隣接するSB03と柱筋をそろえるが、別の建物に復元した。棟方位はN−5.0°−Eである。柱掘形は四隅以外明確ではないが、中央南北に

Fig.140　SB02 遺構、SB03 遺構、SD11遺構

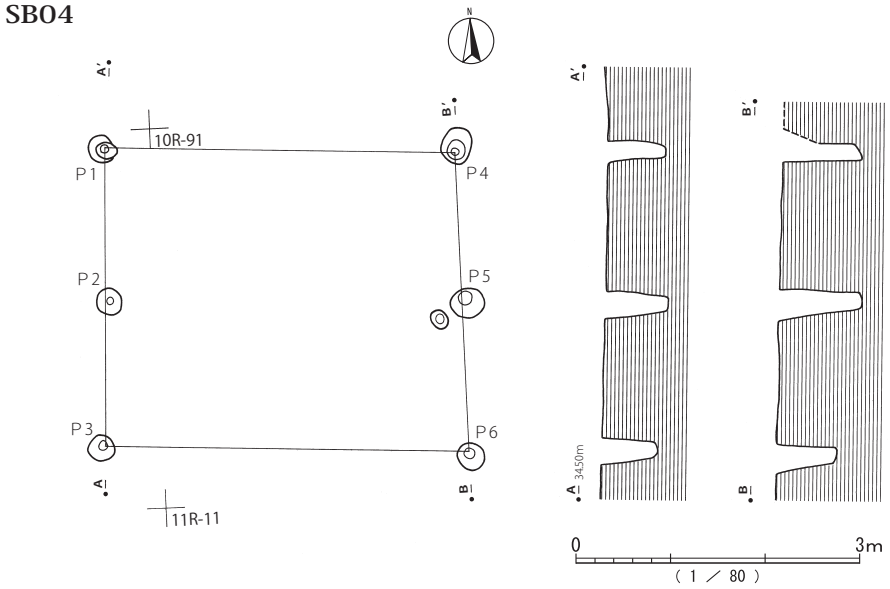


Fig.141　SB04 遺構

棟持柱ないし床束柱をもつ。建物南側には、塀等の可能性がある柱列を備える。本遺構にともなう遺物は出土していない。

SB03（Fig.140、PL.31・39）

掘立柱建物SB03は、B地点9O−85区他に所在する。梁行4間、桁行6間、南北7.57m、東西13.30mの東西棟建物であるが、南北面は広縁となる可能性がある。棟方位はN−85.0°−Wである。柱間寸法は、梁行1.58〜2.35m、桁行1.90〜2.45mを測る。床束柱を備える総柱建物であるが、西側は土間となる。

東側に隣接するSB02と柱筋をそろえ、一連の建物群を構成する。また、SD12以東の溝も、ほぼ走行を一致させており、関連する遺構を含む可能性がある。また、南側のPit群についても、付属する小柴垣等を想定することができる。

本遺構にともなう遺物は出土していない。1点17世紀代の堺系擂鉢が出土しているが（Tab.6）、出土位置の記録がない。調査段階では、遺構範囲を南側のPit群を含めており、本遺構にともなう確証はない。

SB04（Fig.141、PL.31）

掘立柱建物SB04は、B地点11R−02区他に所在する。新期テフラ層を確認面として検出した。東西棟とすると、梁行2間、桁行1間、南北3.15m、東西3.70mの側柱建物である。棟方位はN−88.0°−Wである。本遺構にともなう遺物は出土していない。

第3節　方形周溝墓

方形周溝墓は、弥生時代中期後半の2基を検出した。本遺跡は、環濠集落の可能性があり、検出された方形周溝墓は、環濠中央部と環濠外隣接地に位置する。

SS01（Fig.142〜146、PL.5・8・16・17・31・32・66・67・68・78・79・96・97・101・104）

方形周溝墓SS01は、A地点7I−42区他に所在する。埋葬施設と西溝が検出されておらず、方形周

溝墓としてはなお不確実である。推定環濠（SD01・02）内のほぼ中央に位置し、SS01推定中心地点から推定東濠（SD01）まで約102m、推定西濠（SD02）まで約63mを測る。

谷部東緩斜面部に立地し、東側周溝部は、黄褐色ソフトローム層を確認面として黄白色粘土層まで掘り込んでいる。遺構は、東溝が調査区と直交し、その南端部で西側に折れ、南溝に接続する。北東隅部は調査区外となり、北溝は西端部のみを検出した。西溝については、谷部斜面上部にあたることから、本来存在していたのであれば、他の溝に対して掘り込みが極端に浅かったことになる。常識的には、当初から存在しなかったと考えるべきであろう。西溝位置にあるSD05は、SS01東溝とほぼ並行するものの、SI15より新しく、底面付近に道路状の硬化面をもつ。

他遺構との重複は、北溝がSI14、SX01、東溝がSI17～19、SD06・08、南溝がSD20と関係する。方台部内にはSI15・16が立地する。これらのうち、SI14がSS01より古い可能性があるものの、他はすべてSS01より新しい。SI14との関係も、SI14の項で述べたとおり確実ではない。

検出範囲が限られているため、平面形態等詳細は明確ではない。現状で連続する南東隅部は、SI20との重複の影響があり、本来は開口していた可能性もあると思われる。規模は、南北軸で方台部（周溝内側下端）16.3m、周溝内径15.7m、周溝を含む外径で18.8m程度を測る。方位は、東溝を基準としてN－2.0°－Eをしめす。周溝断面はおおむね皿状を呈し、底面標高は、北溝が33.60m、東溝北側が33.62m、東溝南側が33.58m、南溝が33.54mであり、ほぼ同レベルで推移する。ただし、東溝中央と南東隅部は約0.2m程度浅くなる。埋葬施設は、周溝部を含め検出されていない。

土器は、東溝北側を中心として多量に出土している。ただし、破片個体のみであり、確実にSS01にともなうと考えられるものは存在しない。出土層位も中層以上が主体であり、基本的には投棄によると推察する。時期的には宮ノ台式後半期全般におよぶ。ただし、帯縄文は単斜縄文を主体としており、羽状縄文は認められない。結節文についても18など上層部に散在するような状況がみられる。

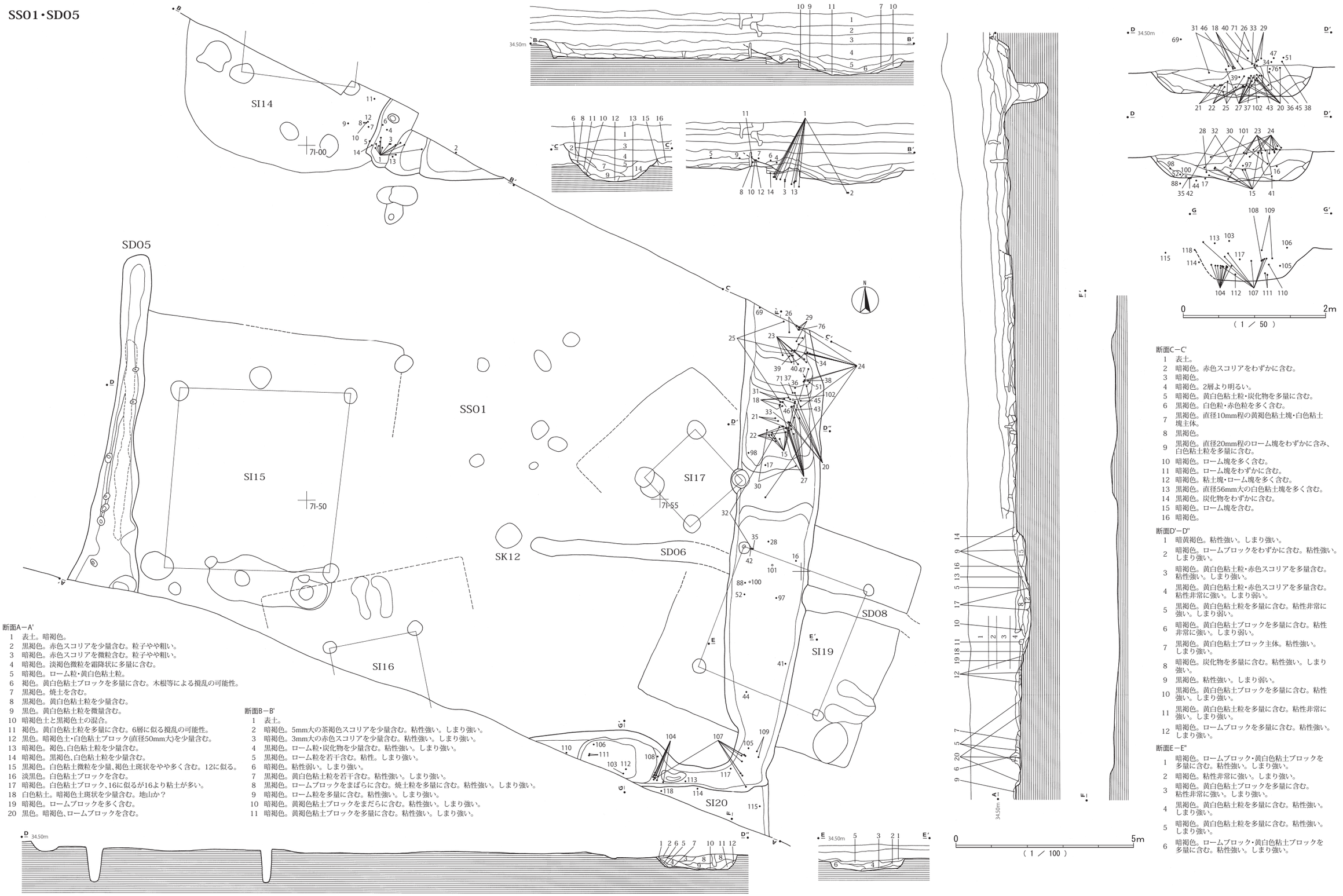
土器以外では、99が土器片利用の円盤、100が敲石、101が磨敲石、102が磨石である。

本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期南岩崎1b期と推定する。

SS02（Fig.147・148、PL.4・5・6・32・33・34・68・79・97・101・105）

方形周溝墓SS02は、B地点9N－35区他に所在する。環濠東濠（SD01）の濠外に隣接する。古墳SM01墳丘内にあり、東溝はSM01周溝によって破壊されている。西溝は、北側でSI69と重複するが、遺構検出過程では新旧関係を明らかにすることはできなかった。北溝は調査区外となり、今回の調査

SS01・SD05



断面A－A'
1 表土。暗褐色。
2 黒褐色。赤色スコリアを少量含む。粒子やや粗い。
3 暗褐色。赤色スコリアを微粒含む。粒子やや粗い。
4 暗褐色。淡褐色微粒を霜降状に多量に含む。
5 暗褐色。ローム粒・黄白色粘土粒。
6 褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。木根等による撹乱の可能性。
7 黒褐色。焼土を含む。
8 黒褐色。黄白色粘土粒を少量含む。
9 黒色。黄白色粘土粒を微量含む。
10 暗褐色土と黒褐色土の混合。
11 褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。6層に似る撹乱の可能性。
12 黒色。暗褐色土・白色粘土ブロック(直径50mm大)を少量含む。
13 暗褐色。褐色、白色粘土粒を少量含む。
14 暗褐色。黒褐色、白色粘土粒を少量含む。
15 黒褐色。白色粘土微粒を少量、褐色土斑状をやや多く含む。12に似る。
16 淡黒色。白色粘土ブロックを含む。
17 暗褐色。白色粘土ブロック、16に似るが16より粘土が多い。
18 白色粘土。暗褐色土斑状を少量含む。地山か？
19 暗褐色。ロームブロックを多く含む。
20 黒色。暗褐色、ロームブロックを含む。

断面B－B'
1 表土。
2 暗褐色。5mm大の茶褐色スコリアを少量含む。粘性強い。しまり強い。
3 暗褐色。3mm大の赤色スコリアを少量含む。粘性強い。しまり強い。
4 黒褐色。ローム粒・炭化物を少量含む。粘性強い。しまり強い。
5 黒褐色。ローム粒を若干含む。粘性。しまり強い。
6 暗褐色。粘性弱い。しまり強い。
7 黒褐色。黄白色粘土粒を若干含む。粘性強い。しまり強い。
8 黒褐色。ロームブロックをまばらに含む。焼土粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
9 暗褐色。ローム粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
10 暗褐色。黄褐色粘土ブロックをまだらに含む。粘性強い。しまり強い。
11 暗褐色。黄褐色粘土ブロックを多量に含む。粘性強い。しまり強い。

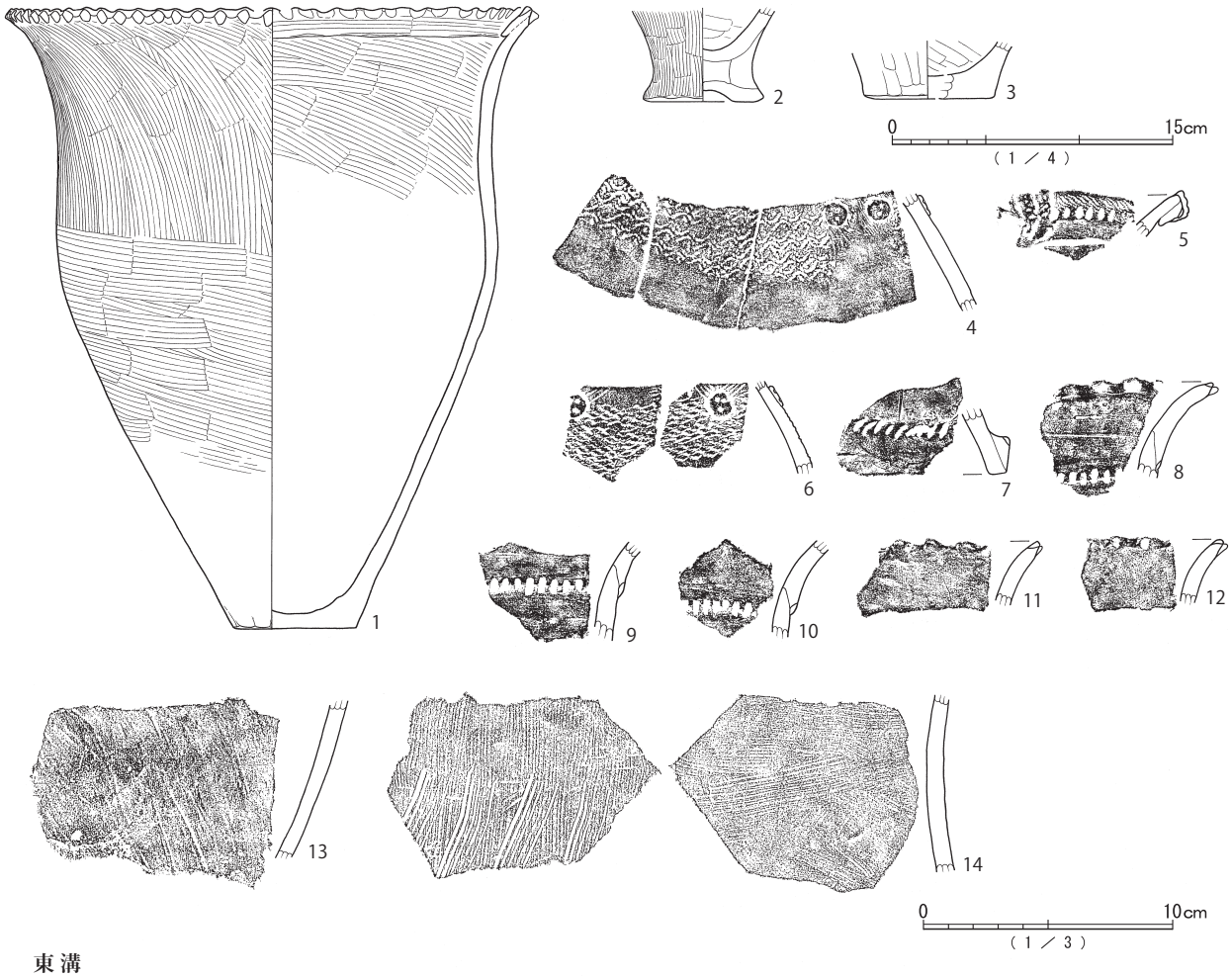
断面C－C'
1 表土。
2 暗褐色。赤色スコリアをわずかに含む。
3 暗褐色。
4 暗褐色。2層より明るい。
5 暗褐色。黄白色粘土粒・炭化物を多量に含む。
6 黒褐色。白色粒・赤色粒を多く含む。
7 黒褐色。直径10mm程の黄褐色粘土塊・白色粘土塊主体。
8 黒褐色。
9 黒褐色。直径20mm程のローム塊をわずかに含み、白色粘土粒を多量に含む。
10 暗褐色。ローム塊を多く含む。
11 暗褐色。ローム塊をわずかに含む。
12 暗褐色。粘土塊・ローム塊を多く含む。
13 黒褐色。直径56mm大の白色粘土塊を多く含む。
14 黒褐色。炭化物をわずかに含む。
15 暗褐色。ローム塊を含む。
16 暗褐色。

断面D'－D"
1 暗黄褐色。粘性強い。しまり強い。
2 暗褐色。ロームブロックをわずかに含む。粘性強い。しまり強い。
3 暗褐色。黄白色粘土粒・赤色スコリアを多量含む。粘性強い。しまり強い。
4 黒褐色。黄白色粘土粒・赤色スコリアを多量含む。粘性非常に強い。しまり弱い。
5 黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。粘性非常に強い。しまり弱い。
6 暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。粘性非常に強い。しまり弱い。
7 黒褐色。黄白色粘土ブロック主体。粘性強い。しまり強い。
8 暗褐色。炭化物を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
9 黒褐色。粘性強い。しまり弱い。
10 黒褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。粘性強い。しまり強い。
11 黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。粘性非常に強い。しまり強い。
12 暗褐色。ロームブロックを多量に含む。粘性強い。しまり強い。

断面E－E"
1 暗褐色。ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。粘性強い。しまり強い。
2 暗褐色。粘性非常に強い。しまり強い。
3 暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。粘性非常に強い。しまり強い。
4 黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
5 暗褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。粘性強い。しまり強い。
6 暗褐色。ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。粘性強い。しまり強い。

Fig.142　SS01(1) 遺構、SD05(1) 遺構

SS01
北溝



東溝

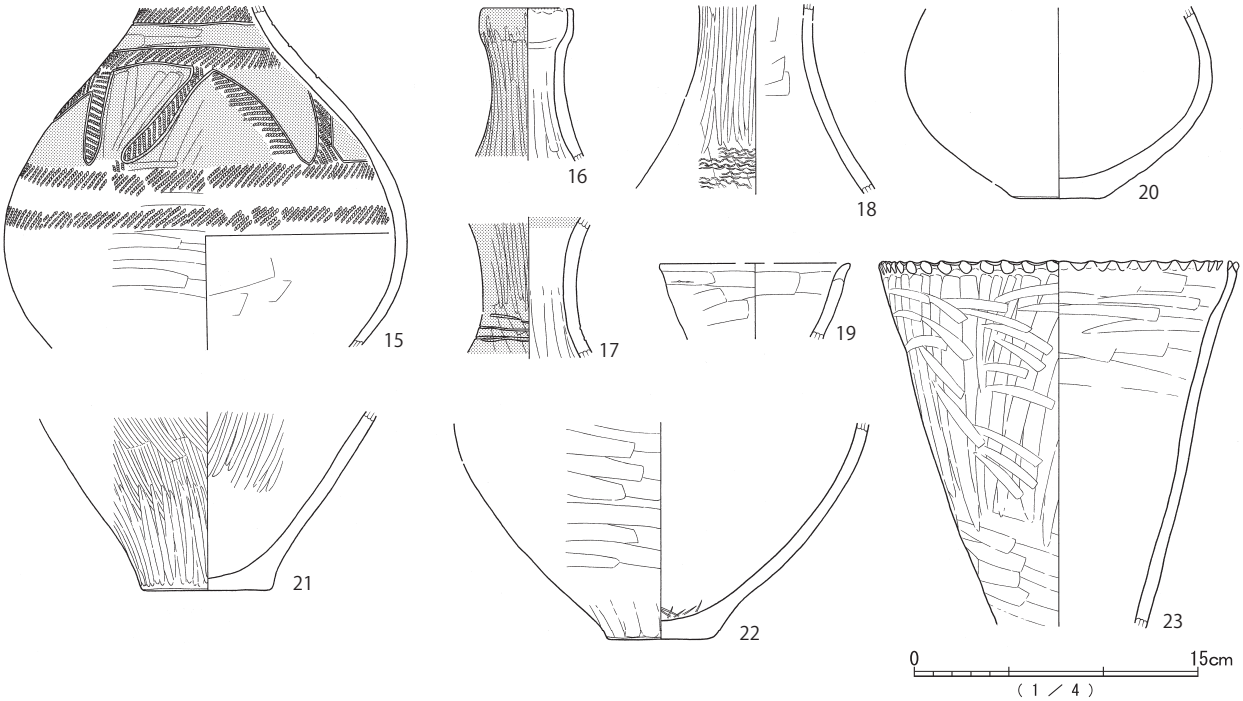


Fig.143　SS01(2) 遺物

SSO1
東溝

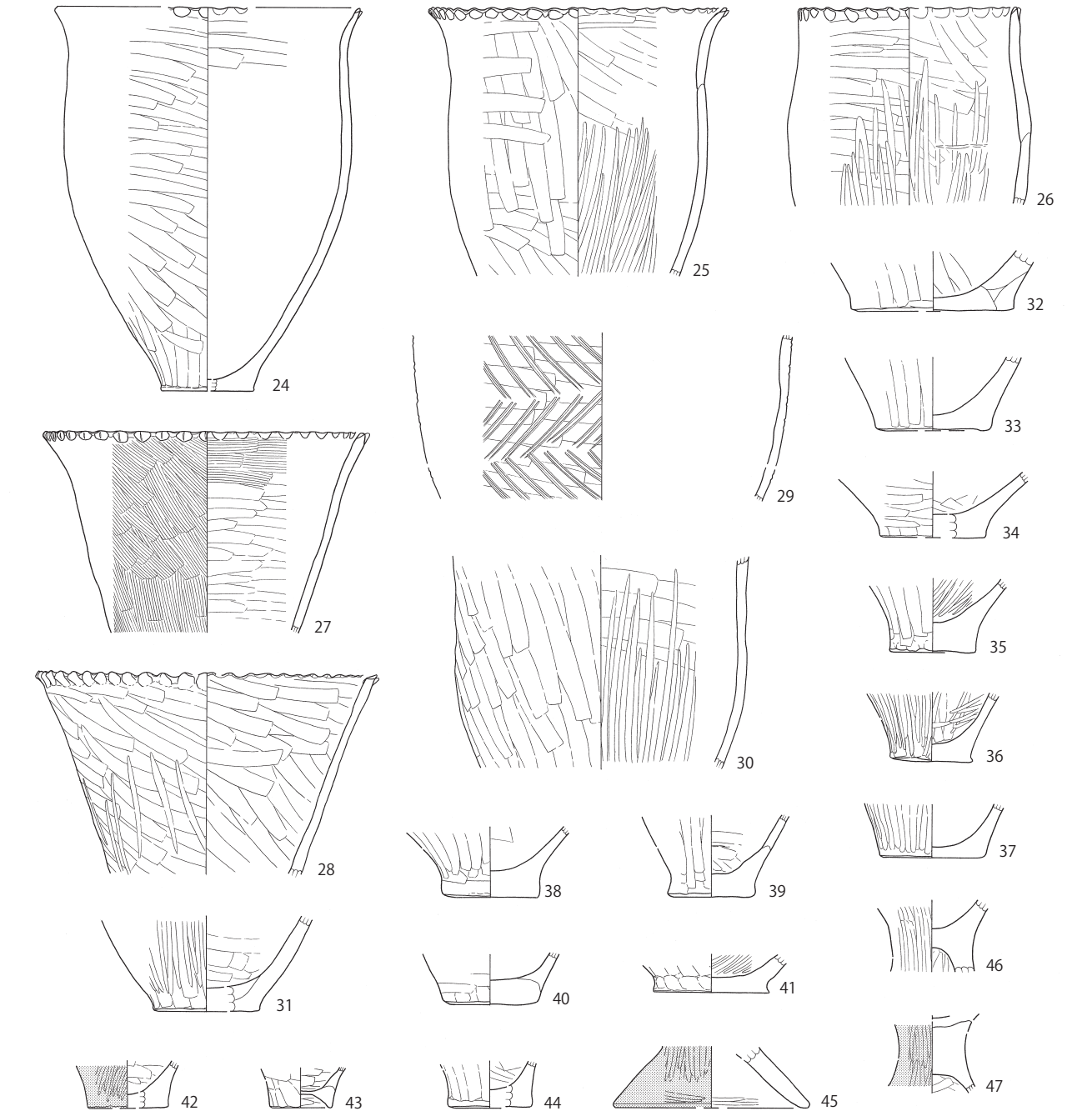


Fig.144　SSO1(3) 遺物

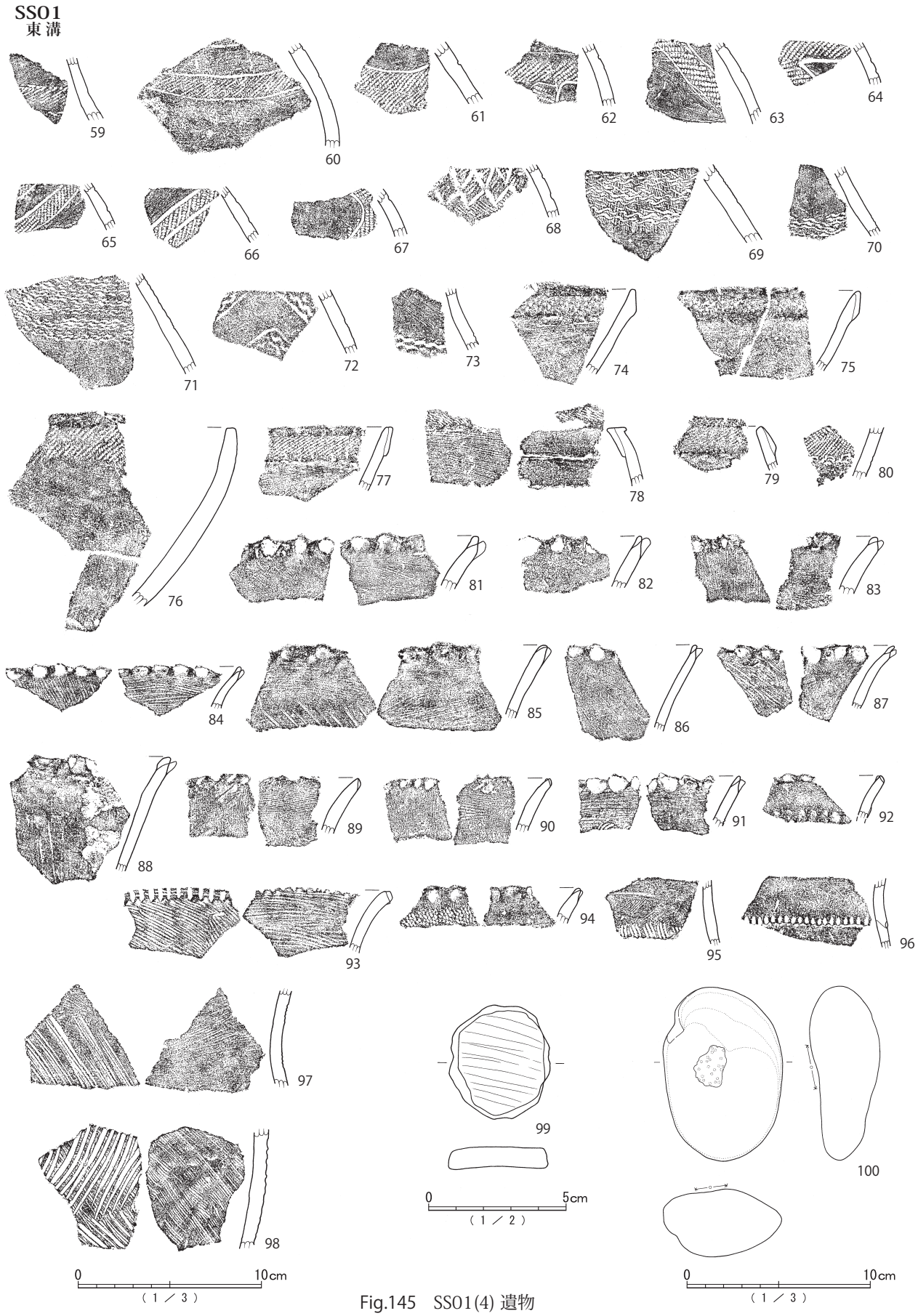
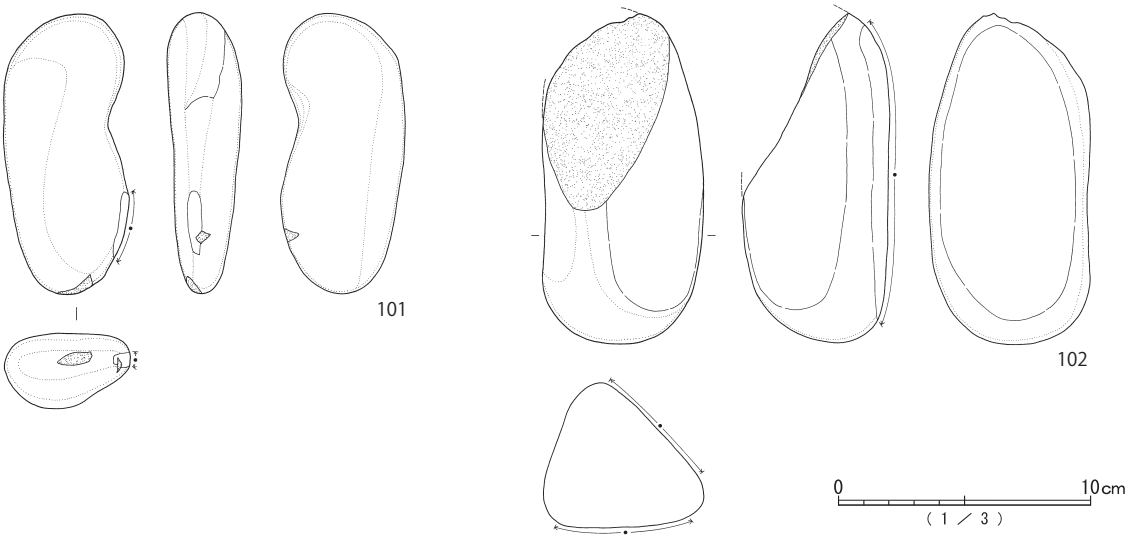


Fig.145　SSO1(4) 遺物

SSO1



南溝

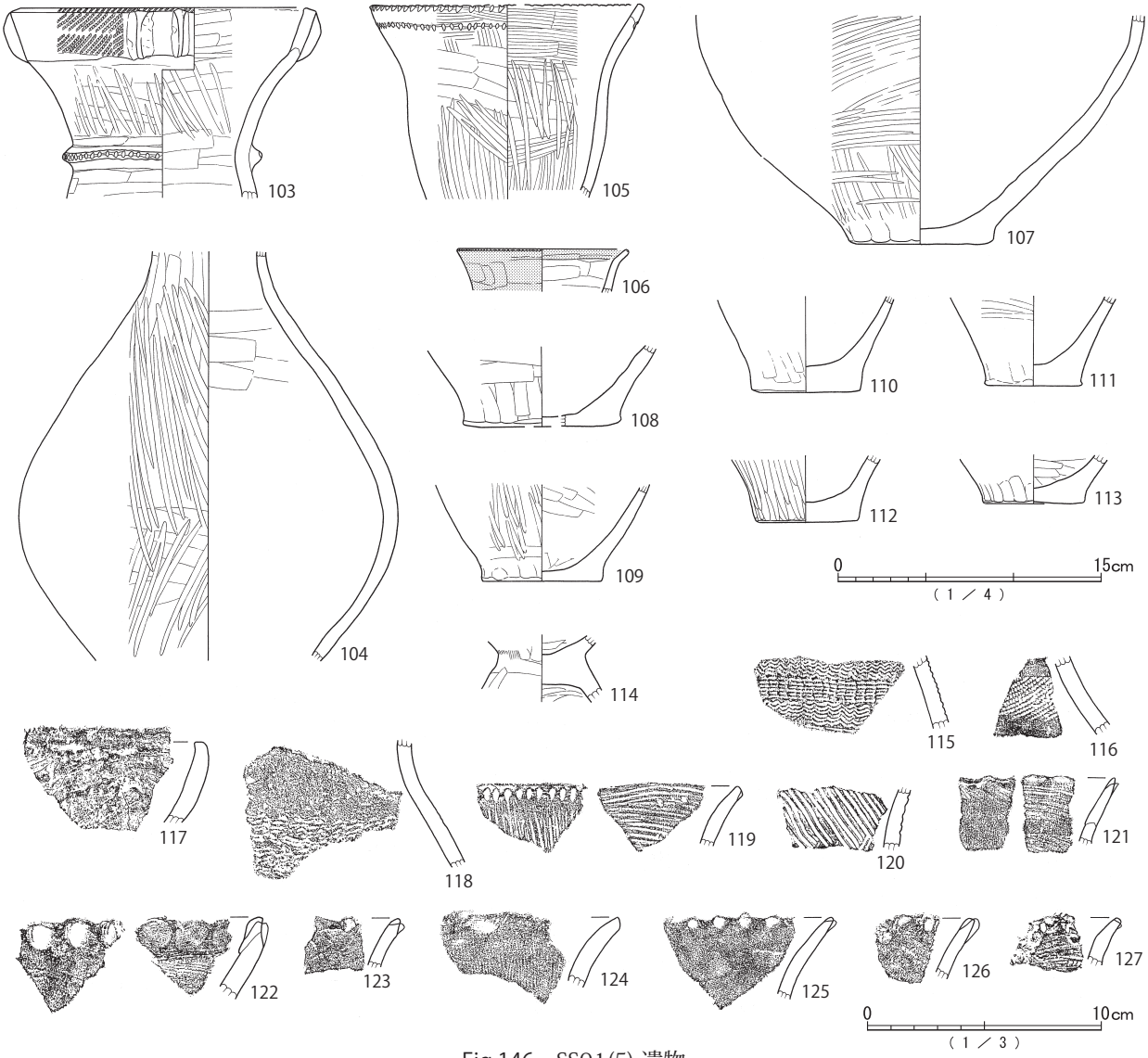
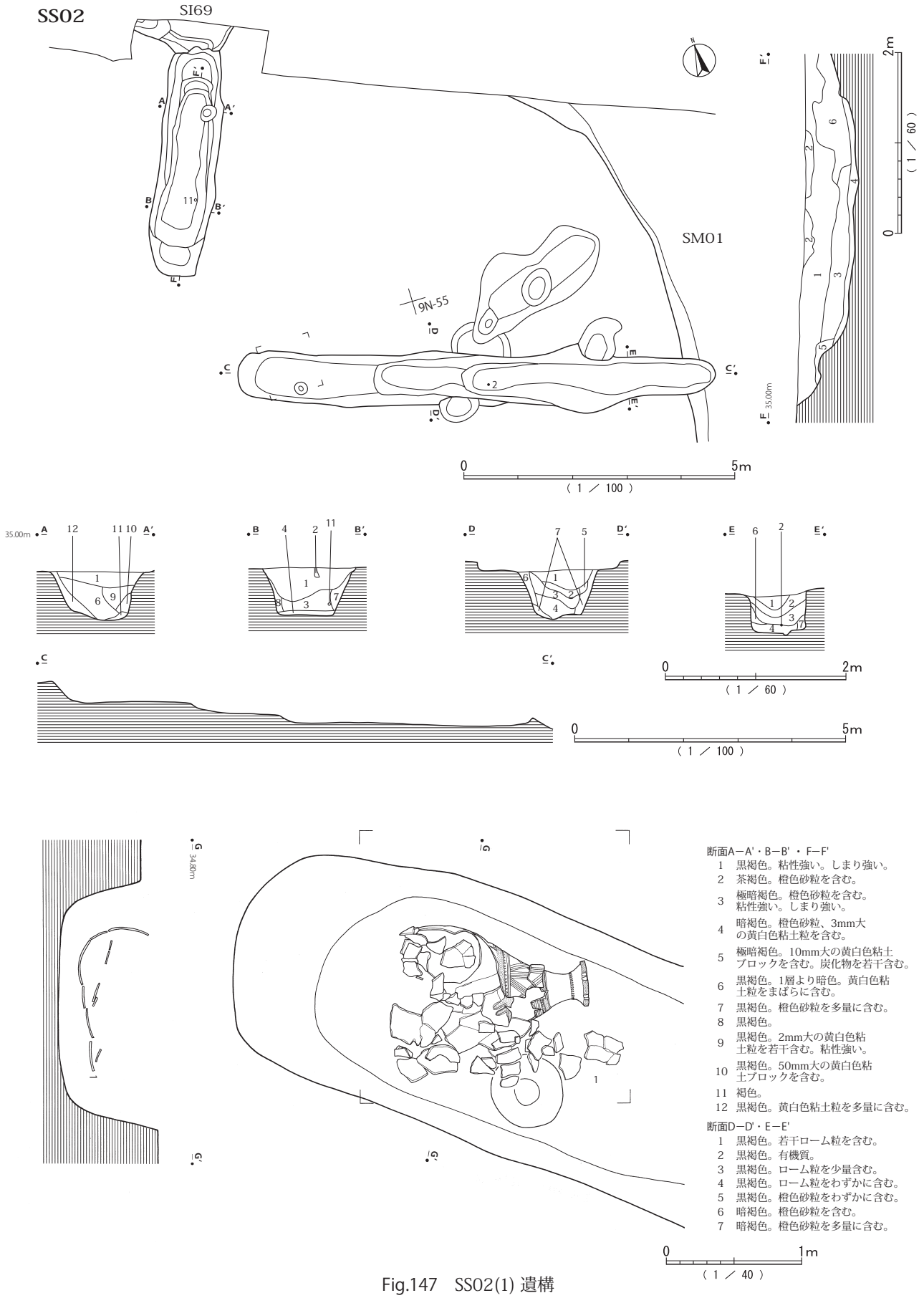


Fig.146　SS01(5) 遺物



断面A－A'・B－B'・F－F'
1 黒褐色。粘性強い。しまり強い。
2 茶褐色。橙色砂粒を含む。
3 極暗褐色。橙色砂粒を含む。粘性強い。しまり強い。
4 暗褐色。橙色砂粒、3mm大の黄白色粘土粒を含む。
5 極暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。炭化物を若干含む。
6 黒褐色。1層より暗色。黄白色粘土粒をまばらに含む。
7 黒褐色。橙色砂粒を多量に含む。
8 黒褐色。
9 黒褐色。2mm大の黄白色粘土粒を若干含む。粘性強い。
10 黒褐色。50mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
11 褐色。
12 黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。

断面D－D'・E－E'
1 黒褐色。若干ローム粒を含む。
2 黒褐色。有機質。
3 黒褐色。ローム粒を少量含む。
4 黒褐色。ローム粒をわずかに含む。
5 黒褐色。橙色砂粒をわずかに含む。
6 暗褐色。橙色砂粒を含む。
7 暗褐色。橙色砂粒を多量に含む。

Fig.147　SS02(1) 遺構

SS02

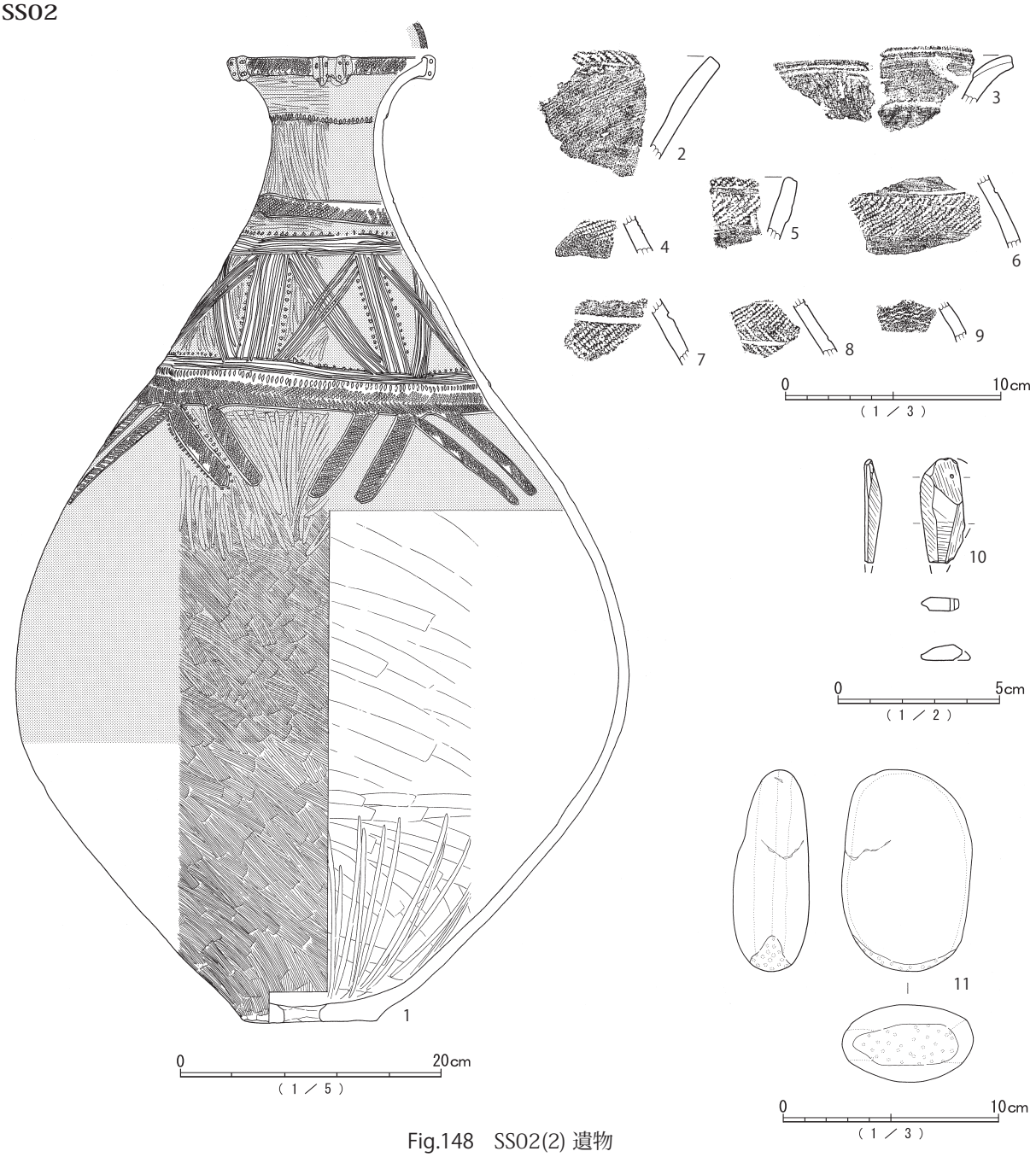


Fig.148　SS02(2) 遺物

では西溝・南溝のみを検出した。ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。

検出範囲は限られているが、西溝・南溝が独立していることから、四隅開口形と推定する。規模は、西溝が長軸長4.21m、幅1.03m、南溝が長軸長8.83m、幅0.88～1.25mを測る。全体規模は、東西軸復元値で、方台部約10.0m、周溝を含む外径で12.5m程度の横長方形と推定する。方位は、西溝を基準としてN－23.0°－E、南溝でN－72.0°－Wとなる。周溝断面はU字状を呈し、確認面からの深さは、西溝で最大0.64mを測る。南溝は、東側に向かって若干傾斜をもち、西側で標高34.31m、東側で33.90m、比高は約0.4m程度ある。

出土土器1は、南溝西端部において横転した状況で出土した。周溝内に置かれていたものが転倒したのか、あるいは周溝外から転落したのかは断定できないが、本遺構にともなうものと考える。なお、

現状で、底部中央付近を欠いているが、意図的なものかどうかは判断できない。土器以外では、10が滑石製剣形石製品、11が磨敲石である。

本方形周溝墓の時期は、弥生時代中期南岩崎1c期と推定する。

第4節　古墳

今回の調査区は、吉野古墳群の一角を占める。調査によって、重複する2基の古墳を検出した。

SM01（Fig.149～151、PL.4・6・9・31・33・34・39・68・90・97・104・105）

古墳SM01は、B地点9N−60区他に所在する。南北端は調査区外となるが、中央部分を調査区が横断する。調査段階では墳丘は認められず、分布地図上も未登録であった。1961年撮影空中写真（写真図版表紙）では、形状は変形しているものの、わずかに遺存しているように見える。A地点谷部の東側肩部にあたるが、地形変化は際立ったものではない。

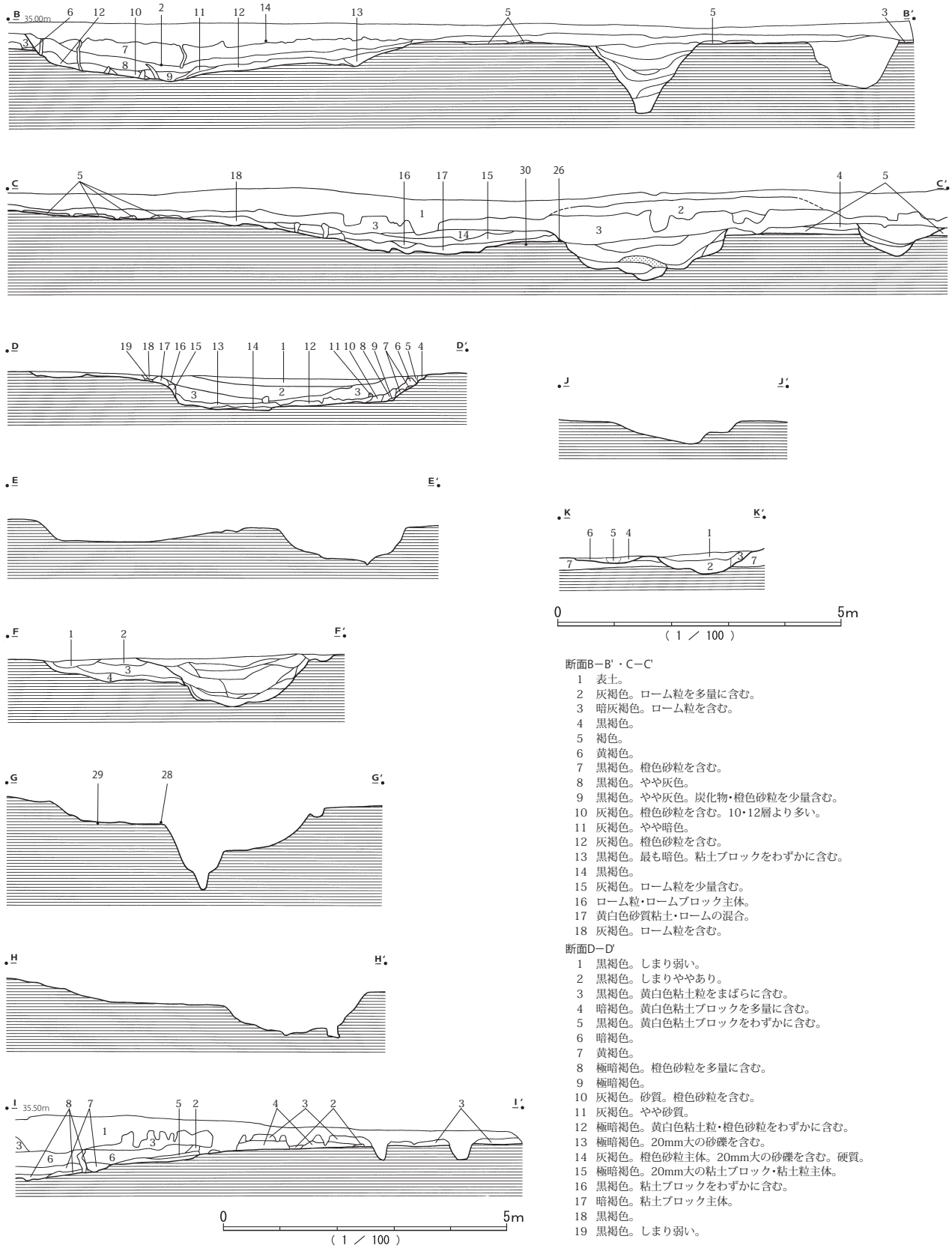
SI59・61・64～68、SS02、SM02、SD01・09、SE02と重複する。遺構検出状況から新旧関係の検証可能な遺構は、SI68、SS02、SD01などに限られるが、所属時期からの判断を含め、SD09、SE02が本遺構より新しく、他は古いと推定する。調査段階の所見としては、先行して小形の円墳SM02があり、その拡張ないし墳丘の再利用によることが想定されている。

墳丘形態は、円墳と考えられ、東西方向検出部での規模は、墳丘部（周溝内側下端）26.2m、周溝確認面内径24.25～25.1m、周溝を含む外径で32.43mを測る。東側周溝外縁部はSD09によって破壊されていることから、外周径は34.0m程度になると考えられる。周溝は黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。断面はおおむね皿状を呈し、確認面での周溝幅は、西側で3.92～5.88m、東側で3.45m以上を測る。底面標高はおおむね安定している。西側周溝が33.83～33.99m、東側周溝は北端部で33.95m、南端部で34.27mを測り、わずかに傾斜する。周溝内の土坑・埋葬施設は検出できなかった。東側周溝中央の土坑は、カクラン坑である。

出土土器総量は21,055gを測るが、いずれも小破片であり、本遺構に確実にともなうものはない。ただし、淡緑色の変質流紋岩製石釧（32）、TG232型式に比定できる鋸歯文を描く須恵器高杯形器台（21・26）など、注目される遺物を含んでいる。

出土状況は、西溝南側にまとまりがあるものの全体に散在している。器台26は、波状文に鋸歯文を2段重ねている。小破片のため径は不確実であるが、立ち上がりはおおむね図の通りであり、文様帯4段の下部3段にあたると思われる。鋸歯文はヘラ描きであり、鋭利で深い。焼きはきわめて硬質であるが、断面・内面色調は赤褐色～紫灰色であり、燻し銀状の瓦質を呈している。また、内面には、浅黄色～灰オリーブ色の自然釉がほぼ全体に付着している。凸帯は貼付け凸帯であり、文様施文後に強いナデが加えられ、上下が凹む。21は、やや径が小さく、有蓋脚付壺脚部などの可能性もあるが、一応器台脚部と推定しておく。凸帯間の幅の狭い文様帯に振幅のない波状文1段を施文する。杯部側にも波状文を配している。短冊形の透かしは4孔を単位とすると思われる。焼成は26に対してややあまいものの良好である。断面はにぶい褐色を呈している。21・26は、焼成などから別個体と考えておく。出土地点も東西溝に分かれている。石釧・須恵器器台の組み合わせは、副葬品と考えることが自然ではあるが、重複する竪穴住居跡との関係から、本古墳が和泉式後半期（5b期）より以前に遡ることは考えにくい。出土遺物のなかでは、13～20の短脚化を指向する高杯形土器や28の須恵器杯

SM01・SM02・SD09・SD10



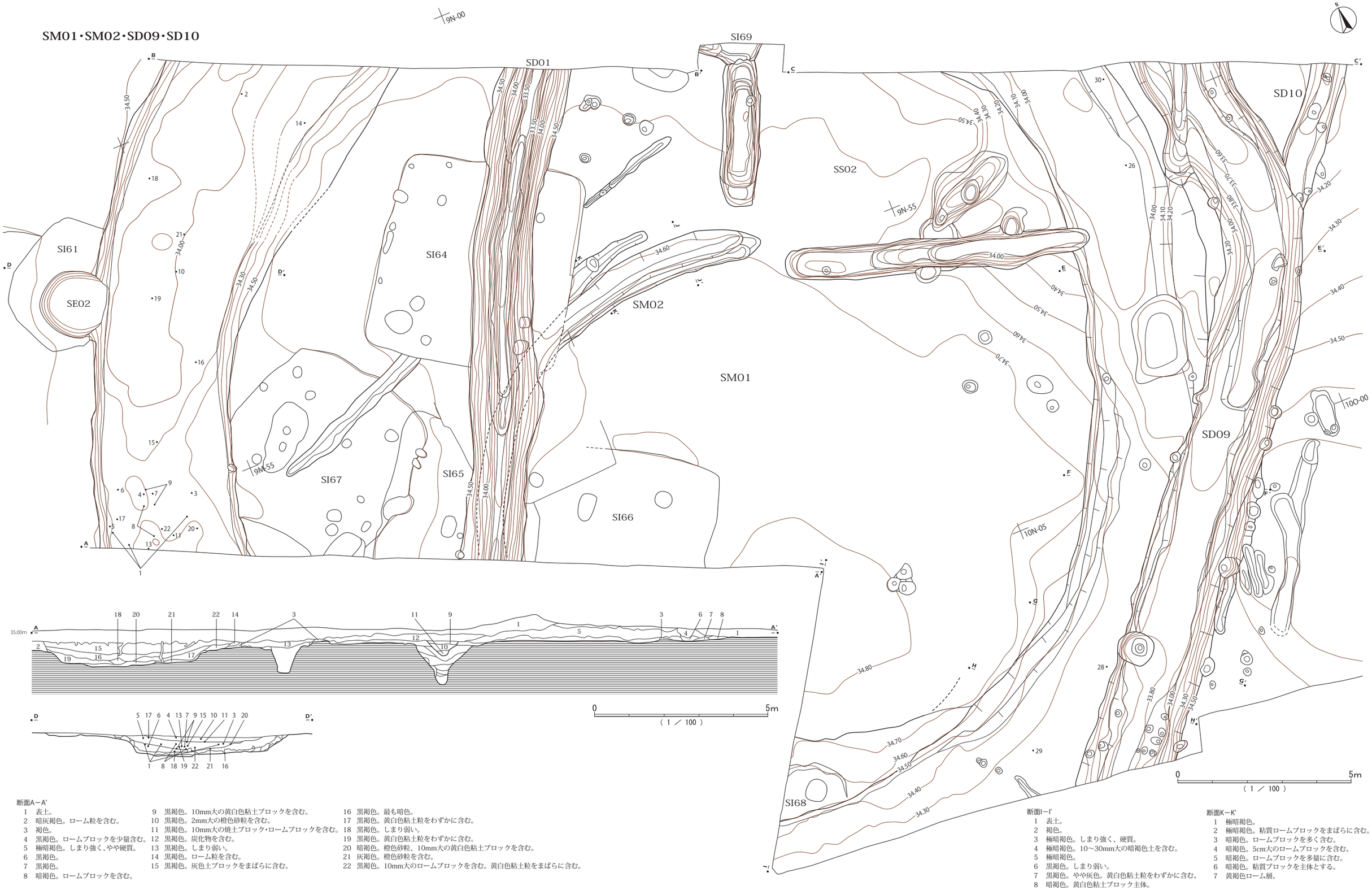
断面B－B'・C－C'

1　表土。
2　灰褐色。ローム粒を多量に含む。
3　暗灰褐色。ローム粒を含む。
4　黒褐色。
5　褐色。
6　黄褐色。
7　黒褐色。橙色砂粒を含む。
8　黒褐色。やや灰色。
9　黒褐色。やや灰色。炭化物・橙色砂粒を少量含む。
10　灰褐色。橙色砂粒を含む。10・12層より多い。
11　灰褐色。やや暗色。
12　灰褐色。橙色砂粒を含む。
13　黒褐色。最も暗色。粘土ブロックをわずかに含む。
14　黒褐色。
15　灰褐色。ローム粒を少量含む。
16　ローム粒・ロームブロック主体。
17　黄白色砂質粘土・ロームの混合。
18　灰褐色。ローム粒を含む。

断面D－D'

1　黒褐色。しまり弱い。
2　黒褐色。しまりややあり。
3　黒褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。
4　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。
5　黒褐色。黄白色粘土ブロックをわずかに含む。
6　暗褐色。
7　黄褐色。
8　極暗褐色。橙色砂粒を多量に含む。
9　極暗褐色。
10　灰褐色。砂質。橙色砂粒を含む。
11　灰褐色。やや砂質。
12　極暗褐色。黄白色粘土粒・橙色砂粒をわずかに含む。
13　極暗褐色。20mm大の砂礫を含む。
14　灰褐色。橙色砂粒主体。20mm大の砂礫を含む。硬質。
15　極暗褐色。20mm大の粘土ブロック・粘土粒主体。
16　黒褐色。粘土ブロックをわずかに含む。
17　暗褐色。粘土ブロック主体。
18　黒褐色。
19　黒褐色。しまり弱い。

Fig.149　SM01(1) 遺構、SM02(1) 遺構、SD09(1) 遺構、SD10(1) 遺構



断面A－A'
1 表土。
2 暗灰褐色。ローム粒を含む。
3 褐色。
4 黒褐色。ロームブロックを少量含む。
5 極暗褐色。しまり強く、やや硬質。
6 黒褐色。
7 黒褐色。
8 暗褐色。ロームブロックを含む。
9 黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
10 黒褐色。2mm大の橙色砂粒を含む。
11 黒褐色。10mm大の焼土ブロック・ロームブロックを含む。
12 黒褐色。炭化物を含む。
13 黒褐色。しまり弱い。
14 黒褐色。ローム粒を含む。
15 黒褐色。灰色土ブロックをまばらに含む。
16 黒褐色。最も暗色。
17 黒褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。
18 黒褐色。しまり弱い。
19 黒褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。
20 暗褐色。橙色砂粒、10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
21 灰褐色。橙色砂粒を含む。
22 黒褐色。10mm大のロームブロックを含む。黄白色粘土粒をまばらに含む。

断面I－I'
1 表土。
2 褐色。
3 極暗褐色。しまり強く、硬質。
4 極暗褐色。10～30mm大の暗褐色土を含む。
5 極暗褐色。
6 黒褐色。しまり弱い。
7 黒褐色。やや灰色。黄白色粘土粒をわずかに含む。
8 暗褐色。黄白色粘土ブロック主体。

断面K－K'
1 極暗褐色。
2 極暗褐色。粘質ロームブロックをまばらに含む。
3 暗褐色。ロームブロックを多く含む。
4 暗褐色。5cm大のロームブロックを含む。
5 暗褐色。ロームブロックを多量に含む。
6 暗褐色。粘質ブロックを主体とする。
7 黄褐色ローム層。

Fig.150 SM01(2) 遺構、SM02(2) 遺構、SD09(2)遺構、SD10(2)遺構

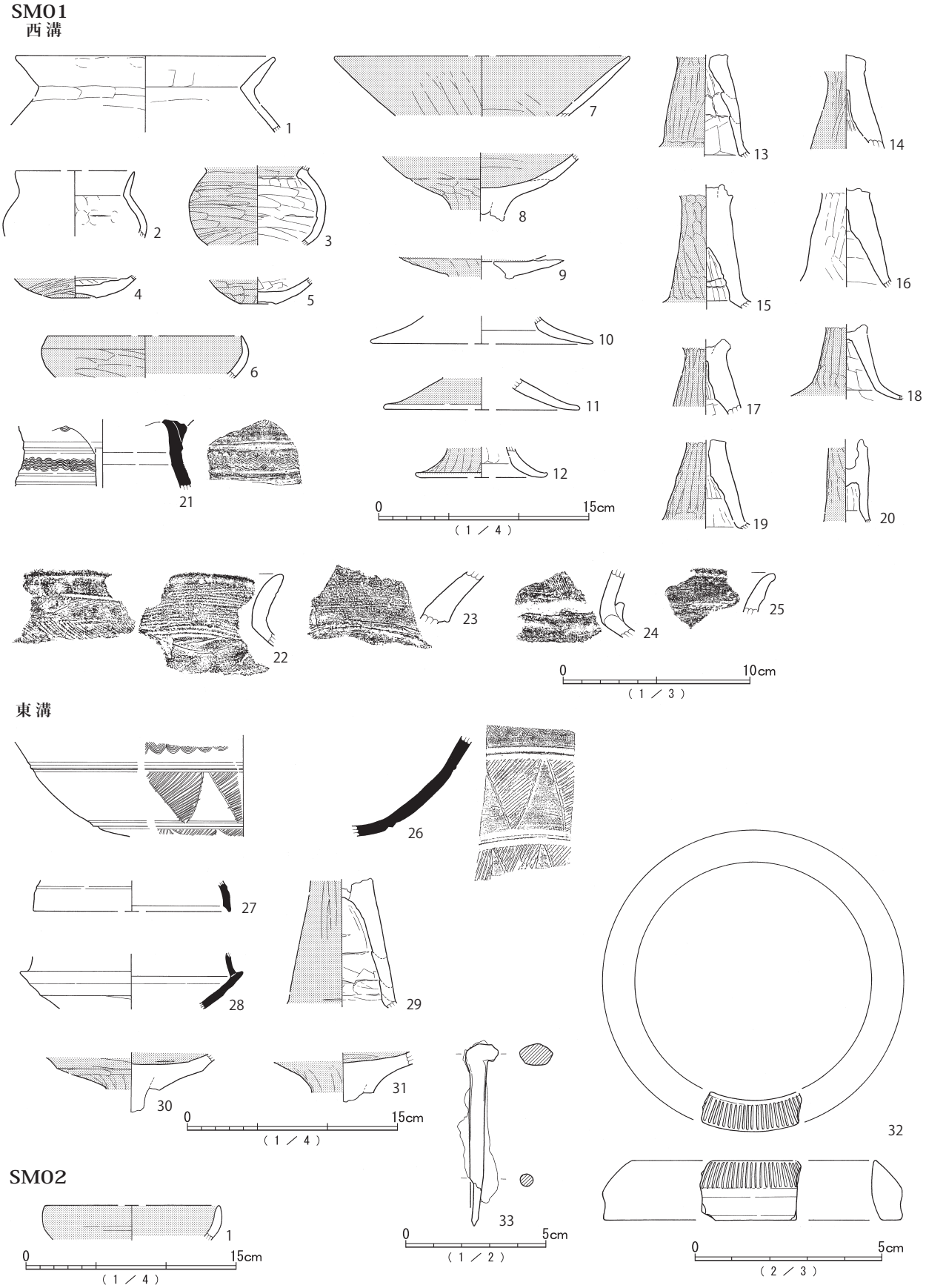


Fig.151　SM01(3) 遺物、SM02(3) 遺物

身があり、ここでは東周溝底面から出土した28を本古墳の時期にあて、古墳時代後期前半南岩崎6b期を下限として考えておきたい。

他に、小破片であるが、土師器複合口縁壺形土器(23)、凸帯をもつ壺形土器頸部(24)、段部が明らかに平坦化したS字状口縁甕形土器(25)が出土している。とくに24は、古墳からの出土例が多く、石釧、須恵器器台と関連性をもつ可能性がある。29の太形の高杯形土器脚部を含め、これらの時期は、南岩崎5a期に対応させておきたい。

SM02（Fig.149～151、PL.33・34）

古墳SM02は、B地点9N−41区他に所在する。確実には、弧状に検出された溝状遺構のみであるが、SD01土層断面でその延長部を確認している。また、SI68の位置するSM01墳丘部南側斜面部もSM02に接続する可能性があることから、調査段階の所見を踏まえ、SM01に先行する古墳としてとらえておく。古墳の中心点はおおむね9N−82区になる。

SI64・65・66・68、SM01、SD01と重複し、遺構検出状況から、SM01より古く、SI65・66・68、SD01より新しい。SI64は、SI65より古いと考えられることから、本遺構が新しい。

周溝は、黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層まで掘り込んでいる。遺存部での周溝最大幅は1.17m、掘り込みは段状となり、確認面からの深さは0.14～0.19mを測る。その外側にも弧状の溝が検出されているが、関連性は明らかではない。

現状の知見では円墳と考えられ、北西−南東方向検出部での規模は、墳丘部で約14.3m程度と推定する。埋葬施設は、周溝部を含め検出されなかった。

本古墳の時期は、他遺構との重複関係から、古墳時代中期後半南岩崎5b新期から6a期と考えておきたい。時期的にみて、SM01の石釧、須恵器器台は、本古墳にともなうものとも考えにくい。

第5節　土坑

土坑は、総数14基である。縄文時代の土坑はSK01～06の6基であり、B・C地点下層で検出した。SK01～05は陥穴であり、SK06についてもその可能性がある。SK07～09の3基は、弥生時代中期宮ノ台式期の所産である。土器埋設土坑であり、土器棺と推定する。B地点環濠SD01西側で検出した。SK10～12は古墳時代中期和泉式期の土坑である。SK13・14は、時期性格とも明らかではないが、SK13については、古墳時代終末期以降の地下式土坑墓の可能性がある。

SK01（Fig.152、PL.34）

陥穴SK01は、B地点10Q−55区他に所在する。下層面ローム漸移層を確認面とし、黄白色粘土層を掘り込んでいる。調査区断面際であったが、基本層序に対する掘り込み面は確認できなかった。平面規模長軸長は、現状で1.75m、実際には1.58m程度と推定する。長軸方位はN−61.0°−W、底面長軸長は1.77mを測る。確認面からの深さは1.36m、底面標高は32.57mであった。遺物は出土していない。

SK02（Fig.152、PL.34）

陥穴SK02は、B地点11Q−17区他に所在する。下層面ローム漸移層を確認面とし、黄白色粘土層を掘り込んでいる。平面規模は、長軸長1.88m、幅0.56m、底面での長軸長は1.57mを測る。長軸方位はN−40.0°−E、確認面からの深さは1.05m、底面標高は32.79mであった。遺物は出土していない。

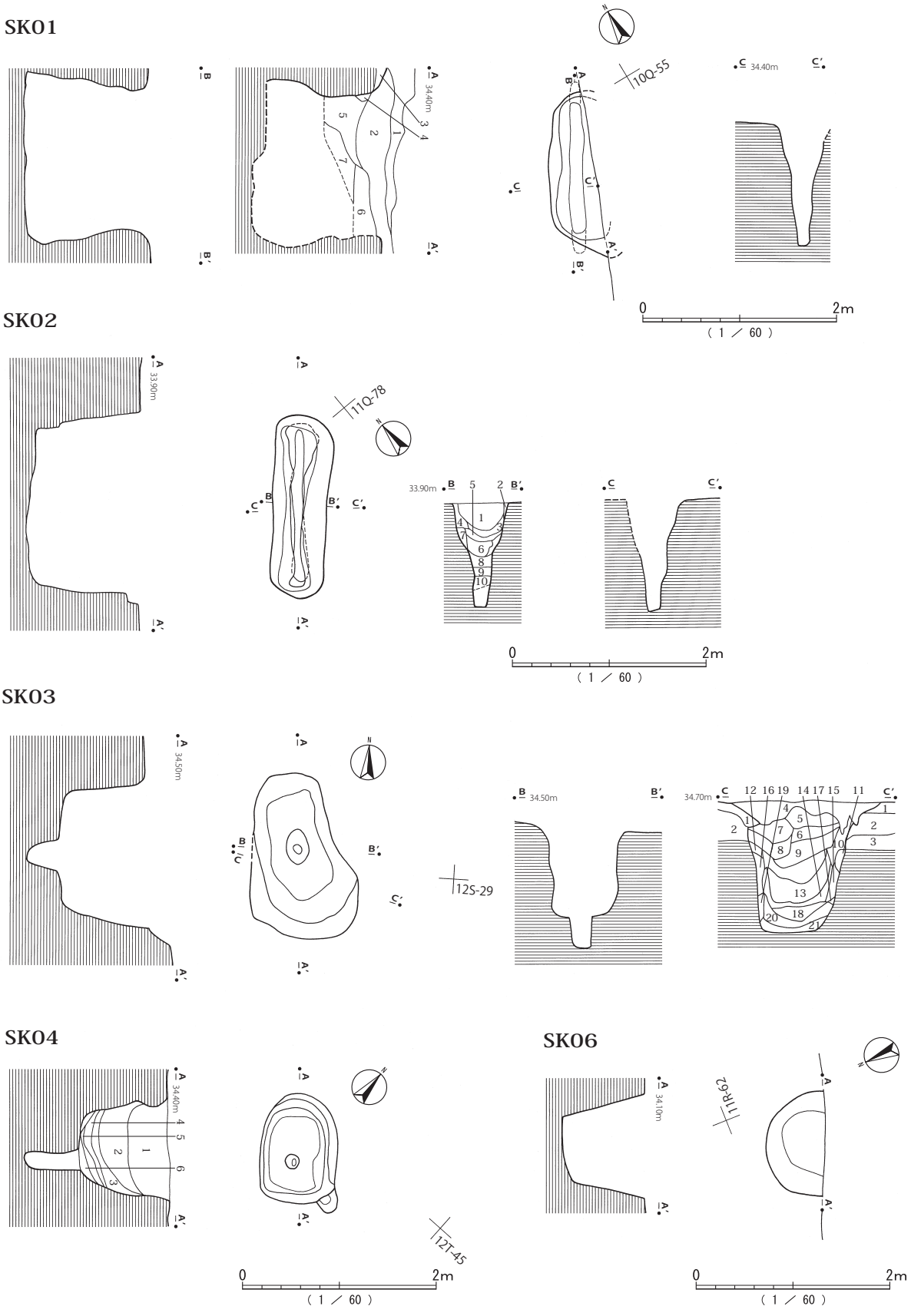
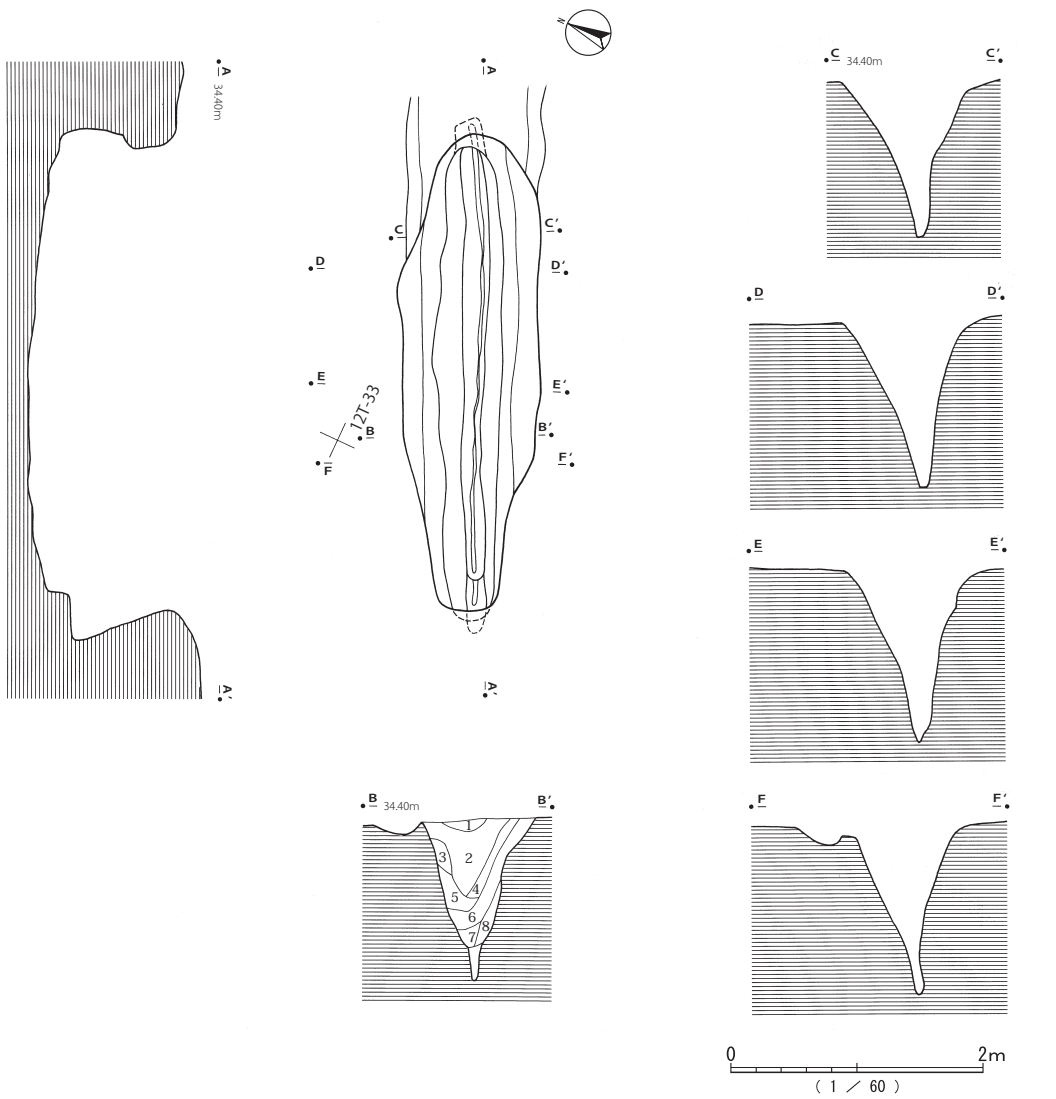


Fig.152　SK01 遺構、SK02 遺構、SK03 遺構、SK04 遺構、SK06 遺構

SK05



SK01
断面A－A'
1　褐色。新期テフラの可能性。
2　黒色。ローム粒を若干含む。
3　暗褐色。ローム漸移層。
4　ロームブロックを多量に含む。
5　黒褐色。ローム粒を含む。
6　暗褐色。ロームブロック・ローム粒を多量に含む。
7　暗褐色。黄白色粘土粒を含む。

SK02
断面A－A'
1　黒色。若干のローム粒を含む。
2　暗褐色。ローム粒を含む。
3　黒灰色。
4　黒色。ローム粒・ロームブロックを含む。
5　黒色。
6　不明。
7　黒色。ローム粒を含む。
8　黒色。黄白色粘土粒を含む。
9　黒色。黄白色粘土粒を含む。
10　黒色。黄白色粘土粒を含む。

SK03
断面A－A'
1　褐色。新期テフラの可能性。
2　暗褐色。
3　褐色。ローム漸移層。
4　黒褐色。
5　褐色。新期テフラ主体。
6　褐色。新期テフラ主体。
7　褐色。新期テフラ主体。
8　褐色。ローム粒を多量に含む。
9　暗褐色。ローム粒を多量に含む。
10　暗褐色。
11　黒褐色。ローム粒を多量に含む。
12　暗褐色。崩落土。
13　黒褐色。ローム粒を多量に含む。
14　黒褐色。ローム粒を多量に含む。
15　黒褐色。
16　ローム主体。崩落土か。
17　ローム主体。崩落土か。
18　ローム主体。
19　灰白色粘土主体。崩落土か。
20　黒褐色。
21　黒褐色。灰白色粘土を含む。

SK04
断面A－A'
1　黒色。しまり強い。
2　黒色。
3　黒褐色。ローム粒を含む。
4　黒褐色。
5　暗黄褐色。ローム粒を多量に含む。
6　黒褐色。黄白色粘土を含む。

SK05
断面B－B'
1　黒色。
2　黒褐色。
3　暗褐色。ローム粒を多く含む。
4　暗褐色。ローム粒を多く含む。
5　不明。
6　暗褐色。ロームブロックを含む。
7　黒褐色。灰白色粘土を含む。
8　不明。

Fig.153　SK05 遺構

SK03（Fig.152、PL.34）

陥穴SK03は、C地点12S−18区他に所在する。下層面ローム漸移層を確認面とし、黄白色粘土層下部に達している。調査所見によれば、実際の掘り込み面は新期テフラ層より上部の可能性が高

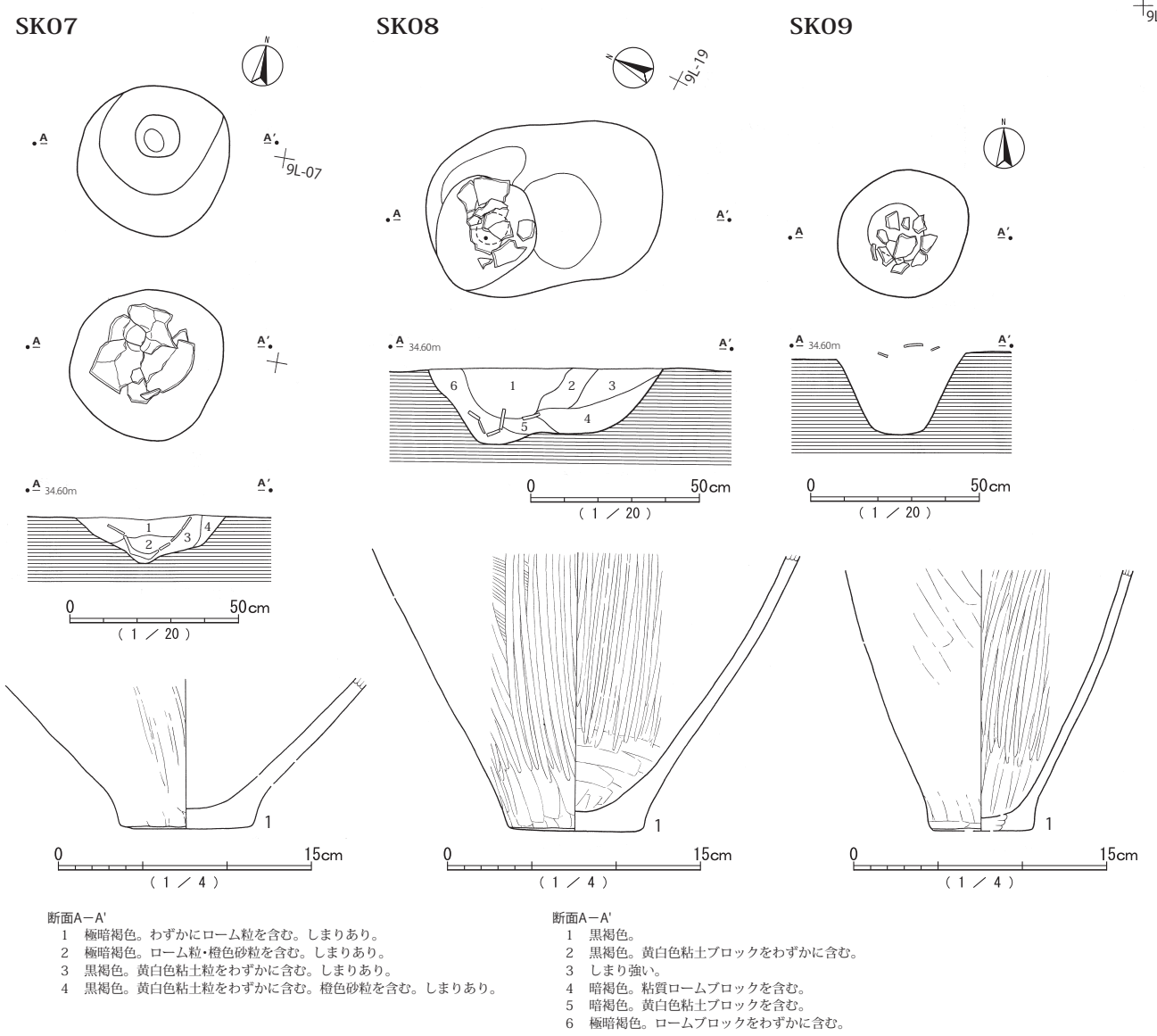


Fig.154　SK07 遺構遺物、SK08 遺構遺物、SK09 遺構遺物

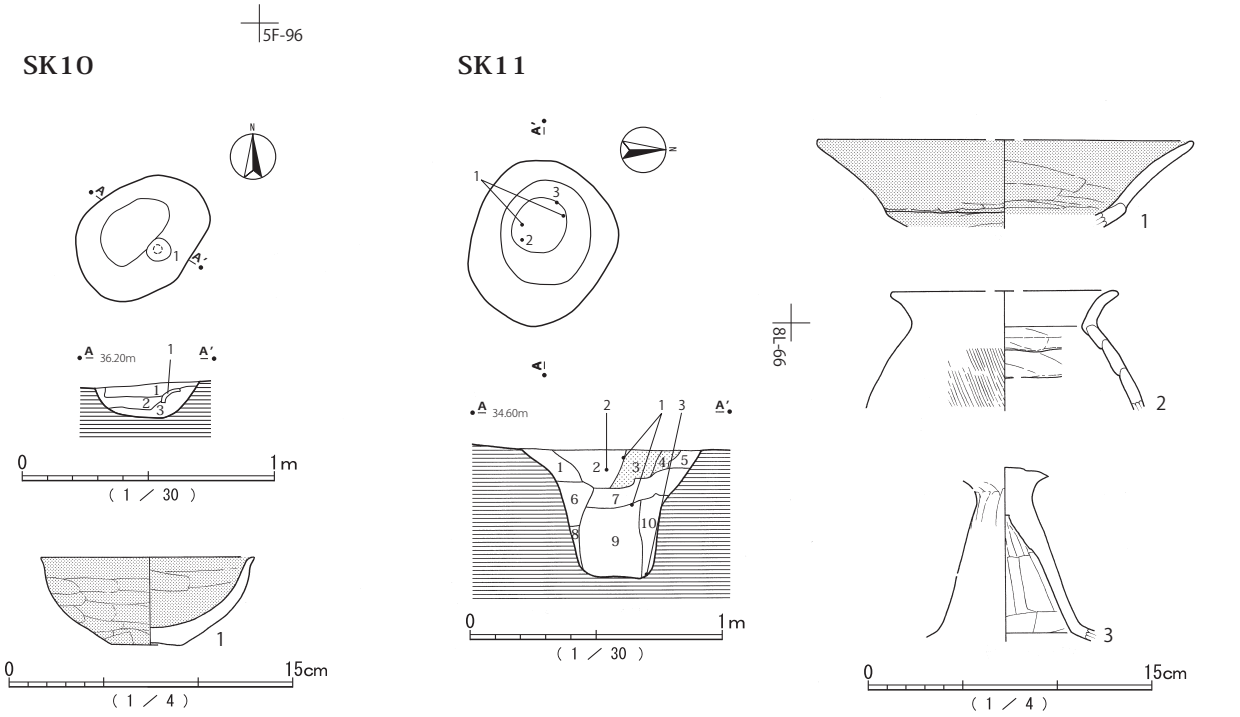
い。平面規模は、長軸長1.77m、幅0.89mを測る。長軸方位はN－18.0°－W、確認面からの深さは1.15m、底面標高は33.30mであった。本遺構は底面にPitをもつ。深さは0.32mを測る。遺物は出土していない。

SK04（Fig.152、PL.35）

陥穴SK04は、C地点12T－44区他に所在する。ローム漸移層を確認面とし、黄白色粘土層下部に達している。平面規模は、長軸長1.13m、幅0.80mを測る。長軸方位はN－38.0°－W、確認面からの深さは0.92m、底面標高は33.37mであった。本遺構は底面にPitをもつ。深さは0.56mを測る。遺物は出土していない。

SK05（Fig.153、PL.35）

陥穴SK05は、C地点12T－33区他に所在する。下層面ローム漸移層を確認面とし、黄白色粘土層を掘り込んでいる。平面規模は、長軸長3.78m、幅1.11m、底面での長軸長は4.06mを測る。長軸方



断面A－A'
1　暗褐色。非常にしまり強い。
2　暗褐色。焼土粒を含む。1層に比べてやや明るい。非常にしまり強い。
3　黄褐色砂質土。非常にしまり強い。

断面A－A'
1　暗茶褐色。しまり強い。
2　黒褐色。しまり強い。
3　暗茶褐色。焼土粒を多量に含む。しまり強い。
4　黒褐色。焼土粒を多量に含む。しまり強い。
5　暗黄褐色。しまり強い。
6　黒褐色。黄褐色粒を含む。しまり強い。
7　暗茶褐色。ロームブロックを含む。しまり強い。
8　黒褐色。黄褐色粒をわずかに含む。しまり強い。
9　暗黄褐色。
10　暗褐色。黄褐色粒を含む。しまり強い。

Fig.155　SK10 遺構遺物、SK11 遺構遺物

位はN－65.0°－E、確認面からの深さは0.82～1.02m、底面標高は33.33mであった。遺物は出土していない。

SK06（Fig.152、PL.35）

SK06は、C地点11R－61区他に所在する。下層面ローム漸移層を確認面とし、黄白色粘土層を掘り込んでいる。南側が調査区外となるが、基本層序に対する掘り込み面は記録がない。陥穴の可能性もあるが、性格は不明。現状範囲では、平面形態はほぼ円形を呈し、径1.08m、深さ0.84mを測る。底面標高は33.09mであった。遺物は出土していない。

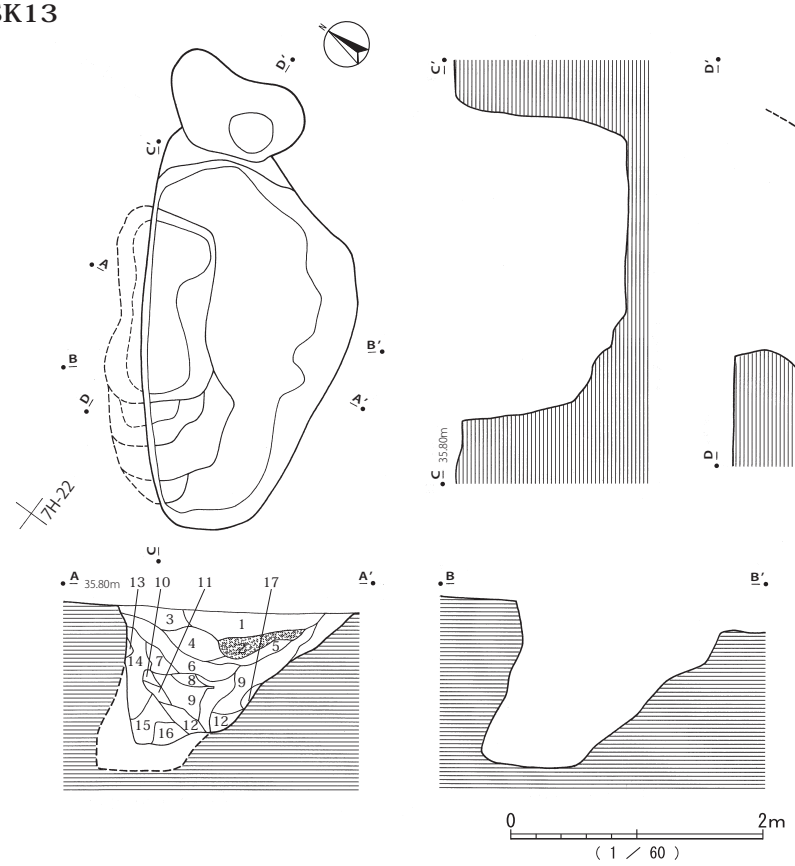
SK07（Fig.154、PL.35・68）

SK07は、B地点9L－06区他に所在する。土器埋設土坑であり、土器棺の可能性がある。黄褐色ソフトローム層を確認面として黄白色粘土層上面に達している。掘形は径0.47mの円形であり、確認面からの深さは0.14mを測る。底面標高は34.37mであった。土器は、出土状況から据え置かれたことが推定できる。宮ノ台式の壺形土器である。南岩崎1期に比定できるが、細別時期は明らかではない。

SK08（Fig.154、PL.35・68）

SK08は、B地点9L－08区他に所在する。土器埋設土坑であり、土器棺の可能性がある。黄褐色ソフトローム層を確認面として黄白色粘土層上面に達している。掘形平面規模は、長軸長0.72m、幅0.49mを測る。長軸方位はN－39.0°－W、確認面からの深さは0.23m、底面標高は34.32mであった。土器は、出土状況から据え置かれたことが推定できる。宮ノ台式の甕形土器である。南岩崎1期に比定できるが、細別時期は明らかではない。

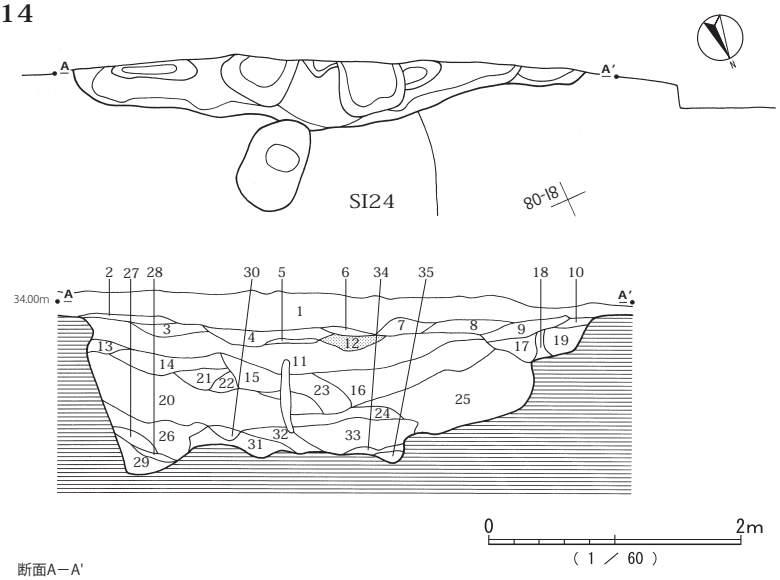
SK13



断面A－A'

1　暗褐色。黄褐色微粒を多量に、焼土微粒を少量含む。
2　暗褐色。1層よりやや暗色。炭化粒を多量に含む。
3　暗褐色。2層に似る。色調的にやや明るい。
4　黒褐色。
5　黒褐色。
6　暗褐色。赤味の強い褐色土を多量に含む。
7　暗褐色。
8　黒褐色。
9　暗褐色。粒子が全体に粗い。
10　暗黄褐色。褐色・暗褐色土を斑状に含む。
11　暗褐色。
12　黒褐色。しまり弱い。
13　褐色。非常にしまり強い。
14　褐色。非常にしまり強い。
15　暗褐色。
16　黒褐色。しまり弱い。
17　黒褐色。

SK14



断面A－A'

1　暗褐色。
2　暗黄褐色。ソフトローム主体。
3　暗褐色。直径30mm程の黄白色粘土ブロックをまばらに含む。
4　暗褐色。黄白色粘土粒を含む。
5　暗褐色。炭化粒をわずかに含む。
6　暗褐色。炭化粒・焼土を若干含む。
7　暗褐色。黄白色粘土粒・黄褐色土ブロックをまばらに含む。
8　黒褐色。
9　黒褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。
10　暗褐色。
11　黒褐色。黄白色粘土ブロックをわずかに、炭化物をまばらに含む。
12　黒褐色。焼土主体。
13　暗褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。
14　暗褐色。黄白色粘土・暗黄褐色粘土ブロック主体。
15　暗褐色。黄褐色砂ブロックをまばらに含む。
16　暗褐色。直径10～30mm大の白色粘土・黄褐色粘土・赤褐色土ブロックを多量に含む。
17　暗褐色。
18　黄褐色。
19　暗褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。
20　暗褐色。直径30mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
21　黒褐色。
22　暗黄褐色。ソフトロームブロックを含む。
23　暗褐色。含有物が少ない。
24　暗褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。
25　暗褐色。直径30mm大の黄褐色砂ブロックを多量に含む。
26　暗褐色。直径30mm大の黄白色粘土ブロック・黄褐色砂ブロックを多量に含む。
27　黒褐色。含有物が少ない。
28　暗黄褐色砂質土。
29　黒褐色。黄白色粘土・黄褐色砂ブロックを多量に含む。
30　黒褐色。
31　黒褐色。直径20mm大の黄褐色砂ブロックを多量に含む。
32　黒褐色。
33　黒褐色。黄褐色砂・黄白色粘土主体。
34　黒褐色。含有物が少ない。
35　黒褐色。黄白色粘土ブロックを含む。

Fig.156　SK13 遺構、SK14 遺構

SK09（Fig.154、PL.68）

SK09は、B地点9L−27区他に所在する。黄褐色ソフトローム層を確認面として黄白色粘土層上面に達している。掘形は径0.37〜0.42mの円形であり、確認面からの深さは0.24mを測る。底面標高は34.33mであった。1は宮ノ台式の甕形土器である。出土状況から、本来の位置関係を想定することはできないが、隣接するSK07・08の状況から、土器棺の可能性を想定しておきたい。南岩崎1期に比定できるが、細別時期は明らかではない。

SK10（Fig.155、PL.35・68）

SK10は、A地点5F−95区他に所在する。黄褐色粘土層を確認面・掘り込み層としている。平面規模は、径0.57〜0.75mを測る。長軸方位はN−47.0°−E、確認面からの深さは0.18m、底面標高は35.90mであった。本遺構の性格は明らかではないが、和泉式の完形の杯形土器が出土している。

本遺構の時期は、古墳時代中期南岩崎5b古期である。

SK11（Fig.155、PL.35・36・68）

SK11は、B地点8L−65区他に所在する。黄褐色ソフトローム層を確認面として黄白色粘土層に達している。掘形は径0.54〜0.66mの楕円形であり、確認面からの深さは0.5mを測る。底面標高は33.94mであった。本遺構の性格は明らかではない。遺物は、和泉式が出土している。検出状況は単独の土坑であるが、竪穴住居の貯蔵穴の可能性も想定できる。

本遺構の時期は、古墳時代中期南岩崎5b期である。

SK12（Fig.54・57）

SK12は、A地点7I−52区他に所在する。畿内系の大形土器が出土した柱穴状の土坑あり、SI18−P8に対応する。SI18に帰属しない可能性も考えられることから、「SK12」の呼称も与えておく。

SK13（Fig.156、PL.36）

SK13は、A地点7H−23区他に所在する。有天井土坑である。黄白色粘土層を確認面として、橙色砂層に達している。掘形確認面は、長軸長2.94m、幅1.70mを測る。下部土坑は、長軸長1.54m、幅0.7m程度、確認面からの深さは1.36m、底面標高は34.35mであった。長軸方位N−53.0°−Eを測る。

本遺構は、当該地域で古墳時代終末期以降にみられる、地下式土坑墓の可能性がある。ただし、竪坑、玄室部とも形状は整っていない。裏付ける遺物も出土していない。現場写真よれば、風倒木痕の可能性も否定できない。

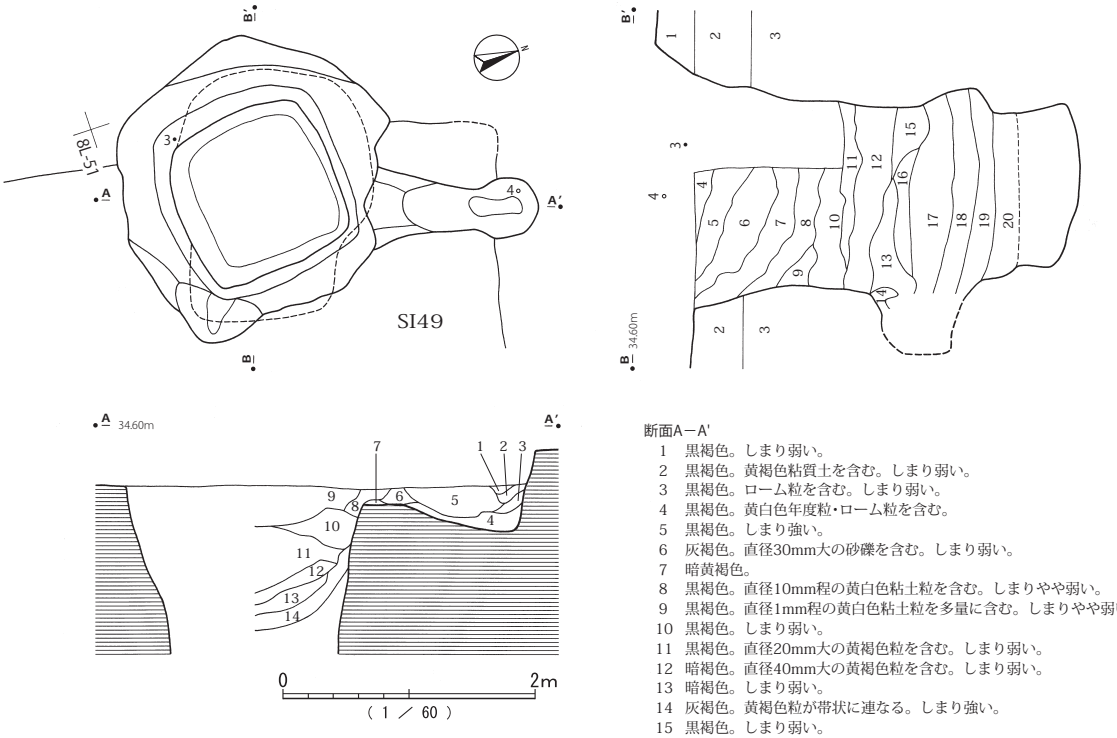
SK14（Fig.156、PL.36）

SK14は、A地点8I−08区他に所在する。SI24と重複し、これより新しい。遺構範囲の大半が調査区外となるため、規模・性格とも明らかではない。黄褐色ソフトローム層を確認面として橙色砂層に達している。確認面での平面規模は、現状範囲で最大4.04mを測る。深さは1.1〜1.4m、最深部の標高は34.35mであった。底面、壁面とも整っていない。風倒木痕の可能性もある。実測可能な遺物は出土していない。

第6節　井戸

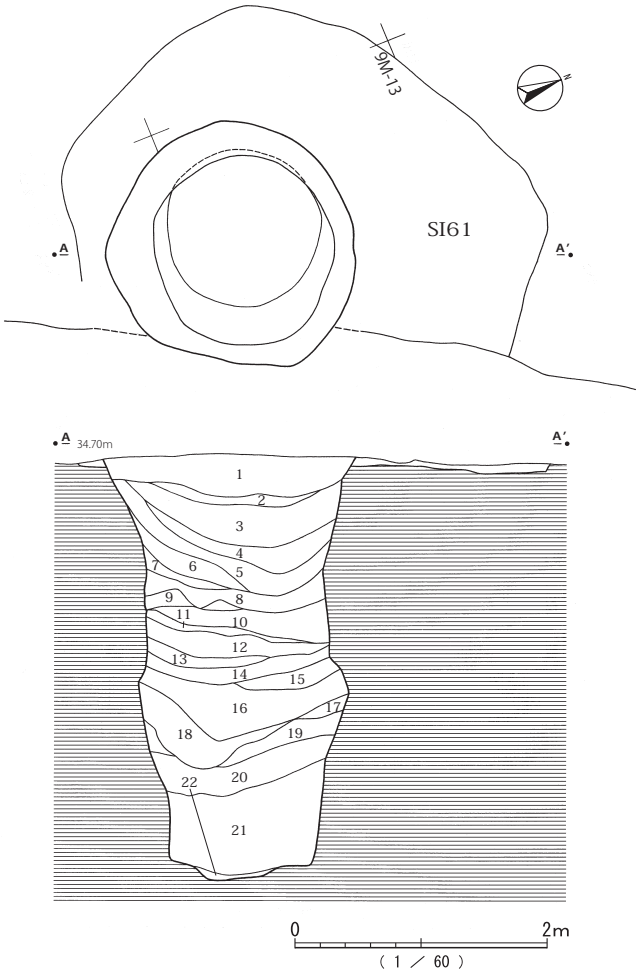
井戸は3基検出した。ただし、SE03は、井戸としては確実ではない。SE01・02は、出土遺物から中世に遡る可能性がある。

SE01



断面A－A'
1　黒褐色。しまり弱い。
2　黒褐色。黄褐色粘質土を含む。しまり弱い。
3　黒褐色。ローム粒を含む。しまり弱い。
4　黒褐色。黄白色年度粒・ローム粒を含む。
5　黒褐色。しまり強い。
6　灰褐色。直径30mm大の砂礫を含む。しまり弱い。
7　暗黄褐色。
8　黒褐色。直径10mm程の黄白色粘土粒を含む。しまりやや弱い。
9　黒褐色。直径1mm程の黄白色粘土粒を多量に含む。しまりやや弱い。
10　黒褐色。しまり弱い。
11　黒褐色。直径20mm大の黄褐色粒を含む。しまり弱い。
12　暗褐色。直径40mm大の黄褐色粒を含む。しまり弱い。
13　暗褐色。しまり弱い。
14　灰褐色。黄褐色粒が帯状に連なる。しまり強い。
15　黒褐色。しまり弱い。

SE02



断面B－B'
1　黄褐色ローム層。
2　黄白色粘土層。
3　橙色砂層(上部)。
4　黒褐色。黄白色粘土粒を含む。
5　黒褐色。
6　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
7　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを6層より多く含む。
8　黒褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
9　黒褐色。有機質。
10　10cm大の黄白色粘土ブロック主体。
11　黒褐色。50mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
12　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
13　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。12層より有機質。
14　浅黄橙砂。
15　極暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
16　極暗褐色。3mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
17　黒褐色。有機質。
18　黒褐色。酸化鉄粒。
19　黒褐色。有機質。
20　黒褐色。粘性あり。酸化鉄粒。

断面A－A'
1　黒褐色。1mm大の黄白色粘土粒を含む。
2　黒褐色。1層より有機質。
3　黒褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
4　黒褐色。3層よりやや有機質。
5　極暗褐色。黄白色粘土粒を含む。
6　極暗褐色。30mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
7　黒褐色。粘性強い。
8　極暗褐色。黄白色粘土粒を含む。
9　黒色土ブロック。崩落土。
10　黒褐色。50mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
11　50mm大の黄白色粘土ブロック主体。
12　極暗褐色。5mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
13　極暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
14　極暗褐色。10～50mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
15　暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロック、橙色砂粒を含む。
16　極暗褐色。1mm大の円礫を含む。
17　浅黄橙砂質シルト主体。
18　極暗褐色。30mm大の円礫を含む。
19　茶褐色。橙色砂粒を多量に含む。
20　極暗褐色。橙色砂粒、30mm大の円礫を含む。
21　極暗褐色。30mm大の円礫を多量に含む。
22　黒色粘土質土。

Fig.157　SE01(1) 遺構、SE02(1) 遺構

SE01（Fig.157・158、PL.36・104）

SE01は、B地点8L−41区他に所在する。黄褐色ソフトローム層を確認面として黄白色粘土層を掘りぬき砂礫層に達している。確認面からの深さは3.38m、底面標高は31.06mであった。確認面での平面形態は、ややいびつな円形を呈すが、掘形の基本的な平面形状は方形である。平面規模は、確認面で径1.98〜2.27m、壁面がほぼ垂直になる部分では1.54×1.37mを測る。北側には連続する溝状施設が検出されている。深さは0.67mを測る。

確認面付近から、3のロクロ土師器杯が出土している。常滑産の片口鉢1は、覆土からの出土であるが、位置詳細は明らかではない。他に、4の鉄製刀子茎が出土している。また、覆土から小礫を多数検出したが、意図的なものか、あるいは砂礫層の崩落によるものかの判断は難しい。

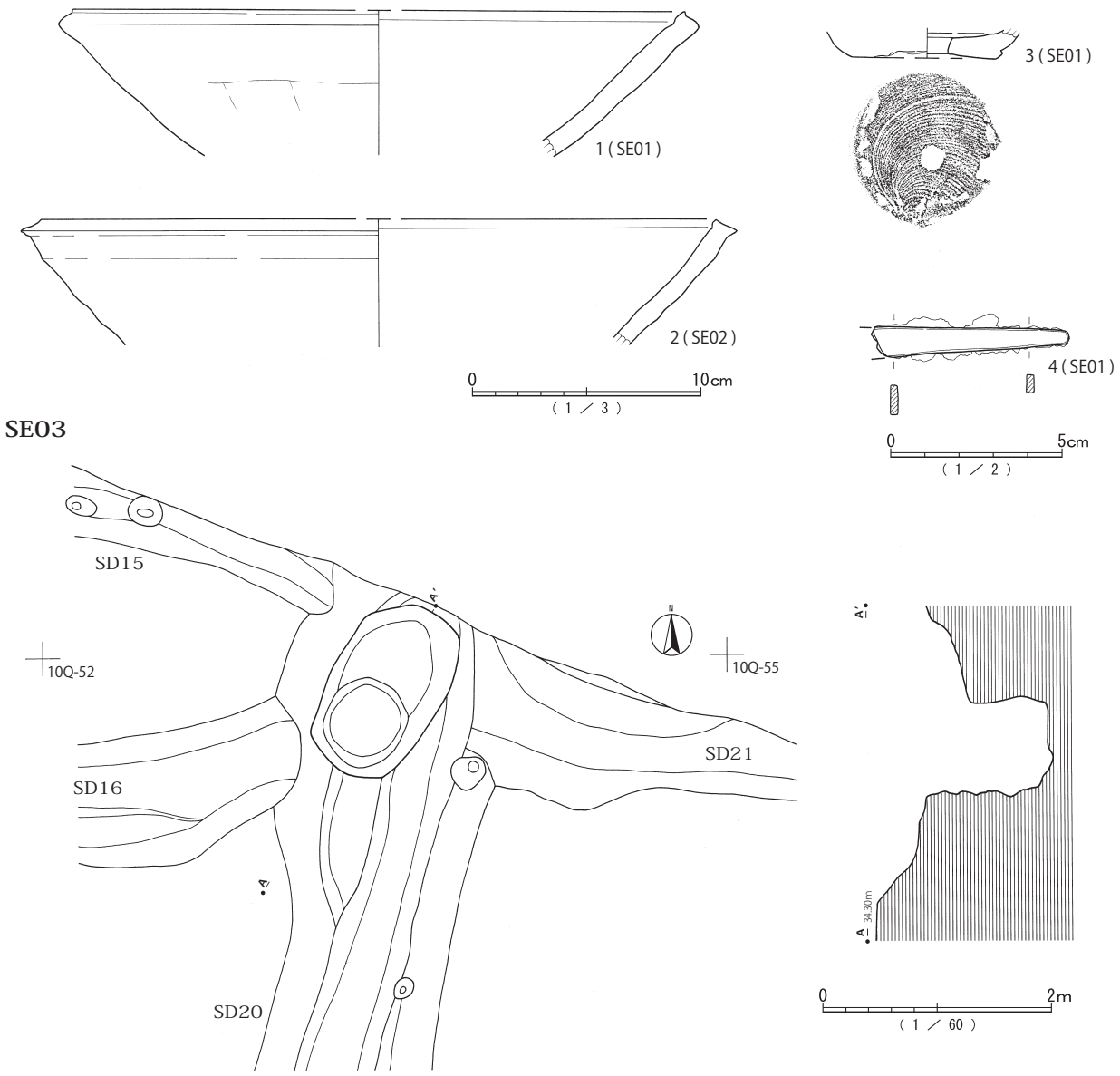


Fig.158　SE01(2) 遺物、SE02(2) 遺物、SE03 遺構

SE02（Fig.157・158、PL.27・36）

SE02は、B地点9M−13区他に所在する。SD15と重複し、本遺構が最も新しい。黄褐色ソフトローム層を確認面として黄白色粘土層、砂礫層を掘りぬき、底面は黒色の粘土質土に達している。確認面からの深さは3.32m、底面標高は31.28mであった。平面形態はほぼ円形を呈し、確認面で径1.87〜1.93m、壁面は崩落部上で1.39mを測る。

覆土中下層から常滑産片口鉢2が出土しているが、出土位置の詳細は不明。また、覆土から小礫を多数検出したが、意図的なものか、あるいは砂礫層の崩落によるものかの判断は難しい。

SE03（Fig.158、PL.36・39）

SE03は、B地点10Q−43区他に所在する。SD15・16・20・21と重複するが、新旧関係は不明。これら溝の集合地点にあることから、一体のものである可能性が高い。なお、機能的には集水枡的な役割も想定できるが、ここでは現場所見をもとに井戸として分類しておく。

掘形は2段になり、上面の平面規模は、長軸長1.58m、短軸長0.99m、下段は、長軸長0.78m、短軸長0.70m、確認面からの深さは1.50m、底面標高は32.67mであった。長軸方位はN−32.0°−Eを測る。本遺構は、新期テフラ層を確認面とし、SD20底面がほぼローム層上面にあたる。底面の土層の記録はないが、深さから想定して、砂礫層に達しているとみられる。本遺構にともなう可能性のある遺物は出土していない。

第7節　溝

溝は、総数25条を遺構として認定した。時期的には、弥生時代から近現代におよび、その性格も、区画溝、道路跡など多様である。

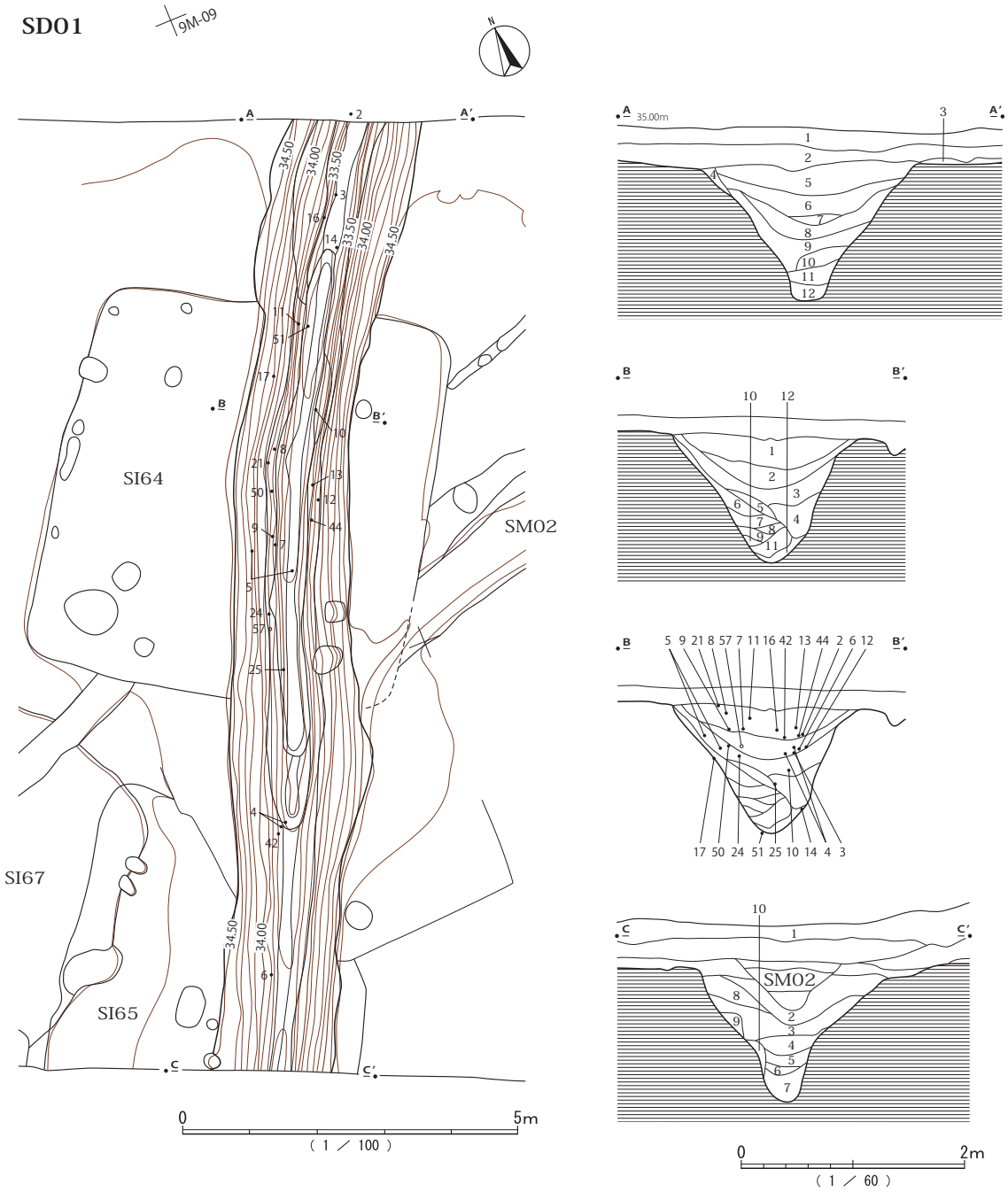
このうち、SD01は、弥生時代の環濠と推定され、集落の東側を区画する。SD02は、西側でこれに対応する可能性がある。SD03は、古墳時代中期前半の区画溝である。また、B地点SD12以東の溝は、掘立柱建物群と走行方向を一致させており、一連の遺構群としてとらえ得る可能性もある。

SD01（Fig.159〜161、PL.2・3・4・5・9・27・34・37・38・69・79・80・97・98・103）

SD01は、B地点9M−58区他、9N−20区から9M−77区の間にあり、調査区を南北方向に横断する。A地点谷部の東側肩部にあたるが（Fig.7）、地形変化は際立ったものではない。SI64・65・66、SM01・02と重複し、本遺構が最も古い。とくにSI64は、本遺構覆土上の床硬化面が明確に認められた。

黄褐色ソフトローム層を確認面として、橙色砂層まで掘り込んでいる。走行方向はN−26.0°−Eであるが、わずかに蛇行する。溝断面はV字形を呈し、確認面での幅は1.57〜2.15mを測る。深さは、検出部中央SI64下部が最も深く、確認面から1.42m、標高33.24mを測る。全体としては、北に向かってやや深くなる傾向があり、調査区南端部で確認面から0.96m、標高33.70m、北端部で確認面から1.27m、標高33.34mを測る。底面幅はおおむね0.15m程度と狭い。なお、調査段階の所見として、断面B−B'の1〜5層が掘り直しによる可能性を指摘しているが確証はない。断面C−C'上部の掘り込みについては、SM02周溝と考える。

出土土器総量は12,823gを測る。土量に対してさほど多くはない。出土土器は、SI64の下部、溝覆土中上層部にある程度まとまっていた。これに対して、下層からの出土遺物は極端に少なかった。時期的には、宮ノ台式にほぼ限定されるが、細別時期は幅をもつ。櫛描波状文や舌状文をもつ壺形土



断面A－A'
1　表土。
2　暗灰褐色。
3　褐色。
4　黒褐色。10mm大のローム・黄白色粘土ブロックを含む。
5　極暗褐色。3mm大の黄白色粘土粒をまばらに、炭化物をわずかに含む。
6　極暗褐色。2mm大の黄白色粘土粒を含む。
7　黒褐色。2mm大の黄白色粘土粒をごく少量含む。
8　極暗褐色。2mm大の黄白色粘土粒を多量に含む。
9　極暗褐色。2mm大の黄白色粘土粒を8層より多く含む。
10　黒褐色。2mm大の黄白色粘土粒、橙色砂粒を若干含む。
11　暗褐色。橙色砂粒主体。
12　黒褐色。10mm大の橙色砂粒、2mm大の黒色土ブロックを多く含む。

断面B－B'
1　黒褐色。3mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
2　黒褐色。1層より粘土粒が多い。
3　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
4　暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。短期埋没層か。
5　黒褐色。1～5mm大の黄白色粘土ブロックをわずかに含む。
6　黒褐色。5mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
7　極暗褐色。5mm～10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
8　極暗褐色。有機質。
9　黒褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを少量含む。
10　黒褐色。やや有機質。
11　暗褐色。10～30mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。短期埋没層か。
12　橙色砂主体。

断面C－C'
1　表土。
2　極暗褐色。黄白色粘土粒、3mm大のロームブロックを多量に含む。
3　黒褐色。粘土粒をまだらに含む。
4　黒褐色。黄白色粘土粒が少ない。
5　暗褐色。黄白色粘土ブロック主体。橙色砂粒を含む。
6　極暗褐色。黄白色粘土粒・橙色砂粒を含む。
7　黒褐色。黄白色粘土粒を含む。最も暗色。
8　暗褐色。5層に似る。
9　極暗褐色。黄白色粘土ブロック主体。
10　橙色砂主体。

Fig.159　SD01(1) 遺構

SD01

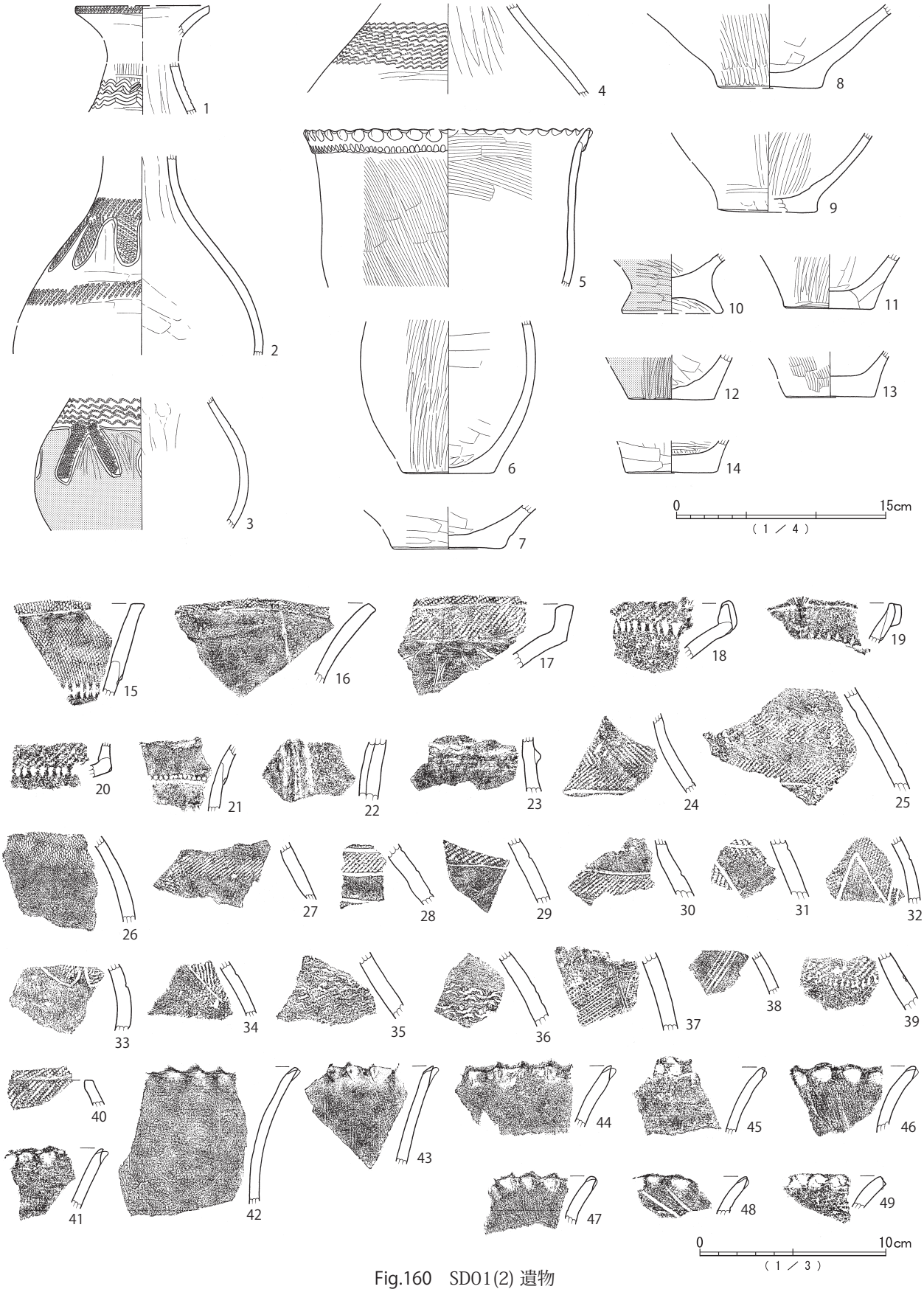


Fig.160　SD01(2) 遺物

SD01

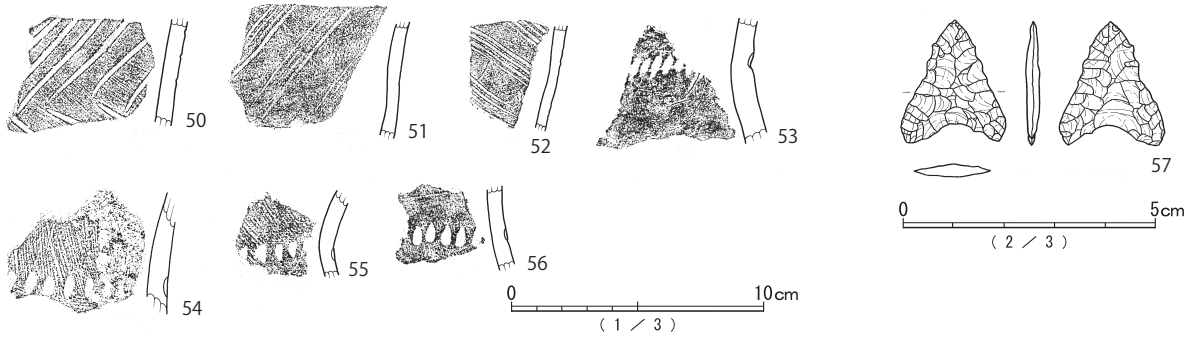


Fig.161　SD01(3) 遺物

器1・2は、宮ノ台式前半期（南岩崎1a期）に遡る可能性がある。ただし、同一層序の中で、結節文や羽状縄文、鋸歯文帯の個体と混在する。土器以外では、黒曜石製の石鏃57が出土している。

本遺構の時期は、鋸歯文帯の評価に異論を残す可能性はあるものの、基本的に南岩崎1c期に機能を停止し、埋没したと考える。開削時期については明確ではない。壺形土器1・2についても、その出土状況からは、2次的な混入によると考えざるを得ない。

SD02（Fig.162、PL.13・38・69・80・98・105）

SD02は、A地点6F−62区他に所在する。調査区外南側に連続する溝状遺構であるが、調査区内で立ち上がり、断線する。和泉式期の竪穴住居跡SI02と重複し、本遺構が古い。黄褐色ソフトローム層を確認面として、底面は橙色砂層に達している。調査区内での検出距離は2.20mにすぎない。溝断面はV字形を呈し、確認面での幅は最大で1.10m、深さは0.95m、底面標高35.55mを測る。底面幅は0.15〜0.25m程度であった。走行方向は、N−40.0°−Eである。

出土土器のうち、1の甕形土器は、SI02覆土から出土したものである（Fig.14）。他は、いずれも小破片であるが、宮ノ台式に限定される。土器以外では、15の土玉が出土している。

本遺構の時期は、出土土器がいずれも小破片ではあるが、南岩崎1c期に機能を停止し、埋没したと考えておく。

SD03（Fig.163・164、PL.3・24・38・69）

SD03は、B地点8L−74区他、8L−34区から9L−14区の間にあり、調査区を南北方向に横断する。

SI51・52、SB01と重複し、本遺構に対してSI51・52が古く、SB01が新しい。ただし、SB01との関係は、遺構検出状況から検証することはできない。また、東壁の一部が風倒木痕によって破壊されている。

黄褐色ソフトローム層を確認面として、橙色砂層まで掘り込んでいる。検出範囲ではほぼ直線的で、走行方向は真北からわずかに西へ偏し、N−1.5°−Wを

SD02

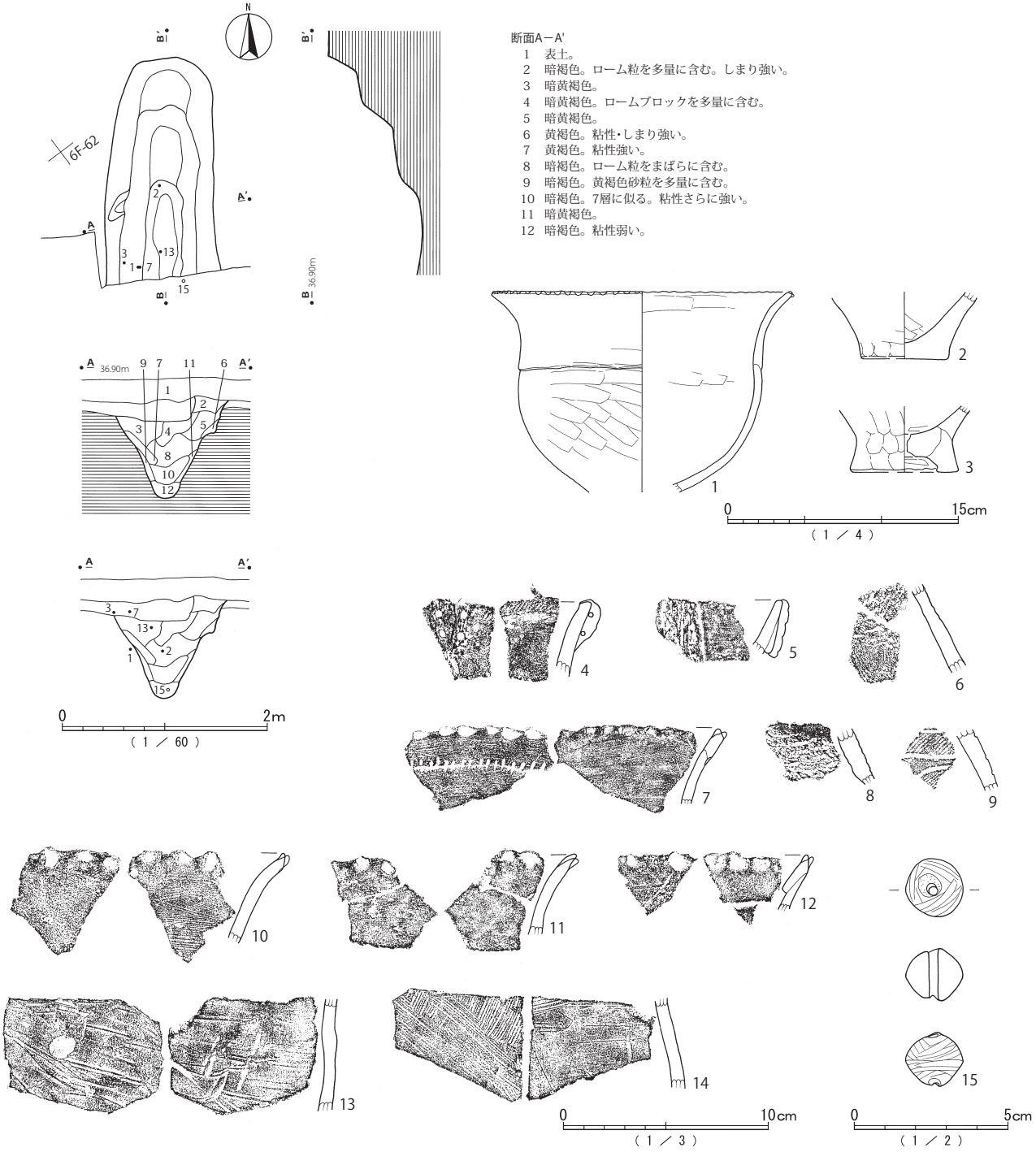
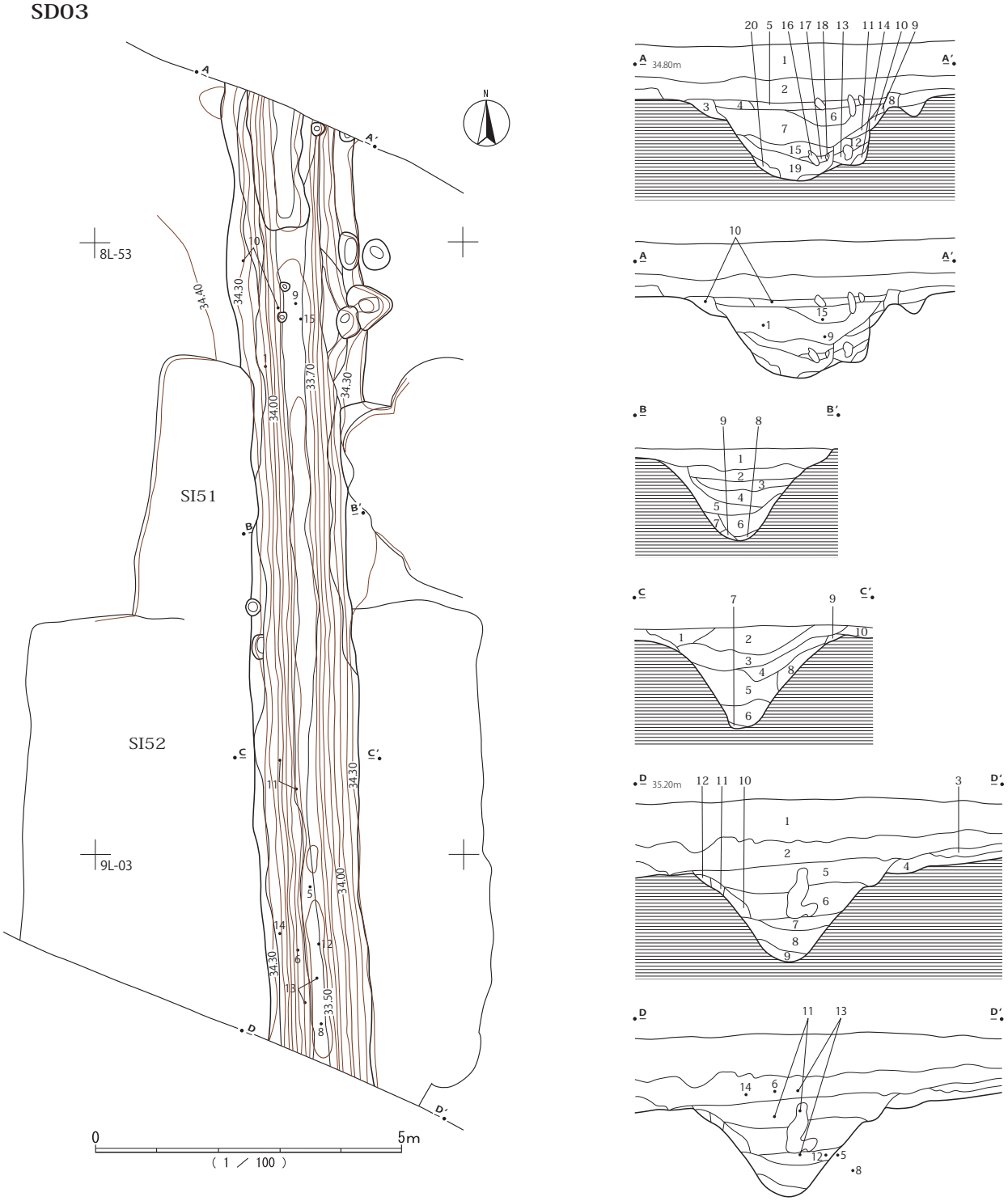


Fig.162　SD02 遺構遺物

測る。遺構確認面での溝幅は、北端部で2.07m、南側はSI51・52床面で1.42～1.68mであった。深さは、南に向かって若干深くなる傾向があり、確認面、SI51・52床面からの深さは、調査区北端部で0.77m、調査区南端部で0.87m、底面標高は、調査区北端部で33.67m、調査区南端部で33.47m、断面B－B'付近で33.60mを測る。溝断面はVないしU字形を呈し、壁の立ち上がりはほぼ直線的である。底面幅は、SD01と比較してやや広く、0.15～0.4m程度を測る。

遺物は、土量に対してさほど多くはなく、出土土器総量は9,799gであった。小破片が主体となるが、

SD03



断面A－A'

1　表土。
2　黒褐色。
3　極暗褐色。ロームブロック主体。
4　極暗褐色。
5　極暗褐色。ロームブロックを帯状に混合。
6　黒褐色。
7　極暗褐色。20mm大のロームブロックを含む。
8　極暗褐色。10mm大のロームブロックを含む。
9　極暗褐色。
10　暗褐色。黄白色粘土ブロック主体。
11　極暗褐色。
12　暗褐色。30mm大の黄白色粘土ブロック、橙色砂粒を含む。
13　極暗褐色。橙色砂粒をまばらに含む。
14　橙色砂粒主体。
15　黒褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。
16　暗褐色。
17　極暗褐色。
18　暗褐色。16層に似る。
19　極暗褐色。
20　極暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。

Fig.163　SD03(1) 遺構

断面B－B'
1　極暗褐色。
2　極暗褐色。10mm大のロームブロックを少量含む。
3　極暗褐色。10～30mm大のロームブロックをわずかに含む。
4　極暗褐色。5mm大の黄白色粘土ブロックを少量含む。
5　極暗褐色。2～5mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
6　極暗褐色。2～10mm大の黄白色粘土ブロックを多量に含む。
7　極暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロックを含む。
8　極暗褐色。10mm大の黄白色粘土ブロック、橙色砂粒を多量に含む。
9　極暗褐色。8層と同質だがより砂質。

断面C－C'
1　黒褐色。黄白色粘土粒をわずかに含む。しまり弱い。
2　黒褐色。黄白色粘土粒・粘土ブロックを多量に含む。しまり弱い。
3　黒褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。しまり弱い。
4　黒褐色。黄白色粘土粒をまばらに含む。しまり弱い。
5　暗褐色。黄白色粘土粒を多く含む。しまり強い。
6　灰褐色。黄白色粘土ブロック・粘土粒を多量に含む。
7　淡黄褐色。
8　暗褐色。黄白色粘土ブロックを多量に含む。しまり強い。
9　暗黄褐色。
10　暗褐色。

断面D－D'
1　表土。
2　黒褐色。
3　ローム漸移層。
4　黄褐色ローム層。
5　黒褐色。5mm大の粘質ロームブロックをまばらに含む。
6　黒褐色。5mm大の粘質ロームブロックをわずかに含む。
7　黒褐色。黄白色粘土粒・橙色砂粒をまばらに含む。
8　極暗褐色。黄白色粘土粒・10mm大の粘土ブロックを密に含む。
9　極暗褐色。黄白色粘土粒・5mm大の粘土ブロックを含む。8層に比べてやや少ない。
10　暗褐色。5mm大の黄白色粘土ブロックをまばらに含む。
11　暗褐色。黄白色粘土粒主体。
12　極暗褐色。

SD03

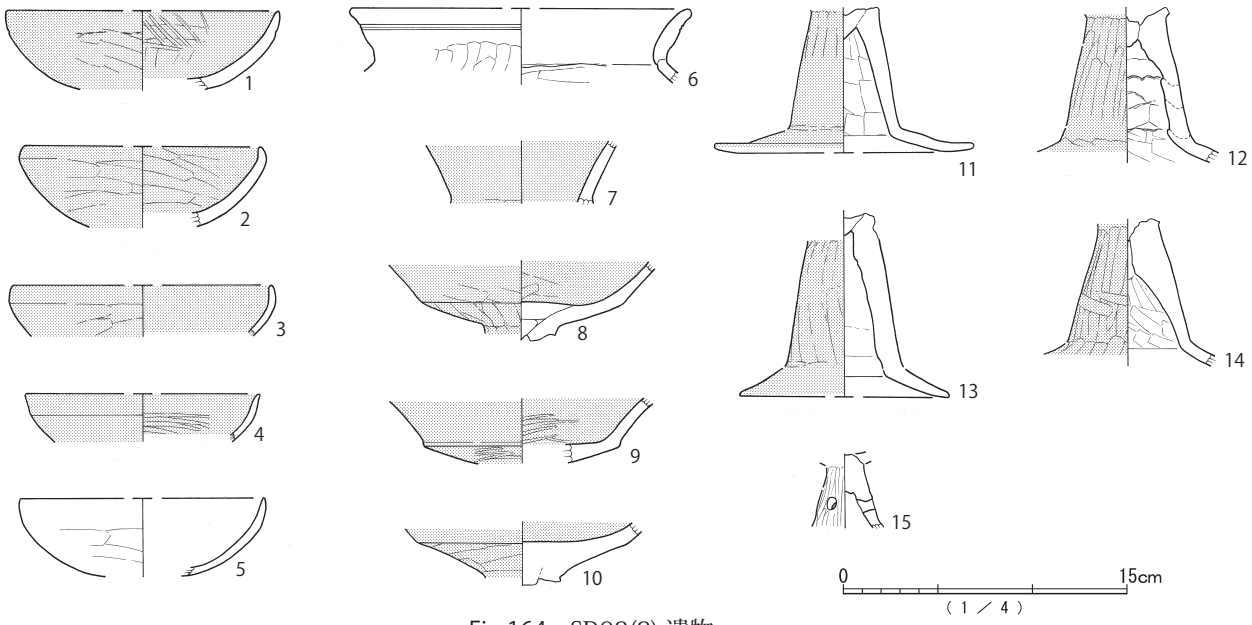


Fig.164　SD03(2) 遺物

時期的にはほぼ和泉式に限定される。

本遺構の時期は、竪穴との重複関係から南岩崎5b新期ないしそれ以降と考える。

SD04（Fig.165、PL.69・98）

SD04は、A地点7G−35区他に所在する。現道と重なるSD25とほぼ直交する。SD25との新旧関係は確認できていないが、本遺構が古いと推定する。黄褐色粘土層を確認面として、橙色砂層まで掘り込んでいる。遺構検出長は3.43m、確認面での幅は1.08m、走行方向は、N−84.0°−Eである。東側はSD25によって破壊される。溝断面は逆台形ないしU字形を呈し、深さは0.35m程度を測る。土器は、宮ノ台式、五領式の小破片が出土している。

方形周溝墓等の可能性も考えられることから、ここで取り上げておく。

SD05（Fig.142・168、PL.6・16・69・70・89・98・105）

SD05は、A地点7H−47区他に所在する。SI15と重複し、本遺構が新しい。位置的には、方形周溝墓SS01西溝に合致する可能性もあるが、掘形が完全に重なっていたと考える以外に、その可能性はない。

黄褐色ソフトローム層を掘り込み面とする。南側は調査区外となるが、現状範囲での検出長は

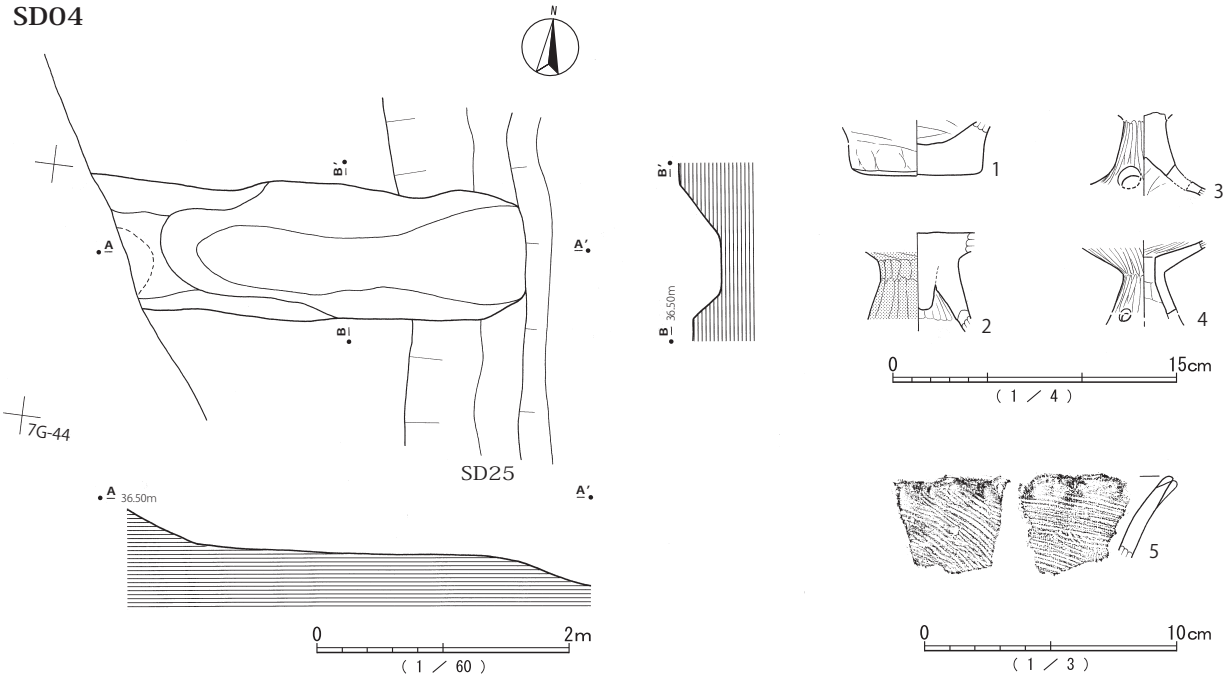


Fig.165　SD04 遺構遺物

9.40m、走行方向は、N−6.0°−Eである。確認面での幅は0.71mから南側で2.02mを測るが、西壁はSI15との重複によってやや明確ではない。確認面からの深さは、最大で約0.45mを測るが、北側に向かって浅くなる。溝幅も細くなることから、確認面より上で連続していたと思われる。底面に硬化面が認められたことから、道路跡と推定する。出土土器は、宮ノ台式・和泉式を主体とする。ただしこれらは、SI13・15などからの混入によると考えられる。土器以外では、22の滑石製有孔円盤が出土している。

SD06・07（Fig.166・168、PL.17・18・101）

SD06・07は、A地点7I−53区から7J−53区に連続する。重複するSI19部分が不明確ではあるが、本来連続する一連の溝と推定する。他遺構との新旧関係については、すべてが検証できるわけではないが、本遺構が最も新しい。

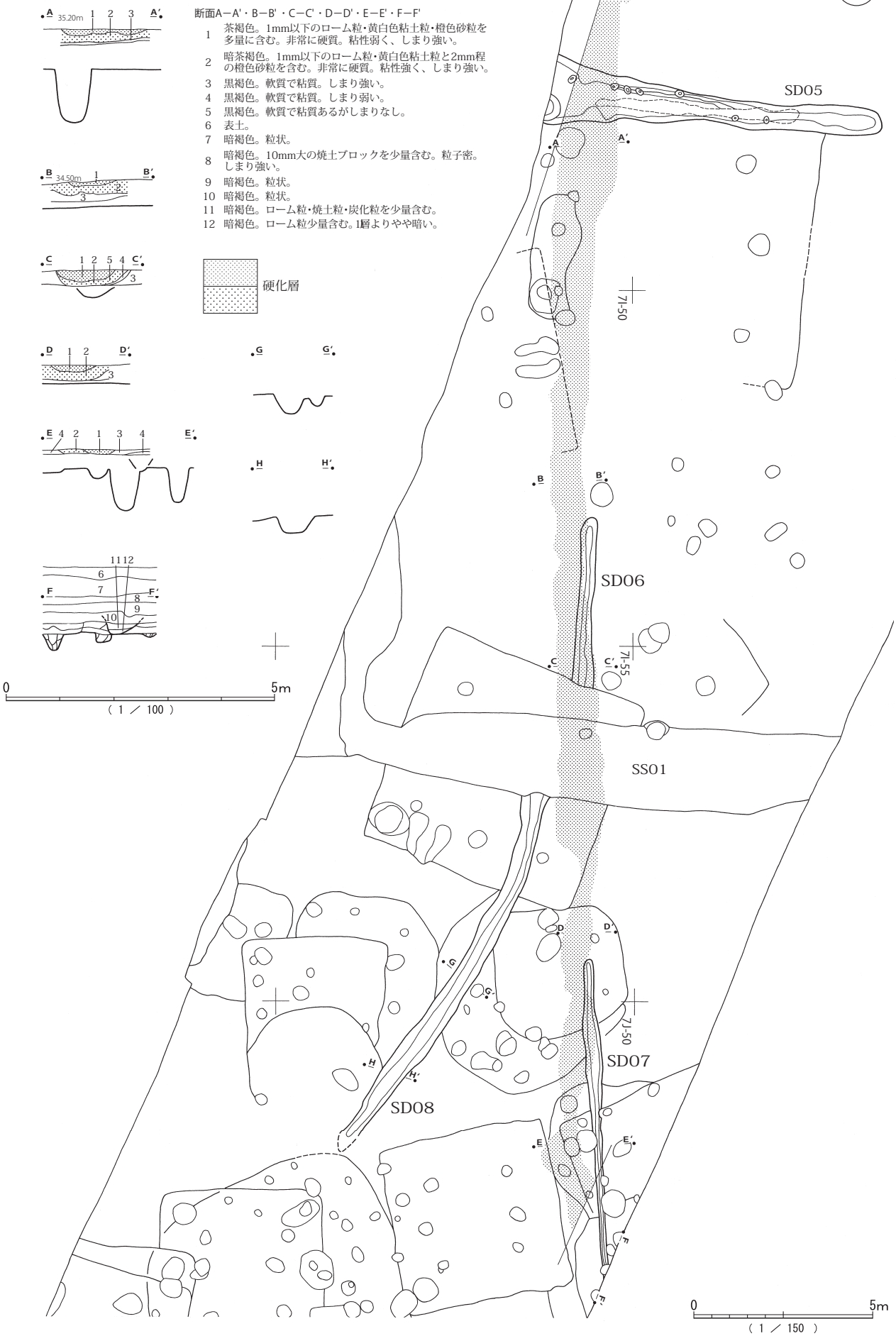
黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層上面まで掘り込んでいる。SD06は、検出範囲での全長が4.80m、幅0.36〜0.58m、走行方向は、N−85.0°−Wである。SD07は、全長が9.10m、幅0.21〜0.48m、走行方向は、N−87.0°−Wである。底面標高は、SD06が33.87m前後、SD07が33.77〜33.91mであり、ほぼ平坦で傾斜をもたない。

なお、SD06・07上面、表土直下で道路硬化面が検出されている。若干走行はずれるものの、SD06・07がこの道路硬化面の掘形にあたる可能性も想定できる。道路硬化面標高は、西端部35.29m、東端部34.32mであり、約1.0m傾斜する。出土土器は、重複する竪穴に関連する小破片のみである。土器以外では、1が敲石である。

SD08（Fig.166・168、PL18・70）

SD08は、A地点7I−67区から7J−92区に連続する。重複するSS01東溝から西側が明確ではないが、SD06・07から分岐した可能性も想定できる。また、東端部は確認調査坑によって破壊されている。他遺構との新旧関係については、すべてが検証できるわけではないが、本遺構が最も新しい。

SD06・07・08

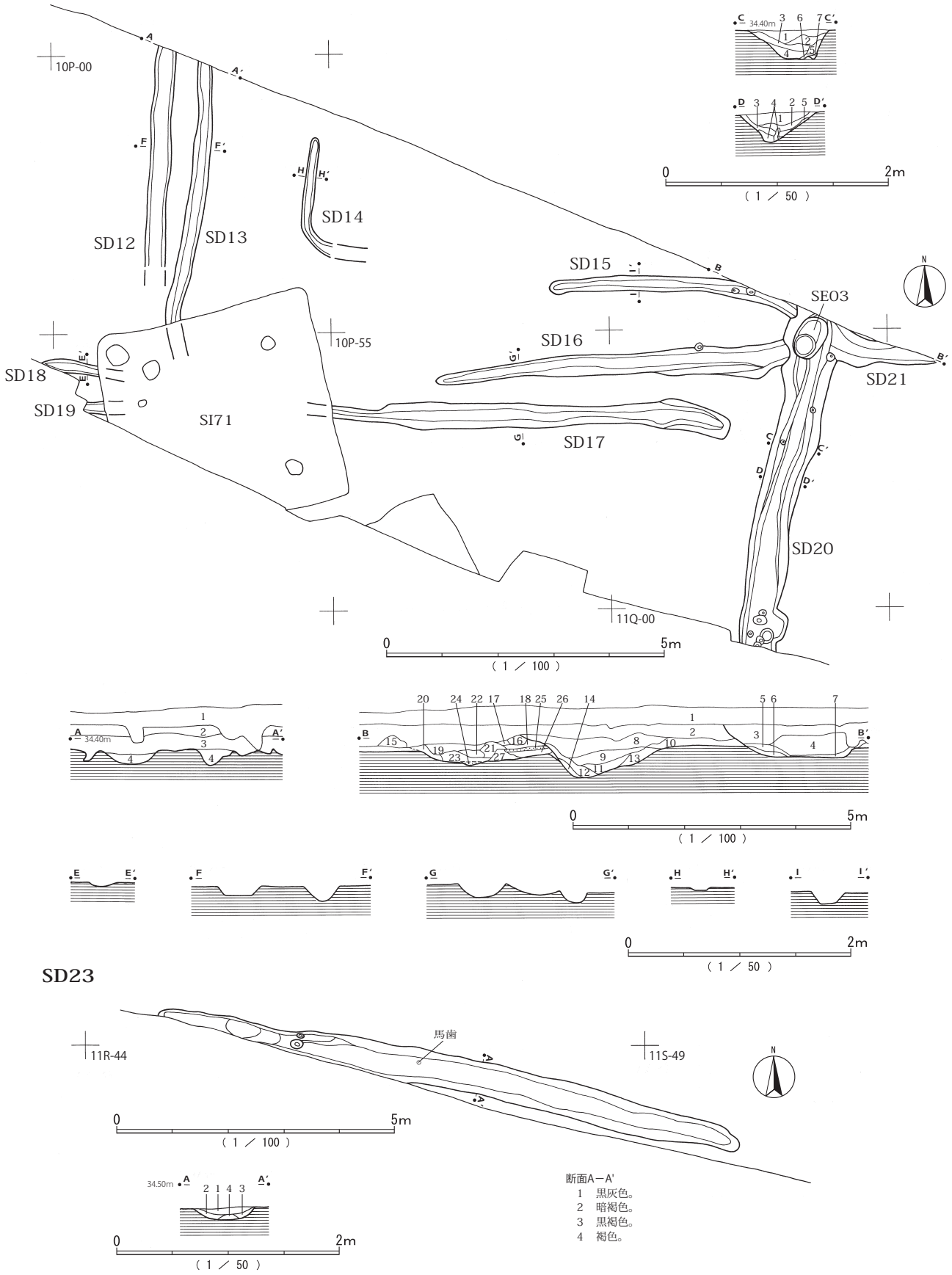


断面A－A'・B－B'・C－C'・D－D'・E－E'・F－F'

1 茶褐色。1mm以下のローム粒・黄白色粘土粒・橙色砂粒を多量に含む。非常に硬質。粘性弱く、しまり強い。
2 暗茶褐色。1mm以下のローム粒・黄白色粘土粒と2mm程の橙色砂粒を含む。非常に硬質。粘性強く、しまり強い。
3 黒褐色。軟質で粘質。しまり強い。
4 黒褐色。軟質で粘質。しまり弱い。
5 黒褐色。軟質で粘質あるがしまりなし。
6 表土。
7 暗褐色。粒状。
8 暗褐色。10mm大の焼土ブロックを少量含む。粒子密。しまり強い。
9 暗褐色。粒状。
10 暗褐色。粒状。
11 暗褐色。ローム粒・焼土粒・炭化粒を少量含む。
12 暗褐色。ローム粒少量含む。1層よりやや暗い。

Fig.166　SD06(1) 遺構、SD07(1) 遺構、SD08(1) 遺構

SD12・13・14・15・16・17・18・19・20・21



SD23

Fig.167　SD12・SD13・SD14・SD15・SD16・SD17・SD18・SD19・SD20・SD21・SD23 遺構

断面B－B'
1　表土。灰褐色。
2　灰褐色。ローム粒を含む。
3　暗褐色。ローム粒・褐色粒を含む。
4　褐色。黄褐色粒を若干含む。
5　暗灰黒色。ローム粒を含む。
6　褐色。ローム粒を含む。
7　黒灰色。
8　暗褐色。ローム粒を多量に含む。
9　暗褐色。ローム粒を含む。
10　褐色。
11　黒褐色。
12　黒褐色。
13　褐色。
14　黒褐色。ローム粒を含む。
15　暗灰褐色。
16　暗灰褐色。やや硬化。
17　暗灰褐色。やや硬化。
18　暗褐色。
19　灰褐色。
20　褐色。
21　黒褐色。
22　灰褐色。ロームブロックを含む。
23　灰褐色。
24　灰褐色。やや固いロームブロックを含む。
25　硬化層。
26　灰褐色。
27　灰褐色。

断面A－A'
1　表土。灰色。
2　黒灰色。
3　黒色。
4　黒灰色。

断面C－C'
1　黒褐色。橙色スコリアを含む。
2　黒灰色。全体に粗く、しまりが弱い。
3　黒褐色。ローム粒を含む。
4　黒色。ローム粒を含む。
5　暗褐色。
6　黒灰色。ローム粒・ロームブロックを含む。
7　ローム粒・ロームブロックを含む。

断面D－D'
1　黒褐色。橙色スコリアを含む。
2　黒灰色。全体に粗く、しまりが弱い。
3　黒褐色。ローム粒を含む。
4　黒色。ローム粒を含む。
5　褐色。

黄褐色ソフトローム層を確認面として、黄白色粘土層上面まで掘り込んでいる。検出範囲での全長は11.40m、幅は0.47～0.78mを測る。底面標高は、検出部西端33.68m、東側33.29mであり、東側へ向かって若干傾斜する。本遺構に関連する可能性のある遺物は出土していない。

SD09・10（Fig.149・150、PL.31・33・34・39）

SD09は、B地点9N－98区他、9N－49区から10N－35区の間にあり、調査区を南北方向に横断する。SB02・SM01と重複し、SM01東周溝外縁部に所在する。新旧関係は、SM01より新しいが、SB02との関係は明確ではない。また、SD09とSD10は、主要部を共有することから、掘り直しあるいは付け替えによると推定するが、両者の新旧関係は確実ではない。

SD09は、黄褐色ソフトローム層を確認面として、橙色砂層まで掘り込んでいる。走行方向は、南側がほぼ直線で、方位はN－37.0°－Eを測るが、北側はSM01周溝にそって屈曲する。遺構確認面での溝幅は、2.3～2.6mであり、深さは、0.75～0.92m、底面標高は、北に向かってやや深くなる傾向があり、調査区北端部で33.45m、調査区南端部で33.76mを測る。SD10の底面標高は、33.80m程度であった。SD09の覆土中には、道路状の硬化面が部分的に認められた。埋没の過程で、一時期道として機能していた可能性がある。本遺構に関連する可能性のある遺物は出土していない。

SD11（Fig.140）

SD11は、B地点10O－23区他、10O－03区から10O－43区に連続する。ローム漸移層からその上部暗褐色土層を確認面として、ローム層を掘り込んでいる。走行方向はほぼ真北を示す。検出範囲での全長は7.43mであり、南側は調査区外にいたる。溝幅は0.50～1.43m、確認面からの深さは0.12～0.31m、底面標高は34.26～34.31mを測る。

本遺構は、遺構配置からSS02に連続する方形周溝墓の可能性も考えられたが、方形周溝墓と比較して溝底面は安定しておらず、出土遺物には、幕末・明治期の肥前系茶碗が混在する（Tab.5）。

SD12（Fig.167）

SD12は、B地点10P－31区他、10P－02区から10P－41区にあり、SD13と併走する。南側は確認調査坑によって破壊されているが、南側調査区外に連続する。新期テフラ層を確認面としてローム層上面まで掘り込んでいる。走行はほぼ直線的で、方位はN－3.0°－Eを測る。検出範囲での全長は7.92m、幅は0.62～0.73mである。確認面からの深さは、0.09～0.2m、底面標高は、北端部33.94m、南端部34.16mであり、全体に傾斜をもち、北側へ向かって深くなる。本遺構に関連する遺物は出土していない。

SD13（Fig.167）

SD13は、B地点10P−32区他、10P−02区から10P−52区に所在する。南側でSI71と重複し、その覆土上に連続する。新期テフラ層を確認面としてローム層上面まで掘り込んでいる。走行はゆるやかに屈曲し弧状を描く。検出部南北端直線方向での方位はN−7.0°−Eを測る。検出範囲での全長は9.55m、幅は0.47〜0.63mである。確認面からの深さは0.08〜0.31m、底面標高33.90〜34.11mを測る。北端部が最も深いものの、全体の傾斜は一方向ではない。本遺構に関連する遺物は出土していない。

SD14（Fig.167）

SD14は、B地点10P−34区他、10P−14区から10P−35区に所在する。新期テフラ層を確認面としてローム層上面まで掘り込んでいる。溝は、南北N−7.0°−E方向から東へ屈曲する。東端部は確認調査坑によって破壊されている。溝幅は0.27〜0.45m、確認面からの深さは0.05〜0.08m、底面標高34.20m前後で、わずかに北側が深い。本遺構に関連する遺物は出土していない。

SD15（Fig.167、PL.39）

SD15は、B地点10Q−41区他、10P−48区から10Q−43区にあり、東端部でSD20、SE03と重複する。SE03を集合地点としてSD15・16・20・21が接続することから、これらは一体のものである可能性が高い。ただし、調査区北壁土層断面の観察によれば、SD15とSD20・21との関係では新旧関係があり、本遺構が古い。新期テフラ層を確認面としてローム層上面まで掘り込んでいる。走行はやや弧状を呈すが、西側直線部分の方位はN−89.0°−Eを示す。検出範囲での全長は8.95m、幅は1.0m前後である。確認面からの深さは0.2m前後、底面標高33.93〜33.99mでほぼ安定している。覆土中に、道路状硬化面が認められた。本遺構に関連する遺物は出土していない。

SD16（Fig.167、PL.39）

SD16は、B地点10P−59区他、10P−66区から10Q−52区に所在する。東端部でSD20、SE03と重複する。西端部は確認調査坑によって破壊されているが、SI71西側のSD18ないしSD19と連続する可能性がある。新期テフラ層を確認面としてローム層上面まで掘り込んでいる。走行方位はN−85.0°−E、検出範囲での全長は12.75m、幅は0.38〜1.16mである。確認面からの深さは0.17〜0.29m、底面標高33.98m前後を測る。本遺構に関連する遺物は出土していない。

SD17（Fig.167、PL.39）

SD17は、B地点10P−67区他、10P−65区から10Q−61区に所在する。西側でSI71と重複するが、覆土上で連続し、SD18ないしSD19と接続する可能性が高い。新期テフラ層を確認面としてローム層上面まで掘り込んでいる。走行方位はN−89.0°−E、検出範囲での全長は14.30m、幅は0.40〜1.08mである。確認面からの深さは0.15〜0.26m、底面標高33.97m〜34.13mで、東側へ向かって全体が傾斜する。

本遺構に関連する可能性のある遺物としては、渥美産の甕小片が1点出土している（Tab.5）。出土遺物から判断するならば、中世に遡る可能性がある。

SD18（Fig.167）

SD18は、B地点10P−50区他に所在する。SI71西側にあり、SD16ないしSD17と連続する可能性がある。検出範囲での全長は2.25m、幅は0.4m、底面標高は34.22〜34.38mを測る。本遺構に関連する遺物は出土していない。

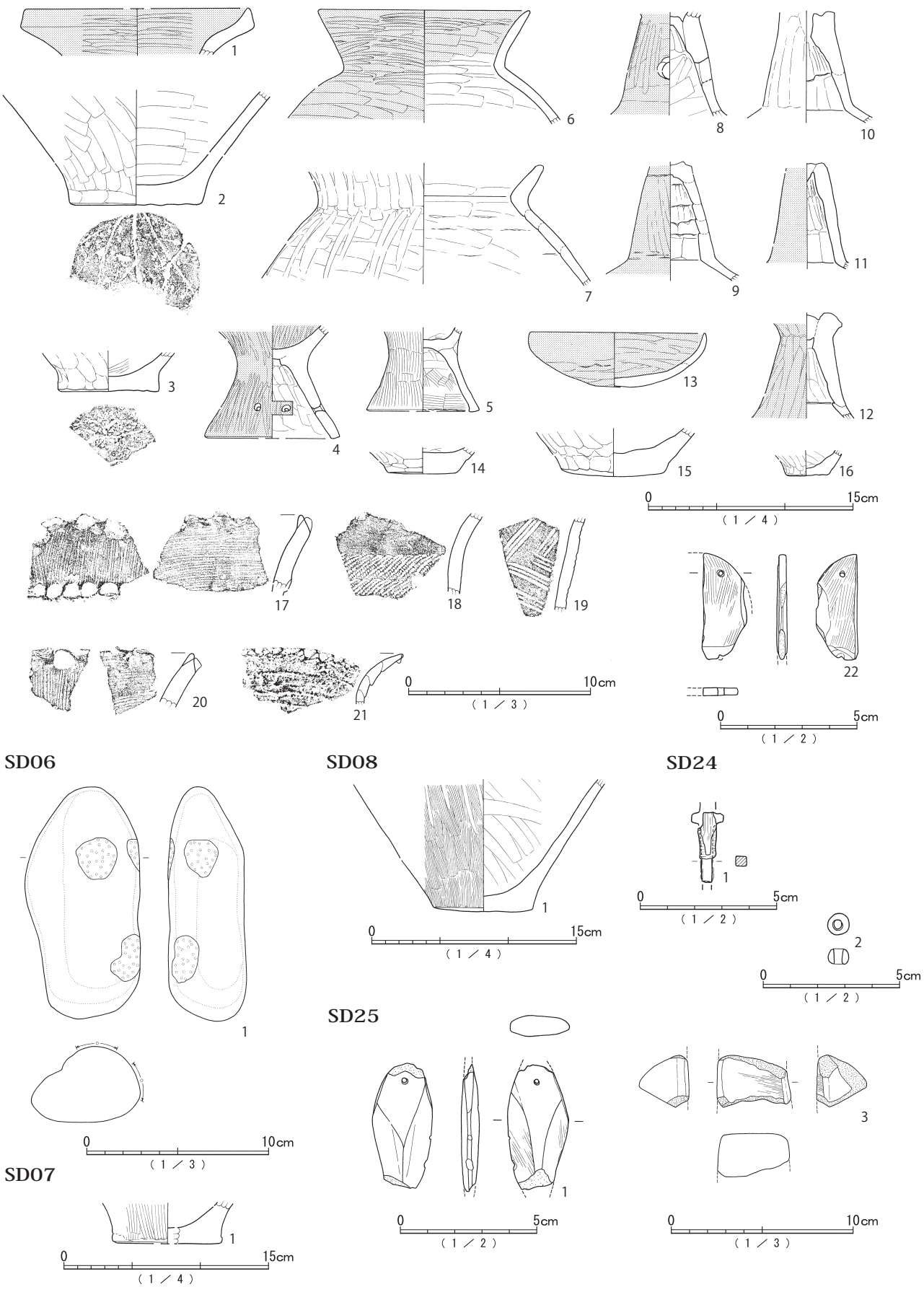


Fig.168　SD05(2) 遺物、SD06(2) 遺物、SD07(2) 遺物、SD08(2) 遺物、SD24遺物、SD25遺物

SD19（Fig.167）

SD19は、B地点10P−60区他に所在する。SI71西側にあり、SD16ないしSD17と連続する可能性が高い。検出範囲での全長は0.7m、底面標高は34.19mを測る。本遺構に関連する遺物は出土していない。

SD20（Fig.167、PL.39）

SD20は、B地点10Q−63区他、10Q−45区から11Q−02区に所在する。調査区北端部底面に井戸SE03があり、これを集合地点としてSD15・16・21が接続する。新期テフラ層を確認面としてローム層を掘り込んでいる。走行方位はN−11.0°−E、全長は12.50m、溝幅は、SE03周辺で2.05m、他は1.32〜1.48mであった。確認面からの深さは0.42〜0.6m、底面標高33.75m前後で推移する。本遺構に関連する遺物は出土していない。

SD21（Fig.167）

SD21は、B地点の10Q−54区他に所在する。SD20と重複し、本遺構が古い。SD15と連続する可能性が高い。新期テフラ層を確認面としてローム層上面まで掘り込んでいる。検出範囲での全長は3.67m、底面標高は33.94〜34.03m前後を測る。本遺構に関連する遺物は出土していない。

SD22（Fig.13）

SD22は、B地点10R−95区他からC地点11R−61区にかけて所在する。新期テフラ層を確認面・掘り込み層としている。走行方位はN−33.0°−E、B・C地点全長は15.80m、溝幅は0.48〜0.84mであった。確認面からの深さは0.14〜0.21m、底面標高は、B地点で34.06〜34.09m、C地点で34.32m前後を測り、若干北側に向かって深くなる。

本遺構に関連する可能性のある遺物としては、瀬戸・美濃系天目茶碗、瀬戸美濃産の茶碗・碗・猪口、肥前系碗等が出土している（Tab.5・6）。時期的には中世以降幅があるが、近世近代を中心とする。

SD23（Fig.167、PL.107）

SD23は、B地点の11R−34区から11R−49区にかけて所在する。新期テフラ層を確認面・掘り込み層としている。B地点調査区南端に接しており、走行方位はN−78.0°−W、検出部分での全長は10.65m、溝幅は0.65m前後であった。確認面からの深さは0.07〜0.27m、底面標高は34.10〜34.21mであったが、一方向の傾斜は認められなかった。本遺構は、現道脇にあり、走行も一致する。調査区際の断面図が作成されていないため、検証はできないが、現道と無関係とは考えにくい。本遺構に関連する遺物は出土していない。自然遺物として馬の歯が出土している（第3章第2節）。

SD24（Fig.9・168、PL.14）

SD24は、A地点6G−55区他に所在する。黄褐色粘土層を掘り込み面とする。SD25とほぼ平行し、現道と重なる。表土直下より硬化層が認められたことから、道にともなうものと考えられる。時期的な上限は不明であるが、積極的に遡る根拠は認められない。出土遺物にも、近世・近代の遺物が混在する（Tab.6）。他に、鉄鏃が出土している。

SD25（Fig.9・168、PL.6・14・99・105・106・107）

SD25は、A地点6G−76区他に所在する。黄褐色粘土層を掘り込み面とする。SD24とほぼ平行し、現道と重なる。現道はSD24・25を合わせた幅をもつが、SD25掘形は、SD24より一段深くなる。表土直下より硬化層が認められたことから、道にともなうものと考えられる。時期的な上限は不明であ

るが、積極的に遡る根拠は認められない。出土遺物にも、近世・近代の遺物が混在する (Tab.5・6)。自然遺物として馬の歯が出土している (第３章第２節)。他に、１が滑石製剣形石製品、２ガラス小玉、３が磨製石斧である。

第８節　集積遺構

いずれも、遺物集中地点であるが、なんらかの遺構にともなうものとの判断から、遺構略号としてSXを使用する。

SX01（Fig.169・170、PL.37・70・71・80・98・101）

SX01は、A地点6I−91区他、竪穴SI14・方形周溝墓SS01北溝重複部分上部で検出した。おおむね0.45〜1.0mの範囲から、短口縁の小形壺形土器17点以上がまとまって出土している。掘り込み範囲は明確ではないが、少なくとも廃棄によるものではなく、なんらかの意図をもって置かれた土器群と考えられる。出土位置は、SS01墳丘裾部にあたる。当初の造墓時期は異なるものの、まったく無関係とも思えない。

SX01

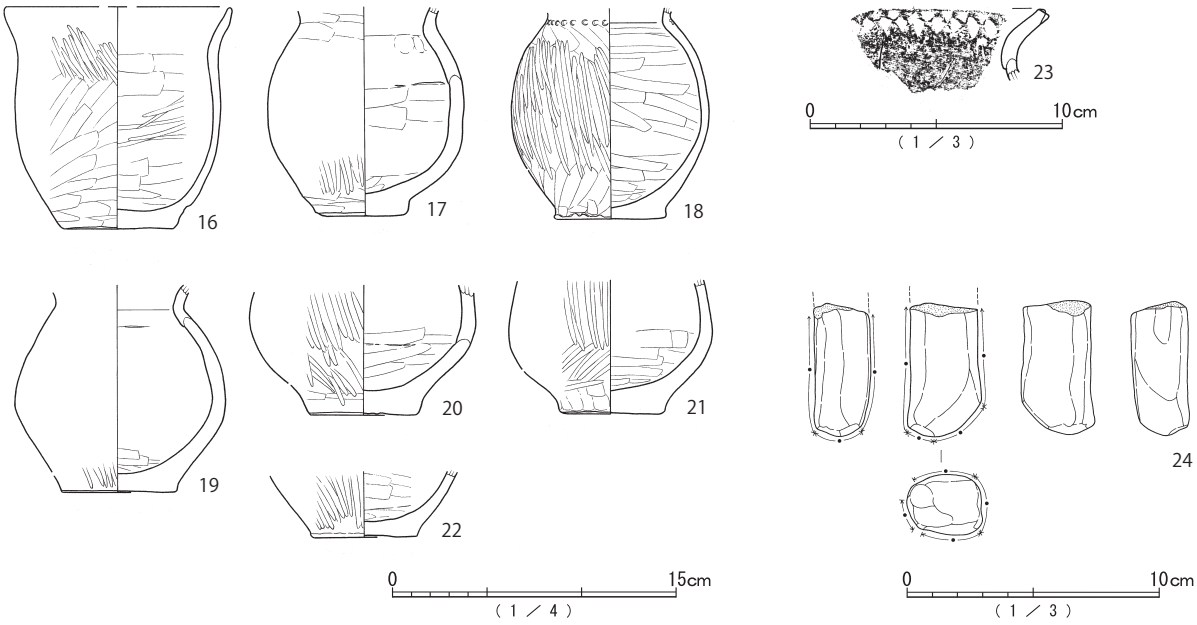
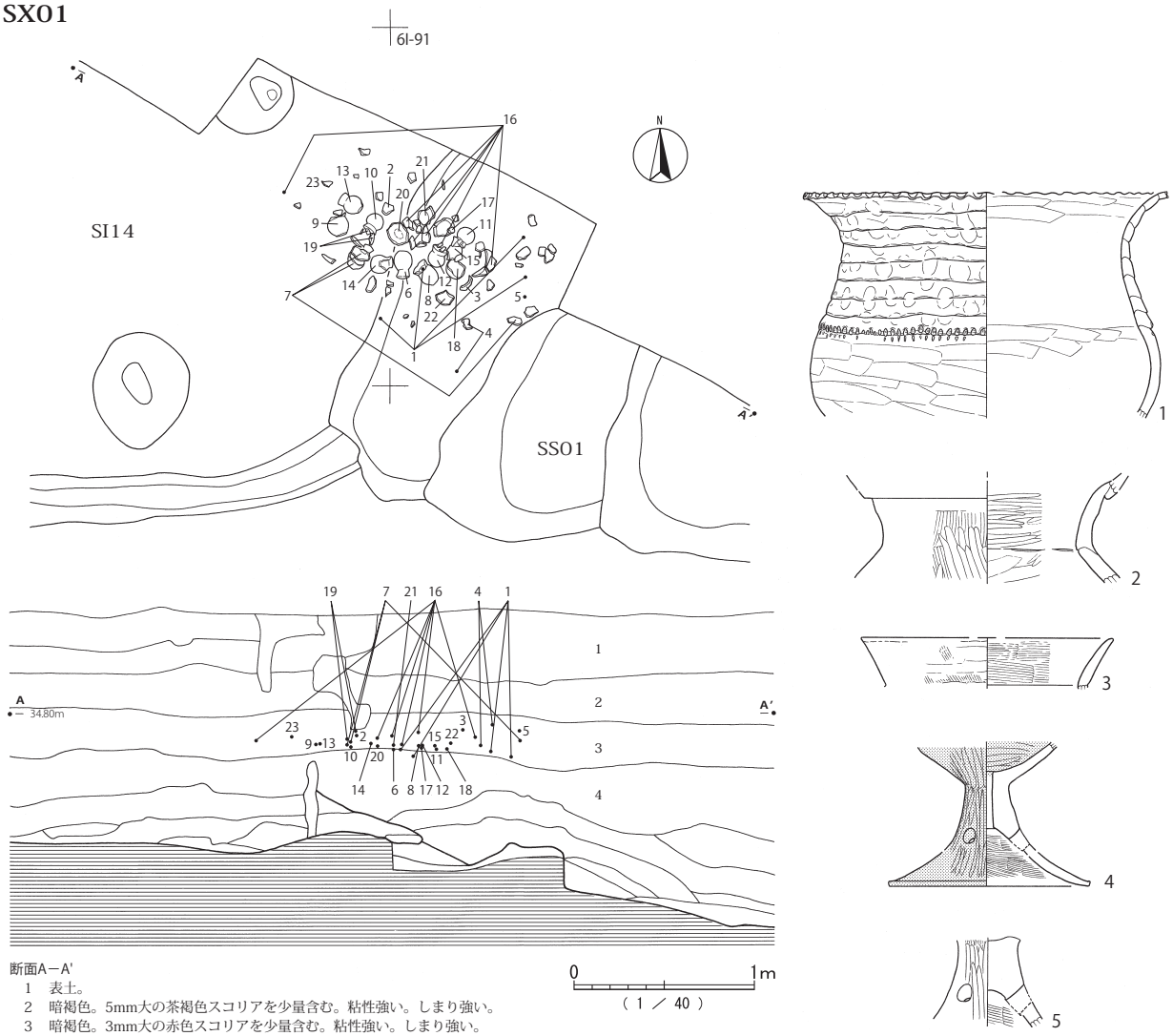


Fig.169　SX01(1) 遺物

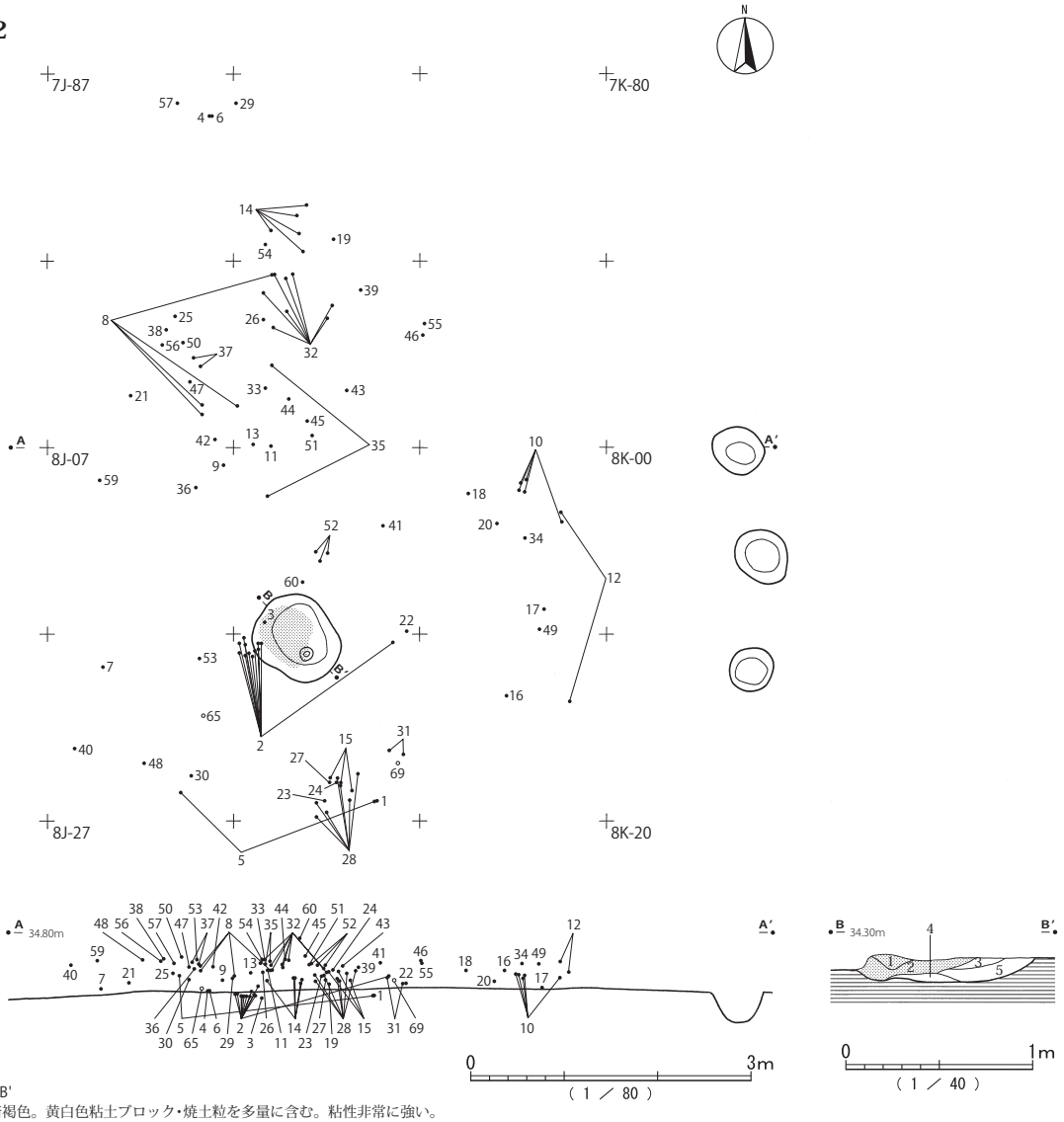
SX01



断面A－A'
1　表土。
2　暗褐色。5mm大の茶褐色スコリアを少量含む。粘性強い。しまり強い。
3　暗褐色。3mm大の赤色スコリアを少量含む。粘性強い。しまり強い。
4　黒褐色。ローム粒・炭化物を少量含む。粘性強い。しまり強い。

Fig.170　SX01(2) 遺構遺物

SX02



断面B－B'
1　暗褐色。黄白色粘土ブロック・焼土粒を多量に含む。粘性非常に強い。
2　黒褐色。焼土主体。粘性強い。しまり弱い。
3　黒褐色。粘性強い。しまり強い。
4　黄褐色。
5　暗褐色。ロームブロックをまばらに含む。粘性強い。しまり強い。

覆土下層

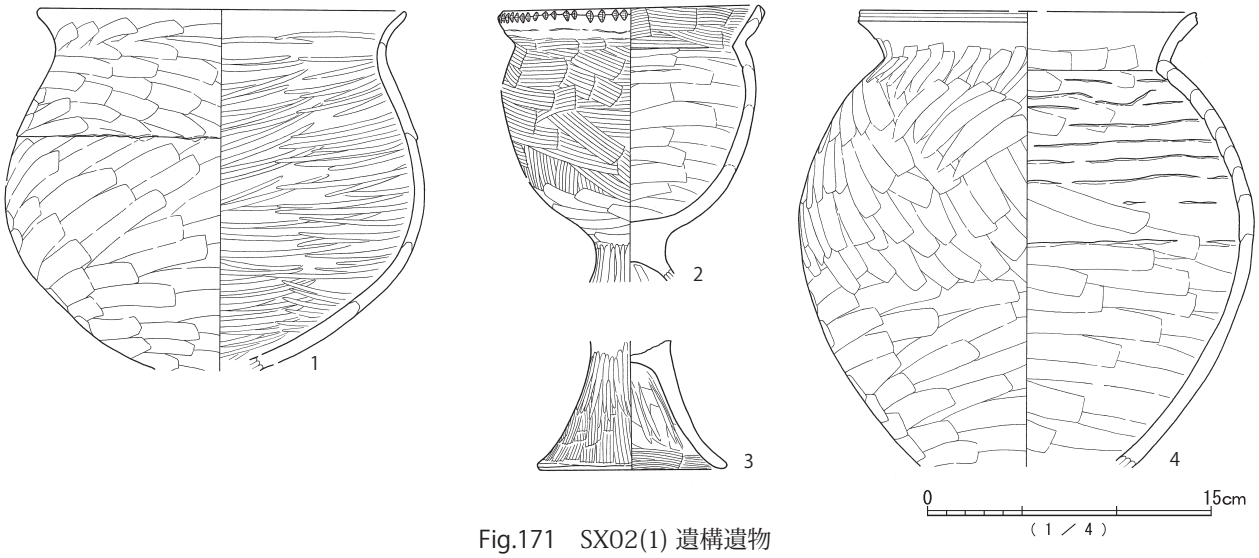
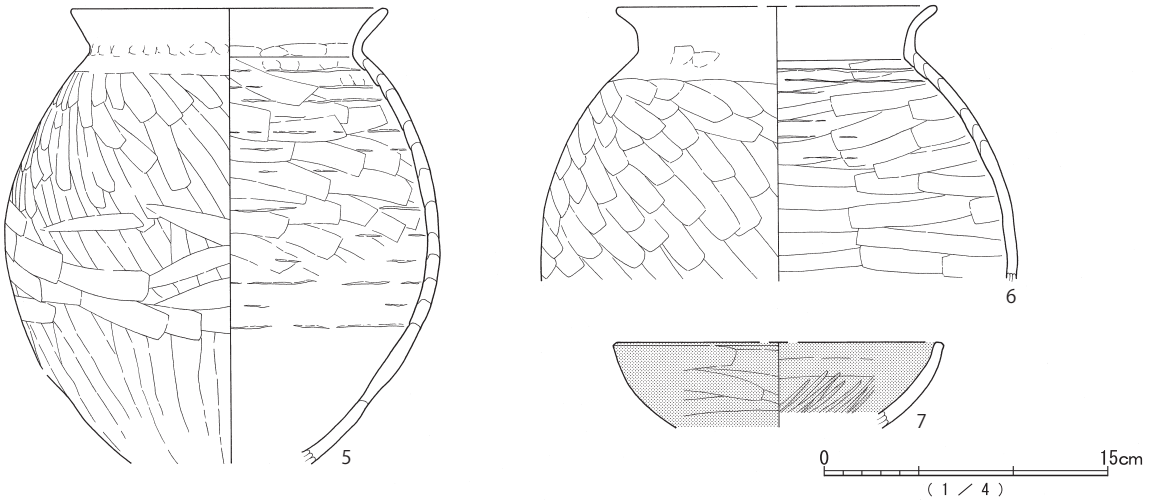


Fig.171　SX02(1) 遺構遺物

SX02

覆土下層



覆土中層

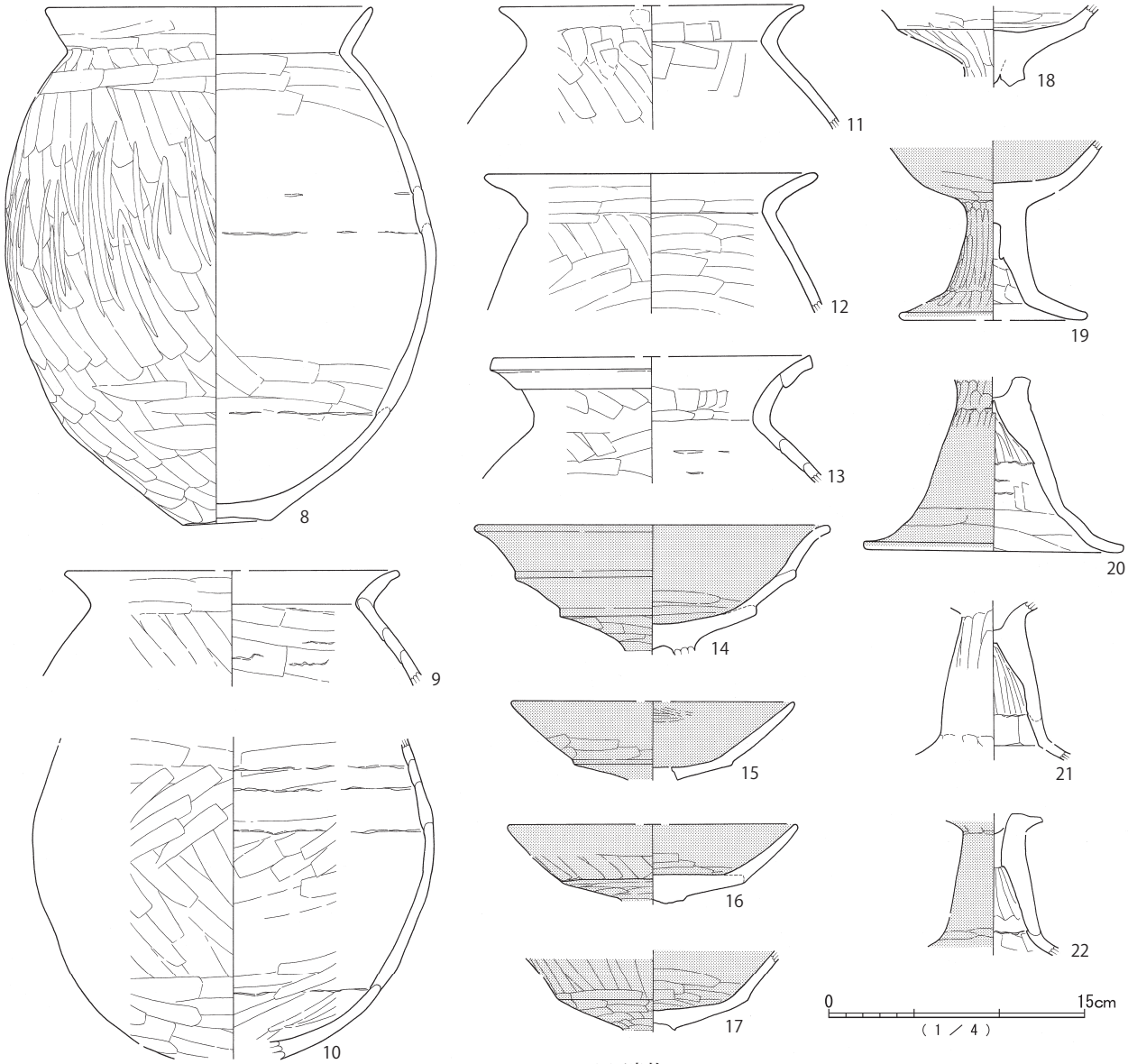


Fig.172　SX02(2) 遺物

SX02
覆土中層

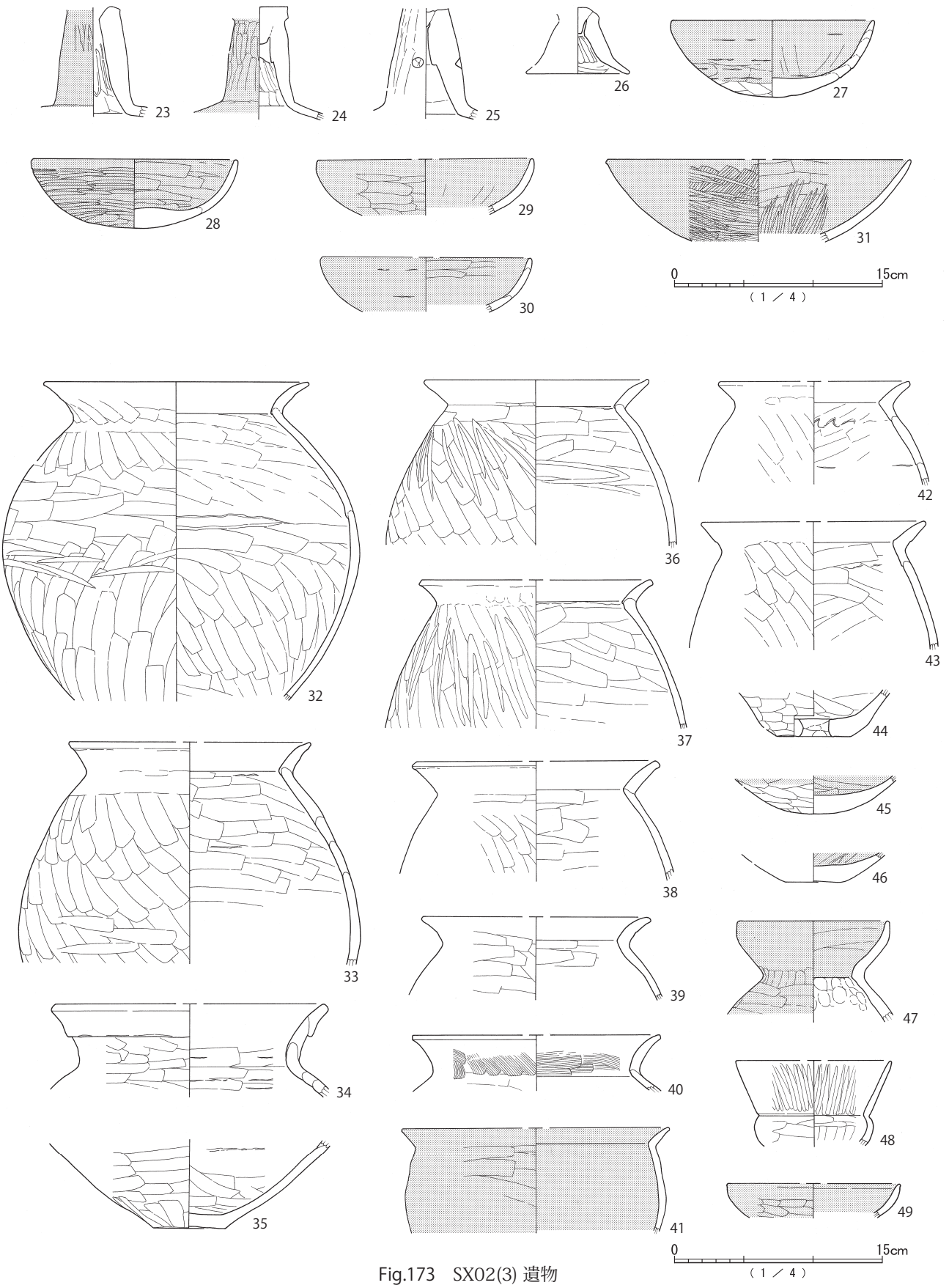
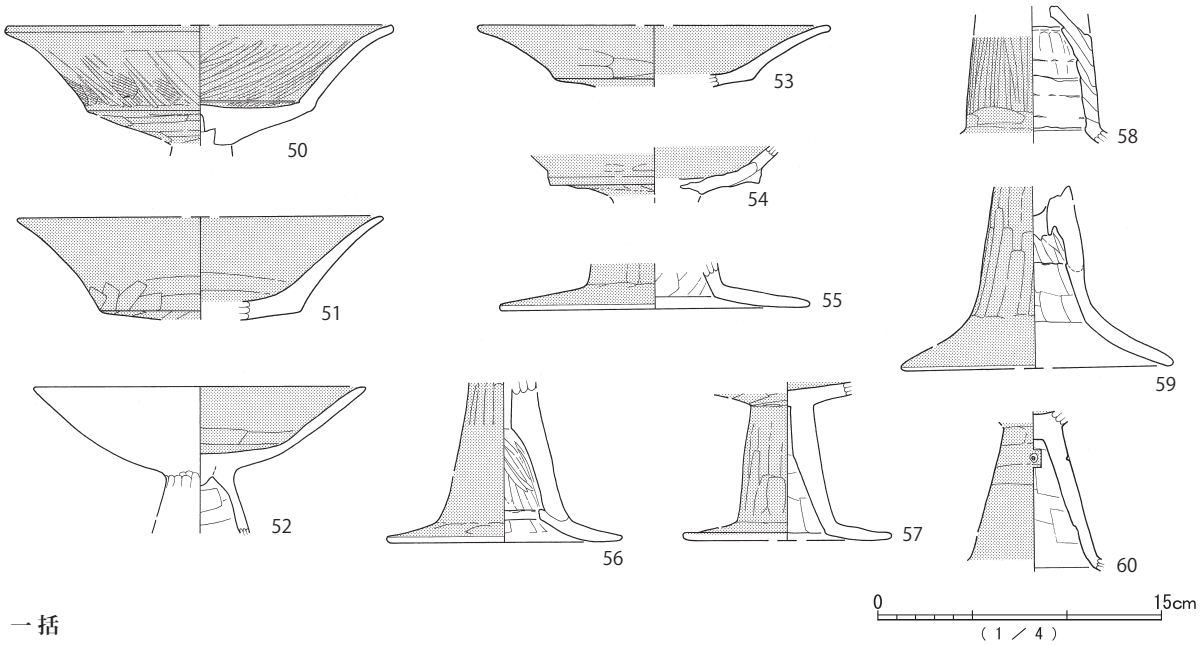


Fig.173　SX02(3) 遺物

SX02
覆土上層



一括

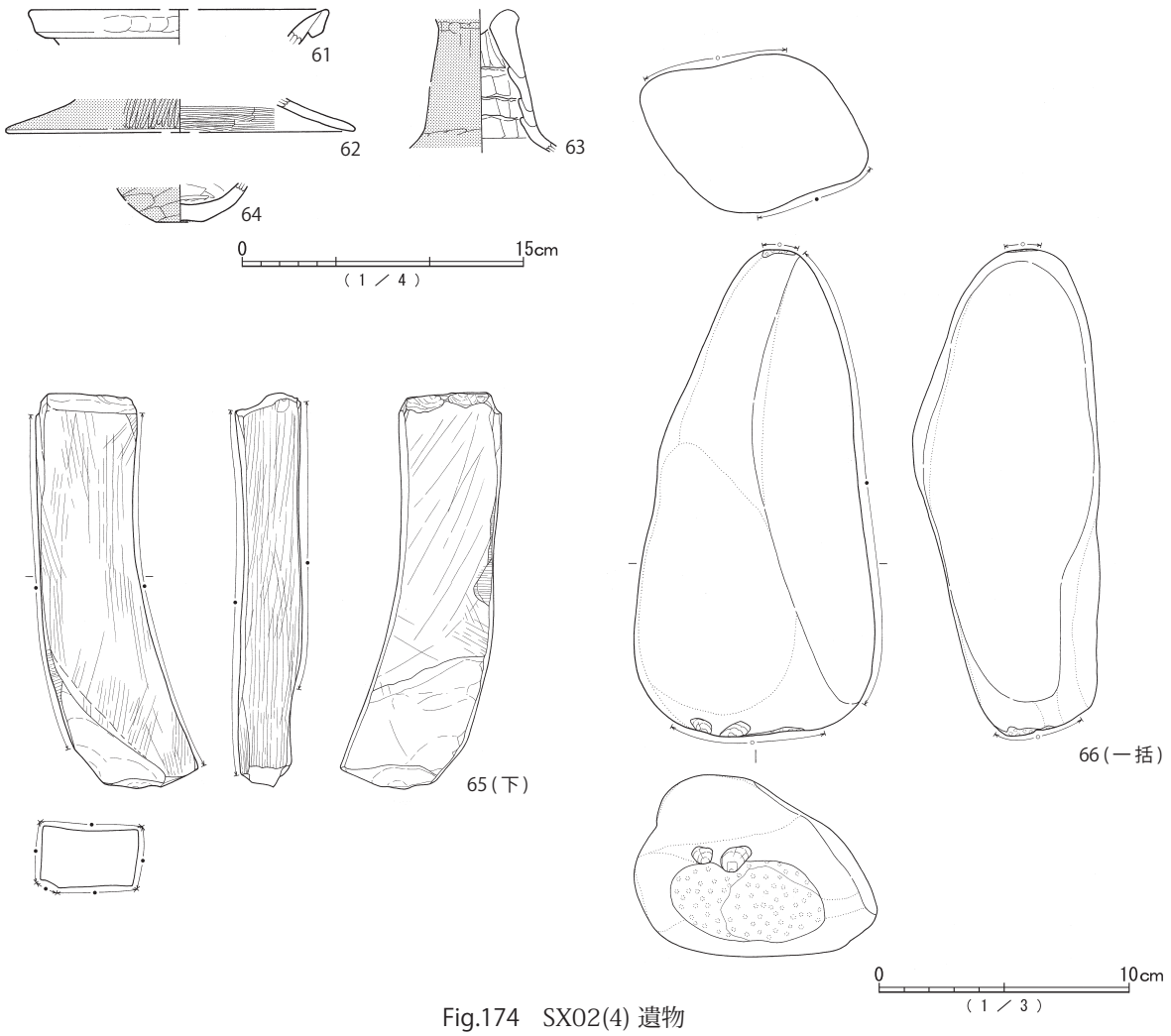


Fig.174　SX02(4) 遺物

SX02

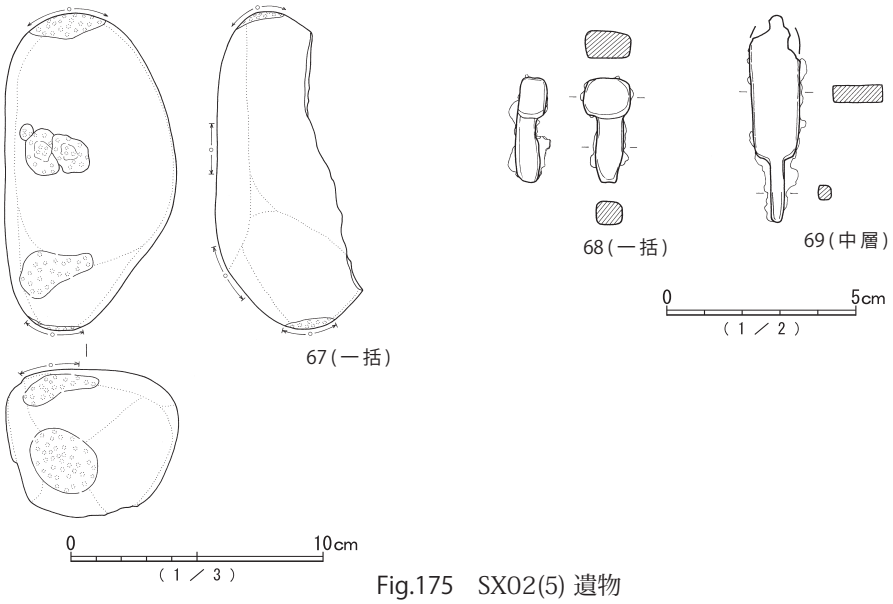


Fig.175　SX02(5) 遺物

出土土器群は、弥生時代終末期南岩崎３期に比定できる。土器以外では24が磨石である。

SX02（Fig.171～175、PL.71・72・73・80・89・102・103・104）

SX02は、A地点8J−08区他に所在する。Fig.6で提示したとおり、径6.0m程度の範囲に、古墳時代中期和泉式を主体とする遺物が集中する。なお、Fig.171は、実測個体とその遺物接合関係のみを表記している。

SX02は、A地点谷部底に位置している。谷部では、表土下より多量の遺物が出土したが、第１章第３節でも述べたとおり、調査段階で谷部包含層とした遺物の集中は、SX02以外では基本的に竪穴範囲に限定され、黄褐色ソフトローム層上の暗褐色土層にはみられない。このことから、SX02も掘り込みをともなうことが想定され、その範囲規模から竪穴住居の可能性が高いと思われる。範囲南側で、焼土充填土坑が検出されているが、これについては、火床面が明確ではなく、調査段階では炉としてとらえてはいない。土坑規模は、径0.83～0.98m、深さ0.1mを測る。その周囲の標高は34.09～34.15mであった。

本遺構の出土土器は、和泉式を主体とするが、炉状土坑周辺下層は、1・2など弥生時代終末期にほぼ限定される。したがって、遺構としての時期は、弥生時代終末期南岩崎３期の可能性が高いと判断する。ただし、炉状土坑を竪穴住居の炉と考えた場合、和泉式の分布は北側へ偏在し、この竪穴への投棄とは考えにくい。さらに別遺構が存在した可能性もある。

土器以外では、65が砥石、66が磨敲石、67が敲石、68が不明鉄製品、69が鉄鏃である。

SX03（Fig.176・177、PL.6・73・89・105）

SX03は、B地点11R−21区他に所在する。表土直下、確認面とした新期テフラ層よりやや上部、東西5.6mの範囲から、古墳時代中期和泉式を主体とする土器がまとまって出土した。南側は調査区外となる。竪穴住居の可能性もあるが、遺構としての痕跡は検出できなかった。なお、平面図Pitは、下層で検出したものも含め図化した。確実に柱穴と判断できるものは認められない。

SX03

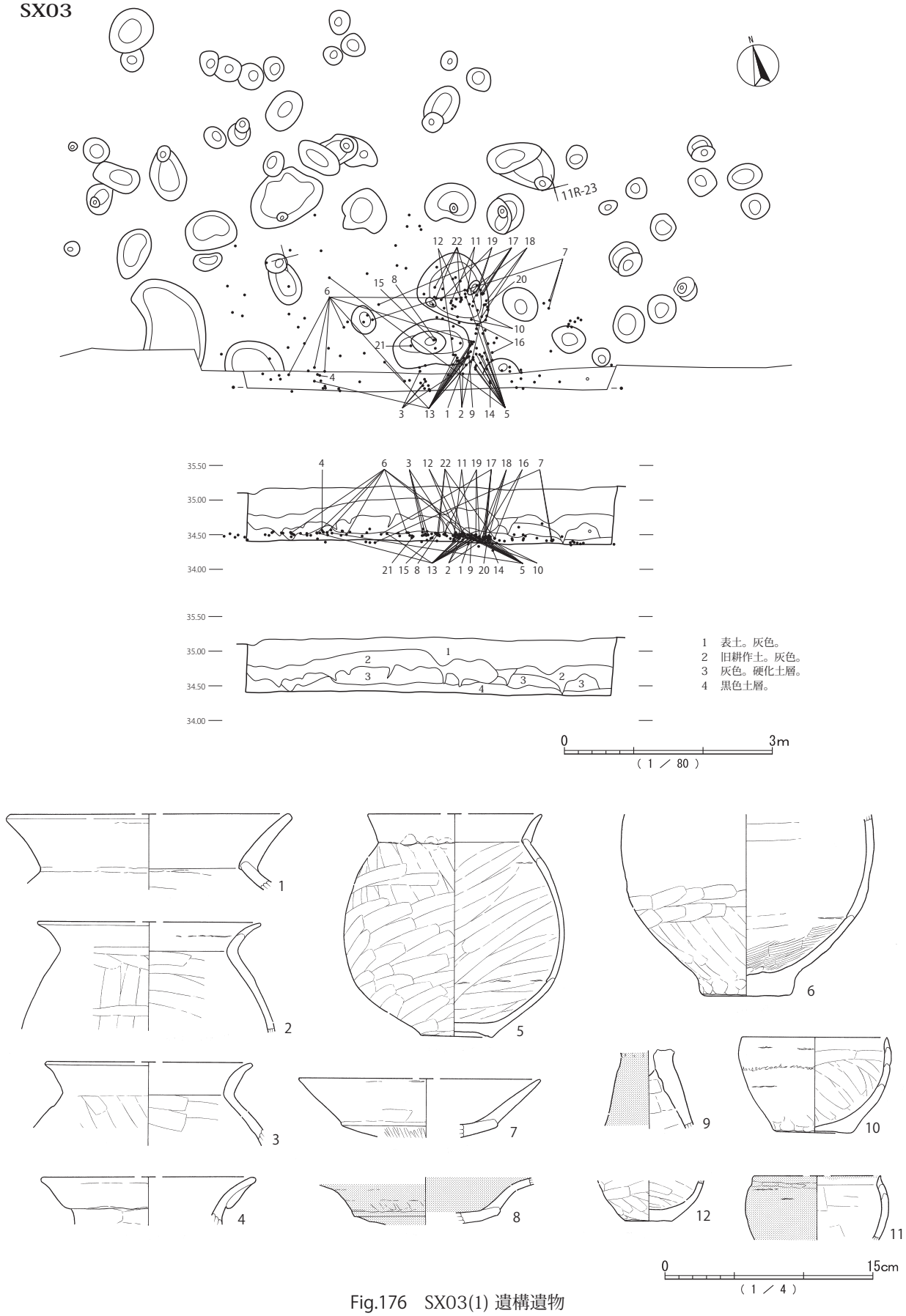
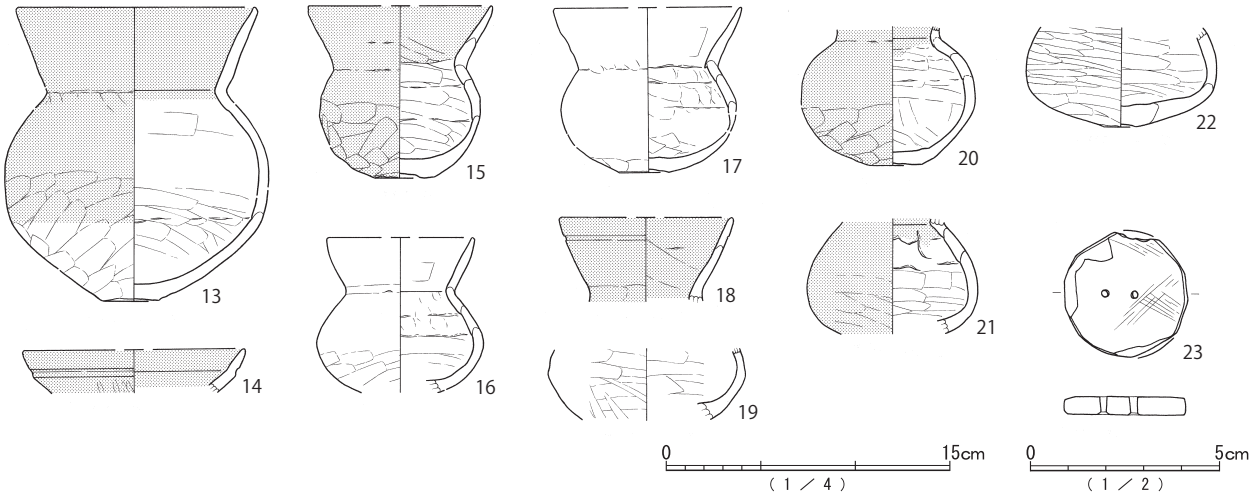


Fig.176　SX03(1) 遺構遺物

SX03



SX04

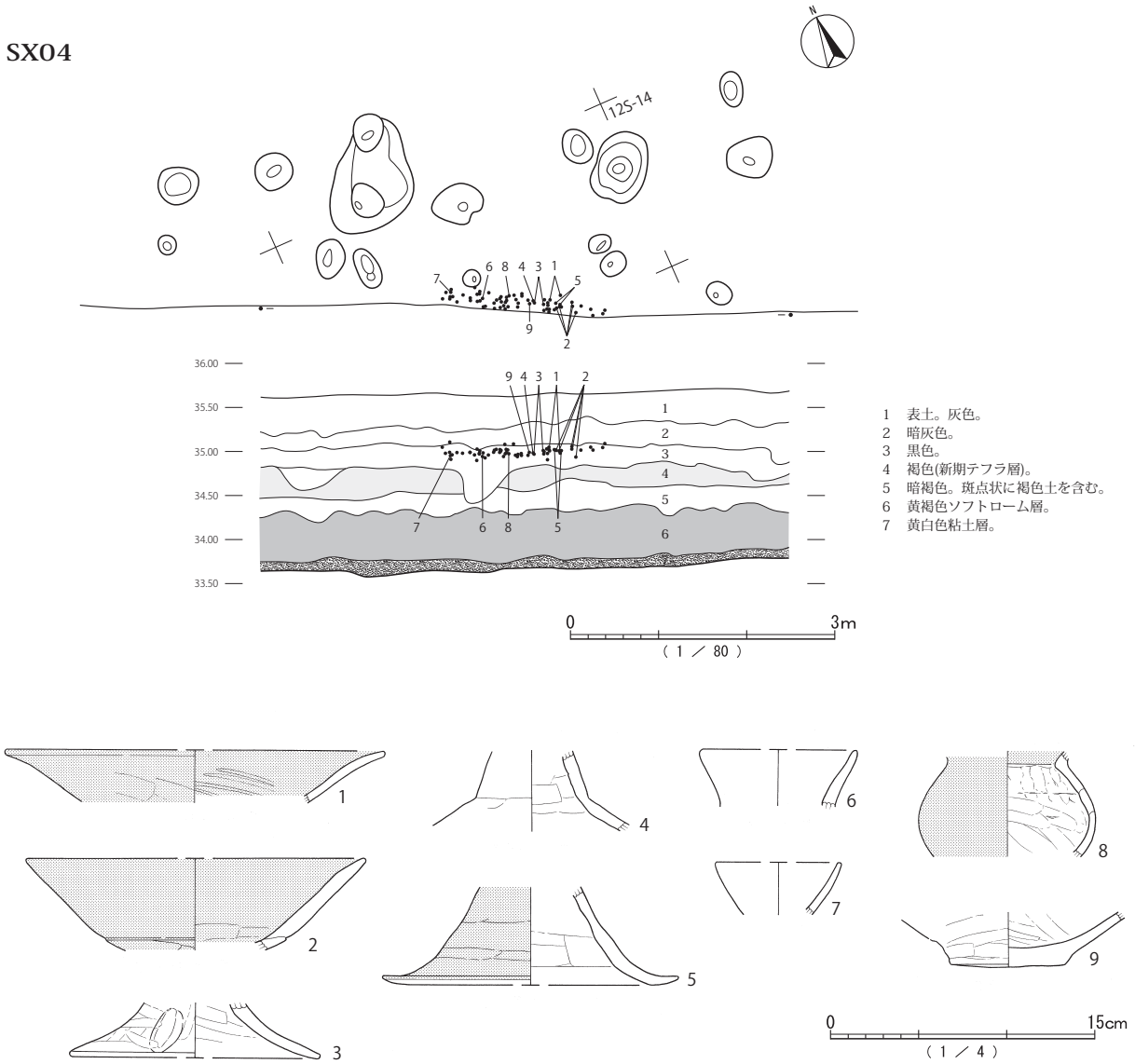
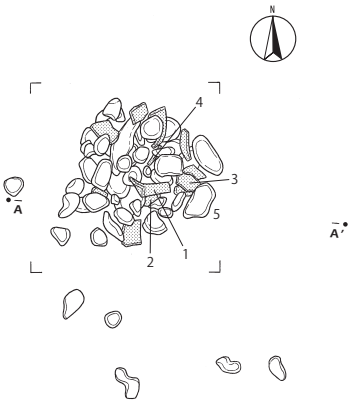
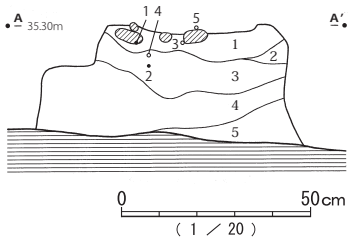


Fig.177　SX03(2) 遺物、SX04 遺構遺物

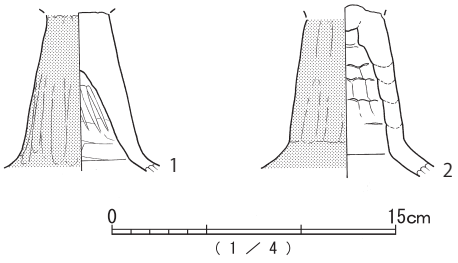
SX05

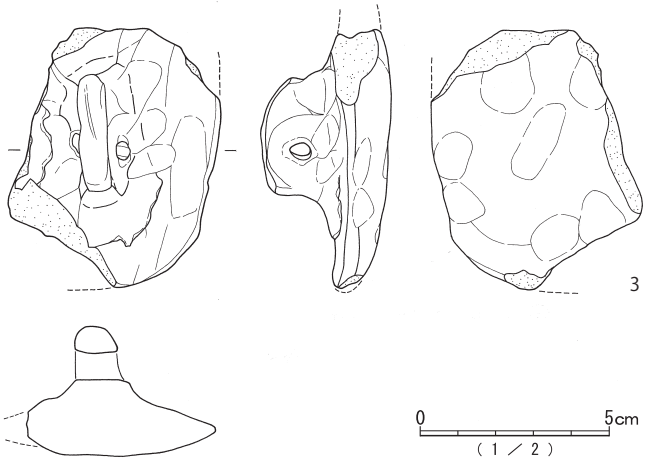
7H-25

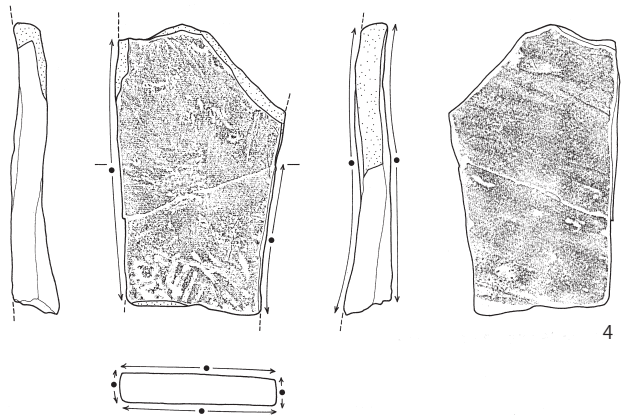




断面A－A'
1　黒褐色。黄白色粘土粒を多量に含む。
2　暗褐色。ロームブロック主体。
3　暗褐色。ローム粒をまばらに含む。粘性弱い。
4　暗褐色。炭化物をわずかに含む。粘性強い。
5　黒褐色。粘性強い。しまり強い。







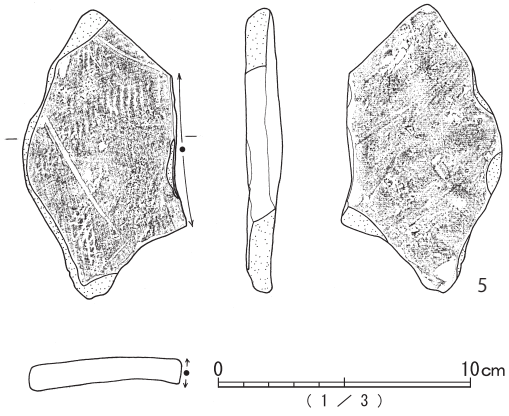


Fig.178　SX05 遺構遺物

SX06

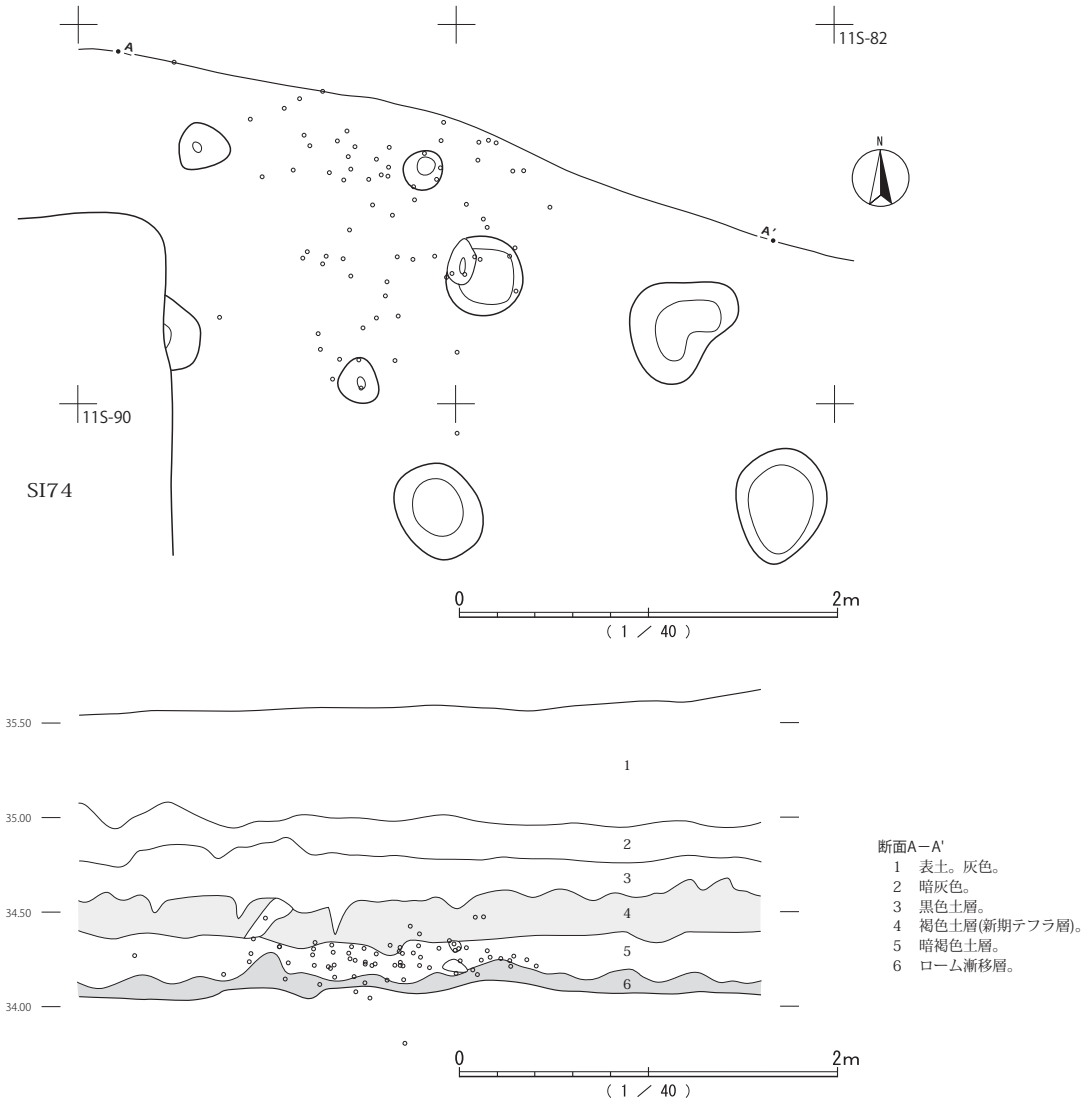


Fig.179　SX06 遺構

所属時期は古墳時代中期5a期と推定する。

SX04（Fig.177、PL.37・73）

SX04は、C地点12S−13区他に所在する。調査区南壁際から古墳時代中期和泉式を主体とする土器がまとまって出土した。層序は､表土から新期テフラ層の間にあたる。竪穴住居の可能性もあるが、遺構としての痕跡は検出できなかった。なお、平面図Pitは、下層で検出したものも含め図化した。

SX05（Fig.178・180、PL.6・37・73・104・105）

SX05は、A地点7H−25区他に所在する。集石であり、弥生時代中期宮ノ台式期の竪穴SI13の覆土上で検出した。SI13床面からは約0.25mを測る。径約0.5mの範囲に礫約60点が集中し、若干その周囲に散在するものも含め、7H−25区全体で143点が出土した。礫の石質、重さはFig.181のとおりであるが、集計は一括出土をのぞいている。礫は、割れのない円礫が全体の51.7%、確実に被熱痕

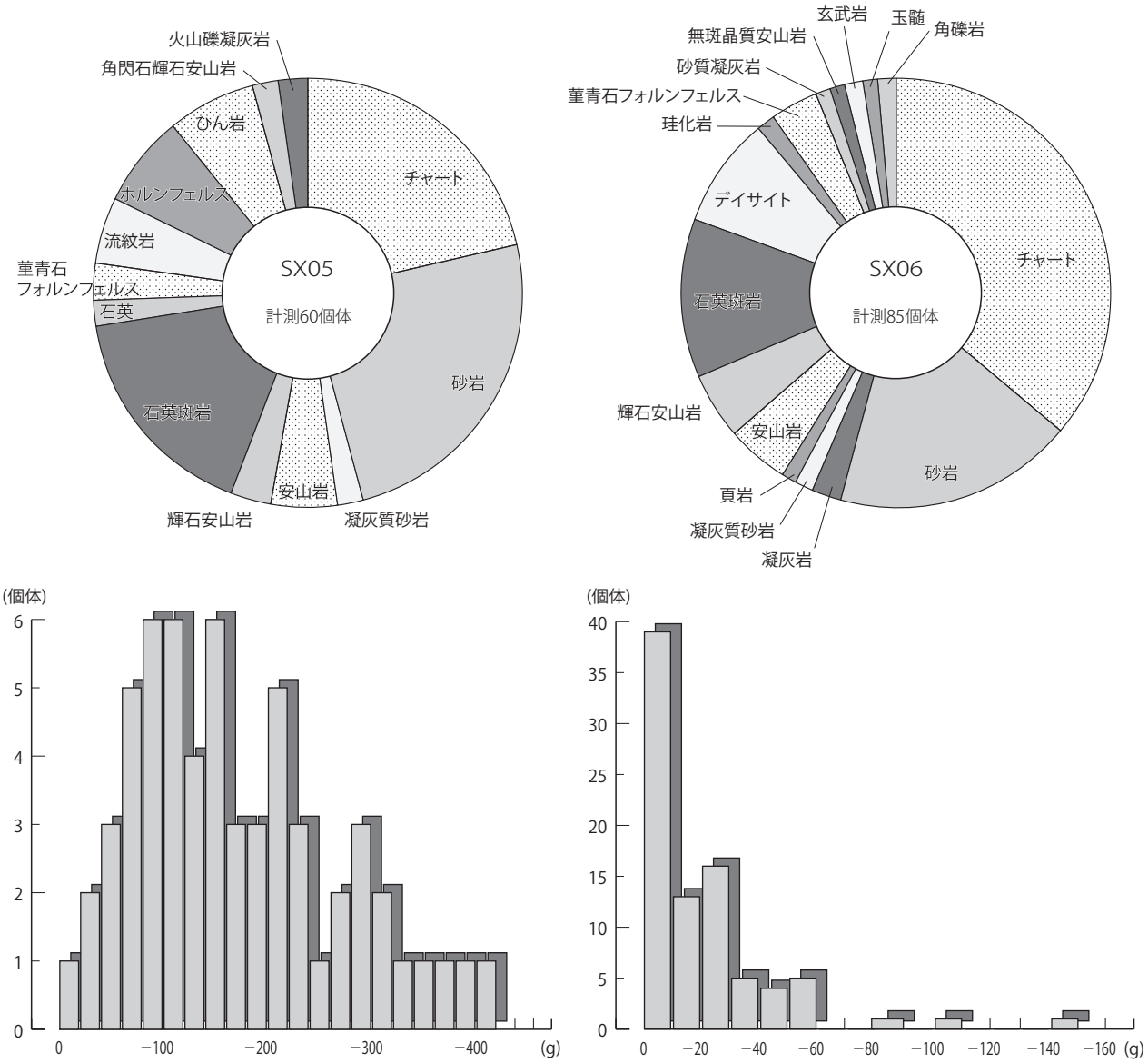


Fig.180　SX05・SX06　礫石質・重量

が認められた個体は16.7%であった。

周辺からはSI13に関連する宮ノ台式土器が多量に出土しているが、集石に混じって和泉式の高杯形土器脚部1・2、須恵器甕形土器の転用砥石4・5、鏡の模造品とも考えられる把手を付き鏝状の土製品3が出土している。

所属時期は古墳時代中期5b新期と推定する。

SX06（Fig.179・180、PL.37）

SX06は、C地点11S−80区他に所在する。集石であり、北側は調査区外となるが、1.50〜1.70m程度の範囲で礫の分布が認められた。点数は85点であった。出土層序は新期テフラ層とローム漸移層の間を中心とする。礫の石質、重さはFig.180のとおりである。ほとんどが割れた小礫であるが、被熱痕が認められる個体は、全体の12.5%であった。

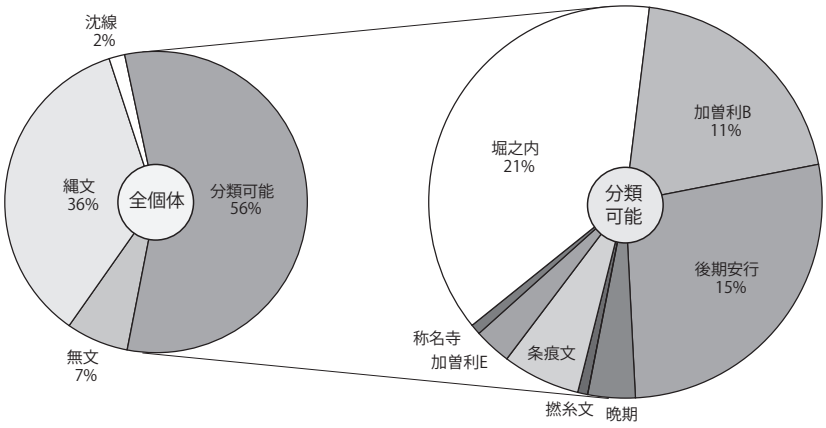
出土層序から縄文時代後期初頭以前と推定するが、縄文土器は認められなかった。

第9節　縄文土器

(1) 概要

縄文時代の出土遺物は、弥生時代以降の遺構中や遺構外で取り上げられ、抽出された222点の縄文土器と、礫・石器類である。調査面積に比して少量であり、縄文時代の生活痕跡は希薄である。分類可能な土器片は125点あり、その内訳はグラフ右のようであった。後期前葉～後葉の資料が比較的まとまっている。掲載土器51点のうち、約半分の27点が6H90列～7H・7I区付近に位置する弥生時代以降の遺構中から出土しているが、時期は早期から晩期まで全体に及ぶ。この付近は、標高35m前後の段丘面上の埋没谷に向かう斜面上部にあたる。斜面上の平坦面は削平されていた部分に当たるので、この付近に後期の遺構が存在していた可能性も考えられる。

なお、石器類については、礫・礫石器が主体であって時代の特定が難しいものが大半であった。したがって、縄文時代に特定が可能なものを含め、遺構出土石器はすべて各遺構図に掲載している。



分類	無文	縄文	沈線	撚糸文	条痕文	加曽利E	称名寺	堀之内	加曽利B	後期安行	晩期
点数	15	78	4	1	8	4	1	47	25	34	5

Fig.181　南岩崎遺跡塚越地区出土縄文土器

(2) 縄文土器 (Fig.182・183、PL.98・99)

早期前葉 (1)　撚糸文土器の小片 1 点のみである。1 は口唇丸頭状で、きわめて疎な撚糸文をもつ、撚糸文土器の後葉の土器である。

早期後葉 (2・3)　胎土に繊維を含む条痕文土器は 8 点出土した。2 は縦の刺突列をもつもので、茅山下層式であろう。3 は外面タテ、内面ヨコの条痕をもち、口唇上に貝殻腹縁圧痕文を有する。

中期中葉 (4・5)　加曽利 E 式小片 4 点であり、4・5 はいずれもキャリパー型深鉢の胴部片であり、加曽利 E Ⅱ式であろうか。

後期初頭 (6)　称名寺式土器の小片 1 点 (6) がすべてである。沈線意匠文に列点文を充填する。

後期前葉 (7～21)　堀之内式土器は 47 点と最も多く、大破片を含んでいる。7～16 は堀之内 1 式であろう。7 は単独の蕨手状沈線をもつ古手の土器である。9～12 は同一個体で、薄く外反し、口唇の屈曲する口縁、集合沈線による頸部の区画・胴部の意匠文をもつ。17～19 は半截竹管による平行沈線をもつ同 2 式であろう。18 の下端破断面は平滑化し線状痕が観察される。二次的に利用された

Fig.182　縄文土器(1)

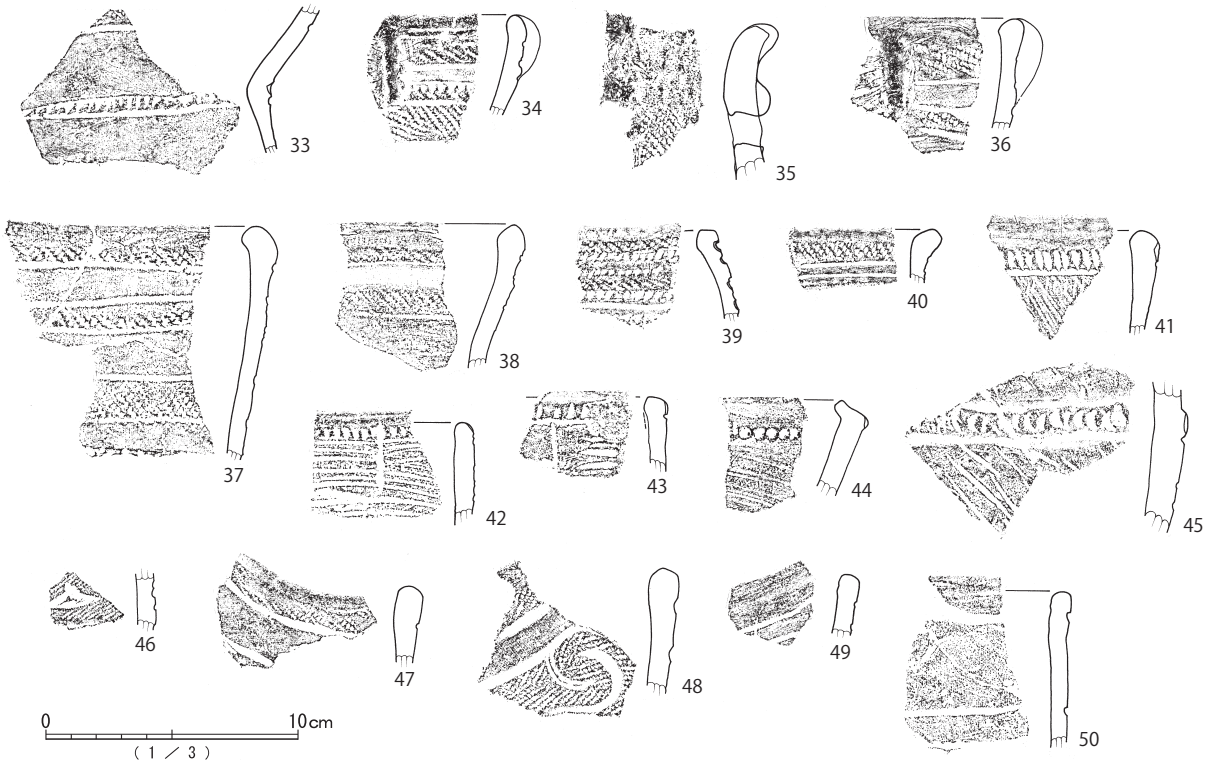


Fig.183　縄文土器(2)

ものとみられる。20・21 も概ね堀之内式に伴う素文系の土器であろう。

後期中葉　加曽利 B 式～曽谷式土器は 25 点である。大破片を含んでおり点数も比較的多い。22・23 は同一個体で、3 単位の把手をもつ波状口縁深鉢である。沈線間に縄文、区切文を施し、口唇に刻み、内面に段をもつ。24 は平縁の浅鉢であり、器面を入念に磨いた後、平行沈線、区切文を施し、縄文を充填している。以上は加曽利 B1 式であろう。25～32 は加曽利 B3 式～曽谷式であろう。25・26 は縄文の上に斜格子状沈線を、27～30 は 2 段の紐線、縄文、内面沈線をもつ。31 は縄文をもつ口縁下端に稜をもつが、瘤状突起の左側は無文である。32 は波状口縁の波頂部で、沈線に区切られた連続刺突帯をもつ。

後期後葉　後期安行式は 34 点である。点数は堀之内式に次いで多い。34～40 は後期安行式の帯縄文系土器である。34 は 2 段目の帯が刻みになっている。35 は板状の把手部分で、円孔をもつ。36～38 は平縁の土器である。39 は沈線内に連続刺突を施す小型の土器である。41・42・44 はこの時期の紐線文系土器であろう。41 は沈線区画内に長く・深い刻みをもつ。43 はタテの沈線区画をもち短沈線を充填する。44 は口唇の屈曲部に細い紐線をもつ。

晩期前半　小片 5 点である。43・45 は安行系の紐線文系であり、46～50 は安行Ⅲ a 式の三叉文、47・48 は安行 3b・姥山系の波状口縁であろう。49 は繊細な沈線、50 は太目で粗雑な沈線をもつもので、いずれも晩期の土器であろう。

である (Fig158−1)。これより新しい遺物は混入しないので、ほぼ常滑8型式期 (14世紀後葉) に近い段階での使用を想定して良いと思う。この他、底部穿孔したロクロ土師器坏 (Fig158−3) は、井戸祭祀関連遺物の可能性がある。見込みもナデず、外見上ロクロ土師に分類したが、14世紀後葉のカワラケの可能性を残すものである。また、覆土内から多数出土した礫群は井戸の廃絶祭祀と捉え得るが、検出状況の記録がなく、地山の万田野層から崩落・流入した可能性もある。

SE02　本遺構の覆土中からも、常滑産陶器8型式の片口鉢I類が1点 (Fig158−2) 出土し、これより新しい遺物の混入が認められない。礫も大量出土している。

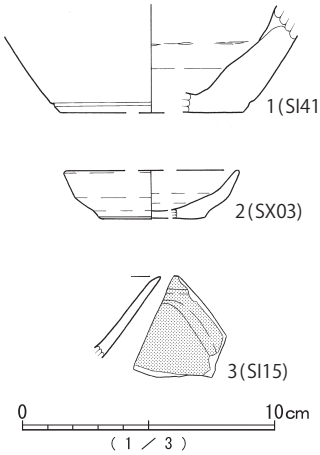


Fig.184　中世遺物

(3) 溝状遺構

SD09・10　SD09は路床硬化層を有する道路遺構である。確実に伴う遺物が無く、詳細な時期は不明だが、平面プランが円墳 (SM01) 周溝に規制されて婉曲しており、本遺構の埋没による周溝縮小

Tab.4　南岩崎遺跡中世遺物観察表

遺構 No.	挿図 No.	遺物 No.	調査時 No.	状況	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴
SE01	158	1	356/023	一括	常滑	片口鉢Ⅱ類	縦方向ヘラ削り後、全体を横方向ナデ調整　口唇を面取るが幅は体部断面とほぼ変わらない　口唇上方のみ若干突出	横方向ナデ
SE02	158	2	356/058	一括	常滑	片口鉢Ⅱ類	輪積み成形後、体部下位を縦方向ヘラ削り、全体を横方向ナデ調整、口縁をやや強くナデ締める　口唇を面取るが幅は体部断面とほぼ変わらない	横方向ナデ
SI41	184	1	356/019	一括	常滑	広口壺	体部縦方向ヘラ削り後、横方向ナデテリが出る	軽くナデるが輪積痕残る
SX03	184	2	368/099		土師質土器	カワラケ (小皿)	底部、回転糸切痕ナデ消し、やや突出　体部段ナデ	見込みのナデは不明
7I−50	184	3	347/7I−50	一括	龍泉窯系青磁	椀	青磁釉 (7.5Y6/2 灰オリーブ) 施釉、光沢あり貫入	劃花文を片切彫で描く　青磁釉施釉

挿図 No.	遺物 No.	遺存度	焼成	色調	口径	最大径	底径	器高	胎土	時期	備考
158	1	破片	優	2.5YR4/4 にぶい赤褐／10YR7/1 灰白	(26.4)	(27.7)	—	—	焼き締まる　白色小粒・微黒粒	8型式	使用痕は認められない
158	2	破片	良	N5/ 灰	(29.1)	(31.0)	—	—	長石中〜小粒多	8型式	内面使い込みによる擦痕顕著
184	1	破片	優	10R4/4 赤褐/7.5YR5/1 褐灰	—	—	(12.0)	—			
184	2	1/4以下	良	7.5YR6/6 橙	(6.7)	(6.8)	(4.2)	1.9	海綿骨針・金雲母微粒、褐鉄鉱微粒少		
184	3	破片	良	5Y8/1 灰白	—	—	—	—	密、白色微粒少	I−2a 類	

常滑産陶器は、中野晴久他1994「中世常滑焼　技術・生産・編年」(全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集
日本福祉大学知多半島総合研究所発行　所収) に基づき分類した。
青磁は、森田　勉1981「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究No.1』日本貿易陶磁研究会編　所収　に基づき分類した。

第10節　中世

中世に帰属する遺構群はB地点に集中し、掘立柱建物跡4棟（SB01～04）と同軸方向の溝群（SD12～20）、井戸2基（SE01・02）、溝10条（SD09・10・12～15・17～19・22）が該当するものと捉えたが、確実に伴う遺物がほとんど無く、詳細は明確にし難い。これらの造営期や性質について、個々の遺構の詳細を検討した上で推測してみたい。

（1）掘立柱建物跡

SB01　南北方向に桁行を構える側柱建物である。桁行における柱筋は縄打ちに正しく乗るが、柱間は一定せず、簡素な小屋と思われる。梁行方向の柱穴配列が明確でなく、桁行方向北側に向け同規模のピットが3基並ぶことから、桁行が北方向に260㎝ほど伸びる可能性もある。この場合、間仕切りを1条持つ住居的な家屋が想定されてくるが、基本的に伴うと思われる井戸（SE01）と上屋が近接しすぎる点で不自然なため、前者の規模と考えたい。本遺構はSI46より新しいが、出土遺物が皆無であり、時期は断定できない。ただし近隣の井戸（SE01・02）に伴う小屋と思われ、室町前期の遺構と推測する。

SB02　桁行を南北方向に構える桁行3間×梁行2間の上屋と推定した。桁行中央には棟持と思われる柱筋が通る。その東側に並ぶ複数の少ピットは床束柱跡の可能性もあるが、明確でない。建物の南側には塀を伴うが、簡素な廂の可能性もある。

確実に伴う遺物は無く、時期を断定することはできない。しかし建物北側はSB03の柱筋延長ラインを起点とし、軸向きも合致するので、縄打ち自体がSB03上屋に規定されたことは確実である。SB03付属建築物の可能性が高いと言えよう。

SB03　桁行を東西に構える。桁行6間×梁行4間規模で、梁行南北両側の柱間がやや狭いため、4間×2間の身舎に南・北両面の広縁を付けた構造と思われる。内柱の2本を欠くため、土間床と板張床の共存形態が推定される。

確実に伴う遺物は皆無で、詳細な時期断定は困難であるが、柱穴覆土はSB02共に黒褐色を呈し、少なくとも西上総域に普遍的な、灰色味かかる近世覆土よりは古く思えた。ただし当地域の台地上戦国期遺構覆土に普遍的なローム粒・ブロックの一定量混入もなく、周辺の裸地化が進まない環境にあったことが推察される。建物の軸向きはSB01と異なるため、これと同時期とは考えがたい。むしろ近世以降の道路や溝（SD23）の軸向きに近いことから、近世と景観的に連続した戦国期に帰属する可能性が高い。本遺跡の中世遺物は、常滑8型式期前後（室町前期）と古瀬戸後期様式Ⅳ期以降（戦国後期）の2ピークがあるが、後者は本遺構周辺に散見されたもので、時期的に伴う遺物群と考えたい。なお、本遺構の上屋建造物は、円墳（SM01）マウンドの中心点に棟を向け、マウンドに接するSB02上屋建築物を付属させるなど、古墳を強く意識している。

SB04　桁行を東西に構える桁行2間×梁行1間の小規模な側柱建物跡である。2.3ｍ南側にはピット列があり、小柴垣のような区画構造物を伴ったものと想定されるが、建物規模から居住家屋とは考えられない。

伴う遺物は無いが、軸向きをSB03・02と同じくすることから、同時期の建造物と思われる。

（2）井戸跡

SE01　確実に中世と言える出土遺物は、覆土中から出土した常滑産陶器8型式の片口鉢I類1点のみ

後、マウンドに接する形でSB02が構築されたと考えられるので、戦国期以前の道路遺構と推定する。SD10もこれと同時期あるいは付け替え道路と思われ、中世遺構と推測する。

SD12～15・17～19　伴う遺物はほとんど無いが、軸向きがSB03と合致するので、戦国後期の区画溝と思われる。SD12・15・17・19とSD13・14・18は同一の区画意識を継承する上で新旧がありそうだが、前後関係は不明である。建物に直接伴うのは前者であろう。SD15は路床硬化層を伴う道路遺構で、SD20・21より古い。

SD22　軸向きがSD09・10に近く、古瀬戸後期様式Ⅳ期の天目茶碗が1点出土したことから、戦国期に遡る可能性がある。ただし近世陶磁器も少量混入するため、断定できる状態ではない。

（4）遺構群の時期と性格

以上、中世と推測される遺構の概要を述べた。これらは、井戸2基（SE01・02）・掘立柱建物1棟（SB01）と、掘立柱建物2棟（SB02・03）及びこれを取り巻く溝群（SD09・10・12～15・17～19）に大別でき、前者をA遺構群、後者をB遺構群[(1)]とする。それでは、両遺構群の活用時期はいつごろなのであろうか。出土遺物から考えてみたい。

出土陶磁器類はわずか17点で、有効なデータは得られなかったが、常滑8型式と瀬戸・美濃大窯期にピークが認められた。調査区における中世陶磁器類の消費がこの2期間に促された可能性を示す。前者を1群（常滑片口鉢3点）、後者を2群（瀬戸・美濃天目茶碗1点、擂鉢2点、皿3点、鉢1点、合計7点）とする[(2)]。

A遺構群は中心遺構の井戸2基それぞれに常滑8型式の片口鉢を伴うことから、その使用時期も遺物1群の消費期と合致する可能性が高い。これをⅠ期とし、室町前期（14世紀後葉）に比定する。

一方、B遺構群は伴う遺物が無いが、遺構の概要で触れたとおり、覆土が近世より古く見えること、総体として近世的景観の原風景を呈したと思われることから、2群消費期と時期的に合致する可能性は高いであろう。この時期をⅡ期とし、戦国後期から江戸初期（15世紀末から17世紀中葉）に比定する。

なお、Ⅰ・Ⅱ期間は断絶なく継続した可能性もあるが、時期的間隙を埋める遺物が皆無である以上、何とも言い難い状況である。

次に遺構群の性格について触れてみたい。なお、台地東側は「西国吉砦跡」として周知されているが[(3)]、これを城郭と決定するには未だ慎重な考証が必要であり、調査区との関連についても現時点では触れられないことを明記しておく。

今回検出した遺構群は、比較的整然とした建物プランや一定規模の区画溝などから、屋敷を構成したことが想定される。青磁椀・天目茶碗など、比較的嗜好性の高い遺物が見えるので、あまり低い階層の居住地とは思えない。単純に考えれば自立した農民クラスが浮上するが、遺構のあり方から察するに、瀬戸・美濃大窯期に一般的な、台地整形区画・地下式坑などを伴う台地上集村遺跡とは異なる形態で、注意を要する。特にB遺構群は円墳（SM01、近年までマウンドが遺存した）と密接な関係を有するように見受けられることから、何かしらの信仰に基づき、あるいは取り込んだ空間創出を意図し、普請された可能性が濃厚である。また、これらの遺構覆土には、戦国後期の台地上遺跡に顕著な、広域裸地化を示すローム粒・ブロックがあまり混入しないことから、畑地や居住域から比較的隔離した環境が想定できる。以上の点から、村落奥地にあった寺社跡の可能性が高いと思われる[(4)]。住民の話によると、この古墳は近世以来「四民塚」と呼ばれる信仰対象地で、平将門の配下四人を埋葬し

たとの伝承があり、文化年中には村民により大刀が発掘され、蓑毛神社に奉納されている[5]。吉野古墳群に含まれるが、古墳分布域には現在も金剛寺・淵龍寺・根本寺などの寺社が密集し、マウンド群域を聖地視した背景が見て取れよう。遺跡の中世遺構群は、これら近世寺社の草分け的な施設と理解しうる。よって、近世に見る当域の村落構造や景観の原型も、室町から戦国期初頭に形成された可能性が高い。

また、B遺構群建物は比較的居住性が高そうな規模を持ちながら、遺物２群の総量は少なく、一般の生活廃棄が明示される状況ではない。これを無住施設と仮定すれば、恒常的な維持管理の主体は村落ということになる。例えば宮座のような、村落結合を確認する場として評価する余地があるかもしれない。

Tab.5　南岩崎遺跡中世以降遺物集計表 (1)

中世遺物集計表　　調査面積 :7,500 ㎡

種別	器種	分類	点数	重量 (g)	出土遺構等
龍泉窯系青磁		小計	1	8.3	
	椀	I−2a 類	1	8.3	7I−50
渥美産陶器		小計	1	70.0	
	甕		1	70.0	SD17
常滑産陶器		小計	10	747.0	
	広口壺		1	78.5	SI41
	甕		4	213.2	SD01・SM01・8K−65・確認D地点
	片口鉢Ⅱ類	８型式３点	5	455.3	SE01・SE02・SS01・C地点
瀬戸・美濃系		小計	4	123.5	
	天目茶碗	後Ⅳ	1	5.0	SD22
	擂鉢	後Ⅳ〜大窯	2	116.1	SD01・確認D地点
	端反皿	大窯１	1	2.4	確認D地点
土師質土器		小計	1	7.1	
	カワラケ (小皿)		1	7.1	11R−20
中世遺物総計			17	955.9	1 ㎡あたり 0.002 点

近世〜近代遺物集計表

種別	器種	分類	点数	重量 (g)	出土遺構等
肥前系磁器		小計	20	102.9	
	小瓶	Ⅴ期 (18c 末〜19c 中)	1	3.4	SI08
	向付	幕末〜明治初頭	2	10.1	SD25・確認D地点
	碗		12	73.9	
		Ⅳ期 (18c 前葉)	10	69.9	SD11・SD22・SS02・SM01・11R−0・11S−81・確認D地点
		Ⅴ期 (18c 末〜19c 中)	1	3.0	確認D地点
		近世	1	1.0	確認D地点
	茶碗	幕末〜明治	1	3.3	SD11
	筒丸碗	Ⅳ期 (18c 後葉)	2	6.8	SD25
	皿	Ⅳ期 (18c 中葉)	1	4.3	確認D地点
	不明	18〜19c	1	1.1	SI64
瀬戸・美濃産磁器		小計	15	64.0	
	猪口	近代	2	5.3	SI08・SD22
	碗		8	38.6	
		19c	1	6.6	SI73
		18〜19c	1	0.9	11R−20
		幕末〜明治	3	14.4	SD22・SM01・確認D地点
		明治	1	3.0	11S−81
		近・現代	2	13.7	SI70・SD01

Tab.6　南岩崎遺跡中世以降遺物集計表（2）

種別	器種	分類	点数	重量（g）	出土遺構等
瀬戸・美濃産磁器	茶碗	19c 中葉	2	5.6	SD22・確認D地点
	皿		2	13.0	
		19c	1	12.1	SI73
		幕末～明治	1	0.9	SM01
	不明	近・現代	1	1.5	11S−81
堺系炻器		小計	4	86.4	
	擂鉢	17c	1	11.6	SB02
		19c	2	63.4	SI73
		近世	1	11.4	SM01
常滑産炻器		小計	4	123.1	
	急須	19c	1	5.5	SI71
	甕		2	102.2	
		C 類（18c）	1	93.5	SI73
		近世	1	8.7	SM01
	徳利	近世	1	15.4	SD24
肥前系陶器		小計	2	33.3	
	碗		2	33.3	
		Ⅲ期（17c 後葉）	1	31.9	確認D地点
		17～18c	1	1.4	10O−34
京都・信楽系磁器		小計	4	25.7	
	土瓶	幕末～明治	1	2.4	SI05
	碗		3	23.3	
		18c 後	1	18.7	確認D地点
		18～19c	2	4.6	SI08・確認D地点
信楽産陶器		小計	1	1.8	
	土瓶	幕末～明治	1	1.8	SI64
瀬戸・美濃産陶器		小計	15	201.6	
	香炉	18c	1	10.6	SD25
	灯明皿	19c	1	5.7	SI73
	壺	18～19c	1	16.1	確認D地点
	徳利		4	25.6	
		18～19c	1	6.7	SD01
		18c 末～19c 中	1	4.9	確認D地点
		近世	2	14.0	SD22・SM01
	碗		4	39.9	
		17c 後～18c 前	1	22.1	確認D地点
		18c 後	1	13.0	確認D地点
		18c 末～19c 前	2	4.8	確認D地点
	志野鉢	登窯 1（17c 前）	1	53.8	確認D地点
	志野皿		2	32.6	
		登窯 2（17c 中）	1	11.4	SX04
		17c 後葉	1	21.2	SI71
	輪禿皿	登窯 2（17c 中）	1	17.3	確認D地点
志戸呂産陶器		小計	3	17.7	
	灯明皿	17c 中	1	5.1	確認D地点
	徳利	17c 末～18c	2	12.6	SI08・SM01
笠間産陶器		小計	1	2.3	
	小形壺	幕末～明治	1	2.3	確認D地点
不明陶器			2	30.9	
	徳利	近世	1	6.9	確認D地点
	植木鉢	現代	1	24.0	C地点
在地土器		小計	2	48.3	
	焙烙	17～18c	1	26.1	SD25
		18c	1	22.2	SI71
近世～現代遺物総計			73	738.0	1 ㎡あたり 0.01 点

肥前系陶磁器の分類は九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』に基づいた。
常滑甕の分類は惟村忠志1997「近世常滑大甕の編年と窯業画期素描」『牟邪志』8 所収 に基づいた。
在地土器の年代比定は両角まり 1996「内耳鍋から焙烙へ―近世江戸在地系焙烙の成立―」『 考古学研究』第 42 巻第 4 号　所収　を参考にした。

註釈

(1)　B遺構群については、掘立柱建物ないしはこれを包括した特定空間を対象とする同一の区画意識、あるいは土地利用意識に基づく関係を想定したもので、個々の遺構間においては多少の時期差が生じると考えられる。

(2)　龍泉窯系青磁碗I−2a類1点も、骨董的嗜好品として2群に収まる可能性がある。

(3)　千葉県教育委員会　1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』
なお、これはかつて鈴木英啓氏によって紹介された「西国吉砦」を改称したものである（村田修三他　1980『日本城郭大系6』千葉・神奈川 新人物往来社発行 所収）。

(4)　村落背後の古墳に接した堂宇の建立例として、市内においては草刈六之台遺跡の事例が知られている。ここでは草刈3号墳を改変した塚の正面に切土整地面を設け、3間×2間の礎石建ちによる小堂を建立している（『千原台ニュータウンⅥ』−草刈六ノ台遺跡−　千葉県文化財センター調査報告第241集）。古墳裾には板碑が立ち並び、付近から火葬跡や土壙も検出されているので、葬送儀礼の場としての機能が重視されたものであろう。

(5)　千葉県市原郡教育会　1916『千葉県市原郡誌　町村誌篇』

第11節　その他の遺物

南岩崎遺跡塚越地区は、縄文時代をのぞくと、弥生時代中期後半の環濠集落形成以降、古墳時代後期前半まで、ほぼ継続的に居住域として占地、利用されている。その後、SM01の造墓を契機として一旦墓域化するが、古墳時代終末期に一時期集落が形成されている。現状において、奈良・平安時代の遺構は検出されていないが、A地点6I区から7I区にかけて、若干量ではあるが、古代末の土器がまとまっていた(Fig.185)。本遺跡を構成する一時期として提示しておく。

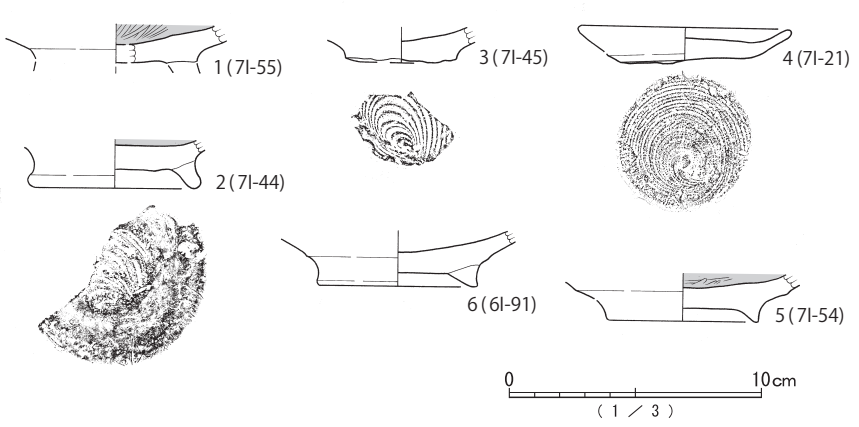


Fig.185　平安時代土器

Fig.186は、確認調査の結果、本調査対象外となったD地点採集の遺物である。D地点は、調査対象範囲西端部、A地点西側の段丘下に位置する。標高約28mの沖積地にあたるが、現状の戸田川の流路が深く、景観上、段丘面のようにも見える。確認調査の結果、水田耕作土下の粘土面で、溝状遺構を検出しているが、時期的には明確ではなく、中世以前に遡る根拠は認められなかった。出土土器は限られている。高台付杯などを含むが、全体量としては、和泉式の細片が中心となる。

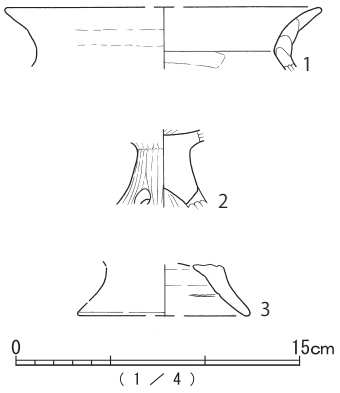


Fig.186　確認調査D地点出土遺物

本遺跡の特徴として、磨石・敲石などの礫石器が多量に出土したことを挙げることができる。調査区の深掘りでも礫層が認められたが、これは礫石器に対してより小形であった。しかし、近くに供給地が存在した可能性がある。礫石器の使用は、縄文時代に限定されず、弥生時代、古墳時代においても認められるが、それぞれの個体で時代時期の判断は難しい。したがって、

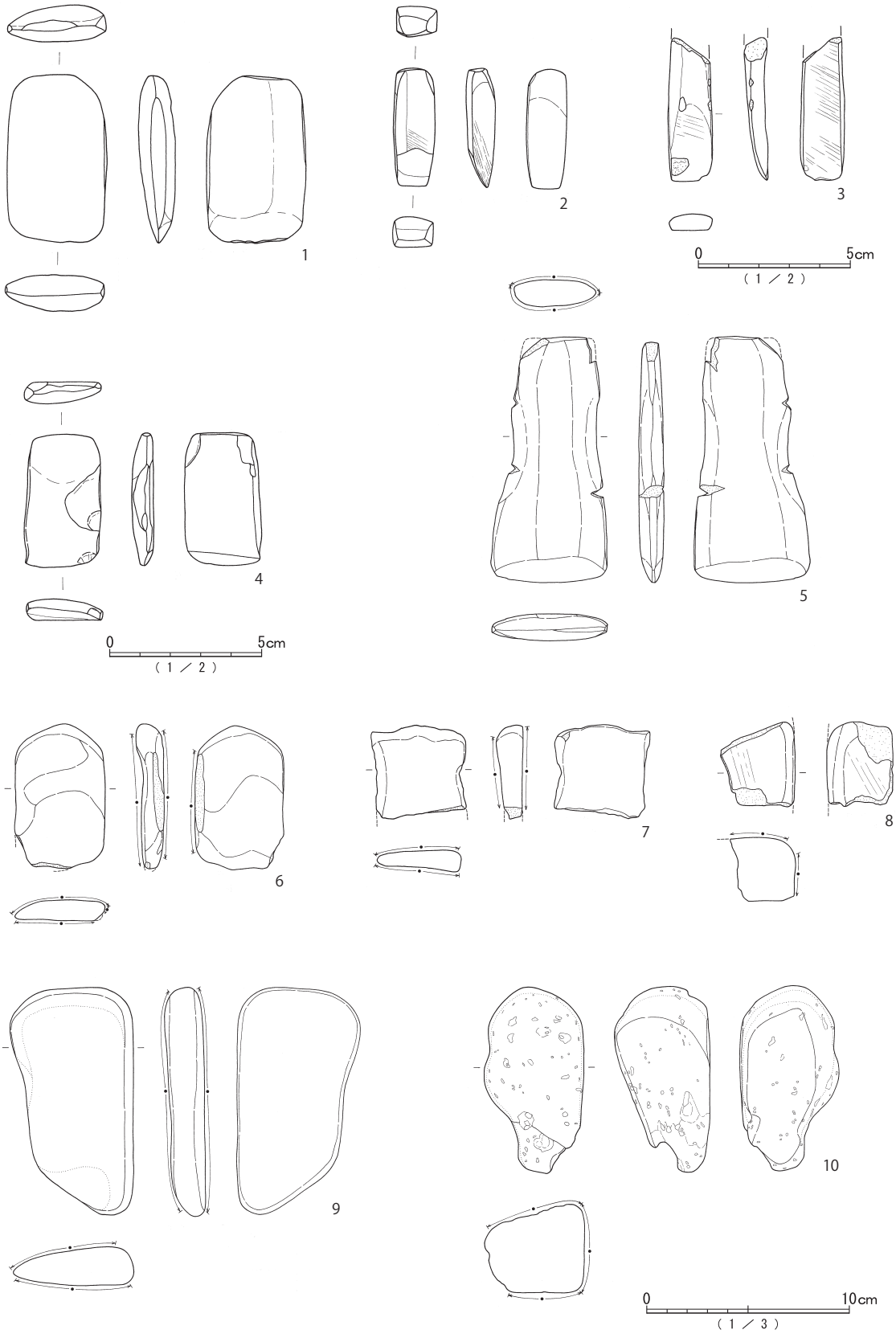


Fig.187　遺構外出土石器(1)

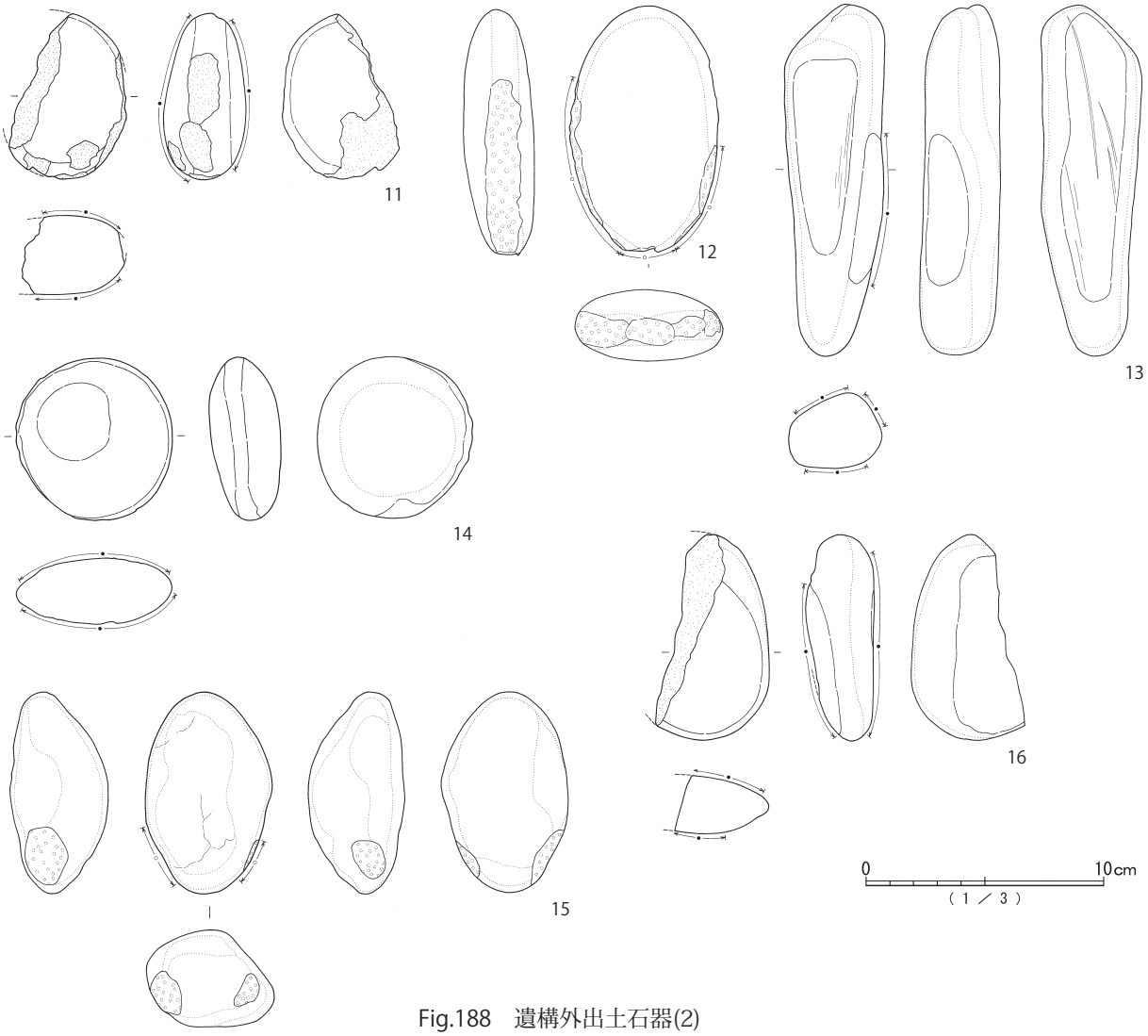


Fig.188　遺構外出土石器(2)

本稿では、遺構内から出土したものについては、すべて各遺構の挿図に掲載した。この中には、確実に縄文時代の石鏃と判断できるものも含んでいる。

Fig.187・188については、遺構外から出土したものをまとめた。

1～3は磨製石斧である。2の輝緑岩製小形柱状片刃石斧は、仕上げも丁寧であり、弥生時代中期の流通石斧と推定する。3は、ヘラ状の片刃石斧であり、表面は丁寧に研磨される。これに対して、1あるいはSI15−109(Fig.47)の砂岩製抉入り柱状片刃石斧などは、在地産の可能性が高いと思われる。ただし、本遺跡では、現状において石器製作跡は検出していない。他に、弥生時代の磨製石斧と推定するものは、SI14−134(Fig.40)、SI48−35(Fig.103)、SD25−3(Fig.168)などにすぎない。4は、扁平石斧であるが、研磨加工は局部的であり、自然面を残す。

5～9・13は砥石である。5は手持ち砥石である。10は軽石製品である。側3面が研磨により平坦化しており、磨石ないし砥石と考えられる。他は、磨石ないし敲石である。

第３章　自然遺物および自然科学的分析

第１節　南岩崎遺跡のテフラ分析

黒澤 一男（パレオ・ラボ）

（1）はじめに

関東地方の台地や丘陵には、テフラ（スコリア、軽石、火山灰などの降下火山砕屑物）を起源とするローム層や黒ボク土層のような風成堆積物が厚く堆積している。これらの地域では風成堆積物の中から出土、発掘される遺物や遺構を対象におこなわれている。ここでのテフラ分析の目的は、鍵層となる指標テフラを遺跡内の堆積物より検出し、堆積物編年のための資料とすることである。

（2）試料と分析方法

千葉県市原市の養老川支流戸田川の南側に位置する南岩崎遺跡より採取された試料を用いて、テフラ分析をおこなった。分析試料には平成14年度3次調査に連続に5cm幅で採取され、土層観察の行なわれた地点の西側に5m離れた地点から9試料（サンプルA19～27；以後A19～A27と示す）、東側に5m離れた地点から7試料（サンプルB17～23；以後B17～B23と示す）の計16試料を用いた(Fig.8、PL.12)。

① 各試料について自然含水状態で約40g程度秤量し、テフラ分析試料とした。また、乾燥試料重量を求めるために別途試料を5g程度秤量し、乾燥器中で乾燥した後、再秤量して含水比を求めた。なお、4試料（A21・A25・B19・B22）については粗粒な部分の検討を行なうため、120～140gの試料を用いた。

② 1φ（0.5mm：30メッシュ）、2φ（0.25mm：60メッシュ）、3φ（0.125mm：120メッシュ）、4φ（0.063mm：250メッシュ）の4枚のふるいを重ね、流水下で電磁式フルイ振とう機を用いて、湿式ふるい分けをおこなった。各ふるいの残渣について、それぞれを乾燥・秤量して粒度組成としてあらわし、試料の乾燥重量中における粒径4φ以上の砂粒分の重量％を含砂率とした。なお、粗粒部分を観察するため、乾燥した1φ残渣を0φのふるいを用いてふるい分けし、0φ残渣を粗粒部分の観察試料とした。なお、①で試料を多く採取したものについては、流水下でのふるい分けの前に、0φふるいを用いて静水下で手作業によるふるい分けを行い、ふるいを通過した試料について流水下でのふるい分けをおこなった。

③ 0φの残渣（粒径1mm以上）について、実体顕微鏡にて観察し、粒子をスコリアや岩片、鉱物片などに分類し、計数をおこなった。

④ 4φの残渣（粒径0.125～0.063mm）については、重液（テトラブロモエタン,比重2.96）を用いて重鉱物（有色鉱物）と軽鉱物（無色鉱物）に分離した。

⑤ 分離したそれぞれについて封入剤レークサイトセメントを用いてプレパラートを作成した。それらを偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定、計数し、重鉱物および軽鉱物組成を求めた。重鉱物はカンラン石、カンラン石が水の影響をうけて変質した鉱物であるイディングサイト（町田ほか1983）、斜方輝石（主にしそ輝石）、単斜輝石（主に普通輝石）、角閃石（ホルンブレンド）、磁鉄鉱、不透明鉱物（その他の不透明粒子を含む）に分類し、軽鉱物は火山ガラスと長石類に分類した。なお、軽鉱物中に含ま

れる未分解のローム粒子や風化粒子については試料の洗浄のしかたによって含有率が異なる場合があるので、計数の対象から除いた。また、火山ガラスの形態については、町田・新井（2003）の分類基準に従い形態分類をおこなった。なお、重鉱物の観察には一部の試料に用いた。

⑥ 火山ガラス含有量の高い試料を用いて火山ガラスの屈折率測定をおこなった。測定方法は、横山ほか（1986）の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）を用いて屈折率（n）を測定し、その結果を範囲（range）であらわした。

（3）分析結果

南岩崎遺跡においてテフラ分析をおこなった結果をTab.7、Fig.189・190に示し、以下にそれぞれについて述べる。なお、0φ粒子については計数値をTab.8に、その構成を20gあたりの粒数としてFig.191に示す。

堆積物中の砂粒分の割合（含砂率）は、概ね類似しており5.6～14.3%の値となる.上位で比較的高い含砂率となり、サンプルB17で最大の14.3%を示す。

砂粒分の粒度組成は、概ね3～4φ残渣が70%以上を占め、A20とB17、B22をのぞく13試料では833～4φ残渣が83.5%以上の高い値を示す。A20とB17、B22においては1φ残渣が11%以上の値を示す。全体として上位ほど粗粒な傾向が認められる。

重・軽鉱物比については、重鉱物が7.2～12.4%、軽鉱物が87.6～92.8%の値となる。若干であるが下位と上位で軽鉱物の割合が低くなる傾向が認められる。

重鉱物は、斜方輝石を主体とし、単斜輝石と角閃石を随伴する組成である。斜方輝石の含有率は、全体を通じて概ね50%以上であり、最大61.5%の値を示す。角閃石は9.9～21.3%の含有量で、B19～B22において19%以上の値を占めす。単斜輝石は、9.4～18.7%の含有量で、上位のB17とB18、下位のB23において15%以上の値をしめし、角閃石とは逆の傾向を示す。カンラン石は、1.6～11.7%であり、A21とA25で11%以上の高い値を示す。磁鉄鉱は4.0～11.4%、イディングサイトは0.5～4.1%の含有量となり、下位で高くなる傾向が認められる。

軽鉱物組成は、火山ガラスの含有量がA24とB20でそのピークを示し、約50%となる。サンプルBでは上位で火山ガラス含有量が低くなり、B17では18.3%となる。サンプルAはサンプルBと比較して全体として火山ガラスの含有量が高く、33.2～49.5%を示す。

火山ガラスの形態は、スポンジ状（p2）が大半を占め、火山ガラスのピークと同様のA24とB20でピークを示す。そのほかの含有量は、平板状（b1）が1.9～7.7%、Y字状（b2）が0.0～5.5%、繊維状が0.4～5.9%、破砕型（c0）が1.3～6.7%となる。

0φ以上の粒子は2～25個の検出にとどまった。上位で検出数が増え、サンプルBはサンプルAよりも多く検出されている。全体として明褐色から灰白色の風化したスコリアが多くを占めている。スコリアはB19とB23において多く検出され、B19では明褐色から橙色と黄色から灰白色のものが多く検出され、B23では赤色から赤褐色のものが多く検出される。両者とも風化して表面が破砕されており、そのB19ではB23より風化している。鉱物片や岩片は、B17で顕著に認められ、長石などの鉱物片が他の試料より多く検出されている。

（4）火山ガラス屈折率測定結果

測定試料の選定は、鉱物分析により、火山ガラスの含有量の高いA24とB20を選び出した。測定

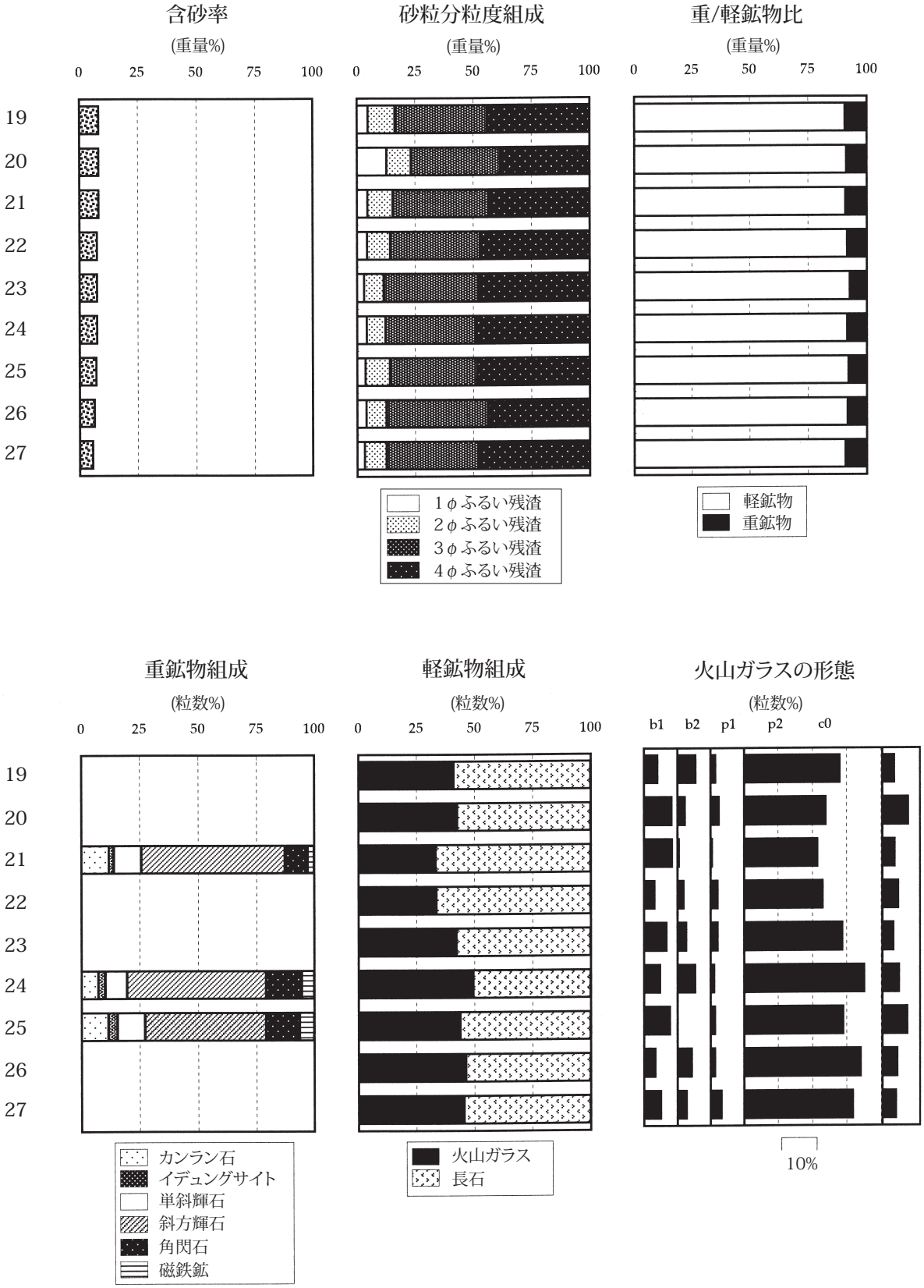


Fig.189　南岩崎遺跡(サンプルA)堆積物の特徴

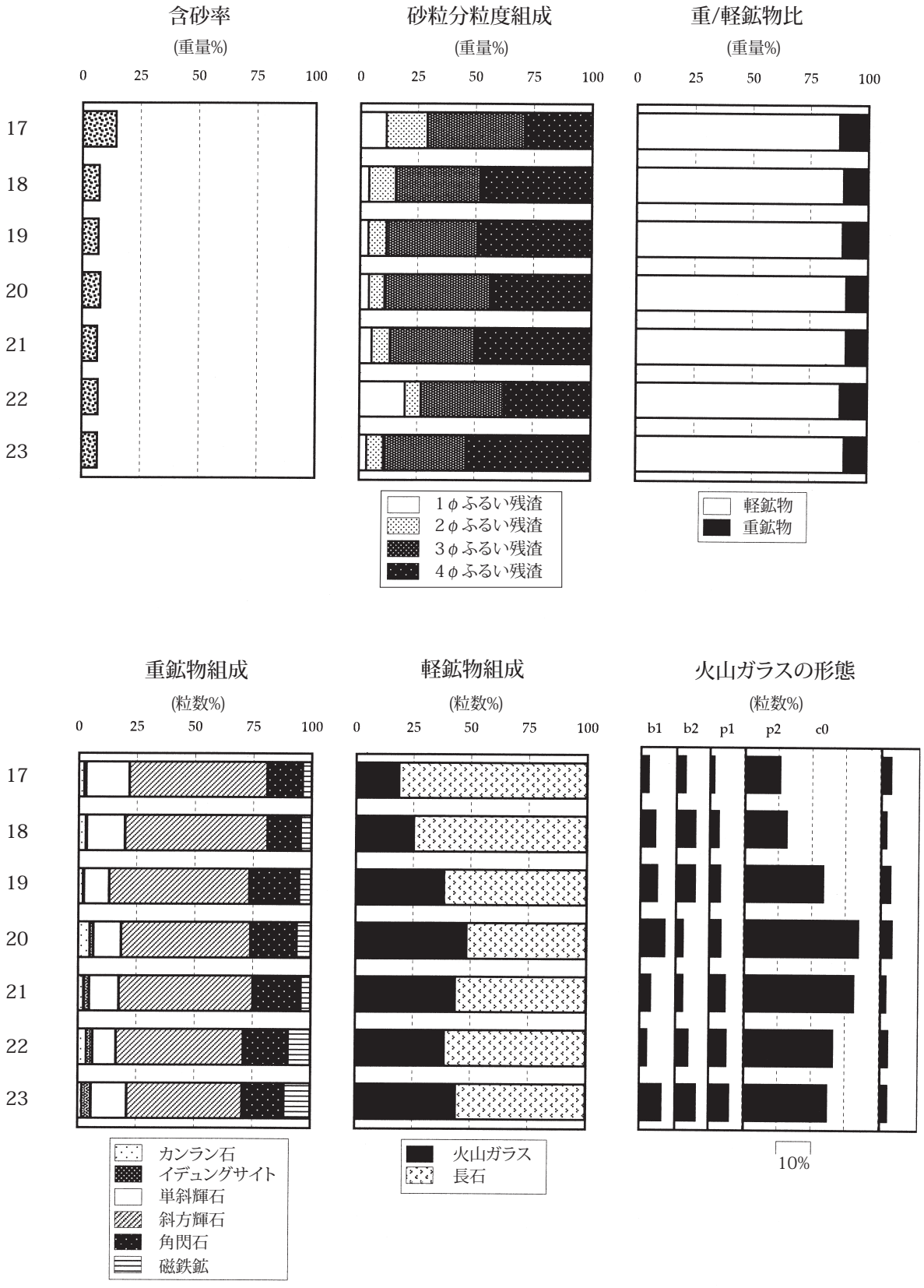


Fig.190　南岩崎遺跡(サンプルB)堆積物の特徴

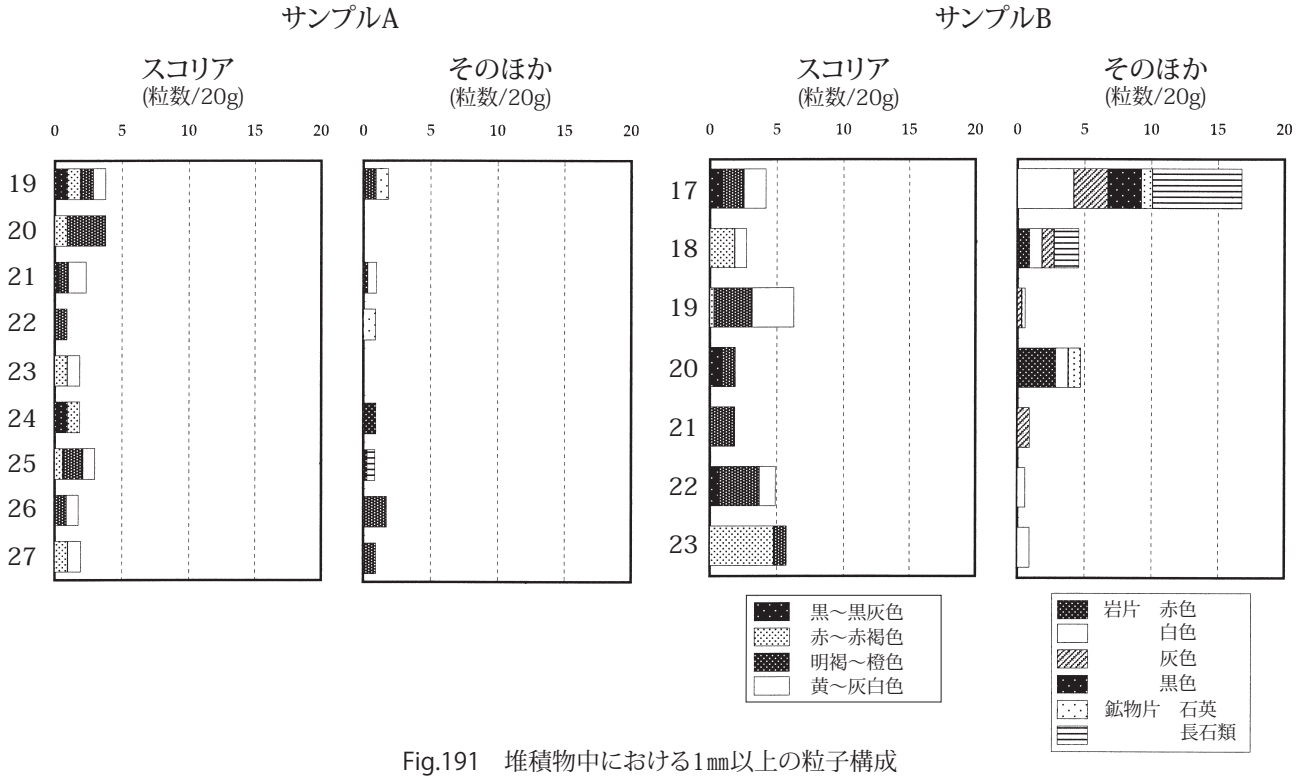


Fig.191　堆積物中における1㎜以上の粒子構成

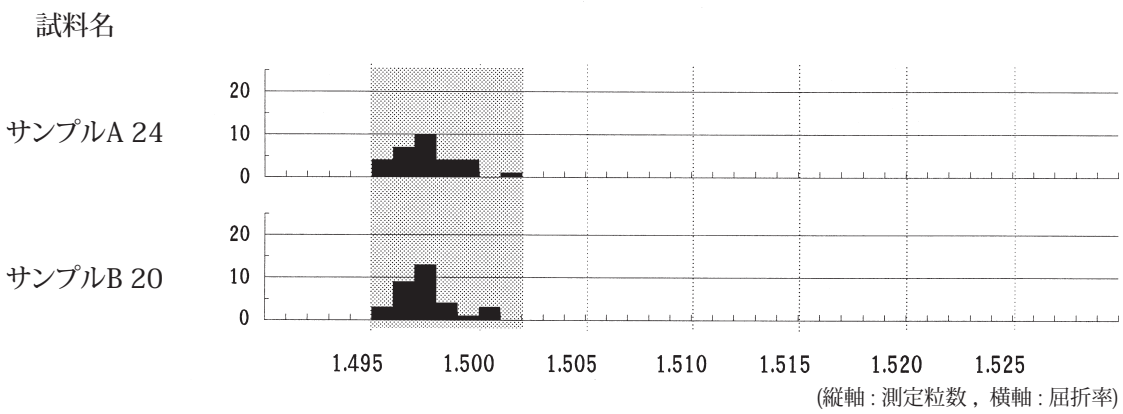


Fig.192　火山ガラスの屈折率とそのタイプ

結果をTab.9、Fig.192に示す。

屈折率測定の結果は、A24は範囲1.4956−1.5013、平均1.4975、B20は範囲1.4950−1.5008、平均1.4974となり、およそ範囲1.495−1.501、平均1.497と近似した値を示す。

(5) 堆積物中の指標テフラについて

本地域において堆積物から検出されたテフラについて、その特徴と噴出起源及び年代について述べる。またそのほかのテフラについても検討をおこなう。

【Kg：天城カワゴ平テフラ】

B20およびA24付近に認められる軽石型を中心とした火山ガラスは、天城カワゴ平テフラ(Kawagodaira Pumice：Kg)を起源とするものと考えられる。Kgの火山ガラスの形態は軽石型スポンジ状のものからなり、ガラス片には長石や輝石をともなうことが多いという特徴をもつ。ここで見

Tab.7　堆積物の鉱物分析結果一覧

		含砂率（重量％）	砂粒分の粒度組成（重量％）				重・軽鉱物組成（重量％）	
			1 φ	2 φ	3 φ	4 φ	軽鉱物	重鉱物
サンプル A	19	8.2	4.7	11.7	39.8	43.8	90.6	9.4
	20	8.2	12.6	10.8	38.4	38.2	91.1	8.9
	21	8.2	4.4	11.0	41.3	43.3	90.9	9.1
	22	7.5	4.2	10.2	38.6	47.0	91.5	8.5
	23	7.5	2.9	8.6	40.8	47.7	92.8	7.2
	24	7.5	4.1	8.3	38.9	48.7	91.7	8.3
	25	7.1	3.6	10.7	37.5	48.3	92.1	7.9
	26	6.4	3.9	8.7	43.7	43.7	91.8	8.2
	27	5.6	3.3	9.5	39.4	47.9	90.9	9.1
サンプル B	17	14.3	11.1	17.9	42.2	28.7	87.6	12.4
	18	7.3	3.8	11.7	36.8	47.7	89.4	10.6
	19	6.9	3.6	8.1	39.3	49.1	88.9	11.1
	20	7.8	3.8	7.0	45.9	43.3	90.7	9.3
	21	6.6	5.2	8.0	37.0	49.8	90.6	9.4
	22	6.9	19.8	7.0	36.0	37.2	88.2	11.8
	23	6.8	3.1	7.4	36.4	53.0	90.1	9.9

		重鉱物組成（粒数）						軽鉱物組成（粒数）		火山ガラス形態分類（粒数）				
		カンラン石	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	磁鉄鉱	不明	長石	火山ガラス	平板状	Y字状	繊維状	スポンジ状	破砕型
		Ol	Cpx	Opx	Hor	Mag	Opq	Pl	Vg	b1	b2	p1	p2	c0
サンプル A	19	−	−	−	−	−	−	131	91	8	11	3	62	7
	20	−	−	−	−	−	−	145	107	19	5	6	60	17
	21	25	25	131	21	6	41	165	82	19	1	1	53	8
	22	−	−	−	−	−	−	162	82	7	4	5	56	10
	23	−	−	−	−	−	−	143	104	15	6	5	71	7
	24	16	21	133	35	12	71	105	103	9	10	2	73	9
	25	25	26	114	32	14	49	128	100	16	0	3	66	15
	26	−	−	−	−	−	−	123	106	7	9	3	78	9
	27	−	−	−	−	−	−	154	129	13	7	9	90	10
サンプル B	17	5	42	133	34	9	56	204	46	5	6	3	26	6
	18	6	32	120	28	9	38	176	59	9	12	6	29	3
	19	4	23	127	45	11	58	179	112	13	15	9	68	7
	20	11	27	127	45	14	78	110	103	14	4	7	72	6
	21	5	29	132	47	10	70	120	92	6	4	10	69	3
	22	9	26	140	49	25	75	158	100	5	9	13	68	5
	23	4	38	122	44	28	77	152	119	16	15	16	67	5

Tab.8　堆積物中における 1mm 以上の粒子構成一覧（粒数）

		スコリア				岩　片				鉱物片	
		黒～黒灰色	赤～赤褐色	明褐～橙色	黄～灰白色	赤色	白色	灰色	黒色	石英	長石
サンプル A	19	1	1	1	1			1		1	
	20		1	3							
	21	1		2	4	1	2				
	22			1						1	
	23		1		1						
	24	1	1			1					
	25		2	5	3	1					2
	26			1	1			2			
	27		1		1			1			
サンプル B	17	1		2	2		5	3	3	1	8
	18		2		1	1	1	1			2
	19		1	9	10			1		1	
	20	1		1		3	1			1	
	21			2				1			
	22	2		10	4		2				
	23		5	1			1				

Tab.9　火山ガラスの屈折率測定結果

試料名	範囲 (range)	平均 (mean)
サンプル A 24	1.496 － 1.501	1.498
サンプル B 20	1.495 － 1.501	1.497

られる火山ガラスに、スポンジ状のものが多く検出されることと、火山ガラスの含有量がピークを示すこと、火山ガラスの屈折率測定結果は範囲1.495−1.502、平均1.497となり、従来の値(範囲1.495〜1.502；町田・新井2003)と一致することから、これらの試料に含まれる火山ガラスはKgに同定・対比される。また、Kg中の重鉱物類では斜方輝石と角閃石を多く含むという特徴をもち、これらの分析試料中においても確認できる。Kgは伊豆の天城山カワゴ平火口を噴出源とし、給源から北方へ60km以上、西方へ120km以上と特異な分布をし(町田ほか1984)、その噴出年代は3,126〜3,145年前とされている(奥村ほか1999)。

なお、Kgより下位にK−Ah(鬼界アカホヤテフラ)の存在が考えられていたが、鉱物分析からその結果を得ることはできなかった。下位でやや平板状の火山ガラスが多く認められているが、K−Ahの火山ガラスはとても薄いことが知られており、ここで検出されたものは薄いものではないことからK−Ah起源の火山ガラスではないと判別した。また本地域はK−Ahの噴出源から1000km程度離れていることから火山ガラスが細粒なものに含まれる可能性を考え、B21およびB23の試料について4.5 φのふるいを用いてより細粒な粒子を抽出し、顕微鏡下での観察を行なった。しかし、それらにはK−Ahの特徴を示す火山ガラスは含まれていなかった。

本遺跡は富士山の東方およそ120kmに位置し、富士山からの噴出物が多く堆積していることが考えられる。また、およそ2,000〜4,500年前には比較的大きな噴火が頻繁に起こっており(宮地1988)、検出される可能性が高いと考えられる。しかし、風化によりスコリアが残りにくくなっており、検出することはできなかった。現地調査時にⅢ層下部より赤色スコリアを検出しているが、テフラ分析では検出することができなかった。少量ではあるがサンプルBの最下部の試料から検出されているが、風化していることと、試料がローム層との漸移層に重なっていることから下位層からの再堆積が考えられる。

(6) まとめ

南岩崎遺跡における堆積物のテフラ分析をおこなった結果、Ⅲ層下部からⅣ層上部に約3,000年前に噴出したKg(カワゴ平テフラ)を検出することができた。

引用文献

町田 洋・新井房夫　2003『新編　火山灰アトラス』東京大学出版会　336p.

町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫　1984「テフラと日本考古学−考古学研究と関係するテフラのカタログ−」『古文化財の自然科学的研究』同朋舎出版　865−928.

町田 洋・村上雅博・斎藤幸治　1983「南関東の火山灰中の変質鉱物〝イディングサイト〟について」『第四紀研究』22　69−76.

宮地直道　1986「新富士火山の活動史」『地質学雑誌』94　433−452.

奥村晃史・鈴木毅彦・嶋田 繁　1999「Wiggle Matchingを用いたカワゴ平火砕流堆積物の高精度年代測定」奥村晃史編『後氷期の重要地質事象に関する高精度年代測定の実用化に関する研究』1−5　平成9〜10年度科学研究費(基礎研究(C)(1))研究成果報告書

横山卓雄・檀原 徹・山下 透　1986「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25　21−30.

第２節　南岩崎遺跡出土のウマ（*Equus caballus*）

遺跡のA、B地点で検出された近世及び近代の溝（SD25、23）からは、ウマの歯が出土している。いずれの資料も底面に近いところで確認されているものの、道路改修の際に敷かれた原道の直下や脇にこれらの溝が位置するため、溝の構築年代より新しい時期のものも含まれる。両地点とも歯のみが出土し、これらに伴うと見られる上顎骨は激しく損傷し形を留めないが、歯自体の遺存状況は比較的良好で、計測出来ないほど破損した資料は１点に止まる。特に加工痕などは確認されなかった。Tab.10には出土内容、Tab.11には歯の計測値を示した。約70点の資料のうち種同定破片数は10点となる。調査区別にそれぞれ重複部位や年齢段階等を考慮し個体数を算定したところ、A地点、B地点で１頭ずつ、遺跡全体では２頭分のウマが出土している。

調査区毎に出土内容を述べたい。A地点の溝SD25からは歯が１点出土している。この溝は原道の直下であったため掘り込み部分を削られ、下部のみが検出された。ここから出土した遺物として、18世紀から幕末、明治初頭の陶磁器が報告されている。歯は溝の底面から４㎝上方より得られているが、硬化面の形成等、直上の原道の影響を受けている恐れがある。咬耗は強程度進み歯根も８㎜ほど伸びており、恐らく10才前後の個体のものと思われる。

B地点の溝SD23からは、上顎歯が10点とその破片50点超、上顎骨と思われる破片が13点出土した。この溝は原道のすぐ脇に並行して検出された。時期を特定する遺物の出土は無いが、位置関係から原道との関連が考えられており、比較的新しい時期の可能性がある。掘り込み面で深さ15㎝、幅56㎝が確認されているものの、原道面と溝の底面の差はほぼ100㎝であることから、本来の溝の幅は、底面に近い部分よりも広かったと思われる。歯はほぼ底面から出土している。No.3と４は並んで植立した状態で取り上げられており、萌出途中のものと咬耗がある程度進んだ歯が混在した段階の個体で、おおよそ３～４才のものと考えられる。左右ともに同様な観察結果が得られ、同一個体のものと言える。また、上顎骨と思われる歯槽部の破片も13点出ているが、これらの歯には歯槽部分が僅かに付着したものがあり、この個体に由来した破片とみられる。

これらの資料に被熱の痕跡や加工は特に認められなかった。A地点の資料については溝に伴うものか疑わしく、原道の敷設に伴い混入したものと考える方が妥当かも知れない。一方、B地点は溝が築造された後、資料が埋没するまでに、それ程時間が経過していないものと見て良さそうである。詳しい出土状況が明らかでないものの、上顎骨の歯槽部が僅かながら残存しており、恐らく、歯列通りに植立した状態であったと思われる。また、歯のみが埋められた訳ではなく、頭ごと収められたと考えられる。ただし本来の溝の幅が明らかでないため、胴部が伴っていたかについては判別が難しい。中近世の遺跡からウシやウマが出土した例は日本各地にみられ（西中川・松元1991）、溝や井戸跡等の遺構内に収められる例も多く報告されている。中でも頭部のみが遺構内に埋納される例が比較的多く（馬の博物館編1999、久保・松井1999）、本例でも同様な埋設状況を呈していた可能性はあるものの、築造年代や出土状況が明確でないため、積極的には支持出来ない。

（上 奈穂美）

参考文献

馬の博物館編　1999『鎌倉の武士と馬』

久保和士・松井章　1999「第10章　家畜その２－ウマ・ウシ」『考古学と自然科学－②考古学と動物学』pp.169－208

近藤誠司　2001『ウマの動物学』
西中川駿・松元光春　1991「Ⅴ. 遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』pp.164−188　平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告書

Tab.10　動物遺体出土内容

No.	地点	遺構	資料No.	点数	重量（g）	部位		残存	形状	破損	同一個体
1	A地点	SD25	5	1	27.0	上顎遊離歯	左	歯冠・歯根	ほぼ完存	−	
2	B地点	SD23	5	1	23.9	上顎遊離歯	左	歯冠のみ	ほぼ完存	新	A
3	B地点	SD23	5	1	18.5	上顎遊離歯	左	歯冠のみ	ほぼ完存	−	A
4	B地点	SD23	5	1	36.8	上顎遊離歯	左	歯冠のみ	ほぼ完存	−	A
5	B地点	SD23	5	1	32.5	上顎遊離歯	左	歯冠のみ	ほぼ完存	−	A
6	B地点	SD23	5	1	12.9	上顎遊離歯	左	歯冠のみ	ほぼ完存	−	A
7	B地点	SD23	5	1	11.0	上顎遊離歯	右	歯冠のみ	ほぼ完存	−	A
8	B地点	SD23	5	1	31.3	上顎遊離歯	右	歯冠のみ	ほぼ完存	−	A
9	B地点	SD23	5	1	30.3	上顎遊離歯	右	歯冠のみ	ほぼ完存	−	A
10	B地点	SD23	5	1	18.1	上顎遊離歯	右	歯冠のみ	ほぼ完存	−	A
11	B地点	SD23	5	1	4.5	遊離歯	−	歯冠のみ	半損	新	
12	B地点	SD23	5	50*	2.9	遊離歯	−	歯冠	破片	新	
13	B地点	SD23	5	13	2.5	上顎骨？	−	−	破片	新	

No.	歯式／萌出・咬耗							備　考
	P3	P4	M1	M2	M3	P3/4	P/M	
1						強		10才？　歯根長:8mm ±
2	萌出完了							3−4才？　歯槽僅かに付着　歯根未形成
3		萌出途中						No.3:P4 No.4:M1 はまとまって取り上げ。一緒に計量 3−4才？歯槽僅かに付着　歯根未形成
4			中					No.3:P4 No.4:M1 はまとまって取り上げ。一緒に計量 3−4才？歯槽僅かに付着　歯根未形成
5				中				3−4才？　歯根未形成
6					萌出途中？			3−4才？　歯根未形成
7		萌出途中？						3−4才？　歯根未形成
8			中					3−4才？　歯槽僅かに付着　歯根未形成
9				中				3−4才？　歯槽僅かに付着　歯根未形成
10					萌出途中？			3−4才？　歯根未形成
11							萌出途中？	No.2−10と恐らく同一個体
12								No.2−10と恐らく同一個体
13								No.2−10と恐らく同一個体

Tab.11　上顎歯計測値

No.	コード	遺構	資料No.	点数	重量（g）	歯種		計測値（mm）			
								全長	歯根長	歯冠長	歯冠幅
1	セ347	SD25	5	1	27.0	P3/4	L	50.5*	9.4*	25.9*	25.2*
2	セ368	SD23	5	1	23.9	P3	L	−		25.4*	21.7*
3	セ368	SD23	5	1	18.5	P4	L	50.1*		23.6	20.7
4	セ368	SD23	5	1	36.8	M1	L	70.5		25.1	21.8
5	セ368	SD23	5	1	32.5	M2	L	70.0		23.5	19.7
6	セ368	SD23	5	1	12.9	M3	L	49.9*		24.4*	18.5*
7	セ368	SD23	5	1	11.0	P4	R	−		23.9	21.4
8	セ368	SD23	5	1	31.3	M1	R	66.1		24.5	22.0
9	セ368	SD23	5	1	30.3	M2	R	70.9		22.6	20.1
10	セ368	SD23	5	1	16.2	M3	R	51.0		25.1	19.3*

第 4 章　南岩崎遺跡の変遷と市原市域の遺跡群

第 1 節　弥生時代中期から古墳時代中期の遺跡群

南岩崎遺跡を理解するための背景として、市原市域の弥生時代中期から古墳時代中期の遺跡群の動向を概説しておく。

市原市域の弥生時代中期から古墳時代中期の集落分布には、弥生時代中期中葉以前、弥生時代中期後半、弥生時代後期から古墳時代前期前半、古墳時代前期後半以降の４段階３画期を認めることが可能である（大村・小橋2005）。

関東地方の本格的な初期農耕集落の成立は、中期中葉の中里式期に遡ることが明らかとなったが、市原市域では、なお中期後半の宮ノ台式期を上限とする。市内での中期中葉の遺跡としては、西国吉遺跡（蜂屋1999）が集落跡と考えられるものの、武士遺跡（田村・加納・高柳他1996）は再葬墓群であり、小谷田八木遺跡（藤崎1983）も再葬墓の可能性が高い。宮ノ台式期になると、宮ノ台式最古期に遡る可能性のある台遺跡（浅利2002、半田2003）をはじめとして、遺跡数が飛躍的に増加し、遺跡分布も変容する。この段階に、東京湾岸平野部に直接面する台地縁辺部への集落の進出が認められ、環濠集落群を形成するのである。また、姉崎地区の砂堆上に立地する山新遺跡（小橋2002）や、養老川右岸の山田大宮遺跡（米田1986）、叶台遺跡（大村1992）、村田川左岸の潤井戸西山遺跡（鈴木1986・半田1992・木對2004b・小川2005）、中横峰遺跡（小川2000）、鎌之助遺跡（田所2000・2001、鶴岡2001）など、低位段丘面での検出例も他の時代時期と比較して格段に多く、本遺跡もその１例となる。これは、沖積地に対する積極的な水田開発によるものと考える。

Tab.12　千葉県環濠（条濠）集落一覧

市町村	遺　跡　名	時　期	市町村	遺　跡　名	時　期
野田市	二ッ塚殿台遺跡	終末前期初	市原市９	根田代遺跡	中期
柏市	戸張一番割遺跡	終末前期初	市原市 10	台遺跡Ｃ地点	中期
市川市	国府台遺跡	中期／後期	市原市 11	祇園原貝塚上層	中期
市川市	須和田遺跡	後期	市原市	南岩崎遺跡	中期
佐倉市	大崎台遺跡	中期／末前初（条濠）	市原市 12	南総中学遺跡	中期
佐倉市	高岡大山遺跡	終末前期初	袖ケ浦市	美生遺跡第４地点	後期
佐倉市	石川阿ら地遺跡	終末前期初	袖ケ浦市	西ノ窪遺跡	中期
印西市	向ノ地遺跡	終末前期初	袖ケ浦市	根形台遺跡群ⅩⅥ地点	
八千代市	田原窪遺跡	中期	袖ケ浦市	根形台遺跡群Ⅳ地点（堂野遺跡）	中期
八千代市	道地遺跡	後期	袖ケ浦市	根形台遺跡群ⅩⅣ地点（関野遺跡）	後期
千葉市	戸張作遺跡	中期	袖ケ浦市	根形台遺跡群Ⅰ・Ⅲ地点（境 No.2 遺跡）	中期
東金市	道庭遺跡	中期	袖ケ浦市	西原遺跡	中期
多古町	柏熊遺跡	中期	袖ケ浦市	滝ノ口向台遺跡	中期／後期
市原市１	草刈遺跡	中期／後期（条濠）	木更津市	東谷遺跡	後期
市原市２	菊間遺跡	中期	木更津市	鹿島塚Ａ遺跡（庚申塚Ｂ遺跡）	中期／後期
市原市３	菊間深道遺跡	中期	木更津市	大山台遺跡	後期
市原市４	菊間手永遺跡	中期	木更津市	千束台遺跡	中期／後期
市原市５	大厩遺跡	中期	富津市	前三舟台遺跡	後期
市原市６	大厩浅間様古墳下層	中期	君津市	鹿島台遺跡	中期
市原市７	潤井戸西山遺跡（草刈尾梨遺跡）	中期	君津市	畝山遺跡	中期
市原市８	向原台遺跡	中期	館山市	萱野遺跡	中期

市原市 No. は、Fig.194 に対応する。

Fig.193　南関東地方環濠集落分布図（大村2004cより、一部改変）

なお、養老川流域は、南総中学遺跡 (倉田・相京 1978) が所在する牛久地区周辺以南になると、谷は深く、両岸から丘陵地形が迫るようになる。現状で最南部の宮ノ台式期の集落は番後台遺跡 (藤崎 1982) で確認できるが、遺跡としての盛期は後期山田橋式期以降である。

宮ノ台式期の集落形態としては、環濠による囲繞が特徴的に認められる。南関東地方において、環濠集落ないしＶ字溝が検出されている遺跡は、管見によるだけでも古墳時代前期初頭を含め約 180 遺跡を数えることが可能であり、千葉県下ではこの内 42 遺跡が所在する (Tab.12)。市原市域の環濠集落は、過去 12 遺跡で検出されており、本遺跡が 13 例目となる。現状ではすべて宮ノ台式期と推定する。他に、立地する台地の地形的特徴から、人面土器で著名な郡本遺跡群三島台遺跡なども可能性が高いと思われる。南関東地方弥生時代中期では、神奈川県鶴見川流域、東京都荒川流域とともに、濃密な分布を形成している (Fig.193)。

環濠は、その開削時期を特定することが基本的に困難であるが、集落としての経営時期を基準とするならば、宮ノ台式前半期に遡る遺跡として、台遺跡、菊間遺跡 (斉木・種田・菊池 1974)、大厩遺跡 (三森・阪田他 1974)、大厩遺跡群大厩浅間様古墳下層遺跡 (浅利 1997)、南総中学遺跡、および本遺跡がある。宮ノ台式後半期 B5 期 (黒沢 1997・1998) は祇園原貝塚上層遺跡 (忍澤 1995・1999)、宮ノ台式終末期 (根田代 1 期相当) には根田代遺跡 (大村 2005)、菊間手永遺跡 (近藤 1987)、潤井戸西山遺跡、向原台遺跡 (高橋 2002) がある。このうち、台遺跡では、隣接する根田代遺跡の墓域と推定する方形周溝墓群が環濠集落上に展開しており、少なくとも根田代遺跡の設置以前には機能を停止していたと思われる。また、草刈遺跡 (大谷・白井 2002)、大厩遺跡で環濠ないし条濠の重複が認められるように、集落の再編をともなう例もある。しかし、開始時期にかかわらず、宮ノ台式終末期まで継続することが一般的であり、現状で確認できる範囲では、すべて宮ノ台式終末期 (根田代 1 期相当) には機能を停止し埋没する。なお、市原市域の環濠集落の概要については、根田代遺跡報告でまとめている [(1)]。

東京湾東岸地域の後期環濠集落は、草刈遺跡の条濠をのぞけば、袖ヶ浦台地小櫃川右岸の袖ヶ浦市美生遺跡群第 4 地点 (浜崎 1993) を北限とし、現状では市原市域におよんでいない。しかし、市原市域では、弥生時代後期から古墳時代前期前半にかけて遺跡数、遺跡分布が明らかに増加・拡大し、とくに当該地域の後期後半山田橋式期から五領式前半期の竪穴住居跡検出数は、各時代時期に中で突出している (大村 1993)。集落分布は台地上谷奥へ向かって拡大し、集落規模も肥大化して、台地平坦面に広く展開する状況が認められる。しかし、山田橋遺跡群にみることができるように (大村 2004b)、後期とくに集落範囲が極端に拡大する山田橋式期の集落は、居住域の拡大を指向するように、継続的な基点を欠き竪穴住居が更新される傾向が明らかであり、広範囲にわたる集落規模は、あくまでも結果として形成されたものと考えられるのである。

当該地域の弥生時代後期集落は、継続的な中心核をもたず、宮ノ台式期の環濠集落への集住に対して、明らかに異なる集落景観を構成する。この状況は、古墳時代前期前半まで認められるが、終末期になると、ある程度地域的なまとまりをみせるようになる。とくに国分寺台地区の、根田代遺跡から台遺跡、御林跡遺跡 (木對 2004a)、長平台遺跡 (小橋 2006)、中台遺跡、南中台遺跡、天神台遺跡 (浅利 1985・2002)、蛇谷遺跡 (市毛・須田・新田 1977) にいたる養老川右岸の一帯では、山田橋式期から終末期、古墳時代前期初頭に濃密な竪穴住居跡の分布が認められ、終末期には、中台遺跡が中核

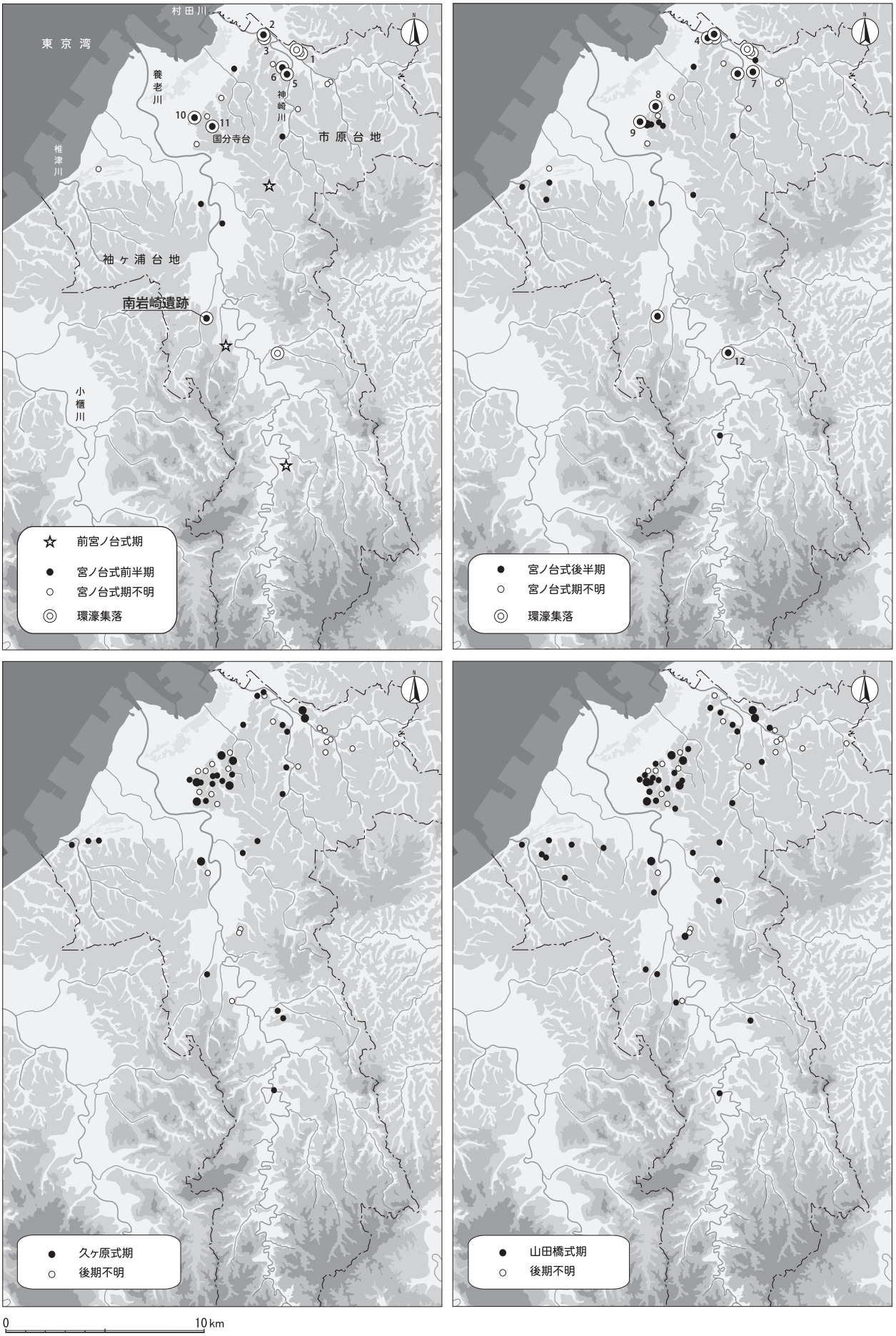


Fig.194　市原市域集落遺跡群(1)　弥生時代中期～後期 (大村・小橋2005より、一部改変)

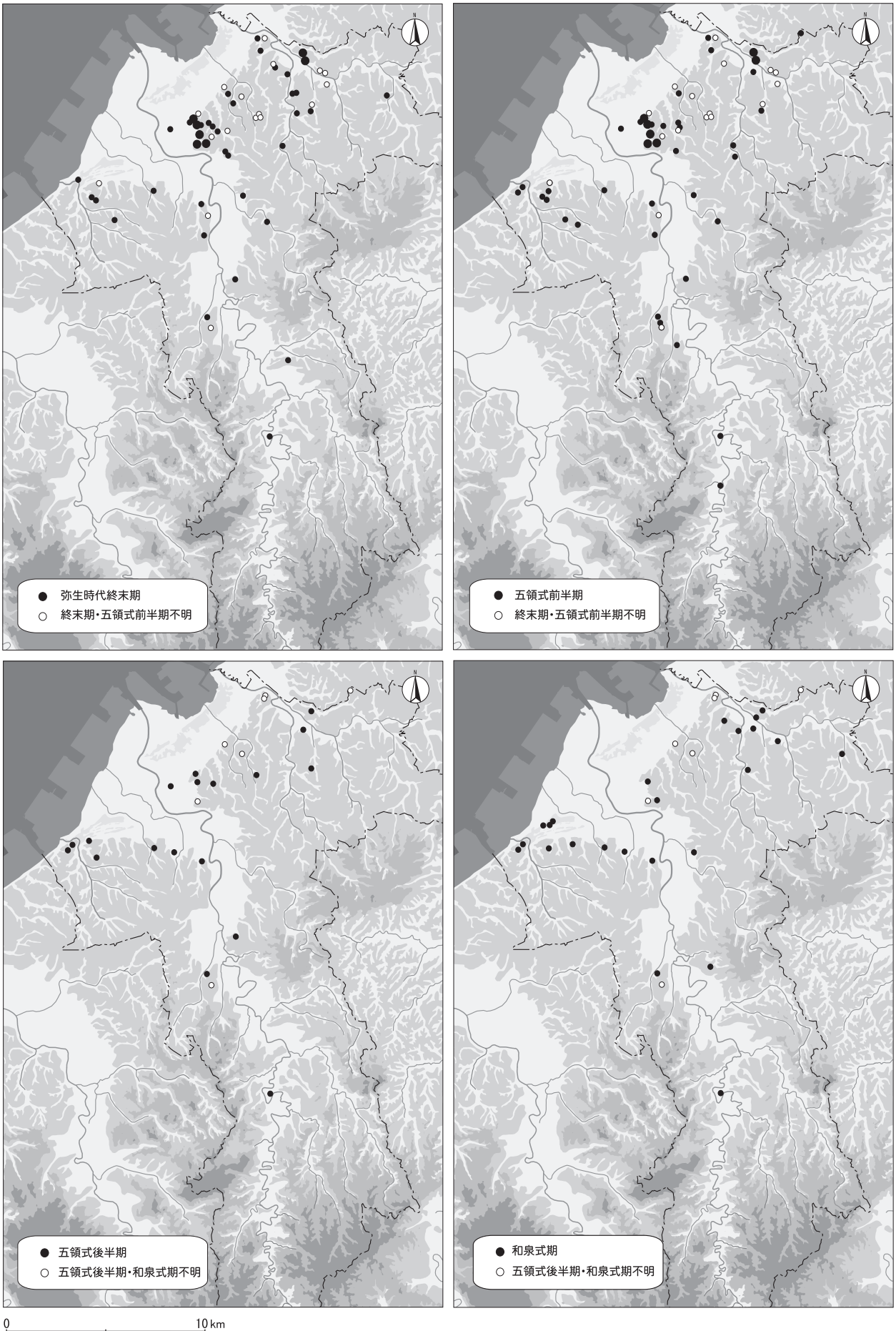


Fig.195　市原市域集落遺跡群(2)　弥生時代終末期～古墳時代中期前半 (大村・小橋2005より、一部改変)

となり、神門墳丘墓群の成立基盤となる。大規模な集落が塊状に分布する状況は、他に、草刈遺跡（小久貫1983、高田1986、大谷・西野2004）、草刈六之台遺跡（白井・田島他1994）、川焼台遺跡などの千原台地区でも認められる。

しかし、古墳時代前期後半になると、膨張をとげた集落が極端に縮小し、遺跡数も減少する。この段階は、南関東地方各地域で遺跡数の減少傾向が認められ、その要因として、北関東から東北地方への大規模な移住、流出が想定されているが（比田井2004）、市原市域内部においても、遺跡分布に際だった変化が認められるのである。国分寺台地区では、和泉式・鬼高式期に継続する集落は御林跡遺跡[(2)]以外にはなく、五領式後半期、和泉式期の竪穴住居跡は、祇園原貝塚、台遺跡、蛇谷遺跡、加茂遺跡A・B地点（浅利2005）で数軒認められる程度であり、集落規模も極端に縮小する。これに対して集落分布は、袖ヶ浦台地東京湾岸地域の姉崎地区、村田川左岸等に中心を移す。Fig.194・195は、あくまでも調査遺跡を対象とした分布図であり、分布密度など実態を反映したものではないが、分布の移動を傾向としてみることは可能であると思われる。

遺跡立地についても変化があり、低地部への進出が再度認められる。姉崎二子塚古墳が所在する砂堆上では、山新遺跡（近藤2005）、姉崎上野合遺跡（木對1990）などで集落跡・古墳群が検出されている。養老川、村田川の河岸段丘でも宮ノ台式期と和泉式期で集落を一致させる場合が多く、これには、本遺跡や叶台遺跡、潤井戸西山遺跡、中横峰遺跡、鎌之助遺跡などがある。このうち潤井戸西山遺跡は、首長居館の可能性がある。立地変化については、環境変化とそれにともなう生産基盤の問題を検討すべき必要があると思われる。

弥生時代中期から古墳時代中期にいたる遺跡分布の変化は、かならずしも水系を単位とした、順調な開発の経緯のなかで説明できるものではない。とくに、古墳時代における集落分布の地域的な変化の背景には、集団編成の基点としての首長権力の所在が関係すると思われる。

市原市域における首長地位あるいは首長権力の独自化は、神門墳丘墓群（田中1977・1980・1984、浅利1989）の出現を指標とすることができる。関東地方では、近年弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の円丘系墓の検出例が増加しつつあるものの、神門墳丘墓群に代表される市原市域は、なお特異な状況にあることにはかわりない。神門系譜と推定する円丘系墓は、他に小田部墳丘墓（径22m）（杉山・安藤・沼沢・田中1972、大村1991b）、諏訪台1号墳（径24m）（田中1975）などがあり、村田川支流神崎川水系の小田部墳丘墓以外は、養老川右岸の国分寺台地区周辺に分布する（Fig.196）。神門墳丘墓群は、最も新しいと考える3号墓が前期初頭のTE1a式（南岩崎4a期相当）（大村1994）に接点をもつ可能性があるものの、基本的には終末期段階に含まれる。この地域において、これに後続する首長墓としては辺田1号墳がある（径32.2m）（木對2004a）。辺田1号墳は、突出部こそ明確ではないが、神門墳丘墓群系譜の円丘系として考えることが可能であり、他に、山田橋大塚台古墳（径約28m）（半田1997）、あるいは国分寺台地区の円墳・円丘系墓で最大級の規模をもつ諏訪台10号墳についても、南西側に接する前期前方後方系の11号墳（全長38.3m）（浅利1994）が、傾斜面地に立地することを考慮するならば、これに先行して造墓された可能性があると思われる。その北側にも前方後方系の9号墳（全長36m）があり、これらを従えた群構成が考えられる。国分寺台を中心とする地域の首長墓は、古墳時代前期において前方後円墳に転換することなく、神門系譜の円丘系墓の在地化が想定できるのである。

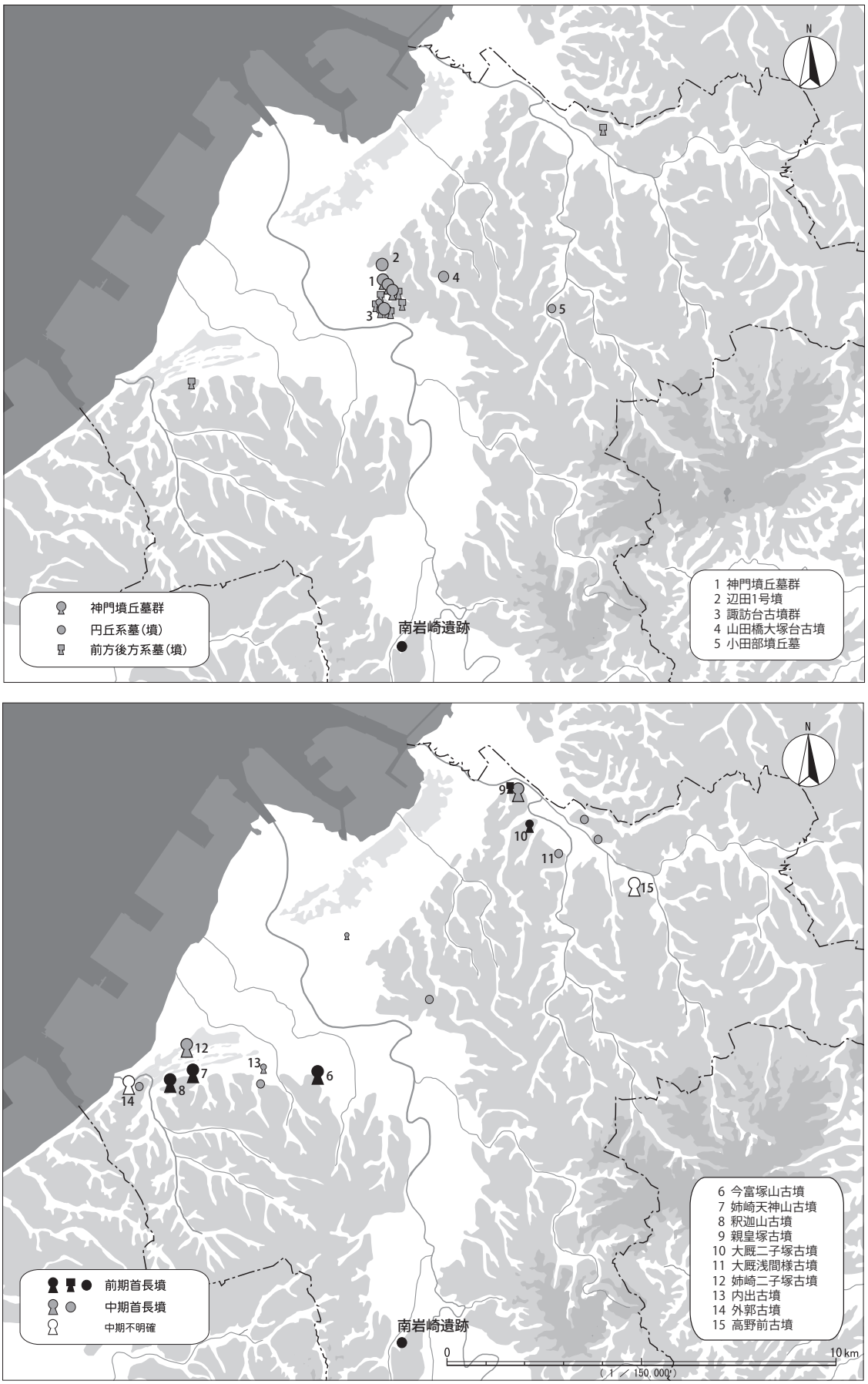


Fig.196　弥生時代終末期・古墳時代前中期の首長墓 (大村・小橋2005より、一部改変)

これに対して、袖ヶ浦台地東京湾岸では、前期において姉崎天神山古墳（全長130m）、今富塚山古墳（全長110m）（永沼1992）、釈迦山古墳（全長93m）（小久貫1996）、また、村田川左岸では、前方後円墳である大厩二子塚古墳（全長70m）（永沼他1995）、方墳（辺40m）ないし前方後方墳である親皇塚古墳（斉木・種田・菊池1974）が分布する（Fig.196）。現状において、前方後円墳の「定型化」を簡潔に定義することは難しいものの、国分寺台地区の円丘系墓との比較からみれば、畿内中軸との新たな首長系列の成立が想定できる。これらの中で、釈迦山古墳は前期末（南岩崎4c期）に比定することが可能であり、今富塚山古墳、親皇塚古墳出土の墳頂部壺形土器も、前期後半期以前に遡るものではない。姉崎天神山古墳、大厩二子塚古墳など時期詳細が明確ではない古墳もあるが、これら前期古墳の成立と、前述した前期後半における集落分布の再編には密接な関係があることは明らかである。

古墳時代中期の首長墳は、かならずしも明確ではない。ON46～TK208型式期と推定されている姉崎二子塚古墳（全長103～114m）（白井2002）以外、前方後円墳としては内出古墳（全長44m）[(3)]があるにすぎない。姉崎地区では他に、和泉式期（南岩崎5a期）の海保3号墳（径29.3m）（中村・市毛・杉山・安藤・沼沢1986）、椎津稲荷山古墳（径40m）（木對1992）の円墳をあげておく。

村田川流域は、左岸の大厩浅間様古墳（径50m）（浅利1997）、右岸の草刈1号墳（径35m）（田井1997）、草刈3号墳（径35m）（白井・田島他1994）をあげることができるが、いずれも円墳である。このうち大厩浅間様古墳は、副葬品の内容から前期末と考えることもできるが、墳丘部から和泉式期の高杯形土器が出土しており、ここでは中期初頭（南岩崎5a期）と考えておく。他に、姉崎地区の外郭古墳（小橋2004）、村田川流域の高野前古墳などが中期段階の前方後円形首長墳の候補ではあるが、墳丘の遺存も明確ではなく、現状では確証がない。なお特異な例としては、養老川左岸から姉崎地区の屈曲点にあたる釜神遺跡で、墳丘長25.0m、周溝外径36.0～37.0mを測る、和泉式期（南岩崎5a期）の大形方形墓が検出されている（田中2002）。

これら、前期後半から中期の首長墳は、国分寺台地区の持塚1号墳（径38m）や稲荷台1号墳（径27.5m）（田中他1988）をのぞくと、姉崎地区と村田川流域を中心とし、同時期の集落分布と密接な関係をもつことは明らかである。しかし、この段階の首長墳は、それぞれ地点を変え点在する。これに対して、継続型の首長墳群の成立は、菊間古墳群では中期末に遡る可能性があり、姉崎古墳群では後期前半の山王山古墳以降と推定される。南岩崎遺跡周辺でも、吉野古墳群（Fig.2）、戸田川左岸の報恩寺古墳群、東側台地の佐是古墳群など、小地域単位に複数基の前方後円墳を含む集合型（継続型）の古墳群が形成される。これは、首長によって統合された、地域、領域支配の安定化が進行したことによると推定する。南岩崎遺跡は、和泉式期以降集落規模を縮小し、古墳時代後期前半には一端廃絶する。国分寺台地区では唯一の古墳時代中期の大規模集落である御林跡遺跡も、中期末から後期初頭には廃絶する。これらの消長を普遍化することはできないが、おそらくこの段階に、集落形成の第4の画期が想定できると思われる。

第2節　時期設定

(1) 土器変化の概要

南岩崎遺跡塚越地区では、弥生時代中期後半代の環濠集落形成以降、おそらくは古墳群の展開を契機として一旦廃絶、移動する古墳時代後期前半まで、ほぼ継続的に居住域を形成している。

本報告では、弥生・古墳時代について下記のとおり時期設定を行ったが、ここでは、標準的資料を摘出し、弥生時代中期後半から古墳時代後期前半、南岩崎１期から６期の間の土器変遷の概略を示しておきたい (Fig.197～200)。

南岩崎１期a・b・c期　弥生時代中期後半宮ノ台式期
南岩崎２期a・b期　弥生時代後期久ヶ原・山田橋式期
南岩崎３期　弥生時代終末期
南岩崎４期a・b・c期　古墳時代前期五領式期
南岩崎５期a・b期　古墳時代中期前半和泉式期
南岩崎６期a・b期　古墳時代中期後半・後期前半鬼高式期
南岩崎７期　古墳時代終末期

南岩崎１期は、宮ノ台式に相当する段階であり、a・b・c期の３期に区分する。

南岩崎1a期は、SD01－1・2を指標とする。この段階は、後述するように本調査区では明確な遺構は認められず、SD01出土土器についても、時期的に混在する。ただし、櫛描波状文、沈線区画による舌状文等の特徴は、他と明確に区分しておく必要がある。資料は限られるが、黒沢浩によるB3期 (黒沢1997・1998)、安藤広道によるSiⅢ期前半 (安藤1990a・b) ないしその前段に位置付けることが可能であると判断する。宮ノ台式前半期は、これ以外確ではない。SI14－91が北島式系譜のフラスコ文と思われるが、これは明らかに形骸化している。なお、近隣の南総中学遺跡では、宮ノ台式前半期を特徴付ける擬似流水文、丁字文等の櫛描文をみることができる。

南岩崎1b期は、SI14・60、SS01を基準とする。壺形土器の文様構成は限定的であり、単斜細縄文帯を３帯以上重ねるものが基本となり、SI14－6・SS01－15など、結紐文ないし山形文が連結する。SI14－11は擬縄文帯であり、沈線で区画される。本期は、黒沢によるB5期、安藤によるSIⅣ期に比定することができる。

南岩崎1c期は、SI13、SS02を基準とする。壺形土器の文様構成は、帯縄文の幅広化、２帯への収束が明確に認められる。横帯文は羽状縄文、回転結節文が主体化する。さらに、SI14上層出土の41・42、SS02－1など、粗い櫛描文による弧状文等の意匠文が発達する。黒沢によるB6・7期の一部、安藤によるSiⅤ期前半、根田代遺跡１期 (大村2005) に比定することができる。ただし、根田代遺跡との比較では､久ヶ原式への傾斜をしめす口縁部有段の甕形土器が本遺跡では明らかに希薄である。また、南岩崎1b期を含め、本遺跡では横走羽状文もあまり認められない。これらは、時期的、地域的問題として再度検討すべき必要がある。

南岩崎２期は、後期段階である。当該地域の後期弥生土器は、山田橋遺跡群、根田代遺跡をもとに、基軸編年を設定しているが (大村2004b・2004c・2005)、本遺跡では資料的に少なく、細別比定は困難である。

南岩崎2a期は、久ヶ原式にあてる。SI33は、久ヶ原１式、市原市椎津茶ノ木遺跡123号遺構段階 (木對1992) に比定することが可能である。SI14上層資料の53・54・56、SI59－1は、久ヶ原１式から２式古段階に、口頸部多段で口唇部が短く屈曲するSI14－55は、久ヶ原２式新段階の特徴をしめす。他に、SI61がこの段階に比定できる。

南岩崎2b期は、山田橋式段階である。SI30などがこの段階に比定できるが、資料的にはさらに限

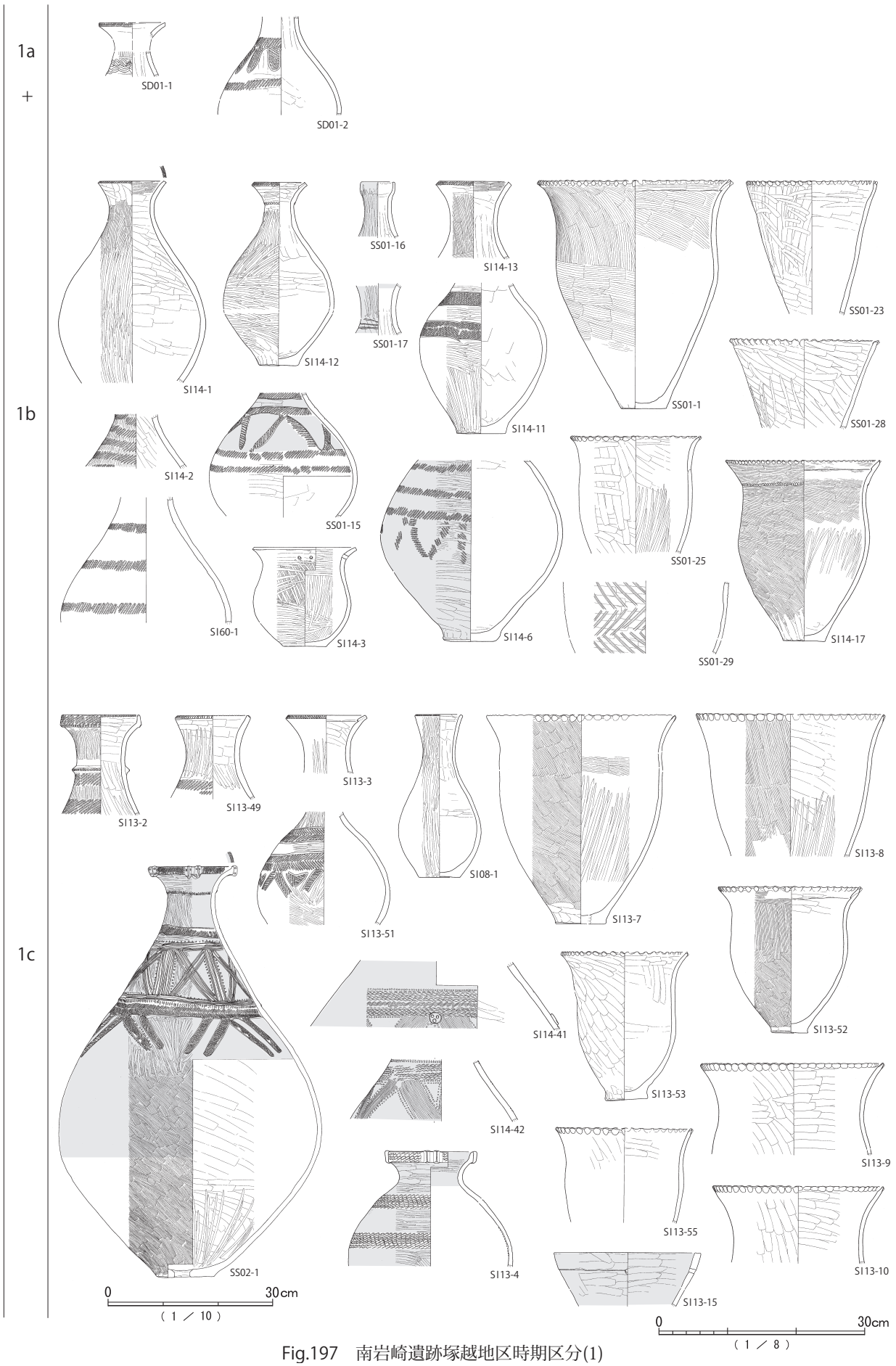


Fig.197　南岩崎遺跡塚越地区時期区分(1)

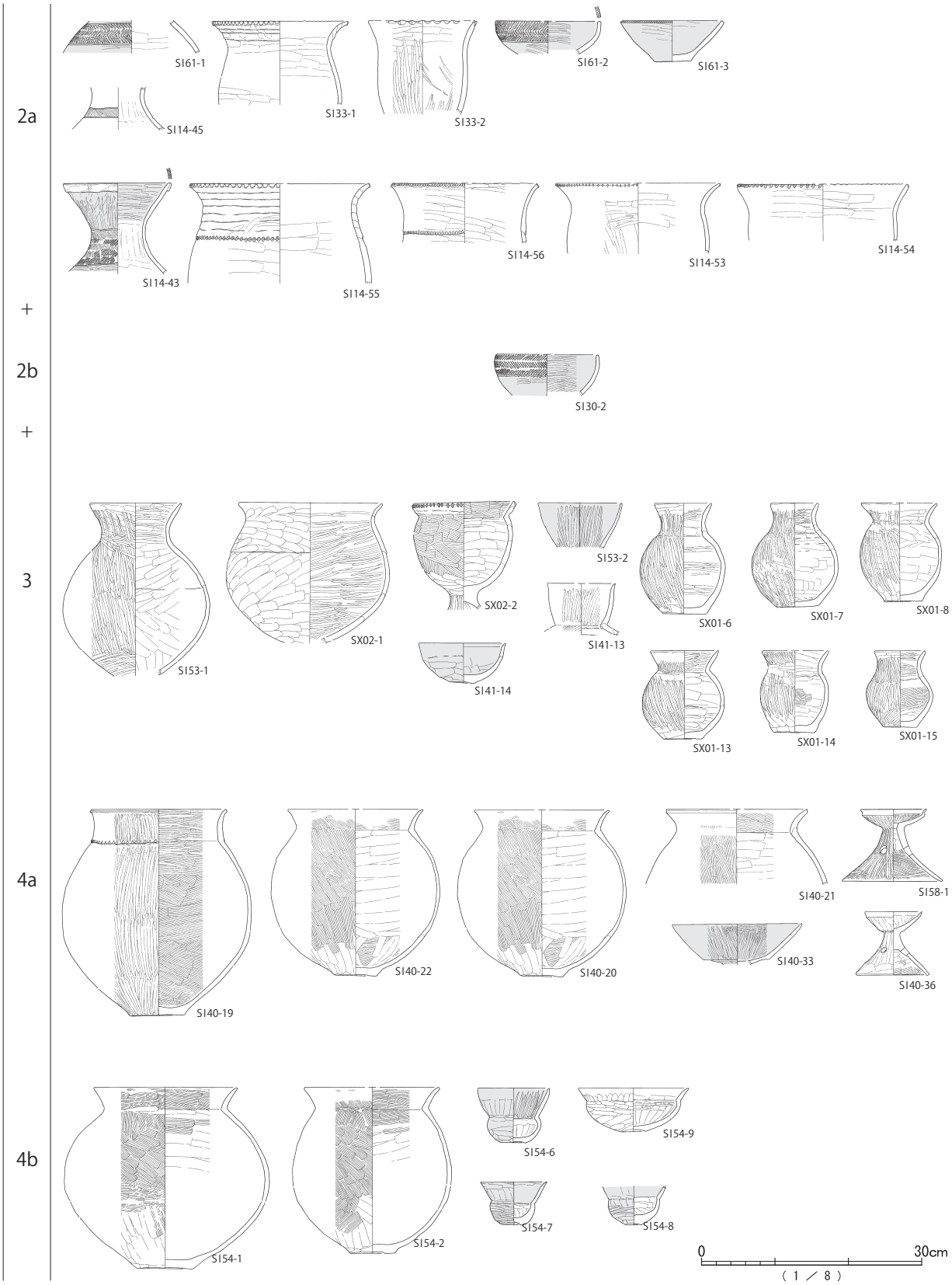


Fig.198　南岩崎遺跡塚越地区時期区分(2)

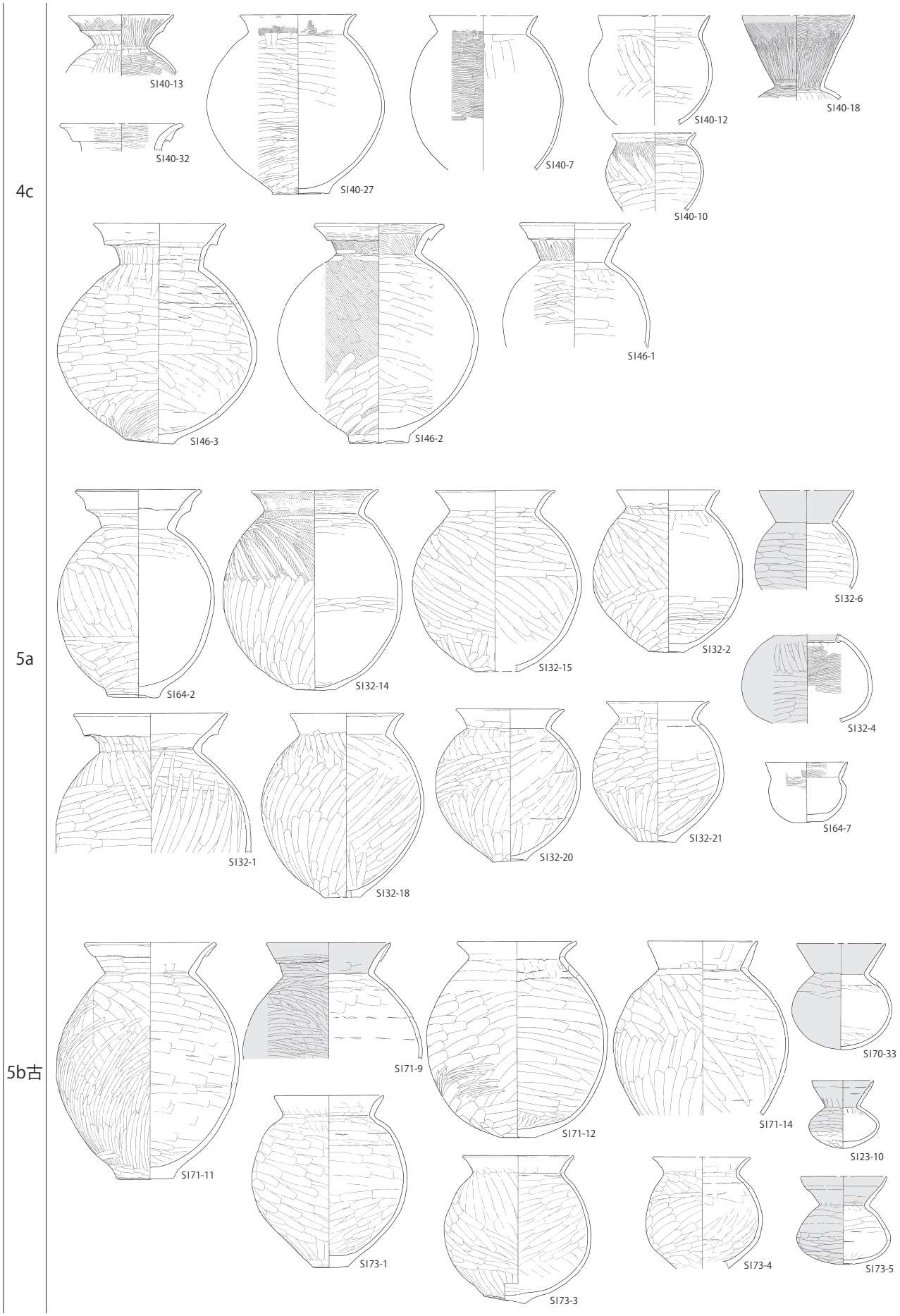
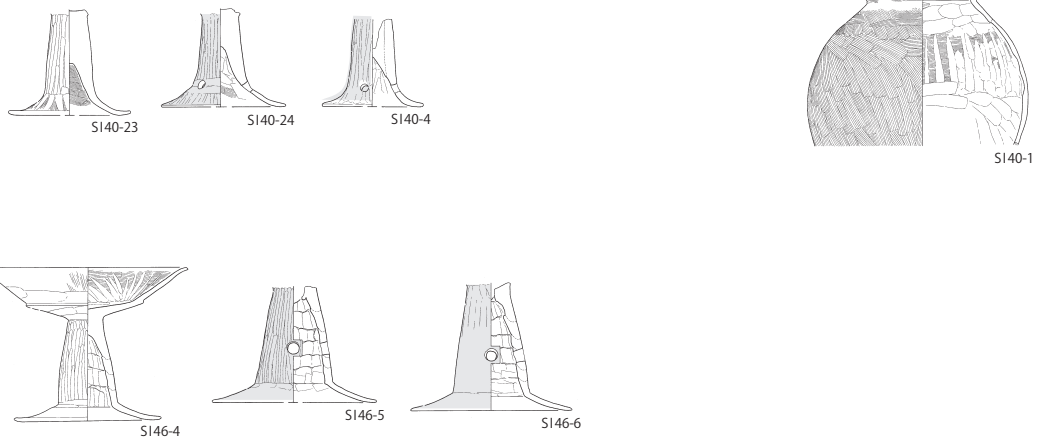


Fig.199　南岩崎遺跡塚越地区時期区分(3)


SI40-23
SI40-24
SI40-4
SI40-1
SI46-7
SI46-4
SI46-5
SI46-6
SI64-9
SI64-8
SI64-14
SI64-15
SM01-26
SI64-12
SI64-11
SI32-9
SM01-21
SI32-5
SI64-10
SI32-29
SI32-30
SI64-16
SI32-23
SI32-24
SI32-31
SI32-32
SI32-33
SI70-37
SI23-7
SI23-25
SI09-1
SI73-19
SI73-17
SI115-37
SI70-36
SI52-7
SI52-6
SI73-13
SI73-15
SI152-1
SI73-8
SI52-5
SI52-8
SI73-16
SI73-14
SI123-13
SI23-3
0
30cm
(1 ／ 8)

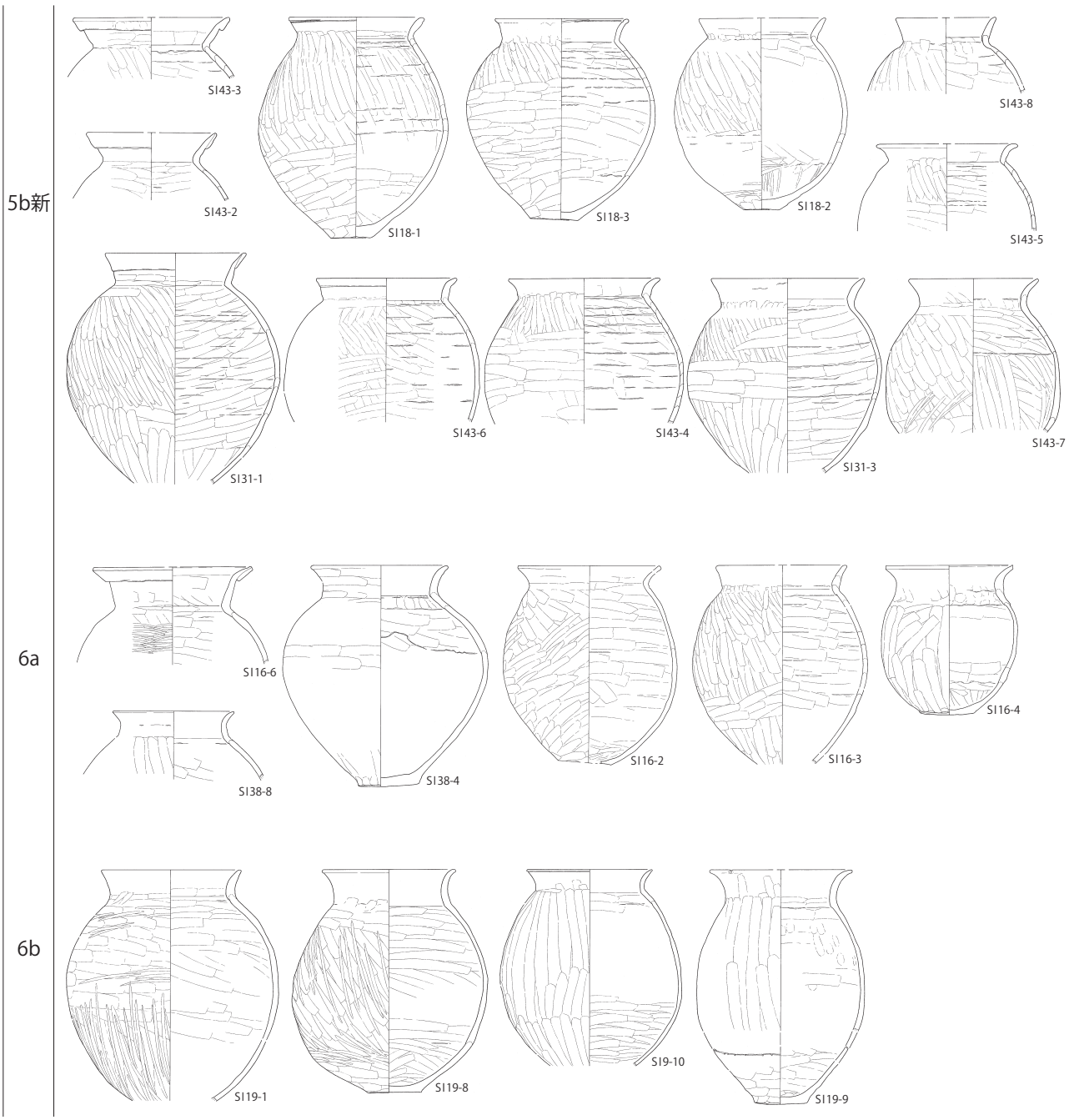


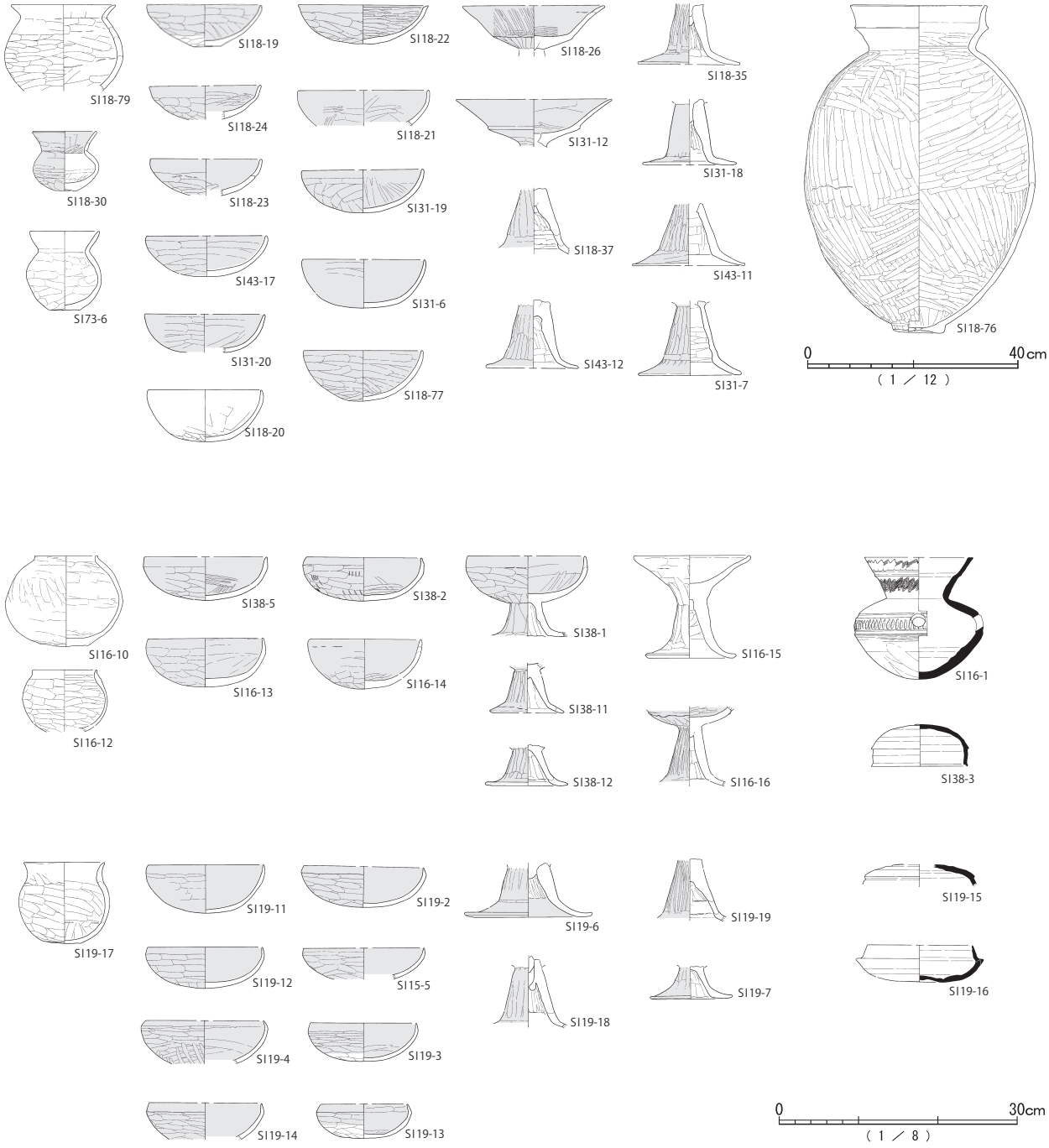
Fig.200　南岩崎遺跡塚越地区時期区分(4)

られる。

南岩崎３期は、弥生時代終末期段階にあてる。SI53、SX01の小形壺形土器群、SX02下層例などがこの段階に対応する。

南岩崎４期は、五領式段階である。五領式成立期の様式的指標は、頸部屈曲の「く」字状化と、口縁端部面取り面の消失であるが、とくに、甕形土器の頸部「く」字屈曲は、五領式・和泉式共有の特徴としてとらえることができる。

南岩崎4a期は、SI40覆土出土例を指標とする。SI40は、4c期段階の竪穴住居跡であるが、覆土出土土器のうち甕形土器は、19・20・21・22が4a期に、2・6・7・9・10・27が4c期に区分すること



ができる。他器種では、杯部がやや内向し、杯底面が平坦化していない高杯形土器33などがこの段階に比定できる。なお、18の直口縁壺形土器は系譜的には弥生時代終末期に遡るが、比較的大形例が、五領式後半段階に散見されることから、4c期段階においておく。小形器台形土器36の帰属は明確ではない。この段階は、定型化した所謂小形（丸底）壺形土器成立前段と考える。

南岩崎4b期は、SI54を指標とする。出土器種は限られるが、甕形土器の器形的特徴は、4c期のS140に対し、明らかに先行する。供膳形態は、小形丸底壺形土器と小形鉢形土器から構成される。

南岩崎4c期は、S140・46を基準資料とする。とくにSI46例は和泉式への傾斜が明確である。壺形土器は、いずれもミガキが省略される。高杯形土器の特徴としては、脚部の屈曲による脚裾部の形

成と脚柱状部の筒状化、杯口縁部の外反化、杯部の大形化が認められる。このうち、杯口縁部の外反化、大形化は、基本的に和泉式の特徴と考えるが、S146例は、他の伴出土器との関係から、五領式の範疇に含めておく。7は小形丸底壺形土器、8は小形器台形土器である。ただし、この段階は、小形器台形土器、半球状小形胴部の小形丸底壺形土器の消滅期にあたる。

南岩崎5期は、和泉式に対応する段階である。

壺形土器は、複合口縁を残しながら、球形胴部から長胴化を指向し、和泉式の経過のなかで甕形土器との形式的な統合をとげる。SI64−2、SI71−11などは、煤の付着から煮沸器としての利用が想定される。

甕形土器は、頸部の収縮と、長胴化を認めることができるが、これは、南岩崎4b期S140例など、五領式後半段階からの継続的な変化としてとらえることができる。口縁部は、直線的に開くものから緩やかに外反するものに移行し、鬼高式南岩崎6a期には、頸部内面の屈曲線を失っていく。また、底部は漸次突出部が不明確となる。整形は、ほぼハケの使用が認められなくなり、ヘラケズリが一般化する。整形方向は、前段同様、右下から左上を基本とするが、右上から左下への再調整が一般的に認められる。この再調整は、鬼高式において、さらに長胴化が進むことにより、頸部から下方向へのヘラケズリに移行する。ヘラケズリは、鬼高式と比較して浅く、ヘラナデと明確に識別できない場合が多い。これは、工程、工程時期の違いによると考えられ、鬼高式の頸部から下方向へのヘラケズリは、和泉式における1次整形の省略によると考えられる。

高杯形土器は、複数系列に区分することも可能ではあるが、変化の基本は単純であり、杯部については、小形化、稜部の曖昧化と稜部位置の上昇、脚部についても、小形化と屈曲部の不明確化を基本とする。脚柱状部の整形については、前段のミガキから縦方向のヘラケズリに移行するが、さらにヨコナデを加えている。5期段階のヨコナデは、各器種各部位に一般的に認められ、実測図の表現に苦慮することがあった。和泉式の中心的な整形技法ともいえる。この和泉式南岩崎5期は、これら各器種の型式変化とともに、所謂供膳形態の組成変化が明確に認められ、これを細別基準とすることが可能であった。

南岩崎5a期は、SI32・64を基準とする。この段階の供膳形態は、高杯形土器と小形丸底壺形土器が中心となる。小形壺形土器は、前段の半球状胴部はみられず、口頸部径の収縮した球形胴部形式に限定される。赤彩が施されるものもあるが、ミガキは基本的に認められない。

高杯形土器は、この段階に最も大形化し、口径は20cm前後から24.3cm、器高は18cm程度を測る。とくに脚柱状部は太く胴張り筒状を呈し、器高全体の約2/3を占める。SI64−14・15など、脚柱状部に丁寧なミガキを施すもの、焼成前小孔を1孔穿つものがある。

南岩崎5b期は、供膳形態の組成変化が明確であり、小形壺形土器が客体化し、杯形土器が一般化する。高杯形土器は小形化に転じ、杯部は口径17.5〜20.0cm程度で18.5cm前後を平均値とし、杯部下半の稜はやや鈍くなる。器高は14.5cm程度で短脚化が認められ、これには、脚柱状部が細くなるものと、全体がハ状に開き、屈曲部が曖昧化するものがみられる。ただし、本遺跡では、木更津市山伏作遺跡SI038例（南岩崎5a期相当）（山形1994）や、千葉市蓑輪遺跡007号住居跡例（加藤1985）、船橋市外原遺跡（八幡・岡崎・松浦他1972）などで一般的にみられる、短脚化以前のハ状開脚化は明確ではない。脚屈曲部の開口の程度には地域差が認められる。なお、この杯部有稜の高杯形

土器も、5b新期には量的に客体化していく。市原市草刈六之台遺跡（白井・田島他1994）では、鬼高式段階に、短脚化した有稜高杯の遺存が認められるが、普遍的ではない。

南岩崎5b古期は、SI23・52・70・71・73を、南岩崎5b新期はSI18・31・43を基準とする。古新期は、杯形土器を指標とした。5b古期の杯形土器は、小形の凹底部をもち、杯部途中から屈曲し直立する口縁部をもつもの、口唇部が短く外方へ屈曲するものなどがある。口径は12.0～13.3cm程度を測る。5b新期になると、丸底で半球状を呈し、鬼高式への傾斜が認められる。ただし、この段階はまだ口縁部の内湾が弱く、最大径を口縁部にもつものが多い。口径は16.0cmを超えるものもあり大形化を指向するが、個体単位の差異が大きい。

対応例として、5a期は草刈遺跡C区竪穴住居跡C139（大谷・西野2004）、千葉市鎌取遺跡045・049号住居跡（上守・出口1993）、千葉市大森第2遺跡第24号住居跡（古内他1973）、千葉市馬ノ口遺跡63号住居跡（古内・大野1984）、5b古期は草刈遺跡C区竪穴住居跡C119、番後台遺跡034C号住居跡、5b新期は市原市畑木小谷遺跡12号遺構（北見1999）、千葉市南二重堀遺跡15・19・45号住居跡（古内・伊藤1983）、鎌取遺跡036号住居跡、大森第2遺跡第35号（B）住居跡をあげておく。

南岩崎6期は、鬼高式に対応する段階である。ただし、この段階は資料的に限られており、本調査区出土土器をもとに、鬼高式成立期の状況をすべて説明することは困難である。

南岩崎6a期はSI16・38を、南岩崎6b期はSI19を基準としておく。南岩崎5期段階からの変化の基本点としては、甕形土器における頸部内面の無稜化、有稜高杯形土器から椀状高杯形土器への変換をあげることができる。杯形土器は、南岩崎5b新期から6a期が最も大形化する段階であり、SI38例は、体部最大径15.1～15.5cm、器高5.4cm前後を測る。SI16例はやや口径が小さく、器高は6.2cm前後と深くなり、時期的傾斜をしめしている。南岩崎6b期には、須恵器模倣の杯形土器が確実に成立していると考えるが、本遺跡では明確ではない。

（2）他地域との関係

本遺跡では、断片的ではあるが、布留式や初期須恵器などの稀少遺物を含んでいる[(4)]。SI40出土の布留式の甕形土器、SI02の縄蓆文タタキに螺旋状沈線を加えた初期須恵器ないし韓式系、SM01周溝の須恵器器台などである。これらは、土師器・須恵器の広域編年を問題とする上で重要な資料ではあるが、残念ながら共伴関係が明確ではないものもある。しかし、土師器各器種を含めた基本的な序列に整合性を認めることも可能であり、若干の推論を重ね、今後の資料的な蓄積を待つこととしたい。

SI40の布留式の甕形土器は、搬入品と推定する。焼成は堅固ではないが、器壁は薄く、胎土は、在地産の土師器と異なり、砂礫を多量に含み、当該域に特徴的な骨針化石等が認められない。器形的な特徴としては、口唇部内面に平坦面をつくる肥厚部を残している。個体単位での比較は難しいが、布留式甕終末段階の口唇部は、内斜肥厚面から端部水平面への変化を基本としており、おおまかには、初期須恵器出現期であり布留式の基本器種構成の解体期にあたる大阪府船橋遺跡O－1段階（原口・田中・田辺・佐原1962）や、大阪府大庭寺遺跡谷部1（393－OL）第Ⅶ層（岡戸1996）、TG232号窯灰原下層出土例（藤田・奥・岡戸1995）などより以前に位置付けることは可能であろう。胴肩部の横ハケも、形骸化しつつ遺存している。SI40は伴出土器が明確であり、高杯形土器脚部は柱状化が認められ、五領式後半期（南岩崎4c期）に比定することができる。ただし、五領式最終段階以前であり、畿内系のX字形器台を出土した、市原市土宇遺跡第43号住居跡（柿沼他1979）と同段階と考える。土宇遺

跡第43号住居跡の高杯形土器は、柱状外反脚と屈曲脚が伴出している。当該地域での五領式最終段階例としては、市原市蛇谷遺跡37B号住居跡（市毛・須田・新田1977）をあげることができるが、ここでの小形丸底壺形土器は、口縁部に最大径をもつ半球状胴部と、口頸部径の収縮した球形胴部が混在する。また、整形の粗略化もこの段階に認められる。半球状胴部の小形丸底壺形土器は、基本的には五領式段階に限定される型式表徴である。

SM01出土の須恵器高杯形器台26は、貼付け凸帯間に波状文と下向きの鋸歯文を2段重ねている。小破片のため径は不確実であるが、立ち上がりはおおむね図の通りであり、比較的底面の広い浅い器形をとると思われる。遺存する文様帯は、4段の下部3段にあたると思われる。鋸歯文はヘラ描きであり、鋭利で深い。焼きはきわめて硬質であるが、断面・内面色調は赤褐色～紫灰色であり、燻し銀状の瓦質を呈している。内面には、浅黄色～灰オリーブ色の自然釉がほぼ全体に付着しているものの、青海波は認められない。21も器台脚部と推定するが、凸帯間の幅の狭い文様帯に振幅のない波状文1段を施文し、4孔を単位とする短冊形の透かしをもつ。杯部側にも波状文を配している。大庭寺遺跡では、杯部鋸歯文下部脚接合部付近に波状文を1段配する例がある（冨加見・土井1993）。ただし、この段階の高杯形器台は、個体差が激しく、直接対比することは難しい。

これらは、段階的にTG232型式にあてることが可能である。問題は、伴出段階であるが、SM01の石釧・須恵器器台の組み合わせは、古墳副葬品と考えることが自然ではあるが、SM01自体は、TK10型式期段階の古墳と推定する。須恵器器台と時期的に対応する可能性のある土器としては、小破片であるが、土師器複合口縁壺形土器（23）、凸帯をもつ壺形土器頸部（24）、段部が明らかに平坦化したS字状口縁甕形土器（25）がある。とくに24は、古墳からの出土例が多く、石釧・須恵器器台と関連性をもつ可能性がある。29の太形の高杯形土器脚部を含め、これらの時期は、南岩崎5a期に対応させておきたい。

時期	型式	南岩崎	南岩崎遺跡基準	黒沢1997・1998			他
弥生中期	宮ノ台式	1a期	(SD01)	B2・3期			
		＋					
		1b期	SI14・60、SS01	B5期			
		1c期	SI13、SS02	B6期			根田代遺跡1期
弥生後期	久ヶ原1式	2a期	SI33	B7期			
	久ヶ原2式		(SI14上層)				
	山田橋1・2式	＋ 2b期	SI30				
		＋		大村1994			
弥生終末期	(鴨居上ノ台式)			TB2a式 TB2b式			
		3期	SI53、SX01・02下層				
古墳前期	五領式	4a期	(SI40覆土)	TE1a式 TE1b式			纒向遺跡辻土坑4下層
		4b期	SI54		辻1999・2002		
		4c期	SI40 SI46	TE2式	1段階 2段階古		月縄手遺跡SX01・02下層
					須恵器	2段階新	
古墳中期	和泉式	5a期	SI32・64		TG232型式 TK73型式		船橋遺跡O-1段階
		5b古期	SI23・52・70・71・73			3段階	
		5b新期	SI18・31・43		TK216型式		
	鬼高式	6a期	SI16・38		TK208型式 TK23型式 TK47型式		稲荷台1号墳
古墳後期		6b期	SI19 SM01		MT15型式 TK10型式		

Tab.13　土器編年対応表

SI15−37の甕は、胴部最大径を中位にもち、肩の張りの弱い器形をとる。頸部も細く頸部屈曲稜線も弱い。胴部上半は自然釉が付着するが、無文と推定する。TK73－216型式に比定しておく。土師器との伴出状況は確実ではないが、5b古期を中心とする。同時期の資料には、佐倉市大篠塚遺跡45号住居跡例（栗本1971）がある。

南岩崎5期段階の須恵器は、他にSI02・15・23・31・43、SX05より出土しているが、タタキメ土器が多い。このなかでは、SI31－21が灰白色の色調から東海産の可能性がある。平行タタキ以外では、SI02から縄蓆文タタキに螺旋状沈線を加えた壺形土器が出土している。焼成は須恵器の生焼け状であるが、胎土は須恵質とは異なり、大小白色粒、褐色粒を多量に含む。韓式系とすべきかもしれない。伴出土器は、南岩崎5b古期に比定できる。土師器では、SI18（SK12）−76が、所謂山陰系譜の特徴を残している。少なくとも、その長胴器形は在地的ではない。これは、南岩崎5b新期に比定できる。

南岩崎6期については伴出する須恵器との対応関係が比較的明確であり、6a期はTK23・47型式期、6b期がMT15・TK10型式期にあたる。なお、稲荷台1号墳では、鬼高式初現期の指標となる短脚椀状高杯形土器がTK208型式と伴出している。南岩崎遺跡6a期のSI38の杯形土器は、口径に対して器高が浅く、土師器杯形土器の特徴としては、稲荷台1号墳出土例に対応する。この段階の出土例としては、木更津市マミヤク遺跡53号住居跡（小沢他1989）、大森第2遺跡第17号（B）住居跡をあげておく[(5)]。

以上、南岩崎編年を基軸とした対応関係は、Tab.13にまとめた。基準点となるTG232型式期については、大阪府長原遺跡NG98−19次SX701（松本2001）などを基準資料として、辻美紀による2段階新（辻1999・2002）、西村歩・池峯龍彦による布留4式古段階（西村・池峯2006）と南岩崎5a期の対応を認めておきたい。

畿内地方では、朝鮮系土器の登場以降、器種構成を含め加速的な変化をとげ、とくに鬼高式段階は土師器間の接点は乏しい。しかし、布留式から布留式解体期については、小形壺形土器、高杯形土器など供膳形態の消長や高杯形土器の大形化など、広域間での共有形式に連動性を認めることができる。また、口唇部が屈曲外斜して端部に明確な面をもつ大形有稜高杯形土器が、千葉市古山遺跡（田中・菊池1990）などで出土している他、搬入品あるいは直接的な系譜を認めることが可能な土師器も散見できる。古墳時代前期末から中期の編年網は、須恵器編年のみに依存することは困難である。西日本でも土師器編年が整備されつつあり、須恵器編年を含めた編年網の作成が可能となりつつあると思われる。

第3節　南岩崎遺跡塚越地区の変遷

市原市は、房総半島のほぼ中央部から東京湾岸にいたる南北約35kmの細長い市域をもち、その中央を養老川が貫流する。南岩崎遺跡は、その中流域左岸に位置する。第1章第2節でふれたように、遺跡が立地する台地状地形は、地形区分による河岸段丘であり、標高33〜37m前後の低位段丘南総Ⅲ面に区分される。養老川左岸での南総Ⅲ面は当該地以外では明確ではなく、周辺台地より一段低く、かつ養老川沖積地に長く突出する。この地形的特徴と本遺跡の消長は、前述したように密接な関係をもつ。

南岩崎遺跡塚越地区では、竪穴住居跡74軒、掘立柱建物4棟、方形周溝墓2基、円墳2基、土坑14基、

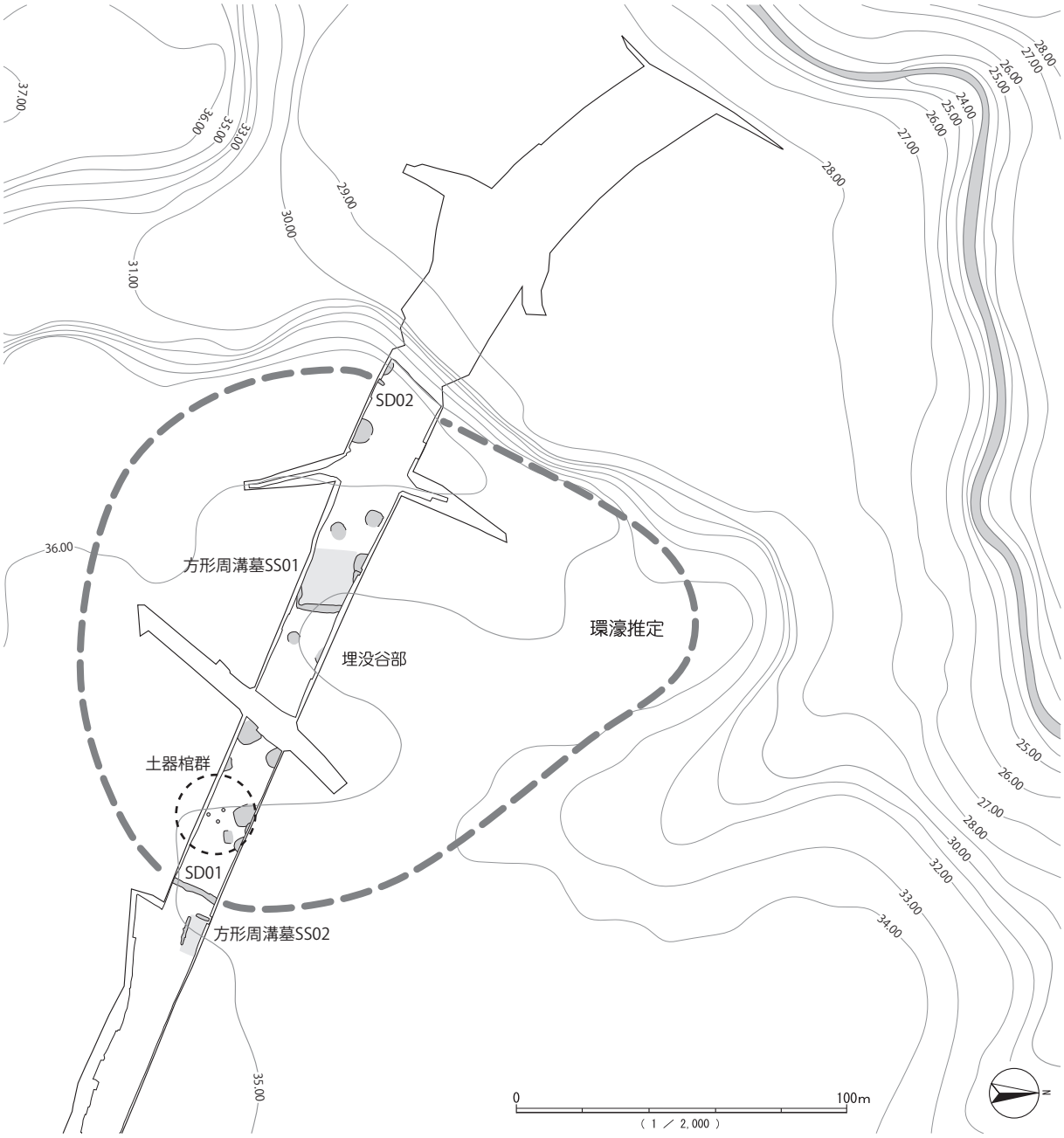


Fig.201　南岩崎遺跡塚越地区弥生時代中期環濠集落

井戸３基、溝25条、土器集積４基、礫集積２基を検出した。各時代時期の遺構については、第１章第４節で、また、中世の遺構については、第２章第10節でふれた。ここでは、弥生時代中期後半から古墳時代後期前半、南岩崎１期から６期について、変遷の概要をまとめておく。

弥生時代の開村時期は宮ノ台式前半期に遡る。ただし、この段階の遺構は本調査区内では検出されていない。宮ノ台式期（南岩崎１期）の遺構は、竪穴住居跡14軒、方形周溝墓２基、土器埋設土坑３基、溝２条であり、これらはいずれも宮ノ台式期後半期、南岩崎1b・c期の所産である。溝２条SD01・02はＶ字溝であり、環濠の可能性を想定している。SD02は、調査区内で断線しているが、環濠の一部が開口する例は、市原市域でも台遺跡、大厩遺跡に例がある。ただし、その機能、意図は明らかではない。SD01・02の溝心々距離は164.5mを測る。環濠規模については、安藤広道が、南関東地方

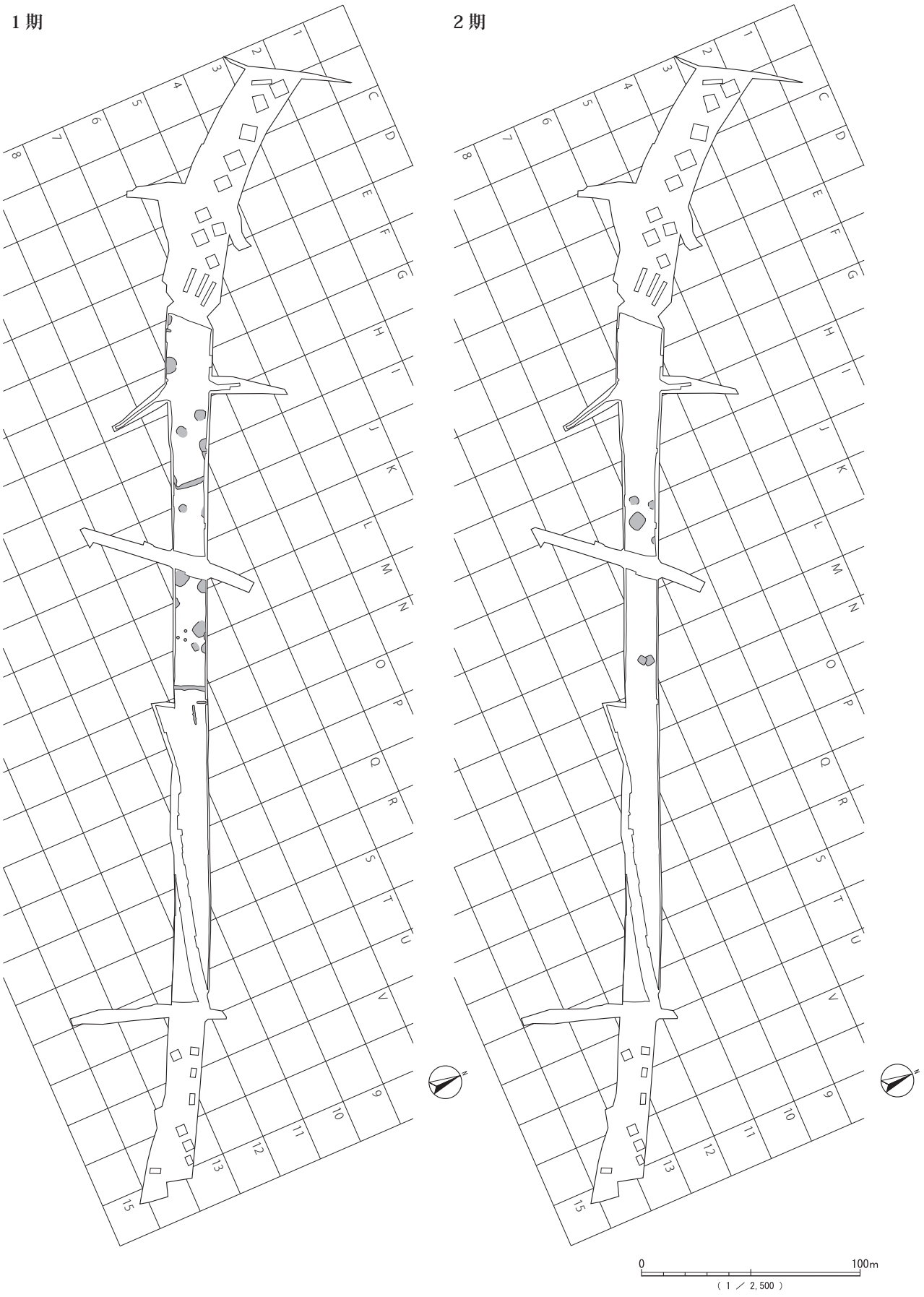


Fig.202　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(1)

弥生時代中期後半の基本規模を20,000㎡としているが（安藤2003）、市原市域でも、根田代遺跡が19,830㎡、潤井戸西山遺跡が19,400㎡、台遺跡が18,610㎡、南総中学遺跡が16,800㎡と、比較的均一である。Fig.201は、平面20,000㎡を想定規模として作図したものである。

南岩崎遺跡塚越地区の環濠集落は、おそらく谷頭部を囲繞するように開削されたと考える。谷凹部を中心とした環濠集落は他に例を知らないが、この地形的特徴と無関係に環濠が開削されたとは考えにくい。環濠の開削は、開村時当初の可能性が高いものの、これを実証的に検討することはできない。ただし、南岩崎1b・c期の竪穴住居跡は、すべて環濠内にあり、少なくとも南岩崎1b期には集落を区画していたと思われる。南岩崎1b期の竪穴住居跡は4軒、1c期の竪穴住居跡は7軒である。

南岩崎1b期には、環濠のほぼ中央部に方形周溝墓SS01が造墓される。環濠中央部の大形方形周溝墓は、市原市域でも台遺跡に例があり、菊間遺跡2号周溝もその可能性がある（安藤1996）。規模、設置位置は象徴的ではあるが、佐倉市大崎台遺跡7号方形周溝墓（柿沼・千田・青木1987）などと同じく、本遺跡例でも早期に土器が投棄されており、継続的な祭祀対象にはなっていない。一般的な墓域は、環濠外に形成されたと考えられ、SD01の東側に隣接して方形周溝墓SS02が検出されている。ただし、方形周溝墓群の列状の配列は、今回の調査区内では確認できなかった。なお、調査区ほぼ中央、環濠内B地点で3基の土器埋設土坑が検出されている。いずれも遺存状況は不良であるが、土器棺の独立墓域と推定する。土器棺は、胎児から乳幼児層の埋葬施設であるが、一般に方形周溝墓にともなう土器棺の検出率は、推定される年齢別死亡率に対して明らかに低い。時期地域がことなるものの、群馬県有馬遺跡では、方形周溝墓をともなう礫床木棺墓88基に対して土器棺46基が別群を構成している（佐藤1990）。これは年齢階梯にもとづく集団構成員の認知基準にかかわるものと考えることができる（大村1991a・2004a）。南関東地方でも、今後注視すべき必要があろう。

環濠SD01は、南岩崎1c期にほぼ埋没し、覆土上層を中心に南岩崎1c期段階の土器投棄が認められる。ただし、根田代遺跡との比較では、土器投棄量は顕著ではない。とくに下層部は、土器の出土が希薄であり、ある時期までは漸次埋没が進行したと推定する。最下部出土の14・51は、細別時期での比定は難しい。

本調査区の所見によるならば、弥生時代後期には、集落規模を縮小させる。根田代1期との比較では、本遺跡の場合、宮ノ台式最終末段階の状況がやや明確ではないが、SI33など、久ヶ原1式期は確実に確認できる。これらも環濠内に分布するが、SD01出土土器は、基本的に後期以降を含まない。久ヶ原式期（南岩崎2a期）の竪穴住居跡は3軒、山田橋式期（南岩崎2b期）の竪穴住居跡は3軒である。この南岩崎2期は、本調査区内では、弥生時代中期後半から古墳時代後期前半までの間で、最も継続性が疑われる段階である。ただし、弥生時代終末期（南岩崎3期）から五領式期（南岩崎4期）の竪穴住居跡群も、おおむねA・B地点境界付近、谷底部に竪穴住居跡が散在する傾向が認められる。谷部は、極端な比高差があるわけではないが、環濠埋没後も各時期居住地としており、なんらかの利点があったと思われるが推定は難しい。なお、3期の土器集積遺構SX01は、短口縁の小形壺形土器17点以上がまとまって出土しており、なんらかの祭祀関連遺構であると推定する。出土位置は、SS01墳丘裾部にあたるが、SS01墳丘部を直接祭祀対象としたかどうかは明らかではない(6)。各時期の竪穴住居跡数は、南岩崎3期が3軒であり、土器集積遺構のうちSX01もこの段階の竪穴の可能性がある。五領式期は、4a期が6軒、4b期が1軒、4c期が3軒である。

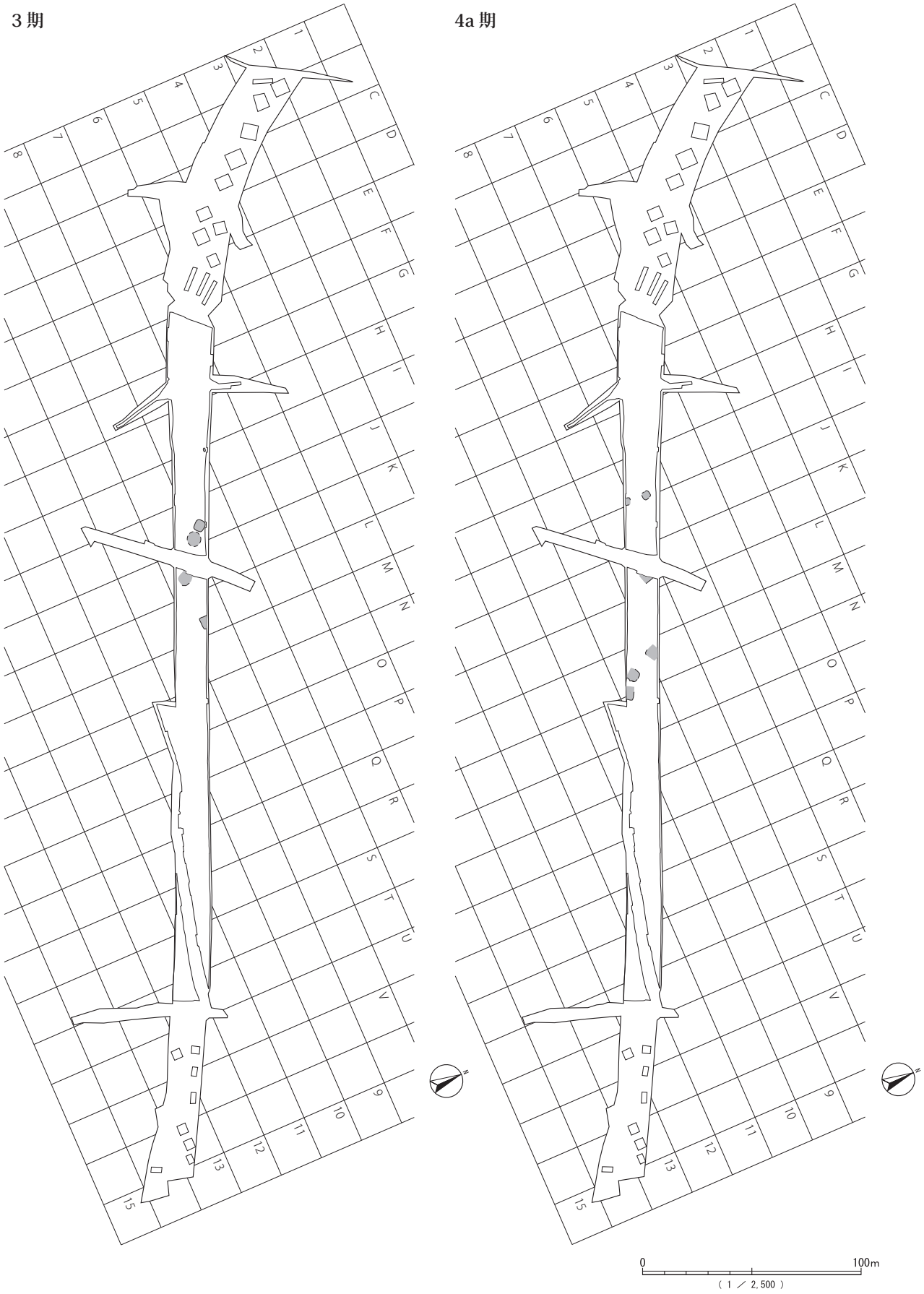


Fig.203　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(2)

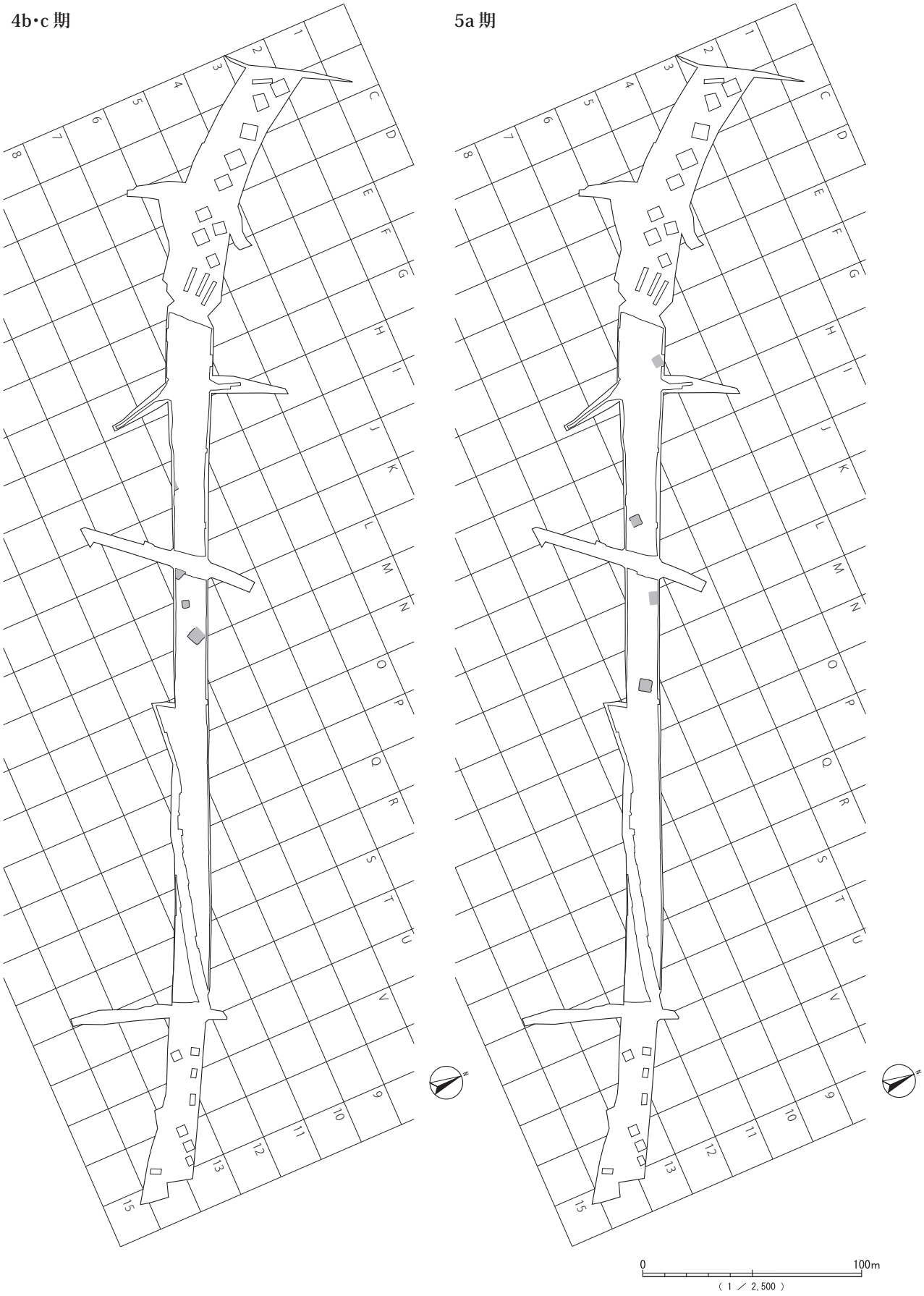


Fig.204　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(3)

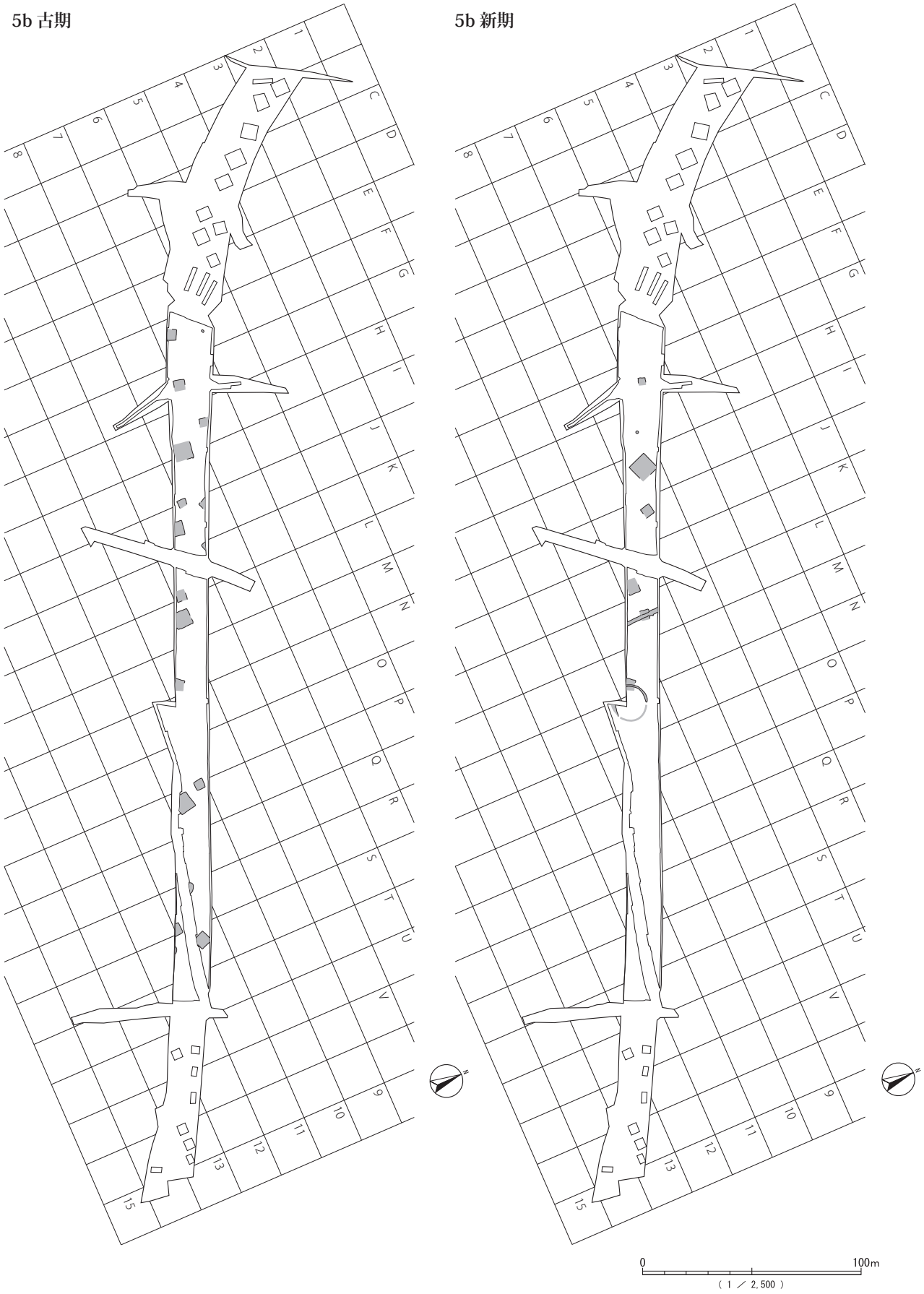


Fig.205　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(4)

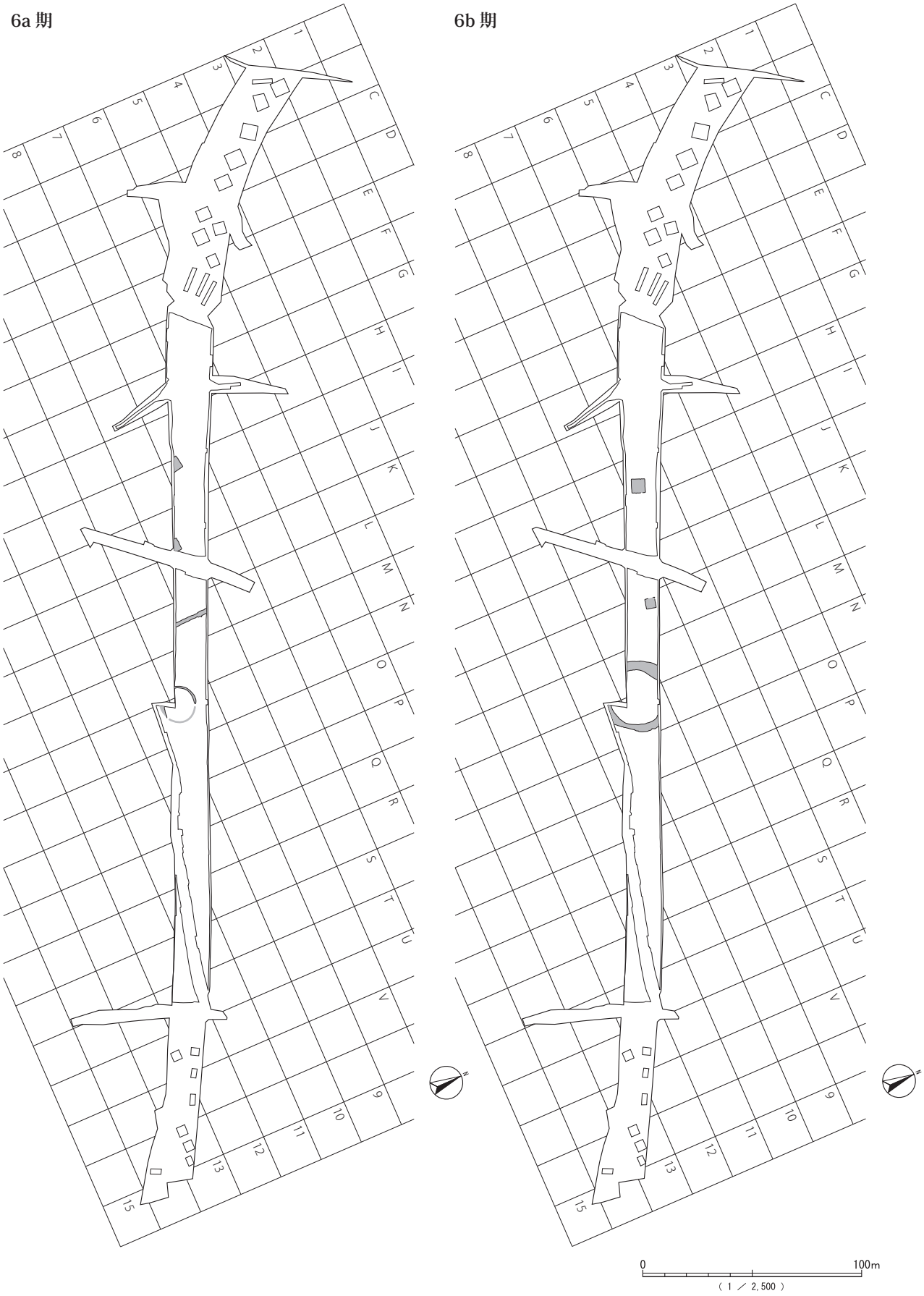


Fig.206　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(5)

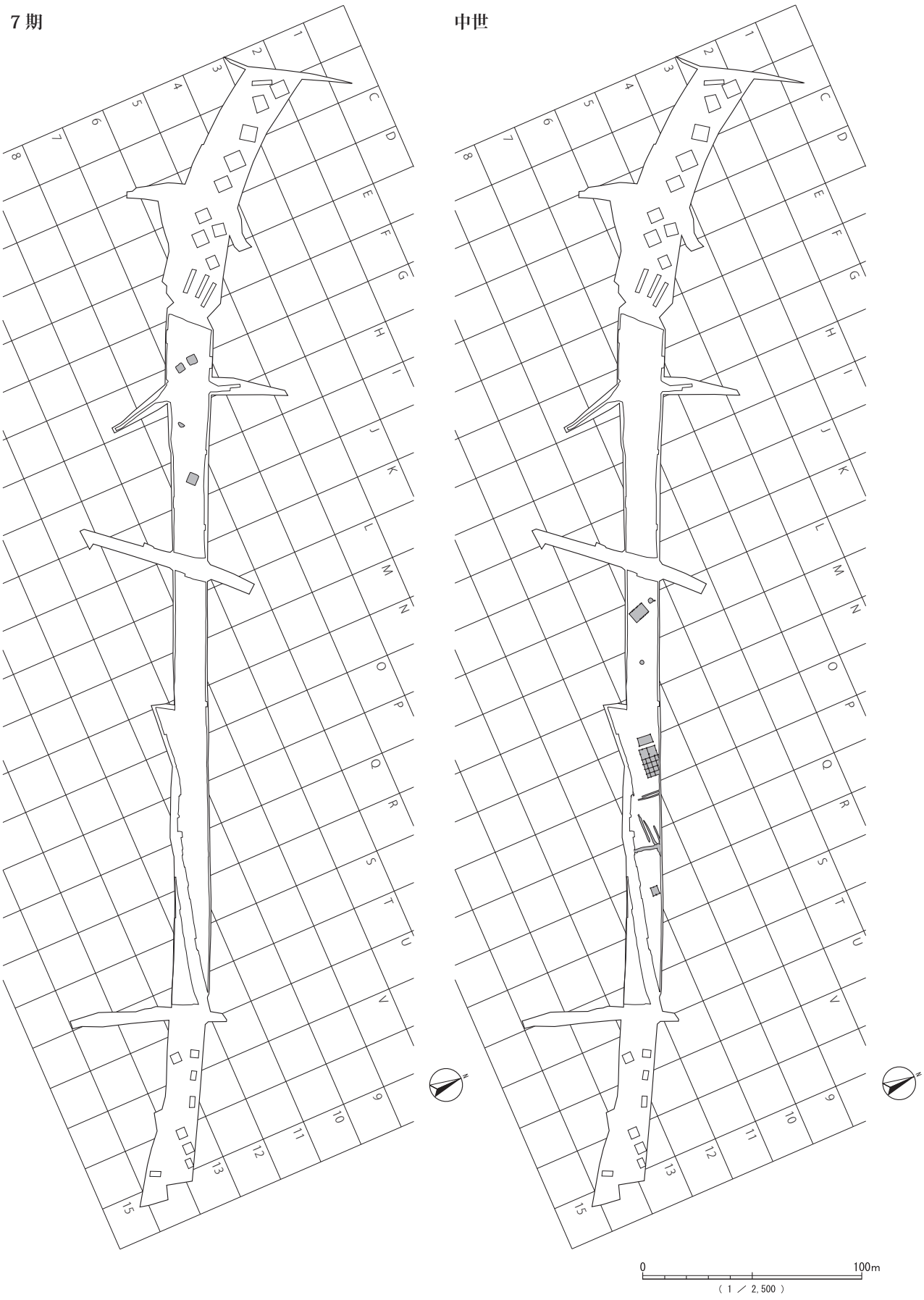


Fig.207　南岩崎遺跡塚越地区変遷図(6)

南岩崎5a期になると、散在的ではあるが、竪穴住居の分布が広がる傾向が認められ、5b古期には、今回の本調査区全域に居住域範囲が拡大する。しかし、集落の拡大は短期に収束し、5b新期には縮小する。和泉式期（南岩崎５期）の竪穴住居は総数28軒であり、他に、土器集積SX03・04もこの段階の竪穴住居跡の可能性がある。各細別時期では、南岩崎5a期が４軒、5b古期が15軒、5b新期が4軒である。鬼高式期（南岩崎６期）は総数４軒であり、6a期が２軒、6b期が２軒である。

南岩崎５期から６期にかけての変遷過程には、古墳群の形成および区画溝SD03の開削が関係する可能性が高い。古墳SM01については、周溝内出土遺物に石釧や初期須恵器など南岩崎5a期の遺物を含むが、重複する竪穴住居跡との関係から、本古墳が和泉式後半期（5b新期）より以前に遡ることは考えにくい。確実に本遺構にともなう遺物は存在しないが、他遺構との重複関係および底面付近出土須恵器蓋杯から、南岩崎6b期後半、TK10型式期を造墓時期と推定する。SM01に先行するSM02も、重複遺構との関係から5b古期より以前には遡らない。一応、5b新期から6a期の造営を推定する。

区画溝SD03は、B地点西側にある断面U字溝であり、ほぼ真北方向に走行する。重複遺構はSI51（5b新期）、SI52（5b古期）であり、これらを切って開削される。出土土器は、ほぼ和泉式に限定され南岩崎5b期を中心とするが、これはSI51・52の遺物を含む可能性がある。ただし、鬼高式を積極的に降る土器も認められないことから、時期的には、南岩崎5b新期から6a期の間を想定しておきたい。区画溝、古墳と竪穴住居跡群の変遷過程を重ね合わせると、南岩崎5b古期に拡大した居住域は、南岩崎5b新期と推定するSD03の成立にともない区画西側に限定され、区画東側は墓域化する。ただし、SD03とSM02の前後については明確ではない。

区画溝SD03の機能、性格は、明らかではない。単純に居住域と墓域を区分するものとも考えにくいが、内部施設などから積極的に「首長居館」を証明する根拠もない。一般に、関東地方で首長居館と称される遺跡のうち、とくに古墳時代前期から中期の事例には、「環濠集落」を数多く含んでいる(7)。ただし、首長居館、環濠集落にせよ、防御機能は時期、地域に傾向をもち、房総半島では、古墳時代各時期をとおして明確ではない。本遺跡例は、現状調査範囲で区画も完結しておらず、これ以上推論を重ねることも難しい。なお、南岩崎5b新期の竪穴以外の遺構としては、鏡形の可能性のある土製品、須恵器転用砥石をともなう礫集積遺構SX05がある。これは、時期的にSD03と対応する。

区画溝SD03は、隣接する6b期のSI49が設置された段階には、埋没していた可能性が高い。また、SM01が造営される南岩崎6b期後半には、本調査区の居住域としての利用も停止したと思われる。

註

(1) 根田代遺跡報告では、南岩崎遺跡の環濠集落形成期を宮ノ台式後半期としたが、本報告のとおり、前半期に遡る可能性がある。

(2) 御林跡遺跡本体部分の整理作業は現在進行中である。

(3) 小出紳夫氏のご教示による。

(4) 本遺跡出土の須恵器については、木對和紀の教示を得た。

(5) 他に 4a 期の SI21 から、所謂弥生後期型のタタキ甕が出土している。ただしこれは、在地産と推定する。

(6) この土器集積について、年報などで古墳時代中期とする記載があり、県史等で引用されている（小沢 2004）。誤認であり、訂正しておく。

(7) 柏市戸張一番割遺跡（古宮・下津谷 1997、高花 2003）のように、方形区画をとるものがあり、おそらく、古墳時代前期

の茨城県那珂市森戸遺跡（西野 1990）、茨城町奥谷遺跡（鯉渕 1989）、常総市国生本屋敷遺跡（阿部他 2006）、桜川市辰海道遺跡（仲村他 2004）、埼玉県熊谷市北島遺跡（山本 2005）なども環濠集落としての側面の評価が必要であると考える。また、古墳時代中期の群馬県太田市成塚住宅団地遺跡（宮塚・小林 1991・1993）、太田市水久保遺跡（須永 1998）なども首長居館とは考えられない（大村 2004c）。

文献

浅利幸一　1985「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報　昭和57・58年度』
浅利幸一　1989「神門三号墳」『市原市文化財センター年報　昭和62年度』
浅利幸一　1994「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報　昭和63年度』
浅利幸一　1997『市原市大厩浅間様古墳』財団法人市原市文化財センター調査報告書第42集
浅利幸一　2002「市原台遺跡群」『千葉県の歴史　資料編　考古２　弥生・古墳時代』千葉県
浅利幸一　2005『市原市加茂遺跡A・B 地点』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅤ　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
阿部義平他　2006『茨城県常総市国生本屋敷遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告第129集
安藤広道　1990a「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）」『古代文化』第42巻第６号　財団法人古代学協会
安藤広道　1990b「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（下）」『古代文化』第42巻第７号　財団法人古代学協会
安藤広道　1996「大形方形周溝墓から見た南関東弥生時代中期社会」『みずほ』第18号
安藤広道　2003「弥生時代集落群の地域単位とその構造」『考古学研究』第50巻第１号　考古学研究会
市毛勲・須田勉・新田栄治　1977『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳ　上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
大谷弘幸・白井久美子　2002「ちはら台遺跡群」『千葉県の歴史　資料編　考古２　弥生・古墳時代』千葉県
大谷弘幸・西野雅人　2004『千原台ニュータウンⅩⅠ市原市草刈遺跡（C 区・保存区）』千葉県文化財センター調査報告第479集
大村直　1991a「方形周溝墓における未成人中心埋葬について　家族墓・家長墓説批判」『史館』第23号　史館同人
大村直　1991b『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第40集
大村直　1992『市原市叶台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第44集
大村直　1993「ムラの廃絶・断絶・継続」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅱ
大村直　1994「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』第25号　史館同人
大村直　2004a「方形周溝墓」『千葉県の歴史　資料編　考古４　遺跡・遺構・遺物』千葉県
大村直　2004b『市原市山田橋大山台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第88集
大村直　2004c「久ヶ原式・山田橋式の構成原理 東京湾岸地域後期弥生土器型式の特質と移住・物流」『史館』第33号 史館同人
大村直　2005『市原市根田代遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅢ　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
大村直・小橋健司　2005「GIS と遺跡情報管理　市原市域における弥生時代から古墳時代中期の遺跡群」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅴ
岡戸哲紀　1996『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第10集
小川浩一　2000「潤井戸中横峰遺跡（２次）」『市原市文化財センター年報　平成８年度』
小川浩一　2005『市原市潤井戸西山遺跡 D 地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第95集
小久貫隆史　1983『千原台ニュータウンⅡ　草刈遺跡 A 区（第１次調査）・鶴牧古墳群・人形塚』財団法人千葉県文化財センター
小久貫隆史　1996『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
小沢洋他　1989『小浜遺跡群Ⅱ　マミヤク遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第44集
小沢洋　2004「祭祀遺構」『千葉県の歴史』資料編考古4（遺跡・遺構・遺物）千葉県
忍澤成視　1995「根田祇園原貝塚（第５次調査）」『市原市文化財センター年報　平成３年度』
忍澤成視　1999『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
柿沼修平他　1979『土宇』日本文化財研究所文化財調査報告６
柿沼修平・千田利明・青木幸一　1987『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会・佐倉市
加藤正信　1985『千葉市蓑輪遺跡』財団法人千葉県文化財センター
上守秀明・出口雅人　1993『千葉東南部ニュータウン 18　鎌取遺跡』千葉県文化財センター第222集
北見一弘　1999「畑木小谷遺跡」『平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
木對和紀　1990「姉崎上野合遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
木對和紀　1992『市原市椎津茶ノ木遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第49集
木對和紀　2004a『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告ⅩⅡ　財団法人市原市文化財センター・市原市

教育委員会
木對和紀　2004b「潤井戸西山（草刈尾梨）遺跡」『平成15年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
倉田芳郎・相京建史　1978『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会
栗本佳弘　1971「佐倉市大篠塚遺跡」『東関東自動車道（千葉－成田線）関係埋蔵文化財発掘調査報告書
黒沢浩　1997「房総宮ノ台式土器考　房総における宮ノ台式土器の枠組み」『史館』第29号　史館同人
黒沢浩　1998「続・房総宮ノ台式土器考　房総最古の宮ノ台式土器」『史館』第30号　史館同人
鯉渕和彦　1989『奥谷遺跡　小鶴遺跡（上）（下）　一般国道６号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第50集
小橋健司　2002「姉崎山新遺跡（第２地点）」『市原市文化財センター年報　平成11年度』
小橋健司　2004『市原市山倉古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告ＸＩ　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
小橋健司　2006『市原市長平台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告ＸＶＩ　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
古宮隆信・下津谷達男　1997「弥生・古墳時代の市域」『柏市史』原始・古代・中世編　柏市教育委員会
近藤敏　1987『菊間手永遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第23集
近藤敏　2004「南岩崎遺跡（1次・2次調査）」『市原市文化財センター年報　平成13・14年度』
近藤敏　2005「姉崎山新遺跡（第３地点）」『市原市文化財センター年報　平成15・16年度』
斉木勝・種田斉吾・菊池真太郎　1974『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社
佐藤明人　1990『有馬遺跡Ⅱ　弥生・古墳時代編』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第102集
三森俊彦・阪田正一他　1974『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県開発公社
白井久美子・田島新他　1994『千原台ニュータウンⅥ　草刈六之台遺跡』千葉県文化財センター調査報告第241集
白井久美子　2002「姉崎古墳群」『千葉県の歴史　資料編　考古２　弥生・古墳時代』千葉県
杉山晋作・安藤鴻基・沼沢豊・田中新史　1972『古墳時代研究Ⅰ　千葉県市原市小田部古墳の調査』古墳時代研究会
鈴木英啓　1986『潤井戸西山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第９集
須永光一　1998「水久保遺跡（尾島工業団地遺跡Ｅ地点）」『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』第８回東日本埋蔵文化財研究会
田井知二　1997『千原台ニュータウン７　草刈１号墳』千葉県文化財センター調査報告第295集
高田博　1986『千原台ニュータウンⅢ　草刈遺跡（Ｂ区）』財団法人千葉県文化財センター
高橋康男　2002『市原市向原台遺跡・東向原遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅶ　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
高花宏行　2002「戸張一番割遺跡」『千葉県の歴史　資料編　考古２　弥生・古墳時代』千葉県
田所真　2000「潤井戸鎌之助遺跡」『市原市文化財センター年報　平成９年度』
田所真　2001「潤井戸鎌之助遺跡」『市原市文化財センター年報　平成10年度』
田村隆・加納実・高柳圭一他　1996『市原市武士遺跡Ⅰ』千葉県文化財センター調査報告第289集
田中清美　1999「SE703出土韓式系土器と土師器の編年的位置づけ」『長原遺跡発掘調査報告Ⅶ』財団法人大阪市文化財協会
田中清美　2002『釜神遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第76集
田中新史　1975「諏訪台１号墳」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅰ　諏訪台古墳群調査概要』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
田中新史　1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号　早稲田大学考古学会
田中新史　1980「古墳の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
田中新史　1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号　早稲田大学考古学会
田中新史他　1988『「王賜」銘鉄剣概報　千葉県市原市稲荷台１号墳出土』市原市教育委員会
田中大介　2002「南岩崎遺跡」『第17回市原市文化財センター遺跡発表会要旨　平成13年度』
田中英世・菊池健一　1990『千葉市古山遺跡』財団法人千葉市文化財調査協会
辻美紀　1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学　大阪大学考古学研究室10周年記念論集』大阪大学考古学研究室
辻美紀　2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅸ』財団法人大阪市文化財協会
鶴岡英一　2001「潤井戸鎌之助遺跡（第２次）」『市原市文化財センター年報　平成10年度』
永沼律郎　1992『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』千葉県教育委員会
永沼律郎他　1995『千葉県重要古墳群測量調査報告書　市原市菊間古墳群』千葉県教育委員会

中村恵次・市毛勲・杉山晋作・安藤鴻基・沼沢豊　1986「海保古墳群」『南大広遺跡　海保古墳群』市原市埋蔵文化財調査報告書４　市原市教育委員会
仲村浩一郎他　2004『辰海道遺跡 1』茨城県教育財団文化財調査報告第222集
西野則史　1990『北郷Ｃ遺跡　森戸遺跡（上）(下）　一般国道 349 号線改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第55集
西村歩・池峯龍彦　2006「和泉地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
蜂屋孝之　1999『市原市西国吉遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第65集
浜崎雅仁　1993『美生遺跡群Ⅱ　第４・５・９地点』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第93集
原口正三・田中琢・田辺昭三・佐原真　1962『船橋遺跡の遺物の研究（Ⅱ)』平安学園考古学クラブ
半田堅三　1992『市原市草刈尾梨遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第46集
半田堅三　1997「山田橋大塚台遺跡」『市原市文化財センター年報　平成５年度』
半田堅三　2003『市原市台遺跡Ｂ地点』上総国分寺台遺跡調査報告Ｘ　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
樋上昇他　1993『月縄手遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財調査センター調査報告書第55集
比田井克仁　2004「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』第33号　史館同人
古内茂他　1973「大森第２遺跡」『京葉』財団法人千葉県都市公社
古内茂・伊藤智樹　1983『千葉東南部ニュータウン 12　南二重堀遺跡』財団法人千葉県文化財センター
古内茂・大野康男 1984『千葉東南部ニュータウン 15　馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
冨加見泰彦・土井和幸　1993『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第75輯
藤崎芳樹　1982『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
藤崎芳樹　1983「市原市小谷田八木遺跡の弥生式土器」『研究連絡誌』第３号　財団法人千葉県文化財センター
藤田憲司・奥和之・岡戸哲紀　1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯
松本百合子　2001『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅳ』財団法人大阪市文化財協会
宮塚義人・小林秀次　1991『成塚住宅団地遺跡Ⅱ－1　遺構図版編』群馬県企業局・太田市教育委員会
宮塚義人・小林秀次　1993『成塚住宅団地遺跡Ⅲ　分析編』群馬県企業局・太田市教育委員会
山形美智子　1994『千葉県木更津市請西遺跡群発掘調査報告書Ⅴ　山伏作遺跡』木更津市教育委員会
吉田稔　2005『北島遺跡Ｘ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第302集
米田耕之助　1986『山田大宮遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第８冊
八幡一郎・岡崎文喜・松浦宥一郎他　1972『外原』船橋市教育委員会

付編　DTP入稿について

本報告書は、フルデジタルでの入稿を行った。本市では、「根田代遺跡」、「平成16年度市原市内遺跡発掘調査報告書」、「長平台遺跡」につづき4冊目であり、「遺跡発表会要旨」などの小冊子を含め、作成、入稿手段として定着しつつある。遺物写真図版については、「山田橋大山台遺跡」、「西広貝塚Ⅱ」などでの実践例もある。現状において、体制的な整備も進み、出力トラブルもほぼ克服しつつあると思われる。しかし、DTP内製化といっても、印刷工程全体の中では、つねに異なる環境に引き渡される中間的な工程にすぎないことも自戒しなければならない。「PDFワークフロー」等、DTPそのものも急速な変化をとげており、実績を着実に積み重ねていく必要がある。

ここでは、できるかぎり設定の詳細を記載し、制作記録としておく。

制作環境

PC

- EPSON Endeavor Pro2000 ＋ 19型CRT ＋ 液晶ペンタブレットWACOM C−1500X
  WindowsXP Pro、P4 3.06MHz、1.5GBRAM
- NEC Mate MY34Y/G−E ＋ 19型液晶
  WindowsXP Pro、P4 3.39GHz、2.0GBRAM
- NEC Mate MY32E/M−G ＋ 19型CRT ＋ 液晶ペンタブレットWACOM C−1500X
  WindowsXP Pro、PD 3.19GHz、2.0GBRAM
- NEC Mate MY30Y/M−F ＋ 15型CRT
  WindowsXP Pro、P4 3.00GHz、1.5GBRAM
- NEC VT1000J/6 ＋ 17型CRT
  WindowsXP Pro、PⅢ 997MHz、640MBRAM

スキャナ

- EPSON ES−8500（ネットワーク対応、A3判）
- EPSON GT−X700（A4判）
- Nikon COOLSCAN V ED（フィルムスキャナ35mm）

デジタルカメラ

- FUJIFILM FinePix S3 Pro　（有効画素数1234万画素）
- FUJIFILM FinePix F710　（有効画素数620万画素）

プリンタ

- FUJI XEROX DocuCentre−Ⅱ C2200　（ネットワーク対応複合機）
- EPSON LP−9100PS3

ネットワークドライブ

- BUFFALO HD−HG400LAN（400GB）

基本ソフト

Adobe Creative Suite 2

- Adobe Photoshop 9.0.2
- Adobe Illustrator 12.0.1
- Adobe InDesign 4.0.4
- Adobe Acrobat 7.0.8
- Adobe Bridge 1.0.4

Illustratorは、バージョン間の互換性が乏しく、とくにテキストエンジンを変更した、8.0以降とCS以降では、その落差が激しい。InDesignを含め、コンマ以下のアンダーバージョンまで最新にそろえる必要がある。今回、NEC VT1000J/6のみCSを搭載しているが、これはPhotoshopのレタッチのみの使用とした。

カラー設定・カラーマネージメント

Adobe各ソフトのカラー設定は、Adobe Bridgeによって、以下の通り設定、同期した。

「プリプレス用−日本2」

・RGB: Adobe RGB（1998）

・CMYK: Japan color 2001 Coated

・グレー: Dot Gain 15%

・スポット: Dot Gain 15%

カラー設定については、仕様上明記したが、入稿データは、ファイルの最終保存時に、ICCプロファイルを破棄している。これは、受稿側のプロファイルとの不一致により、色やグレーバランスが変わることがあることによる。

モニタのキャリブレーションについては、色温度5000K、ガンマ値2.2を基準とし、カラーマネジメントツールとして「Eye−One Display 2」（グレタグマクベス社製）を使用した。

基本仕様

印刷出力線数指定（写真図版）は、AMスクリーン（300lpi以上）ないしFMスクリーン（15〜20 μ）とした。市原市の写真図版の基本仕様は、175線（lpi）ダブルトーンである。ダブルトーンは、モノトーンの階調原稿を、色分解せずにスクリーン角度を変えた硬調と軟調の２種を重ね刷りするものであり、グレースケール印刷が、理論上の256階調を実際には表現できないことを補足し、階調に奥行きや深みを出すことができる。ただし、この方法は、2版のフィルム（刷版）を使用することにより、印刷費は割高にならざるを得ない。

しかし、近年CTPシステムの導入により、高精細印刷が一般的に可能となりつつあり、ダブルトーンにかわる高品位印刷として、今回、上記の設定を基本仕様とした。

ダブルトーンに比べると、階調の表現は確実に甘くなるものの、網点が視認できない程度まで細かくなるため、階調表現がスムーズになり、実際の写真やインクジェットプリンタに近い再現性がもつ。とくに、FMスクリーン印刷は、今後の高品位印刷の主流になる可能性が高い。（追記：実際の印刷はFMスクリーン20 μである。）

なお、一般論として300線の出力には600ppiの画像解像度が必要となるが、この場合、175線相当350ppiに対して、ファイルサイズは約3倍に肥大する。低解像度高線数では、充分な階調が得られないともいわれているが、スクリーニング技術の向上によって、低解像度高線数網点の生成も可能になりつつあり、今回は、画像解像度を従来の350〜400ppiのままとした。最終的には受稿側の出力環境に左右されるが、現状では、さらに仕様内容を限定することは難しい。

なお、本文編については、従来どおりの175線を仕様とした。

校正

デジタル入稿は、完全原稿が必至である。校正については、主に文字組み崩れ等の確認を目的として、RIP演算済みのデジタルプルーフ出力1回とした。実際には、この段階で入稿側が最終確認・調整を行い、データを差し替え最終稿とした。なお、カラー図版およびグレースケール図版の一部のみ本機校正を指定した。

PDF

データ保存用PDFと、本誌添付用PDFの作成を仕様とした。

PDFは、InDesignCS2から直接書き出しが可能であるが、データ保存を目的とするため、印刷最終データをもとに、受稿側に作成を委託した。

PDF仕様は、データ保存用がAcrobat7.0 Professionalによる「PDF/X−1a:2001」、添付用は「標準」を基本とし、データ保存用のカラー・グレースケール画像の解像度のみ350ppiを指示した。

CD−ROMの添付は、それだけをみれば、明らかにコスト増を生じている。しかし、本書では、土器他約2000点の観察表等を印刷部分から除外してCD−ROM収録とした。このことによって、PDFの添付を可能としている。なお、PDFは、Web上でも公開している。そのPDF設定は「最小ファイルサイズ」であるが、その作成は仕様には含めていない。

使用フォント

フォントは、モリサワフォントが業界標準ともいわれているが、ライセンスの問題も含め、Adobe CS2にバンドルされているOpenTypeの小塚フォントが無難であると判断し、今回は小塚明朝・ゴシックproを採用した。一部に使用したTrueTypeフォント等については、すべてアウトライン化、グラフィック化した。OTFは、WindowsとMac間に互換性があり、CS以降は完全対応している。しかし、Mac上での検証ができないため、仕様上、プラットホームの変更にもとづく文字組み崩れ等については、受稿側の責任とした。

ファイル形式

配置画像の形式は、今回ネイティブのPhotoshop形式（PSD）とした。「根田代遺跡」では、写真図版のページレイアウトをIllustratorで行い、基本仕様をダブルトーンとしたため、配置形式はEPS以外に選択の余地がなかった。しかし、EPSは再加工に適したフォーマットではないため、PSDを前提とし、両者を管理する手間を要した。PSDは、実画像をモニタで確認することも可能であり、通常の出力では、PSプリンタを必要としない。また、データのハンドリンも問題がなかったため、今回は最終的な配置形式を含めPSDで運用した。Illustratorについても、8.0まではEPSが必須であると言われていたが、今回はAI形式で統一した。ただし、Illustrator－PhotoshopPSD形式の配置関係では、Illustrator保存オプションの「配置した画像を含む」にチェックすると、配置画像が埋め込まれてしまうためチェックができない。このため、リンクがはずれやすい状況が生ずる。また、EPS形式は、現状でもなお最も安定した出力が可能であると言われており、最終的には、受稿側の環境に左右される可能性はある。

トレース

前回「根田代遺跡」では、遺構図についてIllustratorによるデジタルトレースとした。しかし、本報告では、DTP班が当初「長平台遺跡」作成に携わっていたこともあり、今回は、遺構・遺物ともアナログトレースを基本とした。従前通りの版下作成ののち、スキャニングにより画像化（モノクロ２階調PSD形式）したが、全凸図版（A4判×200%以上）のうち約半数程度は、スキャニング、ゴミ取り、モノクロ２階調化までを事前に外注し、残りを内製とした。外注と内製は、作業工程の進捗による使い分けであり、仕上がりに優劣は認められない。モノクロ２階調は、当然ベクトルデータほどの柔軟性はないものの、移動ツールによる部分的な移動、ペンツールによる加筆も比較的容易である。

なお、特色２色印刷としたFig.150・159・163や、Fig.3・4・6～8・176・177・179・194～196・201～207については、デジタルトレースで行っている。特色２色のインキ設定は「TOYO 0837pc」である。

全体としてデジタル・アナログトレース混在環境となったため、モノクロ２階調画像との比較でIllustratorの線幅を調整し、ロットリング0.3mm相当を0.57pt、0.2mm相当を0.43pt、0.1mm相当を0.23ptにした。ただし、これも出力時の比較によるものではない。フィルムレス化が進み、細線の再現性は増していると思われるが、PDF/X−Plus（J）では、線幅0.14pt（0.05mm＝0.142pt）以上がルール化されているとのことであり、0.05mm以下のヘアラインは使用していない。「根田代遺跡」では、単純にロットリング0.1mm相当（×50%）として線幅0.05mmを使用したが、実際の仕上がりでは丸ペンに相当する。

前回「根田代遺跡」でも、遺物実測図のトレースについては、アナログ仕様とした。現状での縄文土器、弥生土器等の作図法に変更がない限り、コスト面でのアナログ優位は動かない。CS2では、ライブトレース機能が追加されたが、実測原図からの生成は困難である。しかし、モノクロ２階調画像を有効に利用することによって、フルデジタル入稿を可能とした。

遺構図のデジタルトレースについては、Illustratorのプラグインソフトを使用することによって、シェープファイルを介した全体図作成の内製化も可能となっている。GISとの連繋などの２次的利用を含め、遺構図のデジタルトレース優位性は動かないと思われる。

スキャニング

スキャニングは、35mmスライドの一部でフィルムスキャナを使用した以外、上記フラットベッドスキャナで行った。今後、データ保存を目的としたスキャニングについては別に検討の必要があるものの、報告書等冊子類であれば、コンシューマ向けフラットベッドスキャナでもPhotoshopでのレタッチをある程度取得できれば、製版用ドラムスキャナと極端な差違は認められないと思われる。

挿図原稿は上記のとおり。遺構写真についても、通常の版下作成同様モノクロ仕上がり等倍で紙焼きし、図版単位で組作業を行った後にスキャニングした。カラー図版については、ポジ・ネガを問わずすべてフィルムからスキャニングした。単純に画質を優先するのであれば、モノクロ写真についても、カラーモードでのフィルムからの取り込みが優れているが、グレースケール・ダブルトーン画像については、そこまでの差違はなく、コスト面での判断になる。

スキャニングは、Photoshopから「EPSON Scan」をプロフェッショナルモードで起動。イメージタイプは、16bitグレー、48bitカラーを基本としたが、モノクロ２階調画像については8bitグレーとした。デジカメ画像でも同じであるが、Photoshopでの加工は、8bit／チャンネルの場合、トーンジャンプにみられる劣化がはげしく、滑らかな階調変化を得にくい。

解像度は、最終的な解像度に対して若干余裕をもたせて設定した。モノクロ２階調800dpi（仕上がり200%原稿）、遺

構写真（仕上がり100%原稿）については400dpi、フィルムからスキャニングしたカラー画像については、フィルムと仕上がりサイズとの関係により判断した。

ズームは100%（等倍）が基本であり、取り込み時の倍率変更は、CDセンサーのピッチと、倍率、解像度の関係で、画像が不完全になる場合があるといわれている。カラーポジについてはドライバによる色調補正、アンシャープフィルタを選択したが、原則としては行っていない。

カメラ設定

FUJIFILM FinePix S3 Proでは、モノクロ撮影（BLACK&WHITE:RGB）が可能であったが、階調差が際立つ傾向が見られたため、仕上がりグレースケール画像もカラーモード（Adobe RGB）で撮影した。設定上注意すべき点はシャープネスであり、カメラ側でもかけておかないと、Photoshopのアンシャープマスクの効果が出にくい。

撮影時の画像形式はハンドリング等を考慮しJEPGとした。撮影ファイルは、メディア単位のフォルダに一旦格納し、Bridge上で選別作業を行った。その後、ファイル名を挿図上の遺構遺物No.に変更し、Bridgeの「イメージプロセッサ」を使用して、一括16bit、PSD形式に変換した。この段階で、データのバックアップを行った。

ファイルを格納するフォルダは、撮影順メディア単位から（1）、掲載上の分類・遺構No.によって再整理し（2）、レタッチを行い、最終的には、編集時に完成図版単位のフォルダを作成し（3）、リンクファイルを収納した。編集作業を効率的に行うには、（2）の分類整理が重要であり、また、ファイル名についても、遺構遺物No.が確定していないと混乱を招くことになる。

なお、土器破片個体については、断面実測と同時にコンパクトカメラFUJIFILM FinePix F710で随時撮影し、事前に撮りためておいた。

レタッチ

画像補正は以下の手順で行った。

（1）画像解像度の設定
（2）レベル補正
（3）アンシャープマスク
（4）モード変更

（1）画像解像度の設定

「ドキュメントのサイズ」は仕上がりサイズ原寸を大原則とする。土器破片個体・石器・鉄器・土製品の場合は、写し込んだスケールにあわせ長方形選択ツール等で一旦切り抜き、画像解像度の指定時に実測図と同スケールに設定した。PC上ではサイズに対する感覚が乏しく、縮尺率を基準とした方が相対的なバランスが維持できる。土器破片個体・石器等は、その後フリーフォームペンツールのマグネットオプションを使用し、クリッピングパスによってマスク処理を行った。角版の場合は、InDesignによるレイアウト枠サイズを基準とした。

画像解像度は、グレースケールが350ppi、カラーが400ppi、モノクロ2階調が1200ppiである。デジカメ画像の一部には、必要解像度に足りないものもあったが、過去の事例では、250ppi程度以上あれば、350ppiに引き上げることによって、おおむね画質は確保できる。画像の再サンプルはハイキュービック法による。

（2）レベル補正

色調（階調）範囲の調整は、レベル補正コマンドを基本とする。カラー、グレースケールにかかわらず、256階調（0−255）をできるだけ広範囲に使用することによって、なめらかで深みのある画像となる。具体的には、シャドウとハイライトの入力レベルスライダを、ヒストグラム内の両端にあるピクセルまでドラッグすることによって、階調の幅を広げる。中間調の調整について、今回のグレースケール仕様では、中央の入力スライダを遺物相当のピクセル範囲の中央に設定した。ダブルトーン仕様の「根田代遺跡」では、シャドウ側を端のピクセルから−20程度とし、中央スライダの位置も、遺物相当範囲のシャドウ側1/3程度として明るめに設定した。なお、デジカメ撮影の土器角版については、背景の調整も同時に行った。基本的には、ハイライト側背景相当範囲に対する入力レベルスライダによって調整したが、他にトーンカーブ機能も使用した。背景は、土器正面上部分を基準位置とし、K:8%を基本とした。

なお、デジカメ画像については、RGBモード、グレースケールモードそれぞれでレベル補正を行っている。RGBモードでのレベル補正を省略すると、階調のコントラストが際立ち、黒斑や影が強調されてしまう傾向がある。

なお、ここまでの工程はすべて補助員が行い、ここで一旦保存して仕上がりを確認した。レベル補正の繰り返しは画像を劣化させるが、調整レイヤーを使用して再調整を行った。

カラー画像についても、レベル補正によるカラー各チャンネルに対する色調範囲の調整を基本とする。「根田代遺跡」では、ポジフィルムの退色が激しく、乗算等による合成処理ののち色調補正を行ったが、この段階ではモニタのキャリブレーションを行っていなかったため、適正な色の再現にはいたらなかった。ネガからの取り込みによる色かぶりの除去については、カラーバランス・カラーの適用等のコマンドをあわせて使用した。

モノクロ2階調については、シャドウ側スライダを墨部分中央にあわせ、台紙の方眼がほぼ消える程度に背景部分左裾あたりでハイライト側のスライダを調整する。

(3) アンシャープマスク

アンシャープマスクの設定は、以下のとおりとした。

遺構 (グレースケール)

量：350%、半径：1pixl、しきい値：6レベル

遺物角版・カラー画像

量：280%、半径：1pixl、しきい値：10レベル

遺物キリヌキ

量：280%、半径：1pixl、しきい値：6レベル

モノクロ2階調

量：300%、半径： 0.8 pixl、しきい値： 8レベル

印刷工程を経る中で、画像はある程度劣化 (ボケ) する。アンシャープマスクは、それを補うために画像の階調差があるところにエッジをつけることである。アンシャープマスクは、画像処理後の最終段階で行う必要があり、リサイズや回転によっても、その効果が失われるだけではなく副作用を生じる。したがって、保存を目的とした画像に対して行うべきできないが、逆に印刷を前提とした場合は必須の工程と考えるべきである。適用量は、通常の175線では、350%を最大値として原則画像解像度と同じ値としているが、今回、高精細を仕様としたため、デジカメ画像については若干下げてみた。ただし、解像度の設定とあわせ、その妥当性は明らかではない。半径としきい値は倍率によって変化をつけている。具体的には、今回一部遺構写真についてスキャン後に108%に拡大しなければならないものがあったが、これについては半径：1.1pixl、しきい値：5とし、若干粒子を出す方向で調整した。

(4) モード変更

最終的には、グレースケール8bit／チャンネル、CMYK 8bit／チャンネルに変更する。カラー画像の場合、RGBデータをCMYKデータに変換する際に,色空間の圧縮にともなう退色が見られるが、今回は、RGBでの調整を、Photoshopの校正設定／作業用CMYK・色の校正コマンドで行い、CMYK変換ののち彩度を+10程度加算した。これ以外、CMYKでのレタッチは基本的に行っていない。色校正を前提とするならば、Adobe RGBで入稿し、印刷特性に合せた分解、シャープネス処理をあわせて製版側に依頼することが無難ではあるが、ポジ入稿と異なり「見本」がない以上、期待どおりの仕上がりを要求することは難しいと思われる。

モノクロ2階調については、以下の設定による。

出力 : 1200 pixel／inch

使用 : 50%を基準に2階調に分ける

モノクロ2階調変換ののち、画面表示を「20%」にして、それでも見えるゴミだけを消去した。

なお、実際の工程としては、レベル補正ののち、調整レイヤーの結合→アンシャープマスク→モード変更→保存 (ICCプロファイルの破棄) は、Photoshopでアクション登録を行い、自動実行した。出力エラーにつながるモード変更や、複数回実行することによって画像が極端に劣化するアンシャープマスクなどの工程は、自動実行処理によって、人為的なミスを抑えることにもなる。今回、フリーフォームペンツールによる切り抜きなども、作業パスの保存からクリッピングパス、外縁のぼかし、余白の削除などを、一括登録し実行した。

レイアウト

モノクロ2階調画像は、挿図を単位としてIllustratorに配置し、キャプション、遺物No.等のテキストの入力、方位・スケール等の配置を行った。Illustratorファイルは、最終的にはInDesignに再配置することとなるが、直接InDesignに配置しなかったのは、整理担当者の変更等により、遺構図作成に対して遺物実測が遅れたことによる。これにより、遺物点分布・接合関係図の作成も遅れ、その完成を待って挿図組みを始めると工程的なロスを生じるため、これをIllustrator上で行うこととした。再配置によるデメリットが生ずる可能性もあるが、作業工程が煩雑な場合、挿図単位

での作業が可能なIllustratorの方が、明らかに効率的でもある。なお、遺物分布・接合関係図の原図作成は、基本的にアナログ作業によるが、Fig.6については、アイシン精機株式会社のご厚意により、「トレース3Dくん」モニター版を使用し、断面分布図等を生成した。「トレース3Dくん」は、EPS形式で書き出し、Illustrator形式とした。

InDesignよる編集作業は、本文編と写真図版編を分けて行った。写真図版は、テキストフレーム、グラフィックフレームを配置した基本レイアウトをマスターページとして作成し、これをオーバーライドして使用した。

また、InDesignは、文字の水平垂直比率から文字前後のアキ量、字送り・カーニングにいたる検索置換機能があり、本稿でも記号などについて若干の調整を行っている。なお、InDesignによる文字組みは、「行末約物半角」を基準に一部カスタマイズして使用した。表組みについても、Excelデータをもとに、InDesign上で組み作業を行った。

なお、原稿執筆は「秀丸エディタ」を使用した。秀丸はさまざまな校正用マクロが公開されており、正規表現といったより高度な機能を使わないまでも、全角半角変換など、基本的な文書洗浄を瞬時に行うことができる。

最終工程

出力トラブルの原因としては、Illustrator、InDesignのバージョンの混在、フォント、カラーモード、透明効果やIllustratorにおけるヘアライン、孤立点、PSDのレイヤーなど多岐におよぶ。

Illustratorでは、最終工程として以下の確認処理作業を行った。

（1）レイヤーを結合し、配置したトレース原図など、不必要な非表示レイヤー上のアートワーク、リンクを破棄。

（2）アンカーポイントやテキストツールでのポイントタイプからなる孤立点の削除。

（3）ドキュメント情報／オブジェクトによるグレースケール以外のオブジェクトの確認。

とくに（3）については、過去にトラブルの原因となった。今回も、土層注記などは、Excelをエディタとして使用したが、ExcelやWordはRGB仕様であることから、CMYKモードのIllustratorにペーストした段階で、フォントや罫のRGB墨ベタが、CMYKの各色に分解されてしまう。これについては、フィルタのグレースケールに変換、フォントについてはカラーピッカーによって直接C:0%、M:0%、Y:0%、K:100%を指定し回避した。また、InDesignに配置後にも、ウィンドウ／出力／分版／分解出力で確認作業を行った。

InDesignでは、プリフライトで画像リンクの外れ、カラーオブジェクトの有無、フォントなどについて検証作業を行い、パッケージ化によって最終的な入稿データとした。さらに、PSプリンタで出力し、仕上がりを確認した。 また、今回データの検証作業の一貫として、自前でもPDFを作成した。PDFは、プリセット「PDF/X−1a:2001（日本）」で、InDesignCS2から直接書き出し、作成後に、Acrobat7.0 Professionalのアドバンスド／プリフライトで検証を行った。ただし、これは入稿データとはしていない。

DTPはあくまでも印刷工程であり、現状は、出力トラブルの回避を最優先の課題とした体制整備を行ってきた。しかし、デジタルコンテンツの資産化と２次的な活用、すなわちデジタルアーカイブ化を想定した場合、画像データひとつをとっても、DTP工程の副産物として単純に生成されるわけではない。印刷用データは、あくまでも特化したものであり、多目的な利活用には耐え得ない。保存用データと印刷用データ、ブラウズ用データの融合を目的とした新たな視点の中で、整理作業そのもののさらなる見直しを図っていく必要があると思われる。

本報告書の作成は、以下の整理補助員が担当した（五十音順）。

阿部信代（遺構・実測）、安藤眞由美（DTP）、伊藤禮子（遺物）、井上紀美代（遺物）、井原捷子（遺物）、小倉るみ子（DTP）、加藤良子（遺物）、鈴木麻美（実測・DTP）、清宮きよ子（遺構・DTP）、清宮恵子（実測）、内藤敏子（遺物）、平松みちる（実測）、深谷加奈子（トレース）、藤岡好子（遺物）、松本明子（DTP）、満田節子（遺物）、宮澤直美（トレース）

写真図版

1961年撮影　南岩崎遺跡周辺垂直写真

1－1次本調査区全景（調査区南側上空から養老川下流域を望む）

1－1次本調査区全景

1－1次本調査区（A地点東側）

1－2次本調査区（B地点環濠SD01）

弥生時代中期環濠SD01

古墳時代中期区画溝SD03

1－1次本調査区（A地点）

1－2次本調査区（方形周溝墓SS02・環濠SD01・古墳SM01）

1－1次本調査区（A地点）谷部調査状況

1－1次本調査区（A地点）谷部調査状況

1－1次本調査区（A地点）谷部断面（道路工事による掘削後）

1－3次本調査区（B地点）下層調査状況

1－3次本調査区（B地点）調査区断面

1－2次本調査区（B地点）深掘り

南岩崎遺跡塚越地区出土宮ノ台式土器

南岩崎遺跡塚越地区出土和泉式土器

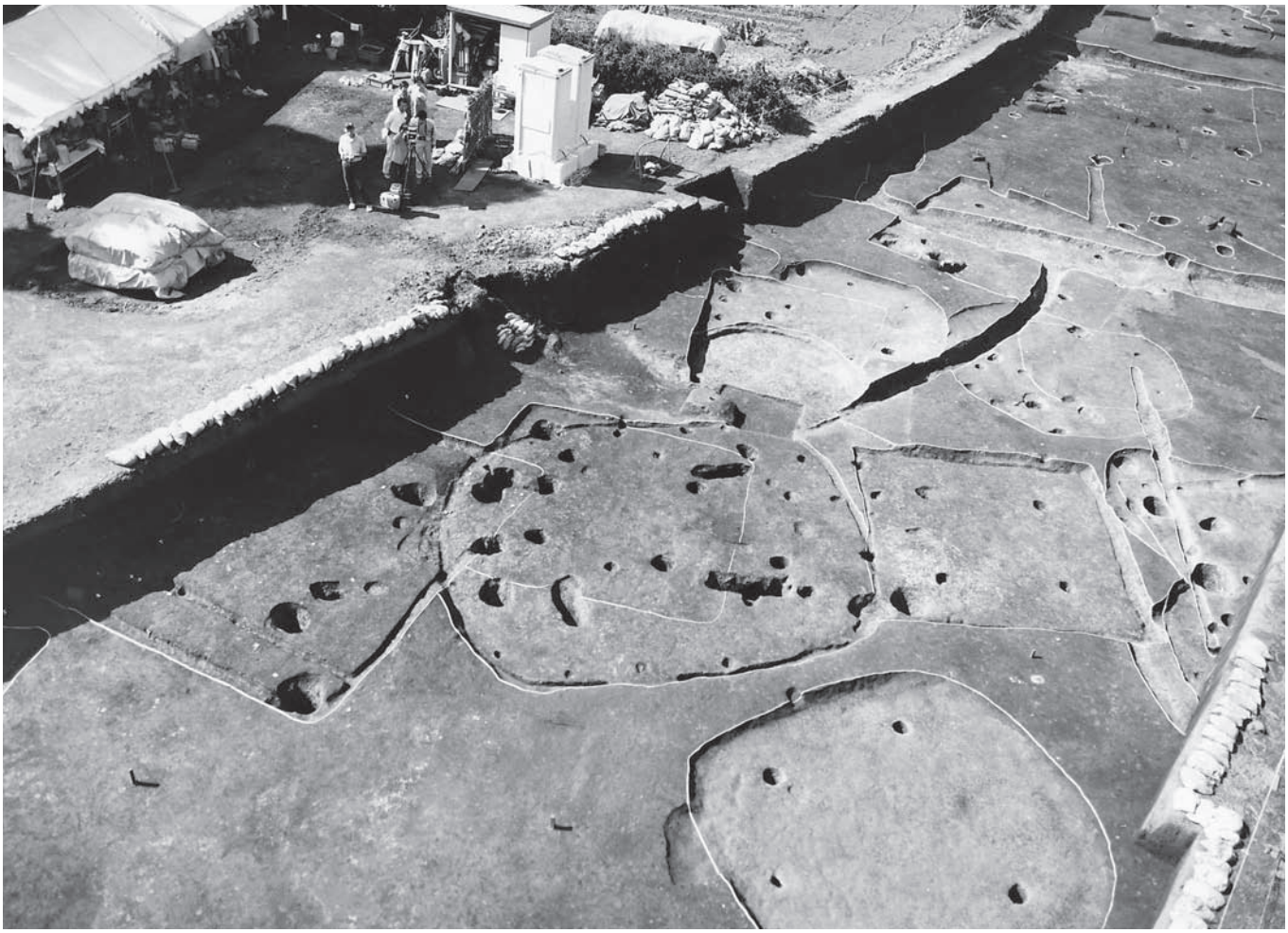
布留式土器・須恵器・韓式系土器

石製品・玉類・土製品

1－1次本調査区（A地点西端部）

1－1次本調査区（A地点側）

1－1次本調査区（A地点東側）竪穴住居群、方形周溝墓SS01



1－1次本調査区（A地点東側）竪穴住居群、方形周溝墓SS01

1－1次本調査区（A地点東側）竪穴住居群

1－2次本調査区（B地点西側）環濠SD01・古墳SM01など

1－2次本調査区西側(B地点)

1－2次本調査区東側(B地点)

1－3次本調査区（B地点、右奥C地点）上層調査

1－3次本調査区（B地点）下層調査

1－3次本調査区（B地点）下層調査

1－3次本調査区（B地点）下層調査

1－3次本調査区（B地点）下層調査

確認調査（D地点）

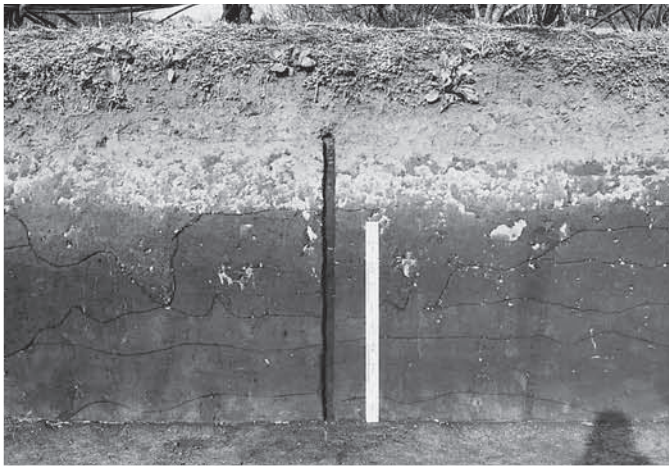
確認調査（D地点）

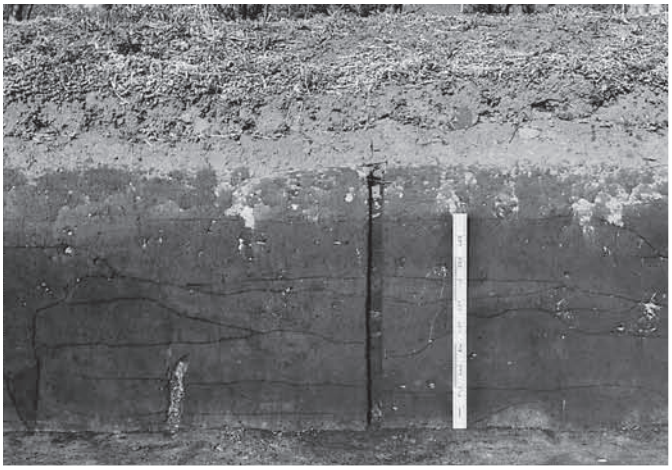
A地点谷部調査前状況（東側より）

A地点谷部調査

A地点谷部断面（道路工事による掘削後）

B地点調査区断面


B地点サンプルA採取地点

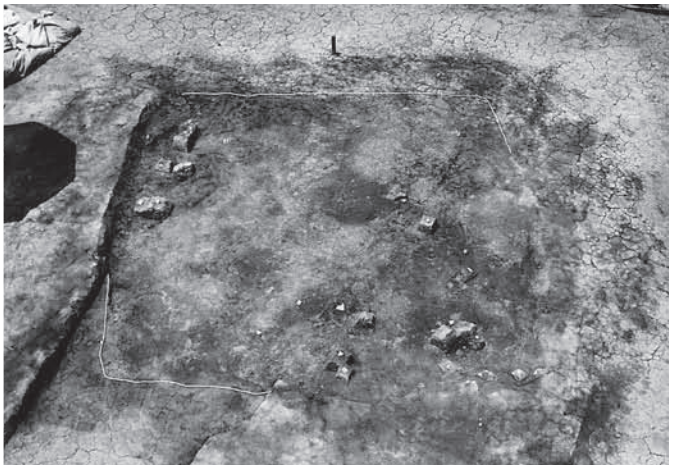

B地点サンプルB採取地点

SI01

SI02・SD02

SI03

SI03　遺物（P1内）


SI04　遺物

SI05（手前）・SI06（奥）

SI05　遺物

SI05　遺物

SI05　カマド

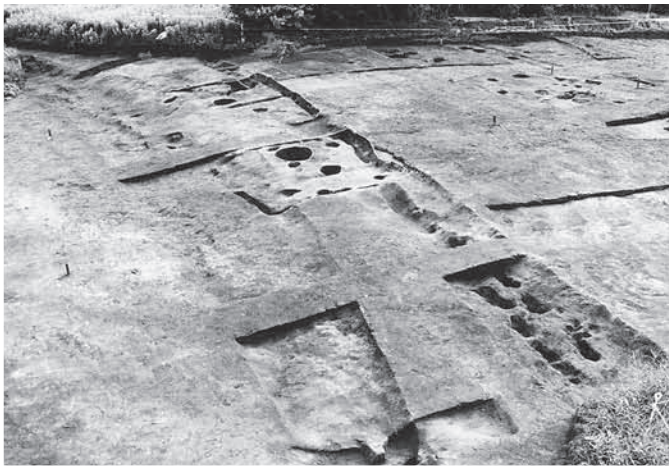
SI05　カマド

SI07

SI08

SI08　遺物

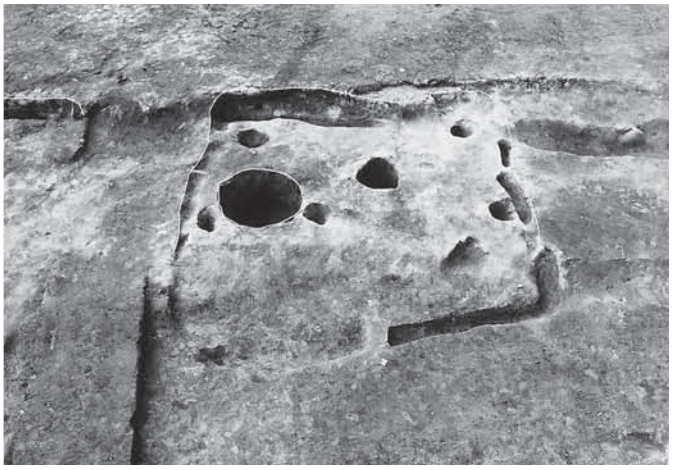
SI08　遺物


SI09（奥）・SI10（手前）・SD24・SD25

SI09

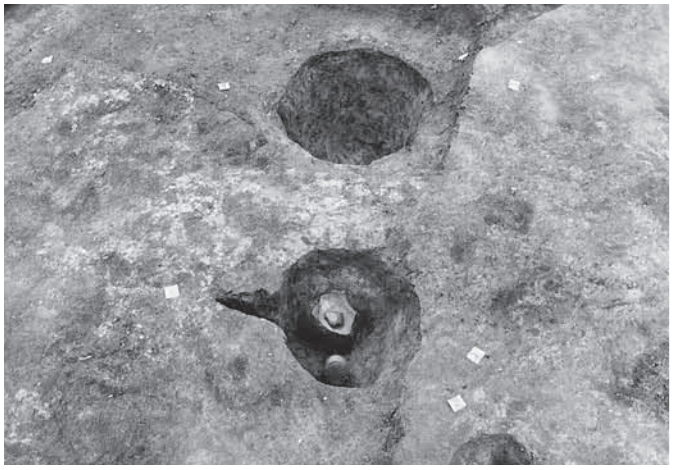
SI09　遺物

SI09　遺物

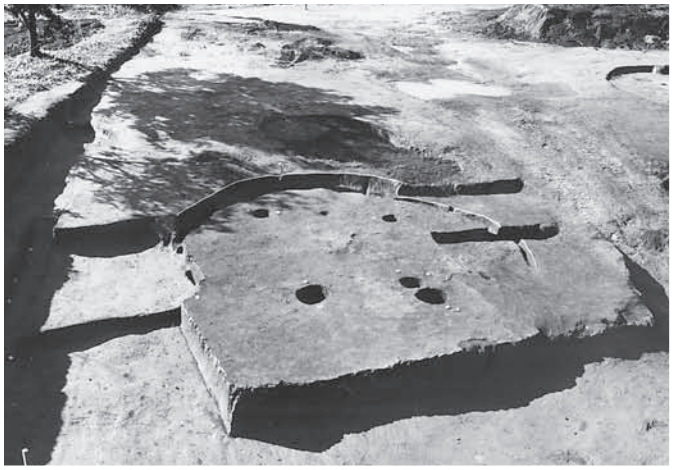

SI10

SI11（奥）・SI12（手前）　遺物

SI11　遺物（P1周辺）

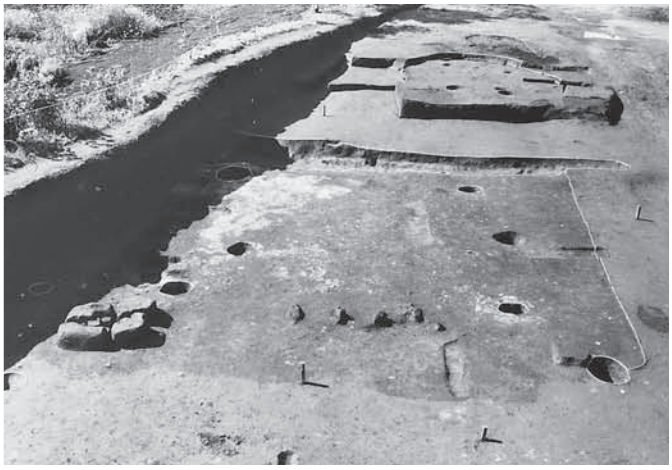

SI11　遺物

SI11　遺物（P2内）


SI13

SI14（左）・SS01北溝（右）

SI14　遺物



SI15・SD05（奥）

SI15　炉

SI16　遺物

SI16　遺物

SI16　カマド

SI16　カマド

SI16　カマド

SI17　カマド

SI18　中央硬化面付近遺物出土状況

SI18　遺物（P8内）（SK12）

SI18　遺物（P8内）（SK12）

SI19・SS01東溝・SD06（奥）

SI19　遺物

SI19　遺物

SI19　カマド

SI20

SI21（中央）・SI22（右）・SD07（奥）・SD08（手前）

SI21・SI22　遺物

SI23（中央）・SI24（手前）・SI25（右）・SI26（左）・SD08

SI23　遺物

SI23　遺物

SI23　遺物（P8内）

SI27（中央）・SI28・SI29・SI30

SI27　遺物（P10内）

SI31

SI31　遺物（東側より）

SI31　遺物（北隅部）

SI32（中央）・SI33（外）

SI32・SI33　遺物（東側より）

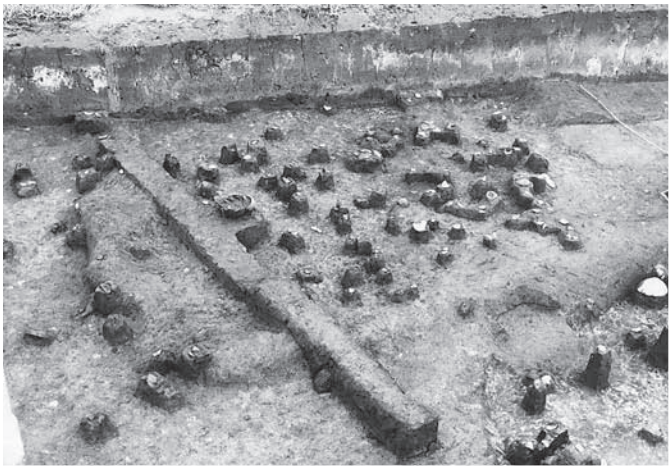
SI32・SI33・SI34（手前）　遺物（南側より）

A地点東側竪穴住居跡群

SI32　遺物（西辺部）

SI32　遺物（南西隅部）

SI34



SI34　遺物

SI35

SI36（右）・SI37（左）

SI37　遺物

SI37　遺物

SI38

SI38　遺物

SI38　カマド（正面）

SI38　カマド（左側より）

SI40・SI41・SI42・SI43・SI44　遺物

SI40

SI41（手前）・SI43（奥）　遺物

SI43　遺物（北側より）

SI43　遺物（北側より）

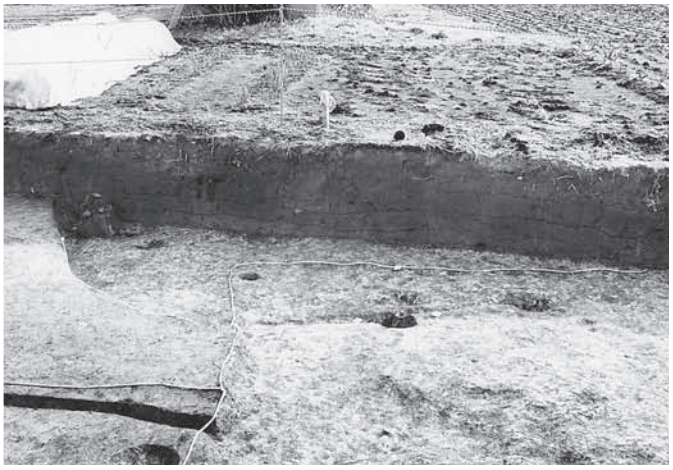
SI41（手前）・SI42（中央）・SI43（奥）

SI43（西側より）

SI43　遺物（P9内）

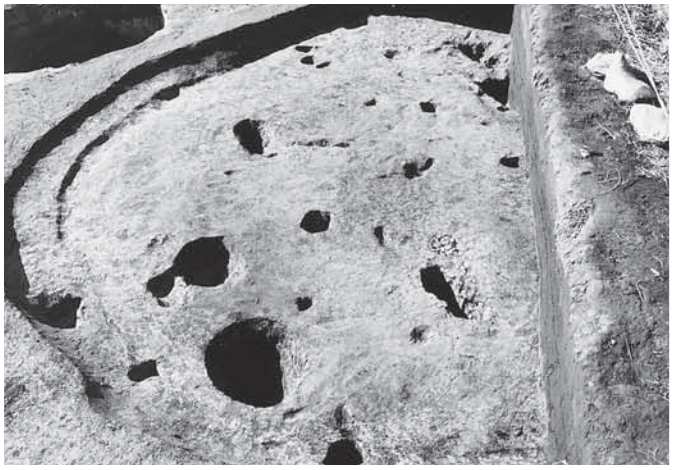
SI43（手前）・SI44（中央）・SI45（右奥）・SI46（左奥）・SI47（左奥）

SI44・SI45　遺物


SI45

SI46（中央）・SI47（右）・SB01（柱列）

SI46・SI47　遺物


SI48

SI48　遺物

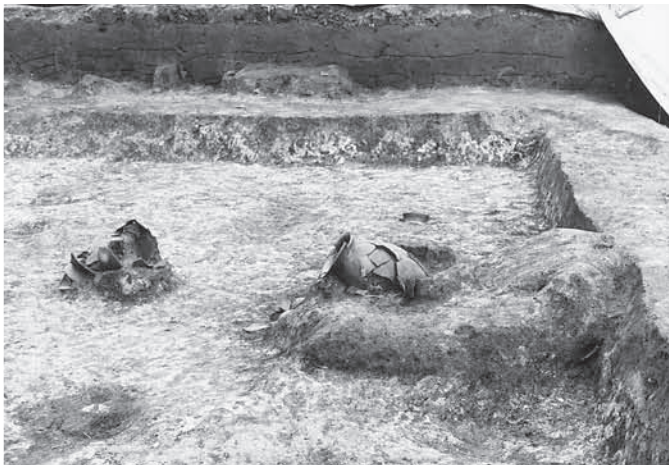
SI48　遺物（調査区北西隅部）

SI48　遺物（P20内）

SI49

SI49　遺物

SI49　カマド（正面より）


SI49　カマド（右側より）

SI50　遺物

SI51・SD03

SI51・SD03

SI52　遺物

SI52　遺物

SI53（奥）・SI54（手前）・SI55（中央）・SI56（右奥）　遺物

SI53

SI53　遺物

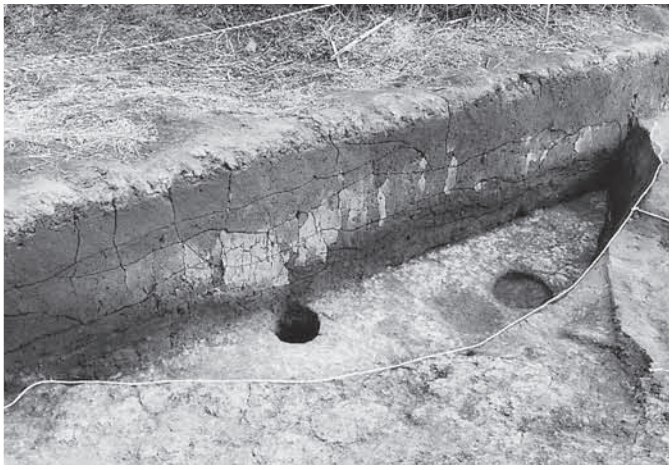
SI54（左）・SI55（右）

SI54　遺物（南東隅部）

SI54　遺物（P26内）

SI54　遺物（西辺部）

SI55　遺物


SI56

SI57（中央）・SI58（奥）・SI60（左奥）

SI57（左）・SI58（中央）・SI60（左奥）

SI58・SI59

SI60

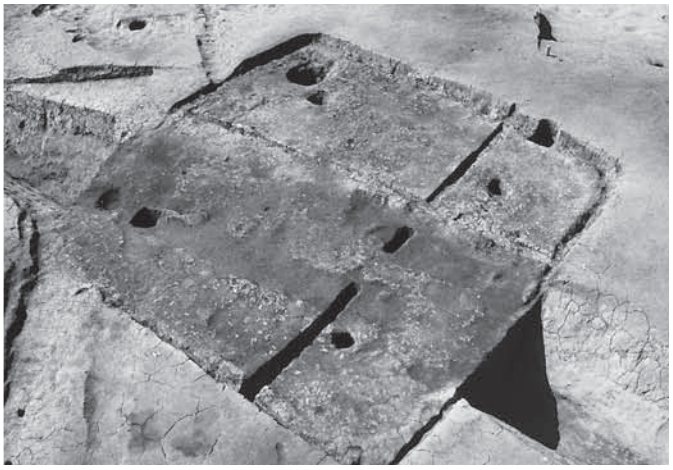
SI60　遺物（P6内）

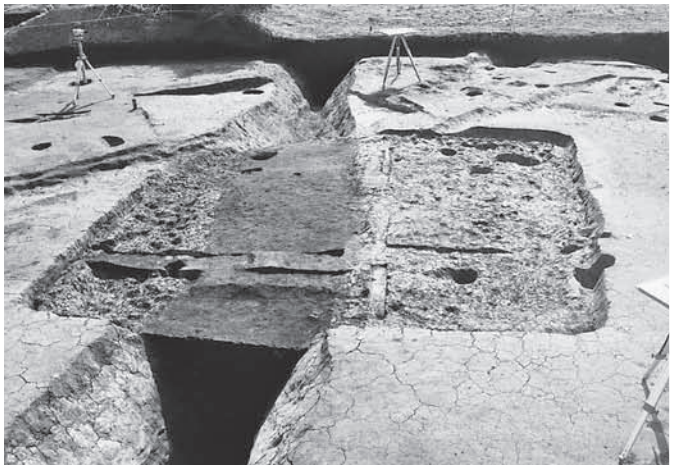
SI61・SE02

SI61　遺物

SI62

SI63


SI64


SI64・SD01

SI64　遺物

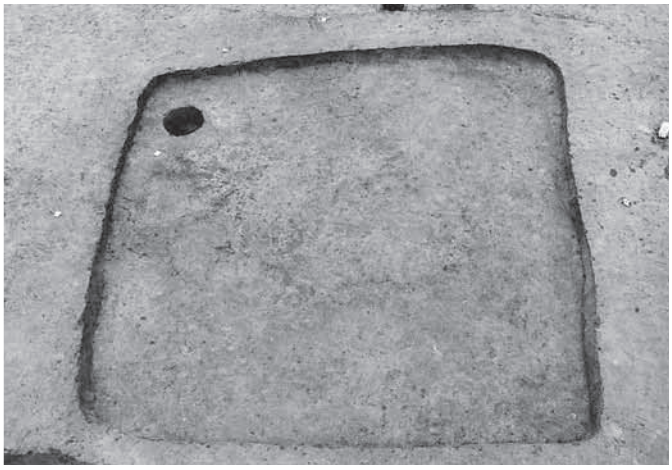
SI64　遺物（西辺部）

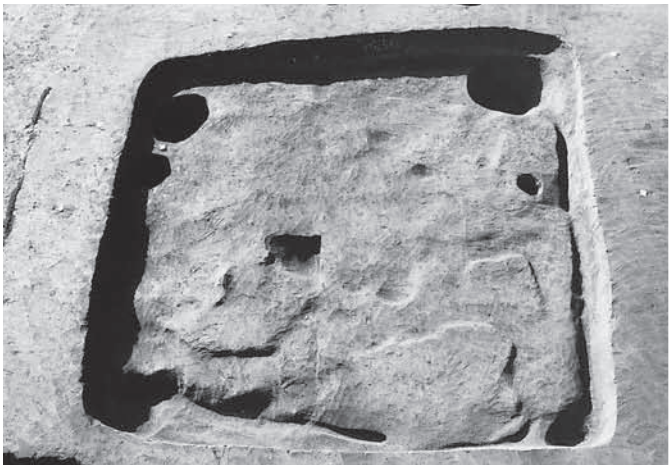
SI64　遺物（南西隅部）

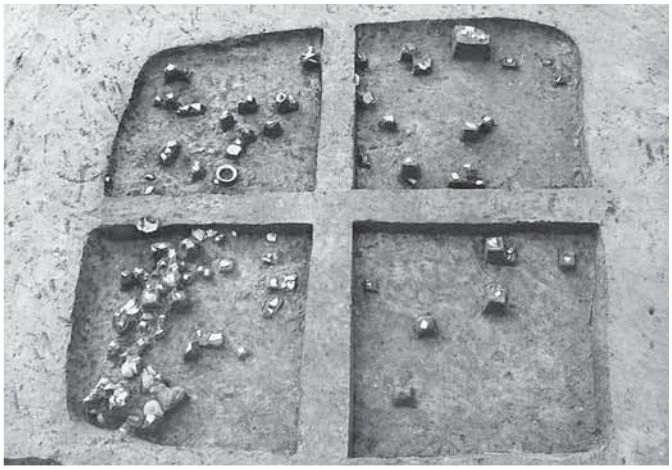
SI64　遺物（P5内）

SI66

SI67

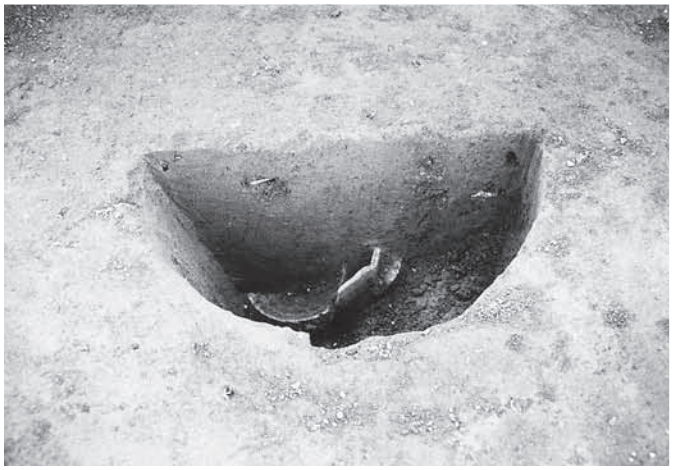

SI70


SI70　掘形


SI70　遺物

SI70　遺物

SI70　遺物（南東隅部）


SI70　遺物（P2内）

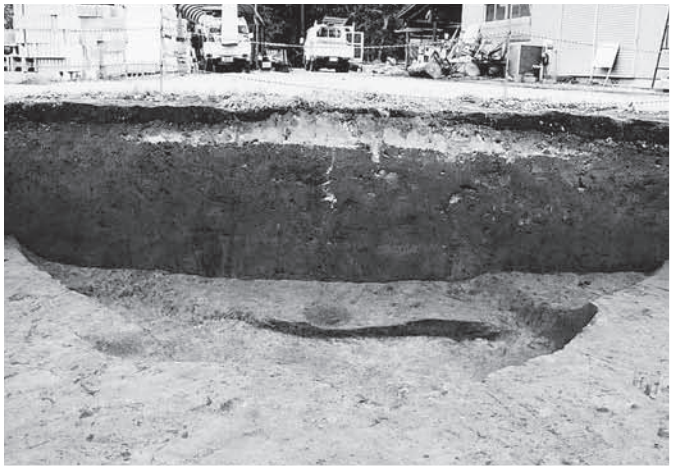
SI71

SI71　遺物

SI71　掘形

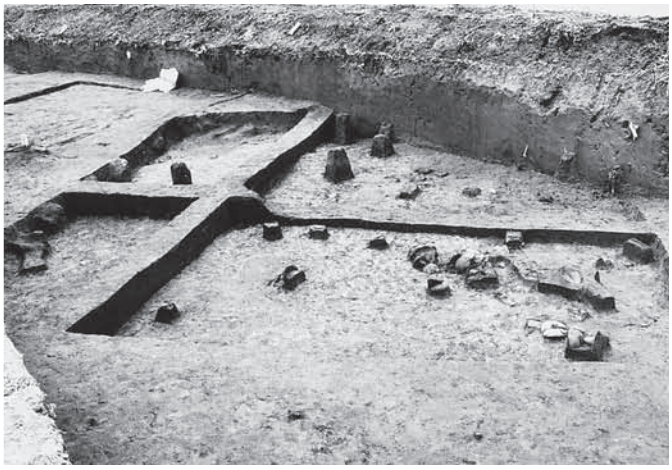
SI71　遺物（南東隅部）

SI71　遺物（P4内）

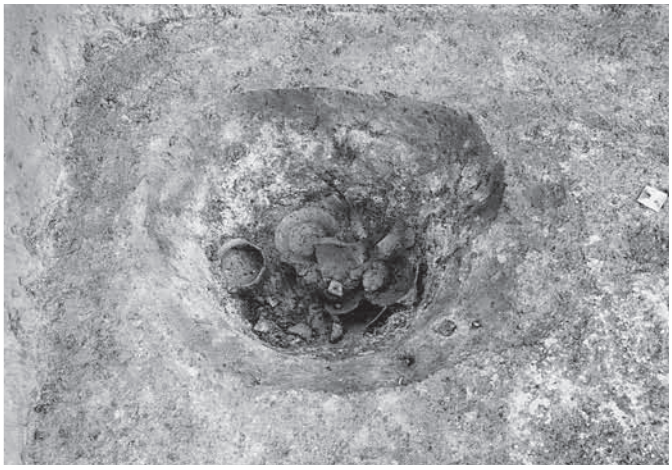

SI72

SI73

SI73　掘形


SI73　遺物

SI73　遺物

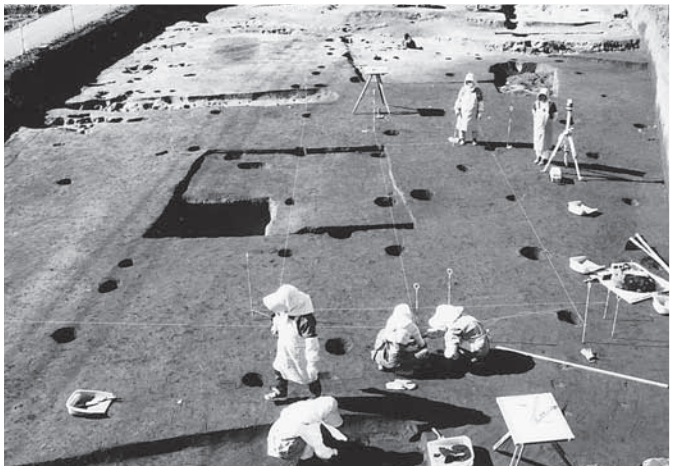

SI73　遺物（P5内）

SI74

SI74　掘形

SI74　P4内焼土層

SB02・SB03・SM01・SD09・SD10（手前）



SB02（奥）・SB03（手前）

SB02・SB03

SB04

SS01

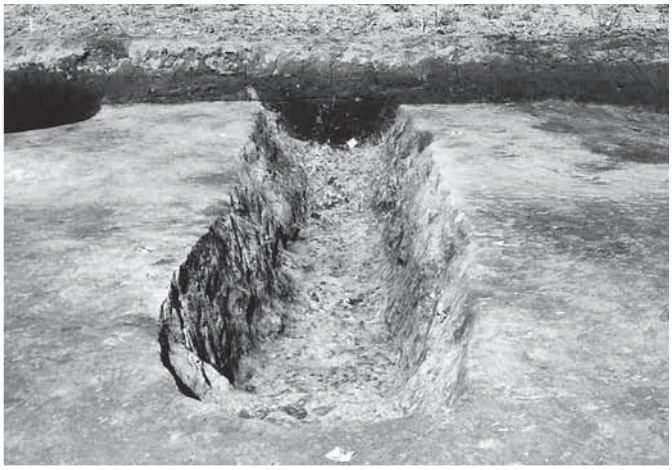
SS01東溝　遺物

SS01東溝　遺物

SS01北溝　遺物

SS02（北側より）

SS02（東側より）



SS02西溝

SS02南溝西側

SS02南溝西端　遺物

SS02南溝西端　遺物

SM01・SM02

SM01（中央）・SS02（手前）・SD09・SD10（奥）

SM01東溝・SD09　遺物

SM01西溝南側

SM01（右）・SD09（左）　南側断面

SM01　南西側断面

SM02（中央）・SS02（手前）・SD01（奥）

SK01

SK02

SK02

SK03

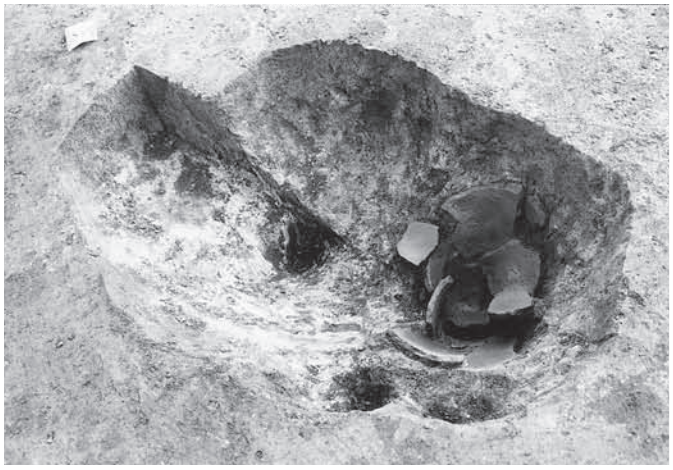
SK04

SK04

SK05

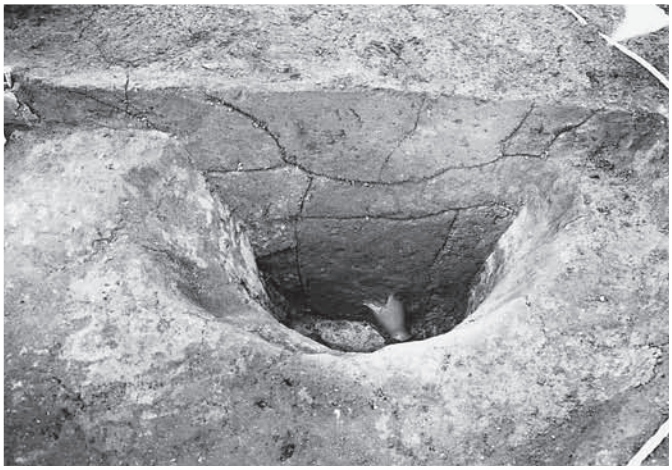
SK06

SK07　遺物


SK08　遺物

SK10　遺物

SK11　遺物


SK11　遺物

SK13

SK14

SK13

SE01

SE02

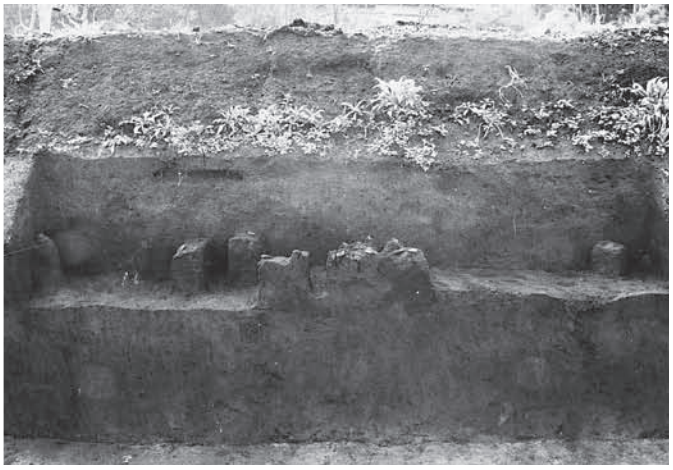
SE03

SX01

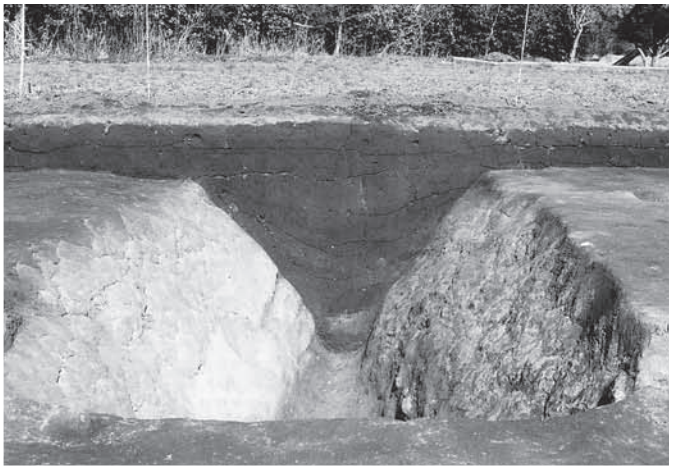
SX01

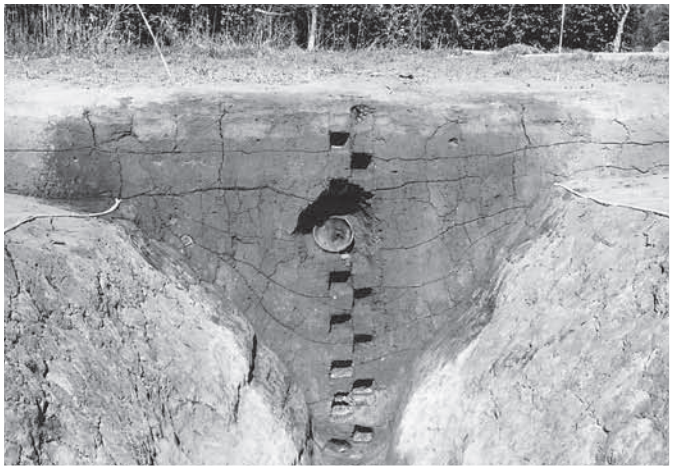
SX05

SX05


SX04

SX06


SD01　北壁断面


SD01　北壁断面　遺物

SD01

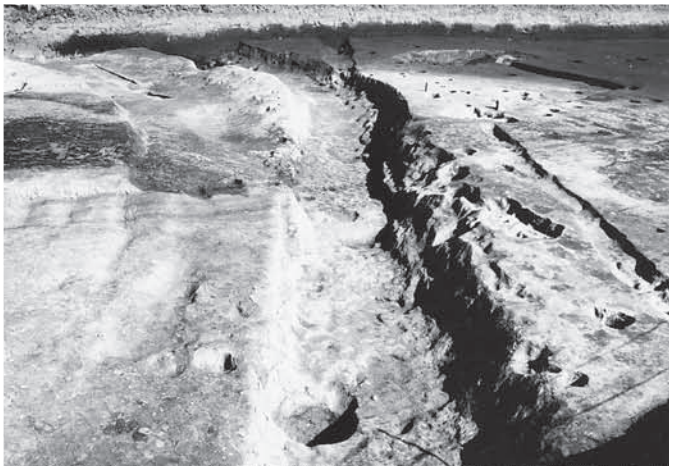
SD02

SD03　断面B – B'

SD03　断面B – B'

SD03　北壁断面

SD03　南壁断面



SM01（左側）・SD09（中央）

SD09・SB02・SB03

SD20

SD10

SD20・SE03

SD20・SD15・SD16・SD17（南側より）

SD15・SD16・SD17・SD20（北側より）

SI02 – 2

SI03 – 2

SI04 – 2

SI05 – 1

SI05 – 3

SI05 – 4

SI05 – 8

SI06 – 2

SI08 – 1

SI08 – 4

SI08 – 11

SI08 – 10

SI09 – 1

SI09 – 4

SI09 – 5

SI11 – 1

SI11－3

SI11－5

SI11－5

SI11－6

SI11－8

SI13－1

SI11－10

SI13－2

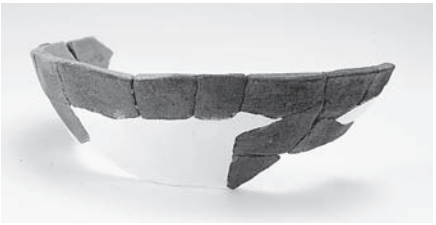
SI13－3

SI13－7

SI13－5

SI13－8

SI13－9


SI13－15

SI13－24

SI13－25

SI13－29

SI13－30

SI13－49

SI13－50

SI13－51

SI13－52

SI13－53

SI14－1

SI13－54

SI13－56

SI13－59

SI14－2

SI14－4

SI14－3

SI14－5

SI14－6

SI14－13

SI14－16

SI14－11

SI14－12

SI14－17

SI14－48

SI14－43

SI14－51

SI14－52

SI14－59

SI14－61

SI14－62

SI14－69

SI15－1

SI15－2

SI15－3

SI15－4

SI15－5

SI15－8

SI15－9

SI15－11

SI15－16

SI15－14

SI15－15

SI15－17

SI15－21

SI15－23

SI15－31

SI15－36

SI15－37

SI15－39

SI15－40

SI15－42

SI15－54

SI15－56

SI15－57

SI15－60

SI15－64

SI15－65

SI15－71

SI15－88

SI16－1

SI16－2

SI16－3

SI16－4

SI16－6

SI16－7

SI16－9

SI16－10

SI16－11

SI16－13

SI16－14

SI16－15

SI16－16

SI16－19

SI16－21

SI17－01

SI17－6

SI17－7

SI17－11

SI17－12

SI17－13

SI17－15

SI17－17

SI17－21

SI18－1

SI18－2

SI18－3

SI18－4

SI18－5

SI18－6

SI18－9

SI18－20

SI18－21

SI18－22

SI18－26

SI18－30

SI18－36

SI18－50

SI18－57

SI18－61

SI18－62

SI18－67

SI18－68

SI18－69

SI18－70

SI18－76

SI18－77

SI18－79

SI19－1

SI19－3

SI19－6

SI19－7

SI19－8

SI19－9

SI19－10

SI19－11

SI19－12

SI19－13

SI19－16

SI19－17

SI21－1

SI21－14

SI21－15

SI22－1

SI22－2

SI22－4

SI23－1

SI23－3

SI23－5

SI23－6

SI23－7

SI23－8

SI23－9

SI23－10

SI23－11

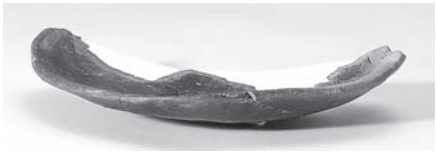
SI23－12

SI23－13

SI23－16

SI23－18

SI23－17


SI23－19

SI23－21

SI23－22

SI23－24

SI23－25

SI23－26

SI23－27

SI23－28

SI23－30

SI23－31

SI23－32

SI24－4

SI25－1

SI26－1

SI27－2

SI27－3

SI27－4

SI27－5

SI27－6

SI30－1

SI31－4

SI31－1

SI31－3

SI31－5

SI31－6

SI31－9

SI31－7

SI31－10

SI31－11

SI31－14

SI31－17

SI31－24

SI31－25

SI31－26

SI32－1

SI32－2

SI32－7

SI32－3

SI32－5

SI32－6

SI32－9

SI32－10

SI32－11

SI32－12

SI32－14

SI32－15

SI32－16

SI32－17

SI32－18

SI32－19

SI32－20

SI32－21

SI32－22

SI32－23

SI32－24

SI32－25

SI32－26

SI32－27

SI32－28

SI32－29

SI32－30

SI32－31

SI32－32

SI32－33

SI32－39

SI33－1

SI33－4

SI34－1

SI34－5

SI34－6

SI34－8

SI34－9

SI34－10

SI34－11

SI34－13

SI34－14

SI34－15

SI34－16

SI34－17

SI34－18

SI34－19

SI34 – 22

SI34 – 26

SI36 – 10

SI36 – 11

SI36 – 13

SI36 – 14

SI36 – 15

SI36 – 16

SI36 – 17

SI36 – 18

SI37 – 1

SI37 – 2

SI38 – 1

SI38 – 2

SI38 – 3

SI38 – 4

SI38 – 6

SI38 – 7

SI38 – 8

SI38 – 12

SI38－14

SI38－15

SI38－17

SI38－19

SI40－1

SI40－3

SI40－4

SI40－5

SI40－6

SI40－7

SI40－10

SI40－8

SI40－12

SI40－13

SI40－18

SI40－19

SI40 – 20

SI40 – 22

SI40 – 23

SI40 – 24

SI40 – 27

SI40 – 28

SI40 – 33

SI40 – 34

SI40 – 36

SI41 – 14

SI43 – 1

SI43 – 3

SI43 – 4

SI43 – 6

SI43 – 7

SI43 – 12

SI43 – 13

SI43 – 15

SI43 – 16

SI43 – 17

SI43 – 19

SI43 – 23

SI44 – 2

SI44 – 3

SI44 – 4

SI44 – 5

SI44 – 6

SI44 – 7

SI44 – 8

SI44 – 10

SI44 – 11

SI44 – 12

SI45 – 1

SI46 – 1

SI46－2

SI46－3

SI46－4

SI46－5

SI48－13

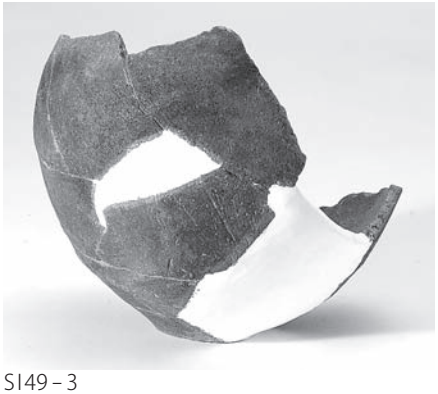
SI46－6

SI46－8

SI48－14

SI48－15

SI48－24


SI49－3

SI49－1

SI49－2

SI49－5

SI49－6

SI49－7

SI50－1

SI50－2

SI50－4

SI50－5

SI50－6

SI50－7

SI50－8

SI50－9

SI51－1

SI51－3

SI52－1

SI52－5

SI52－6

SI52－7

SI52－8

SI52－9

SI52－10

SI52－11

SI53－1

SI53 – 2

SI54 – 1

SI54 – 2

SI54 – 5

SI54 – 6

SI54 – 7

SI54 – 8

SI54 – 9

SI55 – 1

SI55 – 2

SI58 – 1

SI62 – 3

SI61 – 3

SI64 – 2

SI64 – 6

SI64 – 7

SI64 – 8

SI64 – 9

SI64 – 10

SI64 – 11

SI64 – 12

SI64 – 21

SI64 – 13

SI64 – 14

SI64 – 15

SI64 – 16

SI64 – 22

SI64 – 24

SI64 – 25

SI64 – 26

SI65 – 1

SI65 – 2

SI65 – 4

SI66－1

SI70－1

SI70－02

SI70－8

SI70－9

SI70－10

SI70－11

SI70－12

SI70－13

SI70－14

SI70－15

SI70－26

SI70－27

SI70－32

SI70－33

SI70－34

SI70－36

SI70－37

SI70－38

SI71－5

SI71－6

SI71－7

SI71－9

SI71－18

SI71－10

SI71－11

SI71－12

SI71－13

SI71－14

SI71－15

SI71－16

SI73－1

SI73－2

SI73－3

SI73－4

SI73－5

SI73－6

SI73－7

SI73－8

SI73－9

SI73－10

SI73－11

SI73－12

SI73－13

SI73－14

SI73－15

SI73－16

SI73－17

SI73－18

SI73－19

SI73－20

SI73－21

SI73－22

SI73－23

SI73－24

SI73－25

SI73－26

SI73－27

SI73－28

SS01－1

SI73－29

SI74－1

SS01－2

SS01－15

SS01－16

SS01 – 17

SS01 – 18

SS01 – 20

SS01 – 21

SS01 – 22

SS01 – 27

SS01 – 23

SS01 – 24

SS01 – 25

SS01 – 35

SS01 – 36

SS01 – 38

SS01 – 39

SS01 – 43

SS01 – 103

SS01 – 104

SS01 – 107

SS02 – 1

SM01 – 1

SM01 – 8

SM01 – 20

SM01 – 13

SM01 – 15

SM01 – 16

SM01 – 19

SM01 – 29

SK11 – 1

SM01 – 30

SK07 – 1

SK08 – 1

SK09 – 1

SK10 – 1

SK11 – 3

SD01 – 2

SD01 – 6

SD01 – 9

SD01 – 10

SD02 – 1

SD04 – 1

SD03 – 11

SD03 – 12

SD03 – 13

SD03 – 14

SD03 – 15

SD04 – 2

SD04 – 3

SD04 – 4

SD05 – 4

SD05 – 5

SD05 – 6

SD05 – 7

SD05 – 13

SD05 – 8

SD05 – 9

SD05 – 12

SD08 – 1

SX01 – 7

SX01 – 1

SX01 – 6

SX01 – 8

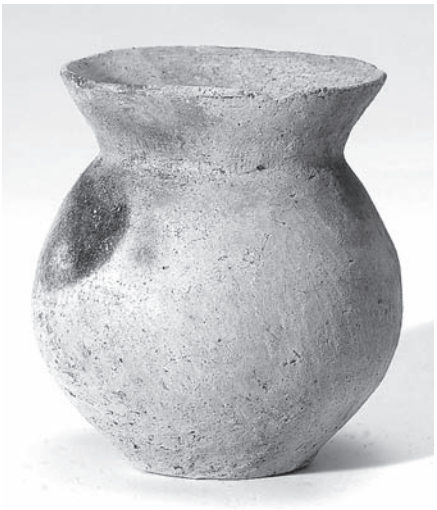
SX01 – 9

SX01 – 4

SX01 – 10

SX01 – 11

SX01 – 12


SX01 – 13

SX01 – 14

SX01 – 15

SX01 – 20

SX01 – 16

SX01 – 17

SX01 – 18

SX01 – 19

SX01 – 21

SX01 – 22

SX02 – 1

SX02 – 2

SX02 – 3

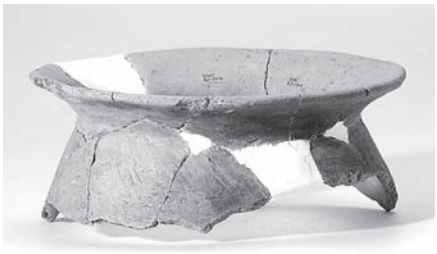
SX02 – 4

SX02 – 5

SX02 – 8

SX02 – 10

SX02 – 11


SX02 – 12

SX02 – 14

SX02 – 16

SX02 – 17

SX02 – 19

SX02 – 20

SX02 – 21

SX02 – 24

SX02 – 27

SX02 – 28

SX02 – 31

SX02 – 32

SX02 – 33

SX02 – 36

SX02 – 44

SX02 – 47

SX02 – 50

SX02 – 52

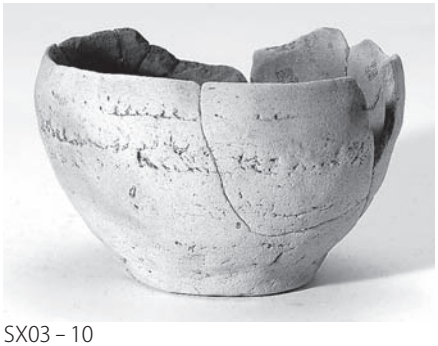
SX04 – 3

SX02 – 56

SX02 – 57

SX03 – 5

SX03 – 6


SX03 – 10

SX04 – 5

SX02 – 13

SX03 – 17

SX03 – 20

SX05 – 1

D地点 – 2

D地点 – 3

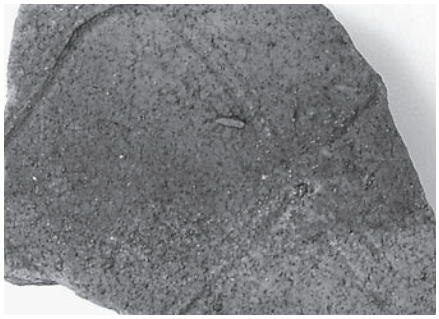
SI08－4

SI13－2

SI13－16

SI08－5

SI13－4


SI13－17

SI08－12

SI13－4

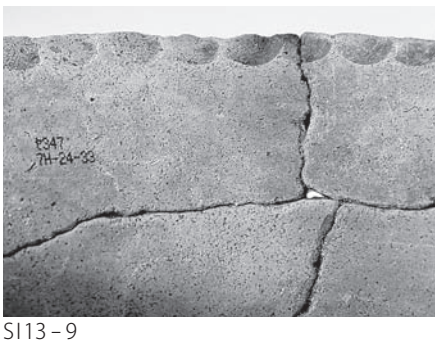
SI13－36

SI11－15

SI13－8

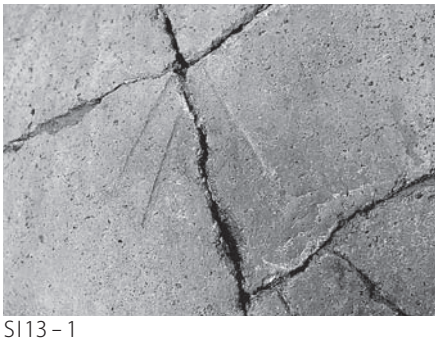
SI13－37

SI12－8

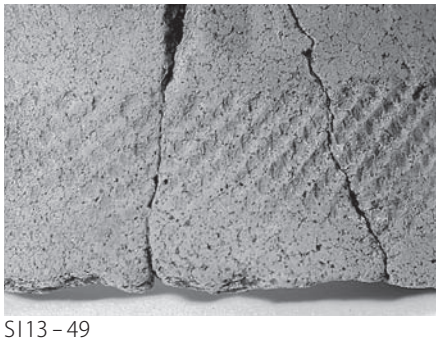


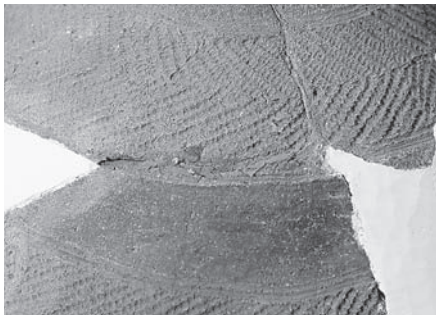
SI13－9

SI13－49

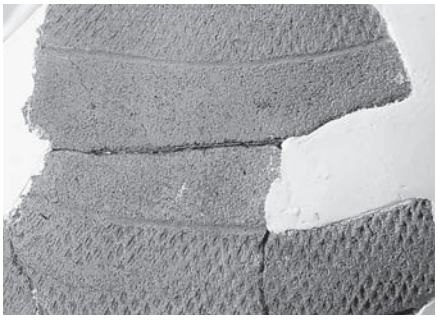

SI13－1

SI13－15


SI13－49


SI13－51

SI13－81

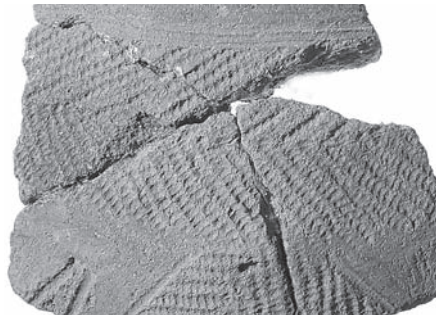

SI14－11

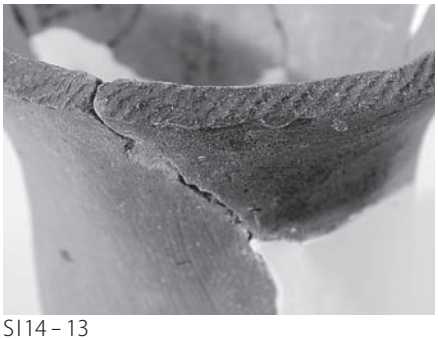
SI13－51

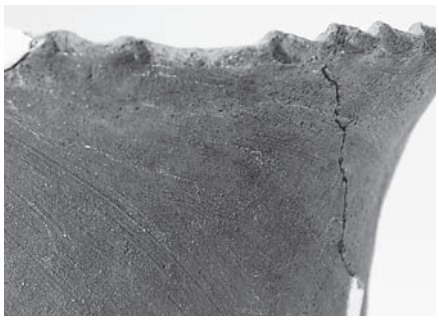
SI13－83

SI14－12

SI13－52


SI13－91


SI14－13

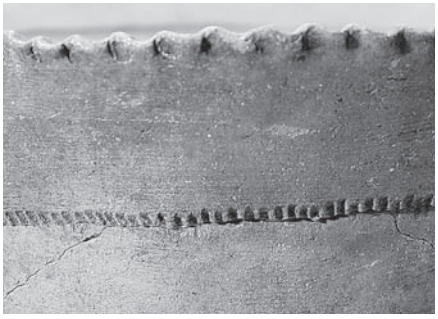

SI13－53

SI13－100

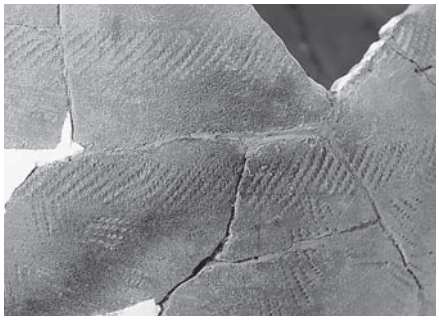
SI14－14

SI13－55

SI14－2


SI14－17

SI13－67

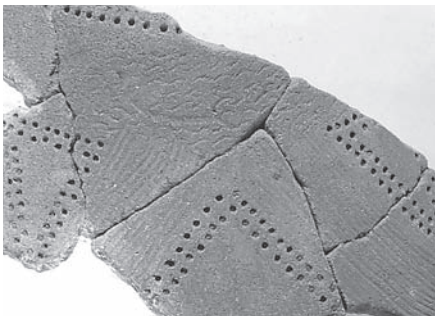

SI14－6

SI14－17

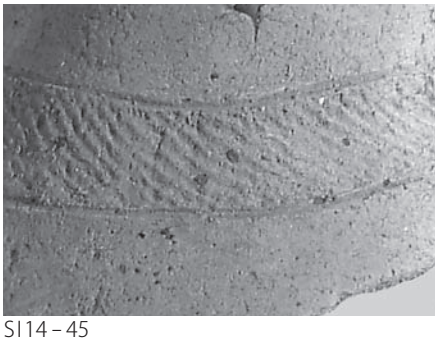
SI14－18

SI14－18

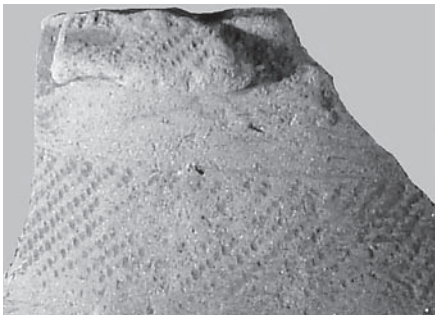
SI14－41


SI14－42

SI14－43


SI14－45

SI14－48


SI14－50

SI14－51

SI14－52

SI14－53

SI14－55

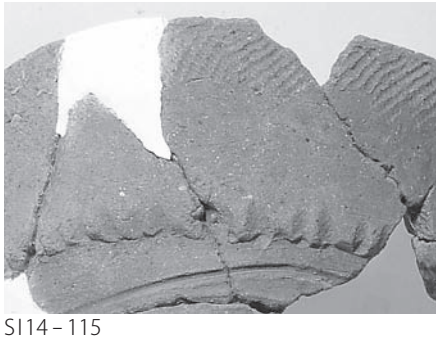
SI14－56

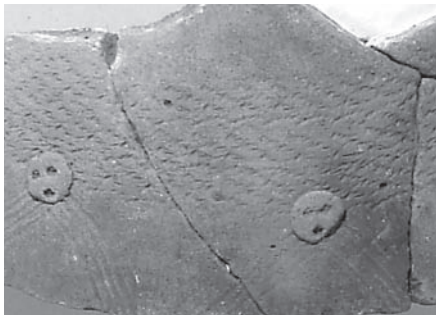
SI14－56

SI14－57

SI14－58

SI14－94


SI14－115


SI14－117

SI21－28

SI35－10

SI15－54

SI22－1

SI37－3

SI21－3

SI25－7

SI37－4

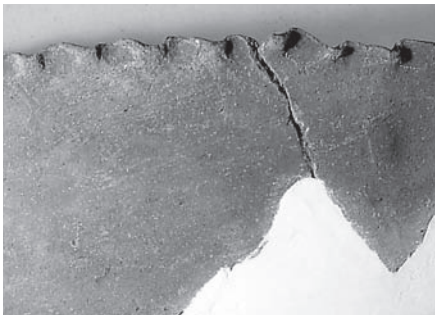
SI21－10

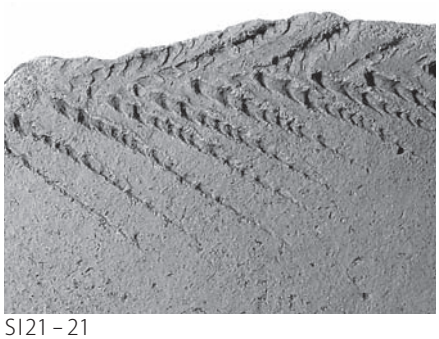
SI26－1

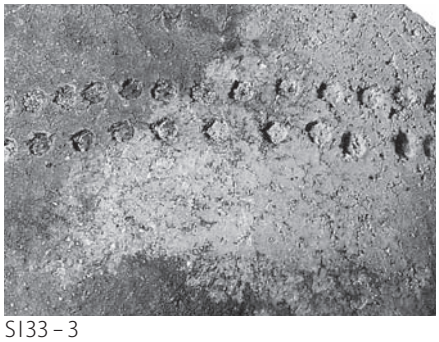
SI40－19

SI21－15

SI33－1


SI41－3


SI21－21


SI33－3

SI41－12

SI41 – 16

SI55 – 5

SS01 – 1

SI45 – 1

SI55 – 10

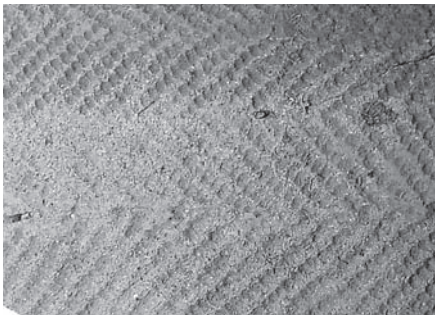
SS01 – 1

SI48 – 4

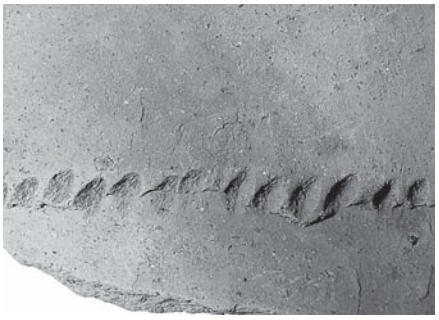
SI55 – 12

SS01 – 4

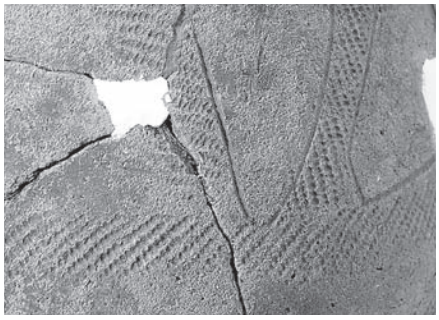
SI48 – 13


SI55 – 16

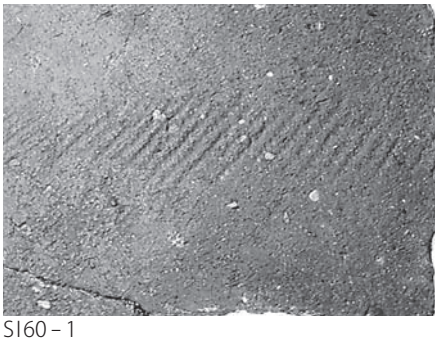
SS01 – 15


SI48 – 20

SI59 – 1


SS01 – 15

SI48 – 23

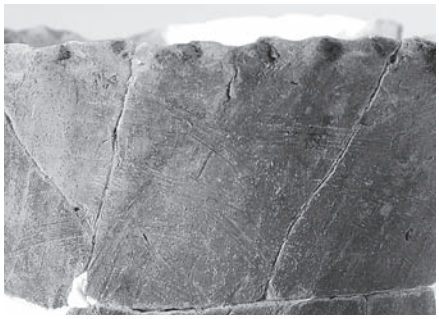

SI60 – 1

SS01 – 17

SS01－18

SS01－29

SS02－1


SS01－23

SS01－30

SS02－1

SS01－25

SS01－103

SS02－1

SS01－26

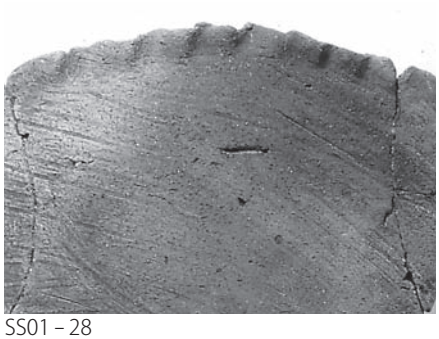
SS01－103

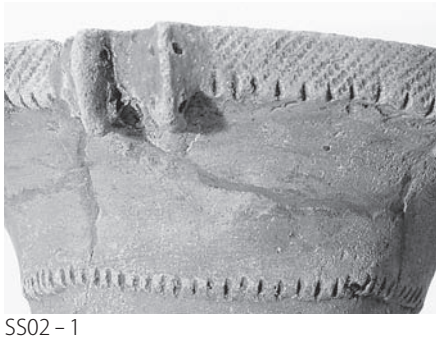
SD01－1

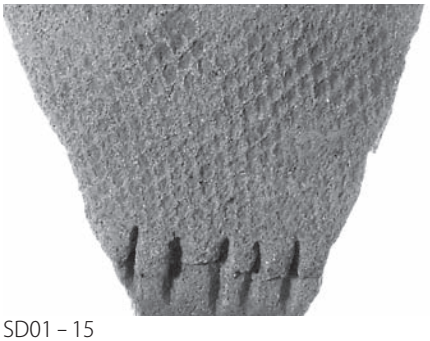
SS01－27

SS01－105

SD01－2


SS01－28


SS02－1


SD01－15

SD01－26

SX01－18

SI11－8

SD01－35

SX02－1

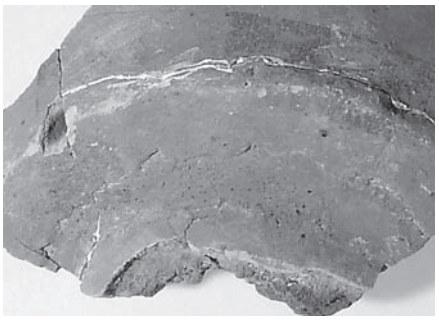
SI15－43

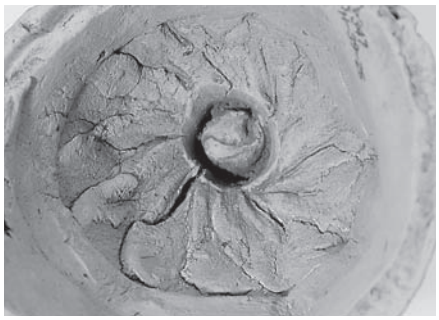
SD01－37

SX02－2

SI15－51

SD01－39


SI03－1

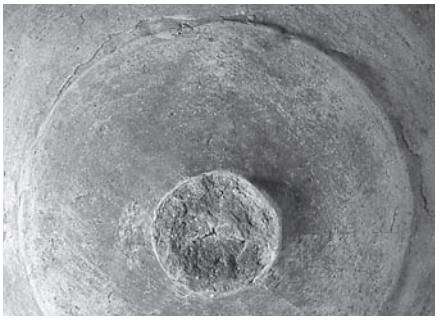

SI15－66

SD02－1

SI11－1

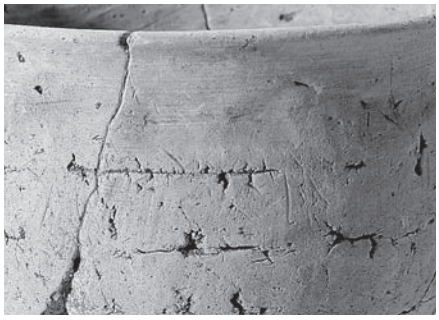
SI16－2

SX01－1


SI11－5

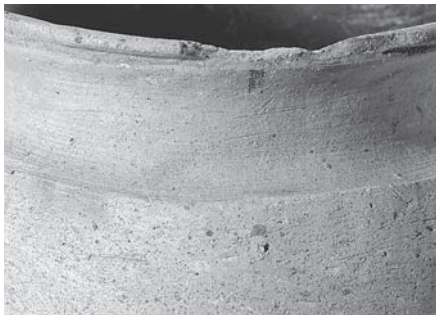
SI16－3

SI16－4


SI17－6

SI18－42

SI16－7


SI17－7

SI18－61

SI16－9

SI18－1

SI18－76

SI16－15

SI18－3

SI18－79

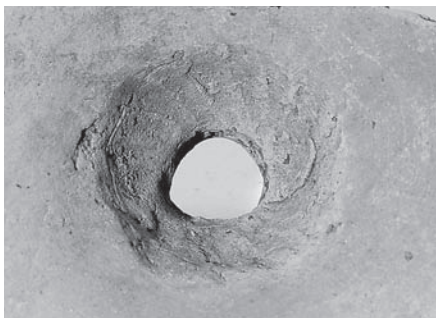
SI17－1

SI18－4

SI19－1

SI17－3

SI18－37


SI19－6

SI19－8

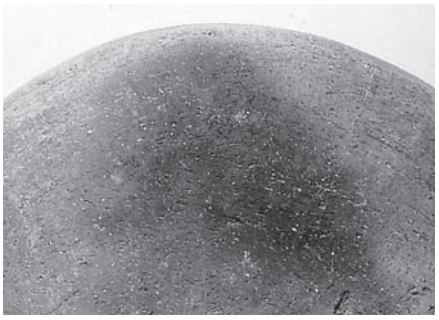
SI23－10

SI27－4

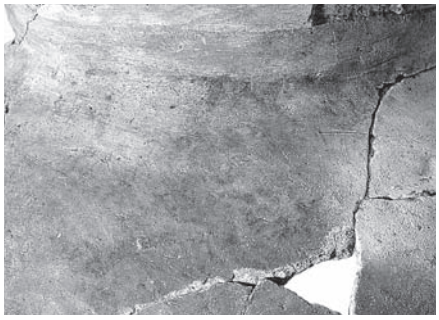
SI19－10

SI23－17

SI30－1


SI19－12

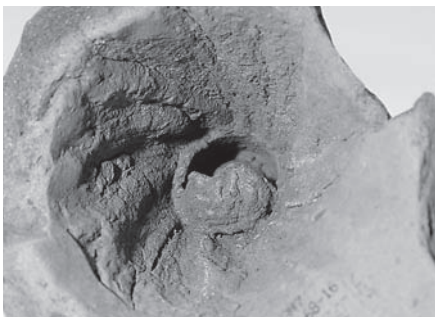
SI23－18


SI31－1

SI19－13

SI23－27

SI31－1

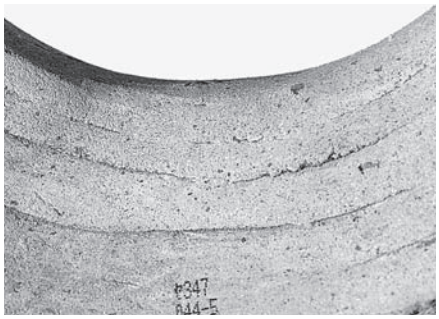

SI19－18

SI23－29

SI31－3

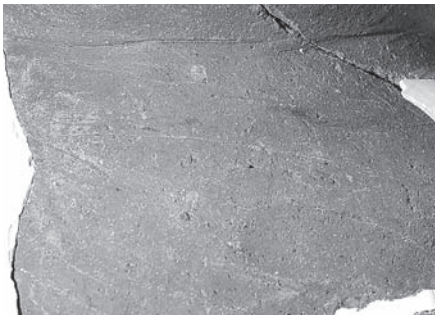
SI21－11

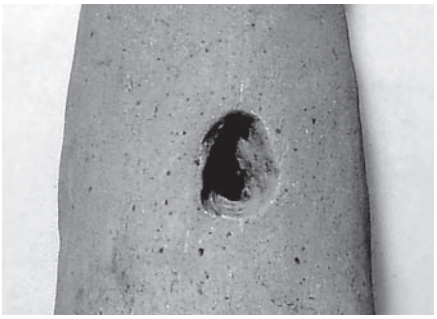
SI27－2

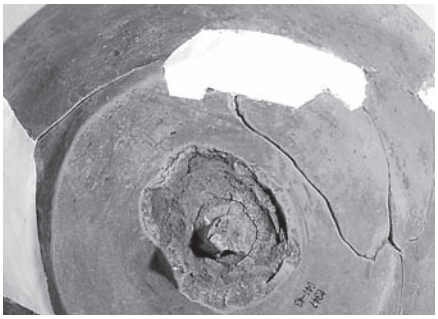

SI31－10

SI31－13

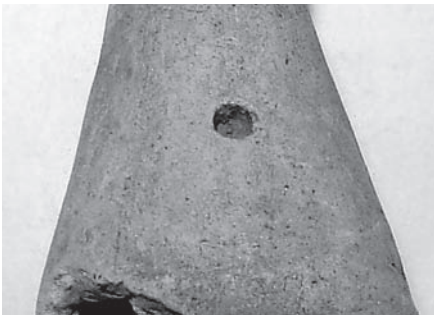
SI32－5


SI32－15

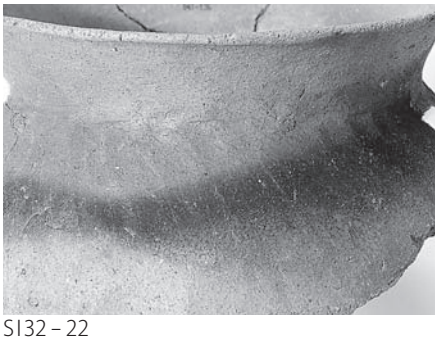

SI31－14

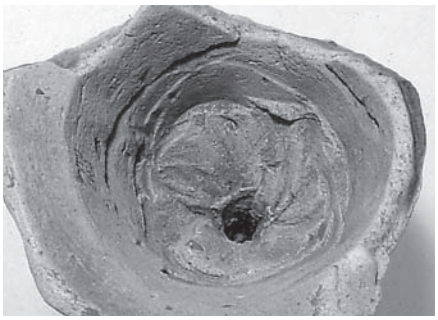

SI32－9

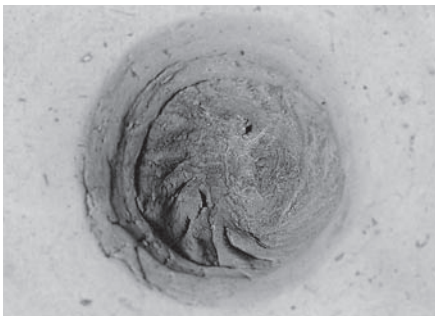
SI32－18


SI31－17

SI32－10


SI32－22


SI31－17


SI32－11

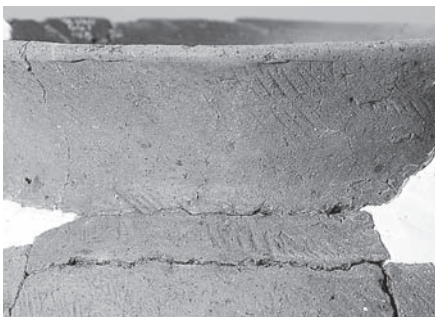
SI32－24

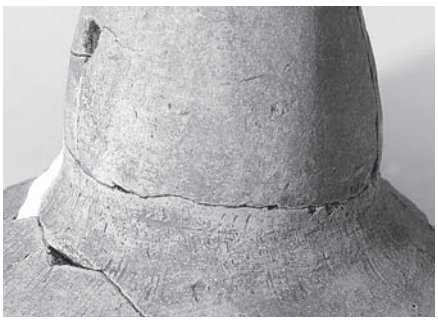
SI31－18

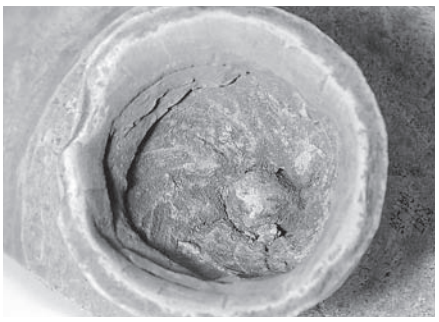
SI32－12

SI32－29

SI32－1


SI32－14


SI32－29


SI32－30

SI32－31

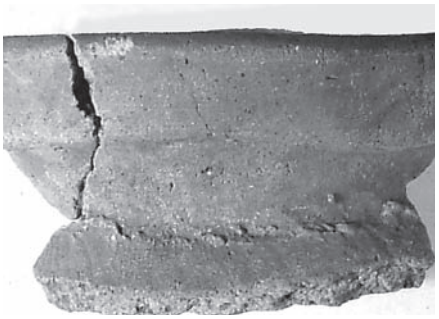
SI32－33

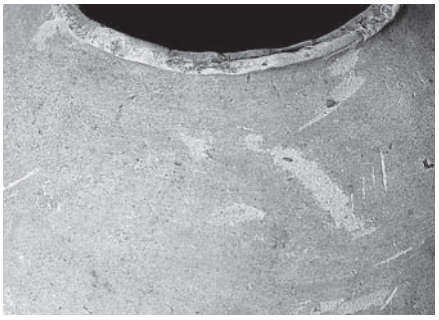
SI32－35

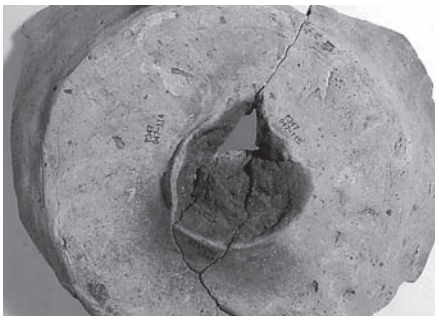
SI32－37

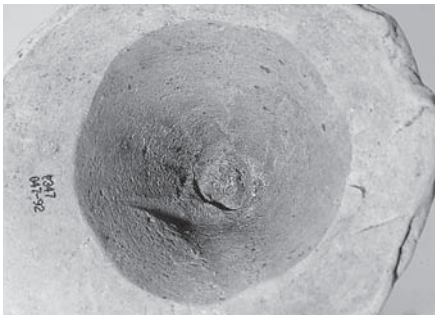
SI32－44

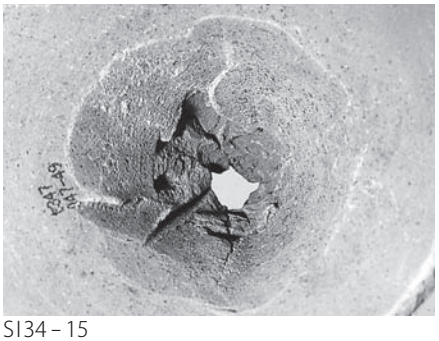
SI34－1


SI34－4


SI34－6


SI34－12


SI34－13


SI34－15

SI34－19

SI34－20

SI34－21

SI34－23

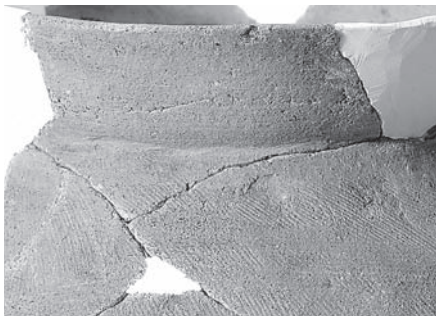
SI36－11

SI36－16

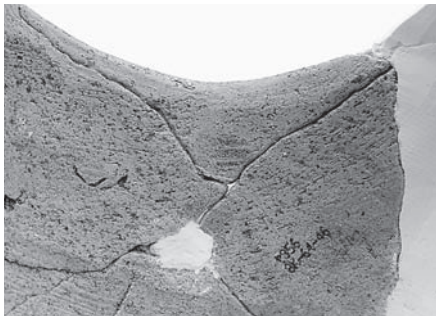
SI36－17

SI38－1

SI38－2


SI40－1

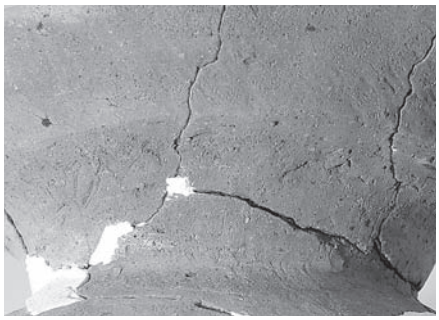
SI40－1


SI40－1

SI40－7

SI40－9

SI40－10

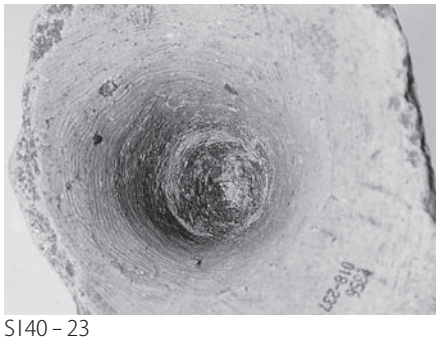

SI40－13

SI40－20

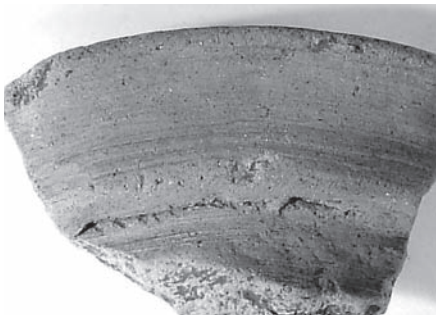
SI40－21

SI40－22

SI40－23


SI40－23

SI40－27


SI40－32

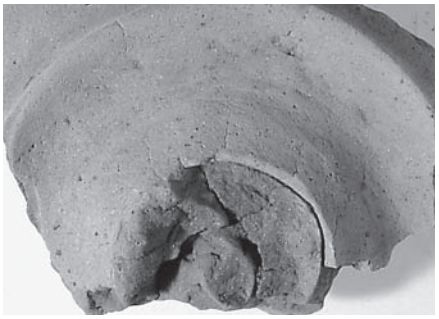
SI40－34

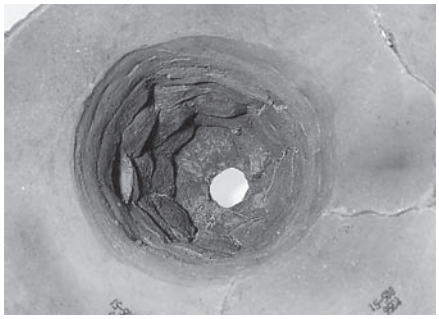
SI43－4

SI43－14

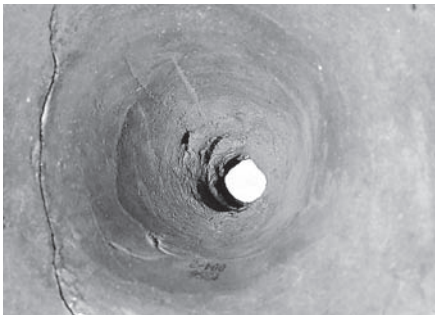
SI46－4

SI43－4


SI43－20


SI46－6

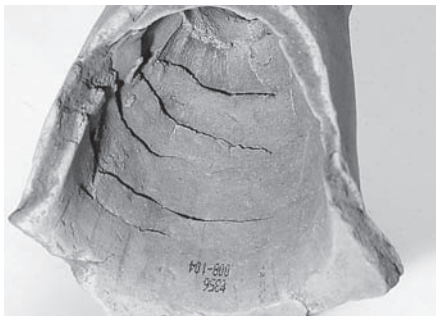
SI43－6


SI44－5

SI49－2

SI43－6

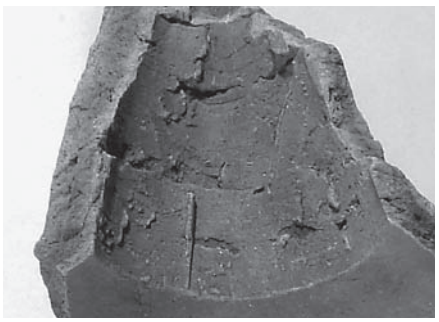
SI44－9


SI49－5

SI43－7

SI46－2

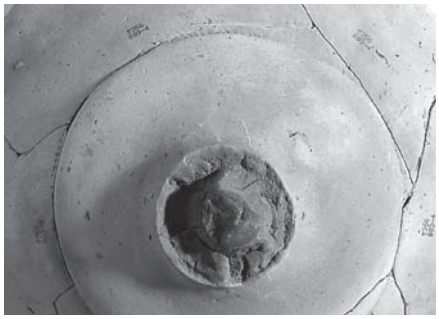
SI50－3


SI43－11

SI46－3

SI50－4

SI50－6


SI50－7

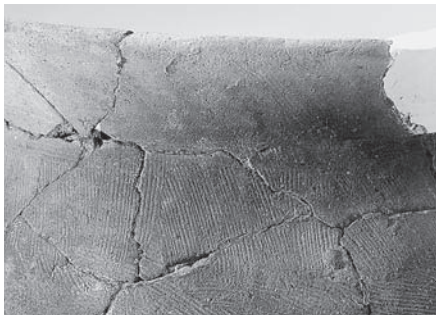
SI51－3

SI52－5

SI52－8

SI52－9

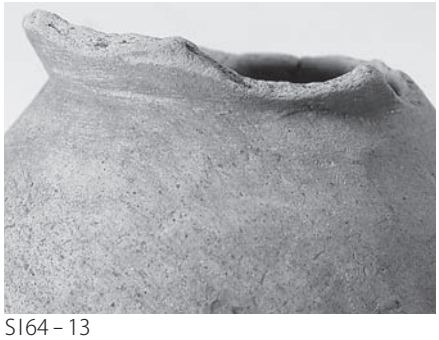
SI54－1


SI54－2

SI64－2

SI64－11

SI64－11


SI64－13

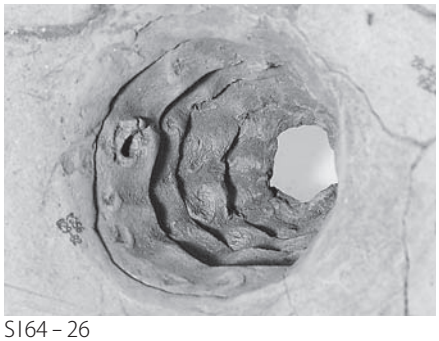
SI64－14

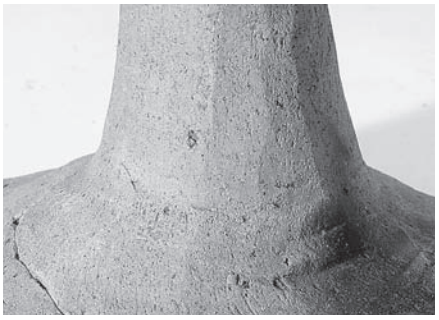
SI64－14

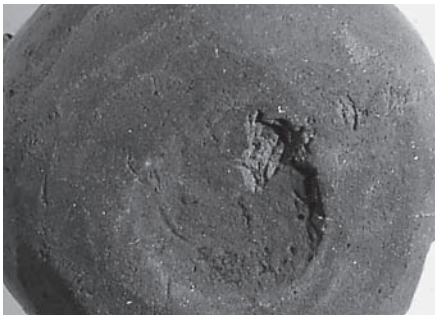
SI64－16

SI64－22

SI64－26


SI64－26


SI65－1


SI70－36

SI71－14

SI65－2

SI71－6

SI73－1

SI70－8

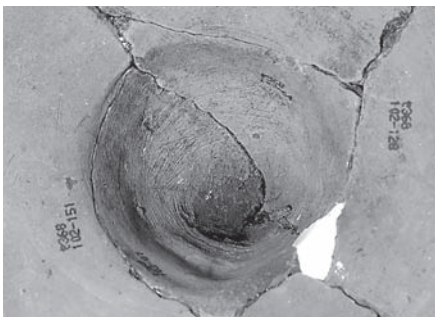
SI71－10

SI73－2

SI70－12

SI71－10

SI73－4


SI70－13

SI71－11

SI73－05

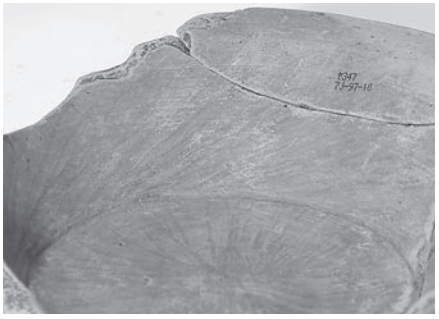
SI70－27

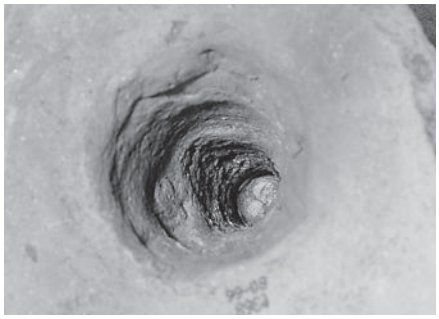
SI71－13

SI73－14

SI73－16

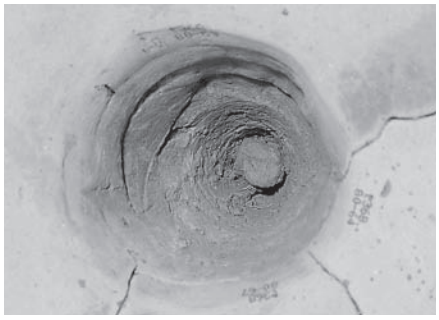
SX02－8

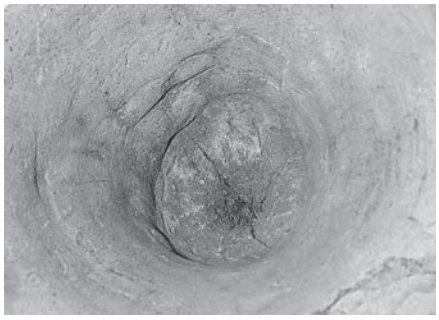

SX02－50


SI73－17

SX02－14

SX02－50


SI73－25

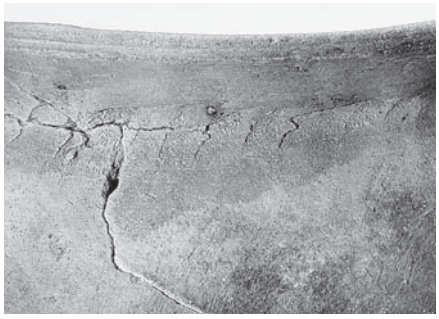

SX02－20

SX03－5

SD05－6

SX02－27

SX03－20


SX02－4

SX02－36

SI02－9

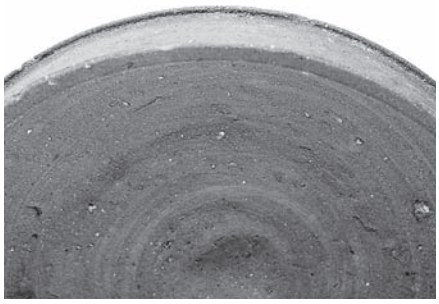
SX02－5

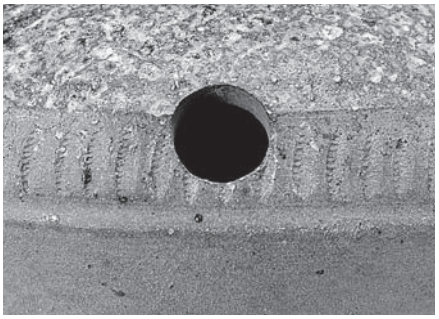
SX02－37

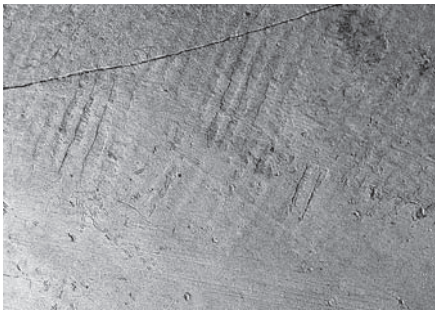
SI15－76

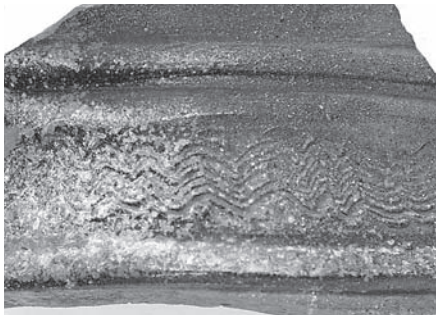
SI16－1

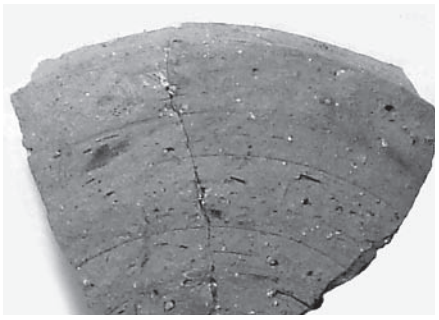
SI19－16


SI38－3

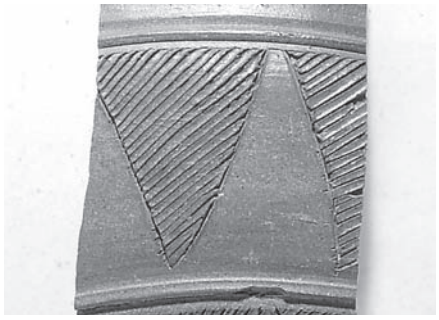

SI16－1

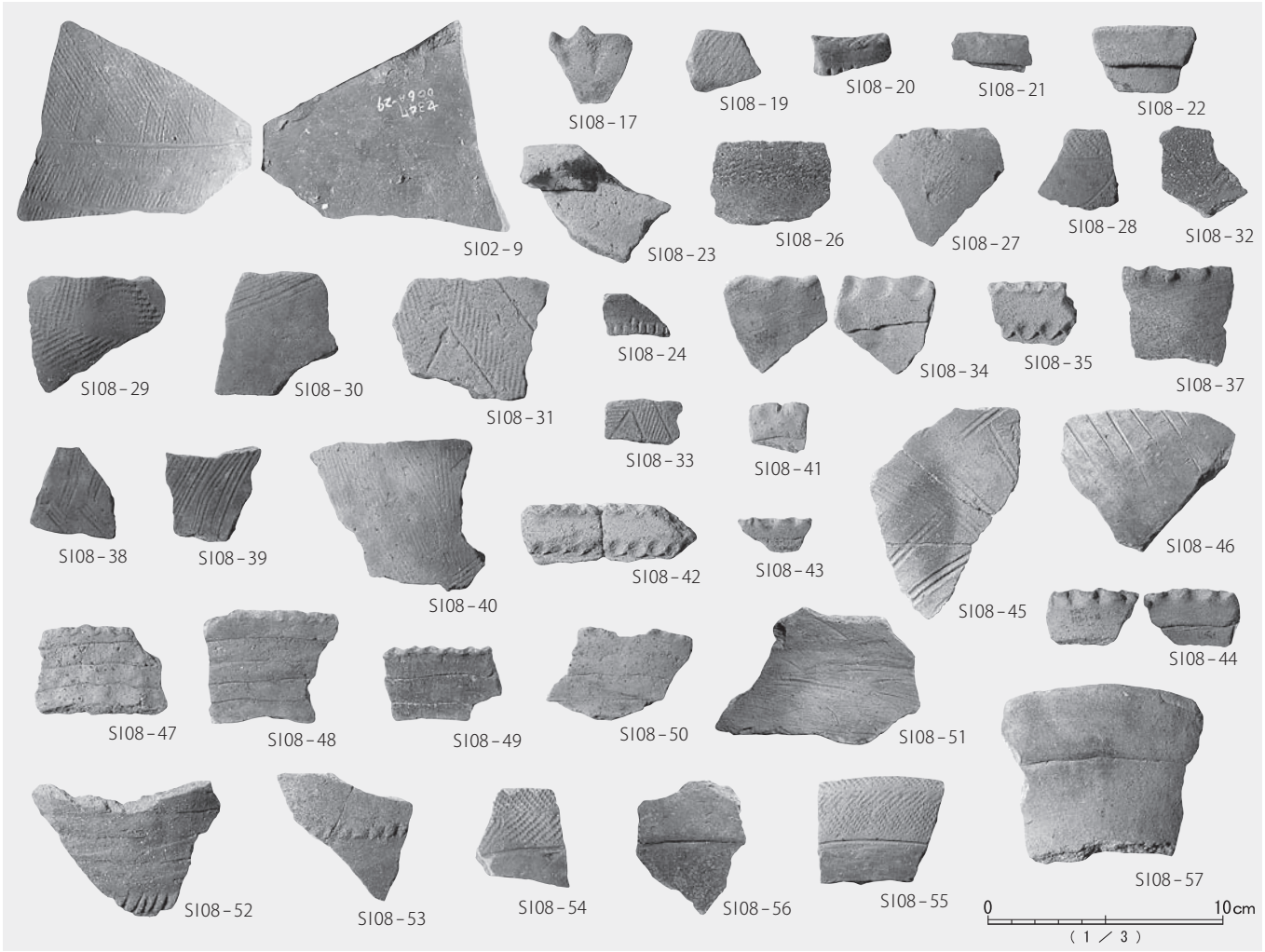

SI31－21

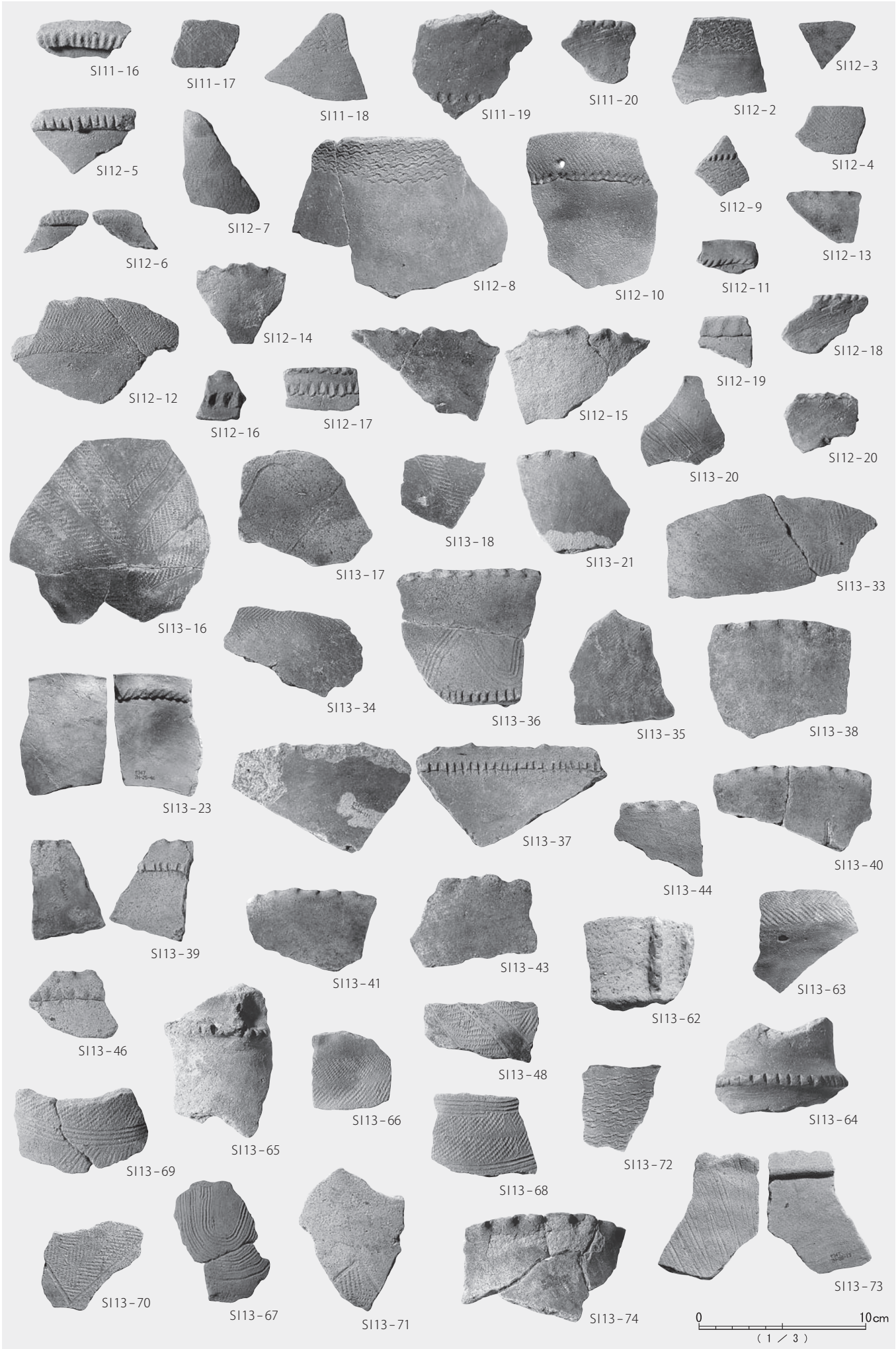

SM01－21

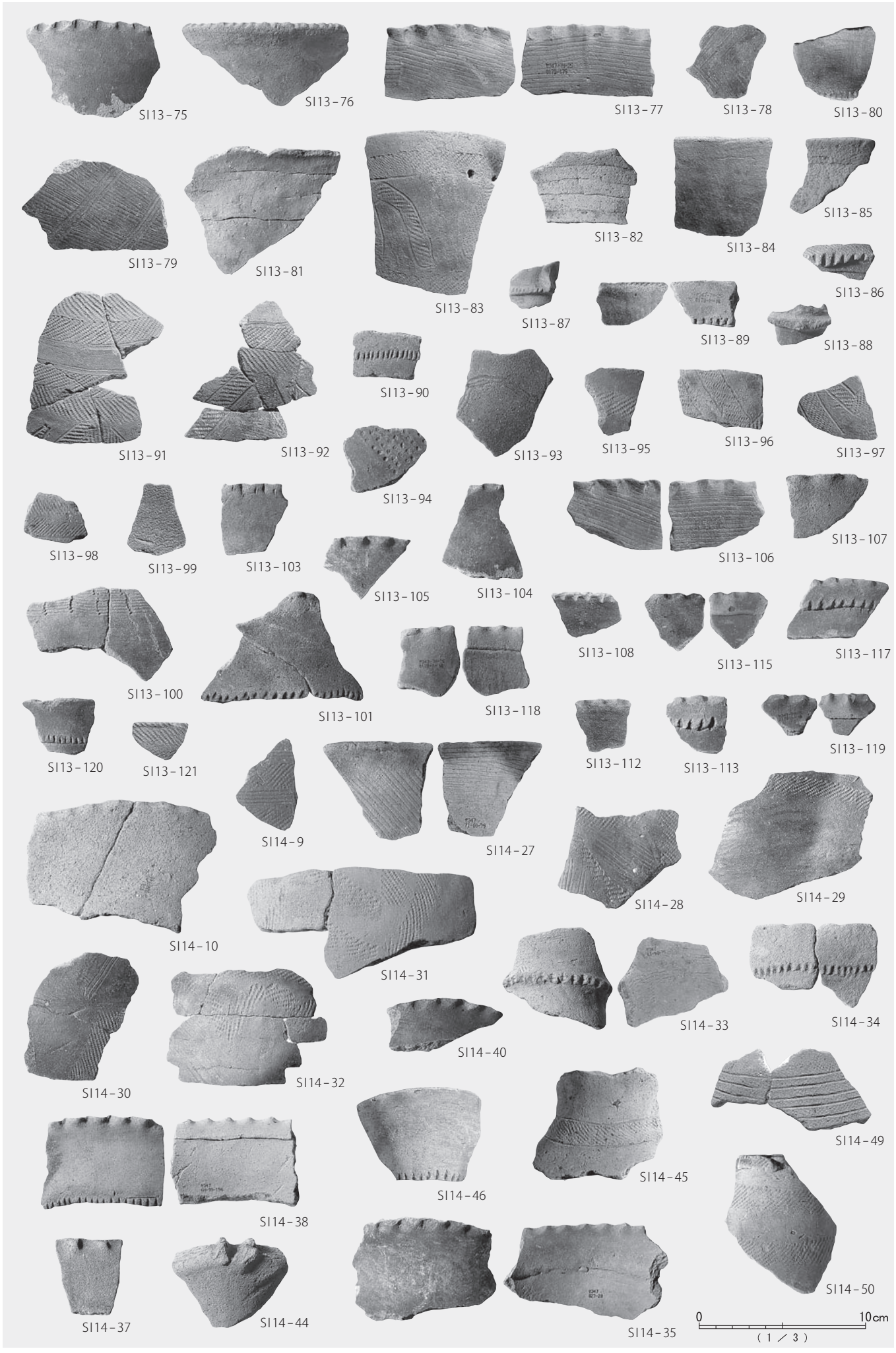

SI19－15

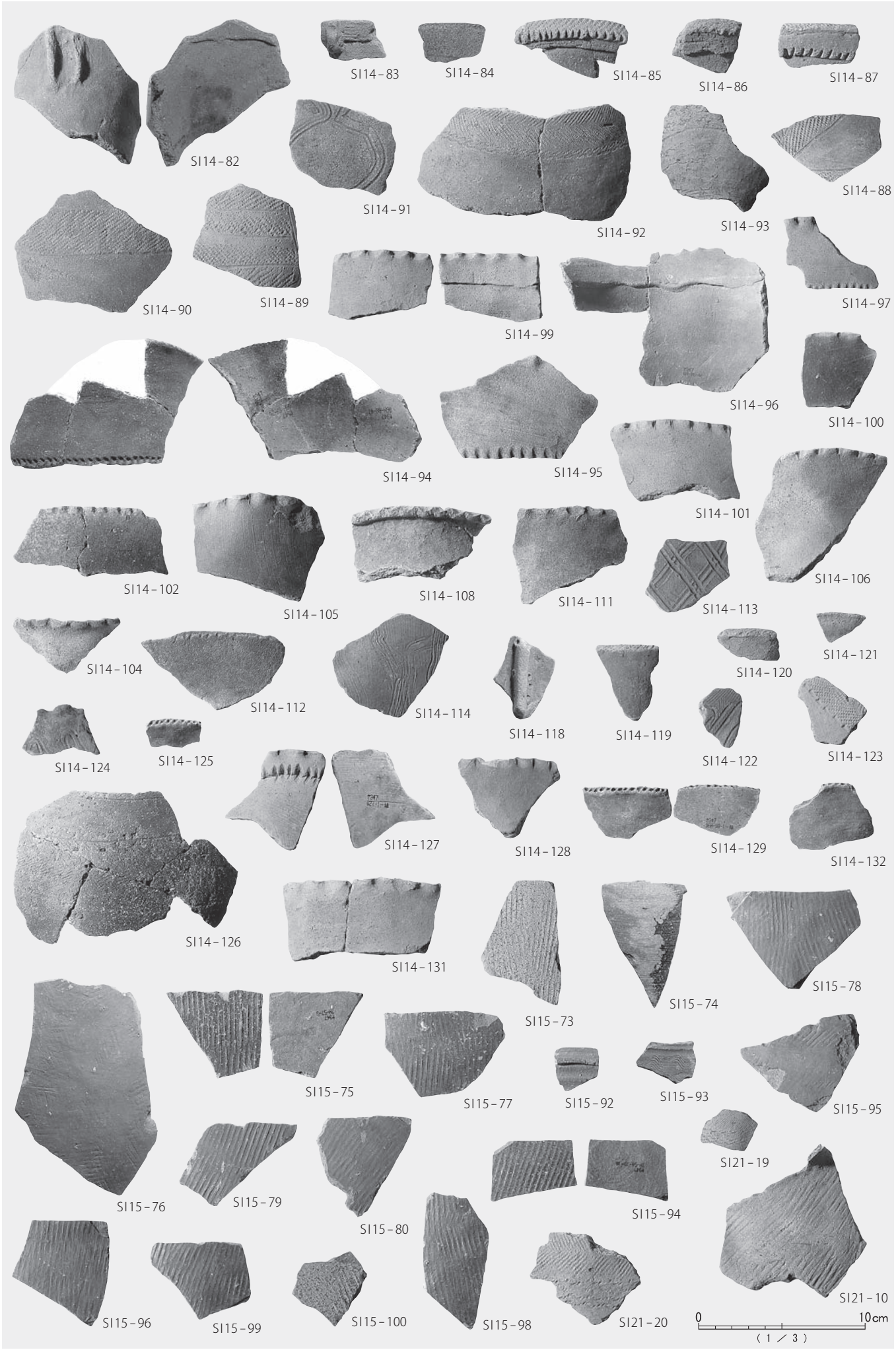
SI38－3

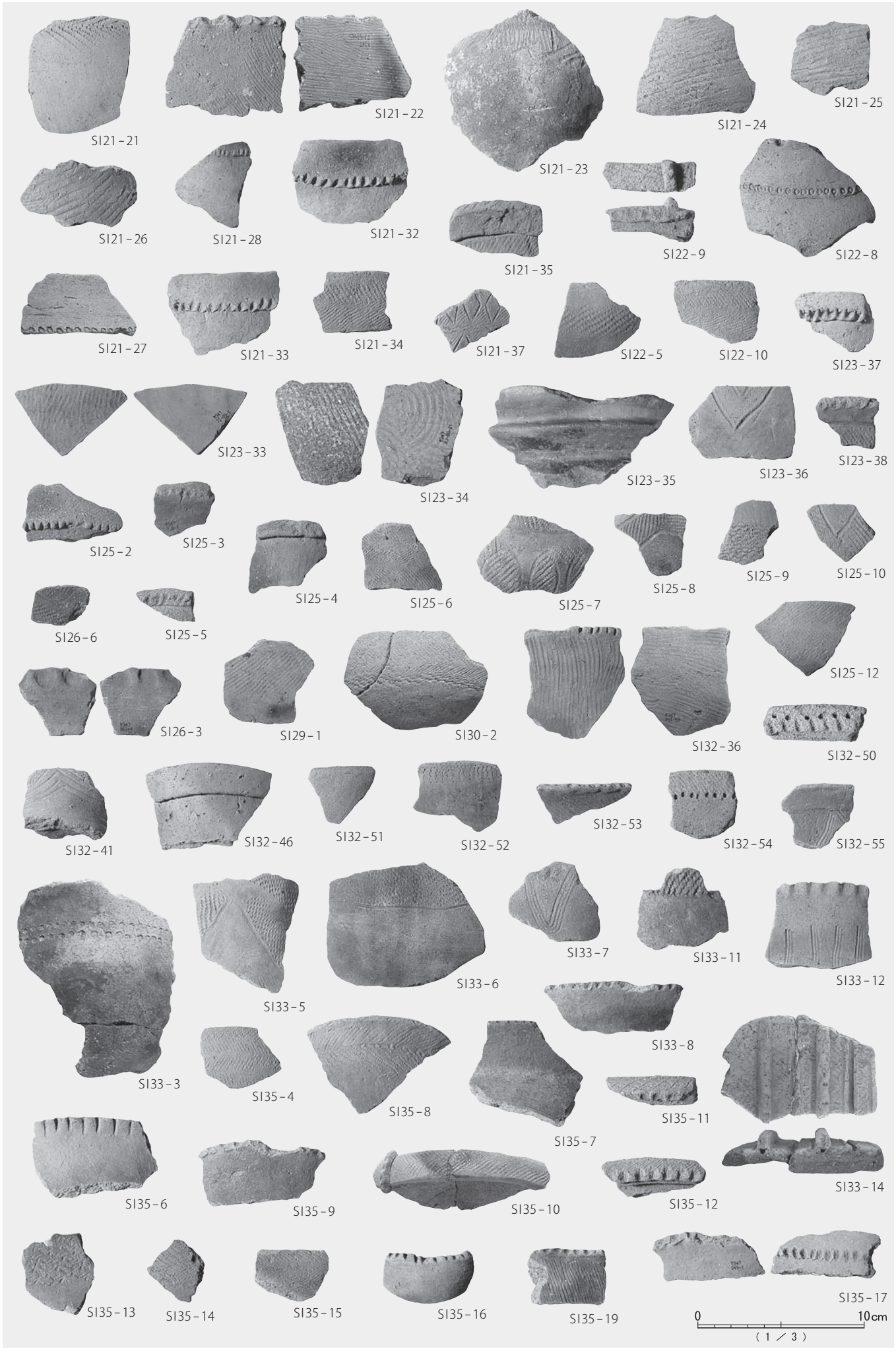

SM01－26

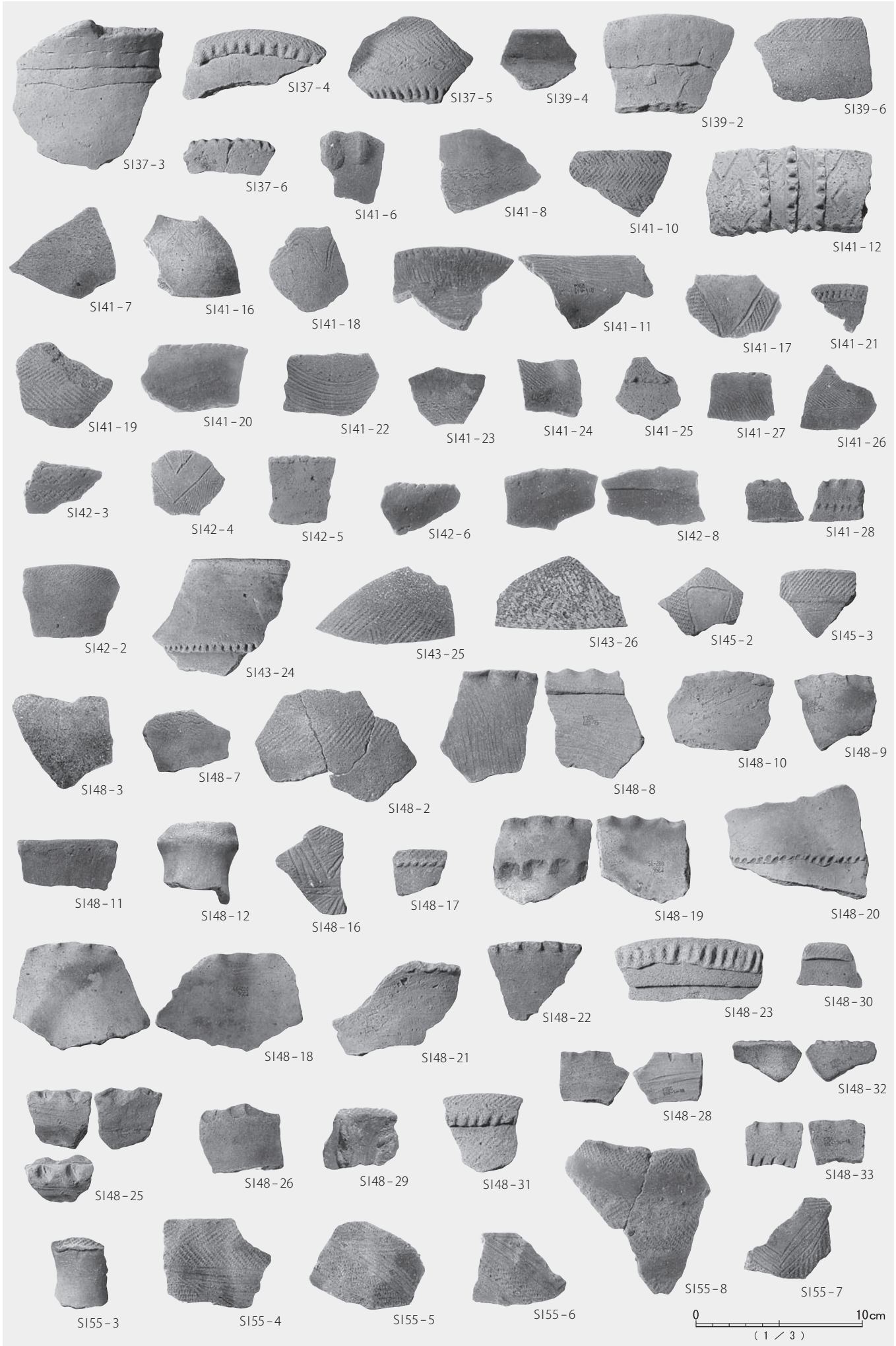


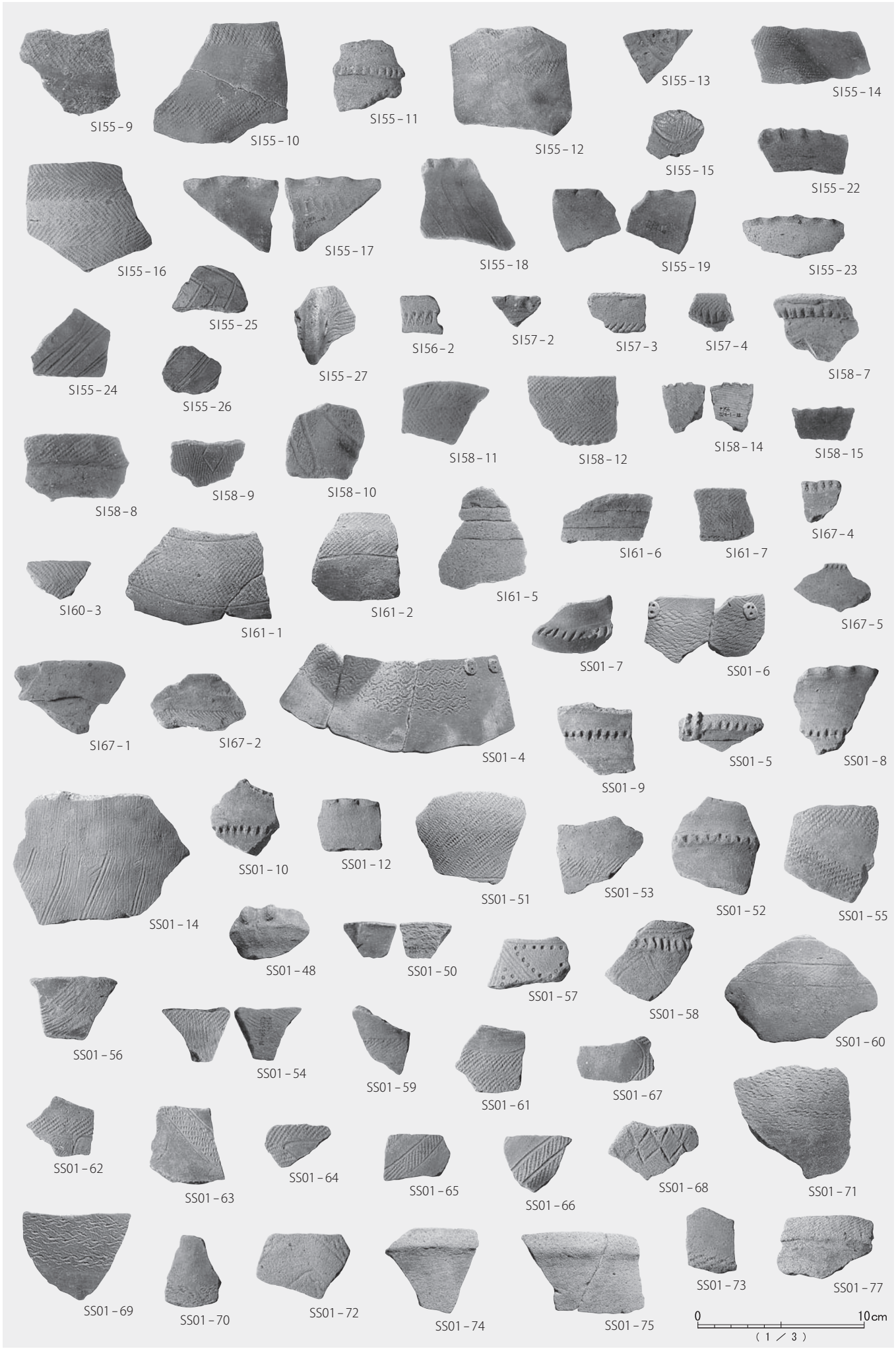

SI11－16
SI11－17
SI11－18
SI11－19
SI11－20
SI12－2
SI12－3
SI12－4
SI12－5
SI12－7
SI12－8
SI12－9
SI12－10
SI12－11
SI12－13
SI12－6
SI12－14
SI12－12
SI12－15
SI12－18
SI12－19
SI12－16
SI12－17
SI12－20
SI13－20
SI13－16
SI13－17
SI13－18
SI13－21
SI13－33
SI13－34
SI13－36
SI13－35
SI13－38
SI13－23
SI13－37
SI13－40
SI13－44
SI13－39
SI13－41
SI13－43
SI13－63
SI13－62
SI13－46
SI13－48
SI13－65
SI13－66
SI13－64
SI13－69
SI13－72
SI13－68
SI13－70
SI13－67
SI13－71
SI13－74
SI13－73
0
10cm
（1／3）

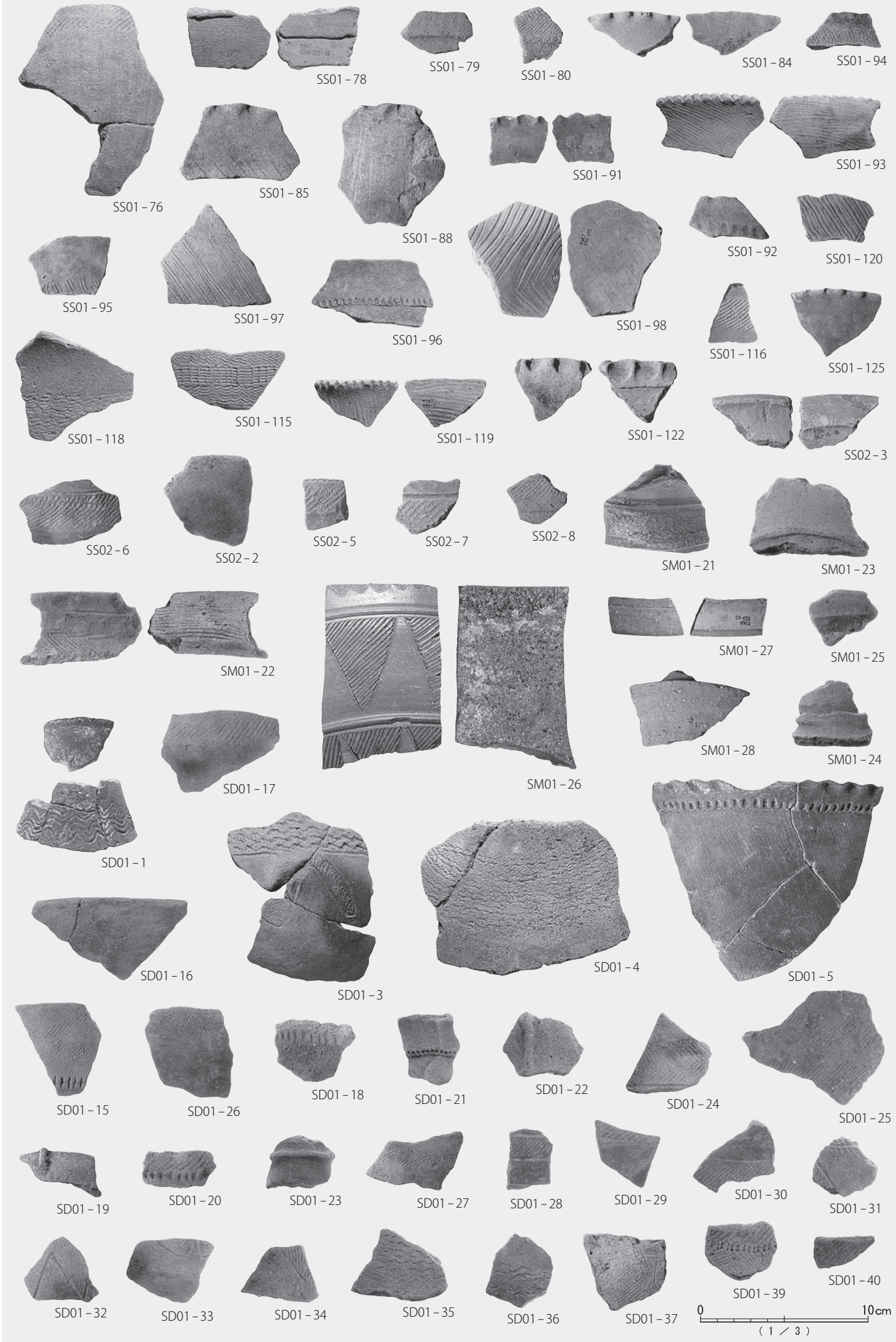

SI13－75
SI13－76
SI13－77
SI13－78
SI13－80
SI13－79
SI13－81
SI13－83
SI13－82
SI13－84
SI13－85
SI13－86
SI13－87
SI13－89
SI13－88
SI13－91
SI13－92
SI13－90
SI13－93
SI13－95
SI13－96
SI13－97
SI13－94
SI13－98
SI13－99
SI13－103
SI13－105
SI13－104
SI13－106
SI13－107
SI13－100
SI13－101
SI13－108
SI13－115
SI13－117
SI13－118
SI13－120
SI13－121
SI13－112
SI13－113
SI13－119
SI14－9
SI14－27
SI14－10
SI14－28
SI14－29
SI14－31
SI14－33
SI14－34
SI14－40
SI14－30
SI14－32
SI14－49
SI14－46
SI14－45
SI14－38
SI14－50
SI14－37
SI14－44
SI14－35
0
10cm
（1／3）

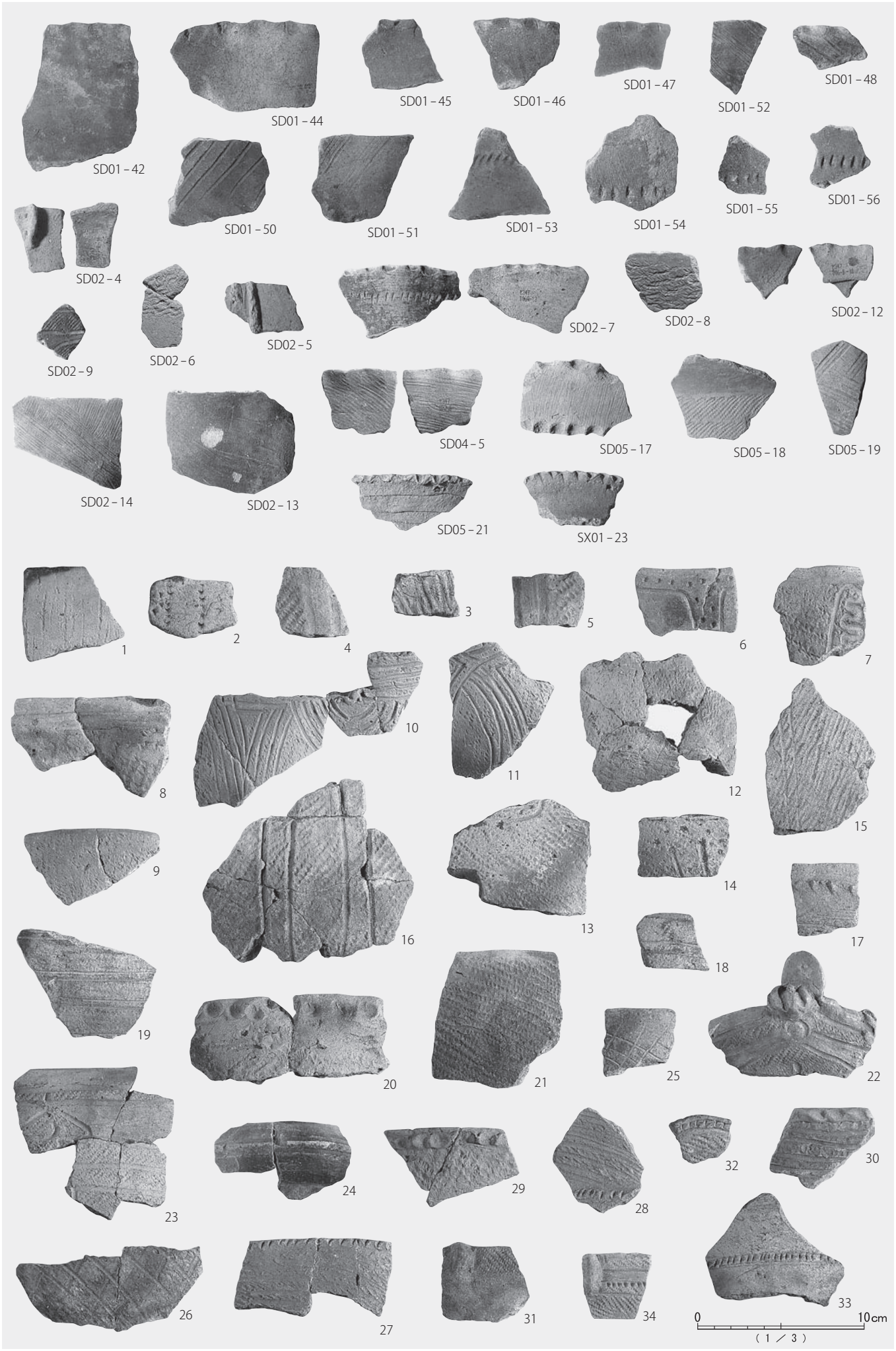

SI14-82
SI14-83
SI14-84
SI14-85
SI14-86
SI14-87
SI14-88
SI14-89
SI14-90
SI14-91
SI14-92
SI14-93
SI14-94
SI14-95
SI14-96
SI14-97
SI14-99
SI14-100
SI14-101
SI14-102
SI14-104
SI14-105
SI14-106
SI14-108
SI14-111
SI14-112
SI14-113
SI14-114
SI14-118
SI14-119
SI14-120
SI14-121
SI14-122
SI14-123
SI14-124
SI14-125
SI14-126
SI14-127
SI14-128
SI14-129
SI14-131
SI14-132
SI15-73
SI15-74
SI15-75
SI15-76
SI15-77
SI15-78
SI15-79
SI15-80
SI15-92
SI15-93
SI15-94
SI15-95
SI15-96
SI15-98
SI15-99
SI15-100
SI21-10
SI21-19
SI21-20
0
10cm
(1/3)

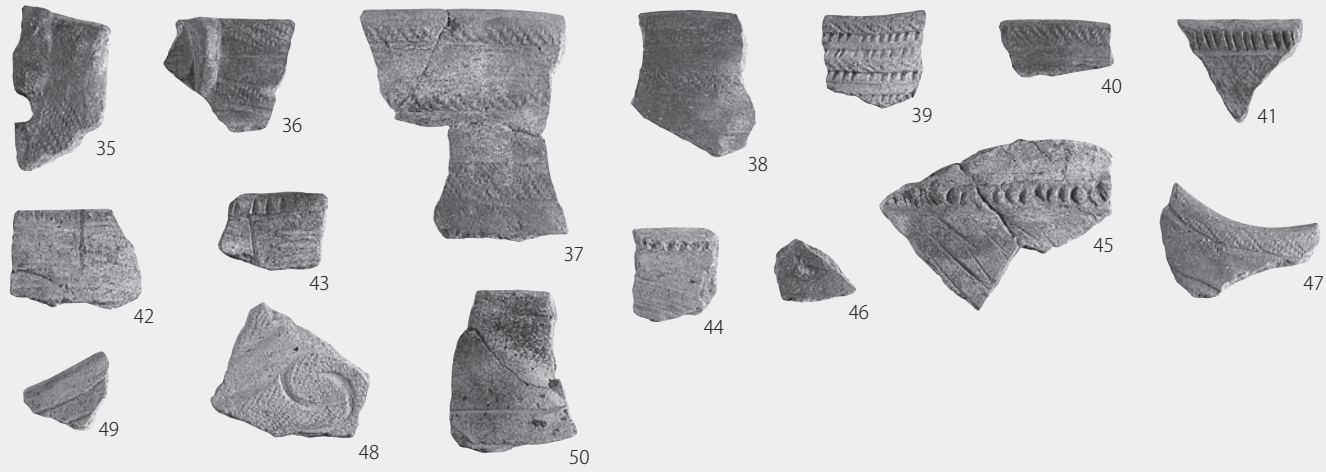

SI21－21
SI21－22
SI21－23
SI21－24
SI21－25
SI21－26
SI21－28
SI21－32
SI21－35
SI22－9
SI22－8
SI21－27
SI21－33
SI21－34
SI21－37
SI22－5
SI22－10
SI23－37
SI23－33
SI23－34
SI23－35
SI23－36
SI23－38
SI25－2
SI25－3
SI25－4
SI25－6
SI25－7
SI25－8
SI25－9
SI25－10
SI26－6
SI25－5
SI25－12
SI26－3
SI29－1
SI30－2
SI32－36
SI32－50
SI32－41
SI32－46
SI32－51
SI32－52
SI32－53
SI32－54
SI32－55
SI33－3
SI33－5
SI33－6
SI33－7
SI33－11
SI33－12
SI33－8
SI35－4
SI35－8
SI35－7
SI35－11
SI35－6
SI35－9
SI35－10
SI35－12
SI33－14
SI35－13
SI35－14
SI35－15
SI35－16
SI35－19
SI35－17
0
10cm
（1／3）

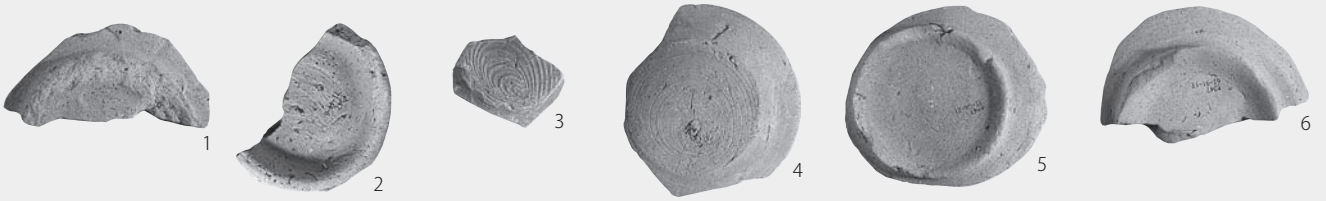

SI37－3
SI37－4
SI37－5
SI39－4
SI39－2
SI39－6
SI37－6
SI41－6
SI41－8
SI41－10
SI41－12
SI41－7
SI41－16
SI41－18
SI41－11
SI41－17
SI41－21
SI41－19
SI41－20
SI41－22
SI41－23
SI41－24
SI41－25
SI41－27
SI41－26
SI42－3
SI42－4
SI42－5
SI42－6
SI42－8
SI41－28
SI42－2
SI43－24
SI43－25
SI43－26
SI45－2
SI45－3
SI148－3
SI148－7
SI148－2
SI148－8
SI148－10
SI148－9
SI148－11
SI148－12
SI148－16
SI148－17
SI148－19
SI148－20
SI148－18
SI148－21
SI148－22
SI148－23
SI148－30
SI148－32
SI148－28
SI148－25
SI148－26
SI148－29
SI148－31
SI148－33
SI155－8
SI155－7
SI155－3
SI155－4
SI155－5
SI155－6
0
10cm
（1／3）


SI55－9
SI55－10
SI55－11
SI55－12
SI55－13
SI55－14
SI55－15
SI55－16
SI55－17
SI55－18
SI55－19
SI55－22
SI55－23
SI55－24
SI55－25
SI55－26
SI55－27
SI56－2
SI57－2
SI57－3
SI57－4
SI58－7
SI58－8
SI58－9
SI58－10
SI58－11
SI58－12
SI58－14
SI58－15
SI60－3
SI61－1
SI61－2
SI61－5
SI61－6
SI61－7
SI67－4
SI67－5
SI67－1
SI67－2
SS01－4
SS01－7
SS01－6
SS01－5
SS01－8
SS01－9
SS01－10
SS01－12
SS01－51
SS01－53
SS01－52
SS01－55
SS01－14
SS01－48
SS01－50
SS01－57
SS01－58
SS01－60
SS01－56
SS01－54
SS01－59
SS01－61
SS01－67
SS01－62
SS01－63
SS01－64
SS01－65
SS01－66
SS01－68
SS01－71
SS01－69
SS01－70
SS01－72
SS01－74
SS01－75
SS01－73
SS01－77
0
10cm
（1／3）


SS01－76
SS01－78
SS01－79
SS01－80
SS01－84
SS01－94
SS01－85
SS01－88
SS01－91
SS01－93
SS01－95
SS01－97
SS01－96
SS01－98
SS01－92
SS01－120
SS01－116
SS01－125
SS01－118
SS01－115
SS01－119
SS01－122
SS02－3
SS02－6
SS02－2
SS02－5
SS02－7
SS02－8
SM01－21
SM01－23
SM01－22
SM01－27
SM01－25
SM01－26
SM01－28
SM01－24
SD01－17
SD01－1
SD01－16
SD01－3
SD01－4
SD01－5
SD01－15
SD01－26
SD01－18
SD01－21
SD01－22
SD01－24
SD01－25
SD01－19
SD01－20
SD01－23
SD01－27
SD01－28
SD01－29
SD01－30
SD01－31
SD01－32
SD01－33
SD01－34
SD01－35
SD01－36
SD01－37
SD01－39
SD01－40
0
10cm
（1／3）


SD01－42
SD01－44
SD01－45
SD01－46
SD01－47
SD01－52
SD01－48
SD01－50
SD01－51
SD01－53
SD01－54
SD01－55
SD01－56
SD02－4
SD02－6
SD02－5
SD02－7
SD02－8
SD02－12
SD02－9
SD04－5
SD05－17
SD05－18
SD05－19
SD02－14
SD02－13
SD05－21
SX01－23
1
2
4
3
5
6
7
10
8
11
12
15
9
16
13
14
17
18
19
20
21
25
22
23
24
29
28
32
30
26
27
31
34
33
0
10cm
（1／3）


35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50


1
2
3
4
5
6

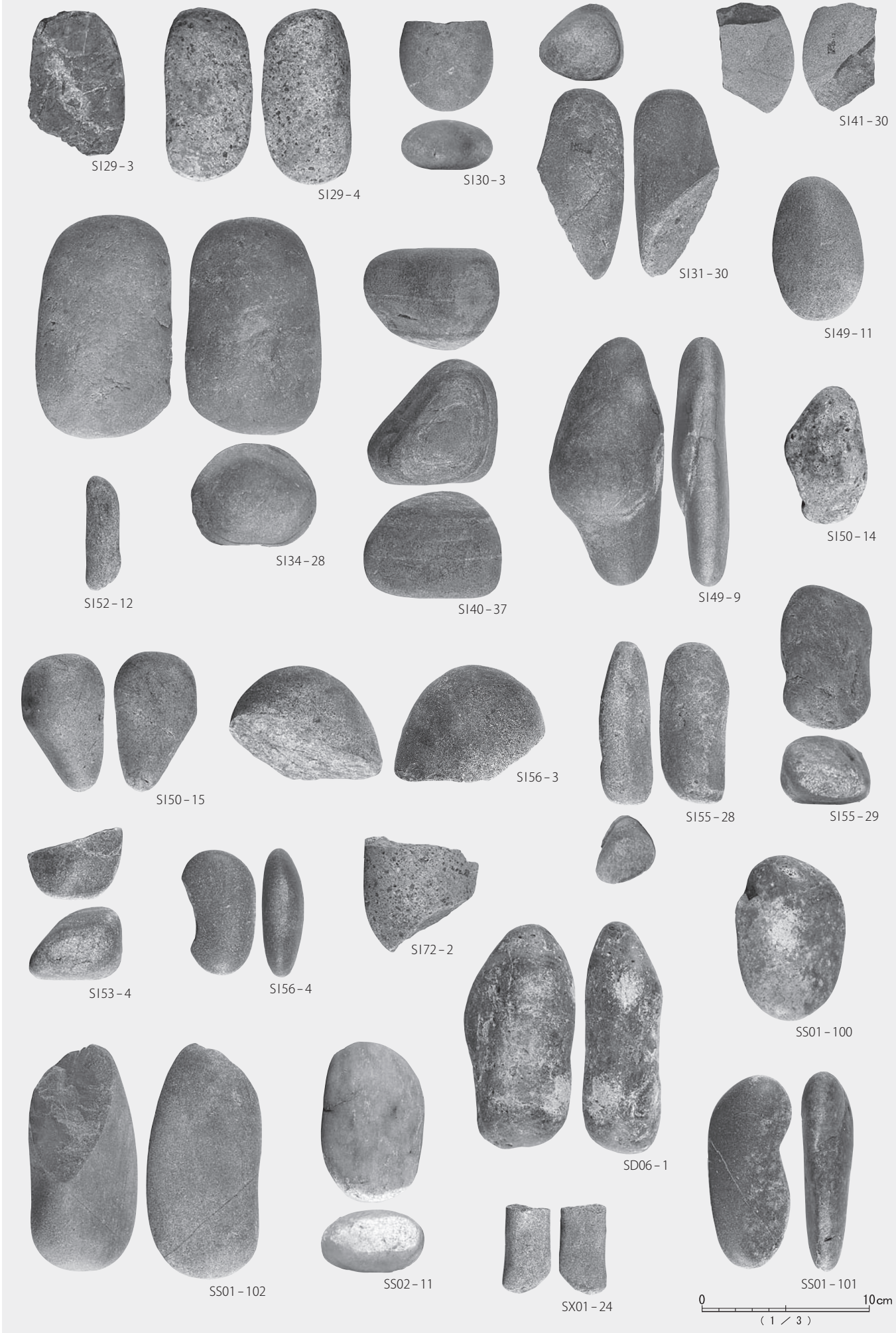
SE01－1
SE02－2
1
2
3

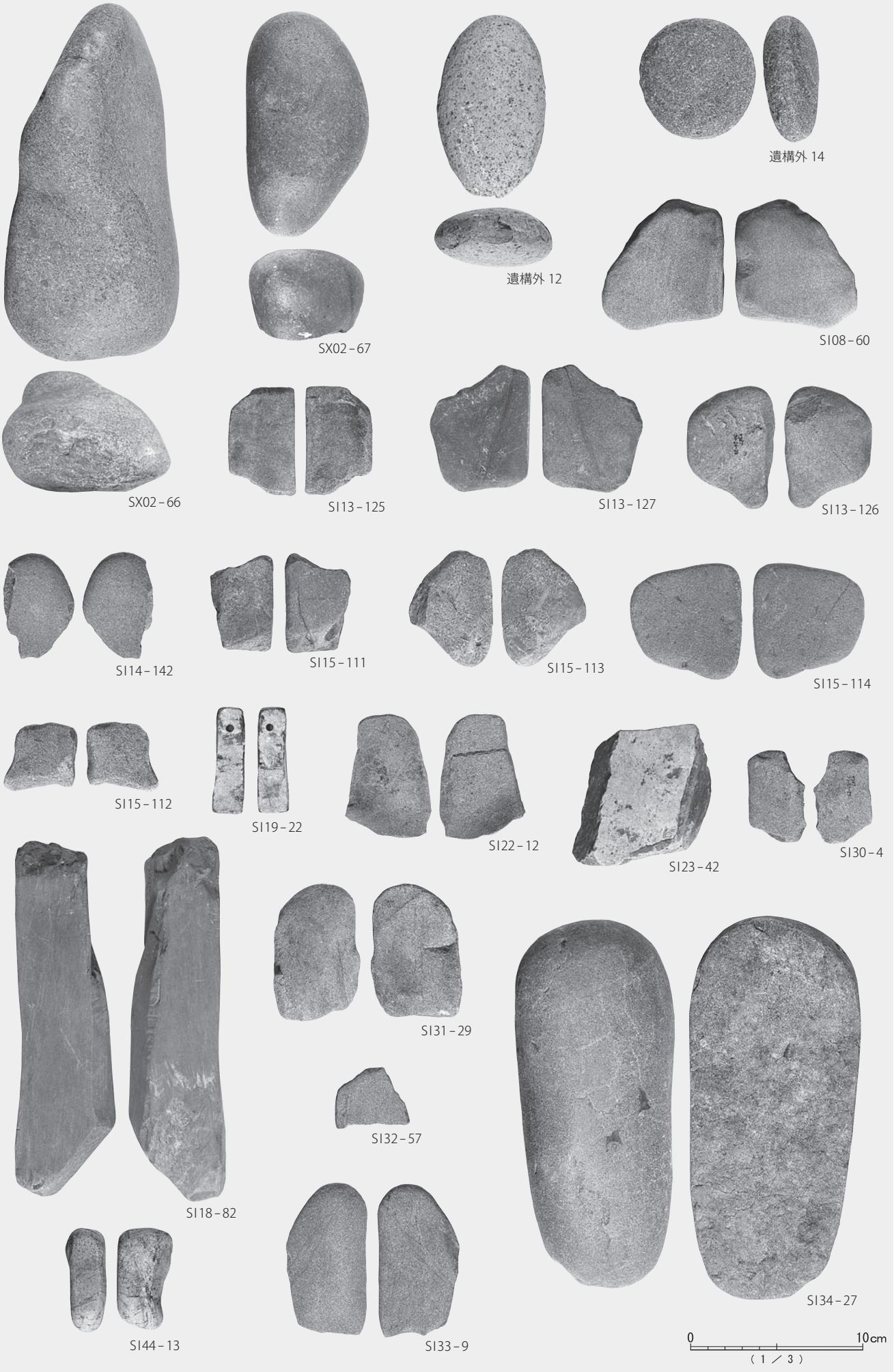
SI14－134
SI15－110
SI48－35
SD25－3
0
10cm
（1／3）

SI15－109
遺構外 1
遺構外 2
遺構外 3
遺構外 4
0
5cm
（1／2）

SI12－21
SI04－7
SI05－10
SI13－123
0
10cm
（1／3）

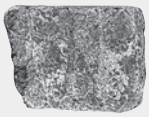
SI12－22
SI13－122
SI13－124
SI14－137
SI14－136
SI14－135
SI14－138
SI18－88
SI15－117
SI14－141
SI15－116
SI15－118
SI15－119
SI18－86
SI17－28
SI17－29
SI17－27
SI23－41
SI18－87
SI18－85
SI19－23
SI23－39
SI19－21
SI21－38
SI23－40
0
10cm
（1／3）


SI29－3
SI29－4
SI30－3
SI31－30
SI41－30
SI49－11
SI34－28
SI52－12
SI40－37
SI49－9
SI50－14
SI50－15
SI56－3
SI55－28
SI55－29
SI53－4
SI56－4
SI72－2
SS01－100
SD06－1
SS01－102
SS02－11
SX01－24
SS01－101
0
10cm
（1／3）


遺構外 14
遺構外 12
SI08－60
SX02－67
SX02－66
SI13－125
SI13－127
SI13－126
SI14－142
SI15－111
SI15－113
SI15－114
SI15－112
SI19－22
SI22－12
SI23－42
SI30－4
SI31－29
SI32－57
SI18－82
SI34－27
SI44－13
SI33－9
0
10cm
（1／3）

SI45－5

SI54－14

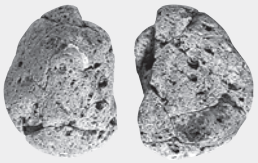

SI71－4

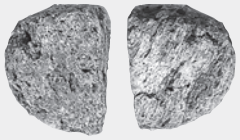
遺構外 5

SX02－65

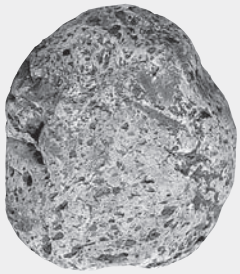
遺構外 13

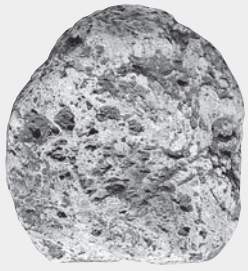
遺構外 9

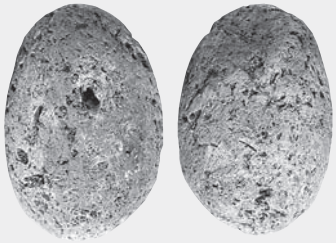

SI14－139

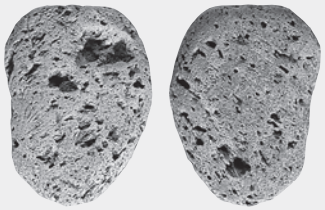

SI15－115

SI70－39

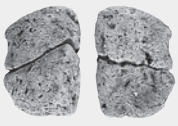



SI32－58


SI14－140

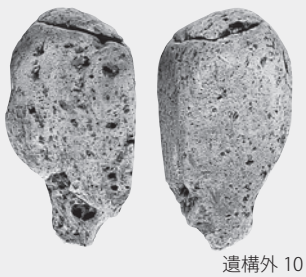

SI18－83

SI18－84

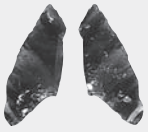

SI55－30

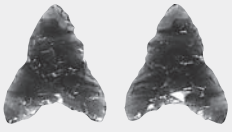
0　10cm
（1／3）

SI52－13

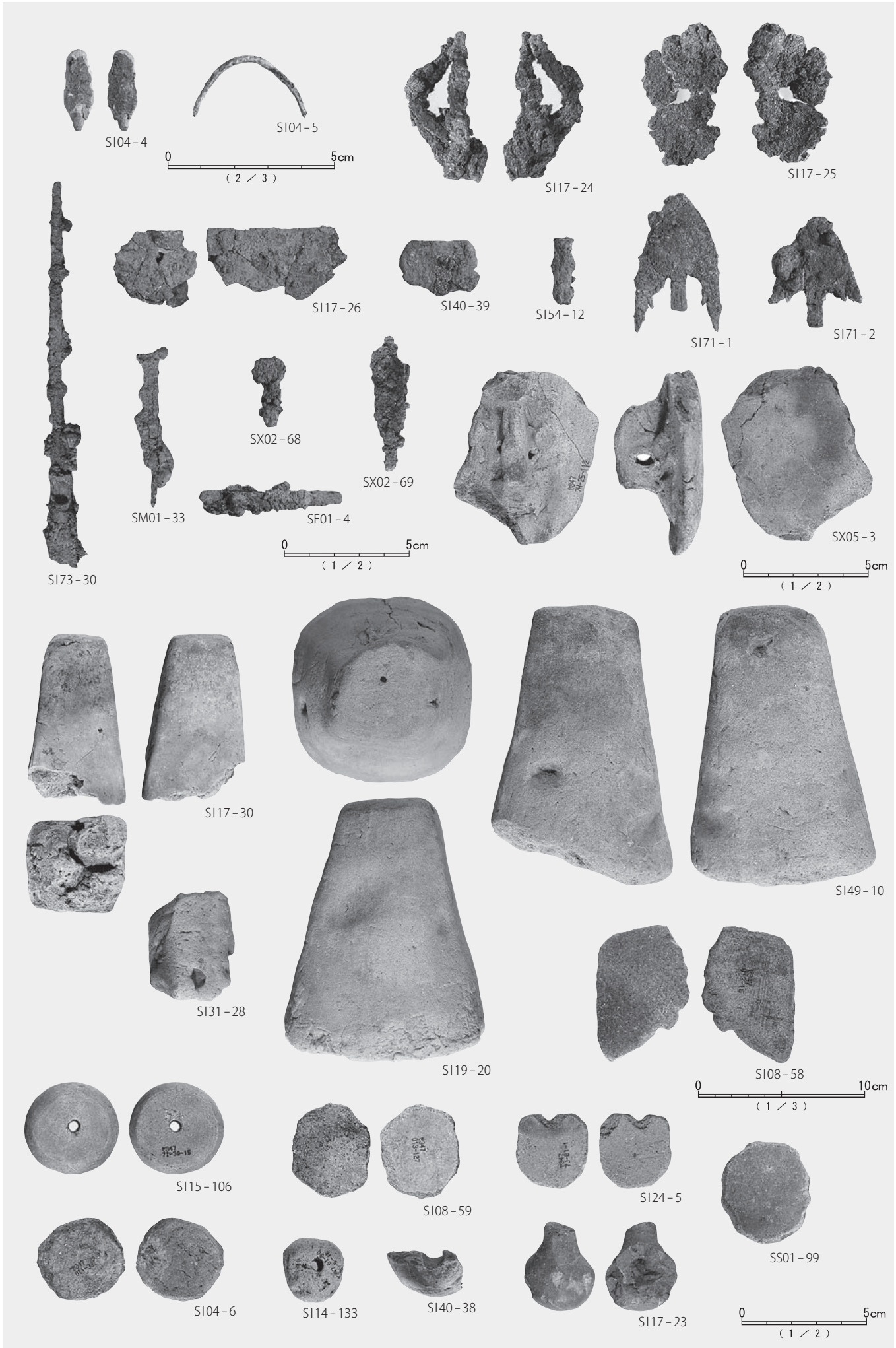

遺構外 10

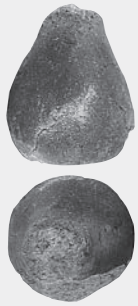
SI54－13


SI32－56


SD01－57

0　5cm
（2／3）

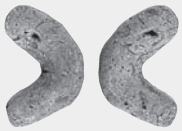

SI04－4
SI04－5
0 5cm
（2／3）
SI17－24
SI17－25
SI17－26
SI40－39
SI54－12
SI71－1
SI71－2
SI73－30
SM01－33
SX02－68
SX02－69
SE01－4
0 5cm
（1／2）
SX05－3
0 5cm
（1／2）
SI17－30
SI49－10
SI31－28
SI19－20
SI08－58
0 10cm
（1／3）
SI15－106
SI08－59
SI24－5
SS01－99
SI04－6
SI14－133
SI40－38
SI17－23
0 5cm
（1／2）


SI48－34

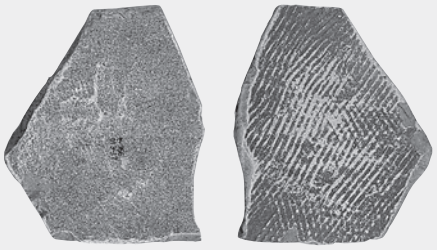
SI43－27

SD02－15

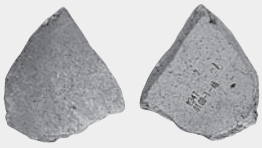
0　5cm
（1／2）

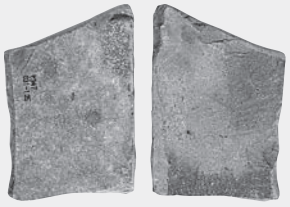

SI64－1

0　5cm
（2／3）


SI54－11

0　15cm
（1／4）

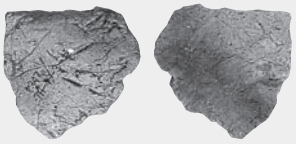

SI06－4

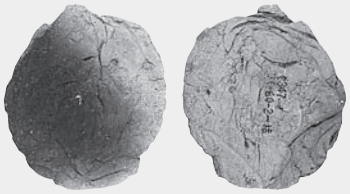

SI18－81

SX05－4

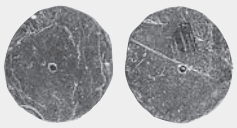
SX05－5

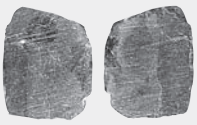
0　10cm
（1／3）


SI15－105


SI16－23

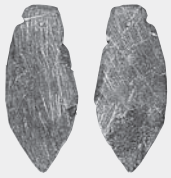
SI16－24


SI15－102

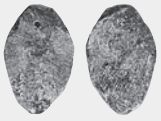

SI15－103

SI15－104

SI17－31

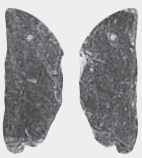

SI18－80

SI38－20

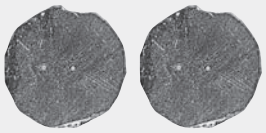

SI43－28

SI73－31

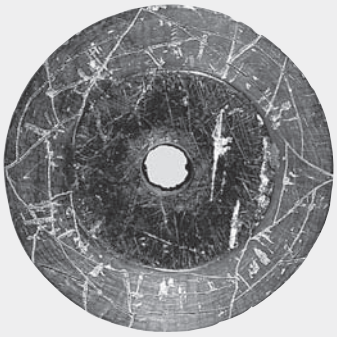
SS02－10


SD05－22

SD25－1


SX03－23

0　5cm
（1／2）



SI71－3

SM01－32

0　3cm
（1／1）

SI34－29

SI66－3

0　5cm
（2／3）

SD25 – 02

SI15 – 107

SI15 – 108

SI16 – 22

SI18 – 41

SI32 – 13

SI73 – 62

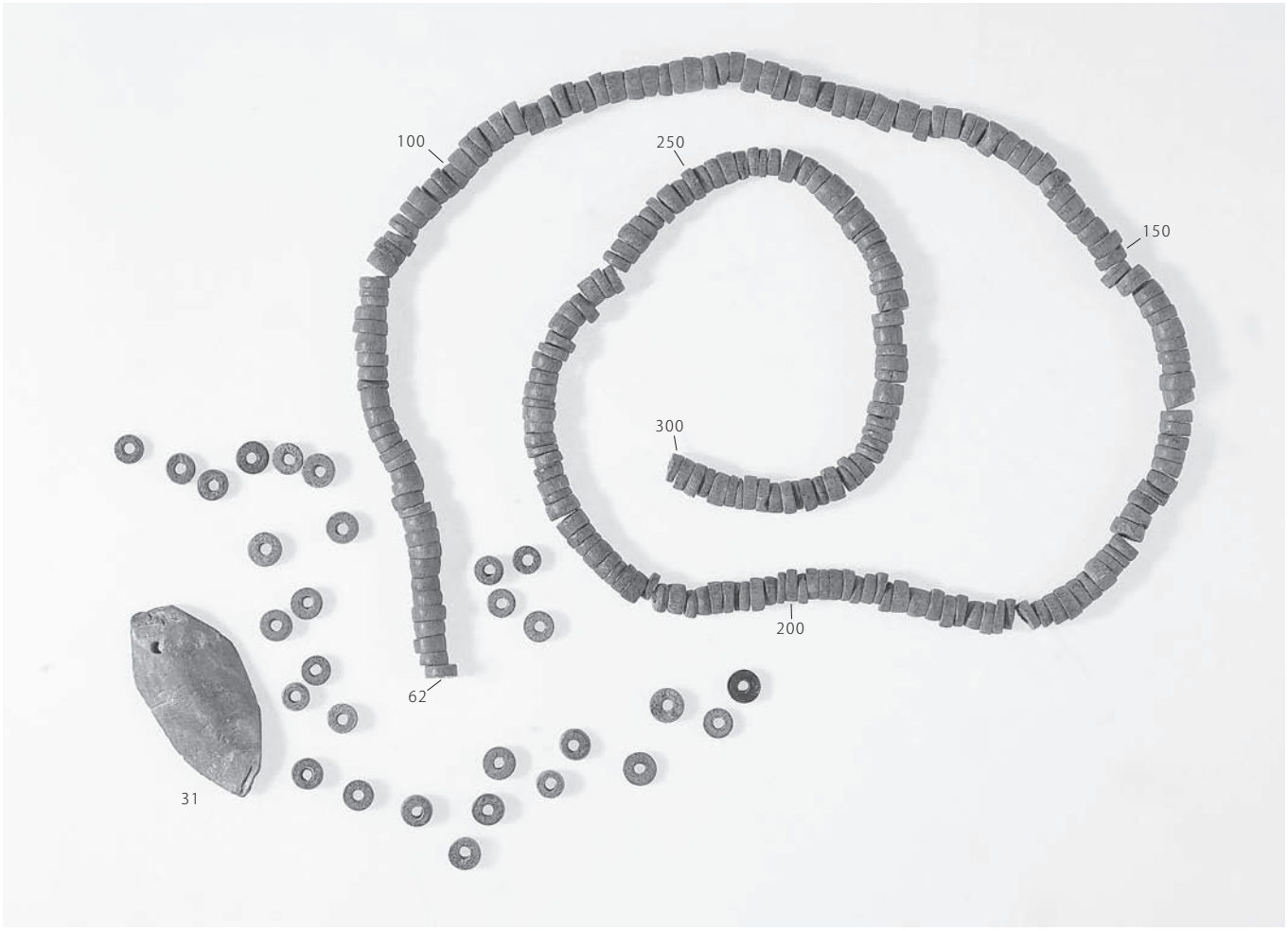
SI73 – 65

SI73 – 102

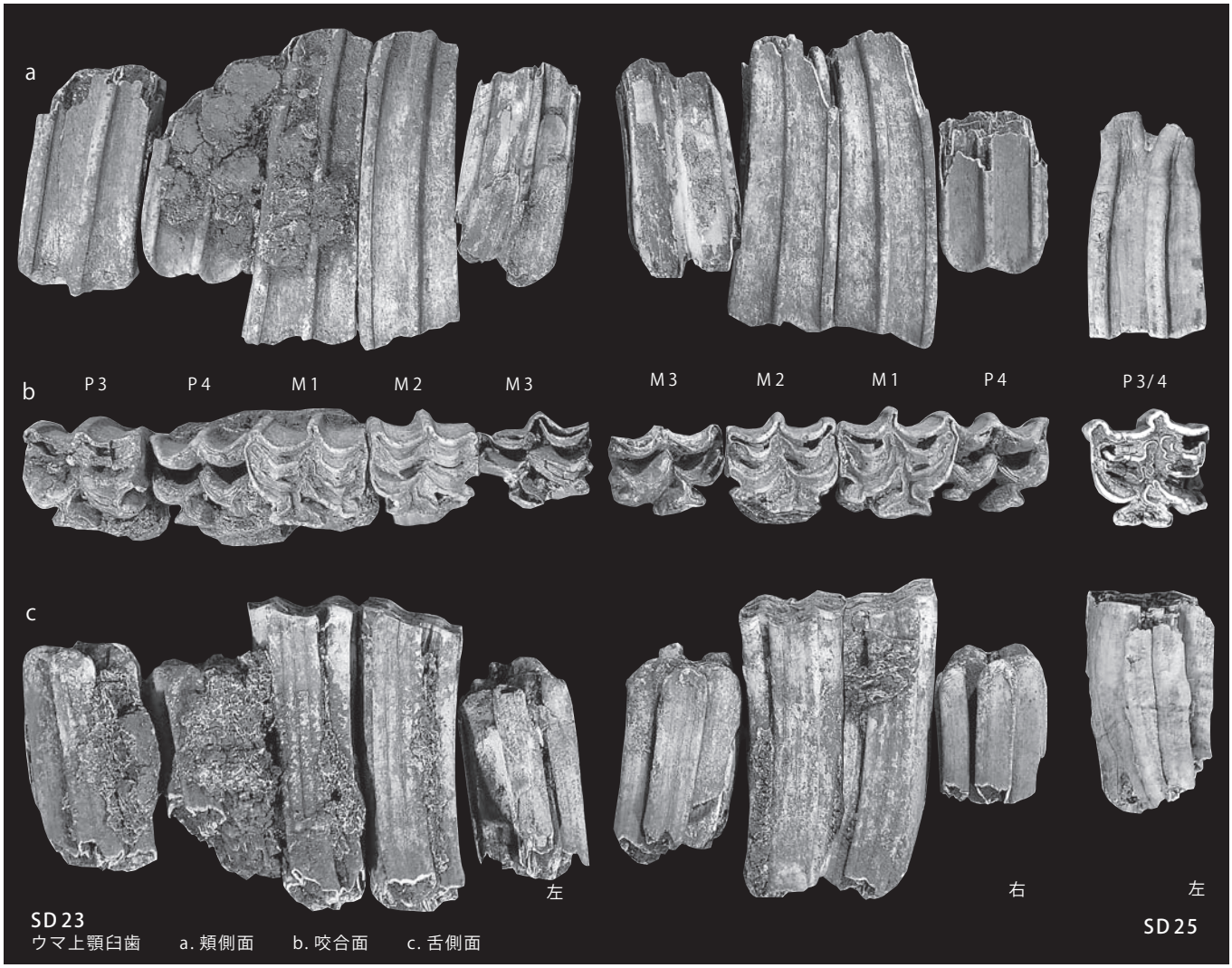
SI73 – 111

SI73 – 122

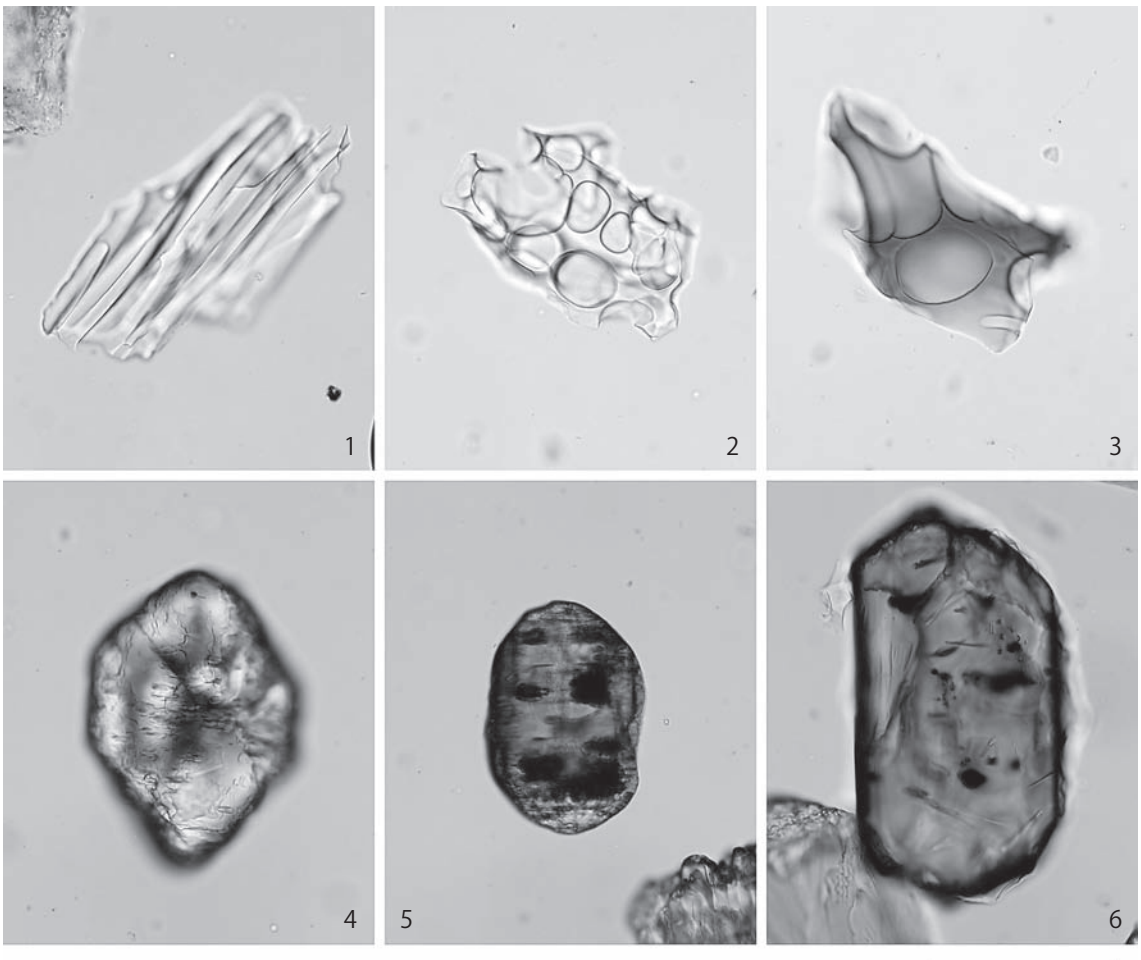
SI73 – 130

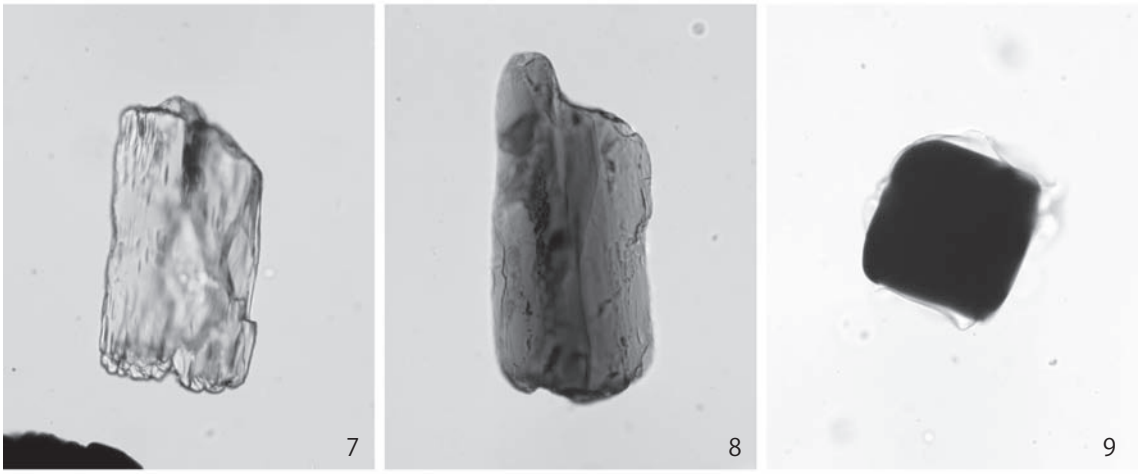


SI73



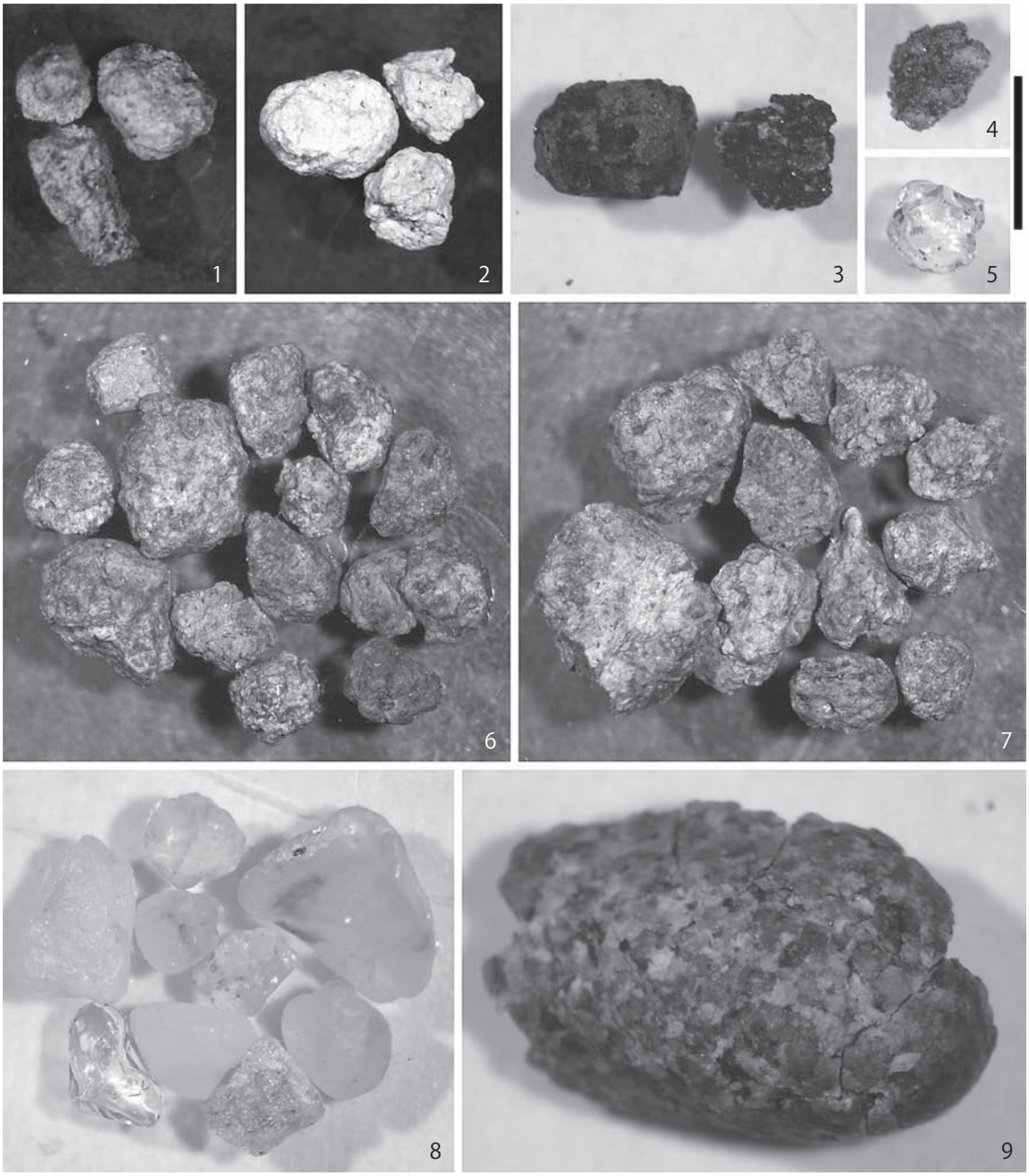
ウマ上顎臼歯　a. 頬側面　b. 咬合面　c. 舌側面





堆積物中の鉱物類の光学顕微鏡写真　（スケール 0.1mm）

1 軽石型繊維状火山ガラス　(B20)
2 軽石型スポンジ状火山ガラス　(B22)
3 軽石型スポンジ状火山ガラス　(B21)
4 カンラン石　(B22)
5 イディングサイト　(B22)
6 斜方輝石　(B17)
7 単斜輝石　(B23)
8 角閃石　(B22)
9 磁鉄鉱　(A24)



粗粒粒子の実体顕微鏡写真　（スケール 2mm）

1 黄橙～灰白色スコリア　(A25)
2 黄～白色スコリア　(A25)
3 黒色スコリア　(B22)
4 黒灰色スコリア　(B17)
5 鉱物片（石英）　(B19)
6 赤～黄色スコリア　(B19)
7 明褐～橙色スコリア　(B22)
8 鉱物片　(B17)
9 岩石片　(B17)

報　告　書　抄　録

ふりがな	いちはらしみなみいわさきいせき
書名	市原市南岩崎遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第 1 集
編著者名	大村直・西野雅人・櫻井敦史・上奈穂美・黒澤一男 (株式会社パレオ・ラボ)
編集機関	市原市教育委員会
所在地	〒 290-0011　千葉県市原市能満 1489 番地　　TEL 0436(41)9000　(市原市埋蔵文化財調査センター)
発行年月日	2006 年 (平成 18 年) 11 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みなみいわさきいせき 南岩崎遺跡 つかごしちく (塚越地区)	ちばけんいちはらし 千葉県市原市 みなみいわさき 南岩崎 176-1 他	12219	128	35° 24′ 44″	140° 6′ 49″	19991108～ 19991217 20010611～ 20011030 20020109～ 20020322 20020917～ 20030217	調査対象 7,500 本調査 4,280	道路建設工事にともなう埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南岩崎遺跡 (塚越地区)	包蔵地 集落跡 古墳	縄文時代	陥穴 6 基 礫集積 1 基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄器、ガラス玉他玉類、滑石製品、石釧　等	弥生時代中期後半 (宮ノ台式期) と古墳時代中期 (和泉式期) を盛期とする集落跡。弥生時代中期に環濠集落を形成する。古墳時代中期後半の区画溝。初期須恵器。 緯度経度は、世界測地系。
		弥生時代 中期後半～終末期	竪穴住居跡 26 軒 方形周溝墓 2 基 土器棺 3 基 溝 2 条 (環濠) 土器集積 2 基		
		古墳時代 前期～後期前半 終末期	竪穴住居跡 45 軒 古墳 2 基 溝 1 条 土坑 4 基 土器集積 2 基 礫集積 1 基		
		中世	掘立柱建物 4 棟 井戸 2 基 溝　等		
		各時代総数	竪穴住居跡 74 軒 掘立柱建物 4 棟 方形周溝墓 2 基 古墳 2 基 土坑 14 基 井戸 3 基 溝 25 条 集積 6 基 等		

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第 1 集

市原市南岩崎遺跡

平成 18 年 11 月 28 日　発行

編集発行　　市原市教育委員会
(市原市埋蔵文化財調査センター)
市原市能満 1489 番地
TEL　0436(41)9000

印　刷　　三陽工業株式会社
市原市五井 5510 番地 1
TEL　0436(22)4348